

横山東遺跡群 I

——新潟県柏崎市・横山東遺跡群発掘調査報告書 I ——

2000

柏崎市教育委員会

横山東遺跡群 I

—新潟県柏崎市・横山東遺跡群発掘調査報告書 I —

2000

柏崎市教育委員会

序

市街地の南側に横たわる低い丘陵地帯は、最近までところどころに烟が散在するていどで、大半はコナラなどのいわゆる雑木におおわれていました。色とりどりの真新しい家が立ち並ぶゆりが丘ニュータウンの、かつての姿もあります。しかし、時代をもっと遡ると、穏やかな雑木林とは違った景観があったことが明らかになりました。

ゆりが丘ニュータウン地内に所在した横山東遺跡群の発掘調査は、平成4年と平成6年の2カ年という長期にわたって実施されました。その結果、縄文時代に縄文人の生活の場となって初めてムラがつくれられ、古墳時代や奈良・平安時代でも、人々の暮らしがあったことが判明しました。また、奈良・平安時代では、須恵器や鉄の生産も行われていました。山野の雑木は燃料とするため切り払われ、窯や溶鉱炉からの煙が立ち上っていたことでしょう。そして、中世も終わりに近づいた戦国時代になると、経塚が造営され、近隣にすむ人々の信仰を集めていることがわかりました。

このような成果を本書は報告することとなりますが、本遺跡群の発掘調査を実施するにあたっては、関係するさまざまな組織・機関そして多くの方々の苦労が伴いました。その努力と苦労に報いるためにも、これら調査成果の有効な活用が私たちに与えられた責務であると考えています。

最後になりましたが、このたびの発掘調査が無事終了し、第一冊目の報告書刊行に至ることができましたことは、ひとえに事業主体であります株式会社リフレ、そして施工を担当し、調査に全面的な協力を惜しまれなかった株式会社福田組、そしてその関係者各位のご理解とご協力、そしてご援助の賜物であります。また、調査の現場作業におきましても、工事関係業者をはじめ、地元有志ならびに柏崎市シルバー人材センターの会員、および調査員各位などさまざまな方々から、多大なご協力をいただきました。ここに深甚なる謝意を表する次第であります。

平成12年3月

柏崎市教育委員会

教育長 相澤陽一

例　　言

1. 本報告書は、新潟県柏崎市大字横山地内に所在する横山東遺跡群の発掘調査記録である。
2. 発掘調査は、大規模な宅地造成事業に伴う事前調査とし、株式会社リフレから柏崎市が委託を受け、柏崎市教育委員会が事業主体となって実施したものである。調査と整理の体制は、第I章に記した。
3. 発掘調査の対象となった横山東遺跡群は、大沢遺跡・雨池遺跡・雨池古窯跡・庚申塚の経塚・大宮遺跡の5遺跡で構成される。調査報告書は2分冊とし、大沢遺跡・雨池遺跡・雨池古窯跡・庚申塚の経塚の4遺跡を『横山東遺跡群I』として報告することとし、大宮遺跡については『横山東遺跡群II』として報告することとした。
4. 発掘調査現場作業は、大沢遺跡と雨池遺跡の2遺跡を平成4年度に、平成5年度に一時中断した後、雨池古窯跡と大宮遺跡及び庚申塚の3遺跡を平成6年度に実施した。作業にあたっては、福田組職員および造成工事関係業者の協力を得るとともに、市教委職員等のはか社団法人柏崎市シルバー人材センターから会員の派遣を受けた。整理作業及び報告書作成作業は、柏崎市西本町3丁目喬柏園内遺跡調査室において行った。また現場作業は、社会教育課（当時）職員及び遺跡調査室のスタッフを調査員とし、整理・報告書作成作業は、職員（学芸員）を中心に、遺跡調査室のスタッフで行った。

なお、雨池・大宮両遺跡出土石器の実測は、平吹靖が一部担当した。

5. 発掘調査によって出土した遺物は、註記に際し、それぞれの遺跡名とともに、グリッド名や遺構名および層序等を併記した。
6. 本事業で出土した遺物並びに調査や整理作業の過程で作成した図面・記録類は、すべて一括して柏崎市教育委員会（文化振興課遺跡調査室）が保管・管理している。
7. 本報告書の執筆は、下記のとおりの分担執筆とし、調査担当の品田が編集もあわせて行った。

第I章・第II章・第III章・第IV章・第VII章第1節・図面図版・写真図版……………品田高志
第V章・第VI章・第VII章第2節・図面図版・写真図版……………伊藤啓雄
図面図版（第VI章）……………中野 純

なお、第I章～第IV章及び第VII章第1節は平成10年4月、第V章は同年5月に成稿したものである。

また、第VI章及び第VII章第2節の作成にあたっては、整理作業を担当した斎藤幸恵（前職員）の成果に基づくところがあった。

8. 本書掲載の図面類の方位は、すべて真北である。磁北は真北から西偏約7度である。
9. 発掘調査から本書作成まで、事業主体である株式会社リフレのほか、株式会社福田組から最大限の協力とご理解を賜った。またこのほかの方々から、多大なご助力とご協力並びにご教示等を賜った。記して厚く御礼を申し上げる次第である。

穴澤義功・春日真実・小林 薫・小林達雄・笹澤正史・佐藤雅一・曾田一ノ丞・高橋恵美・
高橋 保・出越茂和・寺崎裕介・田海義正・水澤幸一・望月精司・山口博之・吉田正樹・
渡辺朋和・柏崎市立博物館・柏崎市立図書館・製鉄遺跡研究会・新潟県教育庁文化行政課・
北陸古代土器研究会

(五十音順・敬称略)

目 次

I 序 説	1
1 調査に至る経緯.....	1
1) 試掘調査に至るまでの経緯／1 2) 試掘調査／1	
3) 本調査に至る経緯／4	
2 発掘調査業務の概要と調査体制.....	5
1) 平成4年度発掘調査／5 2) 平成6年度発掘調査／6	
3) 整理・報告書作成作業／7 4) 調査体制／8	
II 横山東遺跡群と環境.....	10
1 遺跡群の立地と地理的な環境.....	10
2 横山東遺跡群をめぐる歴史的な環境.....	11
1) 縄文時代／11 2) 古墳時代／13	
3) 古代・中世／13	
III 大沢遺跡	16
1 発掘調査の経過.....	16
2 遺跡と調査区.....	18
1) 遺跡の立地と調査地点／18 2) 調査区の概要／18	
3 縄文集落域の遺構と遺物.....	19
1) 縄文集落概観と遺構の分布／19 2) 縄文集落遺構各説／20	
3) 出土遺物／31 4) 古代遺構の遺構と遺物／35	
4 大沢遺跡B地点の遺構と遺物.....	36
1) 鉄生産関連遺構の概要／36 2) 鉄生産関連遺構各説／36	
3) 遺 物／39	
5 調査のまとめ.....	40
1) 縄文時代中期前葉／40 2) 古 代／41	
IV 雨池遺跡	42
1 発掘調査の経過.....	42
2 遺跡と調査区.....	44
3 遺 構.....	45
1) 遺構の分布と配置／45 2) 縄文時代の遺構各説／46	
3) 中世・近世以降の遺構各説／51	
4 出土遺物.....	52
1) 縄文時代の遺物／52 2) 中世・近世以降の遺物／55	
5 調査のまとめ.....	56

V 雨池古窯跡	57
1 遺跡と調査	57
1) 立地と基本層序／57	
2) 調査の方法とグリッド／58	
3) 発掘調査の経過／59	
2 遺構	60
1) 須恵器窯／60	
2) その他の遺構／62	
3 遺物	64
1) 食膳具／64	
2) 貯蔵具／64	
4 調査のまとめ	70
VI 庚申塚の経塚	71
1 調査	71
1) 調査区とグリッドの設定／71	
2) 調査の方法／71	
3) 発掘調査の経過／73	
2 遺跡と遺構	74
1) 立地と微地形／74	
2) 基本層序／74	
3) 経塚の概要／75	
4) その他の遺構・落ち込み／78	
3 遺物	79
1) 金属製品と関連遺物／79	
2) 小礫／81	
4 調査のまとめ	86
庚申塚の経塚出土礫石経観察表	87
VII 調査の成果とまとめ	124
1 横山東遺跡群における中期縄文集落の検討	124
1) はじめに／124	
2) 中期縄文集落の時期と出土土器群／124	
a 雨池・大沢遺跡の縄文土器	b 出土土器群の編年的な位置付け
c 胎土と縄文地文の転換と土器群の変遷	
3) 大沢・雨池遺跡の住居と集落／133	
a 平地式住居の検討	b 大沢・雨池における縄文集落の構成と性格
4) おわりに／145	
2 庚申塚の経塚の検討	146
1) はじめに—柏崎市内の礫石経出土遺跡—／146	
2) 庚申塚の経塚造営（試案）／147	
3) 庚申塚の経塚造営の時期／149	4) おわりに／152
引用参考文献	153
調査報告書抄録	巻末

図版目次

図面図版

- 1 横山東遺跡群 1 横山東遺跡群と主要な沢地形
2 横山東遺跡群 2 横山東遺跡群グリッド配置図

- 3 大沢遺跡 1 大沢遺跡と周辺の地形
4 大沢遺跡 2 大沢遺跡A地点遺構配置図
5 大沢遺跡 3 大沢遺跡A地点遺構全体図斜付図
6 大沢遺跡 4 大沢遺跡A地点遺構全体図A
7 大沢遺跡 5 大沢遺跡A地点遺構全体図B
8 大沢遺跡 6 大沢遺跡A地点遺構全体図C
9 大沢遺跡 7 大沢遺跡A地点遺構全体図D・E
10 大沢遺跡 8 大沢遺跡A地点推定住居全体配置図
11 大沢遺跡 9 大沢遺跡A地点推定住居全体図C
12 大沢遺跡 10 大沢遺跡A地点推定住居全体図A
13 大沢遺跡 11 大沢遺跡A地点推定住居全体図B
14 大沢遺跡 12 大沢遺跡A地点遺構個別図1(建物跡・住居跡1)
15 大沢遺跡 13 大沢遺跡A地点遺構個別図2(住居跡2)
16 大沢遺跡 14 大沢遺跡A地点遺構個別図3(住居跡3)
17 大沢遺跡 15 大沢遺跡A地点遺構個別図4(土坑1)
18 大沢遺跡 16 大沢遺跡A地点遺構個別図5(土坑2)
19 大沢遺跡 17 大沢遺跡A地点遺構個別図6(S D-70大溝)
20 大沢遺跡 18 大沢遺跡A地点出土遺物1
21 大沢遺跡 19 大沢遺跡A地点出土遺物2
22 大沢遺跡 20 大沢遺跡A地点出土遺物3
23 大沢遺跡 21 大沢遺跡B地点と周辺の地形
24 大沢遺跡 22 大沢遺跡B地点全体図
25 大沢遺跡 23 大沢遺跡B地点遺構個別図1
26 大沢遺跡 24 大沢遺跡B地点遺構個別図2
27 大沢遺跡 25 大沢遺跡B地点遺構個別図3(土坑・ピット)群
出土遺物(鉄錠・炉壁)

- 28 雨池遺跡 1 雨池遺跡と周辺の地形
29 雨池遺跡 2 雨池遺跡遺構配置図
30 雨池遺跡 3 雨池遺跡遺構全体図斜付図

- 31 雨池遺跡 4 雨池遺跡遺構全体図A
32 雨池遺跡 5 雨池遺跡遺構全体図B
33 雨池遺跡 6 雨池遺跡遺構全体図C
34 雨池遺跡 7 雨池遺跡遺構全体図D
35 雨池遺跡 8 雨池遺跡推定住居配置全体図A
36 雨池遺跡 9 雨池遺跡推定住居全体図B
37 雨池遺跡 10 雨池遺跡推定住居全体図C
38 雨池遺跡 11 雨池遺跡遺構個別図1(住居跡1)
39 雨池遺跡 12 雨池遺跡遺構個別図2(住居跡2)
40 雨池遺跡 13 雨池遺跡遺構個別図3(住居跡3)
41 雨池遺跡 14 焼土坑と旧道・区画溝配置図
42 雨池遺跡 15 雨池遺跡遺構個別図4(焼土坑)
43 雨池遺跡 16 雨池遺跡遺構個別図5(旧道路)
44 雨池遺跡 17 雨池遺跡出土遺物1
45 雨池遺跡 18 雨池遺跡出土遺物2
46 雨池古窯跡 1 雨池古窯跡と周辺の地形
47 雨池古窯跡 2 雨池古窯跡遺構全体図
48 雨池古窯跡 3 雨池古窯跡遺構個別図1(S X-04須恵器窓)
49 雨池古窯跡 4 雨池古窯跡遺構個別図2
50 雨池古窯跡 5 雨池古窯跡遺構個別図3・沢堆積土層断面図
51 雨池古窯跡 6 雨池古窯跡出土遺物1(甕類以外)
52 雨池古窯跡 7 雨池古窯跡出土遺物2(S X-04その1)
53 雨池古窯跡 8 雨池古窯跡出土遺物3
(S X-04その2・F-2沢上層)
54 雨池古窯跡 9 雨池古窯跡出土遺物4(F-2沢下層)
55 雨池古窯跡 10 雨池古窯跡出土遺物5(確認調査・表面採集1)
56 雨池古窯跡 11 雨池古窯跡出土遺物6(確認調査・表面採集2)
57 庚申塚の経塚 1 庚申塚の経塚全測図
58 庚申塚の経塚 2 庚申塚の経塚土層断面図
59 庚申塚の経塚 3 庚申塚の経塚遺物出土状況1(第2b層上面)
60 庚申塚の経塚 4 庚申塚の経塚遺物出土状況2(第3b層上面)
61 庚申塚の経塚 5 庚申塚の経塚遺物出土状況3(第5層上面)
62 庚申塚の経塚 6 庚申塚の経塚柱穴土層断面と埋納部底面

- 63 庚申塚の経塚7 庚申塚の経塚第Ⅲ層上面検出遺構
64 庚申塚の経塚8 庚申塚の経塚出土遺物1
(金属製品と関連遺物1)
65 庚申塚の経塚9 庚申塚の経塚出土遺物2
(金属製品と関連遺物2)
66 庚申塚の経塚10 庚申塚の経塚出土遺物3 (礫石経1)
67 庚申塚の経塚11 庚申塚の経塚出土遺物4 (礫石経2)
- b. 調査区東部 (M~41~42周辺)
88 雨池遺跡2 a. 調査区東部 (N~O~39~40周辺)
b. 調査区西部 (L~M~33~34周辺)
89 雨池遺跡3 a. S I-105住居跡群
b. S I-105住居跡群
90 雨池遺跡4 S I-105住居跡群柱穴・炉跡
91 雨池遺跡5 a. S I-106住居跡群
b. S I-116住居跡群
92 雨池遺跡6 a. S I-117住居跡群
b. S I-118住居跡群
93 雨池遺跡7 縄文土器出土状況と調査風景
94 雨池遺跡8 a. L~M~33~34遺構群
b. L~M~33~34遺構群
95 雨池遺跡9 焼土坑・土坑
96 雨池遺跡10 旧遺跡
97 雨池遺跡11 出土遺物

写真図版

- 68 横山東遺跡群 遺跡群とその周辺の地形
69 大沢遺跡1 大沢遺跡A地点空中写真
70 大沢遺跡2 a. 縄文集落西部遺構群
b. 縄文集落南西部遺構群
71 大沢遺跡3 a. 縄文集落南部遺構群
b. 縄文集落中央西部遺構群
72 大沢遺跡4 a. 縄文集落南西部遺構群
b. SD-70大溝全景
73 大沢遺跡5 調査風景と建物跡・住居跡
74 大沢遺跡6 住居跡と土坑 (貯蔵穴)
75 大沢遺跡7 土 坑 (貯蔵穴)
76 大沢遺跡8 土 坑 (貯蔵穴・墓坑) と SD-70大溝
77 大沢遺跡9 A地点出土遺物1
78 大沢遺跡10 A地点出土遺物2
79 大沢遺跡11 a. B地点遠景1
b. B地点遠景2
80 大沢遺跡12 a. B地点全景
b. SX-401木炭窯と製鉄炉
81 大沢遺跡13 a. SX-401木炭窯1
b. SX-401木炭窯2
82 大沢遺跡14 SX-401木炭窯3
83 大沢遺跡15 a. SX-410木炭窯と SX-411 1
b. SX-410木炭窯と SX-411 2
84 大沢遺跡16 SX-410木炭窯と SX-411 3
85 大沢遺跡17 a~c. 製鉄炉と周辺の遺構群
86 大沢遺跡18 B地点出土遺物
87 雨池遺跡1 a. 調査区東部 (M~N~40~42周辺)
- 98 雨池古窯跡1 a. 遺跡遠景
b. 調査区全景
99 雨池古窯跡2 調査・層序・遺構
100 雨池古窯跡3 須恵器窯 (SX-04)
101 雨池古窯跡4 その他の遺構1
102 雨池古窯跡5 その他の遺構2
103 雨池古窯跡6 出土遺物1
104 雨池古窯跡7 出土遺物2
105 雨池古窯跡8 出土遺物3
106 庚申塚の経塚1 a. 遺跡近景
b. 墓碑 (第5層) 出土状況
107 庚申塚の経塚2 a. 北東部土層断面
b. 南東部土層断面
108 庚申塚の経塚3 経塚土層断面
109 庚申塚の経塚4 遺物出土状況
110 庚申塚の経塚5 その他の遺構
111 庚申塚の経塚6 出土遺物1
112 庚申塚の経塚7 出土遺物2
113 庚申塚の経塚8 出土遺物3

挿 図 目 次

- 第1図 試掘調査概要図／3
第2図 柏崎平野地形分類図と横山東遺跡群の位置／11
第3図 横山東遺跡群と周辺の縄文時代遺跡／12
第4図 横山東遺跡群周辺の古代・中世遺跡分布図／14
第5図 大沢遺跡貯蔵穴・土坑法量分布図／29
第6図 大沢遺跡貯蔵穴類容量分布図／30
第7図 雨池古窯跡調査グリッド配置図／58
第8図 雨池古窯跡S X-04須恵器窯跡の構造／61
第9図 雨池古窯跡出土須恵器甕類分類図／68
第10図 雨池古窯跡出土甕類タキ目・当て具痕分類図／68
第11図 庚申塚の経塚グリッド配置図／72
第12図 庚申塚の経塚と周辺の地形・地名／75
第13図 庚申塚の経塚基本層序柱状模式図／75
第14図 庚申塚の経塚構造模式図／77
第15図 庚申塚の経塚土層断面と小礫検出深度の相関図／81
第16図 庚申塚の経塚におけるグリッド別小礫出土量／83
第17図 庚申塚の経塚出土甕石経と法華經／83
第18図 越後における新石器期の土器群／129
第19図 主柱五本形式平地住居分類試案／135
第20図 屋根板縄文集落とタテ縄文集落／136
第21図 屋根板遺跡柱穴類法量分布図／142
第22図 雨池遺跡柱穴類法量分布図／142
第23図 大沢遺跡柱穴類法量分布図／143
第24図 柏崎市内における甕石経出土遺跡／147
第25図 庚申塚の経塚における造営工程模式図(推定)／149
第26図 出土錠札頭集成・分類図／151

表 目 次

- 第1表 横山東遺跡群関係調査工程表／5
第2表 横山東遺跡群周辺の縄文時代遺跡地名表／12
第3表 横山東遺跡群周辺の古代・中世遺跡地名表／14
第4表 大沢遺跡A地点遺構一覧表／22~25
第5表 大沢遺跡貯蔵穴分類表／28
第6表 大沢遺跡出土縄文土器観察表／32
第7表 大沢遺跡出土縄文土器胎土分類観察表／33
第8表 大沢遺跡B地点鉄生産関連遺構
(土坑・ピット等)一覧表／39
第9表 雨池遺跡遺構一覧表／48~49
第10表 雨池遺跡出土縄文土器観察表／53
第11表 雨池遺跡出土縄文土器胎土分類観察表／54
第12表 雨池古窯跡遺構一覧表／62
第13表 雨池古窯跡出土須恵器観察表／66~67
第14表 庚申塚の経塚遺構一覧表／78
第15表 庚申塚の経塚における出土鉢貨一覧表／80
第16表 法華經における品およびその名称の対応表／87
第17表 庚申塚の経塚出土甕石経観察表／88~123
第18表 雨池・大沢両遺跡における
胎土分類の組合せと量比／125
第19表 雨池・大沢両遺跡における
縄文地文原体の比率／127

挿 写 真 目 次

- 写真1 大沢遺跡表土剥ぎ／17
写真2 大沢遺跡貯蔵穴の発掘／17
写真3 表土剥ぎ直後の雨池遺跡と木根処理作業／43
写真4 庚申塚の経塚遺物分布図作成作業／73
写真5 庚申塚の経塚における墨書きある土器片／85

I 序 説

1 調査に至る経緯

1) 試掘調査に至るまでの経緯

柏崎市横山の東側に横たわる丘陵一帯は、南側を北陸自動車道で分断されているが、市街地の中心部に隣接した好条件もあって、近年急速に宅地化が進んでいる。今回、開発が計画された区域も、過去に幾度かの開発計画が持ち上がっていた。しかし、四方の大半が住宅地として造成された平成の時代に入っても、山林や水田が取り残され開発の波からは忘れ去られたかのようであった。このような状況下、ようやく具具体化した開発計画が、20万m²におよぶ宅地造成事業であった。

この（仮称）横山ニュータウン造成事業（後の「ゆりが丘ニュータウン」）とされた開発計画は、平成2年（1990）4月に国土利用計画法第23条第1項の規定に基づいて提出された土地取得の届出がそもそもの端緒であった。この届出は、平成2年10月に再提出されるが、この段階では現地踏査や試掘調査が必要な旨等を指摘するにとどまり、遺跡の存在等については未調査であった。当該用地内に遺跡の存在が確認され、また試掘調査等の必要性などが具体的に指摘されたのは、平成3年（1991）3月6日付けで協議がなされた新潟県大規模開発行為の適性化対策要綱第6条1項の規定に基づく届出書に係る意見聴取段階であった。この時点で現地踏査が実施され、字庚申塚地内の塚1基と、土壘状の遺構が字大宮地内に初めて確認され、さらに周囲の平坦地に縄文遺跡が存在する可能性などが把握されたのである。上記意見書にはこの旨を記載し、塚に対しては文化財保護法第57条の2の届出と、開発がなされる場合における本調査の可能性が指摘されることになる。その後、遺跡の取扱いに係る協議等は行われず、事業者とは直接協議する機会もなかった。この件について初めて事業者から問合せが市教委になされたのは、市教委が別件の本発掘調査を実施中の平成3年10月のことであった。その時期、市教委に協議を持つ余裕がなかったことから、12月頃に正式協議を行うこととして、ひとまず時期を待つことになった。もっとも、実際に協議がなされたのは、予定よりおよそ1カ月ほど遅れた平成4年（1992）1月24日であった。

第1回目の協議段階とは、開発許可が年末に出された後であり、ただちに伐採作業に着手するという過渡した事態となっていた。また、事業計画は、平成6年に工事完了が予定されており、試掘・確認調査は出来るだけ早くお願いしたいとのことであった。確認調査等については、昨年10月の問合せがあったときから県補助事業として実施するためすでに準備中であり、平成4年度に市教委の費用負担により実施したいとした。しかし、事業者側からは、人員及び重機等の提供により年度内での実施という強い要望がなされた。この要望はその後もなされ、しかもすでに開発が許可されているという事情もあるため、市教委としてはその要望に答えざるを得ないと判断、協議により3月後半に試掘調査を実施することとした。

2) 試掘調査

調査区域と経過 造成予定地は、北陸自動車道の北側一帯を占め、南側はかなり湿地性の強い沢が西から東へ入り込み、この沢から北へ延びるやや大きな沢により、中位段丘の平坦面が分断されている。試掘は、主にこれら平坦部の調査を主眼において実施したものである。庚申塚の塚が所在する箇所は、調査範

門がほぼ確定していたことから除外し、その他の区域の平坦面を調査対象とした。調査区は、土墨状の遺構が存在するA地区、その北西に連続するB地区、東側の沢を越えた平坦部のC地区に大きく区分した。

試掘調査は、3月末を予定し、実際には3月23日から26日までの4日間実施した。重機(0.4m³パックホー)延べ3台とオペレーターを含む作業員延べ8人の提供を受け、遺構等の精査・発掘には市教委社会教育課職員等延べ10人と調査担当が参加した。調査方法は、現場に伐採した材木等が山積みされたままであり、その搬出のための通り道を除いた空間に任意のトレンチをいれ、調査することとした。実際には、調査可能な空き地が少なく、思うところにトレンチが設定できなかった。23日は、A地区にトレンチ6本を発掘、落ち込みを多数検出した。24日から25日にかけては、B地区に6本のトレンチを発掘、また25日にはC地区に対し7本のトレンチを発掘して一応終了とした。なお、26日は現況写真の撮影等で、掘削等の作業は行っていない。

試掘調査の結果 試掘調査は、時間的にも費用的にも充分な体制で臨むことができない調査であった。したがって、発掘できた面積も、調査対象約3万m³に対し、およそ450m²と少ないとから、遺跡の詳細な内容を把握することは難しいが、大まかな状況について地区別に確認することができた。

A地区：土墨状の遺構が存在しており、当初この時期を確定するため試掘する予定であった。ところが、この土墨の東側からB沢と仮称した区域周辺一帯には、柱穴と思われる小ビット多数の他、やや大型の土坑等が検出され、また縄文土器を伴っていることが確認された。落ち込みなどの検出例が多かったのは、A-6トレンチである。今回は、確認された落ち込みの一部を発掘しているが、明確に柱穴とされるビットの数はそれほど多くなかった。しかし、明らかに遺構と判断できるものも少なくなく、またA沢に落ち込む斜面には縄文土器が多く露出していることが確認されている。これは、いわゆる土器捨て場(廐棄場)と考えられ、A沢を巡るこのA地区には、縄文集落の存在が明らかとなったのである。ただし、この段階では、明確な炉址は検出されず、縄文土器についても時期を判定可能な個体は確認されなかった。

B地区：A地区に近い南側には、台地を横切る大溝1条(幅約2m、深度約1m)が東西に約70mにわたって確認された。遺物は数片の縄文土器以外なく時期は不明であるが、この溝以外で確認された遺構は少なく、G沢と仮称した沢頭に縄文中期の土坑1基を検出し得たのみである。G沢周辺の試掘は、材木が置かれたままであり、試掘箇所を充分に確保できなかつたが、沢頭周辺から平坦地一帯に遺構が存在する可能性が高いことが判明した。

C地区：都合7本のトレンチを設定して調査した。東側の尾根筋部分については、概して平坦であるが、遺構・遺物一切検出されておらず、少なくとも居住空間ではなかったと判断される。しかし、本地区西側の平坦部には、各トレンチに小ビットが1基程度と若干の遺物が確認された。遺構・遺物の存在は極めて希薄であるが、縄文時代の遺構が存在することが確認された。

庚申塚の塚：尾根筋先端付近に構築されていた単独塚である。小字名を取って庚申塚の塚としたが、小字名とおりの庚申塚である可能性が残されている。保存状況は余り良好とはいせず、盗掘坑数カ所が確認される。平面形は方形と考えられるが、明確でない。規模は、一辺約6m程、高さ約80cm程度であった。

遺跡の名称と周知化 試掘調査の結果については、「横山東部丘陵一(仮称)横山ニュータウン造成工事に伴う試掘調査報告書」としてまとめ、平成4年4月14日付け、教社第243号により新潟県教育委員会(以下「県教委」と略記)へ報告した。そして、以上の調査結果を踏まえ、市教委は遺跡名を確定し、周知化の手続きを行った。まず、A地区は、小字地名が「大宮」であったことから「大宮遺跡」とした。B地区は、遺跡の主要部分が、字「治郎右エ門林」にあるものと推定し、遺跡名も初めは「治郎右エ門林



第1図 試掘調査概要図

遺跡」と命名して遺跡発見の通知を行ったが、その後の本発掘調査中に、字「大沢」地内を主体とした広がりが判明し、以後「大沢遺跡」を正式名称とすることとした。C地区については、字「雨池」から「雨池遺跡」とした。これら3遺跡の発見通知は、平成4年4月30日付けで、県教委へ報告された。

なお、庚申塚の塚は、現地踏査によって早くに確認されていたことから、平成4年1月24日付けですでに通知済みであった。

3) 本発掘調査に至る経緯

3月下旬、雪まじりの天候の中、急きょ実施された試掘調査の結果とは、縄文集落域に確認されている土壙状遺構の存在を無視しても、縄文集落3地点と塚1基の都合4遺跡が確認されたことになる。この事実は、遺跡数が塚1基と性格不詳な土壙状遺構だけという試掘調査以前の状況を一変させ、さらに平成4年度内における単年度処理という安易な想定も根底から打ち砕くものとなった。ここに、宅地造成事業と遺跡調査の工程を根本から振り直す必要に迫られたのである。

市教委における平成4年度の発掘調査事業は、本発掘調査1件のほか、確認調査2件がすでに予定されていた。本発掘調査対象遺跡は、市道新設に伴う中世集落の第2次調査、調査面積およそ3,000m²ほどであったが、しかし縄文集落が3カ所も追加されば、調査担当職員1名という現状の中、すべてを年度内完了とされても不可能と言わざるを得ない。特に、試掘調査で新たに確認された大宮遺跡は、その規模が予想以上に大きく、遺物量が豊富な土器捨て場（廃棄場）も數カ所にわたって存在していることが試掘調査後も次々に明らかにされた。大宮遺跡における仕事量のボリュームからすれば、たとえ平成4年度計画への繰り入れをしたところで、単年度での調査完了は約束できないというのが現実的な判断であった。このような状況を踏まえ、開発事業と遺跡調査の工程等の協議が継続された。結局、単年度処理は無理としても、早急な調査完了が要望されたことから、とりあえず2カ年の継続事業として調査の完了を目指すこととなった。この段階における調査計画とは、初年度に大沢遺跡と雨池遺跡を、また次年度には大宮遺跡および大宮遺跡とほぼ地点を同じくする庚申塚の塚と土壙状遺構について発掘調査を実施する運びとなつた。発掘調査着手の時期は、年度前半に別件の本発掘調査を実施することとなっており、また補正予算の関係からも、当該事業に係る発掘調査は7月以降に着手する予定であった。しかし、事業者から早急な着手が要望されたこと、また大沢遺跡が所在する地点の地盤が悪く、梅雨時期の降雨による土砂崩れが心配されていることなどの事情もあり、調査時期を繰り上げて4月末の連休前から着手することとなった。そして、調査業務の迅速化を図るため、市教委側は発掘調査に直接関わる調査部門に限定し、事業の施工主体である㈱福田組は、重機やハウス等の施設の提供、そして労務管理等作業員に関わる部門などを担当するとした最大限の支援体制が取られ、両者協同による調査体制が組まれたのである。

（仮称）横山ニュータウンの開発面積はおよそ200,000m²である。正式協議から2カ月後に試掘調査を実施し、その1カ月後には本発掘調査に着手という緊急的な処置から調査をスタートすることとなった。最初の発掘調査は、大沢遺跡が対象とされたが、その着手日は平成4年4月27日であった。しかし、文化財保護法第57条の2の土木工事等の届出は、調査着手からやや遅れた平成4年5月1日付けで㈱リフレから提出され、また市教委から県教委への文化財保護法第98条の2の発掘調査の通知も、平成4年5月6日付けでなされるなど、手続き上の混乱は緊急処置的に対応していた事態をも伝えるが、ここにその後6年間に及ぶ発掘調査業務が始まったのである。

2 発掘調査業務の概要と調査体制

1) 平成4年度発掘調査

平成4年度の発掘調査は、大沢遺跡（当時の名称「治郎右エ門林遺跡」）から実施に移されたが、前項でも述べたように、半ば混乱した中でのスタートであった。大沢遺跡の発掘調査は、平成4年4月27日から着手した。この発掘調査は、前述した経緯のように突発的な対応として始められたため、予算的処置が間に合わなかったことから、現場事務所は㈱福田組の事務所の一室を間借りし、重機や作業員などの提供を受けて実施された。調査は、当初1カ月ほどの期間が想定されていた。

大沢遺跡は、試掘調査段階で縄文時代中期前業の土坑が検出されたことから、主に北側の沢頭を取り巻く平坦地がその範囲として想定されていた。しかし、表土除去作業が東側へ拡大するにつれ、試掘段階に伐採された材木が置かれていた台地周縁付近から、柱穴や土坑などが次々と確認され、遺跡の広がりは予想外に大きいことが判明した。その結果、遺跡名とした字「治郎右エ門林」よりも字「大沢」地内へ大幅に拡大した。その結果、遺跡名も「大沢遺跡」とすることとなったが、さらに5月1日の連休直前に、大沢遺跡本体から南へおよそ200mほどの尾根部先端付近から、製鉄用木炭窯が確認され、さらにかなり多くの鉄滓があったことなどの情報が寄せられるに至った。当該地点は、大沢遺跡地内の造成とは一連であったことから、連休明けから急ぎ調査を実施することとなった。

このような調査範囲の拡大により調査期間の延長が迫られた最中、5月6日に調査担当が故障により入院という事態となった。調査は、8日まで継続したが以後中断に追い込まれ、再開はおよそ20日間の空軋を経た5月28日からとなった。このような幾つかのアクシデントを経ながら、6月15日によく調査を終了することができ、予定を大幅に超過してはいたが、別件の本調査に着手するため本遺跡群を後にした。

年度	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	
3													試掘調査
4		=====	===== 大沢遺跡				=====	===== 雨池遺跡					
5													
6			=====	===== 大宮遺跡									
			=====	===== 庚申塚の原									
			=====	===== 雨池古窯跡			水洗・注記						
7	=====	=====	=====	=====	=====	=====	=====	=====	=====	拓本作業	=====	=====	
8	=====	=====	=====	=====	=====	=====	=====	=====	=====	=====	=====	=====	
9	=====	=====	=====	=====	=====	===== 接合復元作業	=====	=====	=====	===== 実測・トレス作業	=====	=====	
						報告書作成作業							

===== 本発掘調査

===== 試掘確認調査

===== 水洗・注記

===== 接合復元作業

===== 拓本作業

===== 実測・トレス

===== 図版作成・原稿執筆（報告書作成作業）

第1表 横山東遺跡群関係調査工程表

平成4年9月29日、別件の発掘調査を終えて再び横山東遺跡群の発掘調査を再開した。本年度2次目の調査は、重機や施設の借上げおよび作業員を、勝福田組からの直接提供とし、その他の調査直接経費については、平成4年度9月補正により予算化の処置済であった。柏崎市と勝リフレは、平成4年9月28日付で「雨池遺跡発掘調査委託契約書」を締結した。調査対象は縄文時代中期の集落として確認された雨池遺跡である。文化財保護法第57条の2の土木工事等の届出は、平成4年9月10日付で勝リフレから提出され、文化庁長官宛の発掘調査の通知（文化財保護法第98条の2）は、平成4年9月28日付で県教委を通じて通知した。調査は、天候にも恵まれたこともあって概して順調に進み、おおむね1カ月余りの期間をかけた11月4日には器材の撤収も含め、調査を全て終了することができた。

なお、雨池遺跡の調査と並行して、遺跡の南側沢内に所在した雨池古窯跡の確認調査をあわせて実施した。この古窯跡は、地元の人が土器片を偶然採集したことが発見の契機となったが、そもそもは伐採作業中の重機が、移動のため簡易道路を掘削して、窯跡の一部を壊していたため、須恵器が多量に散乱したものであった。その状況が具体的に確認されたのは、9月半ばという雨池遺跡発掘調査の直前のことであった。しかし、須恵器窯の実態、特にその基數や分布範囲が明らかでなく、そのための確認調査が必要となつた。この取扱いについては、平成4年9月30日に事業者と協議を行い、「柏崎市内遺跡第Ⅱ期発掘調査」の一環として実施することとした。ただし、須恵器窯が想定される地点は、伐採作業中にかなり搅乱を受けており、伐採された木材や切り株などが散乱した状態であった。確認調査にあたっては、これらの除去が前提となるが、その作業前に散乱した須恵器片の回収を9月末から10月初めにかけて実施し、その後木材等の除去を行った。確認調査は、雨池遺跡の調査が一段落した10月28日から30日までの3日間で実施、須恵器窯1基のほか土坑などを確認した〔柏崎市教委1993〕。雨池古窯跡発見の通知は、平成5年12月3日付け、教社第632号により県教委へ提出されたのである。

2) 平成6年度発掘調査

横山東遺跡群の発掘調査は、第2年次として大宮遺跡および庚申塚の塚と新たに発見された雨池古窯跡の発掘調査を実施することとなっていた。当初、その調査は、平成5年度に実施することで、勝リフレを始めとした開発サイドと協議を進めていた。しかし、平成5年度は、新潟工科大学の開学に間に合わせるために、用地造成に伴う発掘調査を急ぎ実施せざるを得ない事態が生じていた。本遺跡群に対する発掘調査は、取扱い協議によって平成6年度に延期されることになった。是非もなき緊急的な処置であったとはいえ、両者の苦渋、そして事業者へは大きな負担を強いる結果となったのである。

平成6年2月22日、横山東遺跡群発掘調査再開に向けた協議が行われた。協議では、調査対象とされる3遺跡について、当面現場作業を終了させることを最優先とし、整理・報告書作成作業については、平成7年度以降も維続する含みを持ってスタートすることとなった。また、調査工程は、大宮遺跡と庚申塚の塚についてまず着手することとし、雨池古窯跡は新潟工科大学用地内の調査が終了した段階で1パーティーを増員して実施するというアウトラインが話し合われた。そして、発掘調査業務の現場作業実施にあたっては、平成4年度における調査事情と同じく、勝福田組の全面的な支援と協力が得られることとなり、ここに再び開発サイドと文化財保護サイドの両者協同による調査体制が組まれることとなった。

平成6年3月22日および4月8日に、調査再開への最終的な打ち合わせがなされ、同年4月11日付で「横山ニュータウン事業地区内における埋蔵文化財に関する協定書」および「平成6年度横山ニュータウン事業区域内における発掘調査委託契約書」が締結された。

調査再開に向けた文化財保護法上の手続きとしては、平成6年3月1日付けにより、大宮遺跡および雨池古窯跡の両遺跡に係る土木工事等の届出（文化財保護法第57条の2）が、㈱リフレから提出された。市教委はこれらの届出を3月14日付けで県教委へ進達とともに、同日付けで大宮遺跡・庚申塚の塚・雨池古窯跡の3遺跡に係る文化財保護法第98条の2の規定に基づく発掘調査の通知を、文化庁長官宛に提出し、一年間の延期を経て、平成6年度における横山東遺跡群の発掘調査再開の準備は整った。

平成6年度事業は、まず互いに隣接する大宮遺跡と庚申塚の塚の空掘から始まった。この空掘は、現況地形測量を意図していたが、すでに平成6年3月30日から倒木等の除去作業が始まっていたものである。第1回目の空掘は、4月25日・26日の両日に実施、更に連休直前の28日まで休憩施設の設置や器材の搬入を行い、5月9日から大宮遺跡と庚申塚の塚の両遺跡に対する本格調査が開始された。調査開始間もない5月11日～13日は、新潟工科大学用地内における作物E遺跡発掘調査の応援のため、調査を一時中断したが、雨のほとんど降らない天候にも恵まれ、調査は順調に進められた。ただし、連日の晴天で異常に暑い日が続き、調査区内の乾燥も著しく、常時散水しての調査となった。5月16日に、土墨の立ち削りと発掘が進み、庚申塚の塚の発掘作業に着手した。その後、墨書きされた多量の礫が出土し、単なる庚申信仰に伴う塚ではないことが判明した。また、5月も後半に至ると、表土剥ぎが進む大宮遺跡からは、块状耳飾りが多量の土器・石器類とともに幾つも出土し、さらに数多くの遺構が検出され、本地域では最大級となる縄文前期集落の全貌が見えてきた。両遺跡とも、試掘調査段階の想定とは異なり予想外の規模を持つことが判明し、調査は現場の乾燥とともに困難さがますます助長されることとなった。

6月20日、新潟工科大学用地内の調査終了に伴い、横山東遺跡群最後の未調査遺跡である雨池古窯跡の調査が着手された。柏崎市内初めての須恵器窯ではあったが、窯頭部は重機によって大きくえぐられ、焚口部から灰原も近世～近代頃に大きく削平されていることが判明した。調査はその後順調に進み、7月25日に終了した。また、庚申塚の塚の調査は、6月に入り基底部の調査が進められていたが、7月初旬までには作業の大半が終了した。遺跡規模が予想外に大規模であった大宮遺跡は、調査がかなり難航していた。しかし、9月2日にはセスナ機を飛ばしての空掘に漕ぎ着け、4日の日曜日には大勢の市民に来跡していただいての現地説明会が催され、9月5日、ついに発掘調査現場作業の全工程を終了した。

3) 整理・報告書作成作業

横山東遺跡群発掘調査は、平成6年4月11日付けで締結した協定書では、平成8年度未完了と明記されていた。しかし、本遺跡群の現場作業を終了後、平成6年度後半から平成8年度まで、10件にも及ぶ本発掘調査を消化しなければならない状況下にあり、通年的・継続的に発掘調査現場作業が続いている。さらに、大宮遺跡をはじめとして庚申塚の塚からも大量の遺物が出土したことから、平成7年度から8年度は主にこれらの基礎整理作業にかなりの時間を費やすこととなった。このため、平成8年度未完了が不可能という事態となったことから、㈱リフレとの協議により、業務完了時期を平成9年度末まで延長する了解をいただき、平成9年3月26日付けで協定の変更協定書が締結された。

平成9年度の整理業務は、接合復元作業という基礎的整理が一部残されていたが、8月に入って図版作成等が一部始められ、ようやく本格的な報告書作成作業が実施できた。原稿の執筆は主に秋から着手されたが、時間的な猶予のない中での作業となった。しかし、このたびの本報告書刊行とは、開発サイドにおいても、また文化財保護の立場である市教委にとっても、つらいアクシデント、不測の事態が6年余りにも及んだ横山東遺跡群発掘調査業務の一部終了を意味する感慨深いものとなつたのである。

4) 調査体制

横山東遺跡群発掘調査業務は、㈱福田組の協力を得て始められた平成3年度末の試掘調査以来、調査報告書第1分冊の刊行まですでに8カ年余りを経過した。その間の調査体制等は、人事異動等によりかなり顛ぶれが変わるとともに、市役所内の機構改革にともない、発掘調査業務の実務担当部署の名称も大きく改編されている。本遺跡群発掘調査に関わる各年度における調査体制等は以下のとおりである。

平成3年度試掘調査体制（平成4年3月）

調査主体 柏崎市教育委員会（教育長 渡辺恒弘）

総括 霜田定利（社会教育課長）

管理 石川 章（社会教育課長補佐）

花井憲雄（社会教育課副参事兼社会教育係長事務取扱）

庶務 阿部せつ子（社会教育課副参事兼庶務係長事務取扱）

調査担当 品田高志（社会教育課社会教育係主査学芸員）

調査員 花井憲雄（社会教育課副参事兼社会教育係長事務取扱）

竹井 一・高橋恒彦（社会教育課嘱託）・帆刈敏子・黒崎和子（遺跡調査室）

協力 ㈱福田組

平成4年度発掘調査体制

調査主体 柏崎市教育委員会（教育長 渡辺恒弘）

総括 霜田定利（社会教育課長）

管理 石川 章（社会教育課長補佐兼文化振興係長事務取扱）

花井憲雄（社会教育課副参事兼社会教育係長事務取扱）（平成4年6月30日まで）

川又昌延（社会教育課副参事兼社会教育係長事務取扱）（平成4年7月1日から）

庶務 佐藤正志（社会教育課社会教育係主査）

調査担当 品田高志（社会教育課社会教育係主査学芸員）

調査員補 帆刈敏子・黒崎和子（遺跡調査室）

発掘作業スタッフ 福田組職員・（仮称）横山ニュータウン工事下請け業者ほか・（社）柏崎市シルバーパー人材センター会員

整理作業スタッフ 帆刈敏子・黒崎和子・萩野しげ子・牧野博美

協力 ㈱福田組

平成6年度発掘調査体制

調査主体 柏崎市教育委員会（教育長 渡辺恒弘）

総括 西川辰二（社会教育課長）

管理 川又昌延（社会教育課長補佐兼文化振興係長事務取扱）

庶務 宮山 均（社会教育課兼社会教育係主査）

調査担当 品田高志（社会教育課文化振興係主査学芸員）（雨池古窯跡）

中野 純（社会教育課文化振興係学芸員）（大宮遺跡・庚申塚の経塚）

調査員 小山田夕美・斎藤幸恵（社会教育課文化振興係学芸員）

渡辺富夫・帆刈敏子・高橋由佳（社会教育課文化振興係嘱託）

調査員補 黒崎和子・堀 幸子（社会教育課文化振興係遺跡調査室）

発掘作業スタッフ （社）柏崎市シルバーパートナーズ会員・横山地区有志

整理作業スタッフ 竹井 一・萩野しげ子・安達厚子・岩下清美・堀 幸子・黒崎和子・赤沢フミ・

樋口昭子・高塩加代子・宮川弘子（社会教育課文化振興係遺跡調査室）

協 力 桑畠田組

平成7年～平成8年度整理・報告作業体制

調査主体 柏崎市教育委員会（教育長 渡辺恒弘：平成7年10月29日まで）

（教育長 相澤陽一：平成7年10月30日から）

総括 西川辰二（社会教育課長）

管理 坂口達也（社会教育課長補佐兼文化振興係長事務取扱）

庶務 宮山 均（社会教育課社会教育係主査）

担当 品田高志（社会教育課文化振興係主査学芸員）

中野 純（社会教育課文化振興係学芸員）

調査員 斎藤幸恵（社会教育課文化振興係学芸員）

伊藤啓雄（社会教育課文化振興係学芸員）（平成8年4月1日から）

渡辺富夫・帆刈敏子・村山英子（社会教育課文化振興係嘱託）

整理作業スタッフ 竹井 一・黒崎和子・萩野しげ子・高塩加代子・赤沢フミ・吉浦啓子・片山和子

・堀 幸子・樋口昭子（社会教育課文化振興係遺跡調査室）

平成9年～11年度整理・報告作業体制

調査主体 柏崎市教育委員会（教育長 相澤陽一）

総括 小林清祐（文化振興課長）

管理・庶務 飯塚純一（文化振興課副参事兼埋蔵文化財係長）（平成11年3月31日まで）

猪爪一郎（文化振興課副参事兼埋蔵文化財係長）（平成11年4月1日から）

担当 品田高志（文化振興課埋蔵文化財係主査学芸員）（平成10年3月31日まで）

（文化振興課副参事兼埋蔵文化財係主査学芸員）（平成10年4月1日から）

中野 純（文化振興課埋蔵文化財係学芸員）

調査員 伊藤啓雄（文化振興課埋蔵文化財係学芸員）

平吹 靖（文化振興課埋蔵文化財係学芸員）

横田忠義（文化振興課埋蔵文化財係工務員）（平成10年4月1日から）

渡辺富夫・帆刈敏子・徳間香代子・村山幸子（文化振興課埋蔵文化財係嘱託）

整理作業スタッフ 竹井 一・黒崎和子・萩野しげ子・高塩加代子・吉浦啓子・片山和子・大野博子

・月橋香奈子（文化振興課埋蔵文化財係遺跡調査室）

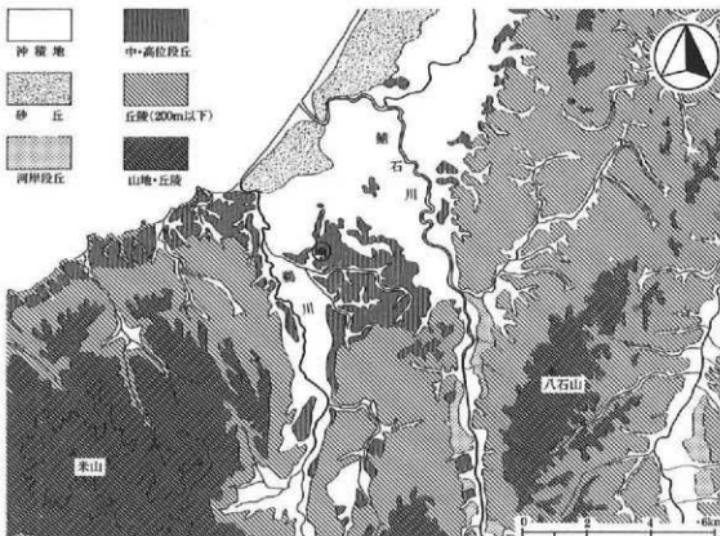
II 横山東遺跡群と環境

1 遺跡群の立地と地理的な環境

柏崎平野概観 柏崎市は、県都新潟市からおよそ75kmほど南西の日本海沿いに位置し、人口9万人ほどを擁する小都市である。行政的な地域区分では中越地方に属する。中越地方とは一般的に、信濃川上流域や魚野川流域一帯を占める魚沼郡域の南部と、長岡市周辺の信濃川中流域から柏崎平野にかけての北部に大別することが可能である。柏崎平野は、北部でも西半部を占め、鶴石川と鶴川を主要河川として形成された臨海冲積平野である。この二河川は、おおむね個々に完結した水系をもつが、全国でも有数の大河である信濃川や関川それぞれの水系により形成された広大な平野とは、丘陵・山塊による分水嶺で隔され、一つの独立した平野を形成している。柏崎平野を取り巻く丘陵・山塊とは、東頸城丘陵の一部である。

柏崎平野一帯の丘陵地形は、北流する鶴川・鶴石川によって西部・中央部・東部に三分され、それぞれは米山・黒船山・八石山の刈羽三山を頂点とする。東部は、北東方向の背斜軸に沿って、西山丘陵・曾地丘陵・八石山丘陵が北から規則的に並び、向斜軸に沿って別山川・長鳥川といった鶴石川の支流が南西に流れ出る。中央部は、黒船山を頂点に北へ緩やかに高度を下げ、沖積地に接する一帯には、「(柏崎平野)南部丘陵」と仮称される中位段丘地帯が形成されている。西部は、米山を頂点とした傾斜の強い山塊であり、その広がりは海岸にまで達して断崖を形成し、沖積地は少ない。また、米山海岸と称される沿岸部には、低位・中位・高位の段丘地形が顕著で、漂石海岸が多く砂浜の形成が少ないという特徴がある。平野の北正面は日本海に洗われ、海岸線に沿って荒浜・柏崎砂丘が横たわり、柏崎市の現市街地がこれを覆っている。平野部をなす沖積地は、砂丘後背地として湿地性が強く、鶴川・鶴石川の蛇行により、各所に幾筋もの自然堤防が分布している。したがって、柏崎平野の特徴を沿岸から表現していくれば、砂丘→後背湿地→海岸段丘→丘陵・山地といった同心円的な地形の変化で捉えることができよう。

柏崎平野南部丘陵と遺跡群 横山東遺跡群の立地は、柏崎平野の中央部にあって、南部丘陵と仮称された中位段丘地帯にある。当該中位段丘の標高は、おおむね20~30mを計り、周囲の水田面との比高差がおよそ10~15mほどと低平である。南部丘陵の特徴は、大小の沢によって著しい浸食を受け、台地が樹枝状を呈し、平坦地の幅が概して狭いことにある。これらの中で最大の沢を形成した河川が鶴川の支流となる軽井川であるが、南部丘陵はこの軽井川によって南北に区分することができる。丘陵の南半部には、軽井川水系に属する比較的大きな沢が深く入り込み、これらにより台地部分は幾つかのブロックに分割されている。北半部は、鶴川の支流である源田川や横山川の小河川が西流し、北辺ではよしやぶ川が鶴石川へ向けて北流する。台地部分については、かつての佐藤池が所在した比較的大きな沢が入り込む地形となっている。これらの北側は、中位段丘が島状の形状に浸食されて点在し、やがて沖積地内へと没している。横山東遺跡群が所在する地点とは、北半部でも軽井川流域に面した西側の一画に該当する。標高は、おおむね23mを頂点とした概して平坦な台地が続くが、大小の沢によって幾つかの小ブロックに分かれる。遺跡群は、これら台地上平坦部の各小ブロックに圓文集落や経塚が、また沢内あるいは斜面等に古代の手工業関連の遺構群が分布していたものである。



第2図 柏崎平野地形分類図と横山東遺跡群の位置

2 横山東遺跡群をめぐる歴史的な環境

横山東遺跡群において、これまでの調査で確認された時代とは、弥生時代を除く縄文時代から中世末までの長期間に及んでいる。本節では、縄文時代と古墳時代、そして古代（奈良・平安時代）・中世（鎌倉・南北朝・室町・戦国時代）に三大別し概観することとする。

1) 縄文時代

横山東遺跡群の周辺に分布する縄文遺跡は、本遺跡群の3カ所を含めて24カ所が把握されている。遺跡分布の傾向としては、鶴川下流左岸の河岸段丘域と南部丘陵域西辺に密集した分布域が見出せる。各遺跡についておおまかな時期区分を試みると、前期後半から中期前葉期の遺跡が大半を占める。前期前半までの遺跡は少なく、草創期では神子柴型の丸盤形石斧が出土した大原遺跡（23）〔宇佐美1987〕や、前期前半の土器が若干出土した剣野A遺跡（2）〔品田・鈴木1987〕が掲げられる程度である。また、中期中葉から後葉の遺跡数も少ない。前葉から中葉でも前半を主体とする十三仏塚遺跡（16）〔品田1987a・柏崎市教委1991〕は当該期の中核的な集落である可能性が高いが、このほかでは辻の内遺跡（21）〔宇佐美・高橋1987〕から多少の土器片が出土している程度である。後・晚期の遺跡も少ないが、後期前葉では剣野D遺跡（5）〔岡本1987〕や十三本塚北遺跡（15）〔柏崎市教委1993〕のように中核的な集落が存在している。後期中葉は呑作D遺跡（18）〔柏崎市教委1995〕、晚期では剣野C遺跡（6）〔品田1987b〕と剣野沢遺跡（3）〔中野1995〕などを掲げることができるが、詳細等は明らかでない。



第3図 横山東遺跡群と周辺の縄文時代遺跡

No	遺跡の名称	時代・時期	No	遺跡の名称	時代・時期	No	遺跡の名称	時代・時期
1	剣野E遺跡	中期初頭・前葉	9	田塚山遺跡群	前期後半～後期前葉	17	京ヶ峰遺跡	中期前葉
2	剣野A遺跡	前期前半・中期前葉	10	小児石遺跡	前期後葉	18	呑作D遺跡	後期中葉
3	剣野沢遺跡	晚期後半	11	大宮遺跡	前期後半	19	呑作A遺跡	中期初頭
4	剣野B遺跡	中期初頭・前葉	12	大沢遺跡	中期前葉	20	呑作G遺跡	早期後半～前期初
5	剣野D遺跡	後期前葉	13	雨池遺跡	中期前葉	21	原遺跡	中期中葉
6	剣野C遺跡	晚期中葉	14	尻坂遺跡	前期末～中期初頭	22	辻之内遺跡	前期後葉～中期中葉
7	桐山遺跡	中期前葉・後期中葉	15	十三本塚北遺跡	後期前葉	23	大原遺跡	草創期
8	宮山遺跡	中期前葉	16	十三本塚遺跡	中期前葉～中葉	24	千古塚遺跡	前期後半・中期前葉

第2表 横山東遺跡群周辺の縄文遺跡地名表

前期後半から中期前葉は、遺跡数がもっとも増加した時期である。当該期においてある程度の規模を有し、広場的な空間を備えた中核的な集落としては、前期後半期の大宮遺跡（11）、中期初頭から前葉期では剣野B遺跡（4）が挙げられる。これらが、連綿と一時期の間断もなく継続されていたとの断定はできないが、前期後半期では鶴川に面した南部丘陵側の縁に営まれていたものが、中期初頭から前葉期では、鶴川下流左岸や、南部丘陵でも東部の鯖石川に近い位置に大きく分かれて配されていた状況が看取される。これらと半径1kmほどのところには、堅穴住居や大型建物を伴わず、広場を形成しない集落が点在している様子をうかがうことができ、これらのことから夏冬集落の想定もなされている〔品田1996a・b〕。

また、当該地帯において、陥り穴が確認された遺跡とは、田塚山遺跡群（9）・小児石遺跡（10）のような沖積地に浮かぶ小丘地帯と、藤橋東遺跡群の3遺跡（17・19・20）や千古塚遺跡が立地する南部丘

陵の西辺部の2地区であり、横山東遺跡群ではまったく検出されなかった。このことは、縄文集落の密集分布域とはやや距離をおいたところに、陥し穴が分布するという傾向が看取できる。この点は、縄文時代における空間利用について示唆的な事例であり、今後の興味ある課題が含まれていそうである。

2) 古墳時代

柏崎平野において、これまでに調査された該期の遺跡は、吉井遺跡群に属する一連の事例など意外と多い〔柏崎市教委1990ほか〕。しかし、調査面積そのものは限定され、わずかな遺構と遺物が検出されるにとどまっており、集落様相などの具体的な検討は困難である。ただし、古墳群としては、吉井遺跡群に属する吉井行塚古墳群において、前方後円墳など2基が確認され〔柏崎市教委1989〕、その周辺には行塚遺跡など玉作遺跡も発見されていることなどは〔柏崎市教委1992aほか〕、その特性として注目されるところである。また、遺跡の分布を見れば、海岸沿いの砂丘内から、その後背湿地、そして鶴川・鮫石川の中下流域に広がっており、それなりの地域的な展開が想定できる。

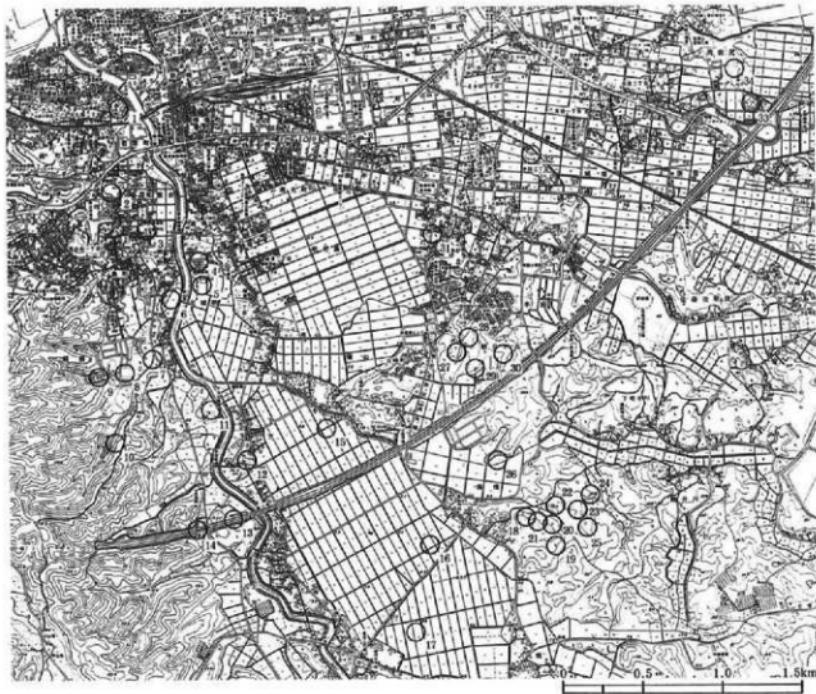
鶴川中～下流域から南部丘陵一帯においては、当該期に属する遺跡も近年少しずつ増加する傾向にある。しかし、前期の遺跡が概して多い反面、中・後期は少ないようである。前期の遺跡としては、鶴川中流域南部の上条地区に中縄手遺跡が所在するが、下流域では柏崎農業高校校庭遺跡(5)〔岡本・坂井1987〕や鶴巣田遺跡(13)〔新潟県教委1988〕が掲げられ、土器群等が採集されている。中期の遺跡としては、箕輪遺跡においてわずかな土器片が出土したのみであり〔柏崎市教委1993〕、後期の遺跡に至っては確認されていない。

ところで、上記した遺跡は、すべて沖積地あるいは河川の自然堤防上に立地した遺跡である。最近発見例が増えた事例とは、丘陵上の遺跡である。そのうちの一つが第2分冊で報告する大宮遺跡(27)であるが、この他にも藤橋東遺跡群の京ヶ峰遺跡(22)からも、若干の土器片が出土している。ただし、住居等性格の明らかな遺構を伴っておらず、特に大宮遺跡の場合は、大型の窪みに深くて狭い溝を伴う正体不明の遺構であるなど、遺跡の性格付け等は今後に残された課題が多い。

3) 古代・中世

奈良・平安時代 奈良時代の柏崎市・刈羽郡域は、柏崎市西部の旧頸城郡部や魚沼郡部であった小国町などを除く大半が、長岡市域などと同じ古志郡域に属していた。当時の古志郡は、三島郡と島村の八幡林遺跡の調査成果から島嶼川流域でも八幡林遺跡付近に郡衙中権部が想定できるため〔和島村教委1994〕、三島郡域とは低いながら分水嶺を間に挟み、地理的にはやや隔たりを感じさせる関係にあった。このような地理的な側面のみとは言い難いが、柏崎平野一帯は平安時代を迎えた9世紀初頭頃に、三島郡として分置独立することになる〔米沢1976〕。

三島郡には、「三島」「高家」「多岐」の三郷が『倭名抄』に記され、また『延喜式』には北陸道の駅として「三島駅」と「多太駅」があったとされている。これら二史料に記された記載順や後の莊園分布などを参考とすれば、鶴川流域：三島郷、鮫石川中流域・長鳥川流域：高家郷、別山川流域：多岐郷といった郷域が想定できる。この想定を前提にできれば、横山東遺跡群が所在する鶴川中～下流域は、三島郷域に属することになる。ただし、「三島」の名残りについては、市内三島町に所在する三島神社などわずかな手がかりしかなく、具体的な根拠に乏しいことも事実であり、当該地における古代史の実態は、今後の遺跡調査にかかっているのが実情である。



第4図 横山東遺跡群周辺の古代・中世遺跡分布図

No.	遺跡名称	時代	種別	No.	遺跡名称	時代	種別	No.	遺跡名称	時代	種別
1	大久保東	平安・中世	散布地	13	鶴巻田	古墳・平安	散布地・集落	24	香作C	平安	集落
2	剣野F	平安	散布地			鎌倉・室町	製鉄関係	25	香作E	平安	製鉄関係
3	三島神社	平安	散布地	14	西田	中世	散布地	26	藤橋向山	平安?	散布地
4	琵琶島城	中世	城郭	15	茅原	平安・中世	散布地	27	大宮	平安	土坑
5	柏農校庭	古墳・平安	散布地	16	沢田	平安	散布地	28	大沢A	平安	大溝
6	浜祐	平安	散布地	17	前掛り	平安・中世	集落	29	大沢B	奈良～平安	製鉄関係
7	剣野B	平安	小鍛冶関連	18	網田瀬A	古代・中世	集落・製鉄	30	雨池古窯	平安	須恵器窯
8	剣野沢	平安・戦国	散布地	19	網田瀬B	古代～中世	製鉄関係	31	箕輪	弥生中期	散布地
9	香積寺沢	中世	寺院跡?	20	網田瀬C	平安	製鉄関係			古墳・平安	集落・官衙
10	剣野水上	古代～中世	製鉄関係	21	網田瀬E	古代・中世	製鉄・墓地	32	小峯	平安・中世	散布地
11	下沖	平安	散布地	22	京ヶ峰	弥生末古墳	散布地	33	小児石	鎌倉～戦国	中世墓地
12	鶴屋敷	室町	散布地	23	香作B	奈良・平安	製鉄関係	34	田塚山	平安・鎌倉	中世寺院

第3表 横山東遺跡群周辺の古代・中世遺跡地名表

なお、郡名となった「三嶋」の由来については、越中国射水郡に同名の郷があることから、両者の深い関わりが想定されているが〔平川1993〕、大宝2年(702)まで阿賀野川以南の頃城・魚沼・古志・蒲原の四郡が越中国であったことからすれば〔米沢1980〕、想像に難くない。また、越中国には有力な豪族として「射水臣」が国内に広く分布していたとされているが、八幡林遺跡から越後国内在住と目される「射水臣」の名が記された木簡も出土している〔和島村教委1993・平川前掲〕。「三嶋郡三嶋郷」の名称が、射水郡内の郷名と同じとすれば、両者には更なる深い関わりが想定されるのであり、当該地が越後国内に在住する「射水臣」の故地の一つを示唆している可能性は否定できないであろう。

中世『吾妻鏡』文治2年(1186)3月12日条の「三箇国庄々未進注文」には、柏崎平野に比定される荘園として「宇河(鶴川)荘」「佐橋(鱗石)荘」「比角荘」の三荘園が記されている。これら三荘園は、寄進地系荘園として11世紀末から12世紀中葉頃には成立したと考えられ〔荻野1986〕、これ以後倭名抄の都郷名は廃れて、荘園名で呼ばれることになる。これらの荘園の四至は明確にされていないが、鶴川荘の場合、鶴川という河川名と一致すること、史料に記された地名等から安田付近まで及ぶこと、そして鏡ヶ池という湖沼により比角荘域と推定されている現柏崎市街地と地形的に隔たっていることなどから、鶴川河口付近を除く鶴川流域一帯とその水系内に属する南部丘陵一帯が、その荘域として推定できよう。したがって、南部丘陵でも鶴川沿いに位置する横山東遺跡群も、中世において鶴川荘内にあったものと解釈することが可能である。しかし、中世において荘園と言ふものがあったとしても、その姿あるいは中世人の生活は不明である。当該地における中世史も、残された古文書や記録類などの史料が乏しいことから中世全般を叙述することは不可能であり、考古学的な遺跡調査により、少しづつ明らかにしていかざるを得ないようである。

鶴川中下流域の古代・中世遺跡概観 柏崎市内における古代や中世遺跡の調査事例を見ると、鶴川中～下流域は、概して件数の多い地域である。昭和54年(1979)に北陸自動車道の建設に伴って実施された西田・鶴巻田遺跡群(13・14)の調査では、平安時代の製鉄関連遺物が多量に出土するとともに、鎌倉時代の井戸等や土器類が多く出土した〔新潟県教委1988〕。また、平成元年(1989)には、千古塚遺跡と剣野B遺跡が調査されている。千古塚遺跡は、南下における農道の改良工事に伴う調査で、鎌倉時代から室町時代中期頃の中世墓地が確認された〔柏崎市教委1990a〕。剣野B遺跡では、平安時代の小鍛冶に伴う遺構・遺物群が検出されたが、出土した土器群は、少ないながら時期的なまとまりを持つものであった。1990年代前半では、新潟工科大学建設に伴う藤橋東遺跡群〔柏崎市教委1995b〕や今回報告する横山東遺跡群などの大規模調査が実施された。横山東遺跡群では、鉄生産や窯業など、古代の手工業等に関連する遺構が発見されているが、藤橋東遺跡群(18～25)では、奈良・平安時代の大規模な鉄生産関連施設が発見されており、柏崎平野南部地域に広がる大規模な製鉄遺跡群の存在が浮き彫りにされた〔品田1993〕。

また、最近の動向としては、農免農道改良工事に伴う前掛り遺跡(17)〔柏崎市教委1997〕や、国道のバイパス工事とともに実施されている箕輪遺跡の調査が掲げられる〔新潟県埋文事業団1996・97〕。前者は、9世紀中葉の建物跡や大溝などが検出されたが、その後間もなく大規模な水害により集落が廃絶されたものとされている。後者は、郡もしくは郷などと関わりを持つ中枢施設の存在が濃厚とされ、現在最も注目される遺跡である。横山東や藤橋東の各遺跡群では、須恵器や鉄などの生産が盛んに行われていたが、このような古代における手工業との関わりは、箕輪遺跡と関連付けて説明できるかも知れない。

なお、網田瀬A・E遺跡(18・21)では、中世の屋敷跡と推定される建物址や井戸、およびこれに関連すると考えられる墓地が調査されている〔柏崎市教委1995〕。

III 大沢遺跡

1 発掘調査の経過

人員や重機の手配、および器材の搬入等は、4月下旬までに勝福田組と協同して準備を終えていたため、調査期間の余裕もないこともあり、連休前の平成4年4月27日（月）から早速発掘作業に入る。準備された重機は、伐採された材木搬出用の1台を含めるとバックホーは4台、それらに土砂搬出用のクローラーダンプ1台を合わせた合計5台が投入された。作業に携わる人員は、研修を兼ねた福田組新入社員と造成工事に携わる業者複数による14名の寄り合い所帯、そして調査担当と調査員の計3名が加わって発掘調査が開始された。

調査初日に行った表土剥ぎは、縄文土坑が検出されているI沢付近からバックホー3台が並走して南進し、たちまちのうちに当初予定の8割りほどを除去する。しかし、ジョレンがけと遺構確認は、それについて行けず、また木根も多くて難航したが、遺構は概して少ないことが判明した。翌28日には予定した範囲の表土除去を終了したが、意外に遺構が少なかったことから、福田組の要望を取り入れ、A地区の大宮遺跡境からI沢東斜面に調査範囲を拡張することになり、作業はそのまま継続した。遺構確認は全域に及ばなかったが、しかし拡張部分からはすでに確認されていた大溝の全プランと、縄文時代の土坑・ピットが比較的多く検出され始め、短期間に全て調査し切れるのか不安が走る。28日より、福田組の協力を得てグリッドの設定作業に入る。30日は、朝8時半頃から雨がよく降り続き、現場のぬかるみがひどくなつたため、結局11時に作業を中止した。表土剥ぎは、A地区側へ拡張して実施していたが、遺構密度が高くなり、遺構の分布も環状集落的な様相を強めてきた。ただし、堅穴住居ではなく、全て柱穴の配置だけによるものである。5月1日（金）は連休中とメーデーが重なり、作業員も6名と少なかった。しかし、縄文集落域と想定される範囲の表土除去作業が完了、また遺構確認の大半を終了した。遺構については、炉跡の検出には至らなかつたが、ピットの並びからすれば8~10棟ぐらゐの住居跡が想定できそうである。この日、本遺跡から南へ伸びる尾根の先端部において、工事用道路の法面から木炭窯の断面が確認された。この付近から鉄滓が大量に出土していたとの情報も寄せられたことから、鉄生産に関わる遺構群の存在がほぼ確実となつた。このため、当該地点を大沢遺跡B地点とし、連休明けから調査を実施することとした。

5月6日、連休も明けたことから、縄文集落域では、遺構の発掘作業が本格的に始められた。また、B地点では遺構の確認作業を進め、斜面に任意設定した数本のトレンチを重機にて掘削した。その結果、木炭窯2基のほか若干の土坑を確認することができた。しかし、結局、製鐵炉の存在を確認することができず、多量の鉄滓出土という情報からすれば、すでに破壊されていたものと断定した。遺構確認作業は、おおむね夕方前には終了した。だが丁度その時、調査担当が、その場にて強い腰痛のため立ち上がりがれなくなり、結局そのまま入院することとなった。

7日から8日については、調査担当不在のまま、縄文集落内の土坑・ピットについて半蔵作業が進められた。大溝（SD-70）については、7日にトレンチを入れて深度と断面形の確認作業を行い、8日にはミニユンボとクローラーダンプを活用して覆土の発掘作業を実施した。しかし、3時頃には雨足が強くなり、この日の作業を中止した。なお、調査担当不在状態のままでは、これ以上の調査続行は無理と判断、

しばらくの間、調査を中断することとした。

調査の再開は、約20日間の中断を経た5月28日となった。この日は、とりあえず担当と調査員だけとし、主に半截された柱穴や土坑の断面写真やその実測作業を中心として実施した。29日からは、作業員を少人数に限定し、半截によって確認された土坑・ビットの完掘作業に入った。

6月1日からは、遺構の調査と並行し、平面図の作成に着手した。その担当手は、福田組の職員があたり、この日はD-19・E-19・20の3グリッドが終了したが、以降連日にわたり継続された。2日には、縄文遺構のほか、大溝の発掘を再開する。大溝覆土の大半は、すでに機械掘削により発掘済であったが、壁と底面の検出について、手作業による発掘を進めた。翌3日には、縄文遺構の大半で完掘作業が一段落したことから、大溝の発掘に集中するが、その作業は4日も継続した。5になると、大溝に設定した5本の土層断面図の作成も終了した。また、この日には、SK-233土坑の調査を行ったが、この土坑内から耳栓形耳飾り2点が出土した。SD-70とした大溝は、9日に全ての土層断面用のベルト除去作業が終了し、またSK-233土坑についても、土器出土状況の写真撮影後、遺物を取り上げて完掘した。これにて縄文集落域にあった遺構全ての発掘作業が終わり、残すは平面図の作成だけとなった。なお、縄文集落域には、かなり多数の木根が取り残され、遺構の分布状況を見渡すことができなかっただため、10日にラジコンヘリによる空撮を行った。

B地点における木炭窯の調査については、8日から再開した。SX-401木炭窯については、10日までに完掘し、その写真撮影後、付近に確認されていた土坑群の発掘に着手した。SX-410木炭窯は、11日も発掘作業を継続した。作業場から焚口付近については、別の遺構のためか壁と床が連続せず、その部分をSX-411として発掘を進めた。

6月12日、縄文集落域において続けられていた平面図作成作業の全てが終了した。B地点でもSX-410木炭窯が完掘、SX-411についても土層断面の写真撮影まで行った。13日は、B地点でエレベーション図や平面図の作成を継続し、15日の午前中、ついに全てを終了した。午後、ただちに器材の撤収を行い、市内南条にある次の現場、馬場・天神腰遺跡の調査のため、横山東遺跡群を後にした。

なお、6月13日には、國學院大學の小林達雄教授ほか2名、また新潟県埋蔵文化財事業団の寺崎裕助氏が来訪した。



写真1 大沢遺跡表土剥ぎ



写真2 大沢遺跡貯蔵穴の発掘

2 遺跡と調査区

1) 遺跡の立地と調査地点

横山東遺跡群が立地する台地は、昭和39年測図の地形図を見ると概してまとまりのある地形を呈し、東西及び南北におよそ600mほどの広がりを持っていた。ただし、その北半部については、すでに朝日ヶ丘団地として壊滅しているが、かなり広い平坦地をもつ台地が、かつてあった。大沢遺跡が立地する台地は、その北東側に細長く切り込むE沢とI沢により平坦地が細くくびれ、また南南西側もA沢とD沢とによって、大宮遺跡が乗る台地と仕切られていたが、この平坦地を中心にして縄文集落が形成されていた。大沢遺跡は、当初I沢の沢頭付近の狭い範囲が想定され、遺跡名もその付近を占める字「治郎右エ門林」を冠していた。しかし、前節でも述べたように、表土剥ぎの範囲が広がるにつれ、遺構の分布も字「治郎右エ門林」地内より、むしろ字「大沢」地内において密度が高いことが判明した。改めてその地形を見れば、A・D・E・Iという4筋の沢によって尾根筋が仕切られ、概してまとまりを持つ台地であった。このような実態から、遺跡名も「大沢遺跡」と呼称することとした。

ところで、この「大沢遺跡」からは、南北に派生する2筋の尾根がある。このうち、南側へ延び、D沢とE沢にはさまれた尾根の先端部から、古代鉄生産に関わる遺構群が検出されたが、当該地点の小字地名も、やはり字「大沢」地内であった。今回の報告にあたっては、混同と煩雑さを避けるため、台地上平坦地を中心とした縄文集落域については、これを「大沢遺跡A地点」とし、今回は「縄文集落域」と呼び、この「縄文集落域」から南へ延びる尾根先端部については、「大沢遺跡B地点」として便宜的に呼び分け区別することとした。

2) 調査区の概要

大沢遺跡A地点（縄文集落域） 調査は、本遺跡地内に設定された道路の法線に沿って表土除去作業が実施されたが、結局台地上面の平坦地全域が調査された。標高は、おおむね24mほどを計り、ほぼ平坦である。調査面積は、2,904.7m²となった。調査前の状況は、全て山林であり、大半が荒れた杉林となっていた。このため、調査区全域に木の切り株が数多く取り残されることとなった。

調査グリッドは、B～L-16～23グリッドの範囲である。なお、このグリッドの方位は、大沢B地点と兩池遺跡とは共通するが、平成6年度の調査グリッドとは、約N-7°～Eのずれが生じている。

基本層序については、第Ⅰ層：表土、第Ⅱ層：暗褐色土（遺物包含層）、第Ⅲ層：地山層（安田層）である。第Ⅱ層からの遺物出土量については、概して少なかった。

大沢遺跡B地点 遺跡が立地した尾根先端部は、南東に面しておおむね平面的な斜面を形成し、概して傾斜が強い。遺跡発見段階、すでに上部は土取りによって削平され、さらに冲積面に接した斜面下方部も農道を拡幅した工事用道路によって、切り通された状態であった。このため、往時の現状はうかがうべくもないが、工事前の地形図からすれば、木炭窯が築かれていた地点からその下方部において、傾斜がやや緩やかな状態を等高線の並びで看取できる（図版23）。調査段階においては、製鉄炉本体を見極められなかったが、道路法面にわずかに残されていたSK-409土坑がその地下構造の一端と判断され、その頂部に踏み石が設けられていた。調査グリッドは、c～e-22～24グリッドである。調査面積は、遺構が検出された部分のみ拡張したことによって、発掘総面積は100m²となった。

3 縄文集落域の遺構と遺物

大沢遺跡における調査地点は、台地上平坦地（縄文集落域）と尾根先端部（B地点）の大きく2つの地区に分かれ、互いに立地する地形や主体的時期などが相違する。本節では、前者の台地上平坦地とした縄文集落域（A地点）から検出された遺構・遺物について取り上げ、B地点は次節にまとめた。台地上の平坦部は、縄文時代の集落跡が主要な内容であるが、この他に古代の遺物が伴った大溝が確認されている。ここでは、縄文時代の遺構・遺物を中心に記述し、古代以降については本節第4項に一括した。

1) 縄文集落概観と遺構の分布

縄文時代の遺構は、土坑とピットで構成され、誰でもが住居と認定できるような堅穴式住居はない。このため、まず居住空間である集落の是非が問題となるが、柱穴の配列から建物跡と認定し得る遺構の存在、貯蔵穴・墓坑と考えられる土坑の存在、そして日常的な生活道具である土器・石器類の出土は、当該地において生活が営まれていた痕跡とすることができる。そのような生活の場には、家が建てられ、集落が形成されたと考えることが妥当であり、最終的には住居跡の確認が必要となる。

大沢遺跡における遺構群は、台地の西側から南側にかけて、その周縁に沿って大半が確認され、台地の中央部から北東側で希薄となっていた。ピットは、直径・深度とともに大小深浅のばらつきが大きいが、底面に柱が建てられていた痕跡をとどめるものもあり、大半は住居に伴う柱穴で占められていると考えられる。しかし、本遺跡で想定される住居とは、半地下式構造となる堅穴住居ではなく、床面をほとんど掘り下げない平地式、あるいはそれに近い構造と考えられ、柱穴の配置だけから住居跡を特定することは難しい。今回は、「尼振坂遺跡」の成果を援用し【柏崎市教委1996】、積極的に住居を推定して、集落の構成を見ていくこととしたい。

集落に伴う遺構群は、四方に派生する尾根筋には広がらず、地形的に一定の広さを持つ平坦地を利用した分布域を示す。遺構の分布密度について、平坦地の北東側は希薄であるとしたが、南西側の遺構群が台地の周縁に沿って検出されていることから、相対的には孤を描く。その結果、台地の中央部は遺構がほとんど分布しない空白域となっていた。このような遺構分布の特徴からすれば、中央部に広場的な空間が設定され、住居や貯蔵穴等はこの広場を意識もしくは規制を受け、その周りをめぐる形で住居が配置されていたと考えられる。広場と考えられる空間は、その直径がおよそ18mの範囲であり、遺構密集域の反対側に墓坑と考えられる土坑が検出されている。また、広場に西接して、主軸の延長を広場の中心に向けた1棟の建物跡が検出されている。集落を構成する主要な遺構は、建物跡1棟のほか、平地式住居21棟が想定されている。ただし、これらの中には不明瞭なものも含まれるが、しかしこの他に比較的多くのピットが残されていることから、若干の追加も予想できる。貯蔵穴については、個別図に掲げた20基以外に6基ほどが該当し、それら以外にも幾つかの大形土坑が検出されている。墓坑については、耳栓形耳飾り2個が出土した土坑1基だけである。しかし、当該土坑を検出した地点は、東側が調査区外との境界に接するため、複数の墓坑による墓域等の存否については明らかにし得なかった。

なお、遺物包含層など表土は重機にて排除したため、遺構以外からの遺物の出土は少ない。また、調査は台地平坦部を中心としたため、平坦部から斜面部に至る区域については充分に追求仕切らなかった、調査区の境界壁などにおいて、特に遺物の出土量が多いという地点はなく、土器捨て場など当時の残滓を捨

てた廃棄場の存在あるいは位置についても明らかにできなかった。また、調査区域内の残された切り株は相当な数に上る。このため、切り株下における遺構の有無は不明であり、住居推定に伴う柱穴については、全て明らかにされていないことを付言しておきたい。

2) 縄文集落遺構各説

本項では、縄文集落内における主要遺構について、建物跡、住居跡（平地式）、土坑に大別して述べる。建物跡の認定については、柱穴の配置が規則的であることを原則とし、本遺跡の場合、方形に整っているものとした。住居跡については、前述したように、平地式もしくはそれに近い構造と考えられ、床面そのものが検出されていないことから、柱穴の配列から推定するだけである。しかも、柱穴の配置が定型的でないことから、具体的な住居プランを明らかにすることはできず、たとえ住居と推定しても、未検出の柱穴の存在や接した位置に複数の柱穴が存在した場合、個々の住居に伴う柱穴すべてを特定することは難しい。一棟の住居に必要な柱数としては、「尻振坂遺跡」の事例から5本柱であった可能性が高く、その配置も野球のベース形から将棋の駒形が想定されているが、本遺跡の住居についても同様な視点から検討を加え、住居跡について推定したものである。

土坑は、貯蔵穴や墓坑と推定し得るものであるが、性格を充分把握できないものも少なからず存在する。これらについては、単に「土坑」と表現しておきたいが、ピットについても同様に、住居に伴うものとして認定したもの以外は、柱穴の可能性が強いものであっても、そのまま「ピット」としておく。また、ピット類・土坑類個々の位置や規模等については、第4表として一覧表にまとめたので参照されたい。

なお、各遺構の種別を示す略記号については、建物跡：S B、住居跡：S I、土坑：S K、柱穴・ピット：S K p、性格不明の落ち込み：S Xとしたが、本文においては番号のみとした場合がある。

a 建物跡（図版14）

S B-292建物跡（56・57・59・61・62・64・65・277） 集落中央の広場の西側に接した位置にあり、検出面はほぼ水平で平坦であった。検出された柱穴は6本である。その内訳は、主柱穴が4本（56・59・62・65）、また側面に各々1本の支柱（57・61）を伴うものであるが、支柱は中央より西側に偏って設けられていた。間口はおよそ3.3m、奥行は2.65mほどを計る（ともに柱穴中心付近から計測）。柱穴の規模は、一般的な住居のそれよりかなり大きく、主柱穴は長軸で80cmを超えるS K p-65を最大として、60cm前後の直径を計る。支柱穴については、主柱穴より一回り小さい50cm前後であった。深度についても、主柱穴は、50cmを超え、支柱穴はそれよりも10~20cmほど浅くなっている。また、土層断面から観察された柱痕跡は、直径がおむね30~40cmを計るものである。

建物跡の構造については、検出された遺構が柱穴のみのため判然としないが、柱穴の規模からすればかなり堅固な構造物が想定できる。特に、主軸方位に沿って並ぶ2個のピット（64・277）については、棟持柱の可能性もあるが、概して小さく浅いことから梯子を設置したピットと考えることができ、高床構造の建物跡という想定も可能である。遺物としては、石器類（敲石・磨石・小形打製石斧）が出土している。

b 住居跡（図版14~16）

S I-290住居跡（39・40・42・45） 推定された住居の中では最も北寄りに位置し、確認面はほぼ水平で平坦であったが、台地の縁からは10mに満たない距離にある。ただし、柱穴は4本しか確認されておらず、不確実さを多分に含む事例である。推定された形からすれば、間口側が概して広いことに対し、奥行が狭く、奥柱の位置が余り外側に張り出さないものである。したがって、屋根を伏せた場合の住居プランは、

奥行の狭い楕円形の可能性が高い。

S I - 291住居跡群 a・b の2棟が2本の柱穴(51・255)を共有しつつ重複する事例である。ただし、両住居内を後世の大溝が横切っており、柱穴の一部がすでに失われている可能性を持つ。このため、この2棟については、推定に若干の無理が伴っていることをお断りしておく。とりあえず把握された柱穴の配置から、若干の概要を記すにとどめたい。検出された位置は、台地の縁から5mほど隔たっていた。なお、後述するように、住居プラン内に取り入れられる貯蔵穴と考えられる土坑がそれぞれに複数確認されている。本住居周辺におけるピットの分布は少ないが、検出できなかつたものが多いのかも知れない。

291a住居跡(49・51・53・255・276)の柱穴は、奥柱がやや外側に張り出し、間口から側柱へはほぼ直角に折れ、互いの側柱はほぼ並行となって野球のベース形に配される。間口側の幅と奥行は、若干奥行が深い程度であることから、おおむね円形の住居が想定できる。本住居プラン内には、貯蔵穴と考えられる土坑として、奥側に2基(50・52)、間口側右手に1基(73)が位置しており、当該住居に伴う可能性が高いとともに、別に重複した住居の存在も考慮しておく必要がある。

291b住居跡(51・72・242・254・255)は間口側が奥行よりも広く、奥側も側柱が奥柱側に寄って全体的に狭くなる。このため、間口側への屋根の張り出しが大きくなる可能性が高い。貯蔵穴と考えらる土坑は、住居プラン内に1基(73)存在するが、間口側前方にも1基(76)が確認されており、屋根の葺き方次第では、住居内へ取り込まれる可能性がある。

S I - 293住居跡(88・168・263・264) 本住居についても、住居内に大溝が入り込むため、失われたピットの存在を考えると、若干の躊躇を伴うとともに、幾つかが重複する可能性も考慮しておく必要がある。位置的には、広場の西側に接した中央寄りにあり、検出面はほぼ平坦である。間口側に対し、奥行は約1/2程度と狭い。奥柱の張り出しは小さく、また奥側側柱も中央に寄っており、間口から側柱に至る角度はかなり鋭角となる。貯蔵穴の有無については、大溝によって失われた可能性があるため、不明である。なお、屋根がおおむね円形に葺かれるとすれば、S B - 292建物跡とは同時存在ではないと判断できる。

S I - 294住居跡(79 b・81・82・283) S I - 291住居跡の南側に位置し、検出面はほぼ平坦である。奥柱の存在が未確認のため、間口側を特定できない。今回は、大半の住居が南側を意識していることから、ほかの事例に従った。奥柱不明により、柱穴の配置は判断できないが、全体的には正五角形に近いプランも推測される。このような事例は、本遺跡では唯一であるため、再検討が必要かも知れない。

S I - 295住居跡(92・93・115・119・122) 広場の南西側にあたり、検出面は南側へやや緩く傾斜を始めた位置にある。奥柱が外側へ大きく張り出し、奥部はかなり強い鋭角で柱穴が配置される。また、間口側から側柱へ至る角度も両側で異なり、住居プランは均整が取れていない。貯蔵穴は1基(90)が近接するが、間口側にはないため、本住居には伴っていない可能性が高い。なお、屋根の存在を考慮すれば、S I - 296 a・b住居跡とは同時に存在していないものと考えられる。

S I - 296 a住居跡(84・97・100・101・121) S I - 295住居跡の南西側において、地形的には南側へ緩く傾斜した位置から検出された。S I - 296 b住居跡とは重複するが、柱穴を共有する可能性は少ない。ただし、本住居の奥行は、間口側の半分にも満たないほど狭いことから、住居プランとして認定するにはやや不安が残り、場合によっては奥柱の位置がS I - 296 a住居の一部(95・96)と共有する可能性は残されている。近在にも、プラン内にも貯蔵穴らしい土坑は確認されていない。

S I - 296 b住居跡(95・96・98・99・102) 奥柱の張り出しは小さく、また奥の側柱が概して中央寄りとなっている。また、間口側左側については、かなり鋭角な角度となり、側柱間も、間口側とほとんど変わ

第4表 大沢道路 A地点通過構一覧表

※ 土:土器片 カッコの中の数字は、実測時に外の破片数															
番号	グリッド	種別	平面形	側面形	側面長軸・短軸(厚度)cm	遺物	備考	番号	グリッド	種別	平面形	側面長軸・短軸(厚度)cm	遺物	備考	
001	D-19	ピット	円 形	21×19	10			038a	G-20	土 坑	横円形	50×35	18		S I-290
002	D-19	土 坑	方 形	100×75	17			038b	G-19	柱 穴	円 形	32×27	27	(±2)	S I-290
003a	E-19	土 坑	方 形	64×60	14			040	G-19	柱 穴	横円形	35×25	18		S I-290
003b	E-19	ピット	方 形	23×14	—			041	H-19	柱 穴	横円形	38×32	9		
004	D-19	ピット	円 形	34×28	23			042	G-H-19	土 坑	横円形	56×75	12		
005	D-19	土 坑	横円形	47×40	14			043	G-H-19	ビット	方 形	35×26	12		
006	E-19	土 坑	横円形	48×40	33			044	H-19	ビット	方 形	24×20	12		S I-290
007	E-19	土 坑	横円形	45×40	18			045	H-19	柱 穴	横円形	38×33	26		
008	E-19	土 坑	横円形	35×30	28			046	H-19	柱 穴	横円形	90×76	8		
009a	E-19	土 坑	横円形	34×29	22			047	H-19	土 坑	横円形	47×103	11		
009b	E-19	土 坑	横円形	61×16	23			048	H-19	柱 穴	横円形	(80×48)	11		S I-291a
010	E-19	土 坑	横円形	55×35	26			049	H-19	柱 穴	円 形	30×28	23		
011	E-19	土 坑	—	—	—			050	H-19	柱 穴	横円形	100×98	34		SI-291a-SI-291b
012	D-19	土 坑	円 形	34×317	—			051	H-19	柱 穴	円 形	22×22	7		
013	E-19	土 坑	—	—	—			052	H-19	柱 穴	横円形	76×69	23		
014	E-20	ピット	横円形	28×19	17/22			053	H-19	柱 穴	横円形	53×34	6/22		底面二段-SI-291a
015	E-20	(野窓穴)	横円形	68×59	20			054	H-19	柱 穴	円 形	44×40	24		
016	E-20	野窓穴	横円形	40	—			055	H-19	柱 穴	横円形	35×29	19		
017	E-P-20	野窓穴	横円形	74×71	25			056	H-20	柱 穴	横円形	58×55	51		S B-292
018	P-20	土 坑	横円形	122×91	18			057	H-20	柱 穴	横円形	50×44	33		S B-292
019	P-20	土 坑	横円形	43×40	16			058	H-20	柱 穴	横円形	(29×25)	—		
020	P-20	土 坑	横円形	54×45	18			059	H-20	柱 穴	横円形	62×61	54	(±6)	S B-292
021	P-21	土 坑	方 形	45×40	19			060	H-20	ビット	柱 穴	21×21	15		
022	P-20	土 坑	横円形	59×40	16			061	H-20	柱 穴	横円形	58×48	45		S B-292
023	P-21	土 坑	横円形	63×61	17			062	H-20	柱 穴	横円形	55×50	51		S B-292
024	P-21	土 坑	方 形	62×37	14			063	H-20	ビット	横円形	27×168	—		
025	P-21	土 坑	—	—	—			064	H-20	柱 穴	大 槌	20×19	12		S B-292
026	G-21	—	—	—	—			065	H-20	柱 穴	横円形	82×67	58		S B-292
027	G-21	方 形	—	—	—			066	H-20	柱 穴	横円形	137×115	11		
028a	G-20	(野窓穴)	横円形	72×68	25	26(±6)		067	H-20	柱 穴	横円形	75×72	14	(±1)	
028b	G-20	(土 坑)	横円形	45×40	20	(±5)		068	H-20	柱 穴	横円形	75×60	15		
029	G-20	溝	柱 坑	145×64	21			069	H-20	柱 穴	横円形	59×55	12		
030	G-20	土 坑	横円形	65×65	10			070	H-18/19	大 槌	横円形	25	55~70	68~69	
031	G-20	土 坑	柱 坑	35×35	8			071	H-18	—	—			(±5)	
032	G-20	土 坑	横円形	71×60	11			072	H-18/19	柱 穴	横円形	25×25	12		S I-291b
033	G-20	土 坑	横円形	36×23	8	49		073	H-1-19	土 坑	横円形	53×40	35		S D-70跡を切る
034	G-20	土 坑	横円形	34×20	12			074	—	—	—				
035	G-20	土 坑	横円形	33×30	11			075	I-19	ビット	柱 穴	45×43	23	(±3)	
036	G-20	—	—	22×22	13			076	I-19	柱 穴	横円形	82×74	29	33~43	
037	G-20	土 坑	円 形	87×82	26	(55×38)		077	I-19	ビット	円 形	43×41	12	(±11)	
038a	G-20	土 坑	横円形	—	—										
038b	G-20	—	—	—	—										

番号	グリッド	種別	平面形	規格・長軸×短軸(厚度)mm	遺物	備考	参考
078	1-19	防護穴	円 形	72×69 (26×22)	27	S I -294	
078a	1-19	柱穴	円 形	33×28	15	S I -294	
078b	1-19	柱穴	楕円形	42×35	13/24	S I -294	
080	1-19	柱穴	円 形	45×43	8	S I -294	
081	1-19	柱穴	円 形	41×40	22 (±1)	S I -294	
082	1-19	柱穴	楕円形	(105×80)	18	S I -294	
083	1-19	柱穴	楕円形	64×46	27	S I -294	
084	1-19	柱穴	楕円形	103×96	20	S I -294	
085	1-19	柱穴	円 形	25×24	15	S I -294	
086	1-19	ピット	円 形	(38×36)	10	S I -295	
087	1-19	柱穴	円 形	34×31	18	S I -295	
088	1-20	柱穴	円 形	88×73	17	S I -295	
089	1-20	柱穴	円 形	92×88	14	16×28×39	
090	1-19	柱穴	円 形	40(±12)	40 (±12)	S I -295	
091	1-19	ピット	楕円形	39×31	11	S I -295	
092	1-19	柱穴	円 形	27×23	4	S I -295	
093	1-19	柱穴	円 形	30×26	19	S I -295a	
094	1-19	柱穴	円 形	35×33	30 (±2)	S I -295a	
095	1-19	柱穴	円 形	40×40	32/37 11·19	テラス SI-295b	
096	1-4-19	柱穴	円 形	37×33	16	S I -295b	
097	1-4-19	柱穴	円 形	23×23	18	S I -295a	
098	1-4-19	柱穴	円 形	26×25	24	S I -295a	
099	1-19	柱穴	円 形	24×20	12	S I -295b	
100	1-19	柱穴	円 形	29×27	7	S I -295a	
101	1-19	柱穴	円 形	27×25	30	S I -295a	
102	1-19	柱穴	円 形	22×21	7	S I -295b	
103	1-18	柱穴	楕円形	101×84	30 (±3)	S I -295b	
104	1-18	ピット	円 形	27×25	11	S I -295	
105	1-18	柱穴	楕円形	32×29	21 (±1)	S I -295	
106	1-18	柱穴	楕円形	25×178 (50×30)	6 [フレーク]	S I -295	
107a	J-19	柱穴	円 形	77×54	43 (±7)	溶洞物質付落穴出力	
107b	J-19	柱穴	楕円形	38×24	12	S I -295b	
108	J-19	ピット	円 形	21×20	10	S I -295	
109	J-19	ピット	円 形	40×25	16	S I -295	
110	J-19	ピット	円 形	33×32	23 (±2)	S I -295	
111	J-19	柱穴	円 形	29×27	12	S I -295	
112	J-19	柱穴	楕円形	77×54	43 (±7)	S I -295b	
113	J-19	ピット	円 形	38×24	12	S I -295a	
114	J-19	柱穴	楕円形	21×20	10	S I -295b	
115	J-20	柱穴	楕円形	40×25	16	S I -295b	
116	J-20	土 塹	不定形	32×51	11	S I -295a	
117a	J-20	土 塹	楕円形	(195×74)	14	S I -295b	

番号	グリッド	種別	平面形	規範長軸・短軸(度cm)	遺物	備考	番号	グリッド	種別	平面形	規範長軸・短軸(度cm)	遺物	備考		
159	J-21	ピット	円形	30×32	10	57	203	K-21	柱穴	円形	30×30	19	S1-304a		
160	J-21	ピット	横円形	30×11	11		201	K-21	柱穴	円形	25×22	12	S1-304b		
161	J-21	柱穴	円形	30×30	11		202	K-22	柱穴	円形	23×21	15	S1-304b		
162a	J-21	方形状	100×97	27×17	19		203	K-22	柱穴	横円形	22×27	12			
162b	J-21	方形状	100×97	27×17	19	(3×4×32)	204	L-21	ピット	柱穴	20×18	8			
163	J-21	柱穴	横円形	30×18	16		205	L-22	ピット	横円形	10×10	9			
164	J-21	柱穴	方形状	25×21	18		206	L-22	ピット	柱穴	17×15	7	S1-304c		
165	J-21	柱穴	円形	26×25	18		207	L-22	ピット	柱穴	18×17	9	S1-304c		
166	J-21	柱穴	横円形	32×28	15		208	L-22	柱穴	柱穴	18×17	8	S1-304b		
167	J-21	柱穴	横円形	33×29	8		209	L-22	柱穴	柱穴	17×16	11	S1-304b		
168	J-21	柱穴	円形	22×18	8		210	L-22	柱穴	横円形	25×19	7	S1-304a		
169	J-21	柱穴	円形	30×29	17		211	K-22	柱穴	柱穴	20×45	15	5×30×56		
170	J-21	柱穴	円形	30×28	11		212	K-22	柱穴	柱穴	18×17	8	S1-304c		
171	J-21	柱穴	横円形	38×23	18		213	K-22	ピット	柱穴	22×17	9	S1-304b		
172	J-21	柱穴	円形	25×21	12		214	K-22	柱穴	横円形	20×20	9	S1-304b		
173	J-21	柱穴	円形	30×18	9		215	K-22	柱穴	柱穴	15×15	10	S1-304b		
174	J-21	柱穴	横円形	27×22	11		216	K-22	柱穴	柱穴	33×32	15	41×45		
175	J-21	柱穴	円形	24×21	9		217	K-22	柱穴	柱穴	26×21	10	S1-304a-S1-304b		
176	J-21	柱穴	横円形	28×24	20		218	K-22	柱穴	柱穴	20×45	15	S1-304c		
177	J-21	柱穴	円形	22×20	24		219	K-22	柱穴	横円形	29×23	16	S1-304b		
178	J-21	柱穴	円形	30×25	18		220	K-22	柱穴	柱穴	25×23	15	S1-304a		
179	J-21	柱穴	円形	23×21	7		221	K-22	柱穴	柱穴	30×23	11	S1-304a		
180	K-21	柱穴	円形	19×17	8		222	K-22	柱穴	柱穴	21×18	11	S1-304a		
181	K-21	柱穴	横円形	25×20	6		223	K-22	柱穴	柱穴	23×31	16	S1-304a		
182	K-21	柱穴	円形	29×20	20		224	K-22	柱穴	柱穴	30×29	16	S1-304b		
183	K-21	柱穴	横円形	25×20	17		225	J-K-22	ピット	柱穴	柱穴	23×19	11	17	
184	K-21	柱穴	円形	38×35	27		226	K-22	柱穴	横円形	40×31	24	S1-304b		
185	K-21	柱穴	横円形	30×24	10		227	J-22	柱穴	柱穴	20×17	13	S1-304a		
186	K-21	柱穴	円形	30×17	17		228	J-22	柱穴	柱穴	24×24	11	S1-304a		
187	K-20	柱穴	横円形	23×16	9		229	J-22	柱穴	柱穴	33×33	21	S1-304a		
188	K-20	柱穴	円形	22×20	13		230	J-22	柱穴	柱穴	25×21	13	S1-304b		
189	K-20	柱穴	横円形	49×42	33./39		231	J-22	柱穴	柱穴	44×38	12	S1-304c		
190	K-21	柱穴	横円形	43×35	34	14×23~2 46±20)	232	J-22	柱穴	柱穴	33×30	13	S1-304b		
191	K-21	柱穴	横円形	63×53	9		233	J-22	柱穴	柱穴	16.5×76	22	1×22		
192	K-21	柱穴	横円形	126×107	11		234	J-22	柱穴	柱穴	48×42	31	58×61×62		
193	K-21	柱穴	横円形	26×34	28		235	H-22	柱穴	柱穴	28×25	39	9×30×31 (上.5)		
194	K-21	柱穴	横円形	42×35	31		236	H-22	柱穴	柱穴	47×45	14/20	6×30±15		
195	K-21	柱穴	円形	30×29	14		237	J-20	柱穴	横円形	28×15	36	S1-304c		
196	K-21	柱穴	円形	20×18	9		238	K-22	柱穴	柱穴	28×27	18	S1-304a		
197	K-21	柱穴	円形	33×32	32		239	K-22	柱穴	柱穴	57×49	17	S1-304a-S1-304b		
198	K-21	柱穴	円形	30×30	10		240	J-22	柱穴	柱穴					
199	K-21	柱穴	円形	35×25	12										

番号	名前	種別	柱穴番号	横断面×奥行きmm	主軸方位	遺物	備考
290	G・H・19	(住居跡)	39-40・279-45	(394×213)	N-62°-W		図版16
291a	H・I・19	住居跡	49-51・53-255 +276	334×371	N-4°-E		図版16
291b	H・I・19	(住居跡)	51-272 +255-255	451×314	N-6°-W		図版16
292	I・20	建物跡	56-57・59-61・ 62-64・45-277	333×96	N-74°-W	63-64-67	図版16
293	I・20	(住居跡)	88-185・253	402×220	N-3°-E		図版16
294	I・19	住居跡	79-81・82*	(226×249)	N-38°-E		図版16
295	I・19・20	住居跡	92-93・115 +119-122	372×340	N-15°-E		図版16
296a	I・19-20	住居跡	91-97-100	405×194	N-33°-W		図版16
296b	I・J・19	住居跡	101・121	314×220	N-35°-W	11・19	図版16
297	J・20	住居跡	128-130・132 +133-135	488×310	N-7°-W		図版15
298a	I・J・21	住居跡	149-151・154	330×431	N-35°-W		図版16
298b	I・J・21	住居跡	157・161	330×452	N-27°-W	29-55	図版16
299a	J・21	住居跡	148-151・153 +158-161	478×342	N-67°-E		図版15
299b	J・21	住居跡	144-147・156 +161-164	454×388	N-49°-E	18	図版15
300	J・21	(住居跡)	163-165 +169-172・176	(382×328)	N-68°-E		図版15
301a	J・21-22	住居跡	173-177-223	469×402	N-10°-E		図版15
K-22		住居跡	227-240				
301b	I・21-22	住居跡	174-178-240	468×391	N-6°-E		図版15
K-22		住居跡	+224-240				
302	K・21	(住居跡)	182-183・184	(336×196)	N-35°-E		図版15
303	K・20-21	住居跡	185-189・195	(466×343)	N-34°-E	47-48	図版14
304a	K・L-22	住居跡	+197				図版15
304b	K・L-22	住居跡	200-210-214 +218-220	362×428	N-11°-W		図版15
304b	K・L-22	住居跡	+209-210-215 +218-219	326×400	N-8°-W		図版15
304c	K・L-22	住居跡	+206-212-218 +238-239	322×232	N-35°-E		図版15

番号	グリッド	種別	平面形	横板	長板	面積/面積(面積)	cm	遺物		備考
								(±1)	10	
241	H-19	前方欠柱式	梯形	80×—	42					S I -291b
242	H-19	前方欠柱式	梯形	45×30 (60×54)	28					S I -291b
243	H-19	柱一坑	梯形	17	—					S I -291b
244	(大番)	—	—	—	—					S I -291b
1	H-18	ピット	梯形	X	63					
250	H-18	ピット	梯形	49×30	41					
251	H-18	ピット	円形	18×18	35					
252	H-18	ピット	円形	20×17	19					
253	H-18	柱欠	梯形	32×29	15					
254	H-19	ピット	梯形	14×10	30					
255	H-19	柱欠	梯形	15×15	20					
256	H-19	ピット	梯形	(20×17)	34					
257	H-19	ピット	梯形	21×14	—					
258a	H-19	ピット	梯形	37×25	26					
258b	H-19	ピット	梯形	42×35	33					
259	H-19	ピット	梯形	24×15	37					
260	I-19	ピット	円形	31×30	70					S I -293
261	I-19	柱一坑	梯形	33×25	22					S I -293
262	I-20	柱欠	梯形	27×35	30					S I -293
263	I-20	柱欠	梯形	35×30	45					S I -293
264	I-20	柱一坑	梯形	(32×35)	57					
265	I-20	柱一坑	梯形	35×30	51					
266	I-20	ピット	円形	32×30	37					
267	I-20	ピット	円形	29×26	12					
268	I-20	ピット	円形	30×27	47					
269	H-19	ピット	梯形	30×22	34					
270	I-21	柱欠	梯形	60×38	117					
271	I-21	土一坑	梯形	173×112	35					
272	I-21	土一坑	梯形	40×38	71					
273	I-21	ピット	円形	42×39	—					
274	I-21	ピット	円形	27×25	21					S I -294
275	I-22	柱欠	円形	21×20	5					S I -294
276	H-19-20	柱欠	梯形	44×35	12					S I -294
277	H-19-20	ピット	梯形	26×26	9					S I -294
278	G-19	柱欠	梯形	42×—	16					S I -297
279	H-19	ピット	円形	37×23	19					S I -294
280	H-19	柱欠	梯形	25×23	28					S I -294
281	H-20	ピット	円形	37×37	28					S I -294
282	J-20	柱欠	梯形	—	—					
283	I-19	—	—	—	—					
284	(大番)	—	—	—	—					
285	I-	—	—	—	—					
286	—	—	—	—	—					

らないぐらに離れている。付近には、これ以外にピットは検出されていないが、検出されていないピットの存在を考慮する必要があるかも知れない。

S I - 297住居跡(128・130・132・133・282) 間口が面する南側へ緩く傾斜する位置から検出された。規模については、間口側が既して広く、奥柱よりも右側の側柱が張り出すプランとなる。貯蔵穴と考えられる土坑が住居プラン内に1基(131)、また柱間に接して2基(134・136)が検出されている。このうち、S K - 136土坑については、本住居の柱穴と重複しており、同時存在の可能性は薄い。また、付近には幾つかのピットが検出されており、1~2棟ほどの住居と重複している可能性がある。

S I - 298住居跡群 広場の南東側に接した位置にあり、確認面はほぼ水平で平坦である。ほぼ同じ柱穴配置を呈する2棟の住居が、ほとんど位置を変えずに重複する。中央に貯蔵穴を伴うとともに、柱穴を2個(151・161)共有する。

298 a 住居跡(149・151・154・157・161)は、柱穴の配置が野球ベース形を呈し、奥柱がかなり外側へ張り出す。その結果、頂部の角度が直角よりも鋭くなり、間口側よりも奥行が長くなっている。また側柱の間隔は、西側より東側が長く、形態的には不正形であった。298 b 住居跡(148・151・153・158・161)の柱穴配置は、198 a 住居跡と比較すれば、頂部の角度がわずかに鈍角となり、東西側柱間の差も若干小さくなっているが、基本的には互いに近似したプランを呈する。規模についてもほぼ同じである。このため、この2棟の住居は、ほぼ連続して建て替えられた可能性が想定できる。

S I - 299住居跡群 S I - 298住居群の南西側に近接して検出され、地形も南西側にやや傾斜した位置にある。299 a 住居跡(144・147・156・164・166)と、299 b 住居跡(143・147・156・163・165)の2棟が重複するが、その度合いも高く、その位置の移動は小さい。共有する柱穴は2個(147・156)である。間口側は、おおむね南北方向の斜面下方を指向する。両者の柱穴配置はおおむね近似し、奥柱の位置が北西側の側柱側に偏る。南西側側柱については、299 a 住居の間隔が299 b 住居より狭く、その結果、頂部の角度は299 b 住居のほうが若干鈍角を呈する。S I - 298住居跡と同様連続的に建て替えがなされた可能性を指摘できる。なお、S I - 298住居とは1mほどの距離しか離れていないため、屋根を葺いた場合、互いに同時存在できる余地がなくなる可能性が高い。

貯蔵穴については、柱穴配置の中央に1基(162 a)、また北西側側柱間に1基(145)が検出されており、当該住居にそれぞれともなっていた可能性が考えられるが、個々に特定することはできなかった。

S I - 300住居跡(169・172・176・179) 広場の南東側に位置し、地形的には南に延びる尾根筋の緩斜面に所在する。S I - 299住居跡群とS I - 301住居跡群の中間にいて、両者と重複した関係で検出された。ただし、確認できた柱穴は4個であり、間口側については不明確である。想定される柱穴の配列は、比較的整った将棋の駒形を呈している。

S I - 301住居跡群 広場の南東側に位置し、南へ延びる尾根筋上の緩斜面から検出された。2棟の住居の重複であり、1個の柱穴(240)を共有する。2棟の平面形については、全体としては定形さに欠け、奥柱が中央外側に張り出し、頂部の角度は直角よりも若干鈍角となる。ただし、側柱の間隔は、301 a 住居跡(173・177・223・227・240)よりも、301 b 住居跡(174・178・224・226・240)が短く、したがって頂部の角度もS I - 301 b よりやや鋭角となる。付近からは大形土坑が検出されておらず、貯蔵穴は付随していない住居と考えられる。また、柱穴の配置が互いに類似することから、互いに繼承しつつ建て替えられた可能性が考えられる。

S I - 302住居跡(169・172・176) S I - 300住居跡の南側の緩斜面から検出された。確認できた柱穴

は、奥柱側の頂部をなす3個の柱穴のみであり、斜面下方となる間口側については明らかにできなかった。想定される柱穴の位置は、比較的整った将棋の駒形と考えられる。同じ平面形となるS I - 300住居跡との同時存在の可能性については、互いに2mほどの間隔があることから否定できない。貯蔵穴については確認されていない。

S I - 303住居跡 (185・189・195・197) 中央の広場からやや距離をおいた斜面下方に位置し、台地の縁に近いところから検出された。柱穴は4個であり、間口側が斜面下方に面する。しかし、頂部に位置する奥柱については、確認されていない。推定される柱穴の配置については明らかにし得ないところもあるが、奥柱が外側へ張り出した場合は、S I - 295住居跡に近いプランを呈するものと考えられる。貯蔵穴と考えられる土坑は2基 (191・192) 検出されており、場合によっては住居が重複していた可能性もある。

S I - 304住居跡群 広場から離れた尾根筋の緩斜面において検出された。将棋の駒形をした住居跡3棟の重複と考えられる。貯蔵穴1基を確認しているが、その位置からすれば304a住居と304b住居との関わりが想定できる。さらに、両住居の形態が極めて類似し、かつ柱穴1基(218)を共有することからすれば、貯蔵穴を引き継ぎつつ、住居を建て替えた可能性も考えられる。304b住居跡 (202・209・215・218・219) は、304a住居跡 (200・210・214・218・220) の内側に沿って、南側に若干ずれて推定されている柱穴列の配置からも、両者の関わりの強さが示されていると考えられる。

なお、304c住居 (208・212・218・238・239) については、前2住居より奥行がせまく、また間口側の指向する方位も西側へ大きく傾いており、形態的な近似性は認められるが、時間的には若干の隔たりが想定できる。ただし、当該住居群において想定された3棟は、すべて1基(218)の柱穴を共有することになるが、SKp-218そのものは直径も小さく深度も浅いピットであり、多少の無理が伴っている。未検出の柱穴を考慮する必要があるのかも知れない。

その他の住居跡 今回ある程度推定可能な住居跡は、不確実な事例を含めて21棟となったが、これら以外にも比較的多くの柱穴と考えられるピットが検出されている。また、貯蔵穴と推定される土坑についても、住居プラン内に位置するものと、周囲に柱穴が希薄なところから検出されているものなどがある。貯蔵穴について、すべて住居プラン内にあったと断定できず、屋外にも設定されていた可能性は充分に考えられるが、検出できなかった住居が存在する可能性も想定しておきたい。

c 土 坑 (図版17~18)

土坑とした遺構は、貯蔵穴もしくはその可能性が高いものと、墓坑と考えられるものを主な対象とし、これら以外に、柱穴やそれに類するピットに含められなかつた穴を一括する。そのため、性格の明らかでないもの、遺構の可能性の低いものなどが一部含まれる。本項では、貯蔵穴類と墓坑を主に記述する。

なお、土坑とピットの類別については、土坑の意味が大地に穿たれた所謂「穴」の総称であり、原則的にはピットと同じ意であることから、元来区分できるものではない。ここでは、柱穴あるいはそれに類する穴をピットとし、それ以外を土坑としておくが、厳密な意味で使い分けや区分とはなっていないことをお断りしておきたい。ちなみに、今回貯蔵穴類とした土坑は26基、墓坑は1基であり、これら以外の土坑48基を合わせた土坑総数は75基である。

墓 坑 調査区の東端、I-22③④グリッドから検出されたSK-233土坑が本遺跡唯一の墓坑と考えられる土坑である。地形的には、東へ緩やかに傾斜が始まる地点であり、調査区の境界に接するため、付近におけるほかの墓坑の存在は明らかでない。滑車形土製耳飾り2点が出土したことから墓坑と断定した。

墓坑の平面形は、おおむね隅丸長方形を呈し、長辺が1.05m、短辺は0.76mを計ることから、遺体は成

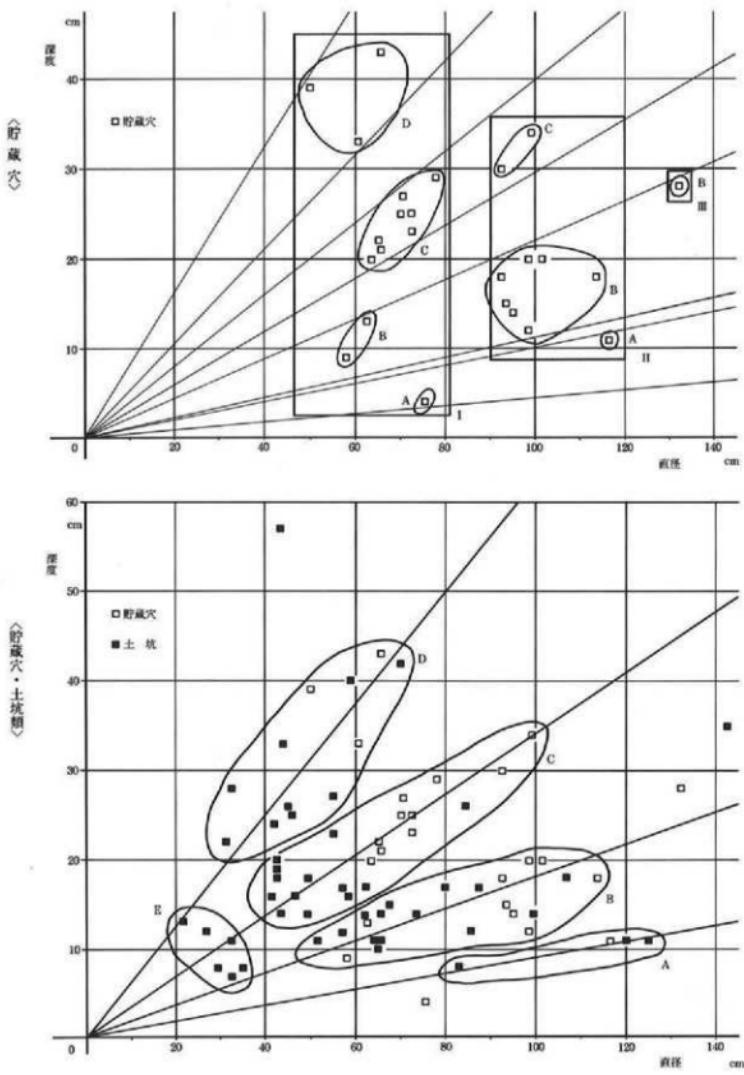
人が埋葬されていた可能性が高い。しかし、深度は22cmと浅いことから、上部がかなり削平されていたとしても、小マウンドなどの盛土がなされていないと、遺体總てを覆うことができないと考えられる。尾振坂遺跡の土壇墓（0.81×0.70m）についても、深度は16cmほどしかなく【柏崎市教委1996】、本遺跡例との共通性が認められる。時期的にも近似することから、当時の埋葬形式を示唆する可能性を指摘しておきたい。遺物は、耳飾り外にほぼ完形の土器頬が出土しているが、骨片等は未確認である。

貯蔵穴類 貯蔵穴と判断した土坑と、貯蔵穴の可能性が高いものを含め、貯蔵穴類とした。ただし、貯蔵されていたと考えられる堅果類などの食料は、遺物として一切検出されていないため、貯蔵穴として考古学的に確認された訳ではなく、貯蔵穴という理解が妥当と判断したものである。平面形は、おおむね円形が大半を占めるが、楕円形や方形を呈するものがあり、また円形状を呈するが一部の弧が直線的となるものなどが認められる。底面は概して平坦であり、覆土の堆積状況は下層を中心に地山ブロックが混入する度合いが高く、上層ではおおむね暗色土が自然堆積していた。貯蔵穴類の法量分布については25基を掲載したが（第5図）、直径と深度による細別ではおおむね8類に分けることができる（第5表）。

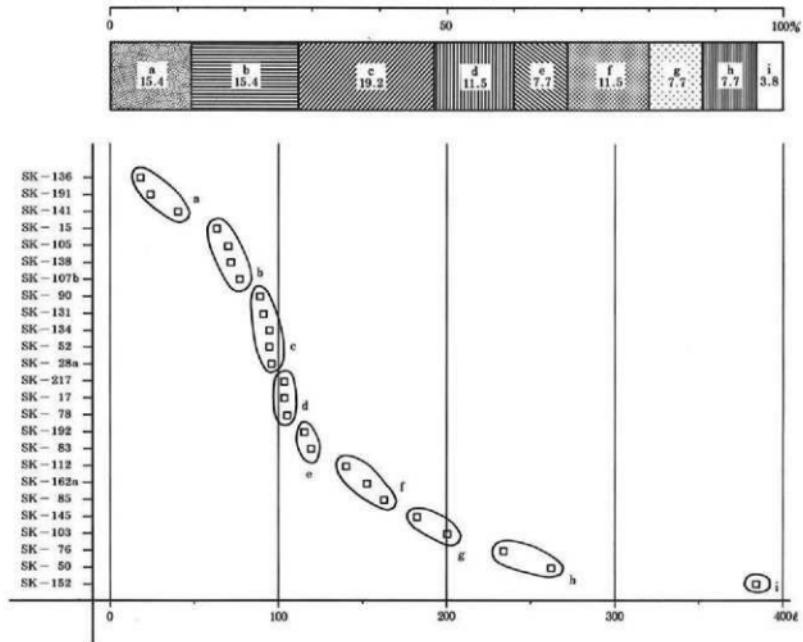
まず、直径における分類では、大きく3群に区分できる。第I群は、直径45cm以上80cm未満の規模を有するもので、その基数は14基と全体の5割余りを占め最も多い。第II群は、おおむね90cm以上120cm未満程度の規模を有し、総基数10基と4割を占めていた。第III群は、1基のみ検出されていたもので、直径130cmを超える規模の大きなものである。深度における分類は、直径に対する深度の割合を視点にすれば、おおむね4類に分類して理解することができる。A類は、直径に対する深度の比率が、おおむね0.05～0.10の範囲にあるものであり、概して深度が浅い。本類に含まれる貯蔵穴も2基だけと少ない。B類における比率は、0.12～0.22の値で示されるが、値の幅がやや大きく、またA類に近接することから、事例が増えた段階に再度検討する必要があるかも知れない。該当する貯蔵穴は10基であり、全体の4割を占める。C類は、0.31～0.39の幅に亘り、比較的ばらつきが少ない。該当する貯蔵穴もB類と同数となる10基にのぼることから、最も一般的なタイプとなる可能性が高い。D類は、直径に比して深度が深くなるタイプで、その比率も0.54～0.80となりB類と同様にやや幅を持っている。3基ほどが該当するが、数が少なくまとまりに欠け、場合によっては細分も考慮しておく必要がある。なお、その他の土坑を含めた場合

直 径 深 度	I 群	II 群	III 群	基 数	備 考 (深度 = a × 直径)
A 群	136	192	—	2	a = 0.05～0.10
B 群	141・191	83・85・131・145 162a・190・217	152	10	a = 0.12～0.22
C 群	15・17・28a・52・76 78・105・138	50・103	—	10	a = 0.31～0.39
D 群	107b・112・134	—	—	3	a = 0.54～0.80
基 数	14	10	1	25	
備 考	45～80cm	90～120cm	130cm～		

第5表 大沢遺跡貯蔵穴分類表



第5図 大沢通路貯蔵穴・土坑法量分布図



第6図 大沢遺跡貯蔵穴類容量分布図

でも、A～D類の比率が看取できる。各貯蔵穴類における容量については、第6図に掲げたが、全体ではSK-136の約18ℓを最少として、最大はSK-152のおよそ383ℓまでと、かなり大きな幅がある。分布図上での群別では、a～iまでの8小群が見いだせるが、一定の容量で安定するのは100ℓ付近であり、60ℓ～120ℓまでのb～c～d～e小群には14基、56%が集中する。この程度の数値がどれくらいの意味を持つのかは明らかにし得ない。しかし、これら土坑を貯蔵穴とすれば、越冬用の堅果類などを保存することが主な目的と考えられる。その場合、住居内に設けられていたとすれば、居住者全員の必要量との関わりが存在するものと考えられる。なお、各貯蔵穴の容量については、法量分布で最も一般的なI群C類やII群B類で、おおむね60ℓ～160ℓ程の容積のものが多くなっている。

ところで、貯蔵穴と推定した土坑の深度については、深いものでも40cmを超えるものは1基のみであり、大半は10～30cmという深度のもので占められている。その場合、深度が20cm程度では確保される食料の数量に限界があり、また効率的にはかなり低いように思えてならない。これらの中には、住居内に設定されていたと考えられる事例が含まれるが、越冬した可能性が高いにもかかわらず炉跡が一切検出されていないこと、さらに墓坑の深度が浅いことなどを考え合わせると、床面を含めかなり削平されたり、あるいは地表の土砂が流出していた可能性を考慮する必要があるのかも知れない。

3) 出土遺物

大沢遺跡A地点とした縄文集落域からは、縄文時代の遺物として、縄文土器を主体に土製品や石器類が出土している。本項では、これらの種別にしたがい概要をまとめたい。なお、縄文土器類における個別の属性等については、第6表（p.32）にまとめたので参照されたい。

a 縄文土器（図版20～22）

出土状況 本遺跡から出土した縄文土器は、およそ250点余りを数える。しかし、ある程度器形までうかがえる個体となると4点ほどでしかなく、その他の大半は破片資料であり、摩滅した細片が多いことから、図示できたものは60点にとどまった。これらの出土位置は、集落内において、遺構が希薄な北東部から広場での出土がなく、遺構の密度の高い区域において出土している。これは、遺物の大半が遺構内から出土していることと密接に関わるが、遺物包含層を表土とともに、重機にて除去していることも大きな要因である。しかし、試掘調査の結果では、包含層内から出土する遺物が少ないことが確認されており、基本的には遺物の少ない集落であった可能性が高い。ただし、不用物等の廃棄場が確認されていないことから、遺物の全体的総量は明確でない。

今回、供伴関係が確認された事例としては、SK-233土坑（1・2・27・58）とSK-162土坑（3・4）の2例を掲げることができる。前者のSK-233土坑からは、2個体の完形品（1・2）が出土したが、その上層位から滑車形土製耳飾2点（64・65）が検出されており、墓坑と考えられる事例である。出土土器は、鉢と深鉢の2器種であるが、ともに小形品であり、文様構成についても、全体が3単位とされるなど両者は類似する。後者のSK-162（a）土坑は、SI-299住居に伴うと考えられる貯蔵穴である。2個体が出土した土器の器種は、やや大形の深鉢と小形の有孔鉗付土器であった。

なお、これら以外の遺構出土土器類については、総て破片資料であることから、供伴関係等は詳らかでないが、主に貯蔵穴と考えられる土坑からの出土が目立っていた。

焼成と色調 縄文土器の依存状況は、酸性土壤の蔓延する台地から出土したためか、余り状態は良くなく、摩滅の著しいものが多い。焼成についても、総じて焼成が甘いように見受けられ、普通程度から良好なものというと多くない。色調は、橙色系のものが大半を占め、灰褐色系・赤褐色系・黒褐色系などのものが少量認められる。

胎土とその分類 土器の製作にあたっては、まず粘土が採取され、これに砂粒等を混ぜて調整し、その素地とすることが一般的に言われている。このため、土器の胎土は粘土の採取地と、混ぜられる混和材によって特徴付けられることが予想できる。しかし、採取された粘土そのものは、焼成段階におけるさまざまな条件によって、同じ素材でも色調や硬軟などが異なる。そこで今回は、主に肉眼で観察可能な混和材に注目し、その組合せ等を目安にして胎土の分類を試みておきたい。

まず、抽出できた混和材とは、A：硬質砂粒・B：橙色土粒・C：褐色土粒・D：白色岩粒の4種類である。Dとした白色岩粒は、大沢遺跡では特別目立つ存在ではなく、これが含まれる事例は少なかったが、むしろ雨池遺跡で目立つものである。Aの硬質砂粒とは、一般的な砂粒を意味する。詳細に見れば細分が可能であるが、その組成比までを識別するまでは至らなかったため、今回は一括的に取り扱う。Cについて、その色調からすれば幾種類かに細分は可能であるが、そのバラエティーは出土土器の色調との関連がうかがわれることから、土器片を破碎したもの、もしくは焼土粒などと判断した。Cについては、色調からすれば土器粒等の可能性もあるが、粘土的な緻密さに欠け、むしろ水酸化鉄物類に含まれる褐鉄鉱に

第6表 大沢遺跡出土繩文土器観察表

番号	出土位置	遺構番号	分類	縄文原体	色調	焼成	土 色 和 材				備考
							硬質砂	褐色土	白色土	白色岩粉	
1	I-22	SK-233	第1類	(LR)	褐	不良	-	*	△	-	第11類
2	I-22	SK-233	第1類	LR	褐	普通	-	△	△	-	第11類
3	J-21②	SK-162	第4類	—	にぶい緑	良	△	△	△	-	第3類
4	J-21②	SK-162	第1類	—	褐	良	*	△	•	-	第11類
5	K-22⑨	SD-211	第1類	—	にぶい緑	普通	*	○	△	-	第8類
6	I-22⑨	SKp-237	第1類	—	褐	普通	△	*	•	-	第11類
7	I-21	—	第1類	—	にぶい黄褐	普通	△	*	•	-	第11類
8	—	—	第1類	—	褐	普通	*	-	-	-	第11類
9	H-22⑨	SKp-235	第1類	L	にぶい緑	普通	*	○	•	-	第7類
10	H-19	SKp-243	第1類	—	明赤褐	不良	△	-	-	-	第1類
11	I-19②⑨	SKp-162	第1類	—	褐	普通	-	○	○	-	第8類
12	J-20②	SKp-138	第1類	—	にぶい緑	普通	-	○	△	-	第8類
13	E-19②	SK-9	第1類	—	褐灰	普通	*	△	△	-	第8類
14	K-21②	SKp-190	第1類	—	褐	普通	*	○	—	-	第7類
15	—	—	第1類	LR	明赤褐	不良	*	○	○	-	第8類
16	I-19②⑨	SKp-95	第1類	—	褐	不良	-	△	○	-	第8類
17	M-22⑨	SKp-235	第1類	—	便	不良	*	-	○	-	第9類
18	J-21②	SKp-156	第1類	LR	にぶい赤褐	普通	-	○	○	*	第9類
19	I-19②⑨	SKp-95	第1類	LR	にぶい緑	普通	*	○	○	-	第8類
20	J-21②	SKp-178	第1類	LR	明赤褐	不良	-	○	—	-	第7類
21	—	—	第1類	LR	にぶい黄褐	普通	*	○	•	-	第7類
22	I-21	—	第1類	—	褐	普通	-	*	•	-	第11類
23	K-21②	SKp-190	第1類	—	にぶい緑	普通	-	○	•	-	第7類
24	K-21②	SKp-190	第1類	LR	褐	不良	*	○	△	-	第8類
25	K-21②	SKp-190	第1類	L	にぶい緑	普通	*	○	•	-	第7類
26	G-19②	SKp-27	第1類	—	—	普通	*	-	△	-	第11類
27	I-22	SK-233	第2類	LR	明赤褐	不良	*	○	△	-	第8類
28	I-19	SK-90	第2類	LR	褐	普通	-	*	•	-	第7類
29	J-21②	SKp-151	第3a類	L	にぶい緑	普通	-	○	△	-	第8類
30	H-22⑨	SKp-235	第3a類	L	にぶい緑	普通	-	△	△	-	第8類
31	H-22⑨	SKp-235	第3a類	L	褐	普通	-	△	△	-	第8類
32	J-21②	SK-162	第3b類	結束羽状	にぶい緑	不良	○	*	△	-	第1類
33	I-19	SK-96	第3b類	結束羽状	明赤褐	不良	○	*	•	-	第1類
34	J-20②⑨	SK-154	第3c類	RL	にぶい黄褐	普通	○	-	•	*	第1類
35	J-21	SK-156	第3d類	LR	褐	不良	○	○	○	*	第3類
36	J-21	SK-152	第3c類	RL	明赤褐	不良	△	○	△	-	第3類
37	F-19	—	第3c類	RL	褐灰	普通	-	○	△	-	第8類
38	—	—	第3c類	RL	にぶい黄褐	皮	○	-	-	-	第1類
39	I-19②	SK-90	第3d類	LR	褐	不良	-	○	○	-	第8類
40	I-19	SK-90	第3d類	LR	褐	不良	-	○	△	-	第8類
41	K-22	SK-217	第3d類	LR	灰黃褐	不良	-	○	△	-	第8類
42	J-20②	SK-153	第3d類	LR	灰	不良	△	△	•	△	第3類
43	I-19	SK-76	第3d類	LR	褐	不良	△	○	•	*	第7類
44	—	—	第3d類	LR	にぶい緑	皮	○	-	-	-	第8類
45	K-22⑨	SK-217	第3d類	L	灰褐	普通	*	△	△	-	第8類
46	K-21②	SKp-190	第3d類	LR	にぶい緑	普通	-	*	△	-	第11類
47	K-21②⑨	SKp-197	第3d類	L	にぶい緑	不食	△	△	○	-	第3類
48	K-21②⑨	SKp-197	第3d類	L	にぶい黄褐	不食	*	△	-	-	第11類
49	I-22⑨	SK-33	第3d類	(LR)	褐	不食	*	△	-	-	第11類
50	K-22⑨	SD-211	第3d類	LR	黑褐	普通	-	△	•	-	第11類
51	J-19②	SK-107	第3d類	LR	にぶい黒	不良	△	△	△	△	第3類
52	J-21②⑨	SK-152	第3d類	LR	赤褐	不食	○	-	-	-	第1類
53	G-19②	—	第3d類	LR	にぶい緑	不食	*	△	•	-	第11類
54	J-21②⑨	SK-152	第3d類	LR	明赤褐	不食	○	-	-	-	第1類
55	J-21②⑨	SKp-151	第3f類	不明	灰黃褐	不食	*	•	○	*	第9類
56	K-22⑨	SD-211	第3f類	不明	灰黃褐	不食	*	○	○	-	第8類
57	J-21②⑨	SKp-159	第3e類	無文	にぶい黄褐	不食	*	○	—	-	第7類
58	I-22	SK-233	第3d類	LR	褐	不食	*	△	-	-	第11類
59	I-22⑨	SKp-237	第3e類	無文	にぶい緑	不食	*	△	○	-	第8類
60	F-19	—	第3f類	不明	灰黃褐	不食	*	△	○	-	第8類

粘土含有物 ○: 多量 ◎: やや多い △: 少量 •: 微量 -: ほとんど含まない

第7表 大沢遺跡出土縄文土器胎土分類観察表

番号	出土位置	遺物番号	分類	縄文原体	色調	施成	胎 土 混 合 材				備 考
							硬質砂粒	褐色土粒	白色土粒	黑色土粒	
3 4	J-20(3)9	S K-134	第3e類	R L	にぶい褐色	普通	◎	-	*	*	基盤材少含む
3 8	J-21(3)9	S K-162	第3b類	褐色羽状 施成	にぶい褐色	普通	○	○	△	△	第1類
3 2	J-19(3)9	S K-76	第3b類	褐色羽状	にぶい褐色	普通	○	●	●	●	5.5cm×2.5cm・高さ12.8cm・底径6.6cm
3 3	J-21(3)9	S K-152	第3d類	L R羽状	赤褐色	普通	○	○	●	●	5.5cm×2.5cm・高さ12.8cm・底径6.6cm
3 4	J-21(3)9	S K-243	第1類	褐色羽状	にぶい褐色	普通	△	-	-	-	5.5cm×2.5cm・高さ12.8cm・底径6.6cm
3 5	J-21	S K-152	第3d類	L R	褐色	不良	○	○	○	*	表面有裂隙
3 6	J-21(3)9	S K-162	第3d類	R L	にぶい褐色	不良	△	△	△	△	表面有裂隙
3 7	K-21(3)9	S K-197	第3c類	L R	にぶい褐色	不良	○	○	△	△	表面有裂隙
3 1	J-19(3)9	S K-107	第3d類	L R	にぶい褐色	不良	△	△	△	△	5.5cm×2.5cm・高さ12.8cm・底径6.6cm
3 2	J-20(3)9	S K-131	第3d類	L R	にぶい褐色	不良	△	△	△	△	5.5cm×2.5cm・高さ12.8cm・底径6.6cm
4 3	I-19	S K-76	第3d類	L R	褐色	不良	△	○	○	*	表面有裂隙
4 4	H-22(3)9	S K-255	第1類	L	にぶい褐色	普通	○	○	○	○	表面有裂隙
4 4	K-21(3)9	S K-190	第1類	L R	褐色	不良	○	○	○	○	表面有裂隙
2 0	J-21(3)9	S K-178	第1類	L R	にぶい褐色	普通	○	○	○	○	表面有裂隙
2 3	K-21(3)9	S K-190	第1類	L R	にぶい褐色	普通	○	○	○	○	表面有裂隙
2 5	K-21(3)9	S K-190	第1類	L R	にぶい褐色	普通	○	○	○	○	表面有裂隙
2 6	J-21(3)9	S K-159	第3e類	褐色羽状	にぶい褐色	普通	○	○	○	○	表面有裂隙
2 8	I-19	S K-90	第2類	L R	にぶい褐色	普通	○	○	○	○	表面有裂隙
3 9	I-19(3)9	S K-95	第1類	L R	にぶい褐色	普通	●	○	○	○	褐色土粒やや多く含む
3 9	I-19(3)9	S K-90	第3d類	L R	褐色	普通	●	○	○	○	褐色土粒やや多く含む
3 6	K-21(3)9	S K-111	第1類	L R	褐色	普通	●	○	○	○	褐色土粒やや多く含む
2 4	K-21(3)9	S K-190	第1類	L R	にぶい褐色	普通	●	○	○	○	褐色土粒やや多く含む
5 5	D-211	S D-211	第1類	L R	にぶい褐色	普通	●	○	○	○	褐色土粒やや多く含む
3 7	F-19	S K-237	第3e類	R L	褐色	普通	●	○	○	○	褐色土粒やや多く含む
5 9	I-22(3)9	S K-237	第3e類	R L	にぶい褐色	普通	●	○	○	○	褐色土粒やや多く含む
1 5	I-19(3)9	S K-95	第1類	L R	にぶい褐色	普通	●	○	○	○	褐色土粒やや多く含む
1 2	J-20(3)9	S K-136	第1類	L R	にぶい褐色	普通	●	○	○	○	褐色土粒やや多く含む
2 7	I-22	S K-235	第2類	L R	にぶい褐色	普通	●	○	○	○	褐色土粒やや多く含む
4 0	I-19	S K-90	第3d類	L R	褐色	普通	●	○	○	○	褐色土粒やや多く含む
4 2	K-22	S K-151	第3d類	L R	反青褐色	普通	●	○	○	○	褐色土粒やや多く含む
2 9	I-21(3)9	S K-151	第3d類	L R	にぶい褐色	普通	●	○	○	○	褐色土粒やや多く含む
1 6	I-19(3)9	S K-99	第3f類	L R	にぶい褐色	普通	●	○	○	○	褐色土粒やや多く含む
6 0	F-19	S K-99	第3f類	L R	不明	普通	●	○	○	○	褐色土粒やや多く含む
1 3	E-19(3)9	S K-9	第1類	L R	褐色	普通	●	○	○	○	褐色土粒やや多く含む
3 0	H-22(3)9	S K-235	第3a類	L R	にぶい褐色	普通	●	○	○	○	褐色土粒やや多く含む
4 4	K-22(3)9	S K-235	第3d類	L R	にぶい褐色	普通	●	○	○	○	褐色土粒やや多く含む
4 5	K-22(3)9	S K-217	第3d類	L R	反青褐色	普通	●	○	○	○	褐色土粒やや多く含む
1 7	M-22(3)9	S K-235	第1類	L R	褐色	普通	●	○	○	○	褐色土粒やや多く含む
1 8	J-21(3)9	S K-156	第1類	L R	にぶい褐色	普通	●	○	○	○	褐色土粒やや多く含む
3 3	J-21(3)9	S K-151	第3f類	L R	不明	普通	●	○	○	○	褐色土粒やや多く含む
6	I-22(3)9	S K-237	第1類	—	褐色	普通	△	●	●	●	口徑10.3cm・高さ13.7cm・底径6.0×5.5cm
7	I-21	S K-233	第1類	L R	にぶい褐色	普通	●	○	○	○	口徑10.3cm・高さ13.7cm・底径6.0×5.5cm
2	I-21(3)9	S K-162	第1類	L R	褐色	普通	●	○	○	○	口徑10.3cm・高さ13.7cm・底径6.0×5.5cm
5 3	G-19(3)9	S K-197	第3d類	L R	にぶい褐色	普通	●	●	●	●	5.5cm×2.5cm・高さ12.8cm・底径6.6cm
4 8	K-21(3)9	S K-197	第3d類	(L R)	にぶい褐色	普通	●	●	●	●	5.5cm×2.5cm・高さ12.8cm・底径6.6cm
4 9	I-22(3)9	S K-33	第3d類	(L R)	にぶい褐色	普通	●	●	●	●	5.5cm×2.5cm・高さ12.8cm・底径6.6cm
5 8	I-22(3)9	S K-235	第3d類	(L R)	反青褐色	普通	●	●	●	●	5.5cm×2.5cm・高さ12.8cm・底径6.6cm
2 6	G-22(3)9	S K-27	第1類	(L R)	褐色	普通	●	●	●	●	5.5cm×2.5cm・高さ12.8cm・底径6.6cm
1 1	I-22	S K-235	第1類	(L R)	にぶい褐色	普通	●	●	●	●	5.5cm×2.5cm・高さ12.8cm・底径6.6cm
4 6	K-2111	S K-190	第3d類	L R	褐色	普通	●	●	●	●	褐色土粒少含む
5 0	K-22(3)9	S D-211	第3d類	L R	黑色	普通	●	●	●	●	褐色土粒少含む
2 2	I-21	—	—	—	—	—	●	●	●	●	褐色土粒少含む

胎土含有率 ◎: 多量 ○: やや多い △: 少量 *: 微量 -: ほとんど含まない

近いものである。これら4種類の混和材は、それぞれが単独あるいは組み合って胎土中に含まれる。その組合せについては、全体で16通りが想定されるが、隣接する兩池遺跡の事例とあわせた実際の組合せは11通りとなることから、大沢遺跡と兩池遺跡の胎土の類別は第1類から第11類に細別した。

大沢遺跡における胎土に含まれる混和材の組合せパターンは、第1類・第3類・第7類・第8類・第9類・第11類の6通りである（第7表）。第1類は、硬質砂粒を多く含むもので、それ以外はほとんど含まれない。大半は粗製土器で占められる。第3類は、白色岩粒をほとんど含まないが、他のA・B・Cの3種がおおむね含まれるものである。第7類は、Bの橙色土粒がほぼ単独で含まれる。第8類は、B・Cとした橙色土粒と褐色土粒の両者が多く含まれる。大沢遺跡では、この第8類が主体となっていた。第9類は、Cの褐色土粒が単独で含まれるが、事例は少ない。第11類は、A・B・C・Dの各混和材があまり含まれないものである。事例としては多くなる。大沢遺跡における土器胎土中の混和材は、主に橙色土粒と褐色土粒が多用され、硬質砂粒については粗製土器に用いていたことがわかる。

土器群の類別 大沢遺跡から出土した土器類は、図示できた資料が60点と量的には多くない。また、一括的に捉えられる事例は2例で、その個体数も少なく、時期的にはほぼ新崎式期に限定できるほど顕著な時期幅がそれほどないものと考えられるため、大きく4類に大別して概観したい。

第1類土器（図版20・21-1～2・4～26）：半截竹管を工具とした文様が器面に施される一群である。北陸系の土器群である。器形は、破片資料が多いため確定できないものが多い。1は小形の鉢であるが、その他の土器も鉢あるいは深鉢と考えられ、浅鉢とすることのできる確実な個体はない。断面の厚さからすれば、比較的厚手となる4～5・7～10・13・19以外は小形と考えられ、概して小形品が多いように見受けられる。口縁部は、平縁のものが多いが、1・6・15は緩やかな波状口縁となる。文様は、口縁部に蓮華状文を持つものは6のみであり、また格子目文を持つものも4の1点のみである。これら以外は、半截竹管による降線文を主文様とし、爪形文が配される場合が多い。地文には単節斜綱文が施されるが、LRが主体であり、RLは17の1例だけであった。

第2類土器（図版21-27・28）：簡略な粘土貼付けによる隆起した文様が施される一群である。2点とも破片のため、他部位に半截竹管文が施される可能性があるが、器面の粗雑感からすれば半精製品と考えられる。地文にはLR単節斜綱文が施される。器種としては深鉢が考えられる。

第3類土器（図版21～22～29～60）：粗製土器を一括した一群である。地文によってa～eまでの5類に細分した。a類は撚糸の圧痕文が施される類である。29・30は絡条体圧痕文、31は頸部に撚糸の押圧文が施され、その下にはLR単節の原体がほどけ撚り戻し状となった斜綱文が施されている。b類（32・33）は、結末羽状綱文が施されるもの。c類（34・36～38）は、RL単節斜綱文、d類（35・39～54）はLR単節斜綱文が施される。図示できたものから見ても、RLは極めて少なく、大半をLRが占めている。e類（55～60）は無文のものを一括した。

第4類土器（図版20-3）：図示されたものは有孔釦付土器であるが、北陸系以外の精製土器類を一括した。口縁部は、一部を残して欠損している。中部高地系ではあるが、胎土は在地産と変わりない。

b 土製品（図版22）

大沢遺跡から出土した土製品は、墓坑と考えられるSK-233土坑から出土した滑車形耳飾りの2点である（61・62）。大きさはともにほぼ同じであり、ともに直径3.4cm、厚さは1.7cmを計る。中央の孔も両者ともに1.1cmを計る。色調は赤褐色、焼成はおおむね良好である。胎土は、第3類に含まれる。重さは一部欠損しているところもあるが、61は15.0g、62は15.4gであった。

c 石器類（図版22）

大沢遺跡から出土した石器類は、5点が出土した。その内訳は、打製石斧1点、蔽石1点、磨石3点（65～67）である。63の打製石斧は、安山岩の一種であるが、当地方で一般的な米山産の輝石安山岩ではなく、粒子が概して緻密で黒色を呈した石材が使用されている。石斧は、横長剣片から作出したもので、基部を欠損する。残存全長は7.6cm、最大幅4.0cm、厚さ1.0cm、重さは42.2gである。刃部先端はかなり幅広に光沢を持ち、盛んに使用されたことがわかる。64の蔽石は、頁岩製である。先端部以外にも使用痕が認められ、多目的な機能を持っていたと考えられる。全長は12.4cm、最大幅4.4cm、重さは121gを計る。磨石は、總て本地域に特徴的な輝石安山岩製であり、3点のうち2点までが残欠である。67は、長径12.0cm、短径10.8cm、厚さ4.8cm、重さは892gを計る。これら5点の石器類のうち、4点までがSB-292建物跡の柱穴から出土した（SK p-62:63・65、SK p-65:64・67）。出土位置がかなり限定的であることから、柱穴の掘削など、建物跡との関わりがあったことを想定しておきたい。

4) 古代以降の遺構と遺物

a 遺構の概観

古代以降とされる遺構の内、遺物が出土するなどして確実に把握できたものは、SD-70溝跡だけであり、これ以外のピット・土坑や落ち込みは一切確認されていない。

大沢遺跡は、図版1の旧状からすれば、横山東遺跡群が立地する一塊の台地のほぼ中央に位置する。大溝は、この大沢遺跡のA地点において、台地中央部より南側へやや偏るが、それでも台地平坦部が広い場所に位置する。本遺跡群内における古代の遺跡は、大沢遺跡B地点が大溝によって断ち切られた尾根の先端にあり、また大溝の軸線より南側には雨池古窯跡が存在するが、大溝内からの出土遺物に、疊に溶着した須恵器があり、雨池古窯跡と深い関わりを持っていることが示唆される。したがって、大溝が構築された位置からすれば大沢遺跡B地点と関連し、出土遺物からすれば雨池古窯跡との関わりが認められることになり、その場合、両遺跡を内側として理解することができる。しかし、その目的や意味、あるいはどのような意図があるのかは判然としない。

最近発掘調査が進められている市内半田の箕輪遺跡は、9世紀から10世紀に大きく展開していることが明らかにされている〔新潟県埋文事業団1996・97〕。大溝から箕輪遺跡までの距離は直線でおよそ500m、大沢遺跡から北北東へ伸びる尾根筋の延長線上の沖積地内にある。両者の関わりを示す証拠はまったくないが、大沢遺跡A地点内に同時期の遺構がまったく存在しない事実は、この大溝をA地点だけで理解できないことも意味する。現状では、東西に走る大溝のどちら側が内側なのかも明らかにし得ない。

b 大溝（図版19）

SD-70大溝は、H-I-18~23グリッドから検出された。主軸は概ね直線であるが、21グリッドラインで若干の食い違いが看取できる。このため、主軸方位にも若干の差異があり、西半部はN-81°-Wを、また東半部ではN-84°-Wを指向している。確認された延長は約50mとなるが、台地斜面部に達する両端部については未調査であり、開口したままであるのかについては明らかでない。幅はおおよそ2.0~2.5mで西側がやや狭く、東側で最大幅を計る。深度は、0.55~0.70mを計る。底面は、H-19グリッド付近が最も標高が高く、当該地点を頂点として東西それぞれへ緩やかに傾斜する。西側は10m足らずで台地の縁に達することから、頂部との高低差は10cmほどであるが、東側は約40mほどで60cm余り低くなる。

覆土は、上部層・中部層・下部層に大別が可能である。上部層は、第1~3層が相当し、粘性の強い粘土層あるいは粘質土が堆積する。中部層は、第6~8層が相当し、主に暗褐色系の土砂が堆積する。下部層は、第9~15層が該当し、上位と下位に大きく二分できる。下部層上位（第9~12層）は、黒褐色系の土砂が堆積するが、この上位を覆う第9層は4枚に細分が可能であり、短い時間内に急激に土砂が堆積した可能性が考えられる。出土層位の明らかな須恵器（図版22-69）は第11層出土であり、大溝埋没過程において紛れ込んだ可能性が高い。下部層下位（第13~15層）は、上層は褐色土が堆積し、下層位は地山風化土が多く混じり、構築当初の堆積層と考えられる。

c 大溝出土遺物（図版22）

SD-70大溝内から出土した遺物は、須恵器大甕の破片が3点である（68・69）。そのうちの2点は、安山岩に溶着していた（68）。焼成は良好で、全て灰色に焼き上がる。胎土中には少量の砂粒と雨池遺跡の縦文土器にも特徴的な白色岩粒若干が含まれる。この点などは、雨池古窯跡出土須恵器とも共通する点であり、SD-70大溝出土須恵器が雨池古窯跡で生産された可能性が極めて高いものと判断できる。

4 大沢遺跡B地点の遺構と遺物

1) 鉄生産関連遺構の概要

B地点は、沢内へ比較的長く突出する尾根状地形の先端部に立地する。この尾根筋は、大沢遺跡A地点から徐々に高度を下げるが、先端部において3m余り高くなり、小丘状の地形を呈する。遺構群は、その南東側に傾斜する平板な斜面のほぼ中央において、標高11mから6m付近に築かれていた。それ以下については、すでに削平されていたため明らかにすることはできないが、地形図からすれば沖積面に達する標高4m付近まで至ったものと推測できる（図版23）。調査グリッドの表示では、c～e-22～24グリッドとなる。なお、本遺跡群の南1kmほどのところに所在する藤橋東遺跡群では、沢内に入り込んだ内側の斜面に製鉄炉等が築かれており〔柏崎市教委1995〕、尾根先端部に築かれていた当該B地点の立地との間に差異が認められる。

検出された遺構は、製鉄炉である長方形箱型炉の地下構造と考えられる土坑1基のほか、製鉄炉に伴う踏み石ゴマ座やこれらに付属すると考えられる土坑・ピット群、木炭窯2基、そして性格の明らかでない落ち込み1基である。鉄生産において、最も基本となる製鉄炉については、後述するとおりSK-409が長方形箱型炉の地下構造の可能性が高いが、その大半がすでに失われ、炉床の検出まで至っていない。しかし、付近に大量の鉄滓があったとの伝聞情報、および旧地形の観察からすれば若干緩やかに裾を広げていたことが看取されることから、本報告ではSK-409を長方形箱型炉に伴う地下構造と断定しておきたい。

遺構の分布は、概ね20m四方に集中する（図版24）。発掘調査は、遺構分布域を全面的に調査するまでには至らなかった。このため、遺構の確認された箇所だけ部分的に拡張したものであり、その意味ではこれら以外の遺構が存在した可能性を否定できない。しかし、B地点の地形的な状況、および周辺における地山面露出区域の踏査結果からすれば、これら以外に遺構が存在する可能性は低いものと考えている。

遺構の配置は、平板な斜面の中央下方にSX-401木炭窯が位置し、その東側10mに窯頭の標高を1mほど下げてSX-410木炭窯が築かれていた。両木炭窯の主軸はおむね平行するが、これは平板な地形によるものと考えられる。製鉄炉に関わる土坑群は、その全てがSX-401木炭窯の下方に隣接して検出された。おむね方形状を呈する土坑群の配置は、地形にも左右されてか、方位にも規則性を看取できる。

遺物については、前述したように、鉄生産に関わることを示す鉄滓や製鉄炉炉壁の断片が出土した。しかし、これら遺構群やその操業時期を示す土器類等の遺物が皆無であり、詳細な時期等について明らかにすることは難しい。

2) 鉄生産関連遺構各説

確認された遺構の種別は、製鉄炉関連の土坑群のほか、木炭窯とピット群や性格不明の大形落ち込みである。本項では、製鉄炉周辺から検出された土坑やピット群については製鉄炉関連遺構として一括し、木炭窯および性格不詳の落ち込みに分けて記述したい。

a 製鉄炉関連遺構（図版27）

B地点において、いわゆる土坑が検出された位置は、SX-401木炭窯の下方に隣接した区域に集中する。合計5基が確認されたが、全て方形もしくは略方形を呈し、主軸の方位には規則性が看取できる。これらのうち、深度が深く、覆土に焼土や木炭が大量に包含されていた土坑としてSK-409が掲げられ

る。本土坑の性格については、検出された位置や配置、および覆土の特徴からすれば製鉄炉に伴う土坑と考えることが妥当であり、しかも木炭窯などから出土した流動滓が箱型炉から生成されたものと認定できることから、長方形箱型炉の地下構造と断定した。しかし、調査段階から当該報告に至るまで、本土坑については、その可能性を想定しつつも、深度が0.90mと深いことから疑問視してきたものである。しかし、新津市居村遺跡E地点から検出された1号製鉄炉（長方形箱型炉）には、最大深度がおよそ0.80mを計る極めて大形の地下構造が築かれていた〔新津市教委1997〕。SK-409についても、構築位置が斜面の等高線に直交しており、その上端においては深度が深くなることが充分予想できることから、SK-409土坑を長方形箱型炉の地下構造との判断を妥当なものと考えるに至った。この判断が正しいとすれば、SK-406とSK-408は、藤橋東遺跡群における呑作E遺跡・網田瀬E遺跡の事例から〔柏崎市教委1995〕、踏み石ゴシクに伴う土坑とすることができる。SK-409とSK-406・SK-408の3土坑の主軸方位に規則性が取看されたのは、製鉄炉と石ゴシクという関係を想定すれば、極めて合理的に解釈できる。

SK-405については、ゴシク座に接するという位置関係、および斜面の平坦にした段切り状の形態から、製鉄炉の作業場と判断される。また、SK-403a土坑からは、総重量8.15kgに及ぶ鉄滓が出土した。これらは全て流動滓であり、比較的多くの破片が接合できたことを考えると、流動滓の大塊を破碎したもののが埋設されていた可能性が高い。その性格については明らかでないが、鉄滓を木炭窯構築用に再利用するためなど、一時的保管場所として活用されていた可能性が高い。

このほかに、SK-402・404・407といったピットが検出されている。しかし、建物跡と考えられるような柱穴の配置は認められず、その性格付けは難しい。木根痕等が含まれている可能性も否定できない。なお、土坑・ピットの法量等については、表8にまとめたので参照されたい。

b 木炭窯（図版25・26）

2基が検出された木炭窯は、全て半地下式構造をとり、斜面の等高線に直交するようにして構築されていった。SK-401木炭窯は、窓頭の煙道部から作業場まで全てを検出できた。しかし、SK-410木炭窯については、作業場を含むおよそ1/3ほどが、農道や作業用道路によりすでに削平され、さらにSK-411落ち込みにより下端部にある床面などが失われていた。このことから、SK-410木炭窯は、SK-411落ち込みよりも古いことが確認できる。

SK-401とSK-410の新旧等の関係については、事実として判断できる調査結果は得られていない。しかし、両木炭窯の床面最大傾斜度は5.2度もSK-410木炭窯が急傾斜となっている。このことが、SK-410木炭窯に不利な条件であったと仮定できれば、たとえ同時操業の時期があったにせよ、順位はSK-401からSK-410へと構築された可能性が想定できるが、想定される製鉄炉の位置とも矛盾しない。

SK-401木炭窯（図版25） 窯本体部および作業場まで、全て完掘された半地下式木炭窯である。主軸は、N-21°-Wを指向する。全長は、窓頭の煙道を含め、作業場南端まで13.5mを計るが、窯本体部の延長は10.5mである。煙道は2カ所、窓頭と左側中央部に位置する。窯本体部の最大幅は窓頭にあり、その底面幅は1.35m、そこから焚口にかけば直線的に狭くなり、焚口部分では0.35mとなるが、全体としては細形の平面形を呈し、しかも均整の取れたプランとなっている。

深度は、確認面を重機によって掘り下げたため、本来の深度を計測できないが、検出された現状では、窓頭で0.55m、中央部では0.80mほどとなり、最深部は焚口部分の1.06mとなる。また深度は、床面傾斜角度とも関わりを持つが、窓頭先端付近では1m間はほぼ平坦で、そこから1mほどのところまでは8.7度の傾斜となり、その下方は焚口付近までおおむね15.5度の直線的な傾斜としている。焚口部分には、や

や浅い梢円形の窪みが検出されているが、そこからは傾斜が緩くなる。床面における窓頭から焚口までの比高差は、2.36mであった。深度と傾斜角度との関係は、本来の地形が概して緩やかであったことから、一定の床面傾斜角度を確保するため、窓頭部の掘り下げには、ある程度の制約が伴っていた可能性が指摘できる。壁の立ち上がりは、側壁及び奥壁とも床面からほぼ直角に近い角度で直立しており、極めて規格的であり、丁寧な構築過程が想定できる。

なお、左側煙道から上方にかけて、床面に小さな窪みが検出されているが、廃絶後に流入した雨水等により床面がえぐられたものと推察される。排水溝はない。

作業場は、窓本体部主軸線と直交した長軸を持つ梢円形を呈し、短軸は窓本体部の主軸にはほぼ一致し、左右対称となるよう設定されていた。壁の立ち上がりは緩やかに直立するが、底面は概して平坦である。作業場の東壁側には、幅0.40mほどのテラスが検出されたほか、小ピットが4個と、テラスと重複してやや小形の土坑状の落ち込み1基が検出されている。上屋等を建てた柱穴という解釈は否定できないが、必ずしも規格的な配置とはなっていない。

覆土は、大半が焼土化した天井部の崩落土であるが、焚口部分だけは木炭層と整地層などが細かに確認できた。掘り方面的直上には焼土層があり、その上面を整地層が覆い、さらにその上位を焼土層が覆った上に木炭層が検出されている。したがって、大まかには2次に渡る操業が想定できるが、各次における焼成の回数は明らかにできない。

遺物としては、作業場から焚口付近にかけて、砂岩の小塊とともに若干の鉄滓が出土している。鉄滓は、破碎された流動滓であり、その特徴からすれば長方形箱型炉により生成されたものと考えられる。

S X-410木炭窯（図版26） 焚口部分から作業場に相当する全長のおよそ1/3が失われていると考えられる。確認された現存長は9.65mを計るが、本体部の延長はおむね11mに達するものと推定される。主軸は、N-34.4°-Wを指向する。床面の最大幅は窓頭部にあり、1.21mを計るが、下方の最狭部でも0.96mを計ることから、全体としては寸胴形の平面形を呈している。

深度は、窓頭部が最も深く1.62mほどを計り、下方の焚口側へ近づくにしたがい浅くなる。深度と深い関わりを持つ床面傾斜角度を見ると、窓頭最奥部の1m間は平坦とされるものの、その下方1.5mは13.0度となり、それ以下は20.7度まで傾斜を強くしている。この深度と床面傾斜角度との関係は、前述したS X-401の場合とは異なり、本来の地形が急すぎたため、窓頭を掘り下げて、ある程度の調整がなされた可能性が高い。これは、S X-401木炭窯の壁がかなり過熱を受けて赤色化が著しかったが、本窓跡については煤の付着が著しく、全体に黒ずんでいたことからもうかがわれる。窓頭から現存する下端までの床面比高差は2.42mを計るが、失われた部分を含めれば3m余りに達することが容易に予想できる。

壁の立ち上がりは、奥壁及び側壁とも、床面よりほぼ直角に立ち上がり、S X-401より顕著とは言い難いが、かなり丁寧な構築がなされていたことが判る。窓壁の側面は、全体に黒色を呈しており、煙がかなりくすぶったような印象を受けた。また煙道は、左側上方と右側中位にそれぞれ1カ所が設定されている。床面傾斜が緩やかなS X-401では窓頭に煙道が見られたが、本窓については傾斜がきついものもあって窓頭に設定されなかったと考えられる。なお、排水溝は作られていない。

覆土は、大半が焼土化した天井部の崩落土で充満する。焚口部分がなく、操業回数は明らかでない。

遺物は、窓本体部覆土内から若干の砂岩小塊や、S X-401と同様に数点の流動滓などが出土している。

c その他の遺構（図版26）

S X-411落込みが該当する。S X-410木炭窯下方部と重複し、これを切る。当初、新たな木炭窯の可

能性が高いものとして調査を進めていたが、性格を見極め切れなかった。覆土は、おむね水平堆積を呈する。第3層としたやや厚い土層内には、焼土粒や木炭が混入するが、S X-410木炭窯から流入した可能性が高い。遺物等は出土せず、時期等は明らかにできないが、S X-410木炭窯より新しい。

3) 遺物

B地点から出土した遺物は、いわゆる鉄滓や炉壁など、鉄生産過程に生じた生成物以外は砂岩等の礫が出土したのみである。砂岩の礫は、各木炭窯それぞれの窯本体や作業場から出土しているが、本項における記述では割愛したい。

鉄滓類概観（図版27）

鉄滓類の大半はSK-403土坑から出土したが、その他に木炭窯の本体内や作業場などからも出土している（第8表参照）。量的には、廃滓場が煙滅していたこともあるって極めて少なく、コンテナ1/3程度、その重量も10.050kgを計るのみである。鉄滓類の種別としては、炉底塊・流動滓・炉壁があり、流動滓には炉内流動滓・炉外流出滓があるが、鉄滓類のはほとんどは流動滓で占められる。なお、メタルチャッカによる検査では、炉壁に付着した鉄錆化物1カ所から、わずかな反応が感知された程度である。また、今回の調査では、遺構覆土の水洗等は一切行っていないことから、砂鉄は抽出されていない。

炉底塊（71） S X-401木炭窯から出土した。厚さは2cm前後と概して薄い。図示した個体が基本的には唯一であり、7片ほどに割れていたものを接合したものである。重量は457gであった。

流動滓（72～74） 本地点から出土した鉄滓類の約95%（炉壁を含まない）を占める。その過半数は下面に炉床土が巻き込まれており、炉底の形を移したものと考えられる破片が多い。これらのはほとんどは、製鉄炉と踏みフィゴ座より若干上位に位置するSK-403土坑から一括的に出土した。破片数は数十点、8kgほどの重量を計るが、接合されたものも多い。ただし、全てを合体できなかったが、本来は一つの大きな塊であった可能性が高く、何らかの使用目的を持って意図的に選択されたものと考えられる。

炉壁（72） 踏みフィゴ座に接する作業場と考えられるS X-405から出土した。炉内側の面は、溶解が激しく、更に1cm程内部に食い込む。炉壁土にはスサの痕がかなり多く観察できる。

番号	グリッド	種別	平面形	規模／長軸×短軸	深度cm	遺物	備考
401	b-d-23	木炭窯	—	—×—	—	炉底塊・礫	
402	d-23	ピット	円形	32×28	27	流動滓	
403a	c-23	土坑	略長方形	118×72	15	流動滓（炉内外）	
403b	c-23		横円形状	(98)×52	9		作業場
404	c-23	ピット	円形	24×20	16		
405	d-23	土坑	長方形状	(122×46)	17	炉壁・流動滓・礫	作業場
406	d-23	土坑	長方形	112×92	32		踏みフィゴ座
407	d-23	ピット	円形	40×34	26		
408	c-d-23	土坑	略方形状	68×61	29		踏みフィゴ座
409	d-23	土坑	長方形	106×(70)	90	流動滓・炉壁	製鉄炉地下構造
410	b-24	木炭窯	—	—×—	—	流動滓・礫	
	c-24~25		落込み	—	—		
411	c-24~25		—	—×—	—		

第8表 大沢遺跡B地点鉄生産関連遺構（土坑・ピット等）一覧表

5 調査のまとめ

大沢遺跡は、台地上平坦地のA地点と尾根筋先端部のB地点に大きく分かれる。また、確認された遺構・遺物の時期は、縄文時代中期と古代であり、各々の内容や性格も大きく異なる。また、前者が集落、後者は鉄生産に関わる遺構群であった。本章最後となる本節では、調査の結果を時期別にまとめておきたい。

1) 縄文時代中期前葉

縄文集落の時期 当該集落から出土した土器群は、小破片を主体に 250点余り、図示できた資料は60点と少ない。また、ある程度器形がうかがえる個体で、かつ遺構内から一括的に出土した事例は、2例4点に過ぎない。このため、当該集落の盛衰や時期幅あるいは各遺構の時期的な変遷を捉えることは難しい。ここでは、とりあえず各資料の総体的な特徴等から、集落の時期をある程度見極めておきたい。

出土土器群の文様的な特徴としては、施文具がほぼ半截竹管に限定され、隆線文・連続爪形文・格子目文が描かれるが、蓮華文はほとんどなく、口縁部に無文帯が配される事例が多い。胴部文様は、区画内に格子目文を施す事例が1例認められるほかは、縄文を地文としている。縄文は、単節斜縄文LRが卓越し、RLは少ないという特徴がある。また、木目状櫛糸文はC1種〔卷町教委1990〕がわずかに認められる。個体数が少ない現状では、他遺跡との対比に誤差が生じる危険性が高いが、大まかには卷町大沢遺跡におけるIIIa期の土器群に近似していることがうかがわれる〔卷町教委前掲〕。当該土器群の編年的な位置付け等については、後章で検討するためここでは詳述を避けるが、おおまかには新崎式第I期に併行するものと理解したい〔加藤1995・寺崎1996〕。ただし、ほとんどないとした蓮華文については、口縁部に比較的長い蓮華文が施された事例（6）がある。また、4の胴部上位における区画内に施文された、半截竹管による2本一对の刻目状の短かな押引文については、施文具の施文角度による相違と理解し、次時期に盛行する蓮華文の萌芽とみるか、単純に列点文と見なすのか、にわかに判断することは難しい。このため、当該集落の時期幅については、新崎式第II期までの範囲を考慮しておきたい。

なお、中部高地系とした有孔鍔付土器（3）の位置付けについては、供伴した4の土器との関わりから、新崎式第I～II期の幅でとりあえず把握しておくこととした。

集落の景観と構成 集落は、大小の尾根4本が集約した台地上平坦地全面に広がるように形成されていた。集落の形態は、基本的には広場を巡って住居等の遺構群が巡る環状集落である。その規模は、広場となる内径約18m、遺構群の外径は全周していないため判然としないがおよそ45m程となり、尾根筋方向には10m程の張り出しがある。

集落を構成する遺構は、住居跡と建物跡を中心に、貯蔵穴や墓坑としての土坑がある。まず、1棟だけが建てられた掘立柱建物跡は、広場の西側にあって、主軸の延長線を広場の中心に向ける。この事実は、住居群の配置とともに広場を意識し、あるいは規制を受けていたことを端的に示している。住居跡は、全て床面をほとんど掘り下げない、いわゆる平地式と考えられる構造をとり、21棟余りを想定した。ただし、木根株下にあって検出できなかった柱穴によっては、更に多く存在した可能性を持つ。その基本形は、主柱5本構造であり、これらの住居は建物跡の主軸線以南に、広場を巡りながら半周する。しかし、北東半部にはほとんど分布せず、環状集落を意識しつつも全周せずに集落の廃絶を迎えた可能性が高い。住居群の分布域には、貯蔵穴と推定される土坑が20基ほど確認されている。その検出位置は、住居内に取り込ま

れたものと、単独で検出されているものがある。また、唯一発見されている建物跡の性格は、集落にとつて重要な意味を持つ施設ということは間違いないが、少なくとも一般的な住居ではないと考えられる。建物跡の機能や性格付けについては、考古学的物証が得られていない以上、安易な言及は慎まなくてはならないが、精神的な信仰に伴う施設というより、もっと現実的で生活に直接結びつく施設として、越冬等に必要な食料の保管庫、言わば食料貯蔵庫のような建物であった可能性が高いように思われる。

また、広場の北東となる住居の空白域からは、滑車形土製耳飾りを伴う墓坑が検出された。広場を巡る空間利用を想定するとすれば、南西側を居住区とし、北東側には墓域等が意識されていたことが考えられる。ただし、検出された墓坑は1基のみであり、調査区域外における分布を考慮しても、顯著な墓域の形成には至っていないかった公算が高く、集落人口や存続期間との関わりが想定される。今回の調査区域内からは、いわゆる土器捨て場と称されるような廃棄場は検出されなかった。しかし、環状集落が形成されていてことからすれば、規模的には小さくとも少なからず廃棄場は設定されていたと見るべきであり、調査区外となった住居跡密集区南側の斜面（D沢頭）に小規模な廃棄場を想定しておきたい。

大沢绳文集落の性格と位置付け 以上のことから、大沢绳文集落は、広場を持つ環状集落であり、さらに貯炭穴や食料貯蔵庫と考えられる建物跡の存在から、越冬の備えを持つ集落として位置付けられる。ただし、遺構密度が希薄なことから、中核的な集落として展開せず、概して短期間に廃絶した集落であったと理解したい。平地式住居の類型や集落の変遷観等については、後章にて検討するが、当該集落の類型は、第I類型B類に類別され、本事例がその典型的事例とすることができます〔品田1996a・b〕。

2) 古代

古代の所産と考えられる遺構は、A地点のSD-70大溝とB地点における鉄生産に関わる遺構群である。鉄生産関連遺構群は、長方形箱型炉と踏み fizゴ座と考えられる一対の土坑、及び半地下式木炭窯2基などで構成される。調査段階では、廃滓場がなく、製鉄炉の炉床等が把握できなかったが、整理作業段階の検討において初めて製鉄炉の存在が判明したものである。長方形箱型炉は、プランの大半がすでに削り取られ、規模等を具体的に把握できないが、斜面が概して急であったためか、地下構造の深度が深いものである。踏み fizゴ座の位置は、土坑の配置からSK-406・SK-408が該当する可能性が高く、その場合製鉄炉の斜面上方に隣接して設けられていたことになる。このような事例は、本遺跡群の南1kmに所在する藤橋東遺跡群の網田瀬E遺跡と呑作E遺跡に事例がある〔柏崎市教委1995〕。しかし、同様な事例は福島県に数例知られるのみで、北陸地方では今のところ確認されていない。

出土遺物としては、炉壁・炉底塊・流動津と鉄錆化物が得られたが、土器類が一切検出されず、時期を特定できない。製鉄炉1基に対し2基の木炭窯が伴う状況としては、9世紀前半とされる呑作E遺跡の事例と同じであり、藤橋東遺跡群では新しい傾向を持つものと考えている〔品田1994〕。しかし、呑作E遺跡の地下構造は、深度そのものは最大70cm余りを測り近似するものの、構築方法が木炭窯的な技法をとっているなど特異なところがあり、短絡的には対比できない。しかも、付随した木炭窯は、特にSX-401の構築がかなり丁寧で規格的であることは、時期的に古い様相を持っている。ここでは、9世紀第1四半期前後を意識しつつ、8世紀後半代を含む時期を想定しておきたい。なお、県内には6遺跡から長方形箱型炉が検出されているが、金津丘陵製鉄遺跡群の2遺跡（居村遺跡E地点・金津初越遺跡A地点）〔新潟市教委1997〕のはかは、全て柏崎市内に集中する。古代における越後国の情勢や内情、あるいは東北経営をにらむ役割など、当時の政策的な背景が両地域に集中する事由として想定しておきたい〔品田1994〕。

IV 雨池遺跡

1 発掘調査の経過

平成4年（1992）6月中旬、大沢遺跡の調査後に実施していた市内南条所在の馬場・天神腰遺跡の発掘調査も、残暑が残る9月中旬に至ってようやく終了した。横山東遺跡群における調査再開の準備は、その直後から始められ、9月28日に現場事務所とするユニットハウスの設置、そして翌29日には器材を搬入し、雨池遺跡発掘調査の準備が整えられた。

平成4年9月30日（水）、作業の初日は一時雨の降る天候であったが、地元有志等の協力を得て、重機による表土剥ぎ作業が開始された。表土剥ぎ等の発掘作業は、調査区が東西に細長いこともある、西側のL～M-34～35グリッドから始めた。調査区内は、もともと山林であったことから、表土剥ぎ後に数多くの切り株が掘り残された。このため、作業の手順としては、表土剥ぎ後に木根処理を行い、ジョレンによって遺構確認面を整形し、遺構のプラン確認を行うこととした。しかし、表土剥ぎ作業は、10月1日から2日にかけて、天候にも恵まれて順調に進められ、2日には43グリッドラインにまで達したが、木根処理中に確認面の乾燥が著しくなり、遺構確認は思うようにはかどらなかった。遺構の検出状況としては、調査区西端のM-33グリッド周辺に焼土坑が集中する傾向が看取できた。しかし、遺構の検出数は、木炭や焼土を多く含む焼土坑は別として、縄文時代等の遺構は希薄であった。これは、表土そのものが地山層に近い黄褐色系であり、暗色化が乏しいことから、遺構覆土と地山土との境が難しいことが予想された。

調査も第2週目となった10月5日、重機による表土除去作業が終了し、木根処理と遺構確認に作業の比重が移された。遺構確認作業は、本日までに40グリッドラインまで到達したが、旧道跡やこれに付随すると考えられる小溝など、時期的にかなり新しいものが目立った。ただし、M-36グリッドにおいて、ピット内に埋設された状態で縄文土器深鉢が検出され、その周間にいくつかのピットが検出され始めた。6日も同様な作業を継続し、7日には木根処理および遺構確認作業が42グリッドラインまで進むことができた。このため、焼土坑の一部に対し試験的な意味合いから発掘作業に着手、SK-1・7の半截を手始めに、調査区西端部における遺構群の発掘を継続した。翌8日、木根処理と遺構確認面の整形作業が一応終了するに至った。しかし、調査の初日以降、ほとんど雨が降らなかったことでもあって乾燥が著しく、雨後に再度精査が必要であった。なお、本日から福田組の協力により、グリッド設定のための測量および杭打ち作業が始まられた。

第3週目となった10月12日、遺構検出作業と並行しながら遺構の発掘作業を行う。本日は34～40グリッドの広範囲にわたって作業を実施し、西端部から検出されていた焼土坑群その他の調査を終了させた。また、M-36グリッド周辺から柱穴が比較的多く検出されたが、住居跡の把握までには至らなかった。13日には杭打ち作業が終了し、縄文ピットや旧道跡および焼土坑などの発掘作業が連日継続された。14日に至って、柱穴の配置による住居跡の推定作業を行い、M-41とM-42の両グリッドにおいて各々1棟の住居を推定した。特に、M-42グリッドの住居とは、炉跡2基とその周囲を長梢円形状に柱穴が巡り、長軸の延長は8～9mにも達する大型であった。16日は、この遺構群を大型住居という認識のもと、S I-105住居跡と仮称して、柱穴10本の半截作業を行った。その結果、一定の深さを持つ柱穴8本を確認したが、そ

の半截状況については、18日に来歴した新潟県埋蔵文化財事業団の寺崎氏に実見していただき、そのご教示の中で住居としての取り扱いにある程度の確証を得ることができた。しかし、関東地方などと異なり、堅穴式住居がほとんど作られない本地方において、平地式とは言いながら、柱穴配置だけによる住居の推定は、確証の得られない不安がつきまとうことになる。

第4週目に入った10月19日は、前日に確証を得たS I - 105住居およびM-41グリッドで検出されたS I - 106住居の調査を実施し、記録写真撮影と図化を終了させ、また旧道跡などの発掘作業を行った。20日は雨のため中止、翌21日はぬかるみとなった調査区内の水抜き作業を行う羽目となった。この日は、終日S R - 71旧道跡の発掘を実施したが、これらと並行して遺構を完掘していた西半部において、平面図の作成作業を行った。22日は、旧道跡の発掘を継続するとともに、N - 40~41グリッドにおけるピット群をS I - 116住居として調査、さらに完掘全景写真を24日（土）に撮影する準備として、調査区西方から清掃作業に着手した。翌23日、撮影予定日の天候が崩れるとの天気予報により、急きょ完掘写真の撮影を実施した。また、M-36グリッドとO-40グリッドにても住居跡を推定し、個別写真的撮影を行った。なお、この23日には、縄文集落に付き物である土器捨て場（廐棄場）の検出を行うため、小さな沢状地形を呈するP-38グリッドにトレッチを入れて確認を試みた。しかし、出土した縄文土器片は10数点と、土器捨て場とは程遠い結果となったため、北側の調査区外に想定せざるを得ないと判断した。

調査第5週目は、西高東低の冬型が強まり、荒れた週明けとなった。26日は結局中止、そして27日は作業員を休みとし、調査員のみで晴間を見ながらレベリングなど測量作業を実施した。天候の回復した28日からは、平面図の作成に全力を注ぎ、翌29日もこれを継続、30日の午後2時頃までには平面図及びレベリングが終了した。その後、調査区内の地形測量を開始したが、3時頃から雷を伴う豪雨となり、結局作業の継続を中途で断念した。地形測量の再開は、11月4日となった。午前中にはおおむね測量作業も終了し、午後発掘器材を撤収し、発掘調査現場作業を終了した。

なお、雨池遺跡発掘調査は、縄文集落が営まれた台地の斜面から発見された雨池古窯跡の確認調査を一部重複して実施したが、すでに報告されていることから、今回は割愛したい〔柏崎市教委1998〕。



写真3 表土剥ぎ直後の雨池遺跡と木痕処理作業

2 遺跡と調査区

遺跡の立地と微地形 柏崎平野の南部に広がる丘陵は、現在仮の名称として「柏崎（平野）南部丘陵」と称しているが、中位段丘で構成された丘陵地帯は、西流する轟井川によって南北に大きく分断される。横山東遺跡群が立地する台地部は、北半部でも西北の一画において、やや独立した形で形成されているが、雨池遺跡が立地する地点は、南北から切り込む谷によって細長い形状を呈し、横山東遺跡群と南部丘陵北半部とを繋ぐ回廊的な尾根筋となっている。

調査前までの現況は、雑木と若干の杉が混合した山林である。当該地には、尾根筋に沿って延びる山路が、朝日ヶ丘側から延びてきており、調査区中央から東側において分岐し、一方は半田側へ下り、もう一方は轟井川へと延びている。標高は、おおむね23mを計り、南北に入り込む冲積地との比高差は、およそ17m程度である。昭和39年測図の地形図によれば（図版1）、北側のG沢と西側のE沢の間を抜けてやや広い台地へと連なっていた。

調査区域の概要 雨池遺跡が所在する台地の北側には、かつてかなり広い台地が広がっていたが、現在は朝日ヶ丘田地として造成され、住宅によって埋め尽くされている。雨池遺跡の発掘調査範囲については、平成3年度末に実施した試掘調査の結果から、縄文時代の集落が想定され、台地平坦部を中心とした範囲が設定されていた。宅地造成が実施される事業用地は、雨池遺跡が立地する尾根筋部のはんどんに及ぶが、朝日ヶ丘田地との境界には緑地が設けられていた。このため、雨池遺跡の調査区は、緑地保存区域を除いて設定され、北側のG沢に向かう斜面側は調査区外となった。

発掘調査区域のグリッド表示は、J～Q-32～45までに及び、東西およそ130m、南北は60mほどとなり、最終的な調査面積は3,094.3m²となった。なお、K～L-43～45付近については、部分的な試掘調査で遺構等が検出されなかったが、平坦地の広がりがあったことから重機により表土剥ぎのみ実施し、遺構等の有無を確認したものである。結果的には遺構等が検出されなかったことから、本調査から除外した。

層序 本遺跡においては、表土を重機によって全面的に除去し、調査区内には特に土層観察用のベルトなどは残さなかった。そこで、緑地保存区域との調査区界における土層堆積状況により、大まかな状況を簡単に概観しておきたい。

除去した表土は、台地平坦部をみるとおおむね20cm程と浅く、南側の斜面において深さを増す。また、調査区内の、西半部は東半部よりも若干厚みがあった。この差異は、調査区域中央付近における小溝の区画が受けられるように、それほど古く遡らない時代において、畑など何らかの人手が入った結果である可能性が高い。

本遺跡の基本層序は、第Ⅰ層：腐葉土、第Ⅱ層：遺物包含層、第Ⅲ層：地山漸移層、第Ⅳ層：地山層となる。第Ⅱ層については、比較的多くのピットが検出されたM-36グリッド付近で、やや暗褐色が強い色調であったが、38ライン以東については茶褐色～暗黄褐色系の色調を呈し、暗色化に乏しい状況にあった。このため、遺構覆土も概して明色のものが多く、地山層との差異は小さかった。南側斜面の状況を見ると、表土が厚く堆積していたことから、上位からの遺物包含層等が流出していた可能性が高く、第Ⅳ層の地山漸移層が露していった可能性も考えられる。第Ⅲ層の地山層は、地質区分で第四紀更新世の安田層であるが、概して粘性の強い部位で構成されており、遺構確認面の整形等ではかなり苦労させられることとなつた。なお、第Ⅳ層については、西側が黄褐色土、東側では赤褐色や白色の粘土層が主体であった。

3 遺構

1) 遺構の分布と配置

雨池遺跡から検出された遺構は、土坑・ピット類や溝類を主体に、風倒木痕等を含む性格不詳の落ち込みである（図版29）。土坑・ピット類は、壁面の焼けた焼土坑や住居跡の柱穴が大半を占め、溝類には土地区画等を意識した細い溝跡のほか、旧道路の痕跡として残された溝状の落込みが含まれる。これらの遺構群の時代は、土器類等年代を知ることのできる遺物が出土せず、特定にできないものも多いが、大まかには縄文時代（図版35）と中世・近世以降（図版41）の所産に大別できる。以下、時代別に遺構の分布と配置状況等を概観したい。

なお、各遺構の種別を示す略記号は、住居：S I、ピット・柱穴：S K p、土坑・焼土坑：S K、溝：S D、道路：S R、炉跡：S F、その他の遺構・風倒木痕・落込み：S Xとする。

縄文時代の遺構群 遺構の種別としては、土坑・ピット類であり、堅穴式と言った誰にでも判るような住居は確認されなかった。また、土坑類は概して小さく、遺物が伴わないなど性格を測り切れないものがほとんどであり、墓坑あるいは貯藏穴と断定できる事例も存在しない。さらに、当該地に縄文人が生活を営むとすれば、当然排泄されるゴミ類などの廃棄場も、遺跡範囲全てを調査した訳でもないためか顕著な状況は把握されなかった。したがって、本遺跡の実態とは、図版29に図示したとおり、土坑とピットが4カ所ほどのブロックとして検出された程度の遺跡となり、その性格も不明確となる。しかし、少ないながら縄文土器や磨石などの石器が出土し、かつ炉跡と考えられる焼土遺構が、ピット群の中に散見されることは、住居が建てられ、縄文人が生活を営んだ場、つまり縄文集落として理解せざるを得ない。すでに、第III章の大沢遺跡の項でも述べたごとく、一部のピットに柱痕が検出されている事実を合わせ、これらピットの多くを柱穴と理解したい。そしてブロック的なまとまりを持って分布するピット群は、それぞれ住居の建てられていた場所と積極的に認定し、床面をほとんど掘り込まない平地式の住居を想定し、雨池における縄文集落を概観することとしたい。

雨池遺跡で想定された住居跡は、大沢遺跡や尻振坂遺跡〔柏崎市教委1996〕の事例を参考に、主柱5本構造を前提とした。想定された平地式住居跡は5群11棟である。ただし、雨池遺跡には、未調査区域が北部を中心におよそ1／3程が残されており、住居の配置については全貌が明らかにされていない。特に、調査区境界付近に相当するM-36グリッド北西部やN-38～39グリッドには、住居の復元に至らなかったピットが分布している。これらは、調査区外における住居跡の存在を示唆しており、集落全体では7群以上が想定できよう。また、各住居群は、全て重複したものとして把握されていることから、現在の11棟に追加される住居は、4～5棟以上となり、雨池遺跡全体では15棟以上20棟近くに達する住居が想定できそうである。想定された住居のうち、M-42グリッドで検出されたS I-105a bは、明確な炉跡を伴う唯一の事例であり、柱穴10本を擁した大型住居である。

柱穴と理解したピット以外では、若干の土坑が検出されている。特異な事例としては、深鉢を埋設した小土坑がS I-117住居群に付随して検出されているが、性格等を見極められる事例はほとんど見受けられなかった。雨池遺跡で想定される縄文集落は、住居を建てるに都合の良い平坦地を選択し、適宜配置されていた可能性が高く（図版35）、広場を意識し、広場に規制されたような住居配置ではなかったことが理解される。また、N-38～39グリッド付近が不明確であるが、遺跡の北西部と東部とでは、30m程の間

隔があり、台地上部平坦地の平面形状からも2つの集落と見ることもできる。

なお、大沢遺跡同様、本遺跡の現況は山林であり、調査にあたって数多くの切株が残された。このため、切株下の遺構の有無は未確認であり、柱穴の全ては確認されていないと考えられる。

中世・近世以降の遺構群 当該期の遺構は、焼土坑と旧道路、そして旧道路の一部と関わりを持つ溝跡群である。遺構の員数は、旧道路と溝跡がそれぞれ3条、焼土坑は9基を数える。

旧道路とは、斜面下方への下りに際し、降り口部分がえぐられて溝状を呈した痕跡である。道筋は、半田や朝日ヶ丘方面から藤橋・軽井川方面へ至る尾根道を本筋として、雨池において半田東部へ下る道が分岐する（図版28）。本遺跡で検出された3本の旧道路とは、主に藤橋・軽井川方面へ至る斜面への降口に変遷があったことを示している。

幅の狭い小溝跡は、L-34グリッドと、N-O-39グリッド、O-P-40グリッド付近にそれぞれ1条が検出された。各溝の指向する方位は、すべて北東-南西であり、S R-69旧道路におおむね直交して設けられていたことから、道を基準に溝が設定された可能性が指摘できる。各溝の間隔は、SD-46とSD-47溝跡間が約13.6m、SD-2とSD-46溝跡間がおおむね55mを測る。この数字は、1間=1.82mとしたとき前者は約7.5間、後者も30間となることから、互いの溝間を測りながら区画的な線引きがなされたと考えられる。SD-47溝跡からは、唯一の遺物として、19世紀前半頃に比定できる肥前系の染付碗破片が出土している。また、これらの溝群と関わりを持つS R-69旧道路は、図版28にも図示されているとおり、工事着手前まで道として機能していたものであり、検出された3本の中では最も新しい可能性がある。この溝跡から出土した遺物との関わりからすれば、S R-67旧道は江戸時代末期には、すでに機能していた可能性が指摘できる。

焼土坑は、調査区西端（L-34グリッド付近）とM-40~44グリッドの、大きく2群に分かれて分布する。ただし、後者は、M-40グリッド、M-42グリッド、M-44グリッドにおいて、それぞれ小群に分かれている。これらの内、M-40とM-44グリッドでは2基、1基の基數で構成されていた。前者、調査区境界に隣接する位置、後者のSK-72は地山面をほとんど掘り込まない最も浅い事例であったことから、削平もしくは地山面間で掘り込まれなかった焼土坑の存在は否定できない。したがって、L-34グリッド付近やM-42グリッド付近の事例が示す3基程度の群別が想定できそうである。

なお、SK-1焼土坑は、SD-2溝跡に切られていることから、小溝との関わりが深いS R-69旧道より古いことがうかがわれる。また、SK-65焼土坑はS R-71旧道と重複するが、両者の新旧関係については、にわかに判断できない。

2) 縄文時代の遺構名説

当該期の遺構は、土坑とピットに限定される。しかし、ピットは柱穴として平地式住居に伴うため、本項では住居跡と土坑について述べ、その他のピット等については第9表にまとめたので参照されたい。

なお、煩雑を避けるため、遺構名のS I（住居）、S K p（柱穴）の略記号を省略した場合がある。

a 住居跡（図版38~40）

今回推定された平地式住居は、そのほとんどが2~3棟の重複として把握され、柱穴の共有が顕著である。このため、以下の記述に際しては、住居跡群として捉えつつ概要を記していく。

なお、各住居跡の間口や奥柱間などの規模、主軸方位や各柱穴の規模・深度については、遺構一覧表にまとめたので参照されたい。

S I - 105住居跡群（図版38・39） 検出された住居の中では、最も東側に位置する。しかし、立地する地形からすれば、平坦地が最も安定的な場所となっている。推定できた住居は、5本柱を原則とすると、a・b・cまでの3棟となる。しかし、105aと105bについては、5本柱を結んだ平面形が比較的整った五角形を呈して互いに近似し、両者の主軸線に沿って2基の炉跡が検出されたことから、5本柱の平地住居2棟の組合せにより建てられた大型住居と認定した（S I - 105a b）。また、柱穴5個のうち、奥柱が検出されていないが、近在の柱穴を使用して、S I - 105c住居を想定した。

S I - 105a b住居跡（87~88・91~93・95・96・98・99・103）は、床面の範囲などが明らかでないため、規模を計測できないが、柱穴間で示せば、長軸約7.4m×短軸約3.4mとなり、当該集落最大の規模を誇る。柱穴は10本を数えるが、92と96については補助的な柱であったのか、深度とともに10cm程と浅く概して貧弱であった。この2個以外は、最も深い91が56cm、最も浅い87の場合でも28cmの深度があり、8個の平均もおよそ41.9cmと安定した深度を保っている。覆土の断面にて柱痕が確認できた柱穴は、87・88・91・93・103の5個となるが、痕跡から見た柱の直径は91で22cm程となる。炉跡は、2基検出されたが、S F - 90は焼土化が余り顯著でないことから、補助的な炉であったと考えられる。これに対し、S F - 66は長軸約70cm、幅約45cmの不整椭円形を呈したやや大形の炉跡であり、焼土化も顯著であった。床面については、炉跡がかなり良好な状態で検出されたことから期待されたが、乾燥化の影響などもあって明らかな痕跡として確認できなかった。S I - 105c住居跡（64・88・94・97）は、柱穴が4本のみで奥柱が検出されていない。また、柱穴88は105a b住居と共有しつつ重複する。ただし、互いの新旧関係は、不明である。

S I - 106住居跡群（図版39） S I - 105住居群の西側にほぼ隣接して検出された。立地的には平坦地の中央付近に相当しており、概して安定した地点といえそうである。当該住居については、調査段階においてS K p - 55~57・61・101・102の6本柱とし、亀甲形を呈する六角形の住居との認識で調査を進めていた（S I - 106a）。その根拠は、これら6本を結ぶ平面形の事例が、柏崎市千古塚遺跡S B - 20建物状遺構〔柏崎市教委1990〕や、北魚沼郡堀之内町瓜ヶ沢遺跡の1~4号住居跡〔新潟県教委1985〕などにあり、これらとの関連を想定したことであった。しかし、これら両事例がともに陥し穴間連構との関わりが想定されることに対し、兩池遺跡はこれに該当せず、また整理段階において、縄文中期前葉に5本柱五角形の住居が想定されることが判明したため、S I - 106b・106cの2棟の住居に改めたものである。

S I - 106b住居跡（55・58・60・61・102）は、間口側の柱穴が概して大きく、奥行も深いため、五角形の圓形としては頂部がかなり鋭角となる。全体の平面形は、やや右側に偏っている。柱穴112と60は、ともにS I - 106cと柱穴を共有するものであるが、特に底面にテラスを持っており、重複の結果と考えられる。S I - 106c住居跡（56・57・60・101・102）は、106bより奥行が短くなり、その分頂部の角度が鈍角となった事例である。両者の新旧関係等は明らかでなく、また柱穴の並びについては、S I - 106aの取り扱いも含めて課題を残るものである。

S I - 116住居跡群（図版39） 最も広い平坦地部の中央からやや南西側に位置する緩やかな斜面に検出された。本住居群の検出にあたっては、地面が若干焼けた地床炉状のプランが確認されたことから、住居跡の存在を確信し、遺構検出作業を集中的に実施した結果、検出されたピット群で想定したものである。想定した住居は、aとbの2棟であるが、炉と想定したS F - 111はS I - 116a住居の間口側によく取り込まれる位置となった。また、間口側の方位は、ほかの住居が南東から南側あるいは南西から西側を指向することに対し、季節風が強い北北西から北側を指向したものとなって、やや特異さを感じされる住居跡となった。これは、平坦地中央を意識した可能性とも受けとめられるが、現状では断定できない。ま

第9表 雨池道路遺構一覧表

番号	グリッド	種別	平面形	復原長軸×短軸寸法cm	遺物	備考	番号	グリッド	種別	平面形	復原長軸×短軸寸法cm	遺物	備考
001	L-34	焼土坑	円形	134×124	24		042	N-36	ピット	円形	29×26	25	S I -117 c
002	L-34	焼土坑 落込み	円形	560×47	18		043	M-36	柱穴	円形	22×22	6	
003	L-34	落込み	円形	275×36	21		044	M-38	ピット	円形	27×27	15	
004	L-34	ピット	円形	39×29	13		045	N-38	ピット	円形	39×35	8	
005	—	—	—	—	—		046	N-38-40	構	円形	162×28	5	
006	—	—	—	—	—		047	O-39	溝	円形	176×35	8	陶器器 1
007	L-34	焼土坑	円形	92×71	16		048	P-40	ピット	円形	27×25	29	1・2・7・9
008	M-33	焼土坑	円形	108×96	22		049	N-40	ピット	円形	25×22	17	45
009	N-33	焼土坑	円形	65×74	18		050	N-40	柱穴	円形	29×28	16	S I -116 b
010	M-33	柱	円形	36×44	14		051	M-40	土坑	横四形	(70×(2))	16	
011a	M-33	柱	円形	27×23	8		052	M-40	燒土坑	横T形	82×73	14	
012a	M-33	柱	円形	33×22	16		053	N-40	燒坑	横T形	91×59	12	
013	M-33	落込み	円形	52×37	13		054	M-41	柱	円形	40×40	34	(±5)
013	M-33	落込み	円形	(34×34)	5		055	M-41	柱穴	円形	38×35	24	石割片 1
014	N-33	土坑	円形	58×51	12		056	M-41	柱	円形	26×26	27	S I -105 a c
015	M-34	落込み	円形	(45×36)	5		057	M-41	柱穴	円形	26×26	14	S I -105 a c
016	M-34	落込み	円形	(39×30)	9		058	M-41	柱穴	円形	26×26	14	S I -105 b
017	M-35	落込み	円形	(38×28)	6		059	L-41	落込み	不定期	225×150	24	風炉灰
018	M-35	落込み	円形	(44×35)	8		060	M-41	柱	円形	43×22	21	(±4)
019	M-35	落込み	円形	49×39	13		061	M-41	柱穴	円形	43×42	34	(±3)
020	M-35	落込み	円形	(50×38)	16		062	M-42	ピット	円形	(40)×38	9	S I -105 a b
021	M-36	ピット	円形	24×13	12		063	M-42	柱	円形	85×77	8	
022	M-36-21	ピット	円形	18×15	15		064	M-42	柱穴	円形	41×58	20	S I -105 c
023	M-36	ピット	円形	12×11	8		065	M-42	柱穴	円形	138×130	36	(±1)
024	M-36	ピット	円形	30×18	9		066	M-42	柱穴	円形	107×154	12	
025	M-36	落込み	円形	35×30	29		067	M-42	炉	丸形	97×86	17	
026	M-36	落込み	円形	(27×36)	17		068	N-O-41	通路	通路跡	—	—	
027	M-36	柱穴	円形	39×27	27		069	O-41	通路	通路跡	幅170	12	
028	M-36	柱穴	円形	38×26	25		070	N-42-43	通路	通路跡	—	—	
029	M-36	柱穴	円形	30×30	9		071	M-43	柱穴	円形	135×160	7~44	
030	M-36	柱穴	円形	30×35	21	(±2)	072	M-43-44	燒土坑	円形	118×105	6	
031	M-36	柱穴	円形	29×27	23	(±1)	073	N-40	柱	丸形	20×20	11	(±1)
032	M-36	柱穴	円形	33×31	8		074	N-40	柱穴	円形	45×40	18	
033	M-36	柱穴	円形	30×27	6		075	O-39-40	土坑	円形	49×40	17	
034	M-36	柱穴	円形	30×26	20		076	O-40	柱穴	円形	30×30	35	(±1)
035	M-36	柱穴	円形	34×34	25		077	O-40	柱穴	円形	36×39	15	S I -118 a b
036	M-36	柱穴	円形	28×28	21	(±1)	078	O-40	柱穴	円形	37×33	9	S I -118 a
037	M-36	柱穴	円形	26×21	13		079	O-40	柱穴	円形	—	—	
038	M-36	柱穴	円形	42×40	15		080	O-40	柱穴	円形	—	—	
039	M-36	柱穴	円形	32×30	28		081	O-40	柱穴	円形	—	—	
040	M-36	柱穴	円形	48×35	19	(6±4)	082	O-40	柱穴	円形	—	—	
041	N-36	ピット	円形	27×25	6		083	O-40	柱穴	円形	—	—	

推定住居跡一覧表

番号	グリッド	種別	平面形	裏面長軸×短軸(厚度)cm	遺物	備考	番号	グリッド	種別	柱穴番号	裏面長軸×短軸(厚度)cm	主軸方位	遺物	備考
079	O-40	土 塵	円 形	(55×43)	10	(±1)	S 1-118 b	S 1-118 b	住居跡	67-88-91-92	738-342	N-55°-W	土器片	国歴38-39
080	O-40	土 塼	円 形	60×52	17	(±1)	S 1-118 a	S 1-118 a	住居跡	63-95-96-98	(表辺×奥辺)	16-38	土器片	少歴66-90
081	O-40	柱穴	円 形	27×25	29	(±1)	S 1-118 a	S 1-118 a	住居跡	93-103				
082	O-40	柱穴	円 形	23×23	23	(±1)	S 1-118 a	S 1-118 a	住居跡	92-93-96-98	352-238	N-53°-W	土器片	国歴38-39
083	O-40	柱穴	円 形	33×30	19	(±6)	S 1-118 b	S 1-118 b	住居跡	89				
084	O-40	柱穴	円 形	32×30	9	(±1)	S 1-118 b	S 1-118 b	住居跡	87				
085	O-40	柱穴	円 形	42×37	8	(±1)	S 1-118 a	S 1-118 a	住居跡	86				
086	O-40	柱穴	円 形	27×25	11	(±1)	S 1-118 a	S 1-118 a	住居跡	85				
087	M-40	柱穴	円 形	(32×28)	28	(±1)	S 1-105 b	S 1-105 b	住居跡	84-88-91-95	342-354	N-58°-W	土器片	国歴38-39
088	M-42	柱穴	方角状	39×33	56		S 1-105 b c	S 1-105 b c	住居跡	103				少歴90
089	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
090	M-42	戸 跡	不規形	49×41	2		S 1-105 b	S 1-105 b	住居跡	64-88-94-97	456×(378)	N-20°-E	33	国歴38
091	M-42	柱穴	椭円形	51×41	55	(±1)	S 1-105 b	S 1-105 a	住居跡	64-88-94-97	456×(378)	N-20°-E	33	国歴38
092	M-42	柱穴	円 形	40×36	10	(1)	S 1-105 a	S 1-105 a	住居跡	64-88-94-97	456×(378)	N-20°-E	33	国歴38
093	M-42	柱穴	方角状	53×45	35	(±1)	S 1-105 a	S 1-105 a	住居跡	64-88-94-97	456×(378)	N-20°-E	33	国歴38
094	M-42	柱穴	椭円形	36×34	27	(±2)	S 1-105 c	S 1-105 c	住居跡	101-102				
095	M-42	柱穴	椭円形	46×39	36		S 1-105 b	S 1-105 b	住居跡	102				
096	M-42	柱穴	椭円形	31×27	8		S 1-105 a	S 1-105 a	住居跡	102				
097	M-42	柱穴	椭円形	33×27	10		S 1-105 c	S 1-105 c	住居跡	102				
098	M-42	柱穴	円 形	41×40	30	(±2)	S 1-105 a	S 1-105 a	住居跡	102				
099	M-42	柱穴	椭円形	55×46	38		S 1-105 a	S 1-105 a	住居跡	102				
100	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
101	M-41	柱穴	円 形	33×32	23		S 1-105 a c	S 1-105 a c	住居跡	110-119-113	352-356	N-10°-W	4-8-30	国歴39
102	M-41	柱穴	椭円形	30×30	20	(±2)	S 1-105 a c	S 1-105 a c	住居跡	114-115			26-31	少歴10
103	M-43	柱穴	椭円形	34×27	37		S 1-105 b	S 1-105 b	住居跡	110-112-113	370-268	N-3°-W	10-11-13	国歴39
104	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	(少歴110)
105	M-43	柱穴	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	国歴39
106	M-41	柱穴	円 形	39×37	28		S 1-105 a	S 1-105 a	住居跡	114-115	348-31-33-35	28-31-33-35	6	国歴40
107	L-34	柱穴	円 形	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
108	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
109	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
110	N-40	柱穴	椭円形	35×30	32	4-8-20-	S 1-116 a	S 1-116 a	住居跡	28-30-34-35	337-278	N-56°-E	国歴40	
111	N-40	柱穴	不定形	37×31	26-31	—	S 1-116 a (b)	S 1-116 a (b)	住居跡	40				
112	N-41	柱穴	椭円形	22×19	7	(±3)	S 1-116 a b	S 1-116 a b	住居跡	27-35-37-39	334-440	N-80°-W	国歴40	
113	N-41	柱穴	円 形	24×22	22		S 1-116 a b	S 1-116 a b	住居跡	45				
114	N-41	柱穴	円 形	28×27	10		S 1-116 a b	S 1-116 a b	住居跡	86				
115	N-40	柱穴	椭円形	25×25	29		S 1-116 a b	S 1-116 a b	住居跡	86				
116	N-40-41	柱穴	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	国歴40
117	M-36	柱穴	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	国歴40
118	O-40	柱穴	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	国歴40
119	N-41-N-44	柱穴	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	国歴40

た、aとbの各住居は、両者とも5本柱で想定したが、平面形がかなり相違するにもかかわらず、3本（112・113・114）までが重複・共有するものとなった。近在には、ほかに3個ほどのピットが残されており、まったく別の住居が存在する可能性は否定できない。

S I - 116 a 住居跡（110・112・113・114・115）は、間口柱の位置から、S F - 111炉跡が伴う可能性が高い。床面については、この炉跡の痕跡がS I - 105 b 住居のS F - 90炉よりも、焼土化が軽微で範囲も小さく、痕跡が少ないとことから、表土中にあってすでに削平された可能性が考えられる。5本柱の平面形は、S I - 106 b に近似するが、それより奥柱側頂部の角度がやや鈍角を呈している。S I - 116 b 住居跡（50・12・113・114・115）は、a住居から間口側をやや縮小させた形を呈する。平面形としては、S I - 117 b に近似し、規模等も同程度となっている。

S I - 117 住居群（図版40） 今回想定された住居跡群の中では、最も西側に位置し、孤立したように見受けられる位置から検出された。地形的には、平坦地がやや尾根状となり、南側へ緩く傾斜する地点に相当する。想定された住居は、a・b・cの3棟である。本住居群3棟のうち、aとbは、5本柱のうち3本までが重複・共有するものであるが、平面形もほぼ同形態であることから、連続的に建て替えがなされた可能性が高い。しかし、S I - 117 c 住居については、a・bの各住居とは柱穴をまったく共有せず、主軸の方位も45度ほどずれ、さらに奥行の長い平面形を呈するなど相違が多い。また、本住居群の間口側とは、おおむね西側を指向するが、東半部の住居には類例がなく、柱穴の位置関係とその平面形にも差異が見られる。この事由としては、時期的にやや隔たるか、あるいは別の単位集団によって建てられたものなどが想定されよう。S I - 117 a 住居跡（28・31・33・35・40）と、これとほぼ同じ位置で重複するS I - 117 b（28・30・34・35・40）は、S Kp - 28・40・35の3本の柱穴を共有する。この内、40と35についてはテラスを持っていることからピット2個の重複である可能性が推測できる。住居の建て替えに際し、旧来の柱穴を修復した可能性が高い。S I - 117 c 住居跡（27・36・37・39・43）は、5本柱住居単独構造の中では最も奥行が長い事例である。なお、本住居には、深鉢が埋設されていたS K - 38土坑が付随する可能性が高い。

S I - 118 住居跡群（図版40） 遺跡東部に広がる平坦地から、南西に向かう緩斜面に位置し、一帯からは柱穴9個以外に直径の小さな土坑状の遺構4基が検出されている。想定された住居は、aとbの2棟であるが、重複・共有する柱穴は1個、2棟で検出された9個の柱穴全てを使用して設定した。S I - 118 a 住居跡（76・78・82・83・86）とS I - 118 b 住居跡の平面形は、奥行がaが狭くbが深い違いがあるものの、奥柱側の形態はほぼ同様であり、両者とも間連が深い住居跡と見られる。2棟の間口は、斜面の下方に向かい、ともに5m前後と本集落内では最も広い事例である。住居プラン内には、重複する小土坑2基が検出されているが、ともに浅く、遺物もないことから時期不詳であり、当該住居との関係は不明である。

その他の住居跡 柱穴状のピットは、推定できた住居に使用された以外にも10個余りが検出されている。これらの内、推定住居範囲外のピット群としては、M - 36グリッド北西部とN - 38～39グリッド北辺部が挙げられる。ともに調査区境界に接するため、当該地点にも住居が2～3群程度推定できるものと考えられる。

b 土 坑

縄文時代の所産と考えられる土坑は、S K - 38・74・75・79・80の5基である。しかし、確実な縄文土坑は、深鉢を埋設したS K - 38のみであり、その他の4基については、土器類等の遺物がなく、厳密には時期を特定できない。今回は、推定された住居あるいはピット群に近接した位置に検出されたため当該期としたものである。具体的には、時期及び性格は不詳である。

3) 中世・近世以降の遺構各説

兩池遺跡における中世・近世以降の遺構としては、焼土坑と旧道跡が該当する。本項では、大きく両者に分けて概要を記したい。なお、土坑や道の略号については、煩雑さを避けるため省略した場合がある。

a 焼土坑（図版42）

焼土坑とは、壁面あるいは床面（底面）が火を受け焼土化した浅い土坑状遺構の総称である。これらの遺構は、本遺跡では合計9基が検出された。それぞれの平面的な分布をみると、2~3基程度のまとまりが認められる。本項ではこれらをA~Dまでの4群に大別して概観したい。

各群の構成は、3基構成がA群（1・7・8）とC群（62・65・67）、2基構成はB群（52・53）であり、D群（72）は単独の1基のみ検出された事例である。また、各焼土坑の規模を見ると、直径に大小がうかがわれる。便宜的に類別を行うとすれば、第I類は直径が1.3m程の大型（1・65）、第II類は直径1m程度の中型（7・8・52・53・63・67・72）とすることが可能である。

焼土坑における各群の状況を見ると、3基で構成されたA群とC群は、第I類1基に対し、第II類が2基付随していることが判る。これに対し、B群は第II類が2基、D群にいたっては第II類が1基となって、それぞれ大型クラスである第I類が欠落していることがうかがわれる。このような状況からすれば、A群とC群で確認される大型1基・中型2基の3基構成が基本と考えられるのではないかだろうか。したがって、B群には大型クラスの1基が調査区外に想定され、D群については、大型1基と中型1基の2基が存在した可能性が指摘できる。後者のD群については、唯一のSK-72の深度がほとんどなく、円形状に焼土面が検出されたものであった。したがって、地山をほとんど掘り窪めない焼土坑が想定されよう。

焼土坑の存在形態が、異形態の組合せという事例は、すでに尾根坂遺跡でも指摘されている〔柏崎市教委1996〕。しかし、前者の事例は、2基構成が原則であり、しかも深い土坑と浅い土坑の組合せであり、本遺跡例とは少し状況が異なる。ただし、大型と中型の構成は若干うかがわれそうであるが、事例が少ないとこと、具体的な機能や目的が不明であることから、今後の課題としておきたい。

なお、当該焼土坑の機能等については、木炭生産に伴うもの、つまり木炭窯の可能性は否定できない。

b 旧道跡と小溝跡（図版43）

旧道跡の痕跡は、台地の縁部分において3カ所検出された。これらの旧道は全て、半田方面から藤橋・輕井川方面へと向かう尾根道である。69については、工事以前まで機能していたことから、現状でも溝状の窪みとなっていたが、ほかの70・71についてはほぼ埋没した状態で検出された。70の覆土には、掘り込まれた際の地山壁面が風化し、粒状化した土砂が多く堆積していた。これに対し、71の最下層は、地山と灰色粘土が薄い互層を呈し、固く縮まった状態で堆積しており、長期間にわたる使用の痕跡と判断できる。中層を構成する5・4・3層については、70と同様地山風化土の堆積が顕著となる。しかし、第2層では再び粘性が強く縮まりのある堆積が認められ、かつ水平であることから、道として機能したものと考えられる。これら旧道の変遷については、地滑り等による地形の変化や当該地で分岐する半田東部への道の機能等との関係が想定されるが、69を最新としても、その他の前後関係は不明とせざるを得ない。

小溝跡（SD-2・46・47）は3条が検出されたが、全て方位を同じくしており、さらにSR-69との関わりが深いことがうかがわれる。本節第1項でも述べたごとく、何らかの意図のもと、土地を区画する目的を持って掘削されたと考えられるが、ほかに遺構がなく明らかにできなかった。なお、SD-47から幕末の伊万里染付碗破片が出土している。

4 出土遺物

雨池遺跡から出土した遺物は、大半が縄文時代のものであり、中世・近世以降の遺物としては、僅か1点の肥前系染付碗の破片が得られたのみである。本節では、遺物量にかなりの差異があるが、時代別に概観したい。

1) 縄文時代の遺物

縄文時代の遺物は、縄文土器を主体に若干の石器類で構成される。以下、種別にしたがい記述するが、縄文土器類における個別の属性等については、第10表にまとめたので参照されたい。

a 縄文土器（図版44・45）

出土状況 本遺跡から出土した縄文土器は、およそ170点余りに過ぎず、その出土量はかなり少なかったと言える。その経緯としては、発掘作業にあたって重機を使用して表土を除去していることから、包含層内の遺物について、かなりの部分が失われた可能性が考えられる。しかし、試掘調査段階の所見あるいは調査区壁等の観察からしても、遺物包含量が少なかったことは間違がなく、調査方法がほぼ同じ大沢遺跡の事例と対比してもその少なさが理解できる。また、本遺跡出土の土器類は、過半が遺構内から出土したが、その他はグリッドで取り上げた包含層出土品である。遺構内からの出土例で、一定のまとまりが把握された事例はなく、またグリッド出土例においても、その出土状況は散発的であり、土器捨て場と表現できそうなまとまりは確認されなかった。このため、集落に伴う廐棄場の所在については、未調査区が残された遺跡北部を想定せざるを得ないこととなる。本遺跡における土器類の僅少さとは、廐棄場の未確認という調査区域の問題と、集落の性格や存続期間あるいは人口密度、そのほか縄文社会内における全ての生活様式と関わりを持つものと考えられる。特に、本遺跡の場合は、一時的・季節的な集落という意味合いも含まれる可能性が高いことから、集落の性格と深い関わりを持っていることが想定される。

焼成と色調 縄文土器の焼成具合は、埋没状況や酸性土壤の影響等にも左右されるが、概して軟質で不良と判断されたものが大半を占め、普通程度のものも少なかった。色調については、大まかには橙色系と褐色系に大別されるが、図示した中では前者が80%余りと大半を占める。橙色系で最も多い色調は、にぶい橙色（約45%）であり、次いで橙色（約20%）となり、これら以外には黄橙系の色調のものが確認される。褐色系あるいは暗色の強い事例については、灰褐色系と褐色・赤褐色系のものなどが見られるが、総体的に少なく、しかも焼成段階における黒斑等が含まれている可能性が高く、基本的にはにぶい橙色～橙色を基調としていたことがうかがわれる。

胎土とその分類 大沢遺跡の項で、すでに抽出する混和材の概要やその分類を述べたところであるため、雨池遺跡における状況を中心に述べたい。なお、混和材の種類については、A：硬質砂粒、B：橙色土粒、C：褐色土粒、D：白色岩粒である。

雨池遺跡出土土器類の胎土に含まれる混和材は、Aとした硬質砂粒を含む事例が大半を占め、これらとCの褐色土粒およびDの白色岩粒で構成される。

混和材の組合せパターンは、第1類から第11類までの11種のうち、第7類と第9類を除く9種が確認できる。この点は、全てで6種しか確認されなかった大沢遺跡とは大きく相違する。これらの内、最も多い事例は第5類であり、次いで第4・6・8・11類が続き、数個程度と僅少な類は、第1・2・3・10類の

第10表 雨池遺跡出土縄文土器観察表

番号	出土位置	遺構番号	分類	縄文原体	色調	焼成	胎 土 裂 和 材				備考		
							硬質砂粒	褐色土粒	白色土粒	白色岩質			
1	N-40	SKp-48	第1類	—	にぶい緑	不良	○	—	△	○	第5類	2・7・9・20と同一個体	
2	N-40	SKp-48	第1類	—	にぶい緑	不良	○	—	△	○	第5類	1・7・9・20と同一個体	
3	P-38	トレンチ	第1類	—	にぶい赤褐	不良	○	•	•	△	第6類		
4	N-40	SKp-110	第1類	—	黄緑	不良	△	—	△	•	第4類	黒灰色土粒少量	
5	O-39⑤	—	第1類	—	にぶい緑	不良	•	•	•	△	第11類		
6	M-36	SKp-40	第1類	—	にぶい緑	不良	△	—	△	○	第5類		
7	N-40	SKp-48	第1類	—	緑	不良	○	—	△	○	第5類	1・2・9・20と同一個体	
8	N-40	SKp-110	第1類	—	にぶい緑	不良	•	—	—	—	第11類		
9	N-40	SKp-48	第1類	—	にぶい緑	不良	○	—	△	○	第5類	1・2・7・20と同一個体	
10	N-40	SKp-50	第1類	R.L.	にぶい緑	不良	△	—	○	•	第4類	11・13と同一個体	
11	N-40	SKp-50	第1類	R.L.	にぶい緑	不良	△	—	○	•	第4類	10・13と同一個体	
12	M-4215	—	第1類	R.L.	にぶい緑	不良	○	•	○	○	第5類	15と同一個体	
13	0・N-40	SKp-50	第1類	R.L.	灰褐色/緑	不良	△	—	○	•	第4類	10・11と同一個体	
14	O-40	—	第1類	—	緑	普通	•	—	△	•	第11類		
15	M-420	—	第1類	—	にぶい黄緑	不良	○	—	△	•	第4類	頬砂岩質	
16	M-42	SKp-93	第1類	—	にぶい緑	不良	○	•	○	○	第5類	12と同一個体	
17	P-39	トレンチ	第1類	—	黒灰	不良	○	—	—	○	第6類		
18	N-41	SKp-100	第1類	—	にぶい緑	不良	△	—	•	△	第6類	頬砂岩質	
19	P-39	トレンチ	第1類	—	にぶい赤褐	不良	○	—	—	—	第11類	外來系	
20	N-40	SKp-110	第1類	L.R.	にぶい緑	普通	○	—	△	○	第5類	1・2・7・9と同一個体	
21	L-34	S X-3	第1類	R.L.	にぶい緑	不良	—	○	○	—	第8類		
22	M-4023	—	第1類	—	緑	不良	•	—	○	—	第10類		
23	N-38-39	—	第1類	L.R.	緑	不良	•	—	△	△	第10類		
24	P-39	トレンチ	第2類	L.R.	にぶい赤褐	普通	○	—	•	△	第6類		
25	N-40	SKp-50	第2類	—	淡黄緑	不良	△	—	•	•	第11類		
26	N-40	SKp-110	第2類	R.L.	にぶい緑	不良	○	•	△	○	第5類	黒雲母微量・鈍赤痕文	
27	O-40	—	第2類	R.L.	にぶい緑	普通	△	○	•	•	第2類		
28	P-38	トレンチ	第3a類	L.R.	明褐色	不良	△	—	—	•	第11類	外來系・火山灰?	
29	N-40	SKp-50	第3a類	—	淡黄緑	不良	•	—	—	•	第11類		
30	両面削面	—	第3a類	L.R.	黒	不良	○	—	•	○	第6類	外來系・金雲母微量	
31	N-40	SKp-110	第3b類	R.L.	にぶい緑	不良	○	•	△	○	第5類		
32	M-423	—	第2類	L.R.	にぶい緑	不良	○	—	○	•	第3類		
33	M-42	SKp-97	第3b類	R.L.	にぶい緑	不良	•	△	○	•	第8類		
34	O-40	—	第3b類	R.L.	灰褐色	不良	•	•	•	—	第11類		
35	M-42	—	第3b類	R.L.	緑	不良	—	○	△	—	第8類		
36	—	—	第3b類	R.L.	緑	普通	—	○	•	—	第8類		
37	O-40	—	第3b類	R.L.	にぶい緑	普通	○	△	•	—	第2類		
38	M-42	SKp-93	第3d類	—	不明	褐色	不良	△	—	—	△	第6類	
39	N-40	SKp-50	第3d類	—	不明	淡黄緑	不良	△	—	—	—	第11類	
40	M-36	SKp-38	第3c類	L	にぶい黄緑	不良	○	—	△	•	第4類	晶条体	
41	M-41付近	—	第3d類	—	緑	良好	○	—	△	○	第5類		

胎土含有物 ○: 多量 □: やや多い △: 少量 *: 微量 -: 稀とんど含まれない

4種であった。

両遺跡を対比した特徴的な事実としては、大沢遺跡で主体的であったBの橙色土粒が含まれる事例が極めて少なく、また雨池遺跡で主体をなす第4・5・6類が大沢遺跡で確認できること、さらに大沢遺跡で過半を占める第7・8類が、雨池遺跡では第7類がなく、第8類も少なくなっていることが挙げられる。ただし、両遺跡とともに確認される事例として、第1・3・8類があることからすれば、互いの集落においてまったく交流がなかったとも言い切れない。これら両集落の関係については、土器群の検討とともに、後章にてまとめたいが、両者の差異を時間差や集団差など二者択一的な事由で短絡的に判断することは危険といえようである。

土器群の類別 雨池遺跡から出土した縄文土器はおよそ170点余りを数え、そのうち40点ほどを図示し

第11表 雨池遺跡出土縄文土器胎土分類調査表

番号	出土位置	通査番号	分類	縄文原体	色調	焼成	胎 土 製 和 材 料				備 考
							硬質砂粒	褐色土粒	白色骨粒	類別	
1 9	P-39	トレンチ	第1類	—	にぶい赤褐色	不良	◎○	—	—	—	第1類 外來系
2 7	O-40	—	第2類	R L	にぶい黄褐色	普通	△○	○△	•	—	第2類
3 7	O-40	—	第3・4類	R L	にぶい黄褐色	普通	○△	○△	•	—	第3類
3 2	M-4123	—	第2類	L R	にぶい褐色	不良	△○	○○	•	—	第3類
1 5	M-429⑨	—	第1類	—	にぶい黄褐色	不良	○○	—	△△	—	—
4 0	M-36	Skp-36	第1・2・3類	L	にぶい黄褐色	不良	△△	—	—	•	第4類
4 4	N-40	Skp-10	—	—	黄褐色	不良	△△	—	—	•	—
1 0	N-40	Skp-50	第1類	R L	にぶい褐色	不良	△△	—	○○	•	—
1 3	N-40	Skp-50	第1類	R L	にぶい褐色	不良	△△	—	○○	•	—
1 3	O-N-40	Skp-50	第1類	R L	にぶい褐色	不良	△△	—	○○	•	—
1 1	N-40	Skp-48	第1類	—	にぶい黄褐色	不良	○○	—	△△	○○	2 + 7 + 9 + 20と同一個体
2 2	N-40	Skp-48	第1類	—	にぶい黄褐色	不良	○○	—	△△	○○	1 + 7 + 9 + 20と同一個体
7	N-40	Skp-48	第1類	—	—	—	—	—	—	—	—
9	N-40	Skp-48	第1類	—	—	—	—	—	—	—	—
2 0	N-40	Skp-110	第1類	L R	にぶい褐色	普通	○○	—	△△	○○	第5類
3 1	N-40	Skp-110	第3・4類	R L	にぶい褐色	普通	○○	—	△△	○○	—
4 1	M-4121付近	—	第1類	R L	にぶい褐色	普通	○○	—	△△	○○	16と同一個体
1 6	M-42	Skp-93	第1類	R L	にぶい褐色	普通	○○	—	△△	○○	12と同一個体
2 6	N-40	Skp-110	第2類	R L	にぶい褐色	普通	○○	—	△△	○○	黒褐色斑点・擦糞痕文
6	M-36	Skp-40	第1類	—	にぶい褐色	普通	○○	—	△△	○○	—
5	P-38	トレンチ	第1類	—	にぶい赤褐色	普通	○○	—	•	•	—
1 7	P-39	トレンチ	第1類	—	にぶい赤褐色	普通	○○	—	•	•	—
1 8	N-41	Skp-100	第1類	L R	にぶい赤褐色	普通	○○	—	△△	△△	第6類
2 4	P-39	トレンチ	第2類	L R	にぶい赤褐色	普通	○○	—	—	—	—
3 0	南西斜面	Skp-93	第3・4類	L R	にぶい赤褐色	普通	○○	—	—	—	—
3 8	M-42	Skp-93	不明	—	—	—	—	—	—	—	—
2 1	L-34	S X-3	第1類	R L	にぶい褐色	不良	—	○○	○○	—	—
2 3	M-42	Skp-97	第3・4類	R L	にぶい褐色	不良	—	○○	○○	—	第8類
3 5	M-42	—	第3・4類	R L	にぶい褐色	普通	—	—	—	—	—
3 6	—	—	第3・4類	R L	にぶい褐色	普通	—	—	—	—	—
2 2	M-4023	—	第1類	L R	褐色	不良	•	—	○○	○○	第10類
2 3	N-36-39	—	第1類	L R	褐色	不良	•	—	○○	○○	—
2 5	N-40	Skp-50	第2類	—	淡黃褐色	普通	△○	—	•	•	—
2 8	P-38	トレンチ	第3・4類	L R	淡黃褐色	普通	△○	—	—	•	第11類
3 9	N-40	Skp-50	第3・4類	L R	淡黃褐色	普通	△○	—	—	•	—
5 9	O-39⑩	Skp-50	第1類	—	淡黃褐色	普通	•	•	•	△—	—
8	N-40	Skp-110	第1類	—	にぶい褐色	普通	•	—	—	—	—
1 8	O-40	Skp-110	第1類	—	にぶい褐色	普通	•	—	—	—	—
2 0	O-40	Skp-50	第2・3類	L R	淡黃褐色	普通	•	—	—	—	—
2 4	O-40	Skp-50	第2・3類	H L	淡黃褐色	普通	•	—	—	—	—

胎土含有物 ◎：多量 ○：やや多い △：少量 ■：微量 —：ほとんど含まない

たが、一つの縄文集落からの出土量としては少ないといえる。また、一括的に捉えられる事例がなく、縄文土器の時期もおおむね新崎式期に限定されるため、本項では大きく4類に大別して概観したい。

第1類土器（図版44-1～23）：半截竹管を施文具とした文様が器面に施された一群で、原則的には在地における北陸系の土器群とすことができる。口縁部の文様は、半截竹管による隆線文とともに、C字爪形文（3・4）、縦位沈線文（1・2・10～13）、蓮華文（5）が少量ずつ認められる。縦位沈線文の施文具については、半截竹管ではなく棒状工具によるものである。1・2は、細く鋭い沈線が曳かれる。蓮華文は、半截竹管により縦位沈線を施した後、上半部に楔形の刻みを施して蓮華文を表現する事例である。技法的には、三角形印刻文とほぼ同じであるが、結果的に表わされた文様効果は、半截竹管先端部を印刻した蓮華文に酷似する。胴部文様としては、B字状文的な区画がなされ（6・12・14など）、格子文が施されるものなどが認められる（14・15）。地文としは、縄文地文が多いように見受けられ、縦位に半截竹管による隆線が施されるが、個体数が少なく、細片が多い場合はきりしない。

第2類土器（24～27・32） 口縁部に若干の装飾が施されるが、胴部文様のほとんどを縄文地文とする半精製的な土器を一括した。24は頸部下に突起が付され、32ではやや肥厚した口縁部と胴部に縄文が施され、頸部は強く撫でられ無文帯を形成する。口縁部の縄文はR L単節斜縄文、胴部にはL R単節斜縄文が施文されるが、胴部では一部撫りが崩れている。26は結節部の圧痕が、また27は肥厚した口縁部に撫糞の圧痕が施されたものである。

第3類土器(28~31・33~41) 本類には、縄文地文のみ、あるいは無文のままとした、いわゆる粗製土器を一括した。地文の種類によってa~dまでの4類に細分しておきたい。

a類(28~30)は、LR単節斜縄文が施される一群、b類(31・33~37)はRL単節斜縄文が施される一群である。縄文原体の撚り方向は、第1・2類を含めてみると、RLが12例に対し、LRが5例であり、RLが約70%を占める。大沢遺跡の場合、本遺跡とは逆にLRが84%と圧倒的多数を占めることと大きく相違する。胎土における混和材の相違とともに、両遺跡出土土器の差異を際立たせる事実とすることができる。c類は、撚糸文が施されるが、本遺跡ではSK-38土坑に埋設されていた深鉢の1点(40)だけである。40については、底部が欠失していたが、特殊な用途のため、意識的に底部を抜いたものと考えることができる。d類は、無文土器を一括した。41は底部破片であり、胴部文様等が不明なため本類に含めたものである。底径は9.8cm、内底面にはナデ痕が観察され、外縁には胴部片の輪積剥離痕が残されている。

b 石器類(図版45)

本遺跡で確認された石器類は、磨石関係が2点、敲打石1点、そして翡翠原石が1点である。出土状況は、遺構内から出土した事例が2点(42・45)あるが、それ以外は、N-41グリッド出土が1点、調査区西側から1点が出土している。

42は、SKp-93柱穴から出土した翡翠の原石である。住居としてはSI-105aに伴うことになる。裏面を自然面とするが、概して平滑であり、表の剥離面にも摩滅した部分が確認される。摩滅面そのものは曲面的であることから、何らかの柔らかな品物を擦るようにして使用された可能性が高い。白く淡い緑色を呈し、石質そのものはやや透明度が低いことから、翡翠の品質としてはかなり劣るものと考えられる。重さは175gを計る。45は、SKp-49から出土した平板な安山岩である。裏面は、節理面で剥離した痕そのままで、摩滅はそれほど著しくないが、表面はやや摩滅し、敲打を受けた痕が浅い窪みとなっている。重さは、1,137gを計る。本ピット付近には、4個が集中し、そのうちのSKp-50についてSI-116b住居の柱穴としたが、ほかに想定される住居跡もないことから、SI-116住居跡群に伴う可能性が考えられる。また磨石でも、43についてはN-41グリッド出土であり、やはりSI-116住居跡群との関わりが想定される。本例は、米山特有の輝石安山岩製で、過半が欠失している。現存部の重さは288gである。45は、調査区西側から出土した磨石である。石材は緻密な安山岩である。平坦部両面は、余り顯著ではないが使用された摩滅痕が認められる。また、上下頂部には微かに叩いた痕跡をとどめる。重さは、332gを計る。

2) 中世・近世以降の遺物

本遺跡における中世・近世以降の遺物としては、肥前系磁器染付碗破片など数点が出土した程度である。肥前系陶磁器の内、1点の出土位置は、P-40グリッドのSD-47小溝内である。破片は、口縁部から碗部腰部分にかけての細片で、法量等の計測は難しい。文様は呉須によって描かれ、内面は見込みと口縁部に2条の平行線が曳かれ、外面は腰部分の上位に松葉状の簡略な文様が描かれている。器肉は概して厚く、廉価品と考えられるものである。時期については特定できる事例もないが、おおよそ19世紀前半頃と予想され、出土した溝とともに、これと平行するほか2本の溝跡の一時期を示すものと考えられる。このため、これら小溝区との関わりが強いSR-67旧道路の時期もほぼ同時期と推測できる。

なお、中世あるいは近世前半については、遺物が無く、当該期の遺構は特定できない。

5 調査のまとめ

雨池遺跡から検出された遺構・遺物の時期は、縄文時代と近世以降に大別できる。各時代の性格付けについては、前者が居住空間としての集落、後者はむしろ集落とは離れた外縁的なイメージが強く、生業活動等の場と考えられ、各時代によってその様相が異なっている。本章最後となる本節においては、本遺跡の調査結果についてまとめたいが、近世以降の焼土坑や旧道跡、および土地の区画を意図したと考えられる小溝跡等については、すでに本文にて触れているため、縄文集落について述べることとした。

縄文集落の時期 本遺跡から出土した土器類は、およそ170点余りと少なく、遺構内一括として扱える資料はない。また、時期判定に用いることができる第1類土器も20点余りと、各遺構の変遷を追えるようなレベルにはないことから、相対的な特徴から集落の時期を見極めることとした。

第1類土器に特徴的な文様は、基本的には半截竹管を施文具とした文様で占められる。文様の種別としては、口縁部に横位の隆線文や連続爪形文、そして継位短沈線文・蓮華文が認められる。頸部以下胴部については、隆線文によるB字状文的な文様や、その中に正格子目文を充填するものなどがある。これらの中では、比較的多い文様としては、口縁部等に施される継位の短沈線文が挙げられるが、県内の事例としては巻町大沢遺跡IIIa期に顕著である。蓮華文は、唯一1点の出土であるが、上位を三角形に印刻したように描出されていることから、一段階古く位置付けられる可能性を持っている。ただし、本例は細片であり、包含層から出土していることからすればにわかに判断はできないが、とりあえず本資料の存在から巻町大沢II期（新保式III期）を上限としつつも大沢IIIa期の幅の中で捉えておきたい〔巻町教委1990〕。

集落の景観と構成 雨池縄文集落において想定された住居は、5群11棟である。その配置については、L～N-40～42グリッドの広い平坦地の中央部に3群6棟もの住居が構築されている点は、広場を持つ集落である大沢遺跡のあり方と大きく相違する。この点は、北辺を中心に未調査区があるため、断定することは難しいが、本集落には、広場的な空間が設定されていなかった可能性が高いのである。また、集落を構成する遺構の一つとして、大沢遺跡では貯蔵穴が多く検出されているが、本集落で見当たらないことは、冬の備えがなされていない集落と考えられる。ただし、S I-105a bは、5本柱住居を連結した大型住居であり、柱穴もやや大きくそして深く、2つの地床炉を備え、しかもその一つはかなり焼土化が著しいものであった。したがって、住居そのものの構造は、ほかの住居より格段に堅固であったと考えられ、住居内における食料の保管もそれほど難しくないものと思われる。このため、本住居が、大沢遺跡におけるSB-292建物跡と同様に、集落構成員に必要な食料を保管する役割も担っていた可能性は否定できない。しかし、本集落内における住居全てが一時期の所産ではないことは確かであり、一単位集団が単独で越冬する場合も例外的にあったのかも知れない。これらの点については、対比可能な調査例がほかにならないことから、結論的なことは留保せざるを得ないが、少なくとも明確な広場的空間が設定された大沢遺跡とは異なり、住居の配置に特別な制約が伴わない集落が営まれていたとすることができよう。

ところで、大型住居でもあるS I-105a b住居跡において、南端の柱穴であるSKP-93内から翡翠の原石1点が出土している。特に注目される点とは、翡翠原石の表面の一部が研磨ないしは摩滅している痕跡が認められる点であり、それが剥離面にまで及んでいることを指摘しておきたい。時期的には大沢IIIa期に並行すると考えられるが、この時期はいまだ翡翠の利用がそれほど顕著でないことから、今後改めて検討する必要がありそうである。

V 雨池古窯跡

1 遺跡と調査

雨池古窯跡は、柏崎市大字横山字雨池地内に所在する。平成4年、市内在住の曾田一之丞氏が大量の須恵器片を採集したことが、本窯跡発見の端緒となった。採集された須恵器片には、焼き歪みや溶着の顯著なものが多く、須恵器窯の存在を示すに充分であった。その後、曾田氏により採集地点についてのご教示を受けたところ、雨池遺跡（第IV章）の斜面下にて窯跡を発見することができたため、調査を実施するに至った。

1) 立地と基本層序

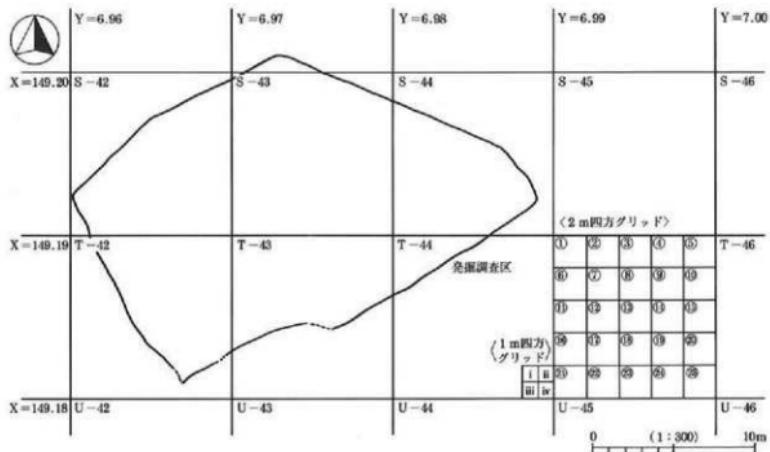
遺跡範囲の現況は山林であるが、樹木の多くが伐採されていた。さらにその伐採作業に伴い、重機が移動するための簡易道路が掘削されていたので、地肌は露出して、擾乱を多く受けた状態であった。試掘調査段階では、伐採された樹木が遺跡範囲内に置かれていたが、それらを取り除いて確認すると、多くの焼土が散布しており、掘削された路面や廃土中に大量の須恵器片が含まれていた。

立地と周辺の微地形 横山東遺跡群が分布する横山東部丘陵は、幾筋もの沢がめぐる中位段丘である。本報告書ではこれらの沢に大きくA～Iの名称を与えており、雨池古窯跡が立地するのは、F沢の内部にあたる（図版1）。F沢は、当該丘陵を南東側の丘陵へと接続させる尾根を南西方向に開析している。尾根上は概して平坦であるが、この平坦部と丘陵部との比高は約11～12m、斜面は40～50%と急な斜面をなす。さらにF沢と大きくとらえた沢内にも、幾筋かの小さな沢が認められるが、調査区内を貫流している2筋の小さな沢については、西側からF-1沢・F-2沢とした。

調査区は、F沢の北側斜面にあたり、標高約8～13mの範囲に位置する（図版46）。F-1沢は、南西方向から調査区内で南へとやや向きを変え、F-2沢は、北東から東へ向きを変えて調査区を通過するが、両者は調査区内で合流して沢底部を流れる。S X-04とした須恵器窯跡は、F沢底奥部に近く、F-1沢およびF-2沢に挟まれた地点に位置している。窯の遺存していた部分は標高約10m付近で確認することができ、20～30°の斜面に対し、等高線に直交するように築かれたと考えられる。

基本層序 前述したように、本調査区内では地山土が露出して擾乱を受けた部分もあったことから、基本層序を良好な状態で観察できる地点を見出すことは困難であったので、ここではF-1・2沢において確認することとしたい。なお2つの沢の土層には、堆積した層序に部分的なずれがあることを観察することができる。これは過去に発生した地滑り等を想定させる断層の痕跡と考えられる。

本調査区における基本層序は、おおよそ第0層：褐色土、第I層：（暗）褐色土、第II層：黒色土、第III層：褐色土、第IV層：黄褐色土とすることができる。第0層は、工事による盛土や廃土による土層で、現表土層をなしている。第I～III層は、全体的に暗色化した色調を呈している。有機物の含有が多いと思われ、基本的には沢内地盤土層と考えられる。第IV層は、黄褐色を呈する地山土層であるが、沢内では黄白色あるいは明茶褐色を呈する部分もあり、全体としてやや砂質を帯びている。また本調査区では地山漸移層の形成は確認できなかった。



第7図 雨池古窯跡調査グリッド配置図

2) 調査の方法とグリッド

今回の発掘調査区については、平成4年度に実施した確認調査の結果に基づいて設定された。確認調査では、大トレンチ1本と小トレンチ7本を合計約364m²にわたって掘削したが、S X-04須恵器窯跡が検出された大トレンチ以外では明確な遺構を検出することができなかった〔柏崎市教委1993〕。そこで、この大トレンチのみを本調査区の対象としたので、最終的な調査面積は約300m²となった。ただし、調査区は急斜面にあたるため、実面積は330~350m²と思われる。

調査区内は、既に確認調査段階で表土の除去は終了していた。したがって調査としては、土層観察用に調査区壁を整形することと、遺構の平面形を精査するといった確認作業をすぐに始めることができた。遺構確認が終わると、早速遺構の発掘に着手する。本調査区内では、調査区北半に集中してみられる遺構のほか、2筋の沢内に堆積した土層が発掘のおもな対象となった。遺構の半截作業の結果などにより、主要な遺構はほぼS X-04のみと考えられたので、S X-04と灰原の可能性があったF-2沢堆積土層が、おむね調査の中心となった。

また今回の調査にあたっては、当該事業用の任意座標軸をもとにして設定されたグリッドを用いることとしたので(第7図)、本報告にあたってもこれを用いて述べていきたい。グリッドは、大グリッドを10m四方、小グリッドを2m四方として大グリッドを25分割した。大グリッドについては、X座標軸を西から1・2・3…の算用数字、Y座標軸は北からA・B・C…のアルファベットをそれぞれ使用して、それらを組み合わせることによって「A-1グリッド」と呼ぶ。つまり、このように設定すると、本調査区はS-T-42~44およびR-43グリッドにまたがっていることになる。また小グリッドについては、大グリッドの北西隅から①~⑩を順に付した。さらに、小グリッドを1m四方に4分割したが、その名称についてはi~ivを使用し、大・小グリッドと組み合わせて「T-44①i」と表記する。なお、グリッドと座標軸との関係は、TラインはX=149.19、44ラインはY=6.98である。

3) 発掘調査の経過

現場作業は、平成6年6月20日から7月25日の器材撤収まで、延22.5日にわたって実施した。調査面積は約300m²で、調査員・調査補助員延61人、作業員延89.5人を要した。

発掘の準備と造構確認 平成4年の確認調査によって、須恵器窯跡（S X-04）や灰原（S X-05）が既に想定されており、これらと新旧関係を持つ溝や土坑も検出されている〔柏崎市教委1993〕。また調査区の現況はもともと山林であったが、S X-04周辺は表土除去後に繁茂した雑草が多い状態であった。

6月20日、午前中に必要な道具を揃えつつ、調査に着手した。表土は既に除去してあったので、調査区壁の整形と、調査区の上段にあった廃土の搬出から作業を始めることになった。翌21日は、S X-04周辺を中心に木根の処理をし、22日からは、調査区の北西部分より造構確認を進めていった。

造構確認の精査によって、S X-04は、上方を伐操作用の重機、下方をSD-01によって削平されてしまったため、約1.2m四方しか遺存していないことがわかった。この時点では、SD-01は窯の作業場跡、S X-03は風倒木痕といった性格を考えていた。また本窯跡に伴う灰原については、S X-04の下方にS X-05を想定していたものの、確認調査および今回の調査でも遺物の出土量が少なかったこともあり、この段階では疑問点として残った。

発掘の着手 29日に造構確認が終了すると、早速S X-04・SD-09・10などにベルトを設定して造構の発掘に着手した。まずS X-04・F-2沢については南北方向に、さらにF-2沢には、東西方向にサブトレーナーを設定した。F-2沢内の堆積土層を除去すると、明灰色を呈する還元化された地山粘土が検出された。かなりの傾斜が認められ、上方である北側からは遺物は出土せず、下方である南側に集中していた。土層を観察すると、西側にはやや層序の乱れがあり、過去における断層等が想定された。

窯・灰原以外の造構についても並行して調査していくが、それらはおおむね7月11日までに完掘することができた。しかしS X-03風倒木痕や性格不明の溝や土坑のほかは、落ち込みといった造構とはみなしづらいものがほとんどであった。したがって、この時点においてはSD-01・S X-04・05が本遺跡的主要造構とみなすことができた。

発掘の仕上げ 12日からは、この3基の造構の調査が作業の中心となった。翌13日までには、SD-01を完掘することができたが、遺物は須恵器片が若干含まれる程度であった。SD-01の時期については、窯跡やそれを搅乱する風倒木痕を掘り込んで築かれており、近現代の所産である可能性が高くなかった。

F-2沢は、十字ベルトを残して4区画に分けて掘り進めた。また、層序を観察すると、水性堆積の粘土層を境に上層と下層に区分されたので、遺物は分層して取り上げることとした。遺物の出土状況は、南西側では上層のみに限られ、南東側では下層の黒色粘土層からも出土するという差異が認められた。上層は窯に関連する層と考えられるが、下層については、上層との時期差の有無など、検討する必要が生じた。やはり発掘の結果をみても、S X-05を灰原とみなすには遺物の出土量は全体的に少なく、S X-05はF-2沢の堆積層とみなすこととした。

14日には、S X-04の発掘も本格的に着手した。十字ベルトを設定して調査を始めたところ、西側はS X-03によって搅乱されていたが、被熱によって硬化した壁・床を検出することができた。出土遺物は、上方・下方に分布域が別れていた。下方のみに壺類の分布がみられたので、製品の窯詰位置を示唆するものと考えられる。S X-04・F-2沢は19日までに完掘することができ、作業員は解散となった。

その後、測量等を行い、25日までに器材を撤収し、現場での調査を終了とした。

2 遺構

本調査区は、F沢と呼称している沢の奥部に近い北側斜面に立地する。調査区内には、F-1・2とした2筋の沢が貫流している。この2筋の沢に挟まれた地点(S-43・44グリッド)、およびF-1沢の対岸(S-42グリッド)から合計15基の遺構が検出された。しかし本調査区内で主要な遺構と考えられるのはSX-04とした須恵器窯のみで、ほかの遺構については性格不明の溝・土坑・ピットあるいは風倒木痕が大半である。本節では、まず須恵器窯について述べ、次にほかの遺構について概観することとしたい。

1) 須恵器窯 (SX-04 図版48)

今回の調査で発掘されたSX-04須恵器窯についての概要を述べる。調査の結果、本窯跡は多くの擾乱を受けており、S-43~44において2カ所にわざかな壁面と床面をとどめている程度である。ここでは、2カ所のうち、北側の略方形(約1.2m四方)に遺存した部分をA区、南側の不定形に遺存した部分をB区と便宜的に呼称することとしたい。

本窯跡は、南側にSD-01溝跡が造成されたことによって大きな擾乱を受けている。A区はその北側にあたり、B区はこの擾乱からかろうじて免れ、床面が遺った部分である。さらに本窯跡は、A区の東壁をSX-03風倒木痕による擾乱を受けたほか、北側に延長していたと考えられる焼成部や煙道は樹木の伐採作業に伴って破壊されたと思われる。以下、立地や形態・規模、遺物などの観点から本窯跡について述べ、最後に遺物が比較的多く散布したF-2沢について触れる。

立地 検出されたSX-04須恵器窯跡の位置は、F沢の奥部に近い北側斜面にあたり、F-1沢・F-2沢の2筋の小さな沢に挟まれた斜面に立地している。本窯跡付近における斜面の傾斜は20~30°であり、やや急な斜面といえる。

本窯跡は、わざかに遺存した部分であるA区・B区を直線的に結んだ延長に沿って構築されたと考えられる。つまり地形的にみれば、窯は斜面の等高線にはば直交して構築されていたと推定することができる。またA区では、床面からの立ち上がり部分が遺存していたので、壁面のおおよその方向を把握することができる。壁面の方向もやはりA・B区の延長に沿うものであり、このことから窯体が等高線に直交するようにならかれていたことを裏付けることができる。

形態・規模 A区の土層断面を観察すると、床面は地山斜面を溝状に掘り窪められてつくられていることがわかる。したがって、本窯跡は床に傾斜面をなす窖窯と呼ばれる形態のもので、地下式または半地下式をなしていたと思われる。また床面の傾斜をみると、A区は20~30°、B区には傾斜が変換する地点があり、北半(上方)が20°前後、南半(下方)が5°前後となっている。A区およびB区北半の床面は周囲とほぼ同じ傾斜をなしているが、B区南半ではほぼ水平を指向するように傾斜が変化している。このような傾斜角度や位置関係から推定すると、A区~B区北半は焼成部、B区南半は燃焼部と考えられる。

このような窯の構造についての推測が正しければ、B区の付近には焚口部分があったことになる。また、本窯跡のA区より北側の破壊を受けた部分については、焼成部の延長と煙道が存在していたと思われる。しかし、調査区の北東壁には窯体が延長している痕跡を確認することができなかった。以上のことから、窯体の長さは、4~5mと推測される。また窯体の幅については、A区で遺存している両壁面への立ち上がり部分の幅から、約1.1mと考えられる。

覆土 本窯跡の覆土は、大きく2つに分類される。1つは窯の操業中もしくは廃棄後に堆積した層であり、他は窯の操業中に壁・床を構成していたと考えられる層である。なお、前述したような遺存度の低さもあって、窯の天井部分をなす層は確認されなかった。

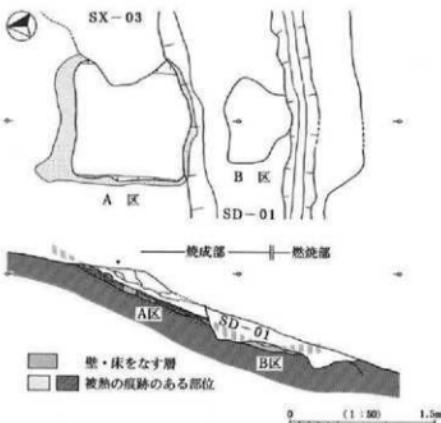
堆積した層には、全体的に木炭や焼土が多く含まれている。その上層はおもに黒褐色を呈する縮まりのある層であるが、部分的に褐色を呈しており、SD-01に類似していることから、搅乱を受けていることがわかる。下層は灰褐色を呈しており、床面直上に広がっている。この層は焼土ブロックを主体としており、還元化された焼土層といえる。固く焼き縮まっ

ており、本窯跡の製品である須恵器片を多く含んでいる。また、壁・床を構成する層は、大きく熱を受けた焼土が主体となっている。特に、壁・床面は明灰色を呈した還元化焼土によってつくられており、須恵器質の硬化面を形成している。窯を整形した段階の面が良好に遺されていた。また、搅乱を受けていない部分には、壁に接する約10cmの厚さで、被熱の痕跡を確認することができた。

遺物出土状況 A区の床面には遺物が散布していた。前述のように、A区は本窯跡の焼成部にあたり、実際に製品を据えて焼成した部位と考えられる。そのため、遺物の散布状況は、製品の窯詰状態をある程度示唆していると思われる。須恵器片の出土状況をみると、A区の北半と南半に散布域が認められ、北半には壺類の破片が集中し、南半には甕片に混じって壺類等がみられる。この状況を積極的に評価すれば、焼成部の下位から約1m付近では壺類を焼成していたと推測できる。ただし、甕片は焼台として使用された可能性もあり、甕片の散布状況から壺類の窯詰位置を即断することはできない。また本窯跡内からは食器具が検出されず、A・B区以外に食器具の窯詰位置が想定されるが、今回の調査では不明とせざるを得ない。ところで、No.20とした短頸壺（6）のみがほぼ完形品で、焼き歪みなどもなかった。最終操業段階の製品取出しが不完全であったともいえるが、6以外に良好な製品はみあたらず、窯の主軸上に位置していることからも、短なる窯詰状態ではない可能性もある。

F-2沢 F-2沢は本窯跡の下方を西流する小沢で、北側斜面は本窯が築かれた斜面に連続する。黒色土中から須恵器片が出土しており、位置関係から考えて当初はSX-05として本窯の灰原を想定していた。しかし灰原とみなすには遺物の出土量が少なく、今回は沢内堆積層と判断したものである。

須恵器片を包含する黒色土層は、白灰色粘土層を間層として上層・下層に区分される。この白灰色粘土層は、過去に水が溜まっていた痕跡と思われるが、上・下層間では出土した須恵器片には接合するものがあり（36）、これらの層の形成にはさほどの時間差はなかったと思われる。本窯跡出土の須恵器片と上層出土の須恵器片とが接合することや、大量の焼土粒が含まれていることから、窯内の不良製品や廃土などがこの沢に流出していったと考えられる。



第8図 雨池古窯跡・SX-04須恵器窯跡の構造

2) その他の遺構 (図版49・50)

ここでは、須恵器窯以外の遺構をまとめて述べることとする。内容は溝・風倒木・土坑・ピットであるが、時期や性格を明確にできるものはない。各遺構の規模の計測等は、第12表を参照されたい。

a 溝

S D-01・09・10が確認された。3基のうち、S D-09・10は一対をなして機能していたと思われるので、一括して述べることとする。

まず S D-01 (図版50) は、S-43・44グリッドにまたがり、S X-04・03・19が埋没した後に掘り込まれた遺構である。長さ約10m、幅130~210cm、深度約50cmが遺存している。東側へ多少延長する可能性があるが、約20m離れた調査区東壁には確認されなかった。溝の方向は、N-84~100° - E ではば東西にのびているが、中央付近が弧を描くようにわずかに南側へ張り出し、東端でもやや南側へ反っている形態を考えれば、等高線に沿って斜面を削平した可能性が高い。底面は緩やかに傾斜し、下方に寄ったところ（南側）には小さい溝がある。幅は20~30cmほどで、本溝の底面から10cmほど掘り下げられている。本遺構出土といえる遺物はなく、時期も不明である。ただし須恵器窯跡および2基の風倒木を掘削していることから、近・現代の所産である可能性が高い。性格については、当初等高線に垂直な須恵器窯に対して焚き口部付近で直角に接しているため、窯に伴う作業場と推測していた。しかし窯と同時期に機能していたとは考えられないため、別の性格が想定される。

S D-09・10 (図版49) は、F-1沢の付近をほぼ南北に平行して走る2本の溝で、N-9~10° - W を指す。09は長さ5.9m、幅50~60cm、深度10~20cmで、10は長さ 3.4m、幅40~50cm、深度 5~10cm を計る。出土遺物等ではなく、時期は不明である。道路に伴う側溝に形状は似ているが、溝間の幅が40~50cmと狭く、側溝とみなすのも疑問点が多い。

番号	グリッド	種別	平面形	長軸×短軸	深度	覆土・備考
01	S-43~44	溝		973×210	47	図版50 03・04・19より新
02	S-44	ピット	円形	28×26	10	03より新
03	S-44	風倒木	不定形	410×321	-	図版48 49 04より新 01・02より古
04	S-43~44	須恵器窯		-×-	21	図版48 01・03より古
05						欠番 (F-2沢)
06	S-43	土坑	不整横円形	201×125	9	図版49 17・18より古
07	S-42	土坑	不整横円形	41×32	156	図版49
08	S-42	土坑		-×74	125	図版49
09	S-43	溝		588×56	21	図版49 10と一対
10	S-43	溝		342×45	9	図版49 09と一対
11						木痕
12	S-43	土坑	横円形	148×101	33	木痕か
13	S-43					木痕
14	S-43	土坑	不整形方	116×112	33	図版49
15						欠番
16	S-43	ピット	円形	65×61	37	図版50 19より新上層は木痕か
17	S-43	ピット	円形	30×29	9	06より新
18	S-43	ピット	円形	58×55	14	図版49 06より新
19	S-43	風倒木		-×-	18	図版50 01・16より古
20	S-42	ピット		-×-	-	図版50 調査区北西壁で確認 木痕か

※長軸・短軸・深度：単位はcm

第12表 雨池古窯跡遺構一覧表

b 風倒木痕

S X-03・19の2基を確認した。ともにS X-01による掘削を受けているため、全体的な形態は不明である。S X-03（図版48・50）は、遺構全体を発掘してはいないものの、黒褐色土が平面上で不整形な三日月状に分布していたことから、風倒木痕と判断された。またS X-19（図版50）は、当初S D-01の一部と考えていたが、土層観察の結果、S D-01よりも古い風倒木痕であることがわかるが、時期は不明である。両者とも出土遺物は確認されなかった。

c 土坑・ピット

性格が不明な遺構をここに一括するが、平面形態において規模の大きなものを土坑、小さなものをピットとして区別することとする。したがって今回の調査では、土坑として分類されるのはS K-06・07・08・12・14、ピットとして分類されるのはS Kp-02・16・17・18・20となる。

土坑 S E-07（図版49）は、F-1沢の縁辺に近い、やや傾斜の急な地点に位置している。平面形態は梢円形に近いといえるが、不整形である。また断面形態は、垂直な立ち上りが部分的にみられるものの、全体的には下位へ向かうほどや北西側に片寄っている。これは南東に向かう斜面を掘削したために生じたずれであろうか。また下部には、南東方向へほぼ水平にのびる横穴がある。本遺構自体が狭いために発掘は中途で断念を余儀なくされた。横穴の方向からは、等高線や沢に関係を求めるることは難しく、この横穴が人為的なものか、それとも自然の所産であるのかも不明とせざるを得ない。断面からの土層観察の結果、東側に比較的締まりのある土層があり、人為的に埋め戻した可能性が高いことがわかった。つまり本遺構は2度掘削されたと考えられ、西側の土層は再掘削された遺構の覆土といえる。再掘削された遺構の覆土は、色調や地山土の含み具合などから大きく上・中・下層に3分される。下層は茶褐色を呈する粘土層で、層厚は10~15cmほどである。白色粘土が薄く水平に堆積していることから水性粘土層と考えられる。このことは本遺構に一定量の水が、一定時間にわたって溜まっていたことを示しており、本遺構を井戸跡とする可能性もあるが、確実な根拠は乏しい。中層にはブロック状の地山土が概して多量に含まれており、西壁の崩落をうかがうことができる。上層は暗褐色を呈しており、F-1沢の埋没とともに堆積した可能性がある。以上のことから、本遺構の埋没過程としては水が溜まっていた機能中に下層が形成され、廃棄後（直後）に壁土の崩落等によって中層が、さらにその後、上層が形成されるという自然堆積だったと思われる。遺物は出土していない。

S K-08（図版49）は、調査区北西壁において確認された遺構である。本遺構は、F-1沢の縁辺部付近の傾斜のやや急な地点に位置し、F-1沢に堆積した褐色土層の上面を上端としている。本遺構の全体的な形態は不明であるが、下端は大きく南西に張り出していることがわかる。調査区壁で観察される断面の形態は中ほどでくびれているために「8」字に近い。覆土は、褐色を呈している層と地山粒・ブロックを多く含んでいるために黄色を呈している層とが交互に堆積している。出土遺物等ではなく、土坑の性格は不明である。

このほかの土坑としては、S K-06・12・14がある。いずれも平面規模は1~2×1m程度である。深度は、06が約10cm、12・14が約30cm程度と概して浅い（図版49）。3基とも、遺物は出土せず、性格等は不明とせざるをえない。

ピット ピットとして分類されたS Kp-02・16・17・18・20は、すべてF-1・F-2沢に挟まれた地点から検出されている。急斜面のため、もともと建物等の想定はできなかったが、やはりピットとして分類されるものの中には柱穴等に考えられるものはない。16や20などは木痕の可能性がある。

3 遺 物

本遺跡から出土した遺物は、テンバコでおよそ4箱分である。これに確認調査およびその事前に行われた表面採集によって得られた遺物を加えても合計7箱程度となる。遺物の内容は、S X-04須恵器窯で焼成されたと思われる須恵器片が大半であるが、遺構が大きく搅乱を受けていたことからも考えられるように、遺物量の遺存度もかなり低いと思われる。須恵器のはかには、表面採集された数片の繩文土器および本須恵器窯を構成していた壁・床の破片などがある。ただし、これらについては割愛した。

ここでは、表面採集・確認調査で検出された須恵器片も含めた出土遺物について概観するが、各々の法量や調整、焼成や色調等については第13表を参照されたい。須恵器の器種は、一般に食膳具・調理具・貯蔵具に大きく分類できるが、本窯跡からは明確な調理具は検出されなかった。また食膳具もごく数片に限られ、量的には貯蔵具、特に甕類が圧倒的である。また胎土は、径1~3mmの長石と思われる軟質の白色粒がやや多く含まれているのが特徴的である。以下、食膳具・貯蔵具に大分類して出土遺物の概要を述べることとした。なお遺物の時期が推定できたものについては、その旨を記述するが、その際には北陸地方の編年研究〔田嶋1988ほか〕を参考とした¹⁾。

1) 食膳具

表面採集において数点の小片が検出されたのみである。図化が可能なものは、杯蓋(1・2)および杯身(3・4)の合計4点にすぎない。1は、形態や器厚から蓋とみなしたが、身である可能性もある。天井部には回転系切りによると思われる痕跡が認められる。2は、蓋の口縁部で、端部は玉縁状を呈している。3は口縁部、4は体部および底部への移行部のみが遺存しているが、本窯跡出土須恵器では確実に杯身といえる資料である。4は、底径に比べて器高が高いという深身の器形を推測することができ、有台杯Bに分類できる可能性が高い。V期を中心とした9世紀前半の形態に近い。4点ともにぶい橙色を呈しており、還元化焼成が不完全な状態といえる。

2) 貯蔵具

貯蔵具に分類されるものとしては、小型で平底をなす器種(壺・瓶類)と大型で丸底をなす器種(甕類)がある。本窯跡の調査で検出された貯蔵具は、壺・瓶類が6点(5個体)のみであるほか、大半を甕類が占める。以下はこの分類をもとに述べる。ただし、横瓶が存在する可能性があるが、破片のみでは甕類との識別が困難であり、今回は甕類として一括した。

a 壺・瓶類

5個体のうち、3個体はS X-04窯跡、2個体はF-2沢から出土している。

S X-04-5は壺蓋で、口径は11.9cmと推測される。焼成は良好で、黒灰色を呈する。S X-04窯跡の南西部分より出土した。口縁部はやや外反して垂下し、端部は先細りしている。内外面ともロクロナデされた痕跡がある。短頸壺を身とすると思われる。

6は短頸壺で、口径8.7cm、底径8.1cm、器高13.2cmを計る。焼成は良好で、灰色~暗灰色を呈する。S X-04窯跡A区南半より出土している(図版48)。口縁部の一部が欠けるのみで、ほぼ完形といえる。全体的な形態としては長胴形の類に属すると思われるが、器高が低く、あまり類例をみない。内外面には

ロクロナデの痕跡があり、特に内面は顯著で凹凸がある。胴部外面にはカキ目調整がされている。なお、底部切り離しの痕跡は不明であった。

7は器種を特定することが困難であるが、ひとまず貯蔵具に分類した。鉢類とも想定されるが、口頸部分が短く、広口であることから、8世紀後半から北陸南西部でみられる肩衝壺から派生し、変化した形態とも考えられる。S X-04窯跡A区の南半から出土している。焼き歪みが大きいが、もとの法量の復元を試みれば、口径17.8cm、底径12.3cm、器高23.9cmとなる。大きな被熱によって器面の観察は困難であるが、胴部上半には内外面ともロクロナデの後、外面にはカキ目が施される。体部下半にはヘラ削り調整がみられるが、外面は縦位、内面は斜位である。焼成は良好で、暗灰色を呈しているが、被熱の大きさから焼き歪みや亀裂がみられ、胴部上半には壺口縁部片が付着しているなど、他の破片との溶着がみられる。また、底部外面も明瞭ではなく、切り離しの痕跡は確認できなかった。

F-2沢8は、胴部のみが遺存しているが、頸部への移行部の直径が小さくなることから、長頸瓶と考えられる。F-2沢下層より出土し、胴部最大径は17.8cmを計る。内外面ともロクロナデがみられ、外面には薄く自然釉がかかる。9は、高台径11.2cmを計る底部片で、内端接地する。8・9は接合しないものの、形態や器厚には関連性がみられ、出土位置はF-2沢下層でもT-43グリッド北東部～T-44グリッド北西部およびS-44グリッド南西部に集中しているため、同一個体と考えられる。焼成は良好で、明灰色を呈する。肩部は張らずに丸みを帯びている形態から、V期以降に比定される。

10は、耳部の一部が認められることから、双耳瓶と考えられる。確認調査段階で検出された破片と本調査でF-2沢のT-44グリッド北西部から出土した破片が接合したことにより、頸部～胴部下半の器形が明らかになった。焼成はやや良好で灰色を呈する。胴部最大径は20.1cmと推測される。頸部から肩部にかけてはロクロナデの痕があり、胴部上半にはカキ目が認められる。体部下半はタタキ調整の後、横位のヘラケツリ調整が施されている。軟質白色粒のほか、他の遺物に比べて胎土にはやや砂粒が多い。遺存している耳部下半をみると、把手部分より垂下しているものの、あまり顯著な発達をうかがうことはできない。これはV期段階における特徴と思われる。

b 壺類

出土した遺物の9割以上が壺類の胴部片である。同一個体の識別や接合の結果をみても、一個体で器形全体を把握できるものはなかった。しかし、口頸部や胴部～底部といった各部の形態はおおよそ把握することができる。ここでは、まず本窯跡出土の壺類を概観し、次に出土位置別に述べることとしたい。

壺類概観 法量、もしくは器種によって数類に分類されるが、ここでは遺存している口頸部の観察から、A・Bの2器種へ分類してみたい(第9図)。口径の推定できるものは6点にすぎないが、壺Aは口径50～60cm、壺Bは口径30～40cmとすることができる。

壺Aは、長い口頸部を有し、内寄しながら大きく外傾して立ち上がっている。口頸部上半には特徴的な装飾がみられる。口縁端部付近の外面に幅2cm前後の粘土帯を貼りめぐらし、中央を押さえつけて2条の突帯状をなしている。さらに、その下位に上下2段の波状文が備えられている。この上下の波状文は、4条で幅が16～17mmと共通しており、同じ工具が用いられたと思われる。しかし、上段の波状文は1周期が約8～9mmの短い波長で、口頸全周をめぐると考えられるのに対し、下段の波状文は1周期が約2～3cmの長い波長で、5cm程度の長さで間隔をおいて施されている。大壺の口頸部に備え波状文がみられるのは8世紀後半以降であるが、上段と下段の波状文でそれぞれ形態が異なるという類例はなく、本窯跡において独自に発展した技法である可能性がある。

第13表 雨池古窯跡出土須恵器観察表

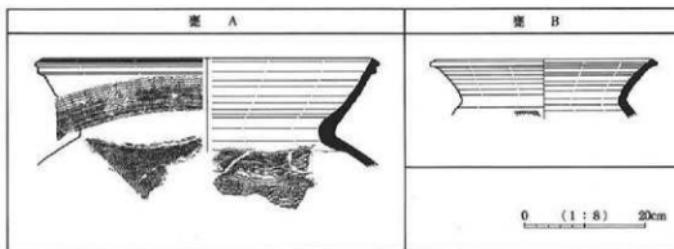
番号	器種	部位	調 査	燒成	色 調	出土位置	備 考
1	杯蓋	天井部	ロクロ	不良	淡黃褐色		杯身の可能性もあり
2	杯蓋	口縁部	ロクロ	不良	淡黃褐色		
3	杯	口縁部	ロクロ	不良	に若い褐色		
4	有台杯	胴部	ロクロ	不良	淡黃褐色		
5	蓋	口縁部	ロクロ	良	黒灰色	SX-04	口徑11.9cm
		～天井部					
6	燈籠蓋	ほぼ完形	ロクロ (外) のち胴部カキ目	良	暗灰色	SX-04	口徑8.7cm 底径8.1cm 高さ13.2cm No.19
7	(蓋類)	口縁部	ロクロのち底部にケズリ	良	暗灰色	SX-04	口徑17.8cm 底径12.3cm 高さ23.9cm
							滑着・焼き歪み No.11・12・16
8	長頸瓶	胴部	ロクロ	やや良	明灰色	F-2 沢下層	最大胴径17.8cm 8と同一個体
9	長頸瓶	底部	ロクロ	やや良	明灰色	F-2 沢	高台径11.2cm 8と同一個体
10	双耳瓶	底部	ロクロ (外) 脇部上半カキ目・ ～胴部	やや良	灰褐色	F-2 沢	最大胴径20.1cm
			胴部下半カキ目(のちケズリ)				粘土に砂粒がやや混じる
11	甌	胴部	(外) タタキ目調・(内) 当て具D1類	良	暗青灰色	SX-04	
12	甌	胴部	(外) タタキ目調・(内) 当て具D1類	良	暗青灰色	SX-04	No.3
13	甌	胴部	(外) タタキ目調・(内) 当て具D1類	良	暗青灰色	SX-04	No.21
14	甌	胴部	(外) タタキ目調・(内) 当て具D1類	良	暗青灰色	SX-04	No.10
15	甌	胴部	(外) タタキ目調・(内) 当て具D1類	良	暗青灰色	SX-04	No.14
16	甌	胴部	(外) タタキ目調・(内) 当て具D1類	良	暗青灰色	SX-04	No.15
17	甌	胴部	(外) タタキ目調・(内) 当て具D1類	良	暗青灰色	SX-04	No.9
18	甌	胴部	(外) タタキ目調・(内) 当て具D1類	良	暗青灰色	SX-04	No.7
19	甌	胴部	(外) タタキ目調・(内) 当て具D1類	良	暗青灰色	SX-04	No.17
20	甌	胴部	(外) タタキ目調・(内) 当て具D1類	良	暗青灰色	SX-04	No.4 滑着
21	甌	胴部	(外) タタキ目調・(内) 当て具D1類	良	暗青灰色	SX-04	No.6
22	甌	胴部	(外) タタキ目調・(内) 当て具D1類	不良	淡黃褐色	SX-04	
23	甌	胴部	(外) タタキ目調・(内) 当て具D1類	不良	(外) 淡赤色 (内) 淡黃褐色	SX-04	No.1
					(外) 黑褐色 (内) 灰褐色	SX-04	25と同一個体 No.18
24	甌	胴部	(外) タタキ目調・(内) 当て具D1類	不良	(外) 黑褐色 (内) 灰褐色	F-2 沢上層	
25	甌	底部	(外) タタキ目調・(内) 当て具D1類	不良	(外) 黑褐色	SX-04	24と同一個体
26~31	甌	胴部	(外) タタキ目調・(内) 当て具D2類	良	黑色	SX-04	同一個体 No.2・5
32	甌	胴部	(外) タタキ目調・(内) 当て具D1類	良	青灰色	SX-04	
33	甌	胴部	(外) タタキ目調・(内) 当て具D2類	良	黑色	SX-04	
34	甌	胴部	(外) タタキ目調・(内) 当て具D1類	不良	暗紅赤色	SX-04	
35	甌	胴部	(外) タタキ目調・(内) 当て具D1類	良	青灰色	SX-04	
36	甌B	口縁部	ロクロ: ロクロ	やや不良	反赤色	F-2 沢上層	
		～胴部	胴 部: (外) タタキ目調			F-2 沢上層	
37	甌B	口縁部	ロクロ	やや不良	(外) 灰色 (内) 淡赤色	F-2 沢上層	
38	甌	胴部	(外) タタキ目調・(内) 当て具D1類	良	黑色	F-2 沢上層	
39	甌	胴部	(外) タタキ目調・(内) 当て具D1類	やや不良	深赤色	F-2 沢上層	
40	甌	胴部	(外) タタキ目調・(内) 当て具D1類	やや不良	反赤色	F-2 沢上層	
41	甌	胴部	(外) タタキ目調・(内) 当て具D1類	やや不良	(外) 深灰色 (内) 淡赤色	F-2 沢上層	
42	甌	胴部	(外) タタキ目調・(内) 当て具D1類	不良	(外) 反赤色 (内) 淡黃褐色	F-2 沢上層	
43	甌	胴部	(外) タタキ目調・(内) 当て具D1類	不良	淡黃褐色	F-2 沢上層	
44	甌	胴部	(外) タタキ目調・(内) 当て具D1類	不良	淡黃褐色	F-2 沢上層	

※同一個体である甌の胴部片は、1行に括り。
※須恵器種の「甌A」・「甌B」については、本文を参照されたい。
※※※調査・色調における(外)・(内)は、外側・内面を表す。

番号	器種	部 位	調 營	度 度	色 調	出 土 位 置	備 考
45	斐A	口縁部 ～胴部	口縁部：ロクロ 胴 部：(外)タタキ目顔・(内)当て具D1顔	不良	浅黄褐色	F-2 沢下層	波状文
46	斐A	口縁部 ～胴部	口縁部：ロクロ 胴 部：(外)タタキ目顔・(内)当て具D1顔	やや不良	灰赤色	F-2 沢下層	波状文
47	斐	胴部	(外)タタキ目顔・(内)当て具D1顔	不良	浅黄色	F-2 沢下層	
48	斐	胴部	(外)タタキ目顔・(内)当て具D1顔	やや不良	(外)灰赤色 (内)浅黄褐色	F-2 沢下層	
49	斐	胴部	(外)タタキ目顔・(内)当て具D1顔	不良	浅黄褐色	F-2 沢下層	
50	斐	胴部	(外)タタキ目顔・(内)当て具D1顔	不良	(外)灰赤色 (内)浅黄褐色	F-2 沢下層	
51	斐	胴部	(外)タタキ目顔・(内)当て具D1顔	やや不良	(外)灰赤色 (内)浅黄褐色	F-2 沢下層	
52	斐	胴部	(外)タタキ目顔・(内)当て具D1顔	やや不良	(外)灰赤色 (内)浅黄褐色	F-2 沢下層	
53	斐	胴部	(外)タタキ目顔・(内)当て具D1顔	やや不良	(外)灰赤色 (内)浅黄褐色	F-2 沢下層	
54	斐	胴部	(外)タタキ目顔・(内)当て具D1顔	やや良	(外)褐灰色 (内)灰赤色	F-2 沢下層	
55	斐	胴部	(外)タタキ目顔・(内)当て具D1顔	やや良	(外)灰色 (内)灰赤色	F-2 沢下層	
56	斐	胴部	(外)タタキ目顔・(内)当て具D1顔	不良	浅黄褐色	F-2 沢下層	
57	斐	胴部	(外)タタキ目顔・(内)当て具D1顔	不良	浅黄褐色	F-2 沢下層	
58	斐	胴部	(外)タタキ目顔・(内)当て具D1顔	やや不良	(外)灰赤色 (内)浅黄褐色	F-2 沢下層	
59	斐	胴部	(外)タタキ目顔・(内)当て具D1顔	やや良	(外)褐灰色 (内)灰赤色	F-2 沢下層	
60	斐	胴部 ～底部	(外)タタキ目顔・(内)当て具D1顔	やや不良	(外)暗灰褐色 (内)灰赤色	F-2 沢下層	
61	斐A	口縁部	ロクロ	やや不良	灰赤色		62～66と同一個体 波状文
62～66	斐	胴部	(外)タタキ目顔・(内)当て具D1顔	やや不良	灰赤色		61と同一個体
67	斐A	口縁部	ロクロ	不良	浅黄褐色		68～78と同一個体 波状文
68～78	斐	胴部	(外)タタキ目顔・(内)当て具D1顔	不良	浅黄褐色		67と同一個体
79～80	斐	胴部	(外)タタキ目顔・(内)当て具D1顔	やや不良	褐灰色		
81～90	斐	胴部	(外)タタキ目顔・(内)当て具D1顔	不良	浅黄褐色		同一個体
91	斐B	口縁部	ロクロ	不良	浅黄褐色		
92	斐B	口縁部	ロクロ	不良	浅黄褐色		
93	斐B	口縁部	ロクロ	不良	浅黄褐色		
94	斐B	口縁部	ロクロ	不良	浅黄褐色		
95	斐	胴部	(外)タタキ目顔・(内)当て具D1顔	やや不良	灰赤色		
96	斐	胴部	(外)タタキ目顔・(内)当て具D1顔	やや良	灰色		
97	斐	胴部	(外)タタキ目顔・(内)当て具D1顔	やや良	灰色		
98	斐	胴部 ～胴部	(外)タタキ目顔・(内)当て具D1顔	やや良	褐灰色		
99	斐	胴部	(外)タタキ目顔・(内)当て具D1顔	やや良	褐灰色		
100	斐	胴部	(外)タタキ目顔・(内)当て具D1顔	やや良	褐灰色		
101	斐	胴部	(外)タタキ目顔・(内)当て具D1顔	やや良	褐灰色		
102	斐	胴部	(外)タタキ目顔・(内)当て具D1顔	良	(外)黑色 (内)灰色		
103	斐	胴部	(外)タタキ目顔・(内)当て具D1顔	やや良	灰褐色		
104	斐	胴部	(外)タタキ目顔・(内)当て具D1顔	やや良	灰褐色		
105	斐	胴部	(外)タタキ目顔・(内)当て具D1顔	やや良	灰色		

※同一個体である斐の胴部片は、1行に一括した。

※※器種の「斐A」・「斐B」については、本文を参照されたい。
※※調査・色調における(外)・(内)は、外面・内面を表す。



第9図 雨池古窯跡出土窯類分類図



第10図 雨池古窯跡出土窯類タタキ目・當て具痕分類図 (1 : 2)

また頸部と胴部との接合法は、内側を向いている胴部の擬口縁端面に頸部下端を内側から巻き付けるものである。内面には頸部から粘土が引き伸ばされ、押さえ付けられた痕跡があり、外面の接合・屈曲部分にも補強として粘土が薄く貼りのばされている。胴部は頸部が接合した後にタタキ調整されるが、外面は平行線文タタキ目、内面は同心円文當て具痕がみられる。さらに接合部付近ではタタキの後にハケ目が施されている。

窯Bは、小片であるために、口径の推計が不可能なものが多い。窯Aとは異なって、口頸部は外反して立ち上がり、口縁端部の内側もしくは外側がつまみ出されるという形態的な特徴がある。口頸部にはロクナデの痕跡がみられるものの、窯Aのような装飾性の豊かさはない。

胴部～底部の形態もおよそかがうことが可能で、丸底を呈していることがわかる。確実に同一個体と判断できる口頸部はないが、24・25・90は窯Aに、60は窯Bに伴うと予想される。また、外面のタタキ目文様は、全体的に平行線文で共通している（タタキ目H類）。平行線は、幅4mm、長さ19～22mm間隔で彫り込まれており、それに直交するように1～1.5mm間隔で木目が入っていることを確認することができる。内面の當て具痕様は同心円文をなすものが多いが（當て具痕D類）、D1・D2類に分類が可能である。すなわちD1類は、円弧状の彫り込みが5～6mm間隔で施される同心円をなすもので、木目の確認できないものである。またD2類は、同心円文に放射状文を組み合わせたもので、D1類と同様に5～6mm間隔で同心円をなすが、その外周に長さ10～11mmの彫り込みを放射状に施すものである。木目は確認されない。量的にはD1類が圧倒的で、D2類は7点が確認されたにすぎない。

S X-04 図化することができたのは、A区から21点（11～35）、B区から4点（32～36）である。A区における遺物出土状況は、図版48を参照されたい。

S X-04窯跡から出土した須恵器片は暗青灰色を呈したものがほとんどで、概して焼成が良好である。

さらに前述の7も含めて、溶着・焼き歪みの顯著なものが多い(19・20・21・33など)。特に20は被熱が甚大で、焼台として再利用された可能性がある。

24は、確認調査・表面採集段階で得た破片およびF-2沢上層出土の破片と接合したことによって、体部下半の器形をある程度復元することができたものである。さらに25と同一個体と思われ、丸底を呈することがわかる。焼け歪みがややあり、器形としては内側へわずかに窪んでいる。外面はタタキ目H類、内面は當て具痕D1類がみられる。焼成は不良で、外面黒褐色、内面灰赤色を呈している。

26~31は、全体的な器形が不明であるものの、同一個体と考えられる。外面はタタキ目H類がみられるが、内面は當て具痕D2類である。焼成は良好で黒灰色を呈している。内面に當て具痕D2類が確認されるのは他に33があるが、別個体と思われる。

F-2沢上層 今回図化できたのは9点であるが、S X-04から出土した破片と接合したものについては、すでに述べている(7・24)。出土遺物は要類に限らず小片が大半である。また、概して焼成は不良もしくはやや不良なものが多く、浅黄橙色もしくは灰赤色を呈するもので占められている。

36は、口頭部から胴部への移行部まで遺存している。F-2沢下層出土の小片と接合している。口径38.0cmと推計され、甕Bに分類される。内外面ロクロナデされているが、口縁端部を外側につまみ出して、突帯状を呈している。胴部外面にはタタキH類がわずかに確認できるが、内面の當て具痕については不明である。焼成はやや不良で灰赤色を呈している。37も同様に甕Bと考えられるが、口縁端部内側を上方につまみ上げているという形態上の相違点がみられる。

F-2沢下層 今回図化できたのは、16点である。上層と同様に焼成が良好なものはなく、浅黄橙色もしくは灰赤色を呈するものが多い。すべて外面はタタキH類で、内面は當て具痕D1類である。

45~47は甕Aに分類される。45・46の口径の遺存度は1/10程度であるが、本窯跡製品の特徴である突帯状の粘土帯と柳構波状文を明瞭に遺している。45は、口縁端部外面の粘土帯は幅22mmで、中央部分の押圧後は上下の突帯を丁寧につまみ出している。46は、粘土帯の幅が17mmで、45よりも丁寧に突帯がつまみ出され、下端が削られている。さらに口縁端面にも丁寧なナデがみられ、45は1条、46は2条の沈線状に成形されている。突帯状粘土帯の下位には前述した2段の波状文がある。下段の波状文の間隔は45では約14cmである。胴部外面はタタキ目H類の後、屈曲部付近にハケ目が施され、内面には當て具痕D1類がみられる。いずれも焼成はあまく、45は灰赤色、46は浅黄橙色を呈している。

48~60は、外面はタタキ目H類、内面は當て具痕D1類がみられる。焼成は不良なものが多く、灰赤色や浅黄橙色を呈している。60は接合の結果、胴部下半~底部の形態を知ることができた。

確認調査・表面採集 確認調査・表面採集で得られた破片のうち、出土位置が判明している破片と接合もしくは同一個体と識別できなかったものを一括する。しかし、この中でも破片の色調などによって、61~66、67~78、79~80、81~90がそれぞれ同一個体と識別できた。

61~66、67~78は、甕Aに分類される。他と同様に幅17mmの粘土帯を口縁部に貼り付け、押圧の後に2条の突帯状へと成形している。ただし、67の押圧はややあまく、他に比べると形態が曖昧である。両者とも胴部の調整は、外面タタキ目H類、内面當て具痕D1類である。焼成はあまく、61~66は暗褐色、67~78は浅黄橙色を呈している。

註

1) 遺物の年代については、北陸古代土器研究会の諸氏より多くのご教示を得た。

4 調査のまとめ

以上、本窯跡の遺構・遺物についての概要を述べてきた。この雨池古窯跡の発見は、柏崎・刈羽地域では刈羽村枯木古窯跡に次いで須恵器窯の2例目となるが発掘調査の実施は初めての事例となる。その内容は遺構・遺物とともに遺存度がかなり低いものであったが、最後に若干の考察を加えて本窯跡報告のまとめとしたい。

雨池古窯跡の時期 須恵器を含めた古代の土器は、時期によって形態に差異の認められる食膳具や器種の組成によって生産年代を決定するのが通常である。しかし、本窯跡では食膳具の出土量は数点の小片にすぎず、甕類以外の保存状態が良好ではないため、正確な時期を特定し難い。ここでは遺物の時期を推定できるものについて取り上げ、本窯跡の時期に大枠で把握することとする。

まず、本窯跡出土遺物の中で、唯一ある程度の形態を想定できる食膳具は有台杯（4）であるが、これは有台杯Bと分類される深身の形態と考えられる。有台杯Bは8世紀には少なく、おもに9世紀から主流となる器種である。また長頸瓶（8）の肩部は張らずに丸みを帯びているが、長頸瓶の肩部がこのような形態になるのはV期以降のことである。したがって4と8により、本窯跡の出土遺物が8世紀には遡らないという時期的な上限を設定することができる。さらに本窯跡で特徴的なのは、突帯・波状文が口頸部に施される甕Aである。VI期以降になると甕類に突帯や波状文が少なくなる傾向があるが、このことは当該資料の時期的な下限として設定される。また双耳瓶（10）の耳部下半の形態はV期段階のものである。

これらのことから、本窯跡出土須恵器の時期はおむねV期に該当すると考えられる。ただし、食膳具に比べて貯蔵具は時期による形態変化が乏しく、詳細な時期の特定については困難である。特に、根柢のひとつとなった双耳瓶は、越後での出土例は稀であり、加賀地方と対比した時期特定にはある程度の幅を持たせる必要が感じられる。したがって、ここではV期を中心としつつも、9世紀前半といった時間の幅で時期を想定しておく。

窯業生産をめぐる課題 古代越後においては、おむねV期を境として土器の生産と流通に明確な変化がみられる〔春日1997〕。すなわちV期以降には佐渡小泊産須恵器が多く流通して在地産須恵器を次第に凌駕していき、在地での土器生産の主体は須恵器から土師器へと移行するのである。このような窯業生産の傾向を考えれば、操業していた時期を大枠で9世紀前半と想定した雨池古窯跡は、在地における須恵器生産の最終段階に操業されていたと考えられる。9世紀の柏崎・刈羽地域は三島郡として古志郡から分離して独立するなど、支配体制に大きな変化のある時期である。このような変化は、地形的な要因のほか、社会・経済の情勢が背景にあったと思われるが、窯業をはじめとする手工業に対する影響は大きかったと考えられる。

雨池古窯跡は遺存状態が悪かったとはいえ、周辺には他の窯跡の痕跡を確認することができなかった。したがって、本窯跡はSX-04が単独1基で存在し、操業していたのも短期間であった可能性が高い。このことから、製品の供給先は郷などといった狭い地域であったと考えられるのである。資料数や調査例が少ないとても原因があるが、現段階で本窯跡の消費地となつた明確な集落遺跡を確認することはできず、製品そのものの発見例も稀である。ただし、甕Aにみられる突帯・櫛描波状文といった装飾性の豊かさは、本窯跡が窯独自の技法を有していたことを充分に示している。小泊産須恵器が流通する以前の柏崎・刈羽地域における生産と流通および消費を明らかにしていくことが今後の課題といえる。

VI 庚申塚の経塚

1 調査

庚申塚の経塚は、柏崎市大字横山字庚申塚地内に所在する。平成3年、当該事業が申請された段階で現地踏査を試みたところ、尾根の先端部において小規模なマウンド状の盛土遺構が発見された〔柏崎市教委1992b〕。これが本経塚の発見された経緯であるが、当初は経塚ではなく、単独に存在する塚と考えられていたので、小字名より「庚申塚の塚」と称していた。この小字名は、当該地が庚申信仰との関係が深いことを示唆している。また、北側には旧道の痕跡があるなど、横山集落との関係が深い単独塚であることが想定された。平成6年、発掘調査に着手したところ、多数出土した小砾には經典を書寫した砾石経¹が含まれていることが判明した。したがって「庚申塚の塚」は経塚であることがわかり、遺跡名も「庚申塚の経塚」と改めることとなった。

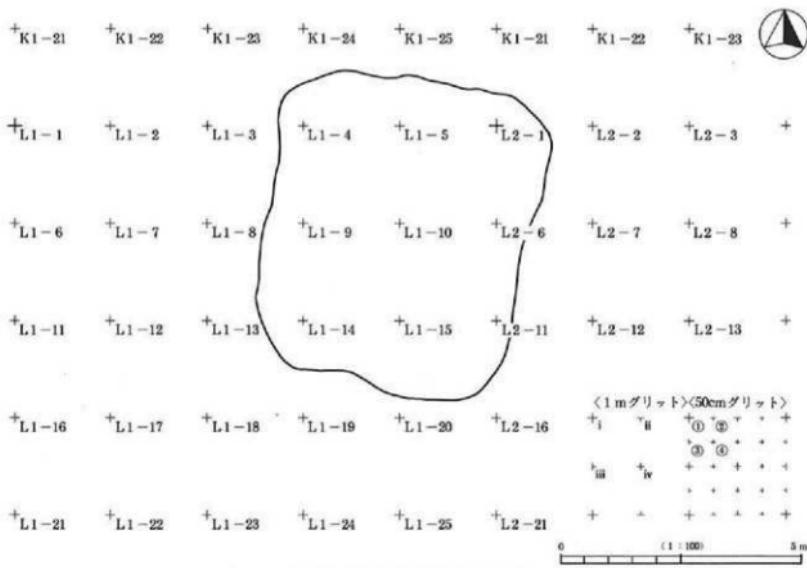
1) 調査区とグリッドの設定

庚申塚の経塚は、周囲との高差が約1mの小高いマウンド状をなして、単独で存在する。平面上における外部形態は長方形を呈しており、規模は1辺が約5.5~6.5mほどである。本調査にあたっては、マウンド部分のほかにも、土層の比較検討などの必要から周辺区域も対象とすることとした。したがって、マウンド部分を中心とした南北約15m、東西約20mの範囲が調査区として設定された。なお、本調査区は接する大宮遺跡調査区に接続している。

また、調査用のグリッドについては、国家座標軸をもとにして設定したので、報告にあたってもこのグリッドを利用して述べることとする。グリッドは、大グリッドを10m四方、小グリッドを2m四方として大グリッドを25分割した。大グリッドについては、X座標軸を西から1・2・3…の算用数字、Y座標軸は北からA・B・C…のアルファベット大文字をそれぞれ使用し、アルファベット大文字と算用数字を組み合わせることによって「A 1 グリッド」などと呼称する。したがって、このように設定すると、今回の調査区はK 1・K 2・L 1・L 2の4グリッドにまたがる位置といえる。なお、グリッドと座標軸との関係は、LラインはX=149.27、2ラインはY=6.56である。さらに、小砾をはじめとする遺物の取り上げについては、0.5m四方のグリッドを用いることとした。このグリッドの設定については、まず上記の小グリッドを1m四方に4分割してi~ivとし、次にこの1m四方のグリッドを0.5m四方に4分割して①~④とした。したがって、具体的に表記する場合は、大・小グリッドとこれらを組み合わせることによって、「K 1-1 i-①」となる(第11図)。

2) 調査の方法

調査の準備として、まず倒木等の除去が必要であった。大宮遺跡調査の一環として本経塚においても実施されたが、これによってマウンドの形態が明瞭となった。この状態で、測量を兼ねた現況撮影を業者の手により執り行った。その後、実際に発掘に取り掛かる。



第II図 庚申塚の経塚グリッド配置

本遺跡が経塚と判明したこと、調査の方法は着手後に再検討された。すなわち、当初想定していた「狹義の塚」とは、遺構に直接関係する遺物が伴わない場合が多いが〔品田1992ほか〕、本経塚の場合は、礫石経をはじめとする膨大な遺物出土量が見込まれたからである。

発掘の手順としては、まずマウンドの形態にあわせて十字ベルトを設定し、ベルトに沿った位置をサブトレーナーにより試掘した。ベルトの土層観察から、マウンドをなす盛土部や埋納部などが把握できた。そして、大量の小礫などの遺物は、おもに埋納部とした部分に集中していることがわかった。そこで、マウンドの外部をなす盛土部はあまり遺物を包含しないと考えられるので、まず先行して発掘する。次に埋納部に取りかかるが、埋納部上面ですでに遺物が検出されていたので、その状況を表す平面図を作成した。埋納部の発掘にあたっては、遺物の取り上げ方に多くの注意を払うこととした。小礫の取り上げ方法については第3節第2項で述べるが、ほかの遺物についても前項の0.5m四方のグリッド等を利用し、できるだけ位置・層序といった出土状況が明らかになるようにした。埋納部の最下層において、金属製の仏具類が出土したが、その状況も図化することとした。

経塚の調査は、土層の識別があまり明瞭でなかったため、造成時における旧表土層（第II層）上面ではなく、地山土層上面まで発掘することとした。ベルトを除去し、経塚の調査が終了した後、本経塚造成以前の所産と考えられる、地山土を掘り込んだ遺構の調査に着手する。完掘後、平面図を作成して調査は終了となる。

3) 発掘調査の経過

庚申塚の経塚発掘調査の現場作業は、調査区が接する大宮遺跡の調査と重複しつつ、一部併行して進められ、その期間は平成6年5月16日から7月9日までの、延40.5日にわたった。大宮遺跡の調査をも兼ねた調査員・調査補助員は延176人、作業員は延1,056人を要している。経塚そのもののほか、その周辺も対象としたので、調査面積は約300m²となった。

発掘の準備と着手 本経塚発掘調査の準備は、大宮遺跡の調査準備とともに行われた。発掘着手前に、空中撮影によって測量することとなつたが、経塚部分については4月26・27日に実施された。

5月16日、大宮遺跡で重機による表土剥ぎが始まられる一方、本経塚においても十字ベルトを設定して発掘に着手した。それまでは盛土のみの狹義の塚を想定していたが、出土する小礫が増加し、一部に墨書きも認められた。次第に本遺跡が経塚であることが明らかとなり、調査方針が再検討されることとなつたのである。17・18日は、本格的な発掘に着手する前に、周辺にも散逸していた小礫を回収し、地表面にて観察される小礫の分布状況を把握した。

発掘は、小礫が密集するマウンド部分をひとまず避け、周辺部分の表土剥ぎから始めることとした。マウンド部分については、19日から分布図を作成した。24日以降は、十字ベルトをもとにサブトレーナーを発掘し、小礫を取り上げていった。26日、南西側のサブトレーナーから、風鈴や銭貨が発見された。この時点で、本経塚における遺物内容の豊富さがうかがえたのである。

大量の小礫と遺物取り上げ作業 27日からは、発掘したサブトレーナーをもとにマウンドの土層断面を観察し、遺物の取り上げ方法について検討した。ベルト以外の盛土を掘り下げながら、50cm四方、深度5cm毎に大量の小礫を取り上げることとした。盛土発掘にあたっては、小礫のほかに風鈴や銭貨、鉄釘なども出土したが、最下層の小礫包含層からは錫杖頭・伏鉢が発見された。経典の記載された小礫以外にもこのような遺物が検出されたことで、よりいっそうに仏教的色彩の強い遺跡であることがわかった。これらの遺物は小礫とともに分布図に出土位置を示し、出土状況の微細図を作成した。また、6月4日にはベルトの土層観察・処理が終了したので、6日からは徐々にベルトを除去していく。マウンド部分の周辺も含め、盛土の掘り下げおよび小礫をはじめとする遺物の取り上げ、さらに実測作業等が終了したのは、30日となった。

発掘の仕上げ 30日に地山土層上面を検出させると、すぐに地山土層を掘り込んだ遺構の確認作業を行った。それらの遺構の多くは、本経塚が造営される以前の所産と考えられるが、7月4日から発掘を実施した。ただし、経塚に伴うと考えられるS Kp-1・5以外は性格等を明らかにできた遺構はなかった。また、若干の縄文土器小片が得られたこと以外は、本経塚築造以前の生業等の痕跡を見出すことはできなかつた。

5日、これらの発掘・撮影が終了したので、実測などの作業に移り、9日までにすべての現場作業を完了することができた。調査員・作業員は、引き続き大宮遺跡の調査を継続することとなつた。



写真4 庚申塚の経塚遺物分布図作成作業

2 遺跡と遺構

1) 立地と微地形

庚申塚の経塚は、今回発掘調査の対象となった横山東部丘陵の西側に派生した尾根上に位置している。本報告書では、当該丘陵を開析するおもな沢に対してアルファベット大文字を用いることで呼称しているが、西～南側にはB・C・Dの3沢がある。B沢とC沢は南西側、D沢は南南西側にそれぞれ開析されているが、これらの沢によって形成された尾根は比較的緩やかで、沖積面とは波状の境界線を描いている。「庚申塚の経塚」とは小字名をもとにした名称であるが、小字庚申塚とは当該丘陵の南西隅に位置し、B沢・B-C沢間の尾根・C沢・C-D沢間の尾根がその範囲に該当している。そこで、以下では小字庚申塚地内に形成された南北の2尾根に対して、「(庚申塚) 南尾根」・「(庚申塚) 北尾根」の仮称を用いて、記述上の便宜を図っていくこととした(第12図)。

庚申塚の経塚が立地するのは、庚申塚北尾根の先端部付近であるが、正確には尾根筋よりもわずかに北側へそれた位置に築造されている。横山東部丘陵には、西半部にも平坦地が形成されており、縄文前期の集落跡である大宮遺跡が営まれている。北尾根は、この平坦部から派生しており、少しずつ南側へ折れていくようにおおむね南西方向へと伸びている。尾根の延長は約100m、幅70～80m程度とさほど大きくなはない。また、尾根の付け根として括れた形状をなす尾根基部の両端は、B沢およびC沢内の小沢による侵食のために一部急斜面となっている。しかし、それ以外の尾根斜面は比較的緩やかに傾斜して沖積面に没している。南北を挟むB・C沢が全体として比較的緩やかであることもあってか、北尾根は張出しがやや小規模といえる。経塚の位置する尾根先端部分の標高は18～19m、直下で水田となっている沖積面(小字辰ノ尾)の標高は約4mであるから、その比高差は14～15mとなる。北尾根が没する沖積地は幅が約100mと狭く、横山西部の丘陵が近接している。現横山集落は、西部丘陵の北側裾部を中心に展開されており、丘陵上には八幡神社が存在している。

2) 基本層序

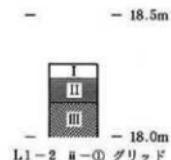
今回の調査における基本層序は、本経塚のマウンド部分に近接するL1-2 ii-①グリッドにおいて確認した。庚申塚北尾根の尾根筋からやや北にずれた地点である。土層観察の結果、おおむね第I層～第III層に区分された。すなわち、第I層：黒褐色腐葉土層、第II層：褐色粘質土層、第III層：黄褐色粘質土層である。

第I層は、現表土をなす層である。現況が山林であったように、腐葉土を主体としている。締まりがやや弱く、無数にある大小の木根が一面に張りめぐらされている。第II層は、旧表土層と考えられる。本層は、経塚の内部に位置する部分において削平がみられるほか、直上には経塚の盛土もしくはその流出土が堆積していることから、本経塚が築造された段階において表土となっていたと思われる。さらに、本層には縄文前期の土器片が含まれているので、縄文前期の遺物包含層にも相当すると考えられるが、これらは原則として本経塚の北西に展開する大宮遺跡に帰属するものと思われる。第III層は、当該地における地山土層である。本来、盛土遺構の基底部分は旧表土層である第II層上面にて確認するべきであるが、発掘中においては、第II層は盛土層との識別が困難であったこともあり、第II層を掘り込んだ遺構については、第III層上面にて確認することとした。



第12図 庚申塚の経塚と周辺の地名

■ 小字庚申塚
□ 庚申塚に隣接する小字名



第13図 庚申塚の経塚基本層序
柱状模式図 (1:20)

3) 経塚の概要

今回は、盛土を主体とする経塚の調査が中心となった。本経塚には、盛土や基底部のほかに、付属すると考えられる柱穴が検出された。本節では、本経塚およびそれに関わる遺構について説明し、その他の経塚との関係を見出すことのできなかった遺構については次項にて触れる。

庚申塚の経塚について概観するにあたっては、まず調査前における遺存状態と現地表面から観察された外部形態について述べ、次に発掘調査の結果による盛土部・基壇部といった内部構造について説明することとした。さらに、本経塚からは信仰に関わる豊富な遺物が出土しているが、遺物と層序との関係などといった出土状況についても説明する。

a 遺存状態と外部の状況

本経塚付近一帯の現況は山林である。発見段階では、樹木の伐採は行われた後であったが、無数の根株が残されており、マウンドの頂部にも大きな根株が根をはっていた。本経塚の築造や機能等に関わる場合があるために年輪を調べたものの、近世以前に植生していたものとは考えられなかった。マウンドは、L1グリッドの北東部に位置し、一部K1～2・L2グリッドに及んでいる。遺存状態はあまり良好とはいえない、南半部が土砂の流出によって西側へ開く沢状になっていることをはじめ、原形態をとどめていない部分が數ヵ所認められた。また、内部にあるはずの小塚も一部露出していた。しかし、比較的遺存状態が良好なのは北東隅周辺のみになるが、これをもとにして本経塚の外部形態を観察することとした。

本経塚の形態は、大きく流出してしまった西部を除くと、傾斜変換線を追うことが可能となり、結果として全体的には北北東～南南西方向に長い方形であることがわかる。やはり流出によるためか、隅部はやや丸みを帯びる。規模は、南北約6.5m、東西約5.3～5.5mを計る。頂部は、L1～4～5グリッドのみに形態が違っているが、当初は一边3.5～4.0mほどであったと思われる。現況における頂点の標高は19.60mなので、周辺との比高は、0.7～1.0mとなる（図版57）。

b 内部の状況

土層断面の観察により、本経塚内部の状況が確認できた（図版58）。本経塚は、盛土部・埋納部・基壇部そして2基の柱穴によって、構成されたと思われる（第14図）。ここでは、各部の概略を説明し、埋納部から出土した遺物についても触れることしたい。

盛土部 第1層が該当する。本経塚のマウンドを形成しているのは、おおむねこの盛土部である。40～50cmほどの層厚である。第1層は、全体的には明褐色を呈し、粘性および締まりのある粘質土層である。掘削された地山土（第Ⅲ層）および旧表土（第Ⅱ層）の混合土層であると考えられる。混合の割合をみると、第Ⅲ層の方が多くみられるため、全体的にやや明色化している。さらに土層観察をすれば、第Ⅱ層と第Ⅲ層との混合具合のわずかな差によってさらに細かく区分することも可能である。しかし、第1層が混合土層であることを考慮すれば、一括して把握しても本経塚造営の復元に関しては大勢に影響ないと考えられる。

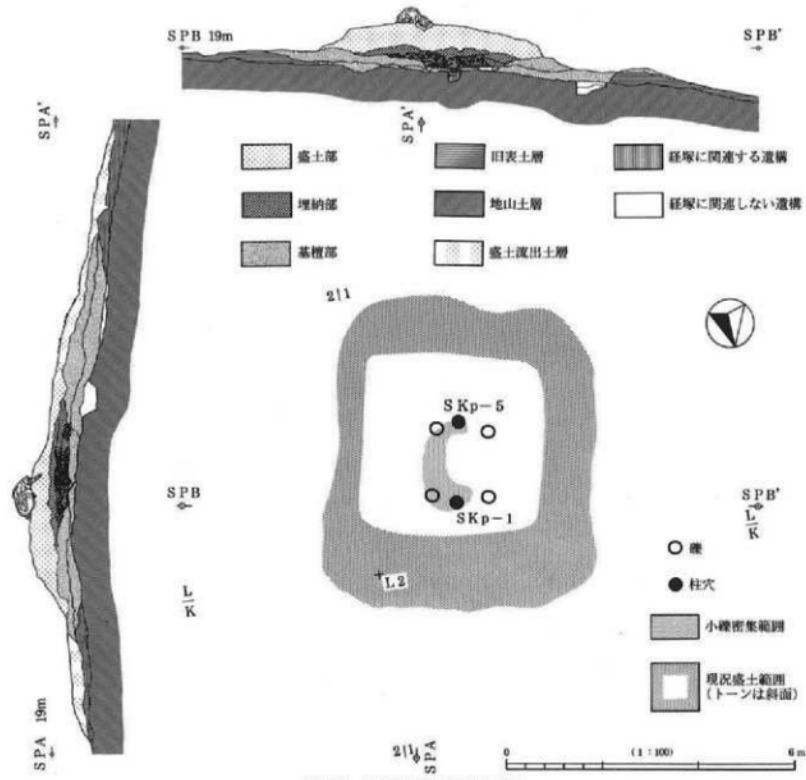
また、丘陵側である東側以外には第1層の流れ込み（盛土流出土層）がみられ、盛土部によって構成されている外部形態がやや変形してしまったことがわかる。

埋納部と遺物出土状況 この埋納部からは、礫石経を含む大量の小礫のほか、錫杖頭や伏鉢などの遺物が出土している。経塚の内部において、これらの遺物が埋納されてある施設であることから、埋納部の名称を用いることとした。

埋納部は、基壇部に対する掘り込みの覆土であり、第2～5層が該当する。平面上における埋納部と基壇部との識別が困難であったため、平面形態は不明であるが、後述するように下端が長方形であることや、遺物出土状況などから考えれば、おそらく上端も南北にやや長い（隅丸）長方形であったと推測される。断面形態は、下端が平坦で、上端に向かって緩やかに立ち上がる。上端の幅3.2～3.5m、下端の幅1.5～1.6m、深度約0.5mを計る。礫石経を含む大量の小礫は、明褐色粘質土層を間層とする4枚の包含層から出土している。小礫包含層の層厚は約5～10cmで、小礫の隙間に暗褐色砂質土が詰まっているが、おそらく間層の粘質土が風化したものであろう。第2a層は、褐色土層で、埋納部のほぼ全体を覆っている。掘削された第Ⅱ層が主体であり、第Ⅲ層がやや混入している。第2b層は、最上位の第1小礫包含層である。第3a層は、暗褐色土層で、第2a層に近似しているが、第Ⅱ層が大半を占めるためにやや暗色化している。第3b層は、第2小礫包含層であるが、土層観察では埋納部の中央部分にはみられず、周縁部分に広がっている。第4a層は、明褐色土層である。第2a・3a層とは異なり、第Ⅲ層を主体とするため、やや明色気味である。第4b層は第3小礫包含層である。第5層は、最下位の第4小礫包含層で、土坑状を呈する埋納部の床・壁面に広がっている。この第4小礫包含層からは、小礫以外の信仰に関わる遺物が出土している（図版61）。

埋納部の下端の形態は、南北にやや長く、ほぼ正方指向する長方形であるが、その4隅から比較的大きな礫が1点ずつ発見された。礫は、おおむね橢円形を呈するが、断面が偏平なものや方形のものがある。しかし、いずれも平坦な面を上方に向けてほぼ水平とし、長径を東西方向に配していた。礫は、長径30～42cm、短径23～31cm、厚さ18～21cmを計る。礫間の距離は、南北1.35m、東西1.10mである。この礫で作られた長方形は、N-99.5°-Eを指向する。

礫石経を含む小礫は、大きな礫で囲まれた埋納部において、西側を開いた「コ」の字状に分布している。ただし、南北辺の中央にはそれぞれSKp-1・5柱穴があるが、東西の分布はこの柱穴までにとどまる。北辺にあるSKp-1の内側には、先端を東側に向けた錫杖頭があり、その南側25cmの位置からは伏鉢が



第14図 庚申塚の経塚構造模式図

出土した。いずれも板状木片にのり、伏鉢には布小片が付されていた。また、南西部分に計4点の風鈴、北・西辺から計12点の銭貨が出土している。特に、錫杖頭・伏鉢付近から出土した銭貨は、数枚が鋸銘していた。さらに、ほぼ全域から釘が発見されているが、北辺と南辺付近の分布密度が高い。

基壇部 小縫などを埋納する前に、旧表土を掘削した上で、周囲よりもやや高めに盛土した部分を基壇部と称することとした。第6～8層が該当する。第6層は、明褐色粘質土層で、基壇部の最上位をなしている。平坦面を形成し、約20cmの比高を有するが、南側では第1層とともに流出が著しい。第7・8層は、暗褐色粘質土層で、掘削された部分に埋め固められている。埋納部を閉む縫は、第7層に伴う。基壇部を構成する土砂は、第II・III層を掘削したものと考えられ、明色・暗色と色調が異なるのは第II・III層の混合具合によるものと思われる。

柱穴 経塚に関連すると考えられる遺構は、SKp-1・5のみである。覆土の断面観察から、いずれも埋納部造成中に作られた柱穴と考えられ、一対をなすと思われる。柱根部に小縫が流入しているので、小縫埋納後に柱を抜いたと推測される（図版57・61）。計測値については、第14表を参照されたい。

4) その他の遺構・落ち込み

今回の調査で検出された遺構は、経塚および経塚に関連すると思われる柱穴とその他の遺構・落ち込みとに大別できる。経塚と関連遺構（S Kp-1・5）の概要は前項で述べたが、ここでは経塚との関連が見出せなかった遺構について説明する。一括して概観するため、詳細については第14表に記載した。

経塚と関連しないと思われる遺構は、すべて第II層発掘後に第III層（地山土層）上面にて確認された。遺構の種別としては、土坑・ピットがあるが、比較的平面規模が大きいにもかかわらず、深度の浅い場合には第II層の落ち込みと考えた。ただし、ある程度の深度、もしくは掘り込みを有する土坑でも、平面形態が不定形となるものは、明確な遺構とはみなし難いものもある。また、ピットについては、今のところ有機的な関係を見出すことはできない。しかし、深い土坑によって消滅してしまったピットがあったことも考えられるため、何らかの組み合わせがあった可能性もある。

これらの遺構からは、縄文土器片が出土している場合がある。いずれも小片であるが、本経塚に接する大宮遺跡に属す可能性があることから、遺構の所属時期を縄文前期に求めることができる。大宮遺跡における縄文集落の遺構群とはやや距離を隔てているが、何らかの関連があったことが想定できる。

番号	グリッド	種別	平面形	長径×短径	深度	覆土	出土遺物	備考
なし	K1=2, L1=2	柱穴	横円形	33 × 24	24.5	固版58		本文参照 経塚に関連
1	L1=5	柱穴	横円形					欠番
2								欠番
3								欠番
4								経塚
5	L1=9~10	柱穴	円形	23 × 22	25.5	固版62		本文参照 経塚
6								欠番
7								経塚
8a	L1=5+10, L2=1+6	土坑	不定形	154 × 99	40.0	固版58		縄文土器
8b	L1=10	溝状土坑		— × 51	28.0			土坑は、8b～dから出土した可能性もある。
8c	L1=10	土坑	隅丸長方形	105 × 68	6.5			
8d	L1=10, L2=6	土坑	不定形	158 × 119	26.0			
9	L1=10, L2=6	ピット	円形	29 × 29	8.5	褐色粘質土／黄色粘土粒・木炭粒混入		
10	L2=6	ピット	隅丸長方形	21 × 19	39.0	褐色土		
11	L2=6	ピット	隅円形	28 × 25	24.5	褐色粘質土／木炭粒混入		
12a	L2=11	落ち込み		— × —	3.5			
12b	L2=6+11	落ち込み	隅丸長方形	72 × 48	3.0			
12c	L2=6+11	土坑	不定形	94 × 76	18.0	明褐色粘質土／地山土粒多く、木炭粒や		
12d	L1=10+15, L2=6+11	溝状土坑		— × 25	20.0			
12e	L2=11	落ち込み		— × —	3.5			
13a	L1=10	溝状土坑		— × 56	26.5	固版58		縄文土器は、13b～dから出土した可能性もある。
13b	L1=9~10	土坑	不定形	144 × 132	26.0			
13c	L1=14	溝状土坑		— × 58	15.0			
13d	L1=14	溝状土坑		78 × 40	11.0			
14								欠番
15a	L1=15	溝状土坑		54 × —	28.5			
15b	L1=15	土坑	不定形	54 × 88	26.0	固版58		
15c	L1=14+15	土坑	不定形	— × 81	8.0			
15d	L1=14			— × —	—			
16								
17	L1=14	ピット	不整円形	42 × 35	17.0	褐色粘質土／地山ブロック・木炭粒混入		
18								欠番
19								欠番
20a	L1=8+9, L1=13~14	土坑	不整隅丸方形	149 × 147	26.0	褐色粘質土／縫まりあり、木炭ごく少量		
20b	L1=9+14	土坑	不整長方形	90 × —	11.0			
21a	L1=8	土坑	不整長方形	94 × 72	9.5	明褐色粘質土		
21b	L1=8	土坑		— × —	6.0			
22	L1=3+8	土坑	不整形	164 × 121	44.5	固版58		
23								
24								
25	K1=24~25	土坑	不整隅円形	158 × 131	15.0	(上層)：褐色粘質土縫まりあり、地山土粒・木炭粒混入 (下層)：暗褐色粘質土縫まりなし	小 縮	
26	K1=25, L1=5	土坑	不整隅丸方形	77 × 72	26.5	褐色粘質土／木炭粒多く混入	縄文土器	
27	L1=14	ピット	隅丸方形	34 × 30	17.5	褐色粘質土／縫まりあり、地山土粒・木	縄文土器	
28	L1=14	ピット	円形	35 × 31	49.5			

第14表 庚申塚の経塚遺構一覧表

※ 長軸・短軸・深度：単位はcm

3 遺 物

1) 金属製品と関連遺物

庚申塚の経塚からは、錫杖頭や伏鉢といった金属製の仏具が出土した。その出土状況をみると、いずれも板状の木製品などが伴っている。遺物の種類を重視すれば金属製品と木製品とを区別するべきであるが、今回は出土状況を尊重して、金属製品とその関連遺物として同じ項目で述べることとした。小礎を除けば、これらの遺物は第4小礎包含層から出土している。なお、仏具の記載にあたっては、おもに岡崎謙治監修『仏具大事典』(鎌倉新書 1982年)を参考とした。

a 锡杖頭と関連遺物

錫杖頭は、関連遺物とした板状木片とともに、L 1-5 iii-①グリッド、第4小礎包含層から出土した。長方形を呈した埋納部北辺のはば中央であり、S Kp-1に接した位置にある。板状木片は、木目に合わせた縱長の方向に錫杖頭をのせている。

錫杖頭⁽¹⁾ 鑄造による鋼製で、総高13.7cm、輪の最大幅7.6cm、重量112.1gを計る。形態をみると、大きさは輪と柄によって構成されていることがわかる。輪は、中央で柄とともに2条の突帯状の緊縛を受け、蕨手形となる。柄はそのまま上方に延長して輪頂直下で再び輪に接触する。輪には、中央よりもやや上位の2カ所において括りがあるため、上位に小さく、下位にやや大きめの膨らみが計4カ所みられる。各1カ所に半月形の金剛牙が付されているが、上位の2基は径7~8mm、下位の2基は径11mmと大きさが異なる。輪頂には五輪塔形をいただき、輪内では蕨手形にそれぞれ宝瓶を乗せる。柄の先端は、蕨手形を突き抜けて宝塔形となる。腐蝕により細部の形態は明瞭ではないが、宝塔の相輪部分には宝輪があり、その隙間には繩がめぐらされている。輪の下部の柄は、断面形態がすでに丸みを帯びているもの、わずかに認められる稜線によって、当初は六角形であったことがわかる。繩をめぐらされた3筋の沈線群によって2区画に分割されるが、下端にも2筋の沈線群がめぐり、突帯状の膨らみもみられる。このほか、外面には特に装飾は施されていない。内面は袋徳形となり、下端で径9mm、長さ4.0cmの空洞部分が作られている。なお、輪には3本ずつ計6本の環が伴う。環は幅3mmの銅板を円形に曲げたもので、検出段階では端部は閉じられてはいなかった。

錫杖は、錫杖頭・杖部・石突きの3部から構成され、長さはほぼ等身の5尺5寸が通常とされている。当該資料にも、杖部が伴っていた可能性もあるが、存在は確認されなかった。杖部が木製であれば、すでに腐朽したと考えられる。その場合、内面における空洞部分の径9mm以上を断面径とする杖部が想定される。また、杖部下端にある石突きと考えられる遺物も出土していない。錫杖には、通常のタイプと、石突きを略して杖部を極端に短した手錫杖とされるタイプがある。通常の錫杖は、僧侶が巡業する際に携帯する道具であるが、手錫杖は、おもに法会などにあたって堂内で使用される道具である。当該資料の場合には、伏鉢等も出土していることから、儀式等で使用される手錫杖であった可能性が高い。

関連遺物⁽²⁾ 板状木片である。樹種の特定は難しいが、杉であろうか。長方形の柾目薄板を用いたものと思われる。錫杖頭に接している面は比較的良好に遺存しているが、その裏面や側面および端部などは腐朽が著しく、平・断面ともに形態をとどめてはいない。断面の木目観察によれば、原料とした樹木の芯の位置は表面側で、上方よりもややずれた方向にある。表面をもとにすれば、遺存する幅は5.2cmほどで、厚さは1.2cmなので、当初はそれ以上の大きさが想定される。

b 伏鉢³と関連遺物

伏鉢は、板状木片および布小片とともにL1-4 iv-④グリッド、第4小穀包含層から出土した。前述の鋸杖頭からは約25cm南側の位置にあたる。伏鉢は板状木片の上にあり、鐘座に布小片をのせていた。

伏鉢（3） 鋳造による銅製で、縁部径9.1cm、口径10.0cm、器高3.9cm（脚部を含め4.3cm）、器厚0.2~0.3cm、重量277gを計る。頂部外面は、中央に径7.0~7.1cmの鐘座が設けられ、その周縁は上端幅8mm、深度1mmの浅い溝状となり、縁部と画されている。溝の中央には、1mmほどの突起状の盛り上がりが近接して二重みられ、1単位の界線となっている。縁部は、外方にやや張り出しているので、体部との境界は段によって明瞭になっている。体部上方の縁部下1.3~1.6cmの位置には、2カ所に鰐状を呈する耳が付けられ、紐と思われる断片が付着していた。口唇部も縁部と同様に外方へ張り出しているため、体部との境界には段を有している。そして、ほぼ均等に3基の脚が配せられている。

関連遺物（4・5） 4は、板状木片である。樹種は特定できないが、柾目薄板を使用したと思われる。厚さ2~3mm程度であるが、ほとんど形態をとどめてはいない。伏鉢やそれにかかる重量のために、口唇部による円形の押圧痕がみられ、断面上はV字に折れ曲っている。折れ曲ったことによる破損は著しく、中央部分のほか、側面や端部は折損したために遺存していない。

5は、布小片である。3cm×2cm程度が遺存しているのみである。糸は木綿が使われ、織り方は縦糸と横糸とを1本ずつ交差させて織る平織である。色調は、灰白色を呈している。

c 風鈴（金鐸）⁴（6~9）

埋納部の第4小穀包含層から計4点出土している。4点とも青銅製である。出土位置はL1-4南部～L1-9北部、つまり埋納部の南西部分に限定される。いずれも欠損箇所があるものの、おおよそその形態を把握することができる。基本的な形態としては4点とも同様である。胸部は非常に薄く、上半と下半は別々に鋤られた後に難ぎ足されているが、特に明瞭な補強などはみられない。吊り下げるために付される頂部の「紐」は、幅狭く裂いた7cmほどの銅板を折り曲げて端部を頂部の孔に差し込み、抜けないよう両端をV字に広げている。また、通常の風鈴は音を鳴らすために胸部の内側に「丸」を入れるが、胸部に欠損があるため、4点とも遺存していなかった。なお、胸部上半には外側から内側へ押し窄められた痕跡があるが、これは製作時によるものではなく、埋納時における押圧によるものと思われる。

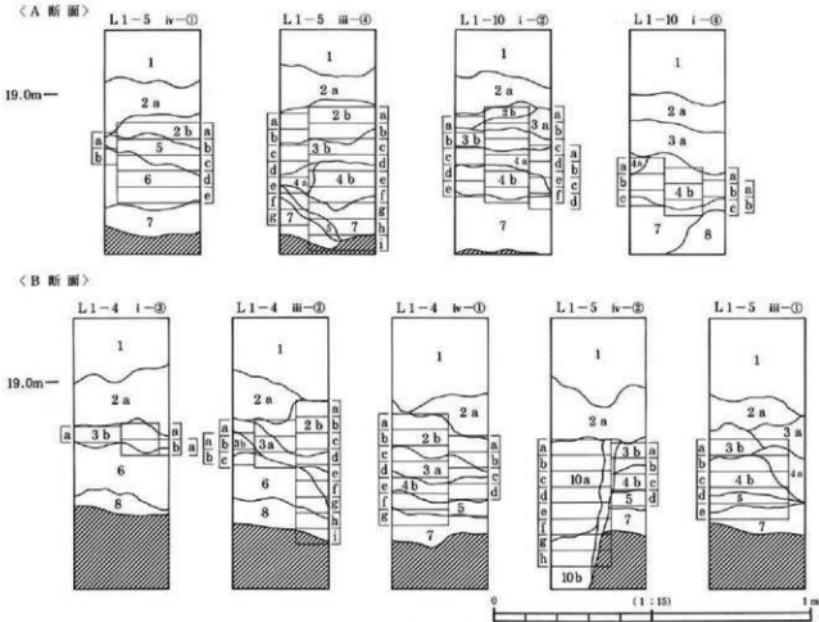
d 錢貨（10~22、第15表）

細片となつたものもあったが、12点を図化することができた。すべて埋納部の第4小穀包含層からの出土である。出土位置は埋納部の北辺に多いが、細片などは南西部にもみられる。10~14および18~19はそれぞれ鋤した状態で出土しており、10~14には締紐の断片と考えられる微細な纖維が孔内に付着し、18~19は板状木片の上に乗せられていた（20）。最古銭は淳化元寶（990年初鑄）、最新銭は洪武通寶（1368年初鑄）で、北宋銭を主体とするが、明錢が混じる。なお、今回出土した錢貨には鋤の付着が著しく、充分な観察ができなかつたが、14は色調等から模鋲錢と考えられる。

番号	出土地点	銭名	国名	初期年	備考
10	No44 L1-5 ii-④	治平元寶	北宋	1064	5枚がこの編號で
11		天禧通寶	北宋	1017	鋤着
12		元豐通寶	北宋	1078	鋤極あり
13		淳化元寶	北宋	990	
14		元祐通寶	北宋	1086	14は複数鋲孔
15	No5 L1-2 ii-①	皇宋通寶	北宋	1030	
16	No2 L1-4 ii-①	洪武通寶	明	1368	
17	No14 L1-9 ii-①	天聖元寶	北宋	1023	
18	No28 L1-4 ii-②	熙寧元寶	北宋	1068	18を上、19を下と
19		政和通寶	北宋	1111	し、木片上に乗る
21	No18 L1-9 ii-②	淳化元寶	北宋	990	「淳」からの推測
22	No13 L1-9 ii-①	開元通寶			

番号は図版65に対応

第15表 庚申塚の経塚における出土錢貨一覧表



第15図 庚申塚の経塚土層断面と小礫検出深度の相関図

e 釘

56点を図化することができた。埋納部第4小礫包含層のはば全域から出土しているが、前述のように南北辺のやや内側における分布密度が高い。錆の付着が著しいが、本来の形態を把握することができた。すべて鉄製と思われる。長さは7~8cmが中心であるが、27・41・46・58・61などは9~11cmとやや長い。断面の形態が方形もしくは長方形の角釘で、当部がL字に折り曲げられる。ただし、そのまま折り曲げるものの、頭部を薄くして折り曲げるものなどの複数の形態が認められる。

2) 小 級

今回の調査では、現地表面から採集したものも含めると、出土した小礫は29,547点を数えた。今回の調査では、小礫の出土位置を把握するための取り上げ方法を考案したが、まずははじめにこの方法を説明し、次に小礫の概要を述べていくこととしたい。

なお、本経塚に埋納されていた小礫の中には、縄文土器片と珠洲陶器片が1点ずつ含まれていた。後述するように、この縄文土器片には他の小礫と同様に墨書きが認められたので、本項にてあわせて報告する。ただし、全体的な数量や計測といった際の説明にあたっては、単に「小礫」とした場合でも、この土器片・陶器片も含むものとする。

a 小礫取り上げの方法

土砂の流出などによって地表面に露出してしまった小礫も多いが、大半はマウンドの内部に埋納された状態を良好にとどめていた。前節で述べたように、断面で観察された小礫の包含層は4枚確認された。本来であれば、平面上の位置を把握しつつ、各層毎に小礫を取り上げるべきであった。しかし、包含層とその間層は10cmに満たず、小礫の隙間にみられる粘質土と間層の粘質土とは平面からの識別ができなかつたため、層毎に発掘することは非常に困難であった。

そこで、今回の調査では平面上の位置をグリッド、層序を便宜的に区分した深度によって把握することとした。具体的に説明すると、まずサブトレンチによる土層観察によって、最上位の小礫包含層を確認する。搅乱などによってもともとの位置から浮上した小礫ではなく、本来の位置にとどまっている小礫を対象とするためである。本經塚の場合は、埋納部の第2 b層が最上位の包含層であった。第2 b層以下の発掘にあたっては、50cm四方のグリッド毎に行なった。このグリッドは、2m四方のグリッドをさらに16分割したものである（第1節第2項参照）。そして、第2 b層上面を0cmとし、深度5cm毎に土層を区分して小礫を取り上げていくこととした。なお、各々の深度区分は上位からアルファベット小文字により記号化した（87頁参照）。以上により、小礫の地点・深度を把握し、土層断面で観察された層序と対比することで、何らかの関係を見出し、埋納における方法などを知る手がかりとすることを目指した（第15図）。

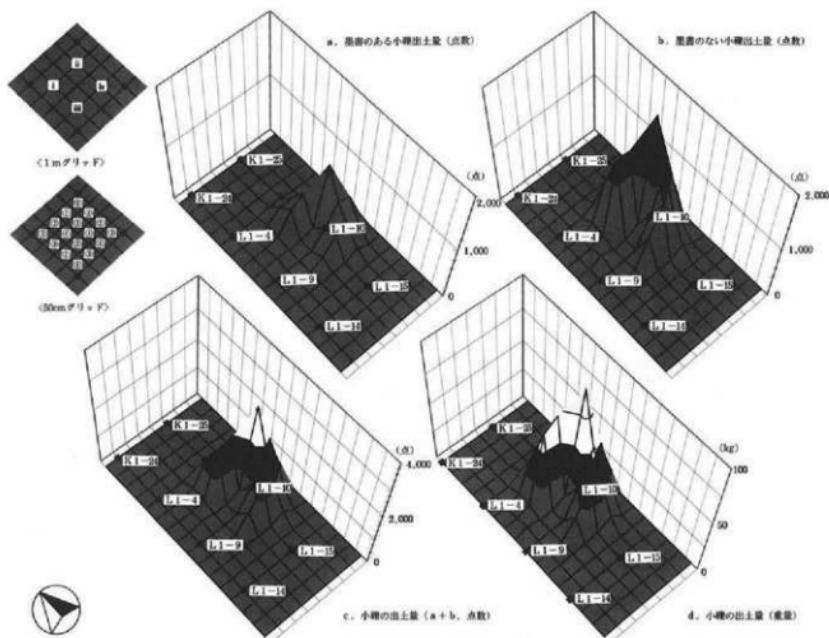
b 小礫の概要

出土した小礫は29,547点で、総重量190.345kgを計る。ほとんどが川原で採集されたと思われる、安山岩系の小礫で占められる。個々の形態や大きさは多様であり、長径3～4cm前後のものから、10cm以上のものもある。ここでは、まず出土状況について簡単に触れ、墨書のある小礫およびない小礫についてまとめ、小礫とともに出土した土器についても触れる。

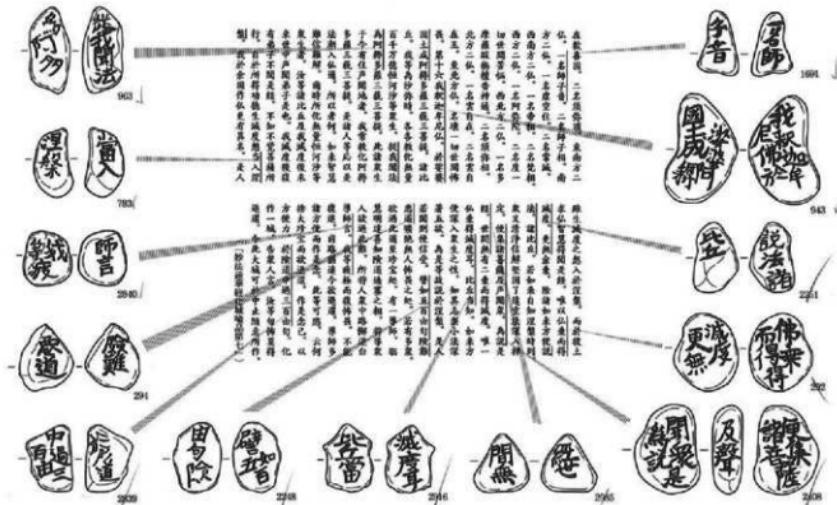
出土状況 これまで述べてきたように、搅乱や土砂の流出等で散逸したと考えられるものを除けば、大半が埋納部の小礫包含層とした第2 b・3 b・4 b・5層から出土している。第16図は、出土した小礫を50cm四方のグリッド毎に集計したグラフであり、グラフの起伏した形状はおおよその分布を示していると思われる。墨書の有無により、それぞれa・bに集計した。2つのグラフは、量が異なるものの、類似した形態をなしている。小礫の配置は墨書の有無によって異なる状況を看取することはできず、無関係であった可能性もある。cはa・bを合計したグラフである。埋納部は、L1-4～5・9～10グリッドにはほぼ正方位を指す長方形をなすが、小礫は東辺の中央部に特に多く、分布は埋納部の形態に沿って南北辺の中央にまで至る「コ」の字状を呈している。dは、点数ではなく重量を表したグラフである。やはり同じ形態をなし、小礫の大きさにも無関係であったことがわかる。

墨書の痕跡がある小礫（礫石經） 何らかの墨痕が確認できた、いわゆる「墨書礫」は13,868点で、全体の約46.9%にある。記載された内容は、すべて經典の模写であることがわかった。供養を示す文言など願意を記載した小礫が出土する事例があるが、本經塚では經典以外の文章を確認することはできなかつたので、すべて「礫石經」と考えられる。判読できなかった墨書礫も、字数などから推測すれば、おそらくはすべて礫石經であったと目される。個々の資料については、判読できた4,261点を取り上げ方法に基づいて第17表に掲載した。

礫石經のうち、1点に複数の文字を記載したものは多字一石經、1文字のみを記載したものは一字一石經と呼ばれている。本經塚の場合、第17表をみても多字一石經と一字一石經の出土状況には特に違いは認めらず、発掘中においても、混合された状態が確認されている。



第16図 庚申塚の経塚におけるグリッド別小碎出土量



第17図 庚申塚の経塚出土石經と法華經

まず、多字一石経には記載の方法にいくつかのパターンがあるため、簡単にまとめたい。ただし、記載の方法は小碑の形態などに応じて異なり、例外的なものも多数あるので、ここでは大まかなパターンを述べるのみにしたい。出土した碑石経のほとんどは、小碑の長径となる方向を縦軸とし、平坦な面におおむね縦書きされている点ではほぼ共通する。用いられる小碑は、おもに断面が梢円形などの偏平な形態（a類）・不整長方形（b類）・不整三角形（c類）の3種類がみられる。a類は、墨書きされる平坦な面をおおむね2面有している。長径4～6cm前後の場合は、両面に1～3文字を縦1列に記載されるが、このパターンが量的には多い（878・2782など）。また、長径が10cm前後になると文字は2行以上にわたるが、縦位に列をなすもの（943・2249など）、左上から右下へ斜位になるもの（1087・2408など）、第1文字目だけを最上位の中央にして第2文字以降を縦位の列にするもの（2411など）などがある。b類は、長径6cm未満のものはあまりみられず、文字は側面を含めて4面に記載することができる（1394・1548など）。324は5面にみられるが、経典の文章と上端面の「是」の位置を考えれば、書き手の認識としては4面であったと思われる。c類は、3面に記載できる（2052・3616など）。ただし、形態的にはc類であっても、書き手が面数を2と認識することによってa類に含まれる場合もある（585・1624など）。一字一石経は、長径2～5cmの偏平な小碑に1文字のみ記載するが（171・1609など）、983のように例外的な大きさのものもある。記載の方法のほか、文字の太さ・形態や、くせなどからも細かな分類が可能である。しかし、今回は、書き手が複数存在したことを探るためにとどめておきたい。

多字一石経に記載されている文字を判読すると、妙法蓮華經（以下、法華經）の文章を模写したものであることがわかった。法華經は、28品（巻）にも及ぶ長大な文章によって構成されているが、碑石経から判読できた文言は、法華經のほぼ全体から確認することができた。このほか、1297には法華經ではなく仏說觀音菩薩行法經の一節が模写されている。さらに、第17表に掲載できた碑石経をみると、記載された文言が複数の品にみられず、品の特定が可能であったものに限っていえば、化城喻品第七を模写した碑石経が84点と最も多かった。次に譬喻品第三が60点、信解品第四が48点、五百弟子受記品第八が39点と続く。以下、品第二・第十一・第十四が21～30点で、ほかの品は1～20点であるが、品第二十一・第二十二・第二十七は確認されなかった。

では、法華經が具体的にはどのように模写されているかについて、第17図を参照されたい。第17図は、妙法蓮華經化城喻品第七の一部と、それと同じ文言がみられる出土碑石経を対応させたものである。現段階では虫食い状態ではあるが、判読不可能であったものも含めれば、全文が模写された可能性がある。さらに、第17図に掲載した法華經には句点（「。」）を付したが、これは文章の意味における区切りと考えられる。碑石経をみると、意味や内容によって改行、改面あるいは小碑そのものを改めたりするようなことはなく、模写する際には特に意識されていなかったことがうかがえる。おそらく、機械的に次から次へと書き続けていったのではないだろうか。また、294は2248に統く文言を記載しているが、「陰（險）」の字は两者に重複している。このことから、法華經は1度だけではなく、複数模写されたことが指摘できる。ただし、法華經と照合させると、1～2字欠けていたり（963・1491・2753など）、1字余計に記載されている場合（292など）が見受けられる。本経塚造営にあたって原本とした法華經と本報告書で参考とした法華經との差異とも考えられるが、書き手の単純な間違いであったことも想定できる。また、法華經において対応する碑石経が確認できなかった部分も多いが、判読不可能だったものなどがこれを充足すると考えれば、14,000点に満たない碑石経では、ほとんどの品の法華經から文言が確認できたことからも、模写を複数行ったとは考えにくい。したがって、経典の模写は1回のみであった可能性が高い。



写真5 庚申塚の経塚における墨書きのある土器片 (2003 約1:1)

墨書きされた土器 (2003) 埋納部の小砾包含層からは、小砾に混入された状態で2点の土器片が出土している。うち1点には、他の小砾と同様に墨書きが認められたので、単なる紛れ込みではないことがわかる。土器が小砾とともに埋納されたという事実は、本経塚の造営を考える上で重要な資料になると思われるのでも、ここで紹介する。

2003(写真5)は、圓文土器の小片で、長径5.7cm、短径4.6cmを計る。文字は、他の小砾と同様に長径の方向を縦軸としており、前述のa類で、長径4~6cmのパターンにより墨書きされている。外面には「作衛護」、内面には「若說法」の各3文字が読み取れる。したがって、「作衛護若說法」と記載された2003は、妙法蓮華經法師品第十の一節を模写したものであることがわかる。内外面のほか、破損面すべての磨滅が著しい。そのため、圓文土器そのものについての詳細な観察ができず、器種・形態や製作時期を特定することは難しい。おそらく、表面の磨滅が意図的なものかは不明であるが、磨減したことによって土器への墨書きが容易になったはずである。土器そのものの焼成は良好で、にぶい橙色を呈している。胎土には径1~1.5mmの砂粒がやや多く混入している。L 1-10 i-①グリッド、深度c(第2 b層上面から10~15cm)からの出土である。

製作時期が不明なことから、この土器片の採集地点を明確にすることはできない。ただし、本経塚造成時における表土層と思われる第II層は、大宮遺跡の遺物包含層と考えられる。2003は第II層に含まれていたとすれば、当該地にて採集されたものと思われる。その場合、經典を模写する作業は、経塚が営まれた当該地にて行われた可能性が生じる。

このほか、L 1-4 ii-②・④、深度cから珠洲の壺もしくは甕の破片が出土した。墨書きの痕跡がなかったので、次に述べる墨書きの痕跡がない小砾に含まれよう。ただし、内外面および破損面は磨滅が著しく、研磨具への転用が考えられるが、2003のように墨書きしやすい状態であったことも指摘できる。

墨書の痕跡がない小蹠 第16図が示すように、墨書の痕跡がない小蹠は、痕跡のある小蹠を量的に上回っている。しかし、前述のように、その出土位置は礫石経となんらかわるところがなく、混在している状況が確認される。墨書されない小蹠が果たした役割を明らかにすることはできないが、大量の小蹠を埋納する行為そのものに特別な意味合いがあったとも考えられよう。

4 調査のまとめ

以上、庚申塚の經塚発掘調査の概要を述べてきた。柏崎市内においては、礫石経の經塚とされる遺跡が複数知られているが、本格的な発掘調査は初めての事例となった。また、新潟県内・外でもわずかな件数しかない。礫石経の經塚にはそれぞれに特徴的な構造や遺物の出土状況が確認されているが、本經塚も興味深い内容となった。今回の調査では、着手段階で礫石経の内容が法華經を模写しているということが判明した。そこで、50cm×50cm×5cmという細かい単位で礫石経を取り上げ、礫石経の埋納位置と記載された文言の位置とに関わる詳細なデータを得ることができた。このデータをもとにすれば、礫石経を埋納する位置や方法を復元する手掛かりとなるのではないだろうか。

庚申塚の經塚が持つ特徴や築造時期については、今回の調査で得られた資料をことにして、次章第2節にて考察することとした。

註

- 1) 墨書された小蹠の名称については、山口博之氏が天童市高野坊遺跡出土遺物を検討する中で、用語の整理をされている〔山口1998〕。山口氏の見解を踏まえた上、本報告書では次のような根拠をもとに、用語の統一を図ることとした。
一般的には、墨書された小蹠に対して「墨書蹠」・「経石」・「供養墨書蹠」・「礫石経」といった記載がみられる。經塚の場合、經典が模写された遺物は、各々の素材によって「紙本経」・「瓦経」・「鋼板経」・「貝殻経」と表現されている。本報告書では、これらの表現に併せさせ、墨書された内容がすべて經典を模写したものであると考えられることを尊重し、「礫石経」の名称を用いることとした。
- 2) 錫杖頭については、前述の『仏具大事典』のほか、形態分類を試みた大和久震平氏の論考〔大和久1989〕に拠った。
- 3) 当該遺物は、水澤幸一氏によってすでに紹介されている資料である〔水澤1996〕。以下の報告にあたっては、水澤氏の評価に依拠するところが大きい。特に、これまで当該資料を「錫鉢」としていたが〔柏崎市教委1994b〕、本報告書では「伏鉢」と称することとした。すなわち、「伏鉢」とは脚を有し、置いて叩くものであり、錫架で吊り下げて打ち鳴らす「錫鉢」とは区別することとした。また、口唇部の形態からの考察により、製作時期は16世紀とされている。
- 4) 清水 乞編『仏具辞典』(東京堂出版 1978年)や有賀要延編『平成新編仏教法具図鑑』(国書刊行会 1993年)などによれば、仏具で「鉢」とされるものには3種あり、それぞれ読み方が異なる。①「れい」：鐘形の本体の頂上に柄を、内部に舌をつけたもの。金剛鉢。②「りん」：仏前で説經の時に鳴らす鉢形の鳴りもの。密教では金鉢。③「すず」：堂や塔の屋根の縁にかける莊嚴具。風鉢、金鉢。当該資料の場合は、形態から考えても③に該当するのであり、混同を避けて本報告書ではおもに「風鉢」の語を用いることとした。

庚申塚の経塚出土礫石經観察表（第17表）

- 本観察表では、検出された29,547点のうち、墨書きされた文字が判読されたもの4,261点を掲載した。
- 経石は、0.5m四方のグリッド毎に取り上げたため、本観察表ではこのグリッド毎に表を作成した。また、グリッドで取り上げのできなかった礫石經で、遺構出土以外については、北西区・南東区などといったおまかれた地点別にまとめた。
- 本観察表における深度は、第1小砾包含層の検出面から計測した数値である。5cm毎に取り上げたので、以下のようにアルファベット小文字で表わすこととした。各々の標高については、第15表などを参照されたい。

a - 0 ~ 5 cm b - 5 ~ 10 cm c - 10 ~ 15 cm d - 15 ~ 20 cm e - 20 ~ 25 cm
 f - 25 ~ 30 cm g - 30 ~ 35 cm h - 35 ~ 40 cm i - 40 ~ 45 cm j - 45 ~ 50 cm

- 重量はg、長径・短径・厚さはcmを単位とした。
- 文字欄では、判読可能な文字を記載したが、不可能な文字については、字数を推測して「□」で示し、残文や原本となった法華経などにより推定できれば、「()」または「(カ)」で註した。さらに、誤字などのほか、法華経との差異が認められる場合は、「(ママ)」と註し、その旨備考欄に記載した。なお、法華経については、東洋哲学研究所編『法華経一字索引 付開結二経』(1977年)を参考とした。
- 文字欄において、「/」は改行、「『』」は改面されていることを表す。
- 多字一石経で法華経の品(卷)まで判明したものについては、品欄において品の番号を算用数字で示した。番号と品名との対応については、第16表を参照されたい。また、礫石經に記載されている語句が、複数の品においてみられるために品を特定できなかった場合は、品欄に◎で示した。
- 多字一石経と一字一石経とは表を別にせず、上記2・3に従って記載したが、一字一石経については、品欄に◇で表した。



品	名 称	品	名 称
1	序品第一	15	從地涌出品第十五
2	方便品第二	16	如來壽量品第十六
3	譬喻品第三	17	分劑功德品第十七
4	信解品第四	18	隨喜功德品第十八
5	藥草喻品第五	19	法師功德品第十九
6	授記品第六	20	常不輕菩薩品第二十
7	化城喻品第七	21	如來神力品第二十一
8	五百弟子受記品第八	22	驥累品第二十二
9	授學無學人記品第九	23	藥王菩薩本事品第二
10	法師品第十	24	妙音菩薩品第二十四
11	見寶塔品第十一	25	觀世音菩薩普門品第
12	提婆達多品第十二	26	陀羅尼品第二十六
13	勸持品第十三	27	妙莊嚴王本事品第二
14	安樂行品第十四	28	普賢菩薩勸發品第二

第16表 法華経における品およびその名称の対応表 [東洋哲学研究所編1977]

第17表 庚申塚の經塚出土碑石經観察表

K1-25 Ⅲ-②グリッド

No.	深度	直轄	長径	短径	厚さ	文字	品	備考
1	b	61	6.3	3.7	1.8	楚南「便自以小 智為足」	8	

K1-25 Ⅲ-③グリッド

No.	深度	直轄	長径	短径	厚さ	文字	品	備考
2	b	59	6.6	3.7	1.6	大通地「實並 無為足」	4	同前66-III
3	b	54	5.0	4.1	2.2	禹「而曾於 之」	4	
4	b	74	5.4	4.3	2.3	通「口」		
5	b	56	7.5	3.2	1.9	五萬緝「諸修少 王」		
6	b	51	5.2	3.7	1.8	大口「口」		
7	b	30	4.4	3.3	2.1	口「三」		
8	b	35	4.3	3.8	2.1	審「其」		
9	b	59	6.0	4.7	1.4	世修「口」		
10	b	34	4.8	4.2	1.8	通「口」		
11	b	23	4.0	3.1	1.5	飲「口」		
12	b	9	3.1	2.5	0.9	估「口」		
13	b	18	3.6	2.8	1.2	足見「口」	◇	
14	b	30	3.7	3.0	2.0	誠「口」	◇	

K1-25 Ⅲ-④グリッド

No.	深度	直轄	長径	短径	厚さ	文字	品	備考
15	b	195	7.6	6.2	3.2	□○/□執「口」 □□□□□□		
16	b	26	3.5	2.6	1.9	是「口」		
17	b	14	3.2	2.8	1.5	日「口」	◇	
18	b	34	3.8	3.8	1.7	見「口」	◇	

K1-25 Ⅳ-②グリッド

No.	深度	直轄	長径	短径	厚さ	文字	品	備考
19	b	36	5.1	4.7	1.5	口「口」		
20	b	72	8.0	4.3	3.0	安通「是「口」/□		
21	b	109	6.3	5.1	4.6	成「修「筆」		

L1-4 Ⅱ-①グリッド

No.	深度	直轄	長径	短径	厚さ	文字	品	備考
22	b	37	5.1	3.7	1.4	能「」	◇	
23	b	11	3.4	2.3	1.0	某「」	◇	

L1-4 Ⅱ-②グリッド

No.	深度	直轄	長径	短径	厚さ	文字	品	備考
24	b	124	6.7	5.1	2.4	又「復無「木底 人」」	7	
25	b	111	7.8	5.9	1.8	神通力「如是終 之」	16	
26	b	17	3.1	2.0	1.8	体「口」		
27	b	38	6.0	3.5	1.3	如「口」		
28	b	198	9.1	6.1	2.6	□□□□□□□□□□ □□□□□□通「前口」/□□□ □□□□□□		
29	b	19	3.2	2.7	1.6	用「」	◇	
30	b	13	3.2	3.0	1.6	漢「」	◇	
31	b	53	4.8	3.5	2.2	風「」	◇	
32	b	5	3.1	2.2	0.7	力「」	◇	
33	b	45	4.4	3.7	2.1	界「」	◇	
34	c	21	4.5	2.7	1.0	使「口」		
35	e	75	7.4	4.1	2.2	吾「口」		
36	e	53	5.0	4.2	2.1	皆「」/有「口」		
37	e	36	4.4	3.9	1.8	光懶「口」		
38	e	35	5.3	6.7	1.0	末「」	◇	
39	e	51	4.3	4.3	2.3	佛「」	◇	
40	e	11	4.0	2.8	1.1	底「」	◇	
41	e	17	3.2	2.8	1.3	履「」	◇	
42	e	14	4.0	2.8	1.2	化「」	◇	
43	e	12	2.8	2.2	1.3	本「」	◇	

L1-4 Ⅱ-③グリッド

No.	深度	直轄	長径	短径	厚さ	文字	品	備考
44	b	47	4.9	3.2	1.8	同修「柔軟「音譜」」	3	

45	b	304	10.2	6.3	2.3	若竹法華經「其身 長淨/□□(如後)淨	19	
46	b	7	3.4	2.0	0.7	瓦「」		
47	b	10	3.5	2.5	0.8	方「」		
48	c	45	6.5	3.2	1.9	明如來「供正願 「」明行「足	8	
49	c	55	7.1	3.2	1.4	七寶所合「成「劫 名為「宝」明	8	
50	c	34	3.9	3.1	2.1	口佛「口」		
51	c	32	4.9	2.8	1.7	尊「口」		
52	c	48	8.1	2.6	2.0	無量「口」/「安口」		
53	c	34	3.6	2.8	2.5	後「於「口」		
54	c	26	3.4	3.2	1.5	無「輪」		
55	c	21	4.7	3.9	1.0	舍「」	◇	
56	c	13	2.8	3.1	1.1	主「」	◇	
57	c	21	4.0	3.2	1.1	三「」	◇	
58	c	32	4.5	3.4	2.0	山「」	◇	
59	c	16	3.7	3.1	1.3	者「」	◇	
60	c	8	2.1	2.2	1.1	種「」	◇	
61	c	37	5.7	4.7	1.6	天「」	◇	
62	c	9	2.7	2.2	1.3	裡「」	◇	
63	e	119	8.5	4.2	2.1	彼本/「願我「城 後「在存所往常 為「」法」	11	
64	e	75	6.4	4.4	2.5	口此「/□口「口」 /□口		
65	e	39	5.1	2.8	1.5	口諭「口」		
66	e	49	6.4	3.6	1.6	妙口「/第口「口」 □		
67	e	28	3.7	3.4	1.6	說他「口」		
68	e	31	4.5	3.6	1.9	忘「口」		
69	e	21	3.4	2.6	1.5	禪「口」		
70	e	30	4.8	3.6	1.1	體口「口」		
71	e	90	7.0	4.3	2.1	大富口「口」		
72	e	60	7.0	4.5	1.7	六「」	◇	
73	b	86	6.7	5.1	2.2	感應「強化「阿茲 之等」	4	
74	b	1944	17.9	11.1	4.4	顯如意是亦未為無 □□□□□□□□□□ □(欲我後後弗生毒緣) 問其□□□□□ □(義經和御印)若 □□□□□□□□(人 說出三千言)無待 無數□□□□□「口」 □□□□(無生善阿 羅漢)	11	
75	b	95	8.2	4.7	1.8	於聲圓「人「亦 不稱名「說其	14	
76	b	94	9.8	5.4	3.1	術「千口方乃至 一万方滿一千 一百乃至「口」 □□□□□□□□(一 十說得五三二二)	15	
77	b	72	6.5	3.5	2.5	有入承「福隨其 所取」	18	
78	b	40	4.8	3.6	2.1	是究「口」	◎	同前66-III
79	b	36	5.5	3.8	1.0	口得「/□口		
80	b	43	3.9	3.4	1.9	我「口」		
81	b	24	5.2	4.2	1.8	後「口」		
82	b	49	5.5	3.5	2.4	赤口「口」(動詞)		
83	b	40	4.7	4.1	1.2	自口「」		
84	b	25	5.1	4.0	1.2	口以女「往口」		
85	b	26	3.8	3.6	0.9	問已「口」		
86	b	57	5.8	4.6	1.1	度世「釋教「口」 /得口」		
87	b	13	3.2	2.8	0.9	作口「口」		
88	b	20	3.6	2.9	1.7	苦「先」/口		
89	b	23	3.7	3.2	1.3	復口「口」		
90	b	6	3.2	2.8	0.6	除「口」		
91	b	21	4.9	2.4	1.2	當「廣」		

92	b	25	4.1	3.4	1.4	中「手」		
93	b	43	5.9	3.8	1.8	木口「□□		
94	b	61	6.0	3.5	1.9	面口「□□		
95	b	50	6.7	4.2	1.8	木口「□□		
96	b	38	4.6	3.2	2.1	平「□」		
97	b	54	4.9	3.5	2.0	為「□□		
98	b	59	6.0	4.1	2.3	□口葉「□□		
99	b	44	4.2	4.0	1.3	見「□」		
100	b	72	5.6	4.7	2.1	於瓦「□□」 ／□□「□」		
101	b	61	4.5	4.0	2.1	得「□□」		
102	b	47	5.7	2.1	1.9	歎生「□□」		
103	b	33	8.6	2.4	1.8	其「□□」		
104	b	37	4.7	3.5	1.4	無口「□」		
105	b	86	6.7	3.9	2.1	口例「□□」		
106	b	86	6.3	4.5	3.3	待「□」		
107	b	49	5.3	2.9	2.2	利「□」		
108	b	52	5.6	4.5	1.8	去「□」		
109	b	36	5.8	3.9	1.8	淨「□」		
110	b	45	4.4	3.7	2.4	敬「□」		
111	b	22	3.3	2.8	1.7	仮「□」		
112	b	11	3.2	2.5	1.0	休「□」		
113	b	53	5.3	4.0	2.1	第「□」		
114	b	55	5.1	3.5	1.8	供「□」		
115	b	21	4.5	3.3	1.5	情「□」		
116	b	19	3.3	4.2	1.3	作「□」		
117	b	26	6.0	3.6	1.0	房「□」		
118	b	28	3.8	3.0	2.4	否「□」		
119	b	85	8.1	4.8	2.2	定「□」		
120	b	15	3.4	2.1	1.8	之「□」		
121	b	12	3.8	2.9	0.8	體「□」		
122	b	16	3.0	2.7	2.0	近「□」		
123	b	20	3.2	4.2	1.9	苗「□」		
124	b	9	2.9	2.5	1.0	安「□」		
125	b	7	3.0	2.2	0.9	生「□」		
126	c	18	4.3	3.2	1.0	座「□」		
127	c	54	8.1	3.9	2.2	為「□」		
128	c	16	3.1	2.7	1.8	無「□」		
129	c	12	3.8	2.6	1.1	中「□」		
130	c	10	2.4	3.1	1.1	等「□」		
131	c	19	3.9	2.5	1.6	於「□」		
132	c	32	4.2	3.4	1.5	苦「□」		
133	c	15	2.6	2.3	2.1	廟「□」		
134	c	6	1.9	1.8	1.3	生「□」		
135	c	19	4.0	2.6	1.6	可「□」		
136	c	13	3.3	2.4	1.5	設「□」		
137	c	10	1.3	2.8	1.0	人「□」		
138	c	12	3.4	2.5	1.3	苗「□」		
139	d	56	5.4	3.3	2.2	者有「□」	17	
140	d	94	6.7	4.8	1.7	口對口「□□」 「□□」		
141	d	77	7.6	4.3	2.1	是□□「□□」 「□□」/為□見口 「□」		
142	d	35	3.7	2.9	2.7	其「□」		
143	d	81	6.8	4.9	2.8	行□□□「□」 「□」/者「□」		
144	d	25	2.9	4.0	1.6	此「□」		
145	d	26	3.6	3.4	1.9	人「□」		
146	d	32	6.2	3.8	1.3	候「□」		
147	d	26	3.6	3.2	1.4	三「千」		
148	d	19	4.3	2.9	1.3	莫「□」		
149	d	33	4.4	3.9	2.0	人布「□」		
150	d	26	4.3	3.6	1.9	大反口「諸」		
151	d	39	4.6	3.5	1.5	口成「□所」		
152	d	49	7.8	3.3	1.7	口方至「於口我 □」		
153	d	26	4.2	2.4	1.5	赤「□」四東		
154	d	59	5.2	4.2	2.1	神「□」		
155	d	90	7.8	4.8	1.7	歲歲「禱」		
156	d	101	7.6	5.4	2.4	無與「□□□」		
157	d	18	3.6	2.6	1.6	持「□」		
158	d	86	6.6	3.6	2.1	化往「□□」		
159	d	18	4.0	2.8	1.4	是故「諸」		

160	d	93	7.7	3.7	2.6	是人口「□□」		
161	d	76	7.6	4.1	1.7	復幽「□□□」		
162	d	52	5.6	5.6	1.6	謗「□□」		
163	d	33	5.4	3.3	1.8	主口「□」		
164	d	83	6.5	5.6	2.0	所口「□」		
165	d	47	4.7	3.7	2.8	是「□」		
166	d	33	8.8	3.4	2.8	轉「□□」		◇ 開拓67-111
167	d	23	4.5	2.7	1.5	口上「□」		◇ 開拓67-111
168	d	9	2.7	2.2	1.1	所「□」		
169	d	25	4.0	3.0	1.3	絕色「□□」		
170	d	14	4.2	2.5	1.1	策「□」		
171	d	8	2.6	2.8	1.0	伏「□」		◇ 開拓67-111
172	d	26	3.3	3.6	1.3	起「□」		◇ 開拓67-111
173	d	18	3.6	2.8	1.4	復「□」		
174	d	22	3.8	2.7	1.6	確「□」		
175	d	19	3.6	2.0	1.9	自「□」		
176	d	35	4.0	3.7	1.8	秒「□」		
177	d	15	3.6	2.0	1.6	上「□」		
178	d	18	3.2	2.6	1.4	乏「□」		
179	d	18	3.6	2.6	1.8	垂「□」		
180	d	14	3.4	2.3	1.6	入「□」		
181	d	11	3.6	3.7	1.1	制「□」		
182	d	42	4.6	3.7	2.2	通「□」		
183	d	18	3.5	2.9	1.3	評「□」		
184	d	20	2.6	3.2	1.7	門「□」		
185	d	12	3.3	2.7	1.2	託「□」		
186	d	16	2.8	2.9	1.5	尚「□」		
187	d	19	3.8	2.9	1.3	疋「□」		
188	d	12	3.4	2.4	1.0	今「□」		
189	d	4	2.5	2.2	0.5	遞「□」		
190	d	19	4.7	3.1	1.4	屢「□」		
191	d	8	2.4	2.1	1.4	便「□」		
192	d	19	3.9	2.7	1.4	新「□」		
193	e	35	5.6	3.4	1.5	尊「□」		
194	e	21	4.0	3.4	1.1	謂「□」		
195	e	32	4.9	3.9	1.6	道「□」		
196	e	30	4.0	3.3	1.3	何口「□」 以「□」		
197	e	10	3.1	2.8	0.9	微「□」		
198	e	64	6.4	4.7	2.1	□□口「□」 □□「□」		
199	e	91	7.0	5.1	2.8	吾「□」		
200	e	129	8.3	5.1	2.7	貴口「 從避葉「□」 □□是□」		
201	e	205	9.6	6.1	3.1	□□□□各「□」 □□「□」是□/ □□□		
202	e	44	4.4	4.0	2.2	道「□」		
203	e	23	3.5	2.0	1.5	寃「□」		
204	e	29	3.6	2.3	1.7	有「□」		
205	e	25	3.1	3.5	1.2	米「□」		
206	e	22	3.4	3.3	1.2	究「□」		
207	e	63	4.9	4.6	1.8	齒「□」		
208	e	71	7.3	4.5	2.0	往「□」		
209	e	11	2.3	2.3	1.3	共「□」		
210	e	13	3.3	2.8	1.3	三「□」		

L1-4 ハ-イ-①(4)グリッド

No.	深度	重量	長径	短径	厚さ	文字	品	備考
211	e	29	4.6	2.1	1.4	是□ 見		
212	e	23	4.3	3.1	1.1	比丘「□」		
213	e	54	6.0	3.9	1.5	徒遙「□」 □□「□」		
214	e	43	4.6	4.2	1.6	口無「□」		
215	e	81	5.4	3.6	2.4	吾能「諸」		
216	e	52	5.2	3.5	2.2	把口「無口」 「□」		
217	e	51	4.3	3.1	2.1	合「說」		
218	e	45	5.1	2.9	1.9	說具「□」		
219	e	35	5.0	3.4	1.4	窮富「稅奪」		
220	e	83	5.8	4.3	2.1	世「□」		
221	e	38	4.5	2.8	2.2	三□「□」□		
222	e	49	4.6	2.7	1.8	口若「□」		
223	e	65	6.2	4.1	1.3	佛華「是□」		

224	c	45	4.5	3.8	2.1	所「行」□□	
225	c	39	4.8	2.5	1.1	體「口	
226	e	69	6.1	5.3	1.2	口「行」□□/□□	
227	c	76	7.8	5.4	1.5	□□□是「□□□	他
228	c	51	5.2	2.8	2.1	其人「選出」□□	
229	c	31	5.5	2.7	1.0	問「□□	
230	c	33	4.4	3.0	1.9	當「□□	

L1-4 ■-②④グリッド

No.	横度	高さ	長径	短径	厚さ	文字	品種考
231	c	29	5.1	3.5	2.0	後徳「度	?
232	c	34	4.7	3.5	1.9	善「微	
233	c	37	4.9	3.7	1.8	口山諸「口	
234	c	36	4.2	3.8	1.6	三「百	
235	c	40	4.9	3.5	1.9	「微」口	
236	c	160	6.8	4.9	2.9	□□□/□□□ □□□□/□□□□	
237	c	73	6.2	3.8	2.0	光口「心	
238	c	49	5.1	5.0	1.1	○/□□「口」 □	
239	c	23	4.9	2.7	1.1	萩高「曉	
240	c	123	7.3	6.2	2.0	鷹	◇
241	c	26	3.7	3.3	1.8	白	◇
242	c	69	6.4	4.7	2.0	圓	◇
243	c	19	3.7	3.1	1.2	品	◇
244	c	11	2.9	2.6	0.9	大	◇
245	c	56	5.5	4.5	2.1	露	◇
246	c	29	4.6	3.3	1.8	青	◇
247	c	103	6.4	4.5	3.0	蛇	◇
248	c	39	5.0	3.6	1.8	明	◇
249	c	20	3.4	3.2	1.1	朗	◇

L1-4 ■-④グリッド

No.	深度	垂重	長絆	短絆	理込	文字	品	備考
250	d	11	3.7	2.5	1.1	◆		
251	t	71	5.5	3.4	2.5	振刷「其」上金	3	
252	t	34	4.8	2.9	1.8	同前「口」 <u>口本</u>		
253	f	33	5.4	3.6	1.9	口有「崩」		
254	f	49	4.4	2.8	1.7	巧「口」		
255	f	34	5.1	4.9	1.8	口〇/〇/〇/〇/ 〇/我		
256	f	81	7.6	4.7	1.7	口圓「口」		
257	t	33	4.2	3.6	1.6	象「口」		
258	f	14	3.7	2.6	0.9	邦「口」		
259	f	15	4.2	2.1	1.1	告語「口」		
260	f	111	7.1	5.9	1.6	〇口〇/圓〇〇/得〇 〇〇〇/〇〇〇/〇〇		
261	f	15	3.5	4.2	0.8	如	◆	回聲57-111
262	f	9	3.2	2.0	1.2	秋	◆	
263	t	36	6.0	3.4	1.4	牽	◆	
264	f	18	4.3	3.1	1.4	達	◆	
265	f	21	3.3	2.6	2.3	是	◆	
266	g	43	5.4	3.2	1.9	口人「口」		
267	g	125	8.1	5.8	2.1	〇口〇/〇/前〇〇 〇〇〇〇		
268	g	18	4.6	2.7	0.9	由〇「〇〇」		
269	g	20	2.7	2.7	2.0	各〇〇	◆	

L1-4 iv-①グリッド

No.	深さ	底面	長径	短径	厚さ	文字	品番	考
270	b	39	4.4	3.6	1.8	波形「作他	4	
271	b	31	5.7	2.9	1.4	斜面「作他」□□		
272	b	29	4.4	3.0	1.3	波形「開口」		
273	b	30	4.5	3.4	1.5	U字形「□」		
274	b	56	4.6	3.5	1.8	缺		◇ 錠部7-111
275	c	81	4.9	4.1	2.0	圓周「物口」		
276	c	56	6.5	3.8	1.8	波形□□「面口」 「作他」		
277	c	56	6.0	3.1	2.1	□□「面口」		
278	c	12	2.9	2.4	1.2	「作他」□□		
279	c	11	3.7	2.7	0.8	波形「□」		◇
280	e	23	4.3	3.2	1.5	缺		◇

281	c	25	3.0	1.8	1.5	女	◇
282	c	67	5.8	4.6	1.9	男	◇
283	d	332	9.8	7.2	2.6	通七日药「諸衡之 智」並無上道已/ 起藥方□□□□ □□□□□□□□輪為 兩乘漢法師千子命	14
284	d	16	3.9	3.0	1.0	妙口	□
285	d	48	6.2	3.0	2.8	歡語「□□□」	□
286	d	28	3.7	3.3	2.3	走	◇
287	d	11	2.7	2.7	1.1	比	◇
288	d	54	9.1	6.1	1.3	尊	◇
289	d	53	7.2	3.8	2.2	詔	◇

1.1-4 ハードグリット

326	c	126	8.9	5.1	2.1 諸口道口「□□□」 □		
327	c	27	3.9	3.4	1.8 駿友「□□」		
328	c	35	5.1	3.1	1.7 □足「□□」		
329	c	53	6.1	3.2	1.9 □足「□□」		
330	c	59	6.2	3.9	2.1 駿時「所」今□□		
331	e	39	5.6	3.2	1.8 僕「□」		
332	c	42	5.2	4.5	1.6 二乘「□□」		
333	c	73	7.2	4.6	2.1 諸口「□□」		
334	c	152	6.7	5.4	2.6 驅口「□□」「音論」		
335	c	35	6.0	3.7	1.1 □若「□」		
336	c	61	4.8	3.8	2.8 比丘「□□」		
337	c	28	4.7	3.1	1.4 駿口「□□」		
338	c	35	4.8	3.9	1.7 王「□□」		
339	e	123	8.4	5.7	2.7 再□□/是□□ 「□□/□□□□」		
340	c	71	6.0	5.6	1.6 諸口「□□」		
341	c	29	4.7	3.1	1.7 沢「為」		
342	e	112	6.0	6.3	2.9 為□□/□□□ 「□□/□□□」		
343	c	30	4.8	3.3	1.7 前「□」		
344	c	20	4.3	3.3	1.3 □口「□□」		
345	e	21	3.7	3.4	1.8 旁「□」		
346	c	24	3.9	3.5	1.5 第「我」		
347	c	11	2.8	1.8	1.6 □「□」		
348	c	44	5.4	4.4	2.0 今 ◇		
349	c	21	3.4	3.7	1.5 千 ◇		
350	c	44	4.5	4.2	1.5 伏 ◇		
351	c	14	3.6	3.0	1.2 廣 ◇		
352	d	46	5.6	3.9	1.4 其口「□□」		
353	d	125	7.8	4.9	2.0 口品「有口」 「□□/□□」		
354	d	39	5.1	3.4	1.6 大口「□□」		
355	d	51	6.1	4.2	1.9 音普「□□」		
356	d	30	4.6	2.9	1.7 笛「□」		
357	d	43	4.7	3.9	1.8 乃「諸口」		
358	d	72	7.0	4.8	1.5 修跋「□□」		
359	d	120	6.7	4.7	2.1 □□/為□□/□ 「□□/□□□」		
360	d	26	3.4	2.4	1.9 門「□」		
361	d	13	3.4	2.2	1.1 乃「□」		
362	d	114	7.4	5.5	2.4 □□若「比丘比丘 口」「□□/□□/□」		
363	d	43	5.3	3.2	2.1 一七「□」		
364	d	26	3.9	2.7	1.8 月「□」		
365	d	25	4.2	3.6	1.1 佛所「□」		
366	d	43	5.9	3.9	1.1 □口「□□」		
367	d	46	4.7	3.2	1.8 □口「□□」		
368	d	29	4.6	3.3	1.5 何口「□□」		
369	d	23	4.1	2.7	1.5 □「□」		
370	d	19	3.8	3.3	1.2 女「□」		
371	d	177	7.4	6.1	2.9 得口「□□□」 □		
372	d	478	12.6	6.2	3.4 2.1 一七「□」 11 法華經に は「未足為 體」とある □□□□□/□□□ □□□□□□□		
373	d	206	13.3	4.8	2.1 □□□□□/□□□ □□□□□□□		
374	d	56	6.4	4.5	1.4 世尊「□□」		
375	d	71	5.4	4.5	2.5 大口「口無「□□」 □□」		
376	d	19	3.8	3.2	1.2 天「□」		
377	d	66	6.8	5.2	2.0 駿「□」		
378	d	66	6.8	3.4	2.1 駿「□」		
379	d	22	3.6	2.8	1.5 伏「□」		
380	d	31	5.0	3.7	1.8 雷「□」		
381	d	43	4.6	3.6	1.8 方「□」		
382	d	55	4.8	4.1	1.7 長「□」		
383	d	36	4.9	3.7	1.6 苗「□」		
384	d	19	4.2	2.7	1.4 是「□」		
385	d	16	3.3	3.6	1.3 一		

386	d	25	5.0	2.9	1.3 吾「□」	◇	
387	d	69	7.5	6.0	1.3 𠙴「□」	◇	
388	d	16	3.3	2.1	1.8 是「□」	◇	
389	d	31	4.2	3.6	1.7 之「□」	◇	
390	d	16	3.8	3.5	1.6 行「□」	◇	
391	d	18	3.5	2.8	1.4 碩「□」	◇	
392	d	7	2.8	2.1	1.2 三「□」	◇	
393	d	22	4.2	2.7	1.2 金「□」	◇	
394	d	22	4.2	2.5	1.9 如「□」	◇	
395	d	21	3.6	4.0	1.0 是「□」	◇	
396	d	33	3.2	3.6	1.7 其「□」	◇	
397	d	14	2.9	3.1	1.5 扬「□」	◇	
398	d	82	5.7	4.7	2.3 積「□」	◇	
399	d	25	2.5	4.6	1.9 施「□」	◇	
400	d	12	2.7	2.4	1.1 佐「□」	◇	
401	d	9	2.4	4.0	0.8 知「□」	◇	
402	d	46	4.3	3.5	1.8 推「□」	◇	
403	d	8	3.6	2.1	1.2 有「□」	◇	
404	e	58	5.4	3.1	2.9 □口「施口」		
405	e	48	4.8	4.2	2.1 領口「□」		
406	e	15	3.3	3.0	1.2 植「口」		
407	e	18	3.1	2.8	1.1 三「番」		
408	e	26	4.2	3.8	1.8 十上「□」		
409	e	26	4.2	3.3	1.5 何「□」	◇	
410	e	12	3.6	2.6	1.4 中「□」		
411	e	14	4.0	3.0	0.8 本「□」		
412	e	66	6.2	4.6	2.2 甫「□」		
413	f	49	6.4	3.4	1.6 漢「□□」		
414	f	65	6.4	5.0	1.2 常口「□□□」 「□□/□□」		
415	f	59	6.0	3.9	2.2 □口衣「□□□」		
416	f	169	8.5	6.4	3.1 頃口「而此口者 「□□□」「□□/□□」 「□□□」		
417	f	35	6.3	4.2	1.8 善「□□」		
418	f	53	6.1	2.9	2.1 余時「大日「□□」		
419	f	28	4.4	3.3	1.4 大口「言」		
420	f	48	4.6	3.5	2.8 四「□」		
421	f	13	3.0	2.5	1.8 他「□」		
422	f	10	2.3	2.3	1.8 不「□」		
423	f	9	3.2	2.6	1.1 命「□」		
424	f	33	5.0	3.5	1.3 為「□」		
425	f	43	6.0	4.2	1.8 墓「□」		
426	g	43	5.0	3.5	1.9 手/刀「剪以」 3		
427	g	33	4.6	3.4	1.5 是「迦葉」		
428	g	855	9.2	9.0	4.2 □□□□/□□口 □/□而御口/□ □□□	5 (66-111)	
429	g	45	8.9	3.2	1.8 □舌口「□」		
430	g	56	5.1	4.3	1.8 □是口/□薄「□」		
431	g	85	7.7	3.5	2.5 □口/□人「□□」 「□□□」		
432	g	23	3.9	2.7	1.5 男「□」		
433	g	35	5.5	3.9	1.4 得是「□」		
434	g	38	4.9	3.9	1.7 之「□」		
435	g	52	6.4	3.4	1.9 □口大「□□□」		
436	g	25	3.3	2.6	2.4 百「□」		
437	g	23	2.5	2.1	2.0 育「舍」 「面」		
438	g	15	3.1	2.8	1.6 舌「□」		
439	g	36	4.8	3.4	1.7 言「□」		
440	g	49	6.2	3.8	2.1 素「□」		
441	g	39	5.2	3.8	2.1 設「□」		
442	g	37	4.6	3.9	1.6 平「□」		
443	g	13	3.6	2.7	1.2 仇「□」		
444	h	90	7.5	2.9	2.1 表御及「集大衆 「□□□」		
445	h	57	6.0	3.1	1.9 □弱「□□□」		
446	h	8	3.5	3.2	1.0 七「□」		
447	h	8	3.0	2.6	1.1 七「□」		
448	h	7	2.4	2.7	1.0 背「□」		
449	h	6	2.2	2.8	1.0 治「□」		

No.	深度	底质	长径	短径	厚度	文字	品	備考
450	c.	36	5.8	3.5	1.6	以口「口」+		

1-1-4. $k=0$ グリッド

No.	深度	重量	長絶	短絶	厚さ	文字	品	備考
451	4.5	4.08	5.05	4.55	1.85	即	△	

L1-5 ト-①グリッド

No.	深度	重量	長徑	短徑	厚さ	文字	品	備考
452	b	43	4.9	3.7	2.4	枝等	千二百	2
453	b	44	4.9	3.9	1.8	多	實有	6
454	b	38	5.4	3.5	1.9	圓錐	受我	7
455	b	45	5.2	4.4	1.7	圓	子	28
456	b	19	3.9	2.7	1.1	薄	口	
457	b	21	4.2	2.1	2.0	千	口	
458	b	32	5.2	4.4	1.1	圓	受口	
459	b	28	4.1	3.1	1.9	住	亭	
460	b	11	3.6	2.3	0.8	貝		◇
461	b	8	2.5	2.3	1.0	人		◇
462	b	7	2.2	2.3	1.1	匱		◇
463	d	24	4.6	3.6	1.4	火	指	口
464	d	66	3.4	2.2	2.4	爭	口	口
465	d	36	4.8	3.2	3.0	於	口	口
466	d	29	3.0	2.6	1.8	闇		◇
467	d	13	3.8	3.7	0.7	齒		◇
468	e	34	5.8	3.7	1.2	彼		◇

L1-5 i-③グリッド

品	目	考	字	形	聲	形	聲	義	部	類
469	b	27	5.3	4.0	1.8	見「十六」 <u>王子</u>		7		
470	b	27	5.7	3.8	2.1	是「七」 <u>寶華</u> 「佛		9		
									國	土
471	b	49	4.8	3.6	2.3	謚「為」 <u>口</u>				
472	b	43	5.2	3.6	2.1	𠙴「口」 <u>口</u>				
473	b	29	3.9	2.7	1.4	𠙴「口」 <u>口</u>				
474	b	23	3.4	3.4	1.1	𠙴「口」 <u>口</u>				
475	b	29	4.6	2.4	1.8	𠙴「口」 <u>口</u>				
476	b	26	4.1	2.9	1.6	𠙴「口」 <u>口</u>				
477	b	17	3.8	2.6	1.9	𠙴「口」 <u>口</u>				
478	b	33	5.4	2.9	1.4	𠙴「口」 <u>口</u>				
479	b	43	5.1	3.6	2.3	如「口」 <u>口</u>				
480	b	47	6.1	5.4	1.3	假「口」 <u>口</u>				
						/○○/○				
481	b	36	5.1	3.4	1.9	𠙴「口」 <u>口</u>				
482	b	17	3.9	2.6	1.3	𠙴「口」 <u>口</u>				
483	b	10	2.9	1.9	1.1	𠙴「口」 <u>口</u>				
484	b	112	6.6	5.7	2.4	𠙴「口」 <u>口</u> 無所「口」 <u>口</u>				
485	b	229	9.3	6.0	4.3	𠙴「口」 <u>口</u> /○○○ 若「口」 <u>口</u> 「人」 <u>口</u>				
						/○○○○○○○				
486	b	77	6.1	4.4	2.5	麗「口」 <u>口</u>				
						/○○				
487	b	50	6.2	5.3	1.3	愛「口」 <u>口</u>				
488	b	43	5.3	4.9	1.2	佳「口」 <u>口</u>				
489	b	37	4.0	3.5	1.8	乃「口」 <u>口</u>				
490	b	36	4.0	3.5	2.2	口「口」 <u>口</u>				
491	b	55	6.9	4.2	1.6	十說「求」 <u>口</u>				
						□				
492	b	25	4.2	3.3	1.5	其「口」 <u>口</u>				
493	b	59	6.5	4.4	1.8	惟「口」 <u>口</u>				◇
494	b	27	5.1	3.4	1.4	閭「口」 <u>口</u>				◇
495	b	24	4.3	3.9	1.5	闔「口」 <u>口</u>				◇
496	b	96	7.1	3.8	2.5	三「口」 <u>口</u>				◇
497	b	37	4.3	3.8	1.7	巧「口」 <u>口</u>				◇
498	b	19	3.9	2.8	1.5	闔「口」 <u>口</u>				◇
499	b	38	5.2	3.4	1.7	𠙴「口」 <u>口</u>				◇
500	b	27	4.6	3.3	1.5	通「口」 <u>口</u>				◇
501	b	30	4.3	3.5	1.3	為「口」 <u>口</u>				◇
502	b	24	3.1	3.6	1.7	於「口」 <u>口</u>				◇
503	b	5	2.7	1.8	0.8	三「口」 <u>口</u>				◇

L1-5 i-④グリッド

%	国語	重音	母音	短母	厚母	文字	品	類考
557	b	66	4.8	4.0	2.4	口為「人口」		
558	b	73	6.0	5.2	1.8	口「宮」		
559	b	67	5.7	4.8	1.6	假「同」		
560	b	70	6.8	4.7	1.9	不口「○○○」		
561	b	29	5.7	3.1	1.3	淨	◇	
562	b	51	4.5	3.8	2.1	雙	◇	
563	b	7	3.0	2.5	0.8	鑑	◇	
564	b	21	4.2	3.2	1.6	瓦	◇	
565	b	42	4.3	3.8	2.2	西	◇	
566	c	24	5.2	4.1	1.8	貴「不求」	4	
567	c	49	5.2	3.5	2.3	欲「口是『待』」		
568	c	43	5.1	3.9	2.4	其「大」		

569	c	27	4.3	3.1	1.3	命「時」口	
570	c	51	5.6	4.6	1.3	思「誰」口/口/口	□
571	c	64	5.8	5.0	2.4	天「其」口/口 ○/□	
572	c	98	4.8	5.7	2.2	先「見」口/口	
573	c	32	4.3	4.3	1.6	皆「皆」口/口	
574	c	16	4.3	2.7	1.2	日「日」口/口	
575	c	36	5.8	4.3	1.6	合「合」口/口	
576	c	17	3.8	3.3	1.3	我「我」口	
577	c	15	3.8	2.5	1.4	相「相」口	○
578	c	9	2.8	1.9	1.7	万「万」口	○
579	c	21	4.3	3.3	1.5	佛「佛」口	○
580	c	12	3.7	3.6	0.8	安「安」口	○
581	c	33	6.0	3.2	1.3	律「律」口	○
582	c	23	4.3	3.3	1.3	𠂇「𠂇」口	○
583	e	22	4.1	2.6	1.2	身「身」口	
584	e	13	3.6	2.8	0.9	余「余」口	

L1-5 ■-③グリッド

%	深度	重量	长径	短径	厚さ	文 字	品 種	考
885	a	43	4.5	3.9	1.7	佛像 文/心/桂	7	圓筒66
586	a	9	3.4	3.1	0.8	夜十□□		
887	a	37	4.8	4.0	1.9	威儀 □/□/□		
588	a	32	4.6	3.2	2.3	施 □		
599	d	76	6.2	4.4	2.2	迦葉 不誠今/乞 所/乞	3	
590	d	31	3.9	3.5	1.8	說無 □		
891	d	63	5.6	3.4	2.3	力 □		
592	d	60	5.9	4.8	2.0	雙口/口法 □/□/ □/□		
593	d	29	4.8	3.4	1.9	初口 □□		
594	d	8	2.3	2.1	1.1	十	◇	
595	d	21	3.3	4.0	1.8	樹	◇	
596	d	125	8.4	4.5	2.1	走	◇	

L1-5 図-①グリッド

No.	次第	部首	類別	序字	文字	品	備考
597	b	29	4.5	3.5	1.7 娶妻／𠙴	3	同假-112
598	b	65	7.3	3.1	1.7 𠙴／𠙴	3	同假-112
599	b	49	5.3	3.2	2.1 朝族／𠙴	3	
600	b	54	5.4	3.3	1.9 普濟／𠙴上 「下」	5	
601	b	168	10.6	4.7	2.7 𠙴／清淨淨淨 「各諱語」／「如 清淨淨淨淨淨淨淨」	11	
602	b	21	3.6	2.8	1.8 造／土口(田)口	12	
603	b	233	8.0	7.0	3.3 𠙴／音普音，摩摩 河／麻麻溪／參參 密／𠀤與	24	同假-112
604	b	86	6.3	4.5	1.7 𠙴口／口		
605	b	48	6.4	3.5	1.8 三合／口口有		
606	b	33	5.6	4.6	1.9 𠙴口／口		
607	b	22	4.8	2.7	1.4 𠙴口		
608	b	217	9.7	6.8	2.2 𠙴𠙴口○○○/○○ ○○○○○/○○○ ○○○○○/○○○ ○○○○○/○○○		
609	b	113	7.0	4.9	2.3 𠙴口○○/面口○ ○○○○○○○		
610	b	423	11.3	8.0	3.6 𠙴○○○○○/當口 ○○○○○○○/○○○ ○○○○○/供口○		
611	b	85	6.4	5.2	2.5 𠙴口○○/曲口○ 曲口○○○		
612	b	52	5.2	4.2	2.0 𠙴口○/口○口○ 口○口是		
613	b	31	4.2	2.9	2.0 𠙴口○		
614	b	35	4.3	4.4	1.8 𠙴口○口		
615	b	31	5.2	3.2	1.3 𠙴口○自口		
616	b	28	4.9	3.7	1.6 𠙴口○		
617	b	15	3.3	2.8	1.5 二人		
618	b	37	4.7	3.1	1.9 大(𠙴口)		

619	b	130	6.3	5.2	2.6	規	「口」
620	b	17	3.1	2.4	1.9	規	「口」
621	b	17	4.5	2.6	1.4	規	
622	b	67	4.9	4.5	2.2	規	
623	b	26	3.9	2.8	2.1	好	「又」
624	b	49	5.3	4.9	1.1	好	「翹」
625	b	56	5.6	3.9	2.3	他	「皆」
626	b	45	5.8	3.6	2.1	世無	「口」
627	b	17	4.4	3.8	1.2	惑	
628	b	55	5.4	5.1	1.8	尾	「𠂇」/「口」/「口」
629	b	45	4.8	3.5	2.2	口	「口」
630	b	26	4.8	3.9	1.2	此	「各」
631	b	56	6.1	4.4	1.2	石	「口」
632	b	15	3.8	2.4	1.9	供	「口」
633	b	26	4.3	3.4	1.5	為	○
634	b	41	4.3	5.7	1.6	圓	○
635	b	19	3.5	2.5	1.8	跡	○
636	b	31	3.5	4.0	1.7	足	○
637	b	17	4.0	2.5	1.3	又	○
638	b	16	2.7	1.7	1.3	是	○
639	b	54	4.8	4.0	1.8	諾	○
640	b	53	5.0	3.0	3.1	見	○
641	b	16	2.6	2.3	1.1	生	○
642	b	15	3.3	2.0	1.3	倘	○
643	b	5	2.3	1.7	0.7	俟	○
644	b	9	2.7	1.8	1.6	俟	○
645	c	39	4.9	4.3	1.6	飼	「口」
646	c	45	5.4	3.1	2.6	幽	「口」/「口」
647	e	19	5.9	2.8	1.4	厥	「口」
648	e	76	6.6	5.1	1.9	俄	「俄」/「口」/「口」
649	e	19	3.7	2.0	1.9	烹	「口」
650	e	22	3.6	2.4	1.9	貪	○
651	e	66	5.3	3.6	2.0	口	「口」/「口」
652	e	35	5.1	3.2	1.9	唇	「口」
653	c	31	4.1	3.0	2.0	爭	○
654	e	16	3.1	3.0	1.1	何	○
655	c	25	3.5	2.6	2.0	野	○
656	e	11	3.0	2.7	1.0	三	○
657	c	18	3.2	3.0	1.7	以	○
658	e	14	2.5	3.0	1.5	者	○
659	d	25	4.6	3.3	1.3	牛軛	「口」
660	d	46	4.3	4.2	2.0	口	「口」/「口」/「口」/「口」
661	d	36	4.1	3.8	1.7	記	「口」
662	d	27	3.5	3.2	1.9	其	「口」
663	d	66	8.4	3.5	2.6	神	「口」
664	d	17	3.5	2.6	1.9	長	「口」
665	d	18	3.9	2.8	1.8	界	「口」
666	d	41	4.6	3.0	1.6	帶	「口」
667	d	24	4.3	3.6	1.5	作	「口」
668	d	34	4.4	3.3	1.6	策	「口」
669	d	31	4.6	3.2	1.6	我	「其」
670	d	32	3.7	3.6	1.7	除	○
671	d	43	4.8	4.3	2.0	念	○
672	d	26	4.7	3.6	1.5	木	○
673	d	31	4.1	3.7	1.5	俄	○
674	d	17	4.2	2.6	1.8	不	○
675	d	22	3.8	3.1	1.5	方	○
676	d	31	3.8	2.4	1.7	問	○ 欠損あり
677	d	26	5.5	4.2	1.8	是	○
678	d	10	2.3	2.9	1.3	側	○
679	d	22	3.7	2.6	1.6	邊	○
680	d	104	7.7	4.4	2.5	為	○
681	e	33	5.2	3.1	1.6	微	「尙恵」 3
682	e	49	5.8	3.4	1.9	耽	「耽」 3
683	e	35	5.4	2.7	1.6	見	「足見」 6
684	e	265	10.1	7.3	2.4	無	「道義以財固 無能是『聖賢開 示生滅之教喜 在前既且。無能」 14

685	e	144	7.1	5.8	2.4	諸台／模擬「告悉」 「賜成」	17
686	e	19	4.4	2.6	1.8	部「口」	
687	e	26	3.9	3.3	1.7	福「口」	
688	e	48	5.0	3.8	1.6	說得「口」	
689	e	47	4.4	3.7	2.5	口罪「廢人」	
690	e	14	3.6	3.3	1.4	得「口」	
691	e	125	8.7	5.3	2.6	我今口「佛」/口 「○○○/○○○○」	
692	e	60	5.9	4.7	1.8	口○「法」/口○/○	
693	e	26	4.1	2.9	1.7	之「端」	
694	e	41	4.9	4.0	2.0	其口「○○」	
695	e	40	5.2	4.1	1.9	頂「口」道	
696	e	25	5.2	2.8	1.8	捨「口」	
697	e	27	5.8	3.6	1.1	含口「○○」	
698	e	133	7.4	6.9	1.7	經○/○○○「口」 「○○○/○○○○/○」 「口」	
699	e	9	2.2	2.3	1.7	弟○	◇
700	e	31	5.2	3.5	1.5	赤○	◇
701	e	27	3.4	3.2	1.6	佛○	◇
702	e	38	4.7	4.5	1.2	愛○	◇
703	e	21	4.0	3.0	1.6	御○	◇
704	e	18	4.3	2.7	1.3	氏○	◇
705	f	290	9.7	8.2	3.4	修習○(91字小)「乘」 者如是之入我今亦 「合得爾」/是經人於 「無覺當時」	15
706	f	325	9.7	8.2	3.2	口○/○○○「為口」 「○○○/○○○/有阿 鞞「○○○」	
707	f	138	8.6	6.8	1.9	是○/「佛」/出離○/ 「○○圓「○○○/○○○」 諸○/○○○	
708	f	214	7.7	7.3	2.3	若○/○○○/○○○ 「○○○」	
709	f	130	7.0	5.8	1.9	細○/○○○「○○○」 「○○此作○/○○○ ○」	
710	f	202	8.3	6.5	3.3	○○○/○○其二 「○○悔○「○○/○○○○/○○○○」	
711	f	186	9.2	6.6	2.3	口○/○○○/○○○	
712	f	43	5.8	5.1	1.5	經○/「佛」/「○○○」 「○○」	
713	f	98	6.7	5.1	2.0	乃○/○○○「○○○」 「○○○/○○為 「○」	
714	f	48	4.7	3.3	2.1	中○「○○」	
715	f	18	3.5	2.8	1.2	諸○「口」	
716	f	15	4.3	2.5	1.0	已○得「謂」	
717	f	17	2.8	4.1	1.8	由○「○○」	◇
718	f	9	3.3	2.2	1.2	經○	◇
719	f	23	3.5	2.9	2.0	各○	◇
720	f	41	3.9	3.9	2.2	有○	◇
721	f	52	4.6	4.1	1.8	復○	◇
722	f	36	4.8	2.6	2.3	數○	◇
723	f	20	4.0	3.2	1.3	第○	◇
724	f	26	2.7	4.3	1.7	三○	◇
725	g	28	4.3	3.2	1.8	無上「最」大	3
726	g	41	5.0	4.5	1.4	唯時「何「口○/○」	
727	g	45	5.8	3.8	1.7	福「口」	
728	g	52	6.1	3.3	2.0	苦惱「智口」	
729	g	62	5.5	5.0	1.8	為夫人「口○「口○」 「○○」	
730	g	29	5.7	3.6	1.7	怖告「之○○」	
731	g	57	5.5	3.7	2.2	為○「口○」	
732	g	87	7.8	4.8	2.0	多○諸「○○○○」 而	
733	g	152	8.3	5.0	2.2	如闍○/木○○○ 「○○○○」	
734	g	26	4.4	3.0	1.4	能○「口○」	

725	g	23	3.7	3.4	1.7	施為「詔法」	
736	g	55	4.7	3.2	3.0	得「足口」 ^撇	
737	g	67	6.8	4.0	1.9	是	◇
738	g	15	3.5	2.6	1.5	爾	◇
739	g	12	4.3	2.7	0.9	能力	◇
740	h	52	5.6	4.8	2.1	之「面去」 ^{失人} 「動者」 ^{失物}	8
741	h	61	5.5	3.9	2.1	知人「則如/素 始」 ^{始而未}	10
742	h	178	7.7	6.6	3.1	我為是 ^以 「釋故而 死」 ^{此辭時「因} 「兄弟過」 ^{去無} 「千万」	11
743	h	115	6.2	6.3	2.2	□□/身口/身口 「□○/□○/□○/□ □」	
744	h	94	6.5	5.4	2.2	體 ^口	
745	h	137	7.2	4.8	1.9	猶如「口」	
746	h	69	5.5	4.8	1.5	幽「□○/□○/□○」	
747	h	48	6.3	3.6	1.7	但阿沙「□○/□○」	
748	h	23	4.4	3.1	1.2	謂「□○/□○」	
749	h	25	4.1	3.2	1.7	為「□○」	
750	h	25	4.2	3.4	1.3	吾所「□○」	
751	h	33	4.3	2.7	2.6	天「□○/□○」	
752	h	18	3.7	2.4	2.3	是「□○」	
753	h	21	4.2	2.7	1.8	安「女○」	
754	h	15	4.3	2.7	0.9	為「□○」	
755	h	13	2.8	2.9	1.0	曰「□」	
756	h	14	3.9	2.5	1.2	是 ^也 「□○」	
757	h	21	3.2	3.3	1.7	留「□○」	
758	h	240	11.7	5.5	2.4	通 ^口 不 ^口 /□○ 「□○□○□○□○」 □	
759	h	46	7.8	2.6	1.9	今他「□○」	
760	h	166	7.9	4.8	2.7	由 ^口 「□○/□○」 「□○」	
761	h	30	4.9	3.7	1.2	曰「□○」	
762	h	36	4.8	3.7	1.5	佛「□○」	
763	h	35	4.9	3.6	2.1	無著「□○」	
764	h	97	5.8	4.2	1.9	普 ^口 「□○/□○」 □	
765	h	12	3.3	2.9	1.4	生「□○」	
766	h	20	3.5	2.5	1.9	無 ^口	◇
767	h	19	3.3	3.5	1.2	施 ^口	◇
768	h	12	3.4	2.4	1.7	往 ^口	◇
769	h	9	2.7	2.5	1.1	矣 ^口	◇
770	h	96	7.8	6.1	1.8	詔 ^口	
771	h	25	4.0	3.8	1.4	門 ^口	◇
772	h	54	3.9	4.2	2.1	施 ^口	◇
773	h	62	5.0	4.1	2.5	旁 ^口	◇
774	h	14	3.2	3.7	0.8	大 ^口	◇
775	h	11	2.0	2.5	1.9	往 ^口	◇
776	h	7	2.7	1.7	1.1	一 ^口	◇
777	i	55	7.9	3.0	1.1	微多赤 ^口 「雲○演 說法」	5
778	i	65	7.1	3.4	2.5	□○「□○/□○」 「□○」	
779	i	64	5.5	4.3	1.6	口 ^口 「法「□○」 「□○」	
780	i	20	3.8	3.3	1.5	是「□○」	
781	i	19	3.8	2.7	1.5	言「□○」	
782	i	26	3.7	3.2	1.6	別「□○」	
783	i	48	5.6	3.1	1.2	安「口○」	7. 漢語66

1-1-5 ハードグリップ

品目	規格	重量	長径	短徑	厚さ	文字	品番	考
785	△	26	5.0	2.7	1.3	大毛 宜速	3	
785	△	42	5.8	3.2	1.6	鷹毛 是相	7	関銀66
786	△	69	6.8	3.2	2.6	△△○□○□○□		
787	△	34	5.5	3.7	1.4	口者○□○□		
788	△	122	6.7	4.2	2.8	無細○□○□		
789	△	38	4.4	5.1	1.3	安○□○□		
790	△	37	4.4	3.6	1.8	庄田○□○□		

914	c	31	3.8	3.7	2.2	有「故」		
915	c	31	3.8	3.2	1.5	戰「余」		
916	c	23	4.3	3.5	1.1	衝「口」		
917	c	81	7.1	3.2	2.3	方	◇	
918	c	75	6.0	4.9	2.4	頃	◇	
919	c	16	4.3	2.9	1.0	法	◇	
920	c	21	4.0	3.1	1.7	金	◇	
921	c	23	3.5	3.3	1.7	大	◇	
922	c	26	3.8	3.2	1.8	舊	◇	
923	c	12	3.7	2.7	1.2	特	◇	
924	c	15	3.8	2.1	1.8	時	◇	
925	c	9	3.3	1.8	1.1	不	◇	
926	c	6	2.6	2.0	0.9	天	◇	
927	c	16	3.6	2.4	1.8	鶴	◇	
928	c	69	6.1	4.3	2.4	世	◇	
929	c	14	2.8	2.5	1.5	鈴	◇	
930	c	26	5.1	3.5	1.7	半	◇	
931	c	16	3.8	2.9	1.2	者	◇	
932	c	9	2.7	2.2	1.1	既	◇	
933	c	42	5.1	4.1	2.0	合	◇	
934	c	30	5.0	3.5	1.4	音	◇	
935	c	33	4.8	3.0	2.3	雨	◇	
936	c	49	6.0	4.2	1.3	世	◇	
937	c	36	4.5	2.6	1.7	傳	◇	
938	c	24	4.3	2.5	1.5	人	◇	
939	c	16	4.3	3.1	1.1	德	◇	
940	c	37	4.8	3.5	1.6	能	◇	
941	c	65	5.1	4.8	2.2	三	◇	
942	c	18	4.0	2.6	1.4	朝	◇	
943	c-d	141	9.0	5.2	2.0	日昇津牛/尼集姑 「毫毫」/國土成阿爾	7	圖版66
944	c-d	55	6.3	4.7	2.1	有「百」在神「通」 之力/「得未」	8	
945	c-d	79	4.7	4.3	2.0	帝是「□□○/□○○」		
946	c-d	110	6.8	5.3	2.3	子說「□○□/□○○」		
947	c-d	47	5.4	3.6	1.9	聖「口」		
948	c-d	31	4.7	3.3	1.9	是「口」		
949	c-d	16	2.9	2.3	1.9	此「事」		
950	c-d	62	5.3	4.8	1.8	三「祇」/普覺 「隱」/為「口」		
951	c-d	21	5.1	2.9	1.3	善欲「口」		
952	c-d	59	6.3	3.6	2.1	口那「口」		
953	c-d	11	3.1	2.9	0.7	無「口」		
954	c-d	28	6.1	3.3	1.8	豫「口」		
955	c-d	38	4.6	3.5	2.0	又「照」		
956	c-d	20	4.0	3.5	1.1	生「口」		
957	c-d	55	5.8	4.3	1.7	金「口」		
958	c-d	27	4.3	3.3	1.5	乃「口」		
959	c-d	39	4.6	4.6	2.0	雲「口」		
960	c-d	23	4.4	3.0	1.5	迦「口」		
961	c-d	14	3.1	3.0	1.2	是「口」		
962	d	24	6.1	3.3	1.2	難通「徳」	4	
963	d	65	7.1	3.4	1.7	從我聞詔「為阿多	7	
964	d	32	4.0	3.7	1.6	月「威光」	7	
965	d	15	3.2	2.0	1.1	重「口」		
966	d	89	7.8	5.9	1.9	四名「口」		
967	d	38	4.9	3.7	2.1	赤「口」		
968	d	33	4.8	3.9	1.8	皮「口」		
969	d	37	4.6	3.3	2.0	萬「口」		
970	d	32	5.8	3.1	1.6	穀「口」		
971	d	35	4.2	3.0	1.9	萬「口」		
972	d	7	2.7	2.1	0.8	抹「口」	◇	
973	d	12	3.1	2.5	1.0	惟「口」	◇	
974	d	11	2.3	3.2	1.2	平「口」	◇	
975	d	21	3.6	2.5	1.8	往「口」	◇	
976	d	64	8.4	3.9	1.8	懸「口」	◇	
977	d	12	2.5	2.8	1.3	七「口」	◇	
978	d	14	4.1	2.6	1.9	魚「口」	◇	

979	d	12	2.7	2.6	1.8	共「口」	◇	
980	d	32	4.3	3.5	2.2	恩「口」	◇	
981	d	24	3.6	3.0	2.6	士「口」	◇	
982	d	24	4.5	3.0	1.4	門「口」	◇	
983	d	131	7.4	6.4	1.9	塊「口」	◇	圖版67-12
984	d	21	5.3	5.3	2.0	初「口」	◇	
985	d	9	3.1	2.0	1.2	何「口」	◇	
986	d	49	4.2	4.1	1.7	見「口」	◇	
987	e	28	4.5	2.6	1.2	若「口」	◇	
988	e	22	3.9	3.1	1.4	脫「口」	◇	
989	e	80	6.3	5.5	1.7	曉「口」	◇	
990	e	52	6.0	4.8	1.5	晦「口」	◇	
991	e	44	5.2	4.3	1.3	懶「口」	◇	
992	e	40	4.0	3.9	2.1	待「口」	◇	
993	e	27	4.3	3.4	1.6	懶「口」	◇	
994	f	52	5.7	4.1	1.8	口若石「羅/此/口」		
995	f	24	3.7	2.6	2.1	方「便/口」		

L-1-5 ■-③グリッド

No.	深度	巣径	長径	短径	厚さ	文 字	品 番	考 号
996	b	43	5.8	4.7	1.4	樹洞「為我」	4	
997	b	57	4.4	4.1	2.5	是「解」		
998	b	31	4.5	2.8	2.2	曾「之丸」		
999	c	105	7.1	4.6	1.9	新闢洞「各以衣 「誠」誠諾/天華」	7	
1000	c	36	5.1	3.4	1.8	穢「口」		
1001	c	24	5.1	2.8	1.3	天男「口」		
1002	c	36	5.5	3.5	1.9	土口「豐」		
1003	c	12	3.2	2.6	1.1	口「在」		
1004	e	13	3.3	2.9	1.3	應「口」	◇	
1005	c	15	3.1	2.3	1.4	於「口」	◇	
1006	d	26	4.0	3.7	1.6	為「口」	◇	
1007	d	19	4.0	3.0	1.1	曉「口」	◇	
1008	e	45	5.6	3.4	2.3	及闐「民」智譜	6	
1009	e	46	6.1	4.9	1.9	無蹤「義」		
1010	g	21	4.8	3.7	1.4	吉「次」		
1011	h	31	5.7	2.5	1.8	是「口」		
1012	h	9	2.3	2.6	1.1	大「口」	◇	
1013	h	12	3.1	2.7	1.2	切「口」	◇	
1014	h	18	3.7	2.6	1.3	越「口」	◇	
1015	h	27	3.7	3.2	2.2	一「口」	◇	
1016	h	9	3.3	2.5	1.0	女「口」	◇	

L-1-5 ■-④グリッド

No.	深度	巣径	長径	短径	厚さ	文 字	品 番	考 号
1017	a	46	5.1	3.6	1.6	海遊「戲」	3	圖版66
1018	a	68	5.1	4.3	2.7	樂好「説」	5	
1019	a	226	10.2	6.1	3.6	阿修羅洞「心之所 以向白也」言世尊 以何「因緣有此實 塔從圓滿出又於 其中生」	11	
1020	a	466	10.1	7.8	3.9	是諸普賢「調伏其 心」/□(66)「道 此此」諸商賈於 是安樂世界之下 此界空靈中住「 其中國中」	15	
1021	a	221	7.3	7.8	2.2	婆出□(66)「三千口 (如)千」國土地轉 輪假說而於「其中有 無量千万」	15	圖版66
1022	a	73	7.2	4.1	2.1	之父此「經赤復」	23	
1023	a	46	5.6	3.8	1.7	大通「智勝」	7	
1024	a	62	6.4	3.5	2.4	口舍「口乃至」口 死灰「口」		
1025	a	45	4.1	4.0	2.2	所「口」		
1026	a	38	5.3	2.3	2.1	數「口」		
1027	a	32	4.2	3.9	1.7	若「口」		
1028	a	116	7.0	5.9	2.6	象「口」/□□□ (口/△口)/□□/□□		
1029	a	34	6.8	3.1	1.7	安等「法」		
1030	a	63	5.7	4.6	2.2	日普「口」		

1031	a	27	4.2	3.5	1.6 女而「口」法	
1032	a	25	4.2	2.4	1.6 惟「象」「口」	
1033	a	41	4.0	3.9	2.4 其「口」「口」	
1034	a	28	5.1	4.3	1.2 神矣「其」	
1035	a	10	3.0	2.3	1.0 爰「口」	
1036	a	25	3.9	2.5	2.1 爰「口」「口」	
1037	a	45	4.8	3.7	1.9 爰「口」	
1038	a	70	5.6	4.6	2.2 是「口」/口人「能」 「口」	
1039	a	44	5.1	4.4	1.6 篓「口」/口「口」 「口」	
1040	a	15	3.7	2.6	1.5 佛「口」	
1041	a	25	4.3	3.2	1.6 十万「口」	
1042	a	51	6.2	4.0	1.8 (疑「口」)「丘尼」	
1043	a	21	3.6	3.1	1.5 罢「口」	
1044	a	16	2.8	2.7	1.2 大「口」	
1045	a	20	3.6	3.5	1.1 行「口」	
1046	a	19	3.7	3.1	1.7 今「口」	
1047	a	23	4.6	3.6	1.2 𠂇「口」	
1048	a	6	2.4	2.0	0.6 佑「口」	
1049	a	27	5.3	3.2	1.2 是「念」「口」	
1050	a	26	3.1	2.6	1.6 言「口」	
1051	a	52	5.6	4.5	1.8 是「念」「口」	
1052	a	21	4.9	3.3	1.9 口「象」「口」	
1053	a	17	3.6	2.8	1.5 教「口」	
1054	a	17	4.2	3.2	1.2 是「佛」	
1055	a	30	4.1	4.0	1.8 長「口」「口」	
1056	a	72	7.8	4.3	1.6 艾不之「為」 「口」	
1057	a	10	3.3	2.3	1.9 今「口」	
1058	a	27	4.2	3.5	1.4 無「口」	
1059	a	33	3.4	3.5	1.6 人「口」	
1060	a	18	4.6	4.1	0.7 𠂇「口」	
1061	a	19	3.8	2.8	1.3 吾「口」	
1062	a	77	6.5	4.7	2.0 略「口」	
1063	a	246	8.7	7.0	2.7 說「口」	
1064	a	61	4.0	5.0	2.3 前「口」	
1065	a	51	5.9	4.6	1.7 他「口」	
1066	a	13	2.6	2.5	1.2 𠂇「口」	
1067	a	27	4.5	4.0	1.6 城「口」	
1068	a	19	3.5	2.7	0.9 諸「口」	
1069	a	20	3.6	3.3	1.7 道「口」	
1070	a	14	2.9	3.1	1.4 犬「口」	
1071	a	26	5.2	3.5	1.1 七「口」	
1072	a	9	3.7	1.8 二供「口」		
1073	a	18	4.2	2.8	1.3 待「口」	
1074	a	13	4.2	2.5	0.8 翁「口」	
1075	a	17	4.3	2.7	1.5 各「口」	
1076	a	16	3.2	2.8	1.2 保「口」	
1077	a	11	3.9	2.5	1.3 吾「口」	
1078	a	8	3.1	2.5	0.7 真「口」	
1079	a	18	3.8	2.2	1.5 黄「口」	
1080	b	49	8.7	4.3	1.3 口「端」/世無口 (疑「策」)「口」/姑 有他「口」	1
1081	b	68	6.3	4.9	2.0 如是也「告」/佛 爲「口」	2
1082	b	37	4.8	3.9	1.7 憐「自念」	4
1083	b	99	6.7	5.0	2.6 初「知」/金「銀」 「財」/寶「財」及諸「口」	4
1084	b	40	5.7	3.8	1.8 美矣「父今昔」	4
1085	b	59	8.3	4.3	1.9 十二「行」/法「輪」 「戒」/沙門「口」	7 四庫66
1086	b	26	4.8	3.4	1.8 爲息「說」	7 四庫66
1087	b	93	6.5	4.9	1.8 然「然」/詮之「又」 「誰」/比丘南「口」	7 四庫66
1088	b	25	4.9	3.0	1.5 何般「時間」	7
1089	b	39	5.6	4.4	1.7 般「三」/普「提」/ 妙「甘法」	8
1090	b	274	10.3	6.5	3.0 11則「塞遊」/行無 畏而曉「物」/子王「智 慧光」/明日如之照 若於「夢」	14
1091	b	39	4.3	3.7	2.5 有「三千」「□□□」	17

1092	b	52	5.4	4.7	1.8 者若「長若」幼聞 是「口」	18 四庫66-112
1093	b	28	4.7	3.6	1.3 吻懶「冷誦」	19
1094	b	61	8.6	3.5	1.3 沔行「道」/佛「口」 「有生子」	
1095	b	43	6.5	4.7	1.7 所「口」	
1096	b	50	4.1	3.9	2.0 口「法」「口」	
1097	b	21	4.8	3.2	1.3 (方「一」)「口」	
1098	b	12	3.6	1.8	1.3 方「口」	
1099	b	49	5.1	4.0	2.2 助先「口」	
1100	b	28	4.8	3.3	1.5 是空「口」	
1101	b	19	3.2	2.1	1.4 百「口」	
1102	b	56	5.2	3.8	2.2 紗「口」/千「口」 「口」	
1103	b	15	3.0	2.2	1.6 佛「口」	
1104	b	49	5.6	4.4	1.6 諸賢「口生」	
1105	b	25	4.5	2.4	1.5 後「則」	
1106	b	18	4.2	3.5	1.1 人能「口」	
1107	b	39	4.8	4.4	1.7 淾「口」	
1108	b	51	5.6	4.8	1.5 多口「口」	
1109	b	18	3.7	2.4	1.6 作「口」	
1110	b	19	3.2	2.8	0.8 不「口」	
1111	b	16	4.2	2.5	1.4 以是「口」	
1112	b	26	5.3	4.8	1.9 以「口」/口「口」 「口」	
1113	b	28	4.0	2.6	1.9 口「令」	
1114	b	29	4.5	3.2	1.7 有八「口」	
1115	b	14	2.9	3.0	1.3 「口」	
1116	b	79	6.3	5.7	1.8 口「口」/佛道	
1117	b	54	5.0	4.1	1.8 諸王「口」	
1118	b	18	3.2	3.0	1.2 觀「口」	
1119	b	52	7.7	4.8	1.5 我「口」/口「口」/口 「口」	
1120	b	65	5.8	4.7	2.4 光蓮「利口」佛陀尼	
1121	b	89	8.5	3.0	2.6 其惑「口」/口「口」 「口」	
1122	b	26	2.3	3.0	1.5 級「口」	
1123	b	17	3.6	2.5	1.4 個言「口」	
1124	b	47	4.3	4.1	2.1 山現口「口」/「口」	
1125	b	16	3.3	2.8	1.3 伸「口」	
1126	b	57	6.0	4.0	1.4 但阿難「埋頭」上	◎
1127	b	72	7.3	4.8	1.8 大「口」	◎
1128	b	28	4.5	2.7	1.9 瞭「口」	◎
1129	b	24	4.0	3.8	1.4 忽「口」	◎
1130	b	19	3.2	2.1	1.6 特「口」	◎
1131	b	16	4.2	2.3	1.5 出「口」	◎
1132	b	23	5.5	3.5	1.5 命「口」	◎
1133	b	23	3.1	3.5	1.6 般「口」	◎
1134	b	18	3.1	2.2	1.5 穗「口」	◎
1135	b	17	3.5	2.9	1.4 手「口」	◎
1136	b	14	3.5	2.7	1.3 等「口」	◎
1137	b	26	3.5	3.5	1.5 中「口」	◎
1138	b	9	2.5	2.2	1.0 义「口」	◎
1139	b	17	3.7	3.0	1.4 花「口」	◎
1140	b	23	3.8	2.8	2.0 痘「口」	◎
1141	b	18	4.1	3.1	1.2 圓「口」	◎
1142	b	7	3.0	2.1	0.8 謂「口」	◎
1143	b	83	7.2	4.9	1.1 淳「口」	◎
1144	b	9	3.5	2.5	0.7 告「口」	◎
1145	b	13	2.1	3.1	1.7 未「口」	◎
1146	b	8	2.5	2.2	1.0 中「口」	◎
1147	b	18	4.0	2.4	1.2 痘「口」	◎
1148	b	14	3.8	2.8	1.0 瞭「口」	◎
1149	b	16	4.0	3.0	1.3 蔽「口」	◎
1150	b	45	4.8	3.8	2.0 小「口」	◎
1151	b	13	2.7	2.1	2.0 何「口」	◎
1152	b	9	2.5	2.2	1.4 有「口」	◎
1153	b	12	3.8	2.4	1.0 凡「口」	◎
1154	b	18	4.0	3.4	1.2 賀「口」	◎
1155	b	12	2.8	2.5	0.9 各「口」	◎
1156	b	9	2.6	2.7	0.9 一「口」	◎
1157	b	8	2.2	2.5	0.7 施「口」	◎
1158	b	17	3.3	2.8	1.8 不「口」	◎
1159	b	15	3.3	2.2	2.0 大「口」	◎

1223	c	29	5.8	2.7	1.4	□就「口」
1224	c	52	5.2	4.5	2.0	「就」 ^中
1225	c	23	8.9	3.4	1.1	「典」
1226	c	43	3.8	3.2	2.5	「典」 ^口
1227	e	232	8.9	4.6	2.8	□□□合說「當口」 「方」□「口」 □□□□「當口」 「典」 ^{之五}
1228	c	16	3.7	2.1	1.6	佳「林」
1229	c	21	2.8	3.0	1.5	諱□「口」
1230	c	30	4.7	3.4	1.3	「志」 ^口
1231	c	19	3.8	3.2	1.5	為「口」
1232	c	35	5.3	3.9	1.9	摩「口」
1233	c	44	5.3	3.6	2.0	蒙「口」
1234	c	44	4.8	4.2	1.8	俄「口」 ^行
1235	c	36	4.5	3.6	1.7	老「口」
1236	c	16	3.9	3.0	1.2	俄「為」
1237	c	48	6.6	3.3	1.5	□呼「口」 ^口
1238	c	19	5.7	3.0	1.3	爭「之」
1239	c	21	3.8	2.4	1.2	著「口」
1240	c	5	1.8	2.0	1.2	◇
1241	c	12	3.1	2.5	1.0	究
1242	c	12	3.0	3.0	0.9	◇
1243	c	8	2.3	2.7	0.8	切
1244	c	22	4.2	2.7	1.5	是
1245	c	11	2.6	2.3	1.1	八
1246	c	9	3.3	2.6	0.7	既
1247	c	16	3.1	2.5	1.8	微
1248	c	7	2.7	2.5	0.8	尚
1249	c	8	1.8	2.8	1.0	大
1250	c	40	3.7	3.1	2.4	很
1251	c	14	2.8	2.5	1.7	是
1252	c	19	4.2	3.5	1.2	大
1253	c	12	3.8	2.4	1.2	戮
1254	c	15	3.4	3.0	1.5	力
1255	c	9	2.4	2.4	1.2	三
1256	c	15	3.4	3.0	1.3	身
1257	c	14	3.7	2.8	1.8	四
1258	c	12	3.5	2.8	1.2	勤
1259	c	7	2.5	2.2	1.0	万
1260	c	14	3.6	2.9	1.3	万
1261	c	10	2.8	2.6	1.3	赤
1262	c	6	3.8	2.8	0.4	人
1263	c	15	3.1	2.2	1.5	說
1264	c	14	3.2	2.3	1.5	乙
1265	c	9	3.4	2.3	0.4	◇
1266	c	38	3.9	3.3	2.7	法
1267	c	25	4.8	2.8	1.8	綠
1268	c	25	4.5	2.7	1.8	索
1269	c	36	4.3	3.0	1.5	經
1270	c	14	3.4	2.4	1.3	法
1271	c	29	4.3	2.9	2.0	歲
1272	c	20	3.7	2.8	1.7	歲
1273	c	30	7.6	4.0	0.7	何
1274	c	20	4.7	2.5	1.3	衆
1275	c	5	3.0	2.7	0.5	不
1276	c	22	4.5	3.4	1.3	身
1277	c	45	5.0	2.7	2.2	病
1278	c	31	4.4	3.2	1.8	猶
1279	c	31	4.7	3.8	1.6	難
1280	c	21	5.7	3.2	1.5	尼
1281	c	10	3.0	2.6	1.1	◇
1282	c	74	6.9	3.8	2.6	俗
1283	c	11	3.1	2.5	1.2	通
1284	c	18	3.1	2.1	1.8	能
1285	c	26	5.0	4.0	1.2	華
1286	d	40	4.0	3.2	2.8	輪「六」 ^中 「輪往住」
1287	d	68	8.0	3.7	2.1	如「上」 ^中 「輪往住」
1288	d	44	5.6	3.7	1.7	否「已心」
1289	d	39	4.6	4.3	2.2	恩「口」 ^{出三}
1290	d	62	4.8	3.0	1.6	曉「法」
1291	d	39	5.6	3.0	1.8	生「國」 ^{平聲}

四版66

1292	d	38	4.6	4.2	1.9	其極／復「過執」	10
1293	d	191	7.8	6.2	3.0	出妙香／萬十 國／衆生蒙「應者 不自」勝贊如大 「風」	11
1294	d	34	6.8	4.2	1.9	故「為奴僕」	12
1295	d	65	8.6	4.2	1.9	故「為「口○口○」	17
1296	d	23	4.8	3.3	1.9	觀「神」	23
1297	d	34	8.0	3.8	1.6	此「口○口○」則今「 佛」	
1298	d	45	5.3	2.8	2.0	口「善」	
1299	d	34	4.6	2.7	2.4	口「口○口○」	
1300	d	32	4.8	3.2	1.8	想「口○」	
1301	d	62	5.4	3.8	2.2	願「口○口○」	
1302	d	61	8.3	3.6	1.7	五「口○」	
1303	d	29	4.5	4.8	1.7	故此「口○」	
1304	d	86	5.7	5.7	1.6	願「口○口○」	
1305	d	109	6.9	4.3	2.5	善「口○口○」	
1306	d	72	6.9	4.2	2.6	阿「口○」	
1307	d	55	5.1	3.2	2.5	一切「口○」	
1308	d	33	4.3	3.6	1.8	口「口○」	
1309	d	41	5.1	3.0	2.3	多「口○」	
1310	d	31	4.9	3.2	2.0	故「口○」	
1311	d	43	4.9	3.8	1.7	口「將」為「故口○」	
1312	d	12	2.3	3.5	1.5	佛「口○」	
1313	d	37	5.1	4.0	1.3	口「善」	
1314	d	30	4.0	3.7	1.5	今「口○」	
1315	d	22	4.0	3.2	1.4	金「口○」	
1316	d	43	5.2	4.0	1.8	道子「以者」	
1317	d	43	4.4	4.2	1.7	見「口○記「二口○」	
1318	d	31	4.5	4.3	1.8	口「口○」	
1319	d	74	6.7	4.3	1.6	口「滅」	
1320	d	25	4.5	2.6	1.7	第「口○」	
1321	d	19	3.4	2.7	1.8	見「口○」	
1322	d	27	4.1	3.4	1.7	其「女」	
1323	d	16	4.1	3.9	1.3	口「法」	
1324	d	41	4.7	3.6	2.3	此「口○」	
1325	d	45	8.6	2.7	2.1	般「口○」	
1326	d	76	7.4	4.5	2.1	口「口○」	
1327	d	54	4.9	4.8	2.2	口「如」	
1328	d	47	6.3	3.6	2.0	口「無「口○」 口○」	
1329	d	48	4.6	4.3	2.0	不「口○」	
1330	d	42	5.1	3.7	1.9	故「口○」	
1331	d	24	8.3	3.2	1.5	健「口○」	
1332	d	33	3.9	2.8	1.9	便「口○」	
1333	d	21	3.4	3.1	1.9	移「口○」	
1334	d	24	4.2	3.5	1.4	口「實」	
1335	d	22	5.2	3.4	1.7	白「口○」	
1336	d	29	5.1	3.5	1.6	佛「口○」	
1337	d	14	3.0	2.4	1.6	三「口○」	
1338	d	9	3.0	2.3	1.3	具「口○」	
1339	d	7	2.8	2.4	1.2	是「口○」	
1340	d	11	3.0	2.6	1.3	知「口○」	
1341	d	7	2.6	2.3	1.2	見「口○」	
1342	d	12	2.0	2.5	1.3	無「口○」	
1343	d	14	3.6	2.4	1.0	無「口○」	
1344	d	11	3.7	2.6	1.1	祇「口○」	
1345	d	36	5.0	4.7	1.7	是「口○」	
1346	d	20	3.6	2.5	1.4	伏「口○」	
1347	d	21	3.8	4.0	1.0	自「口○」	
1348	d	14	3.0	2.9	1.2	求「口○」	
1349	d	19	4.1	3.6	1.1	佑「口○」	
1350	d	13	3.6	2.5	1.3	已「口○」	
1351	d	27	3.7	3.6	1.3	法「口○」	
1352	d	16	4.2	2.7	1.0	伏「口○」	
1353	d	24	3.6	3.3	1.6	者「口○」	
1354	d	19	3.3	3.2	1.1	觀「口○」	
1355	d	21	4.2	2.8	1.6	確「口○」	
1356	d	27	4.3	3.5	2.1	博「口○」	
1357	d	17	3.6	2.3	1.7	主「口○」	
1358	d	22	3.2	2.8	1.8	人「口○」	
1359	d	6	2.6	2.0	1.4	者「口○」	

1360	d	13	3.2	2.7	1.4	作「口○」	◇
1361	d	6	2.2	2.2	1.4	第「口○」	◇
1362	d	8	3.8	2.0	1.0	量「口○」	◇
1363	d	6	3.0	1.8	0.8	營「口○」	◇
1364	d	7	2.8	1.9	0.9	自「口○」	◇
1365	d	14	2.8	3.3	1.3	十「口○」	◇
1366	d	20	4.5	3.4	1.0	普「口○」	◇
1367	d	31	4.8	3.2	1.8	佈「口○」	◇
1368	d	39	5.8	3.0	1.8	即「口○」	◇
1369	d	17	2.5	2.9	1.8	領「口○」	◇
1370	d	16	3.8	2.8	1.0	夜「口○」	◇
1371	d	15	4.6	2.6	1.0	第「口○」	◇
1372	d	11	2.8	2.0	1.3	不「口○」	◇
1373	d	77	6.3	4.5	2.8	宣「口○」	◇
1374	d	20	4.2	3.0	1.7	者「口○」	◇
1375	d	38	6.2	3.4	1.3	門「口○」	◇
1376	d	15	3.2	3.2	1.3	赤「口○」	◇
1377	d	64	5.3	4.8	2.2	圖「口○」	◇
1378	d	36	3.6	5.4	1.5	方「口○」	◇
1379	d	47	4.7	4.0	2.2	灑「口○」	◇
1380	d	11	3.4	2.1	1.5	延「口○」	◇
1381	d	6	2.7	1.7	1.0	生「口○」	◇
1382	d	25	4.2	3.2	1.3	飯「口○」	◇
1383	e	62	6.6	3.6	1.8	長「口○」	3
1384	e	33	4.5	4.0	1.4	不「口○」	4
1385	e	70	6.4	5.3	1.5	如「口○」	4
1386	e	35	5.1	2.8	2.1	像「口○」	6
1387	e	35	4.8	2.9	1.9	出家「口○」	7
1388	e	45	4.9	3.6	2.0	寂後「口○」	7
1389	e	120	7.6	6.2	2.8	阿彌「口○」	7
1390	e	67	6.7	5.4	1.6	燒泥「口○」	7
1391	e	31	5.4	3.1	1.4	一切「口○」	7
1392	e	107	6.3	5.6	2.6	得「口○」	8
1393	e	146	8.0	5.7	2.9	白德「口○」	13
1394	e	678	12.5	10.0	3.2	黑乞得「口○」	14
1395	e	260	9.9	7.6	3.4	若無得「口○」	14
1396	e	45	5.6	3.8	1.9	昔所「木闍」	15
1397	e	103	8.2	4.5	1.7	為解「口○」	15
1398	e	74	6.1	4.5	1.5	以「口○」	24
1399	e	74	5.8	5.2	2.1	問「口○」	24
1400	e	19	3.2	2.7	1.6	介「財」	
1401	e	30	3.3	2.8	2.5	舍「口○」	
1402	e	86	6.4	5.6	2.7	口足「口○」	
1403	e	15	3.9	3.2	1.1	有「口○」	
1404	e	32	5.1	3.4	1.4	口「無」	
1405	e	58	5.4	4.4	2.6	口「口○」	
1406	e	49	5.2	3.9	1.9	經「口○」	
1407	e	31	4.7	3.9	1.4	口「又」	
1408	e	11	3.3	2.1	1.4	天「下」	
1409	e	26	4.5	2.8	1.8	患「口○」	
1410	e	24	5.3	3.3	1.3	須「口○」	
1411	e	52	5.5	3.9	2.1	具「口○」	
1412	e	17	3.9	2.1	1.6	光「口○」	

1413	e	84	6.0	3.8	2.7	口牛「□口」	
1414	e	21	3.8	3.3	1.4	幽「區」	
1415	e	48	5.8	3.0	2.0	削「□○○」	
1416	e	54	6.0	3.5	1.1	離「列」	
1417	e	17	3.8	3.5	1.1	悉「𠩺」	
1418	e	56	5.7	4.0	1.7	未口「肴口」	
1419	e	59	5.8	4.7	1.6	人ノ口「𠩺」	
1420	e	119	5.9	5.3	2.8	𢵈「口」	
1421	e	35	4.5	3.6	1.5	微「天口口」	
1422	e	30	5.0	4.1	1.1	𠩎「口」	
1423	e	44	4.7	3.4	1.7	口象「口」	
1424	e	62	6.5	4.3	1.6	壬ノ切「□口」	
1425	e	55	6.4	4.5	1.7	迺「□○○」	
1426	e	122	6.4	7.2	1.5	𠩎「□○○○」	
1427	e	46	4.4	3.9	2.5	𠩎「戲」	
1428	e	71	6.5	3.5	2.0	離「方口西」	
1429	e	33	5.2	3.3	1.9	調夷「口」	
1430	e	21	4.6	3.0	1.4	宮「出來」	
1431	e	25	4.4	2.9	1.4	諸「口」	
1432	e	49	5.0	3.0	1.9	所闊「口」	
1433	e	24	3.5	3.3	1.5	所「口」	
1434	e	45	4.2	4.6	1.9	起「口」	
1435	e	23	4.6	3.1	1.9	口震「口」	
1436	e	27	3.6	3.5	1.7	花「口」	
1437	e	18	3.5	2.8	1.5	𦥑「口」	
1438	e	63	5.4	4.8	1.9	作「𠩎／口此／口」	
1439	e	19	4.3	2.6	1.5	遜「口」	
1440	e	14	3.5	2.6	1.4	一「切」	
1441	e	25	4.8	4.0	1.2	模「口」	
1442	e	72	5.8	4.5	2.7	侈「口」	
1443	e	21	4.5	3.6	0.8	欵「口」	
1444	e	29	3.3	4.3	1.7	愈「口」	
1445	e	35	5.4	3.3	1.7	音「口」	
1446	e	28	3.3	4.6	1.6	丙「口」	
1447	e	8	2.3	3.0	0.5	已「口」	
1448	e	19	2.8	2.6	1.1	辨「口」	
1449	e	18	2.8	3.5	1.4	父「口」	
1450	e	34	4.5	3.3	1.7	等「口」	
1451	e	22	4.7	2.8	1.2	始「口」	
1452	e	7	3.0	2.3	0.7	𠩎「口」	
1453	e	19	2.8	2.0	1.2	己「口」	
1454	e	11	3.5	2.8	1.0	會「口」	
1455	e	11	3.0	2.7	1.0	中「口」	
1456	e	13	2.9	2.8	1.5	不「口」	
1457	e	23	4.1	3.2	1.8	能「口」	
1458	e	23	3.5	3.0	1.6	無「口」	
1459	e	16	3.5	2.4	1.5	徒「口」	
1460	e	14	3.8	2.6	1.2	否「口」	
1461	e	27	4.0	3.8	1.3	規「口」	
1462	e	33	2.6	2.8	2.1	信「口」	
1463	e	22	8.0	3.2	1.2	失「口」	
1464	e	25	3.8	3.0	1.7	𠩎「口」	
1465	f	87	6.2	4.8	2.5	𠩎「□○○」	8
1466	f	113	7.1	5.3	2.1	𠩎「𠩎／□○○」	
1467	f	87	6.4	4.6	2.2	𠩎「□○○」	
1468	f	32	4.8	3.7	1.7	所「口」	
1469	f	22	3.7	3.1	1.6	自「口」	
1470	f	42	4.7	3.9	1.5	離「口」	
1471	f	24	4.9	2.8	1.1	𠩎「口」	
1472	f	36	4.7	3.1	2.1	莫「口」	
1473	f	18	3.8	2.9	1.5	𠩎「口」	
1474	f	22	4.6	2.6	1.7	𠩎「者」	
1475	f	42	6.2	4.4	1.6	男子「□○○」	
1476	f	37	4.8	3.9	1.9	摩「柯」	
1477	f	21	3.7	3.2	1.3	等「口」	
1478	f	38	7.5	4.4	1.0	鈞「口」	
1479	f	147	9.9	6.4	1.8	𠩎「□○○／□○○」	
1480	f	38	4.7	3.0	1.6	又於「□口」	
1481	f	34	4.5	3.7	1.2	威「口」	
1482	f	39	4.3	3.2	1.9	摩「口」	
1483	f	34	4.0	3.3	2.0	佛「口」	
1484	f	41	5.1	4.1	1.5	經「口」	
1485	f	130	10.5	6.3	1.9	棄「口」	
1486	f	13	3.1	2.8	1.3	祇「口」	
1487	f	65	6.0	4.5	2.0	門「口」	
1488	f	37	6.3	2.9	1.7	尾「口」	
1489	f	10	2.6	2.4	1.1	作「口」	
1490	g	36	4.8	3.3	1.8	參觀「三百」	6
1491	g	113	6.1	5.7	2.2	触口「𦥑」	
						「触口」	法單體に は「触口受 受縁受」と ある
1492	g	33	6.0	3.8	1.2	智見「多口」	11
1493	g	31	4.7	3.0	1.5	德自「□○○」	13
1494	g	29	6.3	3.8	1.2	□○○	15
1495	g	292	10.1	6.6	3.8	一百／乃至一十／ □○○□○○	15
1496	g	134	8.4	4.6	2.2	又／阿彌多／若有 「闇物落／免遠」	17
1497	g	44	6.5	4.3	1.1	當時著「王菩薩」	26
1498	g	30	3.3	4.7	2.0	歩「口」	
1499	g	29	4.0	3.3	1.8	住「法」	
1500	g	29	4.2	3.2	1.8	安「口」	
1501	g	45	4.5	4.2	1.8	此敷「□口」	
1502	g	341	11.5	8.4	3.7	□○□／□○□／ □○□	
1503	g	80	5.7	4.0	1.8	衝「口」	
1504	g	17	4.3	3.1	0.8	若「口」	
1505	g	20	5.0	2.9	1.0	合「口」	
1506	g	22	3.8	2.7	1.7	舌「施」	
1507	g	27	4.0	3.0	1.8	曉「口」	
1508	g	40	3.5	3.2	2.6	是「口」	
1509	g	23	4.0	2.9	1.5	□「如」	
1510	g	39	4.5	3.7	1.6	衡「口」	
1511	g	37	5.3	3.8	1.6	以是「□口」	
1512	g	50	4.8	3.8	2.1	東「口」	
1513	g	47	5.6	3.2	2.4	甲口「人火」	
1514	g	48	4.9	4.2	2.1	西「口」	
1515	g	40	4.5	3.2	1.7	谷「口」	
1516	g	17	2.9	3.3	1.3	無「口」	
1517	g	12	4.0	2.3	1.0	作「那」	
1518	g	7	3.7	2.5	0.7	向「口」	
1519	g	29	4.3	3.0	1.8	匂「口」	
1520	g	25	4.9	3.3	1.5	全「口」	
1521	g	18	3.3	1.9	1.6	所「口」	
1522	g	59	4.0	4.5	2.2	死「口」	
1523	g	17	3.5	2.4	1.6	特「口」	
1524	g	10	2.5	2.7	1.2	上「口」	
1525	g	15	3.2	2.5	1.6	衡「口」	
1526	g	17	3.7	2.8	1.1	是「口」	
1527	g	16	3.1	2.4	1.3	門「口」	
1528	g	12	3.5	3.0	0.9	方「口」	
1529	g	6	2.3	2.3	1.0	何「口」	
1530	g	7	3.4	2.7	0.6	延「口」	
1531	g	18	2.6	3.7	1.6	小「口」	
1532	g	14	2.5	2.8	1.5	万「口」	

1533	g	7	3.4	2.2	1.1	德	◇
1534	g	13	4.0	2.2	1.3	矜	◇
1535	g	34	4.2	2.2	1.8	何	◇
1536	g	15	2.6	2.7	1.7	十	◇
1537	g	24	4.1	3.8	1.1	俄	◇
1538	g	24	4.3	3.1	1.8	在	◇
1539	g	6	2.9	2.8	0.3	大	◇
1540	g	49	5.5	3.8	1.7	董	◇
1541	h	31	4.6	3.3	1.8	口傳「皆」地	7
1542	h	33	8.2	3.8	1.8	孚「口」	
1543	h	97	6.4	4.5	2.3	衆「口」	
1544	h	30	4.5	3.4	1.8	應	◇
1545	h	130	8.1	6.0	1.8	道	◇
1546	h	28	3.7	3.8	1.7	佛	◇
1547	h	29	4.9	2.7	1.8	善	◇

L1-5 h-①グリッド

No.	漢字	度量	重宝	長径	短径	厚さ	文字	品	備考
1548	a	230	7.1	6.2	2.7	2.7	「吾猶常、而說是 妙法蓮華經、一 言無所化「六 百萬「彌那	7	開闢66
1549	a	30	4.7	3.8	1.8	「口」			
1550	a	25	4.5	3.5	1.4	「十」	「口」		
1551	a	39	4.7	3.5	2.2	「兩「口」「門			
1552	a	44	6.0	4.1	1.6	「是」	「口」		
1553	a	73	6.3	5.0	2.1	「和「象「口」	「口」		
1554	a	82	5.5	4.9	2.3	「口」「三			
1555	a	36	4.3	3.5	1.3	「但」			
1556	a	20	4.2	3.2	1.3	「觀」			
1557	a	5	2.5	2.4	0.3	「是」	◇		
1558	a	121	9.2	5.7	1.7	「測」	◇		
1559	a	46	5.0	4.2	1.8	「樹」	◇		
1560	a	49	4.8	3.7	2.3	「十」	◇		
1561	a	9	3.7	3.0	0.6	「化」	◇		
1562	a	18	4.7	2.6	1.0	「佛」	◇		
1563	a	14	3.6	2.6	1.2	「九」	◇		
1564	a	13	4.2	2.6	1.2	「圓」	◇		
1565	b	72	5.7	4.4	2.5	「口」「能」「口」	「口」「口」		
1566	b	182	9.4	5.8	2.4	「今」「口」「為我人」	「口」「口」「口」		
1567	b	61	5.8	4.6	1.8	「長」	「口」		
1568	b	116	8.1	5.8	1.8	「能」「口」「口」	「口」「口」「口」		
1569	b	62	5.3	5.4	1.7	「眾」「口」「令口在	「口」「口」「口」		
1570	b	50	4.7	4.0	2.0	「觀」「口」「口」「口」	「口」		
1571	b	35	4.5	2.9	2.4	「物」「口」			
1572	b	30	3.8	3.6	2.3	「通」「口」			
1573	b	46	4.4	3.5	2.1	「所」「口」			
1574	b	32	5.0	3.5	1.8	「等」			
1575	b	42	6.3	3.2	1.8	「觀」「口」			
1576	b	41	5.1	3.4	1.7	「是」「作」「口」			
1577	b	21	4.3	3.3	1.8	「汝如」「口」			
1578	b	89	8.3	4.2	2.2	「像」	◇		
1579	b	25	4.5	3.2	1.8	「酒」	◇		
1580	b	17	4.5	3.1	1.8	「智」	◇		
1581	b	30	3.8	2.9	2.0	「圓」	◇		
1582	b	22	4.4	3.6	1.8	「當」	◇		
1583	d	31	4.3	4.1	1.7	「我已」「得願」	3		
1584	d	90	6.3	5.6	2.3	「使以為」「足於後 觀」「友會遇」「見之 而」	8		
1585	d	102	6.3	5.8	2.3	「現量」「男氣」	25		
1586	d	153	9.1	5.7	2.1	「口」「口」「廣」「三 〇」「口」「口」			
1587	d	143	7.5	5.5	3.2	「佛」「合」「口」			
1588	d	73	4.8	4.6	2.4	「口」「口」「口」「 口」			
1589	d	42	4.4	2.6	2.8	「執」「口」「口」			

1590	d	41	3.4	4.9	2.1	「誰」「口」		
1591	d	47	4.4	3.3	2.4	「處」「其」「口」		
1592	d	91	4.7	4.7	2.4	「〇〇」及「〇〇」 「〇〇」		
1593	d	29	3.4	3.5	1.8	「得」「熊」		
1594	d	17	3.8	2.4	1.8	「印」「口」		
1595	d	23	4.7	3.3	1.8	「常」「口」		
1596	d	20	2.3	3.2	1.8	「音」「為」「口」		
1597	d	25	4.3	3.3	1.6	「二」「口」「口」		
1598	d	48	5.2	3.8	1.7	「大我」「口」		
1599	d	24	4.2	3.4	1.3	「衣」「口」		
1600	d	50	4.4	4.2	2.4	「天光」「口」		
1601	d	38	5.4	3.8	1.4	「如成」「佛」		
1602	d	48	5.3	4.2	1.8	「諸偈」「口」		
1603	d	20	4.3	3.3	1.1	「復」「口」「履」		
1604	d	33	4.8	3.6	1.6	「有」「口」「口」		
1605	d	17	4.9	3.1	1.1	「雷」	◇	
1606	d	94	7.4	4.3	2.1	「為」	◇	
1607	d	13	3.3	2.5	1.3	「吉」	◇	
1608	d	17	4.3	2.6	1.4	「巳」	◇	
1609	d	29	4.2	3.8	1.3	「神」	◇	開闢67-112
1610	d	18	2.9	3.2	1.6	「万」	◇	
1611	d	81	6.3	3.2	2.9	「逸」	◇	
1612	d	51	5.4	3.8	2.2	「生」	◇	
1613	d	34	5.1	3.4	1.5	「學」	◇	
1614	d	45	4.6	3.9	1.4	「面」	◇	
1615	d	12	4.0	2.6	0.8	「愛」	◇	
1616	d	45	4.8	4.7	1.8	「牠」	◇	
1617	d	22	2.8	4.1	1.5	「曾」	◇	
1618	d	12	3.2	2.6	1.3	「妓」	◇	
1619	d	40	3.3	4.9	1.9	「面」	◇	
1620	d	26	6.1	3.5	1.3	「典」	◇	
1621	d	34	4.3	3.9	2.2	「始」	◇	

L1-5 h-②グリッド

No.	漢字	度量	重宝	長径	短径	厚さ	文字	品	備考
1622	a	247	10.7	7.8	3.0	說菩薩「如來神 力故白「佛言世尊	11		
1623	a	86	7.3	4.7	1.7	「入於靜」	14		
1624	a	86	7.6	4.6	1.7	「聞天人「之中無	23	開闢67-112	
1625	a	201	6.2	6.8	2.7	「亦復「如是/「口」 「口方/「口」 「口方/「口」 「口方/「口」 「口/「口」			
1626	a	274	9.6	5.4	3.7	「無是/「口」「〇〇 「〇/「〇〇」「〇〇 「〇/「〇〇〇〇			
1627	a	42	4.6	4.1	1.9	「以修」「口」			
1628	a	23	3.9	2.6	2.1	又「心」「口」「口」			
1629	a	17	4.6	2.6	1.5	「敷」「口」			
1630	a	91	7.6	3.6	2.4	「滿三〇」「口」「收 「/〇〇〇〇			
1631	a	8	3.1	2.2	1.1	「數」「口」			
1632	a	9	3.3	2.3	1.0	「含」「合」			
1633	a	22	4.5	2.4	1.5	「三」「口」			
1634	a	27	4.5	3.5	1.4	「棄」「故」			
1635	a	29	4.8	4.5	0.8	白口「口」			
1636	a	30	6.0	3.5	1.4	「過」「口」「口」「口」			
1637	a	26	4.4	3.5	1.2	「施」「口」			
1638	a	10	3.8	2.3	1.1	「是」「口」			
1639	a	16	3.2	3.0	1.3	「有」「人」			
1640	a	46	6.7	4.1	2.0	「避」	◇		
1641	a	11	3.8	2.9	0.8	「白」	◇		
1642	a	19	3.9	3.2	1.4	「恒」	◇		
1643	a	22	3.3	3.3	2.0	「比」	◇		
1644	a	12	3.0	2.1	1.8	「人」	◇		
1645	a	12	2.9	3.8	0.8	「邊」	◇		
1646	a	24	5.6	3.4	1.1	「藏」	◇		
1647	a	16	3.3	3.3	1.1	「唱」	◇		
1648	a	26	4.7	4.0	1.4	「世」	◇		
1649	a	11	2.4	3.4	1.3	「無」	◇		
1650	a	43	5.0	2.8	2.1	「禮」	◇		
1651	a	22	4.3	3.4	1.3	「會」	◇		
1652	b	55	4.7	3.6	2.2	一切智「十力」等	?		

					釋(法)	
1653	b	45	4.6	3.6	2.1 俗語「證明」	7
1654	b	80	6.6	5.2	2.1 高/高/橫承「你」 /多/難	8
1655	b	96	7.8	3.7	2.4 若人具是/□口(海 必)「說空處」 /□□□/說詭辟	10
1656	b	318	10.5	8.2	3.7 論釋「佛前有少七 宝高/五百由旬 /聚/廣/二百五 十由旬」	11
1657	b	24	3.8	2.9	1.4 成一/四天	17
1658	b	20	4.3	2.6	2.4 究「門」	
1659	b	21	3.3	3.3	1.2 論「聖」	
1660	b	184	9.4	5.1	2.6 □□□/□口「不 □□□/□□□ /□□」	
1661	b	25	4.0	2.8	2.5 「之」上	
1662	b	18	4.3	2.8	1.3 佛「唐」	
1663	b	16	3.7	2.8	1.9 佛「口」	
1664	b	27	4.1	3.3	1.8 佛「聚」	
1665	b	49	6.6	3.6	1.4 □不返「□□□」	
1666	b	25	3.8	3.6	1.5 乾「口」	
1667	b	69	5.2	4.7	1.1 聚「口」	
1668	b	14	3.6	3.3	2.8 1.5 何「口」	
1669	b	65	5.2	4.1	2.2 明「□□/□□」	
1670	b	24	4.6	4.0	1.0 □比「口」別	
1671	b	47	6.4	4.0	1.6 安處「口」	
1672	b	44	4.9	3.6	2.2 □口「□」	
1673	b	27	4.1	3.6	1.7 前「口」	
1674	b	25	4.1	3.3	1.7 □口「□」	
1675	b	107	9.4	4.0	1.8 佛「□□□」	
1676	b	160	9.7	6.9	1.7 □□□/□口世 「□皆□/□□□」	
1677	b	34	5.0	3.9	1.4 本「口」	
1678	b	72	6.6	4.6	1.8 □父「佛」	
1679	b	50	5.4	3.9	2.5 □口/何/□口「 □口」	
1680	b	29	4.1	3.1	1.6 第「口」	
1681	b	59	6.5	5.3	1.2 慈「○」	
1682	b	22	3.7	2.9	1.7 合「○」	
1683	b	41	4.3	5.0	1.3 法「○」	
1684	b	14	3.5	2.7	1.5 𠂇「○」	
1685	b	21	3.5	3.0	1.8 乾「○」	
1686	b	20	3.9	2.5	1.3 無「○」	
1687	b	7	2.3	1.8	1.3 天「○」	
1688	b	17	3.7	2.4	1.6 何「○」	
1689	c	130	6.6	6.4	1.5 生闡此/法得道 「若生天/諸惡消	7 因第66
1690	c	47	5.2	3.9	2.1 論釋「大/通/智 /無」	7
1691	c	35	5.0	3.5	1.4 一闡「子音」	7 因第66-112
1692	c	93	7.8	5.4	2.3 無極于萬/衆欲過 「此/染法」其路基	7
1693	c	86	7.0	5.4	1.8 人本定/又闡其 「言普世/普教」	11
1694	c	322	12.1	7.1	2.6 若在諸口「家/9」 不與口□□□(出 此/彼)「□□□」 □口者皆說於「□口」 □無能解)求文口 (佛)「諦和叉口(普 濟)」解說口(佛不 □口收說)「□(佛) 人□口(濟)」	14
1695	c	165	7.1	6.2	3.0 百千風/諸葛化/ 闡	28
1696	c	41	5.6	3.3	1.7 挑舌「繪畫」	⑤
1697	c	23	4.4	3.1	1.3 佛「猶有」	
1698	c	16	3.1	2.7	1.4 生「一」	
1699	c	161	6.6	5.5	2.5 □為/□法「□□ /□□」	
1700	c	18	4.4	2.8	1.7 1.0 1.0	
1701	c	163	6.6	5.4	2.6 □□/苦不「□」 □	

1702	c	99	7.8	4.2	1.7 □有「□□/□乃 者是」有「□□/□」	
1703	c	214	8.4	6.5	2.6 □者是「□□/□」	
1704	c	214	8.4	7.1	3.0 誰「□/□」 「□」	
1705	c	109	7.7	4.0	2.8 □□天三「□□□」 「□□」	
1706	c	112	8.2	4.0	3.0 持師智管「□□□」 「□□□」 「□□□」	
1707	c	71	5.0	4.8	2.2 □□□/□法「 □□□」	
1708	c	46	6.1	3.8	2.9 佛者「□」	
1709	c	59	6.1	4.0	2.2 香□□「□□」 「□」	
1710	c	61	5.8	3.3	2.5 香□□「□諸」 「□」	
1711	c	30	5.8	2.6	1.5 □□幽「□□為」	
1712	c	17	3.7	3.8	1.0 既知「□」	
1713	c	16	2.9	3.1	1.4 無「□」	
1714	c	22	3.7	3.0	1.5 其「□」	
1715	c	20	3.9	3.5	1.0 暗「□」	
1716	c	22	3.3	2.1	1.5 三「□」	
1717	c	39	4.7	3.2	2.0 □心「□」	
1718	c	37	4.8	2.8	2.1 知「□」	
1719	c	14	3.4	2.7	1.7 現「□」	
1720	c	19	3.0	3.5	1.7 其「□」	
1721	c	86	6.7	5.0	1.9 圓「圓」 「口」 「口」	
1722	c	66	5.8	4.9	1.7 無□□為「□」 「□」	
1723	c	66	6.4	4.6	1.7 無□□/□□「□」 「□□/□」	
1724	c	10	4.2	2.8	0.6 義「□」	
1725	c	86	4.8	6.6	2.1 無「□□□」	
1726	c	72	5.9	4.9	2.6 □/□/拂「大/ □/□」	
1727	c	71	5.5	4.4	2.3 無□□/□「□」 「□□」	
1728	c	58	5.2	4.0	1.9 漸加「□□」	
1729	c	49	4.8	4.2	1.8 漸諸「□□」	
1730	c	33	4.2	4.0	1.8 王「□」	
1731	c	31	4.1	3.2	2.0 天人「隱」	
1732	c	42	5.8	3.3	2.0 世口「此一切」	
1733	c	21	4.0	3.1	1.5 拾「等」	
1734	c	28	4.3	3.2	1.7 得「□」	
1735	c	17	3.8	2.5	1.9 無「□」	
1736	c	56	4.8	4.5	2.1 門「○」	
1737	c	15	5.9	4.3	1.9 念「○」	
1738	c	96	6.2	5.7	1.8 為「○」	
1739	c	57	6.3	6.0	1.6 平「○」	
1740	c	15	4.7	3.5	0.7 上「○」	
1741	c	18	2.3	3.5	2.0 中「○」	
1742	c	10	3.5	2.1	1.0 労「○」	
1743	c	9	10.0	3.3	2.0 暗「○」	
1744	c	10	3.6	2.6	0.6 暗「○」	
1745	c	44	5.2	2.7	2.3 為「○」	
1746	c	14	4.2	3.3	0.8 通「○」	
1747	c	19	3.6	2.3	1.8 暗「○」	
1748	c	23	3.8	3.2	1.3 和「○」	
1749	c	16	3.0	2.5	1.4 俄「○」	
1750	c	9	3.2	2.0	1.3 示「○」	
1751	c	12	3.2	2.5	1.3 無「○」	
1752	c	5	3.0	2.2	0.6 和「○」	
1753	c	6	2.6	2.1	0.6 濟「○」	
1754	c	13	3.3	2.4	1.2 法「○」	
1755	c	22	3.5	2.5	2.0 靜「○」	
1756	c	5	2.7	2.0	0.91 千「○」	
1757	c	11	3.3	3.2	1.2 法「○」	
1758	c	11	2.6	2.5	1.4 一「○」	
1759	c	16	3.6	2.5	1.3 無「○」	
1760	c	13	3.9	2.6	1.2 伴「○」	
1761	c	12	3.6	3.2	1.6 女「○」	
1762	c	26	2.3	3.7	2.6 和「○」	
1763	c	18	3.3	2.8	1.7 衣「○」	
1764	c	38	4.0	3.4	2.1 機「○」	
1765	c	60	6.7	4.5	1.2 誰「○」	

1766	c	11	3.3	2.4	1.0	石	◇
1767	c	19	3.5	3.1	1.3	象	◇
1768	e	18	4.2	3.6	0.9	從	◇
1769	c	18	3.9	3.8	1.2	女	◇
1770	d	39	5.6	3.2	1.4	女女方「便中」	3 国語66-112
1771	d	65	5.3	4.7	2.3	𠂇「𠂇」/自「宣宜」	4
1772	d	126	6.2	5.2	2.5	𠂇「𠂇」/𠂇成 大也/自鄉/先心	4
1773	d	29	6.2	3.8	1.3	道長通「度量」	8
1774	d	51	4.8	4.6	1.9	三十「𠀤」/相「曲」/日「𠂇」	8
1775	d	202	9.3	6.2	2.4	□□□□「赤足脚」/ □□□「字学字」/ □「弟子二人千人」/ □□「物的」/□□「 起倒」/𠂇右脚到	9
1776	d	117	7.2	5.4	2.6	一切夫人/齊人 「𠂇」/𠂇	17
1777	d	79	6.5	5.8	1.8	是基「善華「香塵」 /馬施香	23
1778	d	114	7.3	5.6	2.9	赤脚「脚」	②
1779	d	68	6.0	4.7	1.6	多能「三瓶」/三善 鬼	
1780	d	87	7.2	5.6	2.1	𠂇「意」/鍾人「口」/ □□	
1781	d	44	6.1	2.9	2.1	合口「口□□」	
1782	d	42	5.5	3.8	1.7	𠂇「口□□」	
1783	d	23	4.3	2.7	1.5	𠂇「口」	
1784	d	24	3.6	3.4	2.0	三「口」	
1785	d	20	4.6	4.1	1.5	大「𠂇」	
1786	d	10	3.0	2.2	0.9	而「在」	
1787	d	40	6.3	3.1	1.6	口口基「□□□」	
1788	d	26	4.2	3.5	1.7	𠂇「口□」	
1789	d	19	4.5	2.9	1.2	山「口□」	
1790	d	47	6.0	3.6	1.6	口□□□□□「𦥑 野」	
1791	d	100	7.6	5.8	1.5	成凶「𡇁」/𠂇「口 道」	
1792	d	127	8.3	4.6	3.5	成「𠂇」/𠂇「𠂇」	
1793	d	94	8.7	6.0	2.4	多能「念口」	
1794	d	55	5.6	3.6	2.3	口清「口」	
1795	d	43	4.2	3.5	2.7	赤奉「𠂇有「口□」	
1796	d	49	5.0	4.5	1.8	以「𦥑」/力「口」/ 「口○□」	
1797	d	54	5.9	4.3	1.6	門「口□」	
1798	d	48	6.0	4.6	1.6	𠂇「口□」	
1799	d	25	4.7	4.6	1.8	𠂇「口□」	
1800	d	7	3.9	3.9	1.2	𠂇「口」	
1801	d	26	4.7	3.6	2.2	𠂇「𠂇」	
1802	d	46	4.9	4.7	2.2	𠂇「𠂇」/𠂇「口 口○」	
1803	d	21	5.3	2.6	1.0	□□□「健及」	
1804	d	51	6.2	3.3	1.6	𠂇「口□」	
1805	d	57	5.6	4.8	1.9	口「口□」	
1806	d	26	4.5	4.6	1.2	𠂇「𠂇生「口現 「口○」」	
1807	d	50	6.1	3.5	1.8	昇「口□」	
1808	d	37	5.9	3.7	1.6	𠂇「口□」	
1809	d	47	6.0	3.9	1.6	𠂇「𠂇」/「口□」	
1810	d	43	5.6	2.8	2.0	口「此」/「口○重	
1811	d	25	4.2	3.3	1.7	大口口「口□」	
1812	d	16	4.3	2.3	1.3	𦥑「子」	
1813	d	23	4.0	2.5	2.0	當「造」	
1814	d	26	4.0	3.8	1.3	𠂇「口」	
1815	d	15	5.0	2.3	0.9	𠂇「𠂇」	
1816	d	11	4.0	2.6	1.0	不「若」	
1817	d	16	4.0	3.8	1.2	𠂇「𠂇」/「口」	
1818	d	17	3.7	2.5	1.0	𠂇「𠂇」	
1819	d	18	4.2	2.6	1.5	言「口」	
1820	d	9	2.2	3.0	1.2	𠂇「𠂇」	
1821	d	19	3.9	3.1	1.2	𠂇「𠂇」	
1822	d	16	3.5	2.8	1.1	𠂇「𠂇」	
1823	d	24	3.9	3.2	1.3	𠂇「𠂇」	
1824	d	22	3.7	4.2	1.2	𠂇「𠂇」	

1825	d	29	4.7	4.2	1.4	清	◇
1826	d	8	3.0	2.0	0.9	𠂇	◇
1827	d	7	3.5	2.5	0.5	𠂇	◇
1828	d	47	6.0	3.8	2.0	波	◇
1829	d	31	4.0	3.9	1.5	為	◇
1830	d	25	3.6	4.5	1.3	曲	◇
1831	d	16	3.3	2.0	2.0	諸	◇
1832	d	6	2.2	2.8	0.6	遂	◇
1833	d	19	3.2	2.8	1.3	政	◇
1834	e	51	5.2	3.5	2.0	多謠「渴」/虫	3
1835	e	27	6.0	5.0	2.5	迺「𠂇」/萬「𠂇」/ 𠂇「𠂇」	7
1836	e	67	5.3	4.9	1.6	𠂇「𠂇」/𠂇人「口」/ 口「口○」/𠂇「𠂇」/𠂇 所加	12
1837	e	70	5.0	4.7	2.0	先有「如是相」	19
1838	e	64	5.1	4.3	2.0	三「口○」	
1839	e	54	5.3	4.2	1.6	三「口○」	
1840	e	77	6.0	5.7	2.2	再迺「口○」	
1841	e	68	5.3	4.1	2.3	財物「口○/口○」	
1842	e	51	6.3	4.6	1.0	𠂇口○/𠂇口○	
1843	e	66	5.3	4.7	2.2	牛𠂇「口○」	
1844	e	43	5.3	3.2	2.0	領「口○」	
1845	e	366	12.7	7.5	2.6	効法「口○」	
1846	e	92	4.8	4.5	2.1	集「𠂇」/「口○」/ 說「口○」	
1847	e	58	4.5	4.3	2.0	𠂇以「口○」	
1848	e	22	3.3	3.1	1.2	大口「口○」	
1849	e	33	4.3	3.2	2.8	𠂇合「如是」/法	
1850	e	33	4.7	3.5	1.6	有口「𠂇」	
1851	e	22	3.8	3.1	1.3	善「口○」	
1852	e	17	3.1	3.3	1.0	明「口○」	
1853	e	26	4.6	2.7	1.2	如實「口○」	
1854	e	61	5.5	4.6	2.3	找翫「口○」	
1855	e	36	4.5	3.3	1.7	他「口○」	
1856	e	40	6.2	3.6	1.5	口面「諸等」	
1857	e	27	4.2	2.7	2.0	世「尊」	
1858	e	26	4.2	3.4	1.0	口狀「口○」	
1859	e	23	4.4	3.4	1.5	丘為「口○」	
1860	e	40	5.8	4.4	1.4	華「口○」	◇
1861	e	48	6.0	5.3	0.9	況「口○」	◇
1862	e	26	3.3	3.0	1.6	任「口○」	◇
1863	e	31	3.5	3.5	1.8	為「口○」	◇
1864	e	24	4.2	2.5	1.8	測「口○」	◇
1865	e	19	3.7	3.6	1.5	通「口○」	◇
1866	e	12	3.6	2.2	1.3	是「口○」	◇
1867	e	7	2.8	2.6	0.7	不「口○」	◇
1868	e	8	2.3	2.4	1.2	中「口○」	◇
1869	e	24	3.7	3.6	1.5	大「口○」	◇
1870	e	36	4.7	3.6	1.8	諾「口○」	◇
1871	e	20	3.5	2.4	2.0	車「口○」	◇
1872	e	17	3.8	3.3	1.1	說「口○」	◇
1873	e	8	2.3	2.9	1.2	三「口○」	◇
1874	e	46	4.8	3.7	2.1	錢「口○」	◇
1875	e	83	5.3	5.3	2.8	世「口○」	◇
1876	e	31	4.0	4.1	1.8	衆「口○」	◇
1877	e	37	4.5	4.2	2.2	與「口○」	◇
1878	e	14	4.5	2.6	1.3	辤「口○」	◇
1879	e	44	4.5	4.5	1.6	說「口○」	◇
1880	e	12	2.4	2.6	1.3	允「口○」	◇

No.	流域	重能	長緯	別緯	理活	文字	品	編	名
1881	b	36	4.8	4.4	1.8	問口「地是人」			
1882	d	116	7.6	5.7	2.4	成像「口○」			
1883	d	90	6.1	3.8	2.2	口是「口○」			
1884	d	25	4.1	3.9	1.2	道「口○」			
1885	e	39	5.4	3.5	1.8	及衆「雞威」/口○口○	24		
1886	e	23	4.9	2.8	1.5	牧「諸」	◎	国語66	
1887	e	26	5.5	4.5	1.2	口口「共翁」			
1888	e	24	3.9	3.0	1.4	南「口○」			
1889	e	38	5.6	3.8	1.4	生知「口○口○」			
1890	e	12	3.1	2.8	1.2	爾「口○」			

1891	e	13	2.8	4.3	0.9	無	◇
1892	e	9	3.4	2.9	0.7	無	◇
1893	e	25	5.5	3.3	1.9	無	◇
1894	e	23	3.7	3.5	1.5	無	◇

L1-9 i-①グリッド

No.	深度	底質	長径	短径	厚さ	文字	品種考
1895	d	14	4.0	3.2	1.1	昔	◇

L1-9 i-②グリッド

No.	深度	底質	長径	短径	厚さ	文字	品種考
1896	d	16	2.8	3.1	1.4	力	◇

L1-9 i-③グリッド

No.	深度	底質	長径	短径	厚さ	文字	品種考
1897	e	13	3.7	2.6	0.9	力	◇

L1-9 ii-①グリッド

No.	深度	底質	長径	短径	厚さ	文字	品種考
1898	b	52	3.8	3.7	1.8	霞母ノ鉢/「佛」管 魅/無所	4
1899	b	56	6.0	3.7	2.3	口例「乃口」	
1900	b	25	4.4	3.9	1.4	後	◇
1901	b	30	3.9	3.8	1.6	始	◇
1902	b	30	4.2	3.5	1.8	同	◇
1903	b	19	3.0	2.5	1.5	替	◇

L1-9 ii-②グリッド

No.	深度	底質	長径	短径	厚さ	文字	品種考
1904	b	8	3.7	2.2	0.7	口	
1905	b	60	6.5	4.6	1.6	光共「□□□	
1906	b	8	3.0	1.9	1.1	達	◇

L1-9 ii-③グリッド

No.	深度	底質	長径	短径	厚さ	文字	品種考
1907	b	46	8.4	3.3	2.0	大「想心」 2 図版66-112	
1908	b	29	4.8	3.9	1.8	匁「無此事」	3
1909	b	62	5.4	3.2	2.1	例「□□□	
1910	b	36	6.7	2.9	1.9	有「是如」	
1911	b	27	6.0	2.9	1.1	帶留「□□」	
1912	b	18	4.0	3.0	1.2	門	◇
1913	b	20	2.8	3.1	1.5	兼	◇
1914	b	22	3.3	3.2	1.5	樂	◇
1915	c	19	4.1	3.2	1.2	依	◇
1916	d	40	4.9	4.1	1.7	□□/道口「□□」	
1917	d	20	2.0	2.7	1.6	未「口」	
1918	d	114	8.3	4.7	2.3	舟子口/「萬古比口」 □□□□	
1919	d	139	7.2	5.8	2.8	圓「皆已/授記」 「今欲知記者/得來」	

No.	深度	底質	長径	短径	厚さ	文字	品種考
1920	d	19	4.5	2.5	1.6	舟「印」	◇
1921	d	41	4.8	3.8	2.1	為	◇
1922	d	17	5.0	3.5	1.0	舟	◇
1923	d	70	8.8	4.2	2.2	界	◇
1924	d	49	4.5	3.7	2.3	待	◇
1925	e	24	4.1	2.4	1.9	號「口」	
1926	e	42	5.9	2.9	1.8	帶狀「口」	
1927	e	40	5.2	3.4	1.7	號「口」	
1928	e	29	4.9	3.0	1.7	細「□□」	
1929	e	141	6.6	4.8	2.9	微少「此□「□□」 □□」	
1930	e	21	3.9	3.1	1.9	供	◇
1931	e	29	4.2	2.8	2.1	寺	
1932	e	13	2.7	2.4	1.0	行	
1933	e	21	3.7	3.0	1.4	往	
1934	e	38	6.3	2.7	2.1	就	
1935	e	40	5.9	3.9	1.6	供	◇
1936	e	41	5.6	3.4	1.8	六	◇
1937	e	30	3.2	3.3	1.7	日	◇
1938	f	197	8.6	6.4	3.1	之哉詎詰「渠中最 為」其深末「後陽 与「細微強力「王	14

No.	深度	底質	長径	短径	厚さ	文字	品種考
1939	f	32	4.7	3.0	1.6	財附「口」	
1940	f	74	5.7	4.6	2.7	舟「□□」	
1941	f	29	3.0	3.0	2.3	何	◇
1942	h	27	4.4	3.6	1.7	持「□□」	

L1-9 iii-①グリッド

No.	深度	底質	長径	短径	厚さ	文字	品種考
1943	b	15	3.2	2.5	1.4	作	◇
1944	b	11	2.2	2.8	1.2	野	◇
1945	b	24	4.0	3.2	1.5	前	◇

L1-9 iv-①グリッド

No.	深度	底質	長径	短径	厚さ	文字	品種考
1946	b	20	3.4	2.6	1.6	三「衆」	
1947	b	24	4.1	3.6	1.5	寶	◇
1948	b	8	2.8	2.3	1.1	徳	◇
1949	b	26	3.7	4.2	1.3	寶	◇

L1-9 iv-②グリッド

No.	深度	底質	長径	短径	厚さ	文字	品種考
1950	b	45	4.7	3.5	2.6	若「□□」	
1951	b	10	3.5	2.7	0.6	拂	◇
1952	b	8	2.0	2.8	1.7	一	◇

L1-10 i-①グリッド

No.	深度	底質	長径	短径	厚さ	文字	品種考
1953	b	31	4.3	3.2	1.8	具三「十二相」	◎
1954	b	66	7.4	3.3	1.9	畜有「十物五歌而 自「自我」	8
1955	b	27	4.1	3.9	1.3	鬼「鬼」	23
1956	b	22	3.9	3.3	1.4	口「口」	
1957	b	59	5.5	5.2	1.9	者口「口算」/有智	
1958	b	24	4.7	3.6	1.9	於此「□□」	
1959	b	21	4.3	3.0	1.4	識「之」	
1960	b	32	4.3	3.4	1.8	紀口「□□」	
1961	b	28	4.3	3.7	2.0	黃「金」	
1962	b	13	2.2	2.7	1.3	因	◇
1963	b	57	5.7	3.5	1.7	前	
1964	b	12	4.6	3.0	1.2	燕	◇
1965	b	21	4.2	2.8	1.5	曉	
1966	b	22	4.7	3.7	0.9	上	
1967	b	18	3.8	2.3	1.5	善	◇
1968	b	43	5.1	3.7	1.7	何	◇
1969	b	10	2.6	2.3	1.2	師	◇
1970	b	10	2.8	1.9	1.0	蓮	
1971	b	14	3.4	2.4	1.2	死	
1972	b	21	2.9	3.5	1.8	在	
1973	b	22	4.2	3.5	1.3	有	◇
1974	b	17	3.7	2.9	1.5	善	◇
1975	b	25	5.6	3.2	1.1	華	◇
1976	b	24	3.5	3.2	1.8	良	◇
1977	c	31	4.0	3.3	1.9	之法「但不」	3
1978	c	34	4.2	3.6	1.3	平等「威」	5
1979	c	45	6.7	3.0	2.1	藏明院「釋迦陀罗等」	8
1980	c	52	5.1	3.4	2.4	當成「所供養」	9
1981	c	106	7.6	5.8	1.9	若「臂聞人」闡是「總」 「總」/「總」懷	10 図版66-112
1982	c	261	9.7	6.4	2.8	見一切人「受諸苦 惱」/欲求解脱與諸 「魔」/般若為是「生 說種法」	14
1983	c	158	7.9	6.4	2.1	猛大勢之「力而時 世」/尊意「童宣比 義」/傳	15
1984	c	191	8.1	8.0	2.8	在「□□□/□□□ □/□□□□□」	
1985	c	82	5.8	4.8	2.7	□「若能」□□	
1986	c	79	6.2	6.5	2.0	於「□/□□□/□ 波」/□□	
1987	c	34	5.2	3.9	1.7	爾「□」	

1988	c	49	5.9	4.5	1.7	佛／智／慧「若口 □」
1989	c	73	6.0	4.2	2.0	此經口「已口
1990	c	50	4.2	3.8	2.1	生民「口」
1991	c	46	3.9	4.0	2.5	若「口」
1992	c	41	6.2	4.0	1.5	三界「方便
1993	c	29	3.7	3.5	1.9	魚「口」
1994	c	44	5.2	2.8	2.3	不「口」道
1995	c	30	4.5	3.1	1.5	勝「口」
1996	c	17	4.5	2.6	1.5	阿「風
1997	c	23	5.1	2.0	1.8	取「口」
1998	c	22	4.0	3.0	1.6	作「口」
1999	c	12	3.5	2.8	1.3	有「口」
2000	c	11	4.9	2.9	0.9	佛「口」
2001	c	15	3.5	2.7	1.3	北「口」
2002	c	13	2.7	2.6	1.6	勝「口」
2003	c	27	5.4	3.1	1.2	作生涯「若說法 口」
16 國文史料別冊 語林詳注						
2004	c	111	6.8	4.9	2.6	口應「口○口○口○ 口○口○口○」
2005	c	52	5.7	4.6	1.9	希「○口○口○口○」 是「○口○口○」
2006	c	29	4.6	3.5	2.1	百「口」方
2007	c	42	5.8	3.4	2.3	其謹「口○」
2008	c	21	3.6	3.4	1.3	勝「口」
2009	c	20	4.1	3.0	1.6	過「谷」
2010	c	40	6.2	3.5	1.5	勝「口」
2011	c	40	6.1	3.4	1.3	拯華章「香櫞略
2012	c	19	4.1	2.9	1.6	被「羅」
2013	c	44	5.3	3.6	1.9	南口「口道」
2014	c	8	2.6	2.6	0.9	下
2015	c	16	3.2	2.3	1.5	法
2016	c	50	5.3	3.7	1.6	佛
2017	c	96	5.6	4.5	2.4	是
2018	c	48	4.5	4.3	2.5	言
2019	c	25	4.8	2.8	1.3	法
2020	c	26	4.3	3.9	2.3	魔
2021	c	18	4.0	3.3	1.3	光
2022	c	15	3.2	2.7	1.6	富
2023	c	25	3.8	3.7	2.3	安
2024	c	41	3.2	4.3	2.4	佛
2025	c	22	3.1	3.0	1.9	實
2026	c	46	4.3	4.3	1.8	為
2027	c	37	5.2	3.5	1.5	更
2028	c	25	5.8	2.9	1.5	南
2029	c	29	3.3	3.2	1.6	亦
2030	c	23	4.2	2.7	1.4	勝
2031	c	35	2.8	2.8	2.5	一
2032	c	8	2.0	3.5	1.9	獨
2033	c	11	3.5	2.5	0.9	來
2034	c	26	4.0	3.3	1.7	興
2035	c	16	2.7	2.4	1.3	見
2036	c	21	3.3	2.3	2.1	藥
2037	c	23	4.8	2.8	1.3	亦
2038	c	12	3.0	3.3	1.0	亦
2039	c	14	3.1	2.4	1.4	如
2040	c	26	3.5	3.5	1.9	萬
2041	c	29	4.2	3.2	1.3	獨
2042	e	28	4.2	2.3	1.5	曉
2043	c	17	3.7	3.9	1.2	及
2044	c	11	3.0	2.4	1.3	未
2045	c	21	4.7	3.0	1.3	來
2046	c	8	3.2	2.3	1.0	調
2047	c	6	3.4	2.5	0.5	誠
2048	c	16	3.9	2.8	1.2	招
2049	d	54	5.0	4.6	2.0	出／內／財「產生 口」
4 國研67-112						
2050	d	63	5.8	4.2	2.0	國光名「地劫」名
2051	d	39	5.5	3.5	2.1	多「研」
2052	d	161	6.7	3.2	3.3	以正觀念「隨眾瓶 「法從禪」定記
14 國研67-112						
2053	d	21	4.8	3.2	1.0	辨「別」明知
2054	d	59	6.0	4.2	1.6	口「羅山去
2055	d	49	5.8	4.8	1.6	口「羅山」終記「口

				□□/□□
2056	d	28	5.6	3.3
2057	d	27	4.3	4.0
2058	d	20	4.2	3.3
2059	d	66	7.5	4.0
2060	d	14	3.9	2.4
2061	d	45	5.3	3.4
2062	d	15	4.6	2.1
2063	d	12	3.9	2.5
2064	d	28	3.6	4.2
2065	d	26	3.3	4.1
2066	d	27	4.3	3.3
2067	d	18	3.3	2.0
2068	d	16	2.4	2.5
2069	d	37	3.5	3.7
2070	d	14	4.0	2.0
2071	d	21	4.8	3.0
2072	d	13	2.6	3.2
2073	d	36	4.3	3.7
2074	d	18	3.6	2.6
2075	d	13	2.8	3.2
2076	d	26	3.2	4.4
2077	d	13	4.0	2.3
2078	d	16	3.3	2.8
2079	d	41	5.2	4.0
2080	d	14	3.2	2.5
2081	d	12	2.8	3.3
2082	e	43	5.6	4.2
2083	e	35	5.2	4.0
2084	e	382	11.1	6.7
2085	e	47	7.3	4.9
2086	e	62	5.9	5.2
2087	e	19	4.2	3.6
2088	e	25	5.4	2.8
2089	e	42	4.4	3.8
2090	e	14	3.7	3.6
2091	e	34	5.2	3.8
2092	e	73	7.1	4.4
2093	e	67	5.6	4.8
2094	e	15	3.3	2.8
2095	e	27	3.8	4.3
2096	e	57	5.5	4.7
2097	e	28	4.1	3.3
2098	e	14	3.2	3.2
2099	e	6	2.8	2.8
2100	e	11	4.0	2.3
2101	e	63	6.6	3.7
2102	e	8	2.8	2.2
2103	e	15	3.2	2.8
2104	e	9	2.2	3.2
2105	f	155	7.7	5.6
2106	f	105	7.8	4.6
2107	f	49	5.6	3.9
2108	f	54	6.5	3.6
2109	f	36	5.3	2.2
2110	f	33	5.5	3.6
2111	f	21	3.7	3.8
2112	f	31	4.0	4.3
2113	f	44	6.3	3.1
2114	f	39	3.8	2.7
2115	f	16	3.7	2.6
2116	f	57	5.8	4.7
2117	f	8	3.1	2.6
2118	h	19	4.1	3.2
2119	h	19	4.9	2.5

2120	h	25	3.5	4.3	1.0	赤		○
2121	h	51	6.0	3.8	1.8	緑		○
2122	h	38	4.0	3.3	3.3	無		△

$$1.1 \times 10^{-1} \text{ M}^2/\text{J s}^2$$

No	深さ	重量	長径	短径	厚さ	文字	品 目
2123	b	37	4.3	3.8	0.6	尊「我從」	3
2124	b	22	5.0	3.3	1.2	化「政故」	3
2125	b	44	4.8	3.5	1.9	尊「當「前進」	7
2126	b	29	4.5	3.6	1.6	香港「聯加」	◎
2127	b	85	6.7	5.3	1.7	出口「日本」/□ 「00000/0000	
2128	b	79	6.4	3.9	2.4	等「轉門」/□ □	
2129	b	56	6.6	4.3	1.7	口樓「永貴」	
2130	b	35	5.5	3.4	1.8	者「口」	
2131	b	53	5.2	2.5	2.0	有「七」/□	
2132	b	43	4.3	3.6	2.3	啟「000」	
2133	b	34	1.3	3.8	1.6	是「口」	
2134	b	23	3.3	3.5	1.4	讀「加」	
2135	b	11	3.3	2.3	1.5	世「口」	
2136	b	36	5.3	3.4	1.4	大「口」	
2137	b	28	4.3	3.2	1.6	口「聲」	
2138	b	31	5.6	3.3	1.1	如「是」/□	
2139	b	42	5.8	4.1	2.1	即「口」	
2140	b	37	5.5	4.0	1.4	既「口」	
2141	b	69	6.8	3.4	2.4	頭「口」	
2142	b	18	3.8	2.6	1.5	體「無」	
2143	b	16	3.8	2.8	1.5	聽「口」	
2144	b	20	4.8	2.8	1.3	急「口」	
2145	b	30	4.5	3.3	1.4	觸「多」	
2146	b	88	6.5	5.1	2.2	□/角「口」/□ □/口	
2147	b	12	3.4	2.7	1.1	三「口」	
2148	b	39	6.1	3.8	1.4	得「口」/□□	
2149	b	26	4.9	3.3	1.5	手「口」	
2150	b	12	2.7	4.0	0.9	日「」	◇
2151	b	21	3.9	3.9	1.9	妙「」	◇
2152	b	33	3.8	3.2	2.2	是「」	◇
2153	b	9	3.1	3.0	1.1	帝「」	◇
2154	b	18	3.6	3.2	1.8	比「」	◇
2155	b	46	3.8	3.8	2.7	否「」	◇
2156	b	9	2.2	3.6	0.8	以「」	◇
2157	b	64	5.8	5.2	1.4	梅「」	◇
2158	b	9	3.2	2.7	0.9	吾「」	◇
2159	b	16	3.6	2.8	1.6	二「」	◇
2160	b	12	4.0	2.4	1.0	行「」	◇
2161	b	8	2.6	2.5	1.1	亦「」	◇
2162	b	8	4.0	2.3	0.5	人「」	◇
2163	b	23	2.9	2.8	1.9	身「」	◇
2164	b	11	3.3	3.0	1.0	紙「」	◇
2165	b	21	2.5	3.7	1.8	他「」	◇
2166	b	16	3.3	2.7	1.7	他「」	◇
2167	b	10	2.8	2.3	1.6	出「」	◇
2168	b	29	3.4	3.5	2.1	無「」	◇
2169	b	9	3.7	2.0	1.0	月「」	◇
2170	b	25	5.2	2.8	1.5	照「」	◇
2171	b	14	3.4	2.7	1.0	阿「」	◇
2172	b	13	3.8	3.0	1.0	現「」	◇
2173	b	26	4.5	2.9	1.3	愛「」	◇
2174	b	125	8.1	8.2	1.9	音「」	◇
2175	b	14	2.6	3.3	1.1	有「」	◇
2176	b	70	5.8	4.6	2.2	合「」	◇
2177	b	17	3.5	3.0	1.4	門「」	◇
2178	b	20	3.4	2.7	1.6	問「」	◇
2179	b	16	2.6	3.6	1.3	門「」	◇
2180	b	24	4.0	3.3	1.5	歲「」	◇
2181	b	29	3.7	3.0	1.9	知「」	◇
2182	b	10	3.7	2.7	0.7	研「」	◇
2183	b	7	1.9	2.8	0.9	知「」	◇
2184	b	7	2.9	2.1	0.9	術「」	◇
2185	b	11	3.6	2.4	1.1	法「」	◇
2186	b	12	2.3	3.5	1.2	產「」	◇

1887	b	6	3.0	2.0	0.9	舌	◎
1888	c	37	5.6	3.9	1.3	無/有余口(無)「堆 」-「飽」(無)	2
1889	c	40	6.1	3.2	2.1	病音「歎次當	3
1890	c	31	4.9	2.8	1.9	病音「此當	3
1891	c	59	5.7	4.3	1.9	無/是靠/供靠/ 無數「是靠/供靠/ 凡足/齊清	3
1892	c	40	5.1	4.2	1.8	何所「作便	4
1893	c	53	4.9	4.1	2.1	心和體「筋入肉	4
1894	c	68	5.6	3.7	2.4	紳/聲「聰得	4
1895	c	59	5.4	4.6	1.9	赤幹/八萬西「千 」/勢/赤	7
1896	c	114	8.4	5.1	2.2	所教之草「如你 山	7
1897	c	80	6.5	4.3	2.3	飲食「有無阿 」-「飮手」-「萬 」-「惡由也」	8
1898	c	101	6.8	8.2	2.4	蘇胃食「第五飲食 」/口歌「於其年日 月以既」	8
1899	c	49	5.4	3.9	2.0	十方...「世界「微 體」等/歌詠	9
1900	c	58	5.1	4.3	2.3	□□(兩頭)「如是 記「有何「□口咽 體」而詠	9
2001	c	38	4.5	3.7	2.1	寶「口	○
2002	c	20	4.3	3.4	1.9	舍「利	○
2003	c	54	4.8	3.6	2.8	寶「十...二口」 「記」	○
2004	c	31	3.4	2.9	1.7	口「	○
2005	c	21	4.0	2.8	1.5	不「及	○
2006	c	24	4.2	4.0	1.7	魚「口	○
2007	c	23	4.1	3.4	1.4	動「言	○
2008	c	27	3.6	2.0	1.7	畜「言	○
2009	c	58	5.9	3.1	2.6	口口「三「口」 「口」	○
2110	c	28	3.7	2.6	1.6	能開「為	○
2111	c	41	4.5	4.2	1.4	哉者「口」	○
2112	c	45	5.0	3.1	2.0	口「口」	○
2113	c	41	6.1	3.9	1.4	乘「口」	○
2114	c	67	6.2	3.2	1.9	無堵「口」	○
2115	c	39	4.8	2.8	1.9	無口「口」	○
2116	c	45	5.2	3.6	1.4	口口「在尼	○
2117	c	23	4.6	2.6	1.2	是諸「口」	○
2118	c	66	5.0	3.5	2.2	所口「口口口	○
2119	c	16	3.8	2.7	1.2	不「口	○
2220	c	14	4.8	2.8	1.2	乘「口」	○
2221	c	74	7.1	5.3	2.0	範	○
2222	c	21	3.5	3.4	1.3	德	○
2223	c	22	3.8	3.0	1.7	善	○
2224	c	11	3.5	2.3	1.0	言	○
2225	c	17	3.1	2.5	1.9	見	○
2226	c	19	4.1	2.8	1.3	範	○
2227	c	10	2.2	3.2	1.0	坦	○
2228	c	14	3.5	2.2	1.4	樂	○
2229	c	13	2.1	3.0	1.3	細	○
2230	c	12	3.9	3.3	0.8	帶	○
2231	c	13	3.0	2.2	1.4	體	○
2232	c	99	7.3	4.5	2.3	...	○
2233	c	9	3.0	2.1	0.9	...	○
2234	c	26	4.3	3.2	1.9	說	○
2235	c	24	4.2	3.2	1.4	舌	○
2236	c	20	4.5	3.3	1.2	無	○
2237	c	34	4.2	2.5	1.9	舞	○
2238	c	8	3.5	2.5	0.8	人	○
2239	c	8	3.6	2.7	0.7	能	○
2240	c	9	3.8	3.0	0.7	我	○
2241	c	29	4.0	3.8	1.7	節	○
2242	c	12	3.6	2.4	1.3	美	○
2243	c	43	5.4	2.6	1.7	以該「要「自「蔽	2

2366	d	28	3.7	2.8	2.2	不	○
2367	d	23	3.1	2.9	1.9	出	○
2368	d	7	2.7	1.9	1.6	小	○
2369	d	16	3.3	2.8	1.9	得	○
2370	d	23	4.1	3.5	1.7	半	○
2371	d	24	5.0	3.4	1.8	隨	○
2372	d	69	5.2	4.7	2.1	是	○
2373	d	18	3.8	3.3	1.3	無	○
2374	d	37	4.3	5.5	2.2	如	○
2375	d	24	4.3	3.0	1.8	是	○
2376	d	38	4.8	4.2	1.8	世	○
2377	d	27	4.8	3.0	1.4	現	○
2378	d	86	5.7	3.4	2.7	死	○
2379	d	19	2.5	2.2	1.2	難	○
2380	d	14	3.3	2.3	1.6	上	○
2381	d	26	3.7	3.2	1.7	若	○
2382	d	35	4.6	4.3	1.4	醫	○
2383	d	43	3.8	4.2	2.1	相	○
2384	d	30	3.7	3.4	2.2	目	○
2385	d	22	5.0	3.0	1.2	得	○
2386	d	7	2.3	2.3	1.2	所	○
2387	d	35	6.7	4.3	1.3	我	○
2388	d	7	2.3	2.3	1.2	力	○
2389	d	20	3.8	3.3	1.3	各	○
2390	d	27	3.7	3.2	1.4	利	○
2391	d	12	3.0	2.5	1.3	有	○
2392	d	34	4.7	2.7	2.4	跡	○
2393	d	15	3.7	2.8	1.1	丁	○
2394	d	62	6.8	4.3	2.1	便	○
2395	d	24	3.6	3.1	1.7	此	○
2396	d	19	3.5	3.0	2.0	為	○
2397	d	25	4.0	3.4	1.4	醫	○
2398	d	13	3.3	2.8	1.2	去	○
2399	d	24	4.3	2.9	1.3	法	○
2400	d	83	5.8	4.0	1.5	調	○
2401	d	24	2.8	4.8	1.5	法	○
2402	d	22	3.5	3.2	1.4	善	○
2403	d	21	3.3	3.3	1.9	常	○
2404	d	10	3.3	2.4	0.9	許	○
2405	d	24	4.8	3.2	1.5	種	○
2406	d	8	2.6	2.3	1.1	往	○
2407	e	45	5.1	4.0	1.7	始於「今日」	○
2408	e	144	7.3	5.1	2.4	而流「諸善攝羅「及 賢「聞者為之說為 為說」	T 諸善87-113
2409	e	220	9.7	6.5	2.1	若聞聲而起「修及 諸善」而「能信是 十六」善攝所說 「法」	T 通攝67
2410	e	25	4.4	3.3	1.3	所不「應照」	T
2411	e	102	8.8	3.8	2.1	「一六沙彌」具 足行「道」現在 「十」方各得成 「正覺」	T 通攝67
2412	e	42	4.3	3.7	2.0	度「芳」攝取	T
2413	e	166	8.1	6.0	2.0	持「我」足「說經」 「現身」「他口」 (□○□□□)「因時 說心印」	B 諸善87-113
2414	e	474	11.7	9.5	3.1	絕「無生」「始 至今」「復說法」「經 「攝取其中」此經語 「若有能」持別持 「若能」「持別持」	11
2415	e	93	7.4	5.3	2.2	善若「人」人供養 (□○□□□○□經 語「攝取等義」)	14
2416	e	416	10.4	9.6	3.6	不信「不○□○ (人相)」不「不相」 □○不「不相」是 經□○(後)阿闍 「持三藏」三「持三 時隨「三」何地「以 神通」)「智	14
2417	e	123	9.2	5.6	1.5	體「施」「方財」 「十方」	15

				佛語「謨」/密訛分別說	
2418	e	84	6.7	5.7	1.5 此「經赤」□□ /□□(度赤是)
2419	e	285	10.8	8.5	2.8 佛前南○□○ 中/○○作/○○○ /○○為/○○事○○出/○出
2420	e	211	10.6	5.7	2.1 疾枳「○□○
2421	e	68	6.2	4.5	2.0 香持「○□○
2422	e	89	6.0	5.3	2.3 趣○○○/○○/○ ○/○○○
2423	e	78	6.2	5.9	1.5 □○/是持「○□○ /○○
2424	e	38	5.5	4.2	1.3 世「法○/○□○ /○○
2425	e	75	5.5	5.4	1.7 此經「○□○ /○○
2426	e	84	7.7	5.4	1.9 人二□○
2427	e	44	4.3	3.2	2.5 不不「○數
2428	e	64	8.8	4.9	1.3 世○○通口偶 「○己從○/○○○
2429	e	139	8.2	5.3	3.6 □○○○/○國土 「○○○經/○○○ /○○○○
2430	e	63	4.9	4.4	2.5 供口○專「謨○
2431	e	23	4.0	3.3	1.5 蔽「○
2432	e	38	4.4	3.8	1.9 謩「佛
2433	e	31	4.0	3.0	1.3 方「○
2434	e	15	3.1	3.0	1.3 ○「念
2435	e	39	5.1	3.0	1.6 □○「徵說○
2436	e	16	4.5	2.5	1.4 若加「○
2437	e	23	3.9	2.8	1.5 由「○
2438	e	22	5.0	3.3	1.0 圓 ◇
2439	e	13	3.4	2.4	1.4 舍 ◇
2440	e	29	4.9	2.3	2.1 他 ◇
2441	e	69	6.2	4.3	3.0 要 ◇
2442	e	27	3.2	3.1	2.5 無 ◇
2443	e	15	3.7	2.0	1.1 諒 ◇
2444	e	43	4.0	6.0	1.5 世 ◇
2445	e	10	2.8	2.4	1.2 舊 ◇
2446	e	49	5.3	3.9	2.0 若 ◇
2447	e	84	6.1	6.0	2.0 貢 ◇
2448	e	48	5.8	3.5	1.7 呂 ◇
2449	e	27	4.7	3.0	1.0 慢 ◇
2450	e	9	3.0	2.3	0.8 足 ◇
2451	e	9	3.2	1.9	1.0 人 ◇
2452	f	153	9.3	6.1	2.1 有六百萬僧「恒河 沙等衆佛、滅度後是「法圓法○□○ ○□○(者在那邊)
2453	f	34	4.6	3.4	1.6 露持「○
2454	f	26	4.2	3.4	2.0 盒「○
2455	f	43	5.9	4.8	0.9 □召/名○/○「○ ○○
2456	f	29	3.7	4.3	1.8 聰 ◇

$i_1 = 10, i_2 = 3201$

No.	深度	重數	長徑	短徑	厚凸	文字	品	備考
2457	a	10	3.5	2.4	1.0	「口」		
2458	a	43	4.8	3.8	2.0	走	◇	
2459	a	13	2.8	3.2	1.1	化	◇	
2460	a	44	5.8	3.8	1.8	形	◇	
2461	a	52	5.5	3.8	1.9	龜	◇	
2462	b	39	3.4	3.3	2.3	三百「人」口「口」	□	
2463	b	17	3.9	2.5	1.3	諸「口」		
2464	b	19	3.4	2.7	1.3	安「口」		
2465	b	11	3.6	2.3	1.0	一		
2466	b	16	2.8	2.6	1.8	純	◇	
2467	b	12	3.3	2.8	1.1	通	◇	
2468	b	32	2.2	3.2	1.4	無	◇	
2469	b	12	2.8	2.8	1.5	妙	◇	

2470	b	10	3.0	2.5	0.8	凡	◇
2471	b	18	3.0	2.7	1.4	受	◇
2472	c	40	4.1	4.2	1.3	「方」及四「綱上」/下赤	7
2473	c	35	5.0	3.7	1.8	「修行者」	12
2474	c	326	9.6	7.2	4.0	「方丘」/人口 「山丘」/人口 「山」/及近畿 「説教師」/無有性 「人」/善惡有	14
2475	c	167	7.5	5.4	3.4	「我」/□□□ 「口」/不	
2476	c	189	6.5	6.5	3.7	「綱」/□□/度□□/ □□/□□/走□ □/□□	
2477	c	29	4.4	2.9	1.7	「道」	
2478	c	24	4.3	3.6	1.8	「勞苦」/口以	
2479	c	35	3.9	3.7	2.3	時「口」	
2480	c	27	3.6	3.3	1.8	「讀」/口	
2481	c	16	3.6	2.3	1.1	「便」/口	
2482	c	7	3.2	2.3	0.9	諸	◇
2483	c	20	3.2	2.5	1.6	「合」	◇
2484	c	8	3.0	2.5	0.8	天	◇
2485	c	21	3.0	3.6	1.4	「爾」	◇
2486	d	22	3.6	2.8	1.7	赤	◇
2487	e	70	5.7	4.3	2.4	「彰化謹」/若備□口 □□□(鹿野無量)	2
2488	e	20	4.1	3.2	1.9	「世」/辱	3
2489	e	35	3.7	3.6	1.5	「乃」/得成	7
2490	e	38	5.5	4.4	2.4	「禍滅」/「已各」 作是	7
2491	e	56	5.0	4.5	1.8	「眾食」/食自消資	8
2492	e	48	5.0	5.8	1.3	「安忍」/放督者	14
2493	e	52	4.8	4.3	2.0	「猶子」/象「虛」	19
2494	e	49	5.6	3.6	2.0	「復視」/「脫」	24
2495	e	76	5.2	4.5	2.0	「口」/□□/「口」 /□□	
2496	e	57	5.6	5.6	1.9	「口」/「口」/是「口」	
2497	e	43	5.5	3.6	2.6	為「口」	
2498	e	16	3.5	3.1	1.2	「南」/以	
2499	e	48	4.6	4.6	1.8	「時」/□□	
2500	e	113	6.3	6.7	3.6	「□□□/□□□和 『□□□/□□□』」	
2501	e	33	5.7	3.9	1.2	「叔善」/□□	
2502	e	813	12.0	6.7	4.0	「和」/「大藏」/□ /「阿○□□」/「口」 /是□/「□□」/□□	
2503	e	291	9.0	7.1	3.2	「齊」/□□□/□□□ /□□□/□□□	
2504	e	165	10.1	5.7	2.6	「如」/「開闢」/□ □□/「□□」/「所」 /□□□	
2505	e	85	6.7	4.8	2.6	「口」/「貧」/□□ /「□□」/□□□	
2506	e	44	5.8	4.3	1.3	「死」/「追」/「口」 /□	
2507	e	22	5.2	2.7	1.3	「口」/「口」	
2508	e	60	5.7	4.5	1.5	「佛」/「佛」/□/□	
2509	e	35	4.1	3.2	2.1	「能」	
2510	e	41	3.9	4.4	2.0	「口」/「手」/百	
2511	e	34	4.1	4.0	2.3	「口」/「僧」/「土」	
2512	e	32	6.3	3.6	1.5	「口」/「口」	
2513	e	25	3.8	3.6	1.5	「二見」/說	
2514	e	38	4.8	3.3	1.9	「口」/「口」	
2515	e	27	4.4	3.7	1.8	「諸」/「口」	
2516	e	34	4.8	3.2	2.0	「口」/「口」	
2517	e	35	5.3	3.4	1.8	「口」/「口」	
2518	e	34	4.9	3.0	2.3	「口」/「法」/□	
2519	e	27	4.6	2.8	1.4	「為」/子	
2520	e	36	4.3	3.0	1.8	「音」/「口」	
2521	e	18	3.3	3.3	1.1	「者」/「口」	
2522	e	28	3.9	3.5	1.3	「口」/「口」	

2523	e	26	3.9	3.1	1.4	「口不講」/「口」	
2524	e	20	4.0	3.5	1.1	「詮」/「口」/「日」/「口」	
2525	e	246	11.0	5.0	3.3	諸御田日小注「口」 □□□	
2526	e	76	6.1	4.4	2.6	得能「口」	
2527	e	46	7.0	3.1	1.7	「口」/「口」/「口」	
2528	e	21	3.9	3.6	1.4	「有」無	
2529	e	30	4.9	3.0	1.8	「有」/「口」	
2530	e	62	6.2	4.0	2.6	亦如現「之二口」 「口」	
2531	e	23	3.7	3.5	1.3	得	◇
2532	e	24	4.0	3.3	1.6	現	◇
2533	e	18	5.2	2.2	1.0	自	◇
2534	e	18	4.4	3.2	1.0	種	◇
2535	e	39	5.0	3.6	1.7	萬	◇
2536	e	16	2.8	2.2	1.8	濟	◇
2537	e	21	4.5	2.8	1.5	正	◇
2538	e	10	3.5	2.2	1.1	六	◇
2539	e	13	3.4	2.5	1.5	種	◇
2540	e	21	4.3	3.0	1.6	常	◇
2541	e	22	3.4	3.1	1.9	大	◇
2542	e	9	3.5	2.2	1.2	無	◇
2543	e	25	3.7	3.2	1.4	量	◇
2544	e	18	3.3	2.9	1.3	牠	◇
2545	e	7	3.1	2.3	0.8	香	◇
2546	e	31	4.5	2.8	1.5	賈	◇
2547	e	80	5.4	5.4	2.3	佛	◇
2548	e	28	4.5	3.2	1.5	試	◇
2549	e	30	4.9	3.5	1.4	將	◇
2550	e	12	4.1	2.4	0.9	羅	◇
2551	e	12	3.3	2.3	1.5	人	◇
2552	e	9	3.3	2.3	0.9	翫	◇
2553	e	20	3.3	3.2	1.9	三	◇
2554	e	12	1.9	2.8	1.5	熟	◇
2555	e	14	2.5	3.6	1.2	女	◇
2556	e	16	3.3	2.5	1.8	三	◇
2557	e	9	2.6	2.5	1.2	所	◇
2558	e	67	7.1	5.0	1.8	續	◇
2559	e	20	2.6	4.0	1.4	興	◇
2560	e	9	2.8	2.2	1.2	曾	◇
2561	f	46	6.6	3.9	1.3	法「口」/「佛」 「始」/「口」/「後其」	
2562	f	16	4.4	2.6	1.5	不口「口」	
2563	f	26	4.3	2.9	1.3	諸種「口」	
2564	f	187	8.6	7.0	2.1	口至「口」	
2565	f	26	3.5	2.5	1.6	由一「口」	
2566	f	5	2.5	2.3	0.6	處s	◇
2567	f	30	3.2	3.1	2.5	伐	◇
2568	f	26	3.9	3.8	1.5	趙	◇
2569	f	18	3.6	2.7	1.8	爲	◇
2570	f	22	2.8	4.6	1.5	於	◇
2571	f	8	3.3	2.0	1.0	度s	◇
2572	f	4	1.9	2.5	0.5	入	◇
2573	f	32	3.6	3.8	1.5	俗	◇
2574	f	51	7.6	2.1	2.5	範	◇
2575	f	19	3.6	2.9	1.2	作	◇
2576	f	9	3.5	2.6	0.8	人	◇
2577	g	58	6.6	4.9	1.5	脚「口」/「是」/「口」 「口」	
2578	g	16	4.0	3.0	0.9	富	
2579	h	27	4.1	2.8	2.0	往「口」/「口」	
2580	h	52	5.4	4.4	2.1	生「死」/「口」	
2581	h	56	5.3	3.6	2.0	天下「口」	
2582	h	18	3.8	2.1	1.6	過	◇
2583	h	61	5.6	4.8	2.2	得	◇
2584	h	21	3.6	2.1	2.0	何	◇
2585	h	44	4.8	4.2	2.1	租	◇
2586	h	19	3.9	3.3	1.3	餘	◇

L1-10 i-角グリッド

品目	密度	重能	接能	短能	厚さ	文字	品 値 考
2587	b	485	12.5	7.4	3.1	所持等「法瓦」/深 同分別「加也今當」 「口」留時世	15 法經時

					波波／等一心聯繫 いの／時世尊／是 □□□(04509)你 勝者再我今於／此 大歡喜言「汝等」	等」とある
2588	b	26	5.8	4.7	0.7 人間「香知否	19
2589	b	31	5.8	3.4	1.3 来前「□口	
2590	b	23	4.3	3.3	1.1 索	◇
2591	b	14	3.9	2.7	0.7 露	◇(04507-112)
2592	b	34	4.7	3.3	1.8 方	◇
2593	c	113	9.6	4.1	2.3 亦次為「據我誠 度「後若持此「經 為「人說	11
2594	c	24	3.4	2.6	1.6 佛「□	
2595	c	22	5.8	3.1	2.1 百千「萬「諸「何	
2596	c	34	3.4	3.1	1.6 供養「□口	
2597	c	29	5.3	3.2	1.4 術術「□口	
2598	c	10	2.8	1.7	1.3 亂「當	
2599	c	26	4.1	3.0	1.5 香氣「□口	
2600	c	49	5.0	3.8	2.1 指導「□口/□/□ □口	
2601	c	339	11.8	7.7	3.6 諸法「般中/□/□ □口「□/□/□/□/□/□ □口「為	
2602	c	51	4.3	3.8	3.2 不「□口	
2603	c	37	4.7	2.8	2.2 善「□口	
2604	c	48	5.4	4.9	1.6 佛道「□	
2605	c	18	3.9	2.6	1.6 聞「□	
2606	c	17	3.8	2.3	1.4 佛「□	
2607	c	57	4.8	4.3	1.6 佛「據「□/□口	
2608	c	29	4.9	2.3	1.8 緣「□/□口	
2609	c	34	3.8	4.6	1.9 諦「又「口欲	
2610	c	45	5.2	4.1	1.9 諦「又「口欲	
2611	c	35	4.3	2.6	1.8 善「□	
2612	c	43	5.3	3.6	2.1 之可「如「及	
2613	c	39	4.6	3.7	1.8 般「釋	
2614	c	55	6.2	4.3	1.7 此「□/□口	
2615	c	8	2.3	2.0	1.6 菩「	◇
2616	c	12	3.3	2.7	0.9 佛「	
2617	c	44	4.8	4.0	2.2 惑「	◇
2618	c	63	6.0	4.8	1.7 同「	
2619	c	30	3.8	3.2	1.9 愚「	◇
2620	c	43	4.0	5.0	1.7 佛「	
2621	c	9	3.4	2.6	0.7 佛「	◇
2622	c	15	3.3	2.3	1.7 力「	
2623	c	98	4.9	4.2	2.1 是「	◇
2624	c	34	3.8	3.5	2.6 遊「	
2625	c	19	3.4	2.6	1.8 得「	◇
2626	c	12	3.8	2.8	0.7 的「	◇
2627	c	24	3.8	3.6	1.7 諦「	
2628	c	19	4.3	2.0	1.7 生「	◇
2629	c	27	4.5	4.2	1.3 因「	
2630	c	47	4.8	4.3	1.8 同「	
2631	c	19	4.3	2.9	1.1 大「	
2632	c	39	5.8	5.8	1.1 是「	◇
2633	c	17	3.2	2.2	1.7 痘「	◇
2634	c	31	3.8	3.2	2.3 無「	◇
2635	c	15	3.7	2.5	1.3 氏「	◇
2636	c	30	4.8	4.8	1.8 纔「	◇
2637	d	46	4.6	3.3	2.3 分別「談三「	2
2638	d	52	5.2	4.2	1.9 是「兩乘「	2
2639	d	143	6.7	5.8	3.2 欲界「隨緣「衆生「 ／實生「造於	3
2640	d	90	5.0	4.4	2.1 □「之光明「□/□ (照)	6
2641	d	45	6.0	3.8	1.7 作是「言曉「戲 「丈大何為「	8
2642	d	130	8.0	5.6	2.7 慈喜「一切不生 「□(照)「□(心)「 「十方大菩薩「 「應無能行「盡	14
2643	d	142	10.1	6.1	2.8 □開口/□/□口 「求「□/□/□/□	

2644	d	278	8.1	7.9	3.4	□□□/□□□/ □□□
2645	d	37	4.5	3.2	1.8	箇□□
2646	d	22	4.3	3.2	1.4	子□
2647	d	14	2.9	2.0	1.6	不□
2648	d	25	4.2	3.1	1.5	𠙴□
2649	d	48	8.4	4.3	1.8	𠙴□□
2650	d	81	6.4	3.5	3.0	□□□□
2651	d	51	6.8	3.3	2.0	𠙴□□
2652	d	37	5.0	3.7	2.3	□□□
2653	d	23	4.8	2.3	1.6	𠙴□
2654	d	55	5.8	4.0	2.2	□□□□□/□□ □□□□□
2655	d	38	5.9	3.6	1.7	箇□□
2656	d	59	4.8	4.2	1.8	𠙴□□□/□□ □□□
2657	g	75	9.2	5.2	2.5	箇□□/𠙴□□ □□□
2658	d	151	6.1	7.2	3.4	𠙴□/□□□/□ 具□/□□□/□□
2659	d	13	3.1	3.2	1.0	𠙴□
2660	d	26	3.9	4.2	1.4	𠙴□
2661	d	23	4.3	3.1	1.8	𠙴□
2662	d	88	7.7	3.8	2.6	𠙴□□
2663	d	84	7.0	3.1	2.6	□□□/𠙴□□□
2664	d	46	6.5	4.0	1.4	具□□
2665	d	52	6.3	4.0	2.5	□□□□
2666	d	41	5.3	3.1	2.1	𠙴□
2667	d	29	5.4	2.8	1.5	箇□□
2668	d	23	4.3	3.0	1.5	箇□
2669	d	55	6.6	4.7	2.1	不□
2670	d	36	4.6	3.6	1.6	𠙴□
2671	d	99	6.8	5.2	1.8	□□□/𠙴□□□ □□□
2672	d	33	5.0	3.4	1.8	箇□□
2673	d	32	4.2	3.2	2.0	𠙴□□
2674	d	34	4.8	3.0	2.2	𠙴□
2675	d	35	4.2	4.2	2.1	𠙴□
2676	d	34	5.3	2.8	1.6	箇□□
2677	d	39	4.7	3.5	2.0	以□□
2678	d	15	3.7	2.3	1.4	𠙴□
2679	d	25	4.0	3.2	1.8	箇□
2680	d	27	3.9	3.4	1.7	箇□
2681	d	29	3.2	3.5	1.8	𠙴□
2682	d	28	4.2	3.8	1.7	往□
2683	d	14	3.6	3.1	1.1	𠙴□
2684	d	31	3.3	3.3	2.1	𠙴□
2685	d	24	3.6	3.0	2.2	箇□
2686	d	15	4.1	2.3	1.2	𠙴□
2687	d	10	3.0	2.4	1.1	所□
2688	d	80	7.1	5.5	1.5	是□/經□/𠙴□/𠙴□ □□□/□□□
2689	d	31	3.9	3.3	2.0	箇□
2690	d	48	5.6	3.1	1.9	箇□□
2691	d	15	3.9	3.3	1.1	𠙴□
2692	d	41	3.8	2.9	1.9	箇□□
2693	d	111	9.2	3.6	2.8	𠙴□
2694	d	37	5.7	3.3	1.6	箇□□
2695	d	63	6.7	4.3	1.3	箇□□
2696	d	20	4.2	2.1	1.8	箇□□
2697	d	71	5.9	5.4	2.8	箇□□/𠙴□/𠙴□ □□□
2698	d	14	3.9	3.1	1.1	𠙴□
2699	d	38	4.6	3.6	1.8	𠙴□□
2700	d	31	4.6	3.4	1.8	𠙴□
2701	d	21	3.5	3.2	1.3	𠙴□
2702	d	49	5.4	4.1	2.0	箇□□
2703	d	141	6.5	6.2	1.7	箇□
2704	d	91	6.0	5.5	2.4	箇□
2705	d	14	3.5	3.1	0.9	箇□
2706	d	19	3.9	3.1	0.8	箇□
2707	d	17	3.5	2.9	1.5	箇□

2706	d	24	3.8	3.2	1.7	亦	◎
2709	d	27	3.8	3.6	2.1	言	◎
2710	d	14	4.1	3.5	0.3	其	◎
2711	d	76	4.4	6.8	1.5	往	◎
2712	d	14	3.7	2.9	1.1	王	◎
2713	d	30	4.2	3.0	1.9	曷	◎
2714	d	12	2.7	2.3	1.8	上	◎
2715	d	55	4.9	4.6	2.2	謂	◎
2716	d	22	4.5	3.7	1.8	法	◎
2717	d	36	4.7	2.9	2.3	灰	◎
2718	d	15	3.6	2.3	1.5	始	◎
2719	d	16	2.8	2.1	1.2	其	◎
2720	d	12	3.8	2.6	1.2	佛	◎
2721	d	36	2.2	4.2	2.2	一	◎
2722	d	21	4.8	3.7	1.6	梯	◎
2723	d	19	3.3	3.1	1.4	灰	◎
2724	d	14	3.7	2.1	1.2	呼	◎
2725	d	24	4.3	3.1	1.5	如	◎
2726	d	16	2.8	2.4	1.5	造	◎
2727	d	14	2.7	2.7	1.8	丁	◎
2728	d	16	4.3	1.9	1.2	熟	◎
2729	d	87	5.8	4.7	2.1	午	◎
2730	d	187	6.9	7.1	2.0	第	◎
2731	d	15	3.6	2.8	1.5	生	◎
2732	d	16	3.7	2.3	1.6	爾	◎
2733	d	21	3.7	4.7	0.9	迄	◎
2734	d	36	2.6	3.7	2.6	人	◎
2735	d	18	3.7	3.0	1.3	翁	◎
2736	d	7	1.7	2.8	0.8	而	◎
2737	d	12	3.8	2.9	0.8	爾	◎
2738	d	32	4.8	3.6	1.6	也	◎
2739	d	11	3.1	2.7	1.1	能	◎
2740	d	13	3.6	2.4	1.3	佛	◎
2741	d	19	4.1	2.7	1.3	万	◎
2742	d	18	4.8	2.9	1.6	無	◎
2743	d	29	3.5	3.6	2.6	一	◎
2744	d	26	3.3	2.7	2.2	里	◎
2745	d	29	4.7	4.3	1.2	後	◎
2746	d	31	4.9	3.2	2.1	卉	◎
2747	e	75	5.7	5.6	2.3	我／等／不 ^知 「我」 ／是／佛	4
2748	e	202	8.4	6.7	2.8	菩提記／般若經／ 俱羅經／事之／復 闡提／佛	8
2749	e	65	5.3	5.0	2.0	佛前／廣口微尼 「佛氏」 ^{世間}	10
2750	e	201	9.9	5.6	2.6	阿彌陀／迦陵頻迦 ／黑羅摩摩／迦葉／ 口口口（人夫等） 千口口（刀劍）／佛以 一切	11
2751	e	45	9.0	3.8	1.3	遂有「大法者	12
2752	e	121	7.9	5.0	2.1	時轉輪／王起禮 「佛氏」 ^{世間} 時性	14
2753	e	422	11.2	9.1	3.4	所義近處／兩例分 「謂詔法／無 ^其 」是 實非實／是 ^其 非生 「在於無 ^其 」修紙其 心安住／不 ^可 如頭 佛山／觀一切法	14
2754	e	225	9.5	8.3	3.1	——語吾／所欲得 「謂 ^其 其數」無 有量／如恒沙等 ／成有大功德	15
2755	e	35	4.7	3.1	1.3	號佛「圓	
2756	e	41	4.7	4.5	1.7	□○「諸	
2757	e	30	4.6	3.1	1.8	是「大乘	
2758	e	32	3.8	3.8	1.9	不可「口	
2759	e	22	4.3	3.5	1.9	善如「佛	
2760	e	47	5.8	3.5	2.2	言「□○	
2761	e	57	4.9	4.2	2.2	實用「□○□○	
2762	e	58	8.2	3.6	2.1	□○「口	
2763	e	120	6.9	6.3	1.6	□○「三藏」 ^{三藏} 「三菩提」 ^{三菩提}	
2764	o	75	5.9	4.8	2.9	圓口「不口	

2765	e	53	5.0	4.2	2.1	不口「此□○」 □東「□□	
2766	e	61	5.7	4.4	1.9	□東「□□	
2767	e	136	8.6	5.5	3.1	□中「□□□」 復口	
2768	e	40	4.4	3.8	2.0	方便口「若二	
2769	e	49	5.3	3.9	1.9	□我今「□○□○	
2770	e	33	4.0	3.1	2.2	西「	◎
2771	e	15	3.8	2.7	1.0	佛「	◎
2772	e	7	3.3	2.3	0.6	若「	◎
2773	e	29	3.6	3.9	1.7	昔「	◎
2774	e	34	4.6	3.0	2.3	昨「	◎
2775	f	45	5.1	4.6	1.7	十六王「子清」 時「二轉	7
2776	f	31	4.7	3.9	1.5	□千「見作□	
2777	f	18	3.1	2.8	1.8	若「□	
2778	f	67	5.6	4.3	2.3	利「	◎
2779	f	21	4.6	2.5	1.8	諦「	◎
2780	f	16	2.9	2.3	1.0	惟「	◎
2781	f	15	3.5	2.5	1.3	安「	◎

L1-10 n-①グリッド

No.	深度	重集	長徑	短徑	厚さ	文字	品考
2782	a	63	5.6	4.0	2.0	謂 ^{所為}	3 国B67-113
2783	a	46	5.4	4.4	1.8	熟人「教 ^人 」	3
2784	a	163	8.4	5.6	2.7	爾時婆娑 [」] 青蘿崖 河 [」] 源 ^(way) 「 [」] 第二馬 苦難春 [」] 風帆 [」]	13 法華經で は「摩訶薩 [」] 「乃大來說 青蘿嘲 [」] 青蘿 薩 [」] 與二馬 青蘿香 [」] 俱 供 [」] とある
2785	a	36	5.2	2.9	1.4	□「法	
2786	a	22	3.4	3.6	1.7	悉「□	
2787	a	66	6.6	5.1	2.1	舍「□」	
2788	a	66	5.6	4.6	2.1	冉「□	
2789	a	32	5.7	2.9	1.9	□法「□○	
2790	a	21	3.2	3.6	1.6	離「□	
2791	a	36	4.0	4.1	1.4	成口「小□	
2792	a	32	4.1	3.8	1.6	威得「□	
2793	a	45	6.0	3.9	1.2	□□□○「現□」 □	
2794	a	32	4.7	3.1	1.9	佛「□○」	
2795	a	114	7.1	5.6	2.1	佛「說「□○」□	
2796	a	90	5.6	5.4	2.4	所說「□○」 「□○」 □	
2797	a	54	4.8	3.8	1.9	□大「□	
2798	a	29	4.9	3.5	1.7	同佛「海	
2799	a	29	3.9	3.2	2.0	無「捨「□	
2800	a	22	4.3	3.6	1.3	問「□	
2801	a	7	2.8	2.2	0.8	說「所	
2802	a	12	2.4	2.4	1.2	切「	◎
2803	a	59	5.7	4.5	1.3	古「	◎
2804	a	111	6.7	5.5	2.6	無「	◎
2805	a	11	3.8	1.8	1.4	大「	◎
2806	a	8	3.2	2.8	0.7	是「	◎
2807	a	17	3.9	1.8	1.8	說「	◎
2808	a	14	3.3	2.6	1.8	為「	◎
2809	a	8	3.3	2.3	1.3	念 ^o 「	◎
2810	a	56	5.8	4.7	2.0	亦「	◎
2811	a	18	4.3	3.5	1.1	經「	◎
2812	a	16	4.8	3.3	0.9	天「	◎
2813	a	15	2.8	2.6	1.7	問「	◎
2814	a	52	6.5	4.3	2.0	佛「	
2815	a	12	2.3	3.0	1.3	至「	
2816	a	18	3.3	2.0	1.8	然「	
2817	a	5	2.7	1.4	1.2	住「	
2818	a	7	1.6	2.2	1.6	方「	
2819	a	16	2.3	3.1	1.8	南「	
2820	a	8	3.1	2.6	0.7	佛「	
2821	a	14	3.6	2.3	1.6	皆「	◎
2822	a	13	3.3	2.9	1.2	諦「	◎
2823	a	13	4.3	3.0	0.7	月「	◎
2824	a	36	5.1	3.2	1.7	妙「	◎

2922	a	8	3.3	2.5	0.8	摩	○
2923	a	10	3.0	2.5	1.2	恩	◇
2927	a	7	2.7	2.0	1.4	興	◇
2928	a	7	2.7	2.1	1.0	為	◇
2929	a	32	4.1	4.8	1.5	普	◇
2930	a	70	5.5	4.8	2.9	義	◇
2931	b	78	5.7	4.4	2.8	筠「赤筠」 「筠蕪」	2
2932	b	56	5.3	4.3	2.2	筠重「無質」	2
2933	b	41	6.3	3.8	1.7	受「假以」	3
2934	b	47	5.4	3.2	3.3	技「苟」	3
2935	b	35	4.8	4.5	1.6	方「以求」	4
2936	b	31	4.3	3.2	1.7	自「待死」	4
2937	b	(9)	4.8	3.0	1.3	是「上」 「草」	5
2938	b	49	5.6	3.4	2.3	德「急憲」	7
2939	b	87	5.8	3.8	1.6	執「道」 「古由」	7 回取67
2940	b	59	4.5	4.0	2.2	師「裁」 「等勞」	7 回取67
2941	b	62	5.2	4.6	2.1	名「口○」 「諸」 「其得」 「寿命」	9
2942	b	38	5.3	3.0	2.3	寶「相」	11
2943	b	130	7.8	6.3	2.2	而不「若」 「起而知」 「各」 「心苦當」	17
2944	b	105	6.7	5.1	1.7	口○口○	
2945	b	31	4.8	3.1	1.8	俄「口○」	
2946	b	15	4.2	2.5	1.2	而「口○」	
2947	b	39	4.2	3.3	2.6	為「口○」	
2948	b	30	3.8	3.1	2.3	捨「作」 「法」	
2949	b	27	4.5	3.4	1.8	以「口」	
2950	b	44	1.5	3.9	2.0	得「一切」	
2951	b	31	3.7	3.1	2.0	次「口○」	
2952	b	108	19.2	4.9	1.8	是「口○○」 「得○」 「口○○」 「口○○」	
2953	b	60	6.7	4.2	1.9	口長「音見」	
2954	b	93	5.7	5.7	2.8	香「口○○」 「由」 「口○/人」	
2955	b	69	5.2	4.4	2.6	得「口○」	
2956	b	42	4.9	3.8	1.7	種「口○」	
2957	b	62	5.9	4.3	2.1	其於「口○他」	
2958	b	41	5.5	3.5	2.1	若「開」 「口○福」	
2959	b	48	4.3	4.1	2.4	賣「口○」	
2960	b	29	4.2	3.3	1.9	使「口○」	
2961	b	28	4.8	3.2	1.6	百「有」	
2962	b	63	7.6	4.4	1.9	當作為「口○」 「口○」	
2963	b	23	1.3	3.7	1.2	成「有」	
2964	b	124	7.3	5.3	2.7	倘「口○」 「口○」 「口○」	
2965	b	28	5.4	4.3	1.8	此「口○」	
2966	b	41	4.4	3.8	2.3	若有「口○」	
2967	b	25	4.9	3.2	1.9	不「口○」	
2968	b	39	4.9	3.4	2.0	而「之口○」	
2969	b	25	3.8	3.3	1.6	無「口○」	
2970	b	39	4.3	3.6	2.0	「口○」	
2971	b	17	3.6	3.1	1.4	孟「口○」	
2972	b	45	4.8	4.5	1.8	口○「口○」	
2973	b	25	4.7	3.0	1.9	若為「物」	
2974	b	26	4.9	2.7	2.0	之「口○」	
2975	b	17	3.8	3.2	1.9	於「出」	
2976	b	35	3.6	3.3	1.9	先「口○」	
2977	b	31	3.7	3.3	2.0	自「口○」	
2978	b	16	4.3	2.5	1.5	所「人」 「口○」	
2979	b	18	3.5	2.4	1.5	無「上」	
2980	b	19	2.9	3.0	1.3	成「傳」	
2981	b	66	4.5	5.5	2.0		◇
2982	b	28	3.3	3.3	1.7	者	◇
2983	b	25	4.0	3.2	1.6	倍	◇
2984	b	27	3.9	3.4	1.9	顧	◇
2985	b	22	2.5	4.2	1.6		◇
2986	b	15	3.7	2.4	1.2	說	◇
2987	b	11	3.0	3.0	1.0	彼	◇
2988	b	61	5.4	3.8	1.7	猶	◇
2989	b	27	4.0	4.3	1.2	耽	◇
2990	b	19	3.7	2.5	1.5	惹	◇

2991	b	26	4.7	3.2	1.5	𠙴	○
2992	b	20	4.3	2.4	1.6	為	◇
2993	b	13	2.5	3.5	1.2	是	◇
2994	b	33	4.9	3.3	1.6	世	◇
2995	b	29	4.8	3.1	1.6	窮	◇
2996	b	56	5.0	4.9	1.8	靈	◇
2997	b	6	2.7	1.8	1.2	上	◇
2998	b	20	3.7	3.3	1.7	三	◇
2999	b	15	3.1	2.2	1.7	所	◇
3000	b	20	4.5	3.0	1.4	延	◇
3001	b	22	3.3	3.0	2.1	在	◇
3002	b	13	2.5	2.3	2.0	自	◇
3003	b	12	2.3	2.8	1.7	良	◇
3004	b	17	4.0	2.6	1.8	寶	◇
3005	b	9	2.9	1.8	1.2	赤	◇
3006	b	10	2.7	2.6	0.8	若	◇
3007	b	14	3.0	2.5	1.5	中	◇
3008	c	36	5.2	2.5	1.8	志因「能『圓』諸	1
3009	c	47	5.9	4.2	1.6	無「有」者「𢵤」 「過」者「不」受彼	2
3010	c	28	5.1	2.4	1.5	微收「等號」	3
3011	c	39	5.5	3.4	1.6	謹禮「神」	3
3012	c	63	4.8	3.6	1.9	整「一」日之	4
3013	e	83	6.2	4.8	1.7	本為「分別」族 「口」口族(等相当)	4
3014	e	61	5.7	4.7	2.1	中受旁「然」 「速」	4
3015	e	119	9.1	5.1	1.6	乃教我「等今」 「日」得永曾「有」 「声先」	4
3016	e	70	5.6	4.0	1.7	底度「比丘盡	7
3017	e	63	6.2	4.1	2.2	聖「以奉」 「所」 「以者「則」是「人」	10
3018	e	40	5.3	4.1	2.0	以妙妙「色聲」	10
3019	e	130	8.0	4.8	2.1	默言「戲器「威 「貌」 「毫兒」	10
3020	c	193	7.6	7.4	1.9	種中種「在」 「復口○」 「真上」 「復口○」 「守廟」 「要宜」 「說始 「於今」 「日乃」 「取底」	14
3021	c	246	10.7	5.4	3.4	智慧極「自在如 道之」 「諸佛弟子」 「高遶之力」 「證佛 底」	15
3022	c	27	4.1	3.3	1.6	曷「而」 「智」	15
3023	c	23	4.5	3.2	1.5	自「了」 「覺」	15
3024	c	45	5.1	3.1	2.6	證「口」	15
3025	c	73	5.9	5.4	2.0	佛頂「口○」 「口法」 「口○」	15
3026	c	26	3.5	3.2	1.7	實	15
3027	c	41	6.4	4.8	1.4	佛「口」 「瓶」	15
3028	c	24	4.0	3.5	1.7	無「題」	15
3029	c	35	4.5	3.8	1.8	衆「口」	15
3030	c	98	6.6	5.5	2.2	口形「口○口○」 「皆 「口○口○」	15
3031	c	24	5.2	3.5	1.0	持「口」	15
3032	c	26	4.2	3.3	1.8	善「口」	15
3033	c	23	4.5	2.3	1.7	為「口」	15
3034	c	59	4.2	4.0	2.5	持「口」 「持」 「口」	15
3035	c	16	4.4	2.2	1.5	「人」	15
3036	c	10	3.0	2.1	1.2	持「口」	15
3037	c	15	4.2	1.8	1.3	住「口」	15
3038	c	17	3.2	2.8	1.4	「口」	15
3039	c	39	3.7	3.1	2.0	當「佛」 「佛」	15
3040	e	41	5.0	3.5	1.3	持「口」 「口」 「口」	15
3041	c	26	5.5	3.4	1.2	持「口」	15
3042	c	14	3.3	2.5	1.2	集「果」	15
3043	c	13	3.9	2.4	1.3	「首」	15
3044	c	97	6.9	4.6	2.8	所持「口○方「口○」 「口○」	15
3045	c	92	6.9	5.0	1.2	口為「復口○」 「口○」	15
3046	c	48	5.0	3.3	2.4	此「口」 「實口」 「口陰」	15
3047	c	53	4.1	3.3	2.1	明「照」	15

3074	d	20	4.3	4.7	1.4	爲	◇
3075	d	11	2.0	2.3	1.8	無	◇
3076	d	52	4.8	4.0	1.7	眞	◇
3077	d	34	5.2	2.8	1.8	爲	◇
3078	d	15	2.7	2.5	1.7	天	◇
3079	d	17	3.9	3.1	1.4	號	◇
3080	d	45	5.6	3.3	1.9	無	◇
3081	d	34	4.8	3.2	1.8	尋	◇
3082	d	18	3.3	3.3	1.4	得	◇
3083	d	11	3.0	2.5	1.3	尋	◇
3084	d	11	3.3	2.3	1.4	赤	◇
3085	d	55	4.8	4.3	2.5	摩	◇
3086	d	24	4.3	3.3	1.4	二	◇
3087	d	23	3.3	3.1	1.6	陀	◇
3088	d	8	3.1	2.0	1.2	謐	◇
3089	e	56	5.4	3.1	2.3	微	□□□
3090	e	25	4.2	3.2	1.7	微	◇

L1-10 ②グリッド

No.	深度	重量	長径	短径	厚さ	文字	品 偏 考
3091	a	70	6.8	4.9	1.6	幽見消／底「是 我」等／答	3
3092	a	55	5.8	4.7	1.8	幽見消／底「是 我」等／由	7
3093	a	156	7.1	6.3	1.9	「過百千」ノ彌 木口(會)「足是相 □□(會)大	7 国語67
3094	a	45	4.6	3.0	1.9	一□□	
3095	a	30	3.8	3.4	1.8	問「如口」	
3096	a	43	4.2	3.4	2.3	求「口」	
3097	a	21	3.7	3.1	1.8	無	◇
3098	a	35	4.2	3.0	1.8	穢	◇
3099	a	8	3.2	2.6	0.6	女	◇
3100	a	21	3.7	3.4	1.3	像	◇
3101	a	19	4.5	2.8	1.3	備	◇
3102	a	10	4.0	3.0	0.7	大	◇
3103	b	75	9.1	6.6	0.7	正通「口」	!
3104	b	31	4.3	3.2	1.9	舉足「安行	3
3105	b	27	9.8	4.4	1.4	「玄微跡」ノ彌常 微「玄微」 ^ト 柔軟」と あらん	3 国語67
3106	b	32	3.2	2.9	2.8	曉「ヤ道」	7
3107	b	190	7.8	5.7	2.4	鄙「感應」ノ人為 家名「御分取」 ^ト 說是經常「在大東 中央故	13
3108	b	172	8.1	5.4	2.9	能知「來無上」 ^ト 「之慧何」況廣聞	17
3109	b	18	4.6	2.6	1.2	人「口」	
3110	b	23	4.4	3.2	1.6	疑「家」	
3111	b	32	4.4	3.7	1.9	口事「是」 ^ト 欠缺あり	
3112	b	24	4.9	3.5	1.1	奉哉「口」	
3113	b	31	4.0	3.5	1.6	所「合口」	
3114	b	14	3.7	2.4	1.3	約「口」	
3115	b	60	5.9	4.8	1.4	炳「口」	
3116	b	18	3.3	3.0	1.8	王	◇
3117	b	32	7.0	4.5	1.2	合	◇
3118	b	29	3.4	3.1	1.5	亂	◇
3119	b	20	3.5	2.9	1.8	無	◇
3120	b	26	4.7	3.3	1.3	役	◇
3121	b	19	3.3	2.9	1.1	備	◇
3122	b	11	3.7	2.5	1.0	是	◇
3123	b	91	6.5	4.5	2.5	曲	◇
3124	b	31	3.1	4.7	1.9	衆	◇
3125	b	44	4.7	4.1	1.8	持	◇
3126	b	19	4.8	3.1	1.5	穢	◇
3127	c	13	2.9	2.7	1.5	逃	◇
3128	c	13	4.2	2.6	0.5	王	◇

L1-10 ③グリッド

No.	深度	重量	長径	短径	厚さ	文字	品 偏 考
3129	b	26	4.2	3.7	1.2	孝為「虚	3
3130	b	41	4.7	3.3	2.2	曉「拂	3
3131	b	66	5.2	4.1	2.2	長者「見子」	3

3132	b	110	6.6	5.6	2.0	口(麻)拂「麻衣 常「香」ノ貯作詔	10
3133	b	101	7.8	3.9	2.5	為水拂「道版「於 空」生」	15
3134	b	48	5.3	4.4	2.1	乃布「能生」	17
3135	b	27	4.0	3.2	2.3	波「口」	
3136	b	27	4.5	3.6	2.1	打「口」	
3137	b	52	5.9	3.6	2.4	吾闇口「難中口」	
3138	b	133	7.3	5.8	2.5	等善能「ノ往通」 拂「□□□□□□□ 口」	
3139	b	67	6.1	5.1	1.9	載「三善能「得 心」□□□□□□□ 口」	
3140	b	47	4.9	4.4	2.2	折「己口」此加	
3141	b	37	5.2	3.6	1.9	曉「拂」	
3142	b	13	3.8	2.4	1.1	曉「口」	
3143	b	26	3.9	3.6	1.7	度「口」	
3144	b	37	4.8	4.0	1.9	口「助」	
3145	b	48	6.1	4.0	1.6	拂	◇
3146	b	67	6.2	4.2	2.2	念	◇
3147	b	18	3.6	3.8	1.1	母	◇
3148	b	13	3.0	2.0	1.6	合	◇
3149	b	40	4.8	4.3	1.3	手	◇
3150	b	9	3.5	2.3	1.0	因	◇
3151	b	27	4.7	2.6	1.7	會	◇
3152	b	13	4.3	2.8	1.1	説	◇
3153	b	40	4.3	3.8	2.7	臣	◇
3154	b	21	3.6	3.0	1.8	念	◇
3155	c	69	5.9	4.8	1.9	以拂「拂」法「門」 「宣」於「佛道」	2
3156	c	49	5.1	3.6	2.1	脚踏「壓拂」	3
3157	c	111	5.4	4.5	3.1	我今「體」「口」 「傳拂」「法者」	9
3158	c	60	5.8	3.9	2.3	不口他「口」	
3159	c	97	9.1	6.6	1.8	口(國)拂「口」 如口此「□□□	
3160	c	36	5.6	3.9	2.1	為「□□□」	
3161	c	23	1.0	3.5	1.8	基「口」	
3162	c	42	6.3	2.3	1.8	物女「北足尼」	
3163	c	20	3.7	2.8	1.2	之「口」	
3164	c	54	6.2	3.9	1.8	口「□□」千枝 「威拂」	
3165	c	10	3.3	2.6	1.7	不「知」	
3166	c	37	5.2	3.9	1.7	口「口」	
3167	c	25	4.8	2.4	1.6	口見「宅」中	
3168	c	42	3.9	3.5	2.3	受「諸」	
3169	c	37	4.9	3.3	1.7	口「口」	
3170	c	43	5.8	4.0	1.7	天龍「□□□」口「 口」	
3171	c	12	3.1	2.1	1.0	惡「□口」	
3172	c	18	3.4	3.0	1.0	禰	◇
3173	c	33	4.5	3.1	1.8	惡	◇
3174	c	20	5.2	3.2	0.7	所	◇
3175	c	12	3.3	3.2	1.1	罪	◇
3176	d	62	6.6	4.8	1.9	無能「義」的「諸」 大「渠」	1
3177	d	56	4.3	3.6	2.7	分別「亂」諸果	2
3178	d	35	4.7	3.9	1.8	利益「一切」	3
3179	d	31	5.0	3.6	1.7	須燒「我及」	3
3180	d	59	6.0	3.8	2.3	忿然「所止」 「故在」	4
3181	d	67	6.2	4.8	1.9	滅大乘「法」今「 此釋」	4
3182	d	34	4.8	3.7	1.4	是我「方便」	5
3183	d	56	5.5	3.3	1.9	度說「無能」	6
3184	d	26	5.4	3.2	1.8	厭已「參詒」	7
3185	d	49	4.8	4.7	2.0	大乘「法」而自「 淨地土」	8
3186	d	38	5.9	5.6	1.3	義王「若」苦能 「闍耶」法華經「聖 法」	10 国語67-133
3187	d	150	7.6	5.8	2.3	說法是「諷化人間 法信受「隨順不 說若說「法者在着」	10
3188	d	271	10.5	8.2	1.9	能「以平等」大「口」	11 国語67-133

				□(復数)瓦/麻姑傳 所「遺念」妙法華 經為大/衆義細 處	
3189	d	50	5.6	4.3	2.1 諸物用「說廣」 12
3190	d	33	4.3	3.3	1.6 為向「殺吉」 14
3191	d	69	6.9	4.3	1.8 天火牛「方便」 17
3192	d	172	8.6	7.4	2.9 動為「一切恵生」/ 喜見者「麻及」/衆 苦難「諸賢開」
3193	d	69	6.4	3.0	2.3 景口「洪口化「次 通「方口」
3194	d	46	5.6	3.8	1.8 前若「口○」
3195	d	80	6.3	4.3	2.3 極深「口○口○」
3196	d	129	5.9	5.8	3.0 假如「口○口○」 /□○
3197	d	21	3.3	3.2	2.0 我「我」
3198	d	15	3.8	2.6	1.2 長「口」
3199	d	24	4.6	4.2	1.8 象口「尊」
3200	d	29	5.7	4.2	1.7 ○「口○」
3201	d	32	5.2	4.3	1.6 僧時「世尊」
3202	d	26	4.8	3.6	1.6 口刑「成口「口○」 □○
3203	d	12	3.1	2.5	1.3 加「佛」
3204	d	21	4.2	3.5	1.5 得「口○」
3205	d	33	4.1	3.7	2.0 意「口○」
3206	d	46	4.6	3.5	2.3 望「聽」
3207	d	37	4.8	3.2	2.0 余口「口○」
3208	d	31	4.8	3.5	1.8 ○「口○」
3209	d	70	6.2	4.7	2.3 五口「口○口○」 /□○○
3210	d	21	4.3	3.3	1.5 得「口○」
3211	d	28	4.6	3.5	1.6 如來「口○」
3212	d	17	3.9	3.3	1.1 若「作」
3213	d	32	4.2	3.4	1.6 我「我」
3214	d	41	4.9	3.7	2.2 是「口○」
3215	d	46	4.6	4.2	2.0 使「口○口○」 /□○/□○
3216	d	13	4.0	2.6	1.3 告「告」
3217	d	47	4.5	4.5	2.2 戰「戰」
3218	d	40	5.8	4.5	1.5 圓「圓」
3219	d	14	3.0	2.3	1.4 林「林」
3220	d	17	3.3	2.5	1.6 圓「圓」
3221	d	73	5.4	5.1	2.0 無「無」
3222	d	29	5.2	3.4	1.7 義「義」
3223	d	16	2.7	3.7	1.3 無「無」
3224	d	53	5.8	4.3	2.2 使「使」
3225	d	13	3.6	3.0	0.8 找「找」
3226	d	7	3.0	2.8	0.9 王「王」
3227	d	46	4.7	4.0	2.4 參「參」
3228	d	21	4.2	3.0	1.2 相「相」
3229	d	38	5.6	3.8	1.8 新「新」
3230	d	21	3.8	4.1	1.1 章「章」
3231	d	160	6.0	4.7	2.4 否「否」
3232	d	25	3.5	4.3	1.7 是「是」
3233	d	26	3.5	3.4	1.7 爭「爭」
3234	d	87	5.6	5.2	2.3 稀「稀」
3235	d	42	4.3	5.3	1.3 中「中」
3236	d	43	6.0	2.5	2.1 亦「亦」
3237	d	13	3.6	2.5	1.3 為「為」
3238	d	29	4.6	3.6	1.3 人「人」
3239	d	20	4.0	3.4	1.5 等「等」
3240	d	26	4.0	3.5	2.2 不「不」
3241	d	18	3.6	2.6	1.3 喪「喪」
3242	d	9	3.8	2.8	0.6 罷「罷」
3243	d	14	3.5	2.3	1.7 蒼「蒼」
3244	d	26	4.0	3.2	2.5 其「其」
3245	d	88	5.6	5.4	1.5 大「大」
3246	e	29	4.2	3.2	1.6 電鬼「口○」
3247	e	29	4.2	3.6	1.6 靜「口○」
3248	不明	33	4.3	3.4	1.8 ○「口○」 /於於「於」
3249	不明	75	8.8	4.1	2.1 心替「口得」 /三口○○
3250	不明	77	8.9	4.8	2.3 口或「成口○口○」 /□○

				□漢	
3251	不明	23	3.9	2.8	1.7 比丘「比丘尼」
3252	不明	29	3.9	3.3	1.8 為「中」
3253	不明	60	5.5	4.0	1.9 □中客「□口」 /若「若」
3254	不明	12	2.8	2.1	1.7 傷「傷」
3255	不明	10	2.4	2.3	1.4 大「大」
3256	不明	11	3.5	2.3	1.3 傷「傷」
3257	不明	17	2.3	2.8	1.7 前「前」

L1-10 一-③グリッド

No.	面積	重量	長径	短径	厚さ	文 字	品 値 号
3260	b	43	5.7	4.3	1.2 賢「諭」/惡「惡」 ?		
3261	b	27	4.0	3.1	1.8 善利「佛」 ?		
3262	b	26	4.8	3.6	1.4 □往「口○」		
3263	b	46	4.7	3.3	1.9 聲「口○」		
3264	b	44	4.7	4.2	1.8 言「口○」/佛「自」 □○		
3265	b	44	5.2	3.8	2.5 而「口○」 □○		
3266	b	42	6.0	3.1	1.8 離「口○口○」 □○		
3267	b	19	4.6	3.6	1.3 諦「細口○」		
3268	b	48	4.5	4.6	1.8 □/苦惱「口○」		
3269	b	16	4.0	2.7	1.1 遠「口○」		
3270	b	11	3.6	2.3	1.3 三「三」		
3271	b	28	4.2	3.7	1.7 痘「痘」		
3272	b	31	3.8	4.1	1.3 合「合」		
3273	c	244	12.0	6.4	2.2 衛時地方「國土諸 米善「麻」/摩訶薩 迦「八叉樹沙數」		15
3274	d	49	4.8	4.3	2.6 出口「点所「口○」		
3275	d	75	5.4	4.6	2.9 哲業「赤口說「三 口○」		

L1-10 二-②グリッド

No.	面積	重量	長径	短径	厚さ	文 字	品 値 号
3276	b	46	5.1	4.3	1.8 無欲「佛」 ?		3
3277	b	46	6.1	3.7	1.8 道成院「鈞弘多」 ?		4
3278	b	58	5.9	3.3	1.6 百千「佛誕又」 ?		8
3279	b	93	5.2	4.7	2.6 慈悲「不稱「名 體觀」/其竟又「亦 不「生」」		14
3280	b	51	4.9	4.4	1.9 謙「門」		
3281	b	35	4.2	3.0	1.9 一「諾」		
3282	b	66	5.9	3.8	2.0 心善「口○口○」		
3283	b	25	4.4	3.8	1.3 佛「口○」		
3284	b	48	4.2	3.9	1.8 □人「所」		
3285	b	30	4.6	3.8	1.7 道口「口○」		
3286	b	6	2.7	2.4	0.7 言「行」		
3287	b	9	3.3	2.3	0.9 諦「口○」		
3288	b	26	3.1	2.3	2.0 見「口○」		
3289	b	31	4.7	3.6	1.8 □此「於流」		
3290	b	21	4.1	2.9	1.6 櫛「口○」		
3291	b	9	2.9	2.5	1.0 身「口○」		
3292	b	18	3.4	2.7	1.5 而「口○」		
3293	b	33	3.9	3.3	2.1 死「口○」		
3294	b	26	4.8	2.5	1.8 亦「口○」		
3295	b	7	3.6	2.2	1.0 午「口○」		
3296	b	39	6.9	3.9	1.7 故「口○」		
3297	b	24	4.6	2.8	1.5 父「口○」		
3298	b	9	2.8	2.3	1.0 衆「口○」		
3299	b	24	3.6	2.9	1.8 得「口○」		
3300	b	26	3.9	3.2	1.8 聰「口○」		
3301	b	29	5.1	3.4	1.5 但「口○」		
3302	b	19	3.8	3.3	1.1 勿「口○」		
3303	b	16	3.9	2.7	1.3 廉「口○」		
3304	b	41	5.6	3.9	1.5 佛「口○」		
3305	b	17	4.6	3.6	1.8 來「口○」		

300	b	12	3.0	2.0	1.6	是	○
3007	c	31	5.4	3.8	1.3	樂者「小法」	4
3008	d	39	5.8	3.5	1.6	忘之「因陋就	③
3009	d	49	4.7	3.5	2.4	行持「進」定	5
3110	d	129	8.2	5.8	2.0	「惡魔」梵沙門「門告密安、題面	7 国語111
3111	d	63	6.2	4.4	1.7	「與」報「否」、「福」供養持「經者	10 国語112-113 法華經は「與樂」とあるが、書き位置に正確か?
3112	d	94	6.5	4.0	1.7	「捨財」一心「合掌」而作	13
3113	d	92	6.5	4.1	3.1	三名「□□□」	
3114	d	120	6.7	6.0	2.1	阿口「人」、「佛」	
3115	d	74	6.1	5.0	2.1	若「其口」	
3116	d	69	6.1	4.6	2.3	「□□」、「□□」	
3117	d	46	5.9	3.7	1.9	恐「身」	
3118	d	34	4.8	3.3	1.7	無「□」	
3119	d	18	3.3	2.8	1.6	死「空」	
3200	d	26	4.8	3.6	1.1	口應「□」	
3201	d	47	5.1	4.7	1.4	妙「□」	
3202	d	35	4.8	3.4	1.9	言「□」「方便」	
3203	d	22	4.3	3.0	1.1	歡「□」不	
3204	d	17	4.1	2.5	1.0	「□」 「無」	
3205	d	24	4.0	2.9	1.3	謗「□」	
3206	d	22	4.3	3.1	1.8	而「□」	
3207	d	13	3.5	3.3	0.7	無「□」	
3208	d	29	4.4	2.6	1.9	以「廣」	
3209	d	28	3.7	3.1	1.8	樂「若」	
3210	d	30	4.9	2.8	1.7	體「□」	
3211	d	10	3.4	2.6	1.8	足「□」	
3212	d	18	4.2	2.9	1.2	成「佛」	
3213	d	63	6.3	4.3	2.3	無「□」	◇
3214	d	43	4.0	3.9	2.2	圓「□」	◇
3215	d	56	5.3	4.0	2.3	念「□」	◇
3216	d	56	4.5	3.3	2.5	算「□」	◇
3217	d	41	5.0	3.8	2.0	音「□」	◇
3218	d	44	5.7	3.7	1.8	法「□」	◇
3219	d	52	5.4	3.6	1.9	願「□」	◇
3220	d	33	4.7	4.7	1.4	樂「□」	◇
3221	d	29	4.1	3.2	1.8	二「□」	◇
3222	d	30	4.3	3.8	1.7	身「□」	◇
3223	d	19	3.7	3.4	1.6	之「□」	◇
3224	d	26	3.6	3.3	1.3	得「□」	◇
3225	d	15	2.4	2.6	1.2	往「□」	◇
3226	d	23	4.3	2.8	1.8	俄「□」	◇
3227	d	42	4.8	3.8	1.6	飭「□」	◇
3228	d	35	5.1	3.2	1.5	淨「□」	◇
3229	d	23	3.6	2.8	1.7	遮「□」	◇
3230	d	15	2.0	3.0	1.7	隨「□」	◇
3231	d	20	3.8	3.0	1.3	若「□」	◇
3232	d	8	2.5	3.2	0.7	半「□」	◇
3233	e	37	3.6	3.0	2.0	「廣」之「生」	3
3234	e	39	4.9	3.8	1.7	子「□」愛「□」	4
3235	e	25	3.8	3.4	1.6	「一」少「幼」	③
3236	e	34	4.7	3.6	1.4	無「□」能「□」	
3237	e	21	3.7	3.1	1.4	行「□」	
3238	e	32	4.2	2.9	1.9	樂「□」	
3239	e	45	4.3	3.0	2.0	廣「說」「□」	
3240	e	43	5.6	3.9	1.6	樂華「□」	
3241	e	22	3.8	3.4	1.7	俄「□」	
3242	e	27	4.2	3.3	1.6	即「□」	
3243	e	23	2.7	4.6	1.4	亦「□」	
3244	e	47	5.2	4.0	2.0	若「□」	
3245	e	28	4.4	3.0	1.6	如「□」	
3246	e	12	3.8	2.0	1.3	詔「□」	
3247	e	16	4.0	3.2	1.0	神「□」	
3248	e	15	3.1	2.3	1.9	當「□」	
3249	e	25	4.3	3.1	1.9	惡「□」	
3250	e	16	3.6	2.5	1.6	當「□」	
3251	e	20	4.5	3.2	2.0	摩訶「闍耶」「法」	5

					王		
3372	f	36	4.3	3.5	2.1	作拂「□□	
3373	f	41	4.6	3.3	2.2	遞	○

L-1-10 E-③グリ

No.	深度	重量	長径	短径	厚さ	文字	品	備考
3374	c	36	4.4	3.4	2.1	往回「□□		
3375	c	24	3.8	2.8	2.0	傳	◇	

1.1=10, k=0.491

品 名	規 格	重 量	長 度	徑 徑	厚 度	文 字	品 種	考 證
3376	d 109	7.4	3.9	1.7	子是「口」○裏/□□			
3377	d 49	1.9	3.8	2.1	口「口」			
3378	d 50	1.9	4.7	1.7	如「口」○□/○□/○□			
3379	d 87	8.4	5.2	1.4	無「口」○□○□/○□○□/○□○□			
3380	d 30	5.7	3.2	1.6	羅「口」			
3381	d 32	1.8	2.5	1.9	成「口」			
3382	d 29	4.8	3.3	1.7	口			

1.1=15, i=2グリ

No.	深度	重量	长径	短径	形态	文字	品	備考
32883	—	1.0	3.3	2.9	1.9	而「門」		

1-3-15 三-220

No.	深度	重歛	長様	短様	厚さ	文字	品	備考
238.4	m	21	3.3	2.5	2.1	右	△	

SKo=4

No.	深度	重量	長絆	短絆	厚さ	文字	品	備考
32885	—	19	3.7	2.6	1.6	「萬		

5Ko-5

No.	深度	重量	长径	短轴	厚度	文字	品	備考
3386	—	27	5.1	3.4	1.5	三拍口三「三口」		
3387	—	36	4.4	3.9	1.7	口法「□□		
3388	—	13	3.6	2.5	1.5	牛	△	

北西風

3410	-	119	7.3	5.4	1.8	□□□/□□□		
3411	-	46	4.6	3.8	2.4	余時「口尊」		
3412	-	30	3.1	3.3	2.4	譽「口」		
3413	-	43	5.4	4.0	1.8	權「口信」		
3414	-	35	4.9	3.5	1.5	其「口」		
3415	-	22	4.4	2.9	1.4	諾「口」		
3416	-	32	4.7	2.9	1.9	問「口」		
3417	-	26	4.9	3.2	1.6	我「口」		
3418	-	19	3.3	2.0	1.9	干「口」		
3419	-	17	3.7	2.8	1.1	多「為」		
3420	-	26	3.3	3.1	1.8	大「口」		
3421	-	38	4.2	3.9	1.7	若「口」		
3422	-	13	2.9	2.1	1.6	赤「口」		
3423	-	10	3.0	1.9	1.4	則「之口」		
3424	-	5	2.7	2.3	0.7	佛「口」		
3425	-	16	3.3	2.9	1.4	當「得」		
3426	-	20	4.6	3.3	1.4	使「」	◇	
3427	-	31	3.7	2.7	1.6	出「口」	◇	
3428	-	34	4.7	3.6	2.2	常「」	◇	
3429	-	40	4.9	4.2	1.7	使「」	◇	
3430	-	9	2.3	1.9	1.6	田「」	◇	
3431	-	29	4.8	4.2	1.3	實「」	◇	
3432	-	33	4.4	3.9	1.6	法「」	◇	
3433	-	16	2.7	3.1	1.6	七「」	◇	
3434	-	11	3.5	2.7	1.2	女「」	◇	
3435	-	21	3.5	2.6	1.8	衆「」	◇	
3436	-	66	5.3	4.7	2.2	雷「」	◇	
3437	-	32	4.0	3.4	2.2	日「」	◇	
3438	-	33	4.3	3.3	1.2	是「」	◇	
3439	-	14	2.6	2.2	1.6	任「」	◇	
3440	-	41	5.2	4.0	1.6	消「」	◇	
3441	-	33	4.0	5.0	1.8	仁「」	◇	
3442	-	38	5.3	3.0	1.9	勤「」	◇	
3443	-	62	6.3	3.6	2.7	苦「」	◇	
3444	-	34	4.5	3.7	1.8	偽「」	◇	
3445	-	11	3.2	2.9	1.2	大「」	◇	
3446	-	164	6.7	5.9	2.1	即「」	◇	
3447	-	29	5.7	4.7	1.5	說「」	◇	
3448	-	31	5.0	3.7	1.2	身「」	◇	
3449	-	13	3.8	2.5	1.2	大「」	◇	
3450	-	41	4.5	4.0	1.8	詔「」	◇	

南京區

No.	深度	重量	長徑	短徑	厚度	原字	文字	品 值 考
2451	-	90	4.9	4.0	2.1	口	民「開口」	
2452	-	20	4.1	3.5	1.6	舌「」		
2453	-	22	4.8	3.1	1.4	口	圓「口」	
2454	-	11	2.1	2.5	1.5	宮「」	◇	
2455	-	47	6.0	4.2	1.3	蓋「」	◇	
2456	-	14	3.7	3.1	1.2	万「」	◇	
2457	-	29	3.6	3.4	1.2	鄙「」	◇	
2458	-	136	8.2	5.9	2.2	觀「」	◇	

湘西區

No.	深度	重量	長徑	短徑	厚度	原字	文字	品 值 考
2459	-	38	4.7	3.1	2.2	舌「」	行織「堂」	3
2460	-	40	4.9	3.8	1.8	赤「」	口	
2461	-	59	5.8	4.5	1.9	故「」	口口	
2462	-	39	4.2	3.3	1.9	訛「」	口	
2463	-	38	5.9	3.0	1.8	德「」	不「」	
2464	-	58	5.0	4.2	1.9	舌「」		
2465	-	46	5.6	3.3	2.3	五百「」	說「」	
2466	-	33	3.8	3.1	2.3	大「」	通「近」	
2467	-	25	4.2	3.3	1.3	鹽「」	口「」	
2468	-	82	6.2	5.5	2.1	丙「」	口「」	
2469	-	26	4.2	2.1	1.6	出「」	口「」	
2470	-	59	4.6	3.9	2.3	舌「」	口「人」	
2471	-	28	4.2	2.9	2.1	門「」	德「」	
2472	-	158	7.5	6.1	2.2	說「」		
2473	-	22	4.3	2.9	1.4	鹽「」		
2474	-	28	5.2	3.9	1.1	及其「」	口「象」	
2475	-	28	4.1	3.4	1.2	汝「」	無「」	

3476	-	22	3.6	2.8	1.6	法「」		
3477	-	62	5.9	3.2	2.4	口絕「」	/□□	
3478	-	48	5.5	3.6	2.3	所「」	俗「」	
3479	-	43	4.9	3.3	2.0	各「」	十方「」	
3480	-	27	4.9	2.1	1.5	他「」		
3481	-	39	4.8	2.9	1.6	供「」		
3482	-	19	3.9	3.2	1.7	於「」	大「集」	
3483	-	27	4.8	3.6	1.6	捷「」	口口「」	
3484	-	50	5.9	5.0	1.6	復口「」		
3485	-	19	4.5	3.2	1.3	獄「」		
3486	-	9	3.0	2.1	1.2	三口「」		
3487	-	13	3.9	3.0	0.8	行「」		
3488	-	20	3.8	3.0	1.5	算「」	○	
3489	-	10	3.0	2.7	1.4	他「」	○	
3490	-	28	4.8	3.3	2.0	滔「」	○	
3491	-	28	4.2	3.2	2.0	得「」	○	
3492	-	79	8.2	4.1	2.1	範「」	○	
3493	-	18	3.8	2.5	1.2	相「」	○	
3494	-	19	3.2	3.3	1.2	途「」	○	
3495	-	10	3.4	2.0	1.1	丈「」	○	
3496	-	29	3.9	3.5	1.7	詎「」	○	
3497	-	11	3.6	2.3	1.3	鷹「」	○	
3498	-	10	3.3	2.8	1.2	不「」	○	
3499	-	29	4.1	3.6	1.6	劍「」	○	
3500	-	5	1.9	2.7	0.9	日「」	○	
3501	-	20	4.2	2.8	1.5	中「」	○	
3502	-	15	4.3	2.7	1.1	元「」	○	
3503	-	9	2.5	2.0	1.3	穆「」	○	
3504	-	10	3.0	2.3	1.4	爾「」	○	
3505	-	10	2.3	2.3	1.7	德「」	○	
3506	-	5	1.9	2.7	0.9	日「」	○	
3507	-	12	2.6	2.0	1.6	法「」	○	
3508	-	9	2.6	2.6	1.3	設「」	○	
3509	-	8	3.0	2.4	1.0	若「」	○	
3510	-	11	3.1	2.0	1.4	八「」	○	

地点 不明

No.	深度	重量	長徑	短徑	厚度	厚S	文 字	品 值 考
3511	-	41	4.4	3.6	2.0	堅強「」	三思道「」	2
3512	-	49	4.6	3.6	2.6	若闇「」	法「」	2
3513	-	57	5.2	4.3	1.9	諸「」	厥「」	春「」漢「」千萬「」
3514	-	31	3.8	2.6	1.9	人生「」	死戰「」道「」	2
3515	-	61	5.6	2.1	2.0	飾悉「」	知是「」以「」	2
3516	-	67	9.4	4.1	2.4	無數「」	法門「」	2
3517	-	37	5.4	3.1	1.4	詩「」	昔來「」	3
3518	-	50	7.0	3.1	1.6	門等「」	無中生「」	3
3519	-	24	4.5	2.1	1.7	為火「」	所「」燒「」	3
3520	-	66	7.2	3.8	1.8	是時長「」	者「」而作「」是「」全「」	3
3521	-	95	5.2	4.9	1.2	諸如是「」	益「」我「」然「」弱「」	3
3522	-	93	6.3	5.0	2.0	謂「」約之「」	上法「」世「」疑是「」	3
3523	-	21	5.4	4.2	0.7	食「」也「」張「」性「」	施「」作「」	4
3524	-	26	4.2	3.1	1.7	無能「」無為「」		4
3525	-	185	7.2	6.1	3.2	商「」估賣「」人無「」	口「」口「」口「」口「」(廣州有方言)	4
3526	-	51	4.8	4.6	1.9	欲富猶躍「」	即促座「」	4
3527	-	90	6.7	5.3	2.1	長者「」有智「」無「」	「」口「」口「」口「」(今人用術語)	4
3528	-	36	5.1	3.6	1.3	為本「」莫宜「」	我今「」	4
3529	-	79	8.1	3.9	2.1	拔者「」拔之「」	「」口「」口「」口「」(拔者意指所拔)	4
3530	-	34	4.8	3.9	2.1	今為「」故等「」		5
3531	-	21	4.5	3.3	1.3	求甚「」上乘「」		5
3532	-	36	4.6	4.1	1.3	阿修「」羅達「」		6

3533	-	45	4.3	2.9	2.6	以為「往徵」其地 「平定」	6
3534	-	72	6.4	5.0	1.7	了速當法深入深 定	7
3535	-	46	5.8	3.4	1.4	弱下口(6)「以方便 力」	7
3536	-	104	7.0	5.0	2.4	弱/天王「俱罷 「佛」/已作/各是 「言」(=)	7 00087-113
3537	-	43	7.4	3.2	1.3	梵天王、「心同聲 」	7
3538	-	69	8.1	3.6	2.4	大般若「音」應極 」	7
3539	-	50	8.2	3.5	2.4	劫火「時十六 」	7
3540	-	112	8.2	3.6	2.7	釋迦牟尼「史□○ (有音)」是人「唯 生滅度」	7
3541	-	51	6.1	3.8	1.9	龍藏法泡「□□□ (垂門的)□□□(復 闡)」	7
3542	-	72	4.6	4.4	2.2	此以方「便力」「□ □/□○/□□(惟化 所成)」	7
3543	-	100	5.9	4.8	2.1	般若「眾不「復 過前」	7
3544	-	45	5.4	5.3	1.4	不復「圓法「常 行」、「不善事」	7
3545	-	103	7.9	5.7	1.4	大□○□○(弟子子) 不□○□○/□□○ (佛子)能知如「第 心之難」/告摩訥 「加惡」	8
3546	-	135	7.3	5.8	1.9	何漏盡「自在者 」/作「忘後」/等 般若「得」	8
3547	-	63	6.1	2.6	2.6	詔汝「得大 神「□○□○(遍四 周)」	8
3548	-	53	6.3	4.3	1.2	愚於「佛崩「得受 」/記起	8 00087-113
3549	-	45	5.9	4.0	1.3	國「為衣」/食「放 物力」	8
3550	-	102	7.0	5.1	1.8	過阿彌陀「祇欲乃成 」/等「正覺當」/放 大光明(月)「星」	8
3551	-	115	8.7	5.6	1.9	持□(8)忘「不知 覺」、「菩薩阿羅漢」 (應)道自/□(應)	8
3552	-	40	8.2	3.1	1.6	長身「常慾」見	8
3553	-	39	8.2	2.7	1.9	亦如「是」/般若 「圓滿」/圓食 「自當」/復「如是」	8
3554	-	85	7.6	5.2	1.6	詔「圓滿」/圓食 「自當」/復「如是」	8
3555	-	64	5.9	4.1	1.7	白毫龍「臂「圓」 「丸」	8
3556	-	42	5.7	3.9	1.4	持「四」/無能 (應)道自/□(應)	8
3557	-	41	5.6	3.4	1.0	是「既已「起遊 <td>8</td>	8
3558	-	80	6.4	4.3	2.1	持「今」/復「我 今無」/復「疑」	9
3559	-	157	10.9	4.3	2.2	在生王如來無「 (應)亦為此而作 」/長身是「已復 」/得得□□○(應) 多羅「集三菩	9
3560	-	122	6.9	4.6	2.4	能法「持「□○□ (應)法」阿難	9
3561	-	45	4.7	3.9	1.8	持「佛」/心之「所 」/告	9
3562	-	99	7.1	4.7	2.4	何以善若「菩」男 子「善女人」/法華經 「知」	10
3563	-	74	8.2	4.3	2.4	般若「諸「知」 「是人」/阿	10
3564	-	118	7.9	5.1	1.9	皆持「此經此經 」/圓「因」/令再久 住」/其有「俱罷 」	10
3565	-	239	9.8	6.0	2.4	當受人「願」/令再久 住」/其有「俱罷 」/此經法「者」/因供	11

				「唐模為襯」供表象 身		
3593	-	96	7.3	5.6	2.8 與知「東安惡」口 □「口○曉」	24
3594	-	106	7.2	4.6	2.1 今妙「吉善薩」 「摩訥」 ² 是缺憾	24
3595	-	89	7.2	4.5	1.8 三味「法華三味」 「淨德」 ² 三	24
3596	-	49	4.9	4.5	0.9 □無「上道」 ③	
3597	-	45	4.8	3.7	1.2 慶婆「上道」 ² 婆 ②	
3598	-	36	6.5	3.6	1.7 道智「開闢」 ②	
3599	-	60	5.5	4.4	2.1 未来「口○曉」俱「正 遍」 ² 知明	
3600	-	41	4.1	3.6	1.8 大口「口」	
3601	-	56	5.4	4.1	2.1 他口「口○口○口」	
3602	-	41	4.4	4.0	1.8 教無「口○」	
3603	-	26	3.9	2.9	1.9 痘「兩」	
3604	-	34	4.1	3.6	2.9 三十	
3605	-	36	5.1	3.1	1.9 □口「大口」	
3606	-	34	3.6	2.8	2.4 傷「有」	
3607	-	40	3.6	2.3	1.8 便作「口」	
3608	-	15	3.0	2.8	1.7 乞「念」	
3609	-	111	6.4	5.1	2.3 □「口○」	
3610	-	53	6.9	4.8	1.4 千萬倍「諸口○」	
3611	-	41	3.9	3.8	2.3 □「口」	
3612	-	17	2.9	1.8 1.6 英「口」		
3613	-	29	5.8	2.7	1.1 月口「口○」	
3614	-	13	4.8	3.1	2.8 □「正」 「口○」	
3615	-	50	4.9	4.4	1.9 □「口○口○」 □「口○口○」	
3616	-	92	7.7	3.4	3.0 成「佛」 聞語(7-11)	
3617	-	30	4.6	3.4	1.4 中「口」	
3618	-	46	5.8	3.7	1.9 □無「口○」	
3619	-	72	5.8	4.6	2.1 附體「口生」	
3620	-	66	6.0	4.8	1.9 溫修「口○」	
3621	-	55	4.4	3.8	2.6 爭「由」 「口○」	
3622	-	257	9.9	7.0	3.1 □□○口○金燭口 □○口○□○□○ □○□○□○○○○○	
3623	-	172	9.5	6.7	1.9 是□○□○「口○」 □○○○	
3624	-	94	6.9	4.8	1.8 來「口○」 □「口○」	
3625	-	33	5.0	3.3	1.4 □口「口○」	
3626	-	45	5.6	2.8	2.2 許「辱」	
3627	-	75	6.9	3.9	2.2 成□○「口」	
3628	-	42	4.7	4.2	1.8 附「如」 □「口○」	
3629	-	29	6.3	2.3	1.2 白「舍利」 舍利	
3630	-	38	5.1	3.1	1.7 附「」	
3631	-	39	4.4	3.7	1.6 面「口」	
3632	-	68	6.2	4.9	2.3 家「口○」	
3633	-	26	3.6	2.8	1.4 徒「口○」	
3634	-	24	4.9	2.6	1.8 秀「口○」	
3635	-	42	6.2	3.9	1.6 □「供口」	
3636	-	19	4.3	2.6	1.8 徒「難」	
3637	-	15	2.9	2.6	1.4 附「口○」	
3638	-	45	4.8	4.2	1.8 難「口○」	
3639	-	34	3.6	3.4	1.4 附「口○」	
3640	-	27	4.1	2.8	1.4 食「口○」	
3641	-	26	4.6	3.2	1.7 □合「口○」	
3642	-	25	3.9	3.2	1.6 無「口○」	
3643	-	37	5.6	3.5	1.2 諸「口○」	
3644	-	35	3.8	2.9	2.6 是「口○」 ² 「生」 口○	
3645	-	13	4.2	2.8	1.1 不「」 口○	
3646	-	24	5.2	2.7	0.9 作色「面口」	
3647	-	45	4.9	3.9	1.6 人「口○」	
3648	-	20	3.3	2.6	1.4 男「難」	
3649	-	50	4.4	3.7	2.1 □足「面口」	
3650	-	29	4.6	3.5	1.2 □「我」 ² 「我」 口○	
3651	-	61	4.5	4.3	2.8 茲口○□○口 口○□○□○	
3652	-	48	4.7	3.9	1.9 □廣「口○渴」	
3653	-	35	3.5	2.8	2.6 □「願」 ² 「欲」	
3654	-	31	4.8	3.1	1.8 槍「口○」	
3655	-	26	3.8	3.3	1.7 □足「口○口○」	
3656	-	32	4.8	3.7	2.2 今「口○」	
3657	-	8	3.6	2.4	0.9 量「口○」	
3658	-	24	4.1	3.1	1.4 劳「口○」	
3659	-	45	5.4	3.2	1.9 □各「得口○」 ² 「實」	
3660	-	50	4.5	4.3	2.1 子加「口○口○」	
3661	-	39	4.7	3.8	1.8 跋「口○」	
3662	-	23	4.8	2.7	1.4 不應「無口○」	
3663	-	12	3.7	2.6	1.7 平「月」	
3664	-	29	4.8	3.1	1.7 此長「口○」	
3665	-	30	3.8	3.6	1.6 其「站」	
3666	-	63	6.1	2.8	2.2 是「口○」 口○	
3667	-	55	5.3	3.7	2.1 菩「世無等」	
3668	-	17	4.3	2.6	1.6 前「口○」	
3669	-	59	5.2	3.8	1.8 此與「口○口○」	
3670	-	16	4.1	2.6	0.9 謂「觀」	
3671	-	17	3.8	2.9	1.2 以「口○」	
3672	-	19	3.8	2.6	1.3 使「子」 口○	
3673	-	50	5.6	3.2	1.8 口○口○	
3674	-	38	6.1	3.4	1.0 □口○口○	
3675	-	13	3.1	2.3	0.8 世「口○」 口○	
3676	-	83	6.5	3.4	2.8 莫「口○」 ² 「實」 口○	
3677	-	77	5.2	4.8	2.4 放叉「口○」	
3678	-	33	5.4	2.9	1.8 放口「余」 口○	
3679	-	31	5.2	3.6	1.2 世「口○」 口○	
3680	-	42	6.1	3.4	1.2 多「口○」 口○	
3681	-	56	5.4	4.6	1.4 地口○口○「口○」 口○口○	
3682	-	28	4.2	3.1	2.0 二百「人」 口○	
3683	-	96	7.3	4.2	1.8 比在□○□○□○□○ 「口○口○□○□○」	
3684	-	28	3.8	3.2	1.7 □釋「口○」	
3685	-	30	4.4	2.9	2.1 衣「服」 口○	
3686	-	29	4.1	3.1	1.3 及口「思口○」 口○	
3687	-	16	4.1	2.8	1.1 實「口○」 口○	
3688	-	26	3.8	3.6	1.2 如「口○」	
3689	-	24	3.7	2.1	1.7 □「見」 口○	
3690	-	20	3.8	2.4	1.4 合口「口○」 口○	
3691	-	52	4.5	3.8	2.1 今得「口○」 口○	
3692	-	50	4.7	3.4	1.8 諸「共」 口○	
3693	-	21	3.8	3.4	1.1 容「口○」 口○	
3694	-	22	3.6	2.9	1.7 有「水」 口○	
3695	-	15	3.5	2.5	1.2 佛「口○」 口○	
3696	-	45	6.2	3.2	1.8 余特「慧」 口○	
3697	-	26	4.8	3.6	1.1 非是「口○」 口○	
3698	-	121	8.2	4.8	1.2 □□○「南口○」 口○	
3699	-	21	4.2	2.2	0.9 □行「過」 口○	
3700	-	37	5.2	2.8	1.6 是中「口○」 口○	
3701	-	30	4.9	2.7	1.7 墓「口○」 口○	
3702	-	27	3.9	3.0	1.2 身「口○」 口○	
3703	-	29	4.7	3.2	1.2 佛「法」 口○	
3704	-	17	3.2	2.9	1.1 生「口○」 口○	
3705	-	25	3.9	3.2	1.2 白「分」 口○	
3706	-	22	4.9	3.7	0.9 口「口○」 口○	
3707	-	49	6.7	3.8	1.4 說口○「口○口○」 口○	
3708	-	16	4.1	2.1	1.2 黑「口○」 口○	
3709	-	58	5.3	4.1	2.6 □「國士友」 口○	
3710	-	11	3.6	2.1	1.9 是「女」 口○	
3711	-	30	4.8	2.8	1.7 開口「口○」 口○	
3712	-	25	3.8	2.4	1.9 而記「口○」 口○	
3713	-	128	7.1	4.3	3.4 佛口○「口○」 口○	
3714	-	21	4.2	2.8	1.1 僧「口○」 口○	
3715	-	25	5.9	3.6	1.0 摩訥「口○」 口○	
3716	-	41	4.6	3.8	2.1 □「本」 口○	
3717	-	61	4.6	3.5	2.4 勸「口○」 口○	
3718	-	39	4.3	3.2	2.3 放「無」 口○	
3719	-	22	4.8	3.1	1.2 實「口○」 口○	
3720	-	46	6.2	3.2	1.6 教口「口○」 口○	
3721	-	25	4.3	2.8	1.3 其經「口○」 口○	
3722	-	33	4.6	2.9	1.0 街「口○」 口○	
3723	-	61	5.6	3.6	1.8 上「而無」 口○	
3724	-	37	5.2	3.1	1.8 諸口「口○」 口○	
3725	-	276	9.4	7.9	2.7 □□○○「口○」 口○	

			□	
3849	-	27	4.3	3.5
3850	-	133	6.5	6.3
3851	-	49	5.6	4.0
3852	-	23	4.7	2.9
3853	-	54	5.4	4.3
3854	-	37	3.9	3.9
3855	-	47	6.4	5.3
3856	-	34	4.8	3.5
3857	-	28	4.1	3.6
3858	-	29	3.8	3.3
3859	-	98	5.7	5.7
3860	-	82	5.6	4.8
3861	-	30	3.9	4.0
3862	-	35	4.3	3.9
3863	-	52	5.8	4.4
3864	-	42	4.9	3.3
3865	-	64	5.4	4.3
3866	-	45	4.3	4.3
3867	-	44	5.6	5.6
3868	-	88	5.5	4.5
3869	-	29	3.6	3.3
3870	-	43	4.0	4.0
3871	-	38	4.6	3.2
3872	-	63	5.2	4.5
3873	-	41	5.8	3.2
3874	-	35	4.2	3.8
3875	-	52	5.3	3.4
3876	-	81	6.4	4.3
3877	-	90	6.6	5.3
3878	-	46	5.1	5.5
3879	-	36	4.5	3.6
3880	-	33	5.3	3.4
3881	-	19	3.9	2.7
3882	-	23	4.7	2.8
3883	-	13	3.3	3.3
3884	-	10	2.5	2.4
3885	-	19	2.6	2.4
3886	-	54	4.6	4.1
3887	-	40	5.8	3.7
3888	-	85	7.1	5.8
3889	-	59	5.7	4.0
3890	-	76	6.3	4.9
3891	-	66	6.2	4.3
3892	-	18	3.8	3.3
3893	-	31	4.2	3.8
3894	-	22	3.6	3.4
3895	-	391	10.0	9.8
3896	-	493	11.2	9.2
3897	-	335	9.6	5.8
3898	-	303	9.5	6.7
3899	-	178	7.9	5.2
3900	-	168	7.3	6.6
3901	-	86	6.7	6.1
3902	-	52	5.0	4.2
3903	-	48	5.8	3.4
3904	-	27	4.4	4.5
3905	-	72	6.2	3.7
3906	-	34	5.7	3.2
3907	-	43	5.4	3.8
3908	-	36	5.5	2.7
3909	-	40	5.5	2.8
3910	-	28	4.4	3.3
3911	-	56	6.3	5.8
3912	-	41	4.3	3.5
3913	-	19	4.3	3.0
3914	-	13	4.0	3.8
3915	-	39	3.8	3.7
3916	-	23	4.3	2.5
3917	-	60	5.4	4.0
3918	-	27	4.9	2.9
3919	-	39	5.5	3.4
3920	-	39	4.7	3.8
3921	-	18	3.7	2.7
3922	-	11	4.1	3.5
3923	-	19	4.1	2.7
3924	-	36	5.3	3.3
3925	-	39	4.3	3.2
3926	-	21	4.1	2.9
3927	-	50	4.8	4.0
3928	-	19	4.3	3.5
3929	-	29	3.5	3.0
3930	-	19	3.5	2.5
3931	-	10	3.1	2.6
3932	-	17	3.9	2.9
3933	-	33	5.3	3.2
3934	-	18	3.5	3.4
3935	-	12	4.0	2.1
3936	-	20	3.4	3.9
3937	-	44	4.7	3.4
3938	-	42	5.7	3.1
3939	-	39	5.7	3.9
3940	-	13	3.6	2.1
3941	-	30	6.0	4.0
3942	-	23	4.0	3.0
3943	-	21	4.0	3.0
3944	-	27	4.2	3.5
3945	-	19	4.6	3.6
3946	-	31	4.5	4.2
3947	-	15	3.8	2.7
3948	-	83	5.0	4.0
3949	-	50	5.2	5.1
3950	-	23	5.0	3.0
3951	-	32	4.2	3.0
3952	-	19	4.4	3.4
3953	-	39	5.2	3.2
3954	-	44	5.0	3.6
3955	-	21	3.5	2.8
3956	-	35	4.6	3.7
3957	-	18	4.0	3.2
3958	-	28	5.2	3.5
3959	-	21	3.5	2.7
3960	-	11	3.9	3.2
3961	-	28	4.9	3.6
3962	-	31	4.3	3.2
3963	-	9	2.6	2.1
3964	-	17	3.4	2.2
3965	-	19	5.3	2.1
3966	-	13	3.2	2.0
3967	-	18	4.3	3.5
3968	-	67	8.4	4.5
3969	-	51	4.7	4.3
3970	-	28	2.7	2.8
3971	-	91	6.0	5.1
3972	-	69	5.8	5.5
3973	-	20	3.7	2.9

2974	-	27	5.6	3.2	1.4	秀	◇		4047	-	39	5.7	3.5	2.1	生	◇
2975	-	18	3.1	2.8	1.5	迅	◇		4048	-	21	3.6	2.2	0.7	三	◇
2976	-	33	4.9	4.6	1.5	震	◇		4049	-	32	4.7	2.6	1.6	台	◇
2977	-	28	4.0	3.7	1.6	定	◇		4050	-	12	4.5	2.3	0.9	色	◇
2978	-	15	2.9	2.4	1.5	佛	◇		4051	-	32	4.3	3.3	1.7	門	◇
2979	-	28	3.6	3.7	1.6	万	◇		4052	-	16	3.5	2.6	1.1	不	◇
2980	-	18	3.8	3.2	1.3	光	◇		4053	-	19	4.4	3.3	0.8	若	◇
2981	-	11	2.7	2.4	1.1	田	◇		4054	-	14	3.3	2.0	1.7	修	◇
2982	-	24	3.6	2.7	2.0	無	◇		4055	-	20	3.6	3.0	1.3	足	◇
2983	-	10	3.4	2.1	1.1	日	◇		4056	-	8	2.4	2.1	1.3	一	◇
2984	-	18	3.6	2.8	2.1	否	◇		4057	-	37	4.6	3.8	1.9	三	◇
2985	-	56	5.3	4.1	2.0	衝	◇		4058	-	15	3.4	2.7	1.3	何	◇
2986	-	41	5.2	3.8	1.8	信	◇		4059	-	9	3.5	1.6	1.2	十	◇
2987	-	18	3.5	3.0	1.4	白	◇		4060	-	12	3.4	2.3	1.5	中	◇
2988	-	44	4.9	3.8	2.3	施	◇		4061	-	15	3.5	2.7	1.2	細	◇
2989	-	117	8.6	3.4	2.9	現	◇		4062	-	17	2.6	2.3	1.5	酒	◇
2990	-	9	2.8	2.3	0.9	論	◇		4063	-	50	5.8	5.1	1.2	天	◇
2991	-	16	3.5	2.7	1.5	四	◇		4064	-	8	3.2	2.7	0.7	女	◇
2992	-	31	4.3	3.2	2.0	需	◇		4065	-	9	3.0	2.3	1.0	進	◇
2993	-	17	4.8	2.3	1.3	既	◇		4066	-	21	3.2	3.0	1.1	有	◇
2994	-	31	4.3	3.8	1.9	侮	◇		4067	-	18	3.3	3.2	1.3	神	◇
2995	-	16	3.5	3.2	1.0	見	◇		4068	-	12	3.6	2.2	1.1	稅	◇
2996	-	33	4.9	3.0	2.0	革	◇		4069	-	18	3.7	2.0	1.6	本	◇
2997	-	39	4.5	3.5	2.2	各	◇		4070	-	23	3.7	2.6	2.2	侈	◇
2998	-	21	3.5	3.5	1.1	悔	◇		4071	-	39	5.8	3.6	1.8	欽	◇
2999	-	32	4.5	3.2	2.0	無	◇		4072	-	18	3.6	2.7	1.5	者	◇
3000	-	11	3.5	2.0	1.7	眞	◇		4073	-	14	3.4	2.6	1.2	万	◇
4001	-	42	4.8	4.2	1.8	往	◇		4074	-	25	4.3	2.8	1.8	虫	◇
4002	-	35	8.7	3.7	1.8	晉	◇		4075	-	6	2.8	2.3	0.7	座	◇
4003	-	28	5.7	3.8	1.2	隨	◇		4076	-	17	3.5	2.9	0.8	矜	◇
4004	-	29	4.2	3.7	1.9	師	◇		4077	-	16	3.6	3.8	1.0	更	◇
4005	-	8	2.9	2.4	1.2	女	◇		4078	-	7	2.7	2.1	0.9	○	◇
4006	-	13	3.0	2.8	0.8	賁	◇		4079	-	20	5.3	3.2	1.0	備	◇
4007	-	13	3.5	3.3	0.7	旡	◇		4080	-	13	3.0	2.2	1.5	孔	◇
4008	-	16	2.6	3.3	1.3	互	◇		4081	-	21	3.6	3.7	1.4	震	◇
4009	-	17	3.7	3.0	1.3	謹	◇		4082	-	9	3.2	2.3	1.2	妙	◇
4010	-	57	8.4	4.4	2.2	有	◇		4083	-	44	4.4	3.8	2.2	遇	◇
4011	-	18	3.7	3.1	1.9	平	◇		4084	-	15	3.2	3.3	1.3	法	◇
4012	-	23	4.8	4.5	1.9	午	◇		4085	-	11	3.3	1.9	1.3	上	◇
4013	-	46	8.8	3.3	1.8	沙	◇		4086	-	11	3.2	2.3	1.1	人	◇
4014	-	29	3.5	3.5	1.5	夬	◇		4087	-	11	2.9	2.2	1.2	合	◇
4015	-	21	3.1	3.5	1.5	北	◇		4088	-	18	4.0	2.1	1.6	玉	◇
4016	-	27	4.8	2.5	1.8	便	◇		4089	-	7	3.3	2.0	1.0	有	◇
4017	-	15	3.3	2.7	1.3	巽	◇		4090	-	30	5.5	3.4	1.4	是	◇
4018	-	18	3.0	2.7	2.1	旅	◇		4091	-	16	3.3	2.7	1.8	一	◇
4019	-	21	3.5	4.1	1.1	蹇	◇		4092	-	52	5.7	3.6	1.7	人	◇
4020	-	15	2.3	2.6	1.8	困	◇		4093	-	20	4.3	2.4	1.6	施	◇
4021	-	37	4.2	3.5	2.0	仲	◇		4094	-	22	4.9	2.9	1.5	宗	◇
4022	-	31	4.2	3.6	1.9	晉	◇		4095	-	14	4.0	2.2	1.1	千	◇
4023	-	11	3.3	2.4	1.3	言	◇		4096	-	46	4.5	4.0	1.7	鈴	◇
4024	-	9	3.5	2.0	1.1	知	◇		4097	-	22	3.3	2.8	1.8	生	◇
4025	-	25	4.0	3.2	1.5	得	◇		4098	-	9	2.7	2.4	1.6	方	◇
4026	-	10	2.9	2.0	1.6	衆	◇		4099	-	88	4.9	3.8	2.4	能	◇
4027	-	17	4.7	2.5	1.3	未	◇		4100	-	11	3.2	1.9	1.1	○	◇
4028	-	15	3.5	1.9	1.3	蹇	◇		4101	-	11	3.2	1.7	1.3	思	◇
4029	-	11	3.4	2.7	1.6	乃	◇		4102	-	8	3.0	2.5	0.7	神	◇
4030	-	13	3.2	2	1.5	无	◇		4103	-	10	3.2	1.9	1.0	王	◇
4031	-	49	6.4	3.5	1.5	行	◇		4104	-	23	2.2	3.5	1.7	或	◇
4032	-	8	3	2.7	0.6	大	◇		4105	-	19	4.0	2.8	1.1	無	◇
4033	-	39	5.1	4.3	1.2	子	◇		4106	-	13	4.6	2.1	0.9	出	◇
4034	-	29	3.8	3.8	1.6	互	◇		4107	-	28	4.0	3.5	1.6	辯	◇
4035	-	19	2.5	2.2	1.2	一	◇		4108	-	8	3.0	2.7	0.7	大	◇
4036	-	36	3.7	3.1	2.1	正	◇		4109	-	5	2.3	1.7	1.3	人	◇
4037	-	13	3.2	2.5	1.3	子	◇		4110	-	19	3.5	2.7	1.4	者	◇
4038	-	19	4	2.7	1.3	此	◇		4111	-	36	4.7	3.2	1.4	狩	◇
4039	-	23	4	2.7	1.7	同	◇		4112	-	13	2.7	3.3	1.1	生	◇
4040	-	28	4.3	3.1	2.8	法	◇		4113	-	23	4.1	3.2	1.4	現	◇
4041	-	9	2.3	2.2	1.2	二	◇		4114	-	16	3.6	3.0	1.5	年	◇
4042	-	43	8.5	3.7	1.5	明	◇		4115	-	32	4.3	3.6	1.8	胃	◇
4043	-	26	5.4	4.0	0.8	不	◇		4116	-	13	3.1	2.3	1.4	豐	◇
4044	-	16	4.3	2.7	1.7	究	◇		4117	-	33	5.2	3.5	1.7	天	◇
4045	-	19	4.2	3.0	1.0	世	◇		4118	-	36	5.8	3.4	1.5	日	◇
4046	-	12	3.2	2.8	1.3	本	◇		4119	-	23	3.8	3.2	1.7	豐	◇

4120	-	5	1.8	3.1	0.7	子	◇
4121	-	8	2.4	3.2	0.7	利	◇
4122	-	24	3.7	2.9	1.4	三	◇
4123	-	14	3.6	2.7	1.7	康	◇
4124	-	6	2.7	2.2	0.7	戌	◇
4125	-	16	3.5	2.9	1.1	白	◇
4126	-	9	3.2	2.5	0.8	醜	◇
4127	-	9	3.2	2.2	0.8	寔	◇
4128	-	15	3.4	2.0	1.7	卯	◇
4129	-	17	4.6	2.6	0.9	方	◇
4130	-	14	3.2	2.7	1.3	告	◇
酒歌67-113							
4131	-	16	4.1	2.2	1.7	是	◇
4132	-	16	3.1	3.0	1.3	迄	◇
4133	-	17	3.8	2.6	1.6	不	◇
4134	-	15	3.0	2.7	1.5	天	◇
4135	-	23	3.7	3.2	1.2	衝	◇
4136	-	49	4.4	4.0	2.2	作	◇
4137	-	29	6.4	4.2	1.2	仄	◇
4138	-	16	3.5	1.4	1.4	微	◇
4139	-	13	4.1	2.2	1.0	受	◇
4140	-	11	3.2	2.3	0.9	利	◇
4141	-	20	4.3	3.8	0.7	我	◇
4142	-	22	3.4	3.1	1.2	迄	◇
4143	-	29	3.5	2.8	1.5	千	◇
4144	-	21	4.3	2.8	1.5	須	◇
4145	-	24	4.6	3.5	1.2	桺	◇
4146	-	13	3.3	2.2	1.3	祖	◇
4147	-	37	4.7	4.4	1.6	夜	◇
4148	-	15	3.8	3.6	0.7	醜	◇
4149	-	42	5.1	4.2	1.6	瘦	◇
4150	-	22	4.8	3.2	1.2	吉	◇
4151	-	58	5.3	4.6	1.7	鬯	◇
4152	-	20	3.7	2.8	1.4	風	◇
4153	-	16	4.1	2.9	1.5	愚	◇
4154	-	46	4.5	4.4	2.0	意	◇
4155	-	16	4.3	2.2	1.9	者	◇
4156	-	14	3.6	2.6	1.3	有	◇
4157	-	76	6.3	4.5	2.6	易	◇
4158	-	9	3.6	2.8	1.1	宰	◇
4159	-	31	5.3	3.0	1.7	說	◇
4160	-	19	4.1	2.8	1.4	式	◇
4161	-	13	2.8	3.7	0.7	企	◇
4162	-	74	6.6	5.9	1.8	覩	◇
4163	-	26	4.6	2.6	2.3	疾	◇
4164	-	13	3.4	2.9	1.3	万	◇
4165	-	16	3.3	1.2	1.5	待	◇
4166	-	59	5.0	4.9	2.3	急	◇
4167	-	29	4.4	4.0	1.5	須	◇
4168	-	43	4.2	4.2	2.0	解	◇
4169	-	83	3.8	3.8	2.9	音	◇
4170	-	21	4.2	2.9	1.3	徒	◇
4171	-	18	3.7	2.4	1.5	妙	◇
4172	-	16	4.1	2.8	1.7	在	◇
4173	-	12	3.7	2.3	1.1	主	◇
4174	-	49	3.9	3.5	2.1	委	◇
4175	-	13	3.2	2.8	1.3	否	◇
4176	-	30	4.0	3.1	1.6	得	◇
4177	-	21	4.0	3.0	1.5	人	◇
4178	-	9	3.3	2.5	0.9	同	◇
4179	-	12	3.3	2.6	1.1	留	◇
4180	-	17	3.3	2.8	4.5	主	◇
4181	-	98	8.6	3.9	2.0	懿	◇
4182	-	18	4.2	3.3	1.1	晉	◇
4183	-	30	5.1	2.8	1.5	詔	◇
4184	-	31	4.3	3.7	1.7	經	◇
4185	-	22	2.6	2.4	1.8	義	◇
4186	-	31	4.3	3.5	1.8	覩	◇
4187	-	17	3.3	2.5	1.5	古	◇
4188	-	19	4.2	2.7	1.6	找	◇
4189	-	29	4.4	3.7	1.1	策	◇
4190	-	33	5.4	3.5	1.6	高	◇
4191	-	13	3.8	2.2	1.1	定	◇
4192	-	11	3.3	2.6	1.0	歲	◇

4193	-	12	3.2	2.4	1.6	右	◇
4194	-	30	4.4	3.2	1.6	𠂇	◇
4195	-	11	2.8	2.3	1.2	幹	◇
4196	-	45	4.7	4.3	1.7	遼	◇
4197	-	17	3.4	2.5	1.7	爾	◇
4198	-	161	7.5	5.3	3.0	芮	◇
4199	-	50	4.8	3.9	2.3	庚	◇
4200	-	12	3.4	2.5	0.9	治	◇
4201	-	19	3.5	4.3	1.0	善	◇
4202	-	8	3.2	2.5	1.7	興	◇
4203	-	12	3.0	2.4	1.4	中	◇
4204	-	29	3.3	3.3	2.1	成	◇
4205	-	18	4.1	2.6	1.3	今	◇
4206	-	18	3.8	2.2	2.0	門	◇
4207	-	18	3.3	3.2	1.3	度	◇
4208	-	14	3.2	3.0	1.3	於	◇
4209	-	29	3.3	3.8	1.1	𠂇	◇
4210	-	21	4.5	2.1	1.9	狩	◇
4211	-	36	4.1	3.3	2.1	善	◇
4212	-	15	4.3	3.3	0.9	賈	◇
4213	-	17	4.3	2.9	1.1	原	◇
4214	-	60	6.3	4.6	1.3	之	◇
4215	-	16	4.0	2.1	1.0	興	◇
4216	-	19	3.8	2.8	1.4	記	◇
4217	-	9	2.5	2.1	1.2	同	◇
4218	-	12	3.6	2.5	1.3	中	◇
4219	-	14	2.6	2.8	1.3	佛	◇
4220	-	9	2.0	2.5	1.0	𠂇	◇
4221	-	13	3.6	2.8	1.1	疾	◇
4222	-	16	3.8	2.7	2.0	二	◇
4223	-	34	5.1	3.8	2.1	𠂇	◇
4224	-	14	3.6	2.3	1.3	紳	◇
4225	-	41	4.6	4.1	1.7	漸	◇
4226	-	45	4.7	4.5	1.8	闕	◇
4227	-	32	4.3	3.0	1.7	舌	◇
4228	-	6	3.6	2.3	0.6	一	◇
4229	-	12	3.2	2.6	1.6	叔	◇
4230	-	15	3.8	2.8	1.2	持	◇
4231	-	11	3.0	2.5	1.8	鳩	◇
4232	-	45	4.8	3.6	1.8	楚	◇
4233	-	22	4.2	2.6	1.8	眾	◇
4234	-	22	5.7	3.4	0.8	弱	◇
4235	-	15	3.3	2.7	1.5	俗	◇
4236	-	26	3.7	3.9	1.0	疾	◇
4237	-	14	3.6	2.7	1.2	往	◇
4238	-	14	4.2	2.6	1.2	反	◇
4239	-	45	6.2	3.0	2.5	曉	◇
4240	-	15	4.3	3.3	0.8	華	◇
4241	-	34	5.0	3.0	1.8	細	◇
4242	-	11	2.8	3.6	1.0	鷗	◇
4243	-	14	3.2	2.7	1.2	詔	◇
4244	-	31	3.5	3.1	1.9	𠂇	◇
4245	-	14	3.2	2.5	1.7	青	◇
4246	-	32	4.8	3.6	1.6	澤	◇
4247	-	29	5.4	5.7	2.0	衍	◇
4248	-	17	4.5	2.3	1.1	問	◇
4249	-	20	2.8	3.6	1.7	港	◇
4250	-	25	4.7	4.3	1.2	翠	◇
4251	-	11	3.4	2.9	0.9	言	◇
4252	-	16	3.2	2.9	1.2	是	◇
4253	-	46	4.6	3.7	2.6	𠂇	◇
4254	-	35	5.2	3.3	1.6	神	◇
4255	-	11	3.0	2.8	0.9	祖	◇
4256	-	11	4.2	1.9	1.2	賈	◇
4257	-	37	5.0	3.6	1.9	常	◇
4258	-	10	3.6	2.8	1.2	石	◇

表土

No.	密度	重壓	長徑	短徑	厚度	文字	品鑑考
4259	-	18	4.0	2.8	1.2	有	◇
4260	-	10	2.3	3.2	1.2	山	◇
4261	-	15	3.6	2.9	1.3	得	◇

VII 調査の成果とまとめ

1 横山東遺跡群における中期縄文集落の検討

1)はじめに

横山東遺跡群が所在する柏崎平野南部丘陵の北西地区は、市中心部から3km以内の距離にあって、市街地化の著しい地区である。このため、大半の区域が開発の波に洗われており、旧状の自然地形をある程度広い面積で知ることができたのは、本遺跡群が所在する一画だけという状況にまで至っていた。

ところで、南部丘陵各所における最近の情勢としては、幾つもの大規模な開発が顕著となっていたことであるが、その事前調査の都度新遺跡が発見され、発掘調査件数の増加を招いていた。縄文遺跡についてだけを見ても、本遺跡群に属する3遺跡のほか、藤橋北西部で1件、藤橋東遺跡群では4件などと、この10年足らずの間に8遺跡余が発見され、そして本発掘調査が実施されているのである。このような実情とは、当該丘陵地帯が雑木等の山林で覆われていたことから、遺跡が発見されにくい環境にあったことの反映であり、これら各種の開発が本来縄文遺跡の宝庫とでも言うべき密集地域を浮かび上がらせたといえる。

再び横山東遺跡群の周囲をうかがうと、その北側には幾つもの住宅団地が造成されているが、図版1に提示した旧地形では、中位段丘地形による広い平坦地が幾つも連なっていたことが知られる。このような立地条件からすれば、未知の中核的な縄文集落遺跡を想定することは比較的容易なことと言えそうである。横山東遺跡群で調査された縄文遺跡は、集落跡3件である。集落が形成された時期は、前期後半期が大宮遺跡の1件、中期前葉期が大沢遺跡と雨池遺跡の2件である。ただし、前述のごとく、当該地の縄文集落がこれらの遺跡だけであったと限定することはできず、すでに失われた遺跡も充分想定されるため、縄文集落の全時代的な動向をうかがうことは難しい。本節では、互いに隣接し、かつともに中期前葉期に営まれた二つの縄文集落から、その時期や居住していた縄文人の集団あるいは集落の形態や構造等、そして集落の性格などについて若干の検討を加え、縄文社会の一端を垣間見ることとしたい。

2) 中期縄文集落の時期と出土土器群

横山東遺跡群で調査された中期縄文集落は、大沢遺跡と雨池遺跡の2カ所である。両者は、互いに隣接した台地上に位置し、集落が営まれた時期も中期前葉期であった。しかし、集落の景観を見れば、大沢遺跡は広場を持つ集落であるのに対し、雨池遺跡はそれをほとんど意識していない集落であり、両者には更に集落を構成する造構の種別にも差異がある。したがって、位置的にも時期的にも極めて近くにありながら、集落の構成が異なるという両集落とは、実際にはどのような関係にあったのか、この点は二つの遺跡を理解する上で無視できない重要な問題とできる。

それは例えば、同時期に併存する集落であったとすれば、両集落を営む集落構成員が異なる集団であったのか、あるいは同じ集団が住み分けを行っていたのか、とすればその理由などが問題となってくる。また、時期差とすれば、出土した土器群に時間差を見出すことができるとともに、縄文人の移動や集落形成過程などの動向を狭い地域で追うことが可能となる。そこで本項では、まず両遺跡出土土器群の類似点や

相違点などを検討してみたい。そして、土器様相から時期等を検証し、編年的な位置付けもしくは両者の前後関係等に触れ、前述した課題の一部を見極める作業を試みることとする。

ただし、両遺跡から出土した縄文土器は、すでに本文でも述べたごとくその量は少ない。その事由等についても述べたところであるが、一括的な資料にも恵まれなかつたことなどは、出土遺物からの検討にかなり大きな制約を与えている。しかし、両者を対比した場合、胎土や縄文地文等に大きな差異が看取されたことから、これらを糸口に検討してみたい。

a 雨池・大沢遺跡の縄文土器

縄文土器の胎土 まず、土器の胎土について、それぞれ本文で述べたところであるが、生地となる粘土に混入した混和材について、それぞれの特徴をまとめてみよう。今回検討対象とした混和材とは、A：硬質砂粒、B：橙色土粒、C：褐色土粒、D：白色岩粒の4種である。これらは、基本的に単独か、あるいはそれぞれの組合せによって、胎土の生地となる粘土に混ぜられている。これら混和材の確認は、主に肉眼による観察で行い、またその量比についてもやや相対的に判断したものである。したがって、厳密性に幾分欠けている点は否めないが、それでも大まかな傾向を見極めることができた。混和材4種の組合せは、第18表右のように15通りとなるが、今回のデータでは、両遺跡あわせて11通りの組合せが確認されている。両遺跡でほとんど認められない組合せとは、「ABCD」「AB・D」「・BCD」「・B・D」「...D」であるが、その基本とはD単独という事例もないが、BDという組合せもないことである。つまり、B：橙色土粒とD：白色岩粒の二者は、互いに相容れない混和材であったことを意味することになる。

そこで、雨池・大沢両遺跡の胎土分類観察表を見てみてみよう。大沢遺跡（第7表）では、Bの橙色土粒を混和材とした個体がかなり多く占めていることに対し、Dとした白色岩粒を含む個体およびその含有量において極めて少なくなっていることが判る。ただし、Aとした硬質砂粒の含有も多くないことから、相対的にはしっかりとしたものが多い。これに対し、雨池遺跡の場合（第11表）は、Aとした硬質砂粒を

胎土分類	大沢遺跡	雨池遺跡	出 土 位 置 (大グリッド)	
			大 沢 遺 跡	雨 池 遺 跡
第1類	○	△	H-19・J-19・20・21	P-39
第2類	-	△	—	O-40
第3類	○	△	J-19・20・21・K-21	M-41
第4類	-	○	—	O-40・M-36・42・N-40
第5類	-	○	—	M-36・40・41・42・N-40
第6類	-	○	—	P-38・39・M-42・N-41
第7類	◎	-	H-22・I-19・J-21・K-21	—
第8類	◎	○	E-19・F-19・H-22・I-19 20・22・J-20・21・K-21・22	—
第9類	△	-	J-21・M-22	—
第10類	-	△	—	M-40・N-38・39
第11類	◎	◎	G-19・I-21・22・J-21 K-21	N-40・O-3940 P-38

混和材の組合せ	雨池・大沢分類
A ...	第1類
A B ..	第2類
A B C ..	第3類
A B C D	—
A B .. D	—
A .. C	第4類
A .. C D	第5類
A .. D	第6類
.. B ..	第7類
.. B C ..	第8類
.. B C D	—
.. B .. D	—
.. .. C ..	第9類
.. .. C D	第10類
.. .. D	—
.....	第11類

A：硬質砂粒
B：橙色土粒
C：褐色土粒
D：白色岩粒

第18表 雨池・大沢両遺跡における胎土分類の組合せと量比

多く含むもので占められるため、全体的にざらついたものが顕著である。また、Dとした白色岩粒を含む個体が過半数を超える割合で存在する。大沢遺跡で特徴的なBとした橙色土粒については、少量ながら混和材とする個体も若干存在するが、極めて限定されていたとみることができる。つまり、BDという混和材の組合せがないという現象は、実は両遺跡の差異でもあったわけである。このように見えてくると、混和材のBとDは、極めて意図的に混入された可能性が高いことになる。この点は、Aについても両遺跡でかなりの差異があることから、混和材としての意識の高さが理解できる。しかし、Cとした褐色土粒については、両遺跡とともに比較的多く認められることから、混和材というよりも、そもそもその生地に含まれているなど、人為的意味合いがかなり低いことが考えられる。また、両遺跡で認められているという事実からは、互いの土器作りの場が極めて近接していたり、あるいは生地採集地の地質構造が同じであった可能性が高いことなどを示唆しているものといえよう。

さて、以上の検討から、混和材としてA・B・Dの3種が軒並んで使用されたことが判明したが、また特徴的な胎土の存在も明かとなつた。その一つは、混和材Bを含有するものであり、大沢遺跡での頻度が高い。もう一つは、混和材Dを特徴とするが、混和材Aと組み合わさる場合が多い。前者は、今回行った胎土分類の類型で言えば第7・8類を主体に第3類もその中に含めてよさそうである。このような混和材Bを特徴とする胎土については、多くの事例が確認された大沢遺跡の名称から、便宜的に「大沢タイプ」と仮称しておきたい。後者については、胎土分類の類型で第5・6類と第10類が該当しそうである。この場合も、これらの胎土が多く認められた雨池遺跡に因み、「雨池タイプ」と仮称しておきたい。

各遺跡の状況をまとめると、大沢遺跡では「雨池タイプ」が一切なく、雨池遺跡では「雨池タイプ」が多く認められつつも、若干の「大沢タイプ」が組成していることになる。ただし、わずかな事例では、普遍的な理解ができないことから、両タイプの事例を増やし、今後更に検討を行うことが必要である。

なお、胎土の類型別に見た出土位置については、若干の検討を試みたが、資料の絶対数がそもそも少ないこともあり、特徴的な状況は看取されなかった。

縄文地文の差異 縄文土器に施文される文様のうち、いわゆる縄目文様は最も一般的なものである。この縄目文様が施される理由等については様々に言われるが、土器製作において極めて機能的・必然的な意味で始められた可能性が高いであろう。しかし、その初段階より装飾的文様効果が意識されていたと考えられ、幾種類もの縄文原体と様々な施文技法が編み出され、やがて前期に至って頂点に達することになる。しかし、この縄目文様も他の施文具による装飾的文様が描かれるようになると次第にその主役を下り、地文様としての道を歩む。ただし、一部の土器様式あるいは一時的な縄文地文が衰退することはあっても、日常的な煮沸具である深鉢や鉢などのいわゆる粗製土器に施文され続け、その伝統は弥生時代になってしましばらく引き継がれていた。この事実とは、縄文時代において、縄や紐などが極めて普遍的かつ重要で、日常生活に欠くことのできない存在であり、またその使用や利用に卓越していたことを示している。つまり、その製作においても極めて熟練度が高かったことを意味する。様々な縄や紐とその製作技術、そしてその使用やその方法等は、縄文文化の一つの表象として位置付けることができよう。

したがって、縄文土器の縄目文様の施文に使用された縄文原体とは、その製作段階からすでに伝統的な技術として一つの集團に繼承されてきた可能性が充分にある。その意味するところは、縄文土器に施された縄目文様もしくはその縄文原体が、ある縄文集團における伝統芸、あるいは強い癖や流儀を伝えているものであると言え換えることが可能となる。そこで、大沢・雨池両遺跡の縄目文様に注目し、両者の差異や類似点を探り、各々の縄文集團の実態解明へとせまる手段としたい。

遺跡名	個体総数	有地文個体数						その他
		L	R	L	R	R L	羽状繩文	
大沢遺跡	57	23(62.2)	8(21.6)	0(0.0)	4(10.8)	2(5.4)	37(100.0)	20
雨池遺跡	34	6(33.3)	1(5.6)	0(0.0)	11(61.1)	0(0.0)	18(100.0)	16

第19表 大沢・雨池遺跡における縄文地文原体の比率

第19表は、大沢・雨池両遺跡から出土した土器群のうち、図示した土器について、縄文地文別に個体数を計測したものである。したがって、当該データそのものは、出土土器全てを対象としていないが、図化という観点以外は無意図的であり、サンプリング資料としては少ないながら安定していると判断できる。

大沢遺跡の場合は、同一個体を1つすると57個体が母数となる。これらのうち、37個体(64.9%)に縄文地文が施されていた。L R 単節斜繩文の事例は、23個体に上り、縄文地文が施されていた中での比率も62.2%に達した。これに対し、R L 単節斜繩文の事例は、わずか4例(10.8%)に過ぎないことから、L R 単節斜繩文の卓越を極めて鮮明にうかがうことができる。また、L 無節の事例も8例であり、R 無節が確認されていないことから、左撫りが好まれていた可能性がある。雨池遺跡の場合は、総個体数が34個と少なく、縄文地文の事例もわずか18例でその比率もようやく過半を超えた52.9%に過ぎなかった。このため、データそのものの不安定さは否めない。本遺跡で最も多い原体はR L 単節斜繩文で、個体数11例、比率は61.1%に達しており、大沢遺跡とはまったく逆の結果となっている。ただし、大沢遺跡でかなり卓越していたL R 単節斜繩文は、本遺跡でも6例の33.3%と地文を有する個体の1/3を占めており、概して安定していたことがうかがえる。しかし、隣接する互いの遺跡であっても、L R 単節斜繩文が大半を占める大沢遺跡と、R L 単節斜繩文が多くなる雨池遺跡という差異は明瞭である。

集団の差異 さて、胎土と縄文地文の原体について、大沢・雨池両遺跡を対象とした検討結果をまとめよう。縄文土器の胎土は、大沢遺跡では「大沢タイプ」とした胎土の土器が多く認められる中で、「雨池タイプ」の指標とした混和材Dの白色岩粒を含むものが一切出土していなかった。これに対し、雨池遺跡では、「雨池タイプ」が卓越していることは当然としても、混和材Bとした橙色土粒を含む「大沢タイプ」の存在も少ないと確認されている。縄文地文の状況を見ると、大沢遺跡ではL R 単節斜繩文が6対1の割合でR L 単節斜繩文を凌駕し、L 無節を含めれば左撫りが8割を超えることになる。雨池遺跡の場合、大沢遺跡とは反対に、R L 単節斜繩文が卓越するが、しかしL R 単節斜繩文との割合は2対1程度と圧倒的な比率とまでは至っていないという結果となった。

以上の結果は、大沢集落を営んでいた縄文人の集団と、雨池集落の集団は別個に独立した集団の可能性が高いことを示している。しかも、大沢集落で特徴的な土器の胎土や縄文原体が、雨池集落でわずかながら確認されても、その逆はほとんどなかったことになる。このように見えてくると、両遺跡の関係は、雨池集落の縄文人が大沢集落との交流を図っても、大沢集落の縄文人は、雨池側へはほとんど足を運ばなかっただように写る。しかも広場の有無等両集落の形態が異なっており、両遺跡が同時期併存の集落とすれば、広場を持つ集落へ広場を持たない集落の縄文人が通うようなイメージとなる。それはつまり、広場を持つ集落の優越した姿と重なることとなり、縄文社会における集団間の優劣あるいは集落形態の差異などの意味を解き明かす端緒とすることも可能となる。しかし、両集落の関係が、互いに接点を持っていたことは明かであるが、これらの差異が時期差としたら、別の観点が必要となる。両集落が同時期併存か、時期差なのかを見極めることは、縄文社会を理解する上で重要な意味を持っているとすることはできよう。

b 出土土器群の編年的な位置付け

当該遺跡群から出土した中期の土器群は、従来からの認識からすれば、北陸編年という中期前葉の新崎式土器と併行関係にある。当該土器型式の研究は、石川県や富山県において比較的多くの検討が加えられ、概して長い研究史を形成する。しかし、新崎式土器の前後型式である新保式や上山田式との区分は、いまだ議論が継続中で決着を見ておらず、更に新崎式内での細別も定まっていないのが実情のようである。このため、研究者によって本型式の上限や下限、あるいは細別試案などの捉え方が異なるため、最もわかりにくい土器型式の一つとなっている。

このような状況下にあって、新潟県内における研究状況も安定していない。特に、編年試案の多くが北陸におけるそれぞれの編年に依拠してきた経緯があるため、その影響は大きい。また、在地の編年試案も、総合したような編年論は少なく、ほとんどが調査報告の段階で遺跡単位に編年試案をまとめた事例が多くなっている。このような本県の現状とは、北陸と同様に遺構内一括など同時性が保証される資料がほとんど得られていないという実態もあって、在地での土器変遷が見極めにくくともその理由の一つとして挙げられる。しかしながら、大半が北陸や東北地方などの編年との対比に終始する傾向が強いことが看取されるのである。

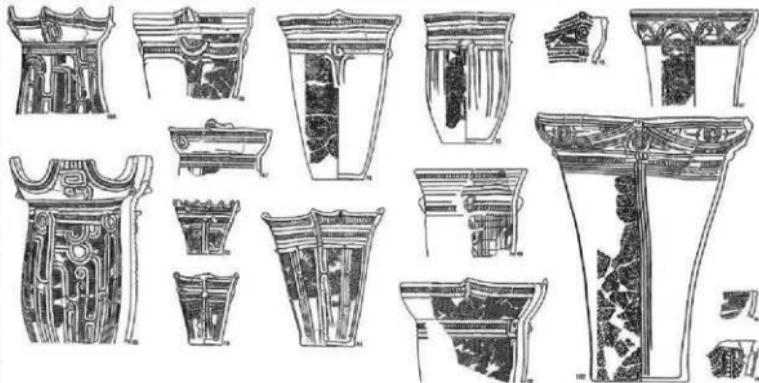
本遺跡群の場合、当該期の遺跡を2件も調査した。しかし、良好な一括資料どころか出土した土器群そのものが少なく、当該資料だけで編年的な序列を検討することは極めて難しい。これまで述べてきたように、大沢・雨池の両集落が、時期差と認め得るのか、あるいは同時期の併存で捉えられるのかは、両集落に居住した縄文人、あるいはその集団の実態解明を大きく左右する。したがって、両遺跡における土器群の編年的な位置付け、あるいは時間的な序列の見極めが必要不可欠な課題となってくる。しかし、前述したように当該土器型式の理解はそれほど単純ではない。このため、北陸全般まで対象を広げることが現状では難しいことから、県内出土資料のうち、ある程度一括的な保証が得られている事例を抽出し、その相対的な序列との対比から、本遺跡群における前記課題にある程度応えられるよう若干の検討を試みたい¹³⁾。

越後の新崎式併行期の土器群 当該期の遺跡は、近年の大規模な調査事例もあって、資料の出土量そのものはかなり膨大となっている。また、遺構内で一括的に捉えられた事例も決して少なくない。しかし、このような事例のほとんどは、混入が著しかったり共伴した個体数が少ない場合が多く、ある程度の量を備えた事例は皆無である。そこで、遺構外ではあっても、その出土状況からある程度の一括性が看取された事例に、参考資料探索の範囲を広げざるを得ない。

このような状況下で見出される事例としては、西蒲原郡卷町の大沢遺跡（以下、横山東遺跡群の大沢遺跡との混同を避けるため「卷大沢遺跡」というように町名の「卷」を冠する）を第一に掲げることができる〔卷町教委1990〕。この卷大沢遺跡は、日本海からの距離が直線でおよそ3kmほどであり、横山東遺跡群の場合とほとんど同じ条件であることから、対比する対象としては好例とすることができる。卷大沢遺跡の土器群とは、1989年に実施された集落内の部分的な発掘調査に際し、捨て場内にて上下2層に分層されて検出されたものである。報告書では、下層出土土器群をIIIa期とし、上層出土土器群は、第2号住居出土土器群とともにIIIb期に編年されている〔卷町教委前煩〕。

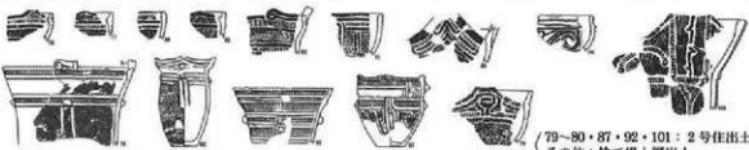
もう一つとは、海岸線から40kmほど離れた内陸に位置し、横山東遺跡群や前述の卷大沢遺跡とは若干異なった地域に所在する事例となるが、北魚沼郡堀之内町所在の清水上遺跡を掲げることができる。本遺跡は、関越自動車道の建設と、その後に堀之内インターチェンジの増設に伴う前後2次にわたる大規模調査が実施され、遺跡のほとんどが全面調査されたものである〔新潟県教委1990・新潟県教委他1996〕。今

卷大沢III a期土器群



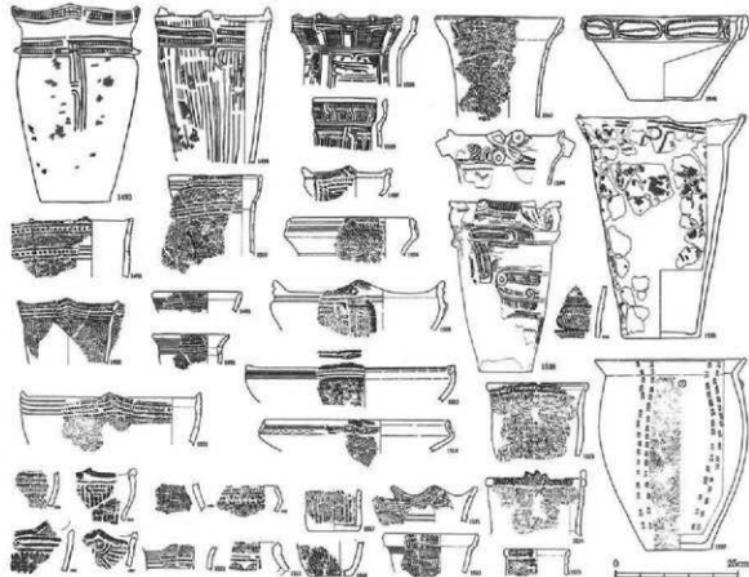
〈捨て場下層出土〉

卷大沢III b期土器群



79~80・87・92・101：2号住出土
（その他：捨て場上層出土）

清水上A地区NO付土器群



第18図 越後の新崎式期の土器群

回の検討対象とする土器群は、A地区No付土器と報告された一群である〔新潟県教委1990〕。ただし、当該土器群が出土したA地区は、「土石流と思われる層の中に包含されており、上流からの流れ込みと考えられる」ような状況であったとされる。また、対象としたA地区No付土器群についても、「一括性が高いと判断されるが、二次堆積層中であるため同時期と判断するには到らない」と記載されている〔新潟県教委1990〕。しかし、土器群そのものに摩滅痕等は顕著でなく、二次的な移動が大きかったとは言い切れない。また、他に良好な資料もないことから、本土器群を参考資料として用いることとしたものである。

新崎式期土器群の変遷 第18図は、前述した土器群について、一括性を重視しながら提示したものである。巻大沢III a期の土器群は、捨て場下層から出土したと明記されているものに限定した。また、同様に巻大沢III b期の土器群についても、捨て場上層及び第2号住居から出土したもののみとした。これら両土器群は、層位的に分離がなされたものであり、時間的な前後関係で把握することができるが、すでに幾つかの編年試案にも利用されている成果である。両者については、すでに報文でも指摘されているように、それほど大きな差異が認められないしながらも、III b期で安定的に出現する蓮華文がIII a期で欠落していることが一つの特徴とされている。このことから、III b期の特徴を、真正な蓮華文の盛行という現象で捉えることができるが、III a期の土器群ではその部位に綫位竹管沈線が充填されている。当該文様の出自については、彫刻蓮華文が形態化するなどの流れを想定しておきたいが、連鎖状竹管手法による半截竹管の先端を使った刺突を行えば、真正な蓮華文の描出に至ることができる。この他の特徴的な文様としては、突起部等における縦位の隆線が、口唇部の端部まで突き上がるものが多いため古相を示すものとして指摘できようである。

巻大沢III b期の特徴について報文では、蓮華文以外に、中期中葉へ受け継がれる要素として①各種彫去文を伴う山形大波状口縁、②異種原体併用竹管沈線のほか、図示以外の土器の特徴に③無文帶内楔状刻目文や④キャリバー器形Cの存在などを指摘し、当該土器群の後出性を指摘している。ところで、当該期の資料は、捨て場上層(76~78・82~85・104)と第2号住居(79~81・87・92・101)の出土土器群で構成されているが、両者を比較すると前者は下層の土器群に近似した要素が認められることに対し、後者には蓮華文が卓越するとともに前述した後出性の要素が多いように見受けられる。したがって、将来的には細分がなされる可能性を指摘することができよう。

さて、もうひとつ一括性の高い資料として、清水上A地区No付土器群を掲げたが、スペースの関係で図示したものが全てではない。巻大沢III b期と対比すれば、かなり類似した様相が看取できる。しかし、①頭部から口縁部に至る文様帯が発達して面的な広がりを見せていること、②綫長蓮華文、③施文密度を濃くした爪形文などは、巻大沢III b期の土器群より新しい要素と考えられる。ただし、地域的にやや隔たりがあること、清水上例の一括性には若干の問題が含まれていること、そして巻大沢III b期にもある程度の時期幅が想定されることなどから、部分的な重複等まで否定できない。しかし、両者は前述したような要素の存在から、相対的な前後関係で捉えることが可能と思われる。この点は、外来系の土器群においても、ある程度肯定されるであろう。

以上、巻大沢遺跡と清水上遺跡から抽出された3つの土器群から、新崎式期における土器群の変遷観を述べてきた。巻大沢遺跡のIII a期とIII b期については、層位的根拠を持って分離された唯一の事例であり、越後における新崎式期の土器編年を考えいく上で極めて重要な意味を持っている。しかし、各期の時間幅については、これら以外に対比できる事例もないことから明確とは言えない。特に、III b期の土器群に

細分の可能性が含まれるとすれば、Ⅲ a 期よりも広い時間幅を想定せざるを得ない。ただし、それだけⅢ a 期資料の純粹性が指摘できるのではないだろうか。

また、清水上遺跡の A 地区 No付土器群に対するこれまでの編年的見解は、これらを新旧に二分し、それを巻大沢Ⅲ a 期とⅢ b 期に対比したものであった〔高橋1990・寺崎1996〕。この前提は、一括性を認めることにある。しかし、当該土器群を見る限り、巻大沢Ⅲ a 期に対比可能な土器は見当たらない。この点は地域差の可能性を否定できないのだが、少なくとも共伴した外来系の土器には明かな時期差がある。当該土器群については、報告書の記載にやや反するが、一括的な出土状況を積極的に評価しておきたい。

雨池・大沢遺跡出土土器群の編年的位置付け 両遺跡から出土した土器群は、出土量そのものが少なく、出土位置にも顕著なまとまりは認められなかった。また、遺構内一括出土例もわずかながら存在するが、伴う土器の個体数が少なく、土器の変遷や特徴を見極めるためには微弱であり、当該資料から土器の変遷を追うことは難しい。しかし、今回の目的が土器の編年ではなく、両集落の時期差を見極めることにあるため、各集落出土の土器群の全体からそれぞれの編年的位置付けを行いたい。

雨池遺跡の土器群において、半截竹管等で描かれた文様を有する個体はかなり少ない。これらわずかな事例の中で、特徴的な文様を挙げるとすれば、口縁部等に施された縱位竹管沈線文が掲げられる（1～2・10～13）。この類は、巻大沢Ⅲ a 期で特徴的である。また、唯一出土した蓮華文の土器（5）は、上端部を三角形状に彫去するもので、巻大沢遺跡では第Ⅱ期の土器群に顕著である。編年的な時期を把握するための事例が少ないが、状況的には巻大沢Ⅲ a 期の土器群に近い様相を持っているものと判断したい。

大沢遺跡出土土器群の場合は、半截竹管による平行隆線文や C 字状の爪形文など比較的一般的な事例が多い。これらの中で注目される文様としては、連鎖状竹管手法により描出されたやや縱長の蓮華文（6）と、文様帶の区画内において上端に施された刻目状文様（4）の存在である。前者は、清水上 A 地区 No付土器群のそれより短く、後者の刻目状の文様についても、巻大沢Ⅲ b 期の特徴として指摘されている。ただし、半截竹管による平行文が多条化した事例（14）が存在するが、これには爪形文が伴っていない。多条化については、新保式第Ⅳ段階〔加藤1995〕の標識とされる富山県八尾町の長山遺跡出土土器群に顕著であるが〔八尾町教委1985〕、巻大沢Ⅲ a 期にも看取される文様構成である。このため、本集落の時期については、おおむね巻大沢Ⅲ b 期を主体としつつも、とりあえずⅢ a 期を含むような時間幅をもつものと理解しておきたい。

以上は、わずかな事例を対比しただけの検討であり、雨池・大沢両遺跡出土土器群の編年的位置付けとしては不充分といわざるを得ない。しかし、両者の文様などに相違が認められた事実に注目し、雨池と大沢から出土した両土器群については、それぞれ古相と新相という相対的な時期差があったものと判断したい。ただし、両者の時間的な隔たりは小さいものと考えられ、一部重複もしくは連続的な関係を考慮する必要がありそうである。

c 胎土と縄文地文の転換と土器群の変遷

これまで行った縄文土器の検討結果をまとめると、胎土と縄文地文、そして編年的な位置付けにおいて、互いに様相差があることが判明した。以下において、本項のまとめを若干行っておきたい。

胎土と縄文地文の転換 ところで、その差異には一つの共通した特徴がある。まず、胎土については、「雨池タイプ」と「大沢タイプ」を設定したが、大沢集落には「雨池タイプ」がほとんど存在せず、反対に雨池集落では若干ながら「大沢タイプ」が出土していた。また、縄文地文を見ると、大沢集落では L R 単節斜縄文が多く、雨池集落では R L 単節斜縄文が多い。この事実は、両遺跡の差異を際立たせる特徴と

することができるが、相手側に特徴的な縄文地文の出現比率は、大沢遺跡ではR L 単節斜縄文が10.8%に過ぎないのに対し、雨池遺跡ではL R 単節斜縄文の比率が33.3%と、その3倍に達していた。

このような事実は、雨池集落側からすれば大沢集落との共通性をもつが、その反対は顕著でなかったことになる。このような両集落における胎土と縄文地文の差異は、前述した土器群の変遷観からすれば時期差に起因したものであった。雨池から大沢へという変遷を前提とすれば、胎土や縄文地文の変化は、雨池段階で始まり、大沢段階に至る頃にはすべて転換していたことになる。つまり、雨池段階当初は、「雨池タイプ」の生地を使って土器づくりが行われたが、いつしか「大沢タイプ」の生地も使われるようになり、大沢段階では「大沢タイプ」が縄文土器製作の生地として確立されることになる。したがって、土器の胎土は、「雨池タイプ」から「大沢タイプ」へという新旧の変遷観で捉えられることになる。ただし、他地域まで範囲を広げた中で、どこまで普遍化できる事項かについては現段階では明らかにできない⁹。

しかし、このような変化は、縄文人の集団においてどのような状況下で起こり得るのであろうか。土器づくりは、一つの技術であり、絶えず改良が加えられている。したがって、改良される製作工程の一部に材料となる粘土や地文等に変化が生じることは当然であり、時代の変化によって流行も異なる。このような場合、胎土や縄文地文に生じた差異は、ある程度地域的な広がりを持つ可能性が高い。とすれば、当該事象の一般化あるいは普遍的な理解に通じることになり、土器群の変遷の目安ともなり得るであろう。

しかし、今回の検討が、主に土器を対象としていることから、土器づくりの扱い手にも大きく関わっていることも事実である。従来から、土器づくりは女性といわれている。とすれば、土器づくりの扱い手の世代交代により、胎土や縄文地文が様変わりした可能性が生じてくる。確かに雨池は、小さな縄文集落である。したがって、家族単位など縄文人の集団としては最小単位の可能性が高い。土器づくりの扱い手が複数ではなかったことも考えられ、このような縄文集落の実態があるとすれば、土器の胎土や縄文地文が大きく変化した事由の一つとして挙げることは否定できないであろう。今後は、類似例等の蓄積をまって再検討を試みることとした¹⁰。

土器群の変遷と試案 ところで、大沢・雨池両遺跡から出土した土器群の検討から、両者が時期差で捉えられることが判明した。それぞれの併行関係については、雨池遺跡が巻大沢III a期に、また大沢遺跡は同じくIII a～III b期におおまかな対比が可能と考えられる。両者の差異は、土器群の僅少さの故に、必ずしも明確ではないが、それぞれ胎土や縄文地文に差異があったことが確かめられたわけである。しかし、このような本遺跡群の事例が、どこまで一般的な事象とができるのか、対比可能な事例がないことから、現状での判断は難しい。巻大沢III期土器群の再検討を含め、今後は胎土や縄文地文の差異などを含めた検討が必要といえよう。

また、新崎式土器について、その定義的な問題や上限と下限の設定、および前後型式との区分といった問題についても、まったく触れなかった。さらに、巻大沢遺跡のIII a期とIII b期の各土器群、および清水上A地区No付土器群というある程度一括性がうかがえる資料により3段階ほどの変遷観を示したが、それぞれの時期区分や併行関係についても明確な言及を避けたものとなっている。この点については、充分煮詰め切れなかった本論の限界もあるが、安易な時期区分により、これまでの混乱をさらに助長しないよう配慮した意味も含んでいる。しかし、今回の検討目的が、雨池・大沢両遺跡出土土器群の相対的な前後関係の把握にあることからすれば、提示された土器群が新崎式土器の範囲全てを網羅していない可能性など、多くの課題を持っていることは確かである。したがって、越後における新崎式併行期の土器編年については、「清水上A地区No付土器群」の評価などを含め、今後更なる検討が必要といえそうである。

3) 大沢・雨池遺跡の住居と集落

大沢・雨池の両集落は、互いに隣接した台地上に選地するが、出土土器群の胎土や縄文地文に差異があり、これらが相前後する時期差で捉えられることが判明した。ただし、胎土や縄文地文の一部について互いに共通することから、雨池から大沢へと集落が展開した可能性が高いことも確かめられたのである。

ところで、両遺跡を集落と理解するためには、集落構成員が生活の拠点とする居住施設としての住居がなくてはならない。しかし、大沢・雨池の集落には、堅穴住居が1棟も存在せず、住居としたもの全てが平地式で占められていたこと、しかもその住居の認定が5個の柱穴だけであり、床面や炉跡も検出されていないことから、容易には理解し難いものとなっていた。したがって、両遺跡を集落として検討するためには、まずこれら平地式住居の存在を明らかにする必要が生じることになる。本項では、まず平地式住居について若干の検討を加えた後、両集落について若干の考察を試みたい。

なお、主柱五本式の平地式住居の可否については、当該住居形式が関東から北陸に所在することが確かめられるため〔宮本1996〕、以下の検討では平地式住居の存在を前提に検討を加えたい⁴⁾。

a 平地式住居の検討

雨池・大沢の各集落で把握された平地式住居は、雨池遺跡で12棟、大沢遺跡では21棟であった。しかし、実際には、住居の復元に使用できなかった多くの柱穴が残され、さらに木根株下などにおいて検出できなかつたものを含めると相当数に上る未確認住居の存在が想定できる。また、同様な問題から、復元された住居も木根に隣接した場合、柱穴の配置が不分明となった事例が少なからず存在し、今回例示した住居の平面形が全て妥当というわけにはいかない。しかし、主柱の5本全てが判明した事例は、雨池遺跡で11棟、大沢遺跡では15棟に達し、それらの平面形に一定のパターンが看取できることから、これら形態の妥当性については、ある程度認定されるものと判断できそうである。そこで今回は、当該住居の初例となった尻振坂遺跡の事例を含め、平面形の類型化と、変遷観等の課題について若干の検討を試みたい。

なお、平地式住居の平面形については、尻振坂遺跡において試案を示したが、今回の類型化とは視点あるいは分類の基準が異なることをあらかじめお断りしておきたい。

平地式住居の類型区分 第19図に提示した分類試案は、3遺跡あわせた35例について、大きく4分類したものである。分類の基準とした形態は、第1類と第4類である。第1類の平面形態とは、間口側からはほぼ直角に側柱が配置されるもので、形状としては野球のホームベース形を呈する。これに対する第4類とは、奥の側柱が間口側より幅を狭くし、全体としては将棋の駒形に近い形状を呈するものとした。両者はともに、奥行きの深浅による形態の差異がある。第2類と第3類は、基本形とした第1・4類の変異的形態と判断されるものであるが、第2類は頂部の奥柱が突出して鋭角を呈し、第3類は反対に鈍角となるもので占められる。第3類は、第4類の基本形とした原則を維持しつつ、頂部奥側を占める3本の柱穴が左右のどちらかに偏って配置されるものである。奥行きは概して狭いが、間口幅に近いものと半分程度のものが認められる。第2類は、頂部の奥柱が突出し、鋭角を呈するものとしたが、aとbに2細分した。a類は、側柱が平行もしくはやや間口側より外側へ広がるもので、第1類の変異形態とすることのできる事例のほか、正五角形を志向する形態を含んでいる可能性を持っている。また、b類は、第4類の原則を維持しており、頂部の奥柱以外は第3類に近似することを考え合わせれば、第3類と第4類はほぼ同類とすることはできそうである。ただし、第2類については、その形状を見ると第1類や第3・4類との関わりを持つつ、頂部の突出などに独自性が認められること、さらに尻振坂遺跡S I-98住居事例のように左

右対称形が存在することから、定形的な類型とした第1類や第4類と同様に、一つの独立した形態として成立する可能性が残されることになる。

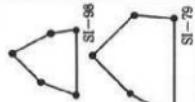
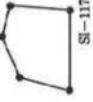
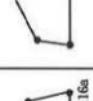
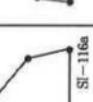
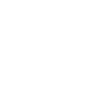
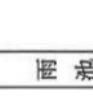
平面形態の変異 ところで、第1類と第4類以外、頂部など奥側の主柱は、左右に片寄り結果的に均整の取れない平面形を呈している。この事由については、これら住居が平地式であり、半地下式である堅穴住居のように床面を掘り込んだ壁が存在しないことから、主柱の配置も形態的な規制が弱く、ある程度ルーズでも良かった場合などが考えられる。しかし、住居が立体的な構造物である以上、屋根など上からの重量を支え、横方向の力にも耐えられる強度を持つことが必要である。したがって、住居の構造は、ある一定の建築基準を満たしていなければならないことになる。とすれば、平面形態に現れた歪みにも、何らかの理由が考えられる。

そこで、三島郡出雲崎町タテ遺跡の事例をみてみよう（第20図）〔新潟県教委1985〕。本遺跡は、主丘陵から伸びた尾根の先端付近に立地する遺跡である。住居跡は3棟が検出されたが、概して傾斜の強い斜面に所在するため、住居と地形の関係が見極めやすい。集落の時期は新保式期の後半に相当し、尼振坂遺跡で集落の主要時期とされる第II群土器より若干古相を呈する段階である。住居は、一部に壁が巡り堅穴状を呈するが、斜面の一部をカットし床面を造成したものであり、一般的な堅穴住居と同列には扱えないかも知れない。しかし、住居の平面形が確認され、しかも炉跡が明確なことから、極めて貴重な事例とすることができる。住居の主柱は5本であり、その平面形は第19図に示した分類の中で理解できる。

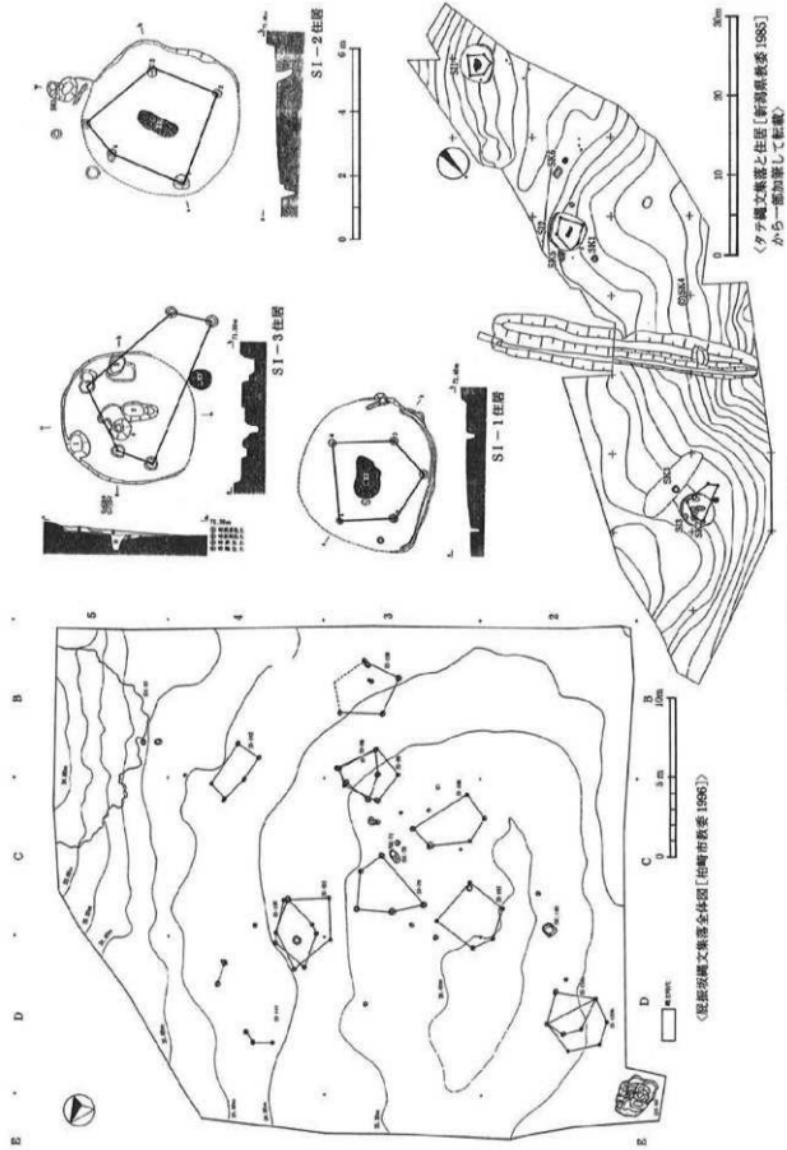
S I - 1 住居は、第1類に分類される。間口側は斜面下方にあり、そのラインは等高線と平行し、主軸が等高線と直交するようにして設定されていたことがわかる（ α パターン）。S I - 2 住居も第1類に分類できるが、頂部奥柱が斜面下方へ偏った事例である。本住居の場合は、間口側のラインが等高線とほぼ直交し、主軸が等高線と平行する（ β パターン）。S I - 3 住居は、第3類に分類できる。本住居の平面形は、ほぼ円形で報告されているが、焼土検出部分を炉址とすれば、等高線が張り出す部分へ住居の広がりを想定せざるを得ないであろう。本住居の場合は、間口側のラインが等高線と斜位45度で交差し、したがって主軸も等高線とは斜めに交差する事例である（ γ パターン）。

これらの事例と尼振坂遺跡の事例を対比してみたい。尼振坂の場合、概して平らであり斜面も緩やかであるため一部判断に苦しむ事例もあるが、 α パターンにはS I - 107・142、 β パターンにはS I - 161・159 b、 γ パターンではS I - 79・108などが該当しそうである。このように見えてくると、一見任意に見える柱穴の位置は、斜面などの地形によって異なる配置パターンがあったといえそうである。つまり、平面形が整う事例とは、主軸が等高線と直交する場合であり、平行する場合では斜面の下方側に頂部の奥柱が位置をずらし、等高線に斜位に横切る場合は側柱側を張り出すことが一般的であったと考えられるのである。ただし、前述したように、動かし難い壁を持たない平地式住居の性格上、柱穴の配置に規制が少ないとても事実である。したがって、柱となる木材の曲がり具合など実際に屋根を建ち上げる段階で、柱穴の配置も微調整がなされた可能性があり、全てがパターン通りであったとは言えない。しかし、建築物であるが故、その強度を保つためある程度の計算のもと、柱穴の位置を調整していたのであって、適当に造られた柱穴配置ではなかったことが確認されたであろう。

平地式住居の変遷 さて、平地式住居の平面形、特に5本の主柱穴を結んで描かれる五角形の图形とは、住居を建てる場所の地形によって頂部奥柱などの位置を変えているとすれば、前述した分類がそのまま時期的な変化で捉えられないことを意味する。したがって、尼振坂遺跡で想定した平地式住居の変遷觀は〔品田1996〕、住居の平面形で想定していることから、そのままでは適当でないことになる。

第 1 類	第 2 類		第 3 類			第 4 類	
	a	b					
尾振坂遺跡							
雨池遺跡							
大沢遺跡							

第15回 主柱五本形式平地住居分類試案



第20図 広坂坂文集落とタテ鬼文集落

(タテ鬼文集落と住居〔新潟県教委1985〕
から一動加筆して転載)

平地式住居の平面形とは、均整が取れていることを基本とすれば、等高線と直交するように主軸を設定した α パターンを原則として考える必要がある。この前提条件を満たす形態とは、第1類と第4類となるが、第2類bと分類した中に左右対称で均整が取れた事例が含まれていることからすれば、基本形の一つとして考慮しておく必要がありそうである。

そこで第19図の分類試案に立ち戻りたい。尻振坂・雨池・大沢の各遺跡は、それぞれ相対的ながら時期差として把握される。新保式の終末頃（尻振坂第II群土器）と想定され、3遺跡の中で最も古く位置付けられる尻振坂遺跡では、第1類から第3類までの住居が存在するが、第4類については確認されていない。新崎式の古い段階と考えられる雨池遺跡では、第1類と第2類aが確認されなかった。これら両遺跡の事例だけを見ると、第1類の古相と、第4類の新相という関係が浮かぶが、雨池遺跡の次段階と想定される大沢遺跡では、第1類から第4類までが確認されており、単純な図式では把握できない。また、尻振坂遺跡における第4類の欠落についても、第3類が β ・ γ パターンで占められ、これらの α パターンが第4類とすれば、本類の欠落することはできない。しかも、尻振坂S I-151b住居そのものはかなり第4類に近似していることからも、短絡的に第4類を新しい形態とすることは無理である。また、尻振坂遺跡より若干古相を呈するタテ遺跡でも、第1類2棟とともに第3類1棟が検出されている事実からも（第20図）、現状では新古の区分を行うことはできそうにない。

第1類については、タテ遺跡と尻振坂遺跡および大沢遺跡で検出されている。ただし、大沢遺跡の事例は、大溝によってプランの大半が失われていたため、柱穴の配置そのものに不確定要素を含むことから、場合によっては除外できるかも知れない。したがって、第1類が新保式期に特徴的な形態である可能性が生じるが、事例が少ない現状ではにわかん判断は危険であり、可能性のみ指摘しておくことにとどめたい。また、雨池と大沢の各遺跡は新崎式期の集落として把握されたが、これら2遺跡で主体を占める住居形態は第3類と第4類である。両遺跡で五角形の平面形が確認された事例は26棟となるが、これら69.2%を占める18棟までが該当する。また、第2類bについても、頂部奥柱の位置が外側へ突出するだけで、その他の形態に大差ないことからこれらも含めると、実に84.6%までが将棋の駒形を基本形としていたことになる。現状での判断は難しいが、新崎式期に特徴的な住居形態である可能性が考えられそうである。しかし、今回の検討では、検討対象とすることのできた事例が少ないとから、今後改めて事例を蓄積し再検討を試みることとしたい。

b 大沢・雨池における縄文集落の構成と性格

大沢遺跡と雨池遺跡は、互いに隣接する台地上に営まれていた縄文集落である。両者は、広場の有無による大きな差異があり、集落景観は大きく異なっていた。また互いに時期差があり、同時に併存した可能性が少ないとことが出土土器群の検討から導き出されている。居住した縄文人の集団としては、土器様相からすればまったく別個の集団であった可能性も多い。しかし、土器の胎土に一部共通したものが、古相を呈する雨池遺跡で認められており、集団構成員の一部かも知れないが、雨池から大沢へと居住地を移動したこととも充分に考えられるところである。このような状況を一つの前提とすれば、広場の有無を最大の特徴とする集落景観の相違という結果には、極めて大きな意味が込められているように感じられる。この点は、集落の発展過程として捉えることができる部分もあるが、立地や環境に適合した集落が、それぞれの条件に即して形成され、また縄文人にとっても性格や位置付けの異なっていたことなども想定されるところである。以下においては、広場を持つ集落と持たない集落を視点に、集落を構成する遺構群にどのような違いが認められるのかなどについて検討を加え、集落の性格などにも若干の言及を試みてみたい。

遺構構成の差異 大沢・雨池両集落の遺構を対比した場合、共通点は平地式住居の存在であるが、相違点としては掘立柱建物・貯蔵穴・墓坑の有無を掲げることができる。この有無とは、広場を持つ大沢遺跡にあって、広場を持たない雨池遺跡にはないものである。これらの内、墓坑については、広場を持たない尾張坂集落で1基の土壙墓が検出されていることから、集落内の居住者がその死に際し埋葬されたものであり、集落の性格等々とはほとんど無関係と考えられる。したがって、両者の差異とは、掘立柱建物と貯蔵穴の有無という点にほぼ集約されることになる。

広場を持つ集落と持たない集落 広場の有無は、集落景観における最大の差異を示すこととなるが、この差異が遺構構成や種別に見られる貯蔵穴や建物跡の有無とも大きく関わるとすれば、それらの検討により、ある程度集落の実態に近づけるかも知れない。

貯蔵穴については、その性格を食料等の保存・保管機能を有する土坑とすることができる⁵。食料を貯蔵穴に保存・保管する場合、当然日常生活で消費するよりはるかに多い量が収穫されなければならず、またその必要性においては食料の入手が困難となる場合を想定し、それに対する備えとして実行されるものと言える。これらの条件に適合する時期は、前者は秋であり、後者は冬である。また、春から夏にかけての季節は、植物食料が不足する時期であり、これらへの対処もなされた可能性は否定できない。しかし、地下に保存可能な収穫物が大量に得られるのは、やはり秋ということになるのではないだろうか。とすれば、主に秋に収穫された堅果類などが、貯蔵穴内に納められたと考えることができ、これらを備える大沢遺跡とは、少なくとも越冬が可能な集落であったと理解できそうである。

しかし、雨池遺跡の場合、近世以降とされる焼土坑以外の土坑は8基であるが、これらの内3基（SK-9・14・51）は、検出された位置などから焼土坑との関わりが想定される新しいものであった。縄文時代の可能性を持つ土坑は残りの5基となる。SK-38は、埋設土器が検出されていることから、貯蔵穴とは考えにくい。これら以外の土坑（SK-74・75・79・80）は、すべてSI-118住居群のプラン内もしくは隣接した位置に所在しており、この部分だけ取り上げれば検出状況そのものは大沢遺跡と大きく変わらない。しかし、これらの土坑はわずか4基であり、大沢遺跡における26基とは、その数において比べものにならない。また、大沢遺跡の貯蔵穴法量図（第5図）に当てはめると、すべてそれより小形の部類となって、貯蔵穴と判断した法量分布域とは重複していないのである。さらに遺物をともなった事例が皆無であるため、縄文時代の所産とすることができる確実な物証も得られていないことになる。雨池遺跡のように、貯蔵穴と断定できる土坑がほとんど存在しないという事実とは、少なくとも越冬能力において大沢集落より格段に劣っていたことの証明とすることはできよう。雨池遺跡例と同様な事例は、尾張坂遺跡でも確認されることから、貯蔵穴の欠落は広場を持たない集落の特徴の一つとことができそうである。

掘立柱建物については、柱穴が方形あるいは長方形状に並ぶものとし、円形や五角形に並ぶ平地式住居と考えられるものとは区別したい。ところで、このような掘立柱建物の性格について、どのような解釈が可能かは、やはり物証が乏しい現状では評らかにできない。柏崎平野周辺の事例としては、これまでに前期後葉の大宮遺跡例と後期前葉の十三本塚北遺跡例が確認されている。これらの事例には、全て炉跡が検出されていないが、これらが高床式であった可能性が高いのではないだろうか。特に、大沢遺跡の事例をみると、主軸線上の両端に小ビットが検出されているが、この解釈については、棟持用の柱穴としては小さいことから、梯子などを設置した痕跡という可能性を考慮しておきたい。

なお、十三本塚北遺跡例は、集落内に複数の掘立柱建物が配置され、しかも同じ場所に数度の建て替えが連続的になされていたが、大沢例とは時期的な隔たりも大きいことから、直接的に対比するには躊躇を

覚える。しかし、大宮例は、互いに隣接した遺跡であり、建物自体の構造は相違しても、集落内における建物跡の相対的位置などに共通点が見受けられるため、両者はほぼ同じ目的を持っていた可能性が高い。まず、注目される事実とは、広場に面した位置、それも広場から見れば西北西に位置するという共通点であろう。両者は、柱の並ぶ方位が90度ほど異なるが、長軸は大沢例のN-16°-Eに対し、大宮例ではN-27°-Eとその誤差は11度でしかない。この角度の差異が、建設された時期の隔たりによるものとすれば、集落内における位置がある程度決められていた可能性を示すことになる。

このような事実を見ると、当該建物跡の性格には、精神的な拠所など信仰的な意味合いを感じられてくる。しかし、広場に面する方位に正面観を据えると、西北西方向に対象物となるものは何もなく、強いて挙げるとすれば丘陵の山の端に沈む夕陽程度である。また、広場を介する方位としては、刈羽三山の一つである八石山頂が大宮例の延長線上に位置する。しかし、実際は丘陵の山林によって視界が遮られており、山を対象とすればほぼ全貌を眺望できる靈峰米山が無視されることになるため、現状からすれば方位を根拠として、信仰的な意味付けを想定することは難しい。

信仰関連以外に、縄文人の集落に重要性を指摘できる施設としては、食料の貯蔵庫や保管庫、あるいは当時の交易がどの程度であるのか経済的な動向は見極めにくいか、交易品などの物品を納める倉庫なども、選択肢の一つとして挙げられるのではないだろうか。前者の場合、確かに大沢遺跡の状況では、住居の内外に貯蔵穴が存在し、その数も26基に上ることから、規模の大きな貯蔵庫の必要性は薄く、貯蔵穴などのような目的や機能とは異なっていたかも知れない。しかし、大宮遺跡では貯蔵穴が明確な形では把握されておらず、集落共同管理型の倉庫という想定も全面否定はできないよう感じられる。また、大宮遺跡では、磨製石斧や甲状耳飾りなどの生産を行っており、これらが集落構成員の協同によるものとすれば、縄文人集団の共同体的な運営がなされていた場合も否定できない。ただし、いずれを想定した場合でも考古学的な物証が得られていないことから、安易な想像は慎むべきであるが、広場を持つ集落に1棟だけ建設されていたという事実は、わずか二つの事例ではあるが、集落にとって重要な施設と言う意味では変わらぬさそうである。

ところで、長方形に柱穴を配置する建物は、広場を持つ集落に建設され、広場を持たない集落には存在しない可能性が高いが、広場の有無は、それだけで集落内における規範の強弱を表わしている。両者の差異を見ると、大沢集落が雨池集落より2倍近い住居群の数や密集度をもっており、単純に考えれば集落人口や単位集団もそれだけ多かったことになる。これを前提とすると、雨池集落は単独に近い単位集団によって構成され、大沢集落は少なくとも2ないし3以上の単位集団による集落であった可能性が指摘できる。大沢集落の場合、複数の単位集団により一つの集落が構成されていたことから、作業等の協同や建物など施設の共同管理を行うこととなり、そのためには集団間の結束を高める必要性が生じてくる。広場とは、そのための機能を備えていたと考えができるのではないかだろうか。

なお、建物跡の性格としては、上述した二つの解釈以外に、集会場なども考えられる。しかし、それぞれの建物の平面積は、大宮遺跡例がおよそ15m²、大沢遺跡例ではわずか9m²にも満たない。集落内の構成員が集う施設としては小規模であり、一部の集落員が使用する権威ある施設とするには、縄文社会の実態が未解明であり、考古学的な根拠にも乏しいと言わざるを得ない。

集落の類型 以上の検討から、雨池集落と大沢集落は、広場の有無とともに遺構の種別や構成にも差異のあることが明かとなった。また、住居数やその密集度にも相違が認められ、これらは集落に居住する単位集団の数に関連する可能性が考えられた。複数の単位集団が同じ集落に居住した場合、互いの協調や協

同が集落の安定や維持につながることから、このため全体の結果も重要となる。広場とされる「場」には、具体的な儀式や行為は明かでないにしても、これらの目的を果たす機能が付随していたと見られるのである。そして、単位集団単独の集落では、広場的な空間が特に必要なかったとすれば、縄文集落を理解する視点の一つに広場の有無という観点が掲げられるのであり、縄文集落の類型化でも重要な意味をもつことになる。したがって、広場を持つ集落を第Ⅰ類型とし、持たない集落を第Ⅱ類型として大別する類型化には〔品田1996〕、ある程度の妥当性を認めることができよう。

さて、大沢集落は、広場を持つことから第Ⅰ類型に類別できる。しかし、遺構の密集度は概して希薄であり、顯著な土器捨て場（廐棄場）の存在も確認されず、存続時期も比較的短期であったと考えられる。これに対し、隣接する大宮遺跡や確認調査で把握されている剣野B遺跡などは、同じ第Ⅰ類型に類別されても、遺構分布の密度が高く、規模の大きな廐棄場から出土する遺物も多量であり、大沢遺跡と同列に扱うことには無理がある。このため、第Ⅰ類型については、遺構密度が高いなどの特徴を備えた大宮遺跡などをA類に、また概して希薄な大沢遺跡などをB類に細別し、それぞれを各類型の代表として、前者を「大宮類型」、後者を「大沢類型」と呼称することとした。

雨池遺跡は、広場が設定されていないということから、原則的には第Ⅱ類型に類型化することができる。第Ⅱ類型は、比較的広い平坦地に立地し、平地式住居が少ないながら重複して営まれる尻振坂遺跡などの事例以外に、狭い尾根筋に1棟程度の住居が想定される夏波の百塚遺跡〔柏崎市教委1989〕や国光の塚群遺跡〔柏崎市教委1983〕などの事例がある。この場合も両者を同列には扱えないことから2細別し、前者を第Ⅱ類型A類（尻振坂類型）、後者を第Ⅱ類型B類（夏渡類型）と呼称することとした〔品田前傾〕。したがって、広場を持たず、複数の平地式住居が重複する雨池遺跡の場合は、第Ⅱ類型A類に類別されることになる。

しかし、雨池遺跡では、柱穴10本、長軸（柱穴間）7.38mにも達する大型住居1棟（S I-105 a b住居）が確認されていることから、このような住居が皆無であった尻振坂遺跡とはやや趣きを異にする。この点は、大型の平地式住居と掘立柱建物との差異はあるが、大沢遺跡に類似した構成と見ることが可能である。特に、S I-105 a b住居には炉跡が2箇所あり、その一つであるS X-66炉跡は長軸が1mを超える大型炉で、焼土化が著しいことから、かなり長期にわたり使用されたことがうかがえる。この事実は、分類上は第Ⅱ類型A類ではあっても、より第Ⅰ類型B類とした大沢集落に近い中間的な集落形態であった可能性を考慮せざるを得ないであろう。

このように見てくると、大沢集落も雨池集落を介せば、尻振坂集落とそれほどの差異がある訳ではない。確かに、広場や建物跡・貯蔵穴などの有無は大きな差異であるが、やはり第Ⅰ類型A類とその他の間にには格段の開きがあるよう思えてならない。

柱穴・ピットの法量と特徴 ところで、尻振坂遺跡の考察において、集落の性格について越冬を考慮していない夏集落ではないかとした〔品田前傾〕。その事由としては貯蔵穴の欠落のほか、平地式住居であることと、その柱穴が小さく浅いことから、このような簡易な構造では冬季間の積雪に耐え難かったのではないかとしたものであった。当時、同等な対比が可能なデータがなかったこともあるが、今回はこの点を確かめる意味も込めて、雨池・大沢両集落について同じ観点から柱穴やピットの法量分布図を作成した（第22・23図）。3遺跡のデータを対比すると、歴然とした顯著な差異は認めがたく、特に第Ⅱ類型A類の尻振坂遺跡と第Ⅰ類型B類の大沢遺跡の両者においても目立った状況は看取し難いところである。しかし、細部を詳細に見ていくと、それぞれの特徴をうかがうことができる。

まず、尻振坂遺跡の事例は、柱穴第I群から第II群、そして第III群と柱穴深度を深くしたとしても、規模の目安となる直径は35cm程度でしかなく、40cmを超えることは希であった。これに対し、雨池遺跡と大沢遺跡では緩やかながら、柱穴深度を深くすると40cmラインを超えて直径も大きくなり、両者は第II群まではほぼ軌を同じくしながら、第III群に至って雨池遺跡が打ち止めとなり、差異を生じているのである。わずか3遺跡のデータでは心許ないが、尻振坂遺跡と大沢遺跡におけるこのような差異が、夏集落と越冬が可能な集落との差異を表わしているのではないだろうか。また、広場を持たないにもかかわらず、焼土化の著しい炉跡を伴う大型住居が検出されている雨池遺跡の場合、柱穴の法量分布状況でも両者の中間的な状況を持っていることになる。

ところで、中期初頭から前葉期における第I類型A類の集落については、今のところ対比可能なデータがない。前述してきた大宮遺跡は、これまで対象としてきた3遺跡より古い前期後葉の諸磯a～b式期に併行するため、直接的な対比は若干無理を伴うかも知れないが、参考程度に概観しておきたい。

大宮遺跡は、広場をもつ環状集落であること、大規模な廐棄場2カ所から大量の遺物が出土していること、また块状耳飾りや磨製石斧の生産を行っていることなどの特徴を備えた柏崎平野では唯一全面調査された第I類型A類の繩文集落である。ピットとされた遺構数は770個に上るが、その法量分布では第I群から第IV群までの相対的な群別が可能である。この大宮遺跡例を、前述した3集落の事例と対比した場合、新たに第IV群という大型ピットが出現するとともに、大宮第II群に属するピットの深度が30～50cmであり、これまでの第III群の一部に食い込むまで範囲を拡大していることがわかる。また、第I群と第II群の総数がともに増加することにより、両者の境が不明瞭となり、これまで3細分が可能であった第I群の細分もできなくなるなどの差異を確認できる。

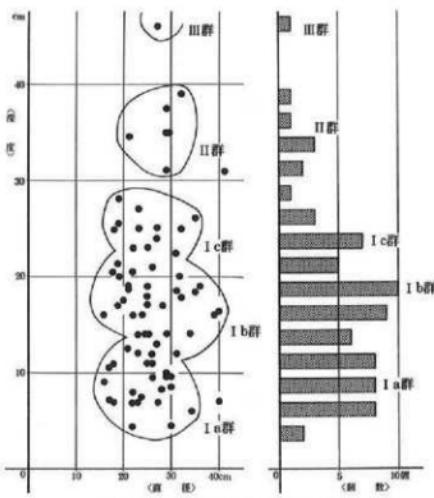
両者の類似点としては、第I群の規模が直径において若干大きくなるが、深度の分布範囲は同じであったことである。この事実とは、第I群のピットが住居の柱穴としては極めて一般的であったことを示している。そして、第II群と第III群の規模が相対的に大きくなることと、個数の増加が第I類型A類の特徴であり、第I類型B類や第II類型A類との相違点としてまとめることができる。このような大宮遺跡の状況は、時期が異なるわずか1例の対比であるが、第IV群の出現と第II群の拡大などは、広場を持つ第I類型とはいってもA類とB類とでは大きく相違していたことを示している。

しかし、大宮遺跡でも、柱穴・ピットの主体は第I群であった。このことは、第I群が一般的住居にとって極めて普通の柱穴であったことを示す。大宮遺跡の評価については、充分意を尽くせないが、夏住居とともに冬住居も伴う通常的な集落であった可能性が考えられ、このような集落が中核的集落として展開した可能性が高い。今後の課題は多いが、これが第I類型A類の正体とすることができるのかも知れない。

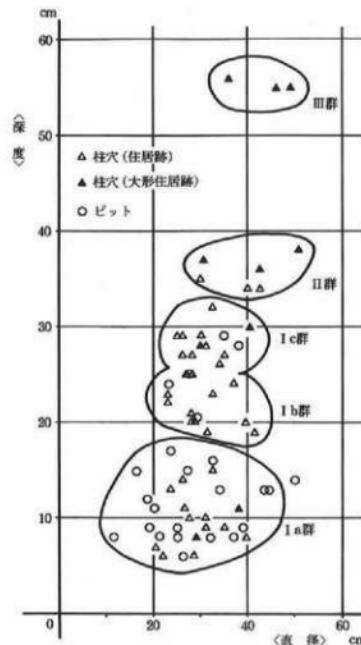
冬の住居と夏の住居 しかし、広場や貯蔵穴そして建物跡の有無という歴然とした差異が認められるところから、尻振坂集落と大沢集落を同一視することはできない。また、検討対象とした尻振坂・雨池・大沢の3集落では、住居形態がまったく同じ形式であるという事実から、大沢集落が夏集落の延長線上に位置し、そのため大きな差異を生じなかったことも考えられる。この場合、平地式住居そのものの性格や特性を見直す必要も生じてこよう。平地式はどちらかといえば夏向きの住まいであり、堅穴式は冬向きの住まいと考えられるが、実際越後では平地式が多く、関東では堅穴式が数多く調査されている。両地域の気候条件をみると、越後の冬は寒くて積雪が多く湿気も強いが、夏は蒸し暑い。関東の冬は寒くて乾燥し、夏は雨が多く湿気も強くて暑い。この状況から判断すれば、堅穴式は寒くて乾燥した条件下では住み心地が良くて、湿度が高かったり、あるいは気温が高く蒸し暑い場合には適さない住居様式であったと考えら

れる。越後では、寒い冬に湿気が強いことから堅穴式では不健康であり、蒸し暑い夏場では関東と同様風通しの良い平地式が選択された可能性が高くなる。結局、越後では、堅穴式が適合しない気候条件であったことから、夏冬を通じて平地式による住居が一般的な住まいとされた可能性は大きい。

平地式住居における問題点とは、冬場の保温と防寒対策が万全であり、多積雪対応型でなくてはならないことにあるが、大沢と尻振坂・雨池における一般住居の柱穴にそれほど大きな相違があったわけではない。また、保温・防寒を考えると、雨池S I - 105 a b 住居のような焼土化の著しい炉跡が、大沢跡で皆無である点はやはり大きな疑問が生じるところである。しかも、住

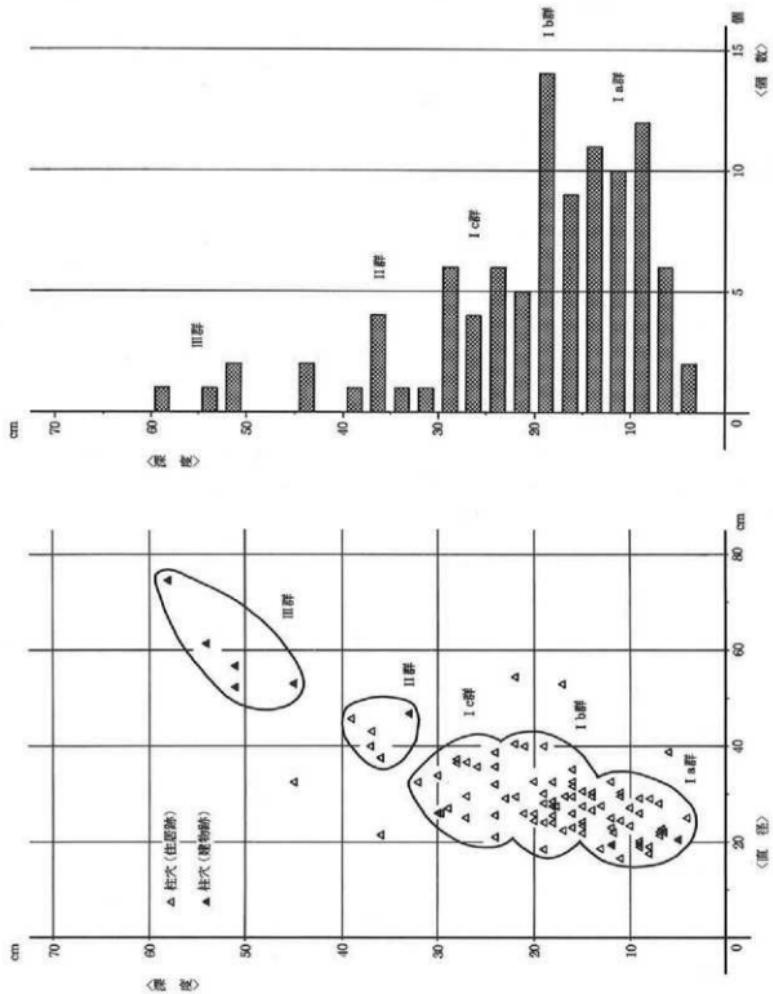


第21図 尻振坂遺跡柱穴類法量分布図



第22図 雨池遺跡柱穴類法量分布図

第23図 大沢遺跡柱穴調査分布図



居形式は、夏集落の可能性が高いと指摘した尾張坂遺跡と同形式であることは、住居が夏向きのままであり、広場があるからといって完全な冬集落とはなっておらず、大沢集落での越冬が不可能となってしまうことにもなる。しかし、26基も想定されている貯蔵穴の存在とその目的からすれば、越冬の可能性を高く考えざるを得ない。また前述したように、雨池遺跡では焼土化の著しいがを伴う大型住居の存在からすれば、これも単純に夏集落とは言い切れない。この点については、平地式住居の骨格となる構造そのものに、

つまり、夏用と冬用といつても基本的な構造に大きな差ではなく、これらを覆う屋根材や柱を少し太くするなど部材の強度で調整されていたことなどを考慮する必要がありそうである。

今回示した3集落は、住居形式などの様相で類似しつつも集落類型では微妙に相違し、営まれた時期も同一ではないことから、ある集団が集落を移転しつつ発展した足跡ということもあり得る⁷⁾。今後は、当該期に併行する第I類型A類の集落を含めた全体的な検討が必要であろう。夏冬集落の存否については、集落によって貯蔵穴や貯蔵庫の有無などの差異があることからすれば想定に無理がないことから、今後更に事例を蓄積し、再度検討を加えて行くこととしたい。

大型住居と掘立柱建物 今回主な検討対象とした3集落は、同時併存した可能性が少なく、相対的な序列は新保式期の屁振坂集落を最古に、新崎式期の雨池集落、大沢集落と続くが、それもあり時間を感じず、連続的に営まれたものと考えられる。ただし、雨池と大沢は位置的に近接するが、屁振坂については若干の距離があり、同一の単位集団あるいは関連した集団という保証はない。しかし、さきほどの柱穴・ピットの法量分布図で、最大規模となる第III群の出現を見ると、時期を追うごとに増加する傾向が看取されるが、これらはすべて大型住居や建物に伴う柱穴によるものである。また、一般住居以外の動向をうかがうと、屁振坂集落には存在しない大型住居が雨池集落では1棟が建てられ、大沢集落では掘立柱建物が建設されるというように、次第に建てられる建物が整備されていく様子がうかがわれる。ただし、雨池遺跡の大型住居とは、一般住居である主柱五木形式の平地式住居2棟を合わせたもの過ぎない。ところが、大沢遺跡のS-B-292建物とは、直径60cm前後、深さも50cmほどの大きな柱穴が掘られ、その配置も極めて規則的かつ規格的であることから、一般住居の建築とは異なった高度な技術が必要とされたであろう。そして、大宮集落の事例を合わせれば、第I類型のように、複数の単位集団により集落が構成されたと推測された集落では、掘立柱建物が付随していたと見られることである。

現段階では、この事実にどのような解釈を加えてよいのかは明らかでないが、集落を構成する単位集団の数、単独と複数と言うところに何らかの事由が隠されているように思える。つまり、雨池集落のように、単位集団単独と考えられる場合、それほど権威等にこだわる必要がないことから、単に大型の住居であっても不都合はない。しかし、複数の単位集団で集落が構成されていたとすれば、程度の差はある、何らかの統率が取れていなければならぬ。また、建物を管理していくとすれば、たとえそれが集落の共同管理としても、責任者の存在が必要となってくる。また、集落が単位集団の複合体となれば、構成員全員が対等と言ふわけには行かないのではないだろうか。これらの建築物の性格は明らかにし得ないが、大型住居であればその性格から家族単位の管理も可能であろうが、形式化した建物とすれば単位集団の共同体が管理し、広場を持つことからすれば、それなりの統率者を想定する必要があるのではないかだろうか。縄文社会を理解していく課題の中には、集落を構成する構造とその解釈などとともに、第I類型とした集落ではムラ長的な人物が、一つの集落を統率していた可能性なども考慮していく必要を感じるところである。

4) おわりに

さて、本節では、横山東遺跡群に所在した二つの中期縄文集落について、構造と遺物および住居を中心に、いくつかの検討を試みた。しかし、雨池・大沢両集落の実態とは、住居等の構造といつても主にピット・土坑で構成されたものであり、出土した遺物も若干の土器・石器が出土した程度と、得られた情報はそれほど多くなかった。また、雨池・大沢両遺跡を縄文集落と呼ぶにしても、絶対不可欠の住居構造に堅穴住居が一つも検出されていないこと、そして住居と呼ぶ構造が柱穴5本を組み合わせただけで、炉跡も

床面も確認されていないなど、まずはその前提から検討せざるを得ないものであった。したがって、これら平地式住居の検証や集落としての性格付けなど前提条件の検討が大半を占めることになり、結果的には集落の検討に必要な多くの課題までたどり着けなかった。しかも、本節で述べた検討も、類例や情報の不足から、集落の解釈や性格付けなどにおいて、かなりの憶測や類推が多く含まれ、今後の課題を多く抱えてしまうものとなってしまった。これらの諸課題については、今後調査され、また報告される近在の櫛文集落を検討することによって、改めて検証しつつ問い合わせこととしてみたい¹⁰。

註

- 1) 本文における新崎式土器の検討に際しては、中野純氏の協力を得た。
- 2) 今回、雨池・大沢両遺跡の土器群を時期差と捉えた。しかし、その差異は微妙である。土器の胎土において区分した雨池タイプと大沢タイプという二者の解釈については、土器作りにおける二つの流派が存在し、それぞれ異なる集団（単位的）の表象とすることもできる。その場合、雨池タイプの土器作りをする集団が存在し、その集団は雨池から大沢の地に移動し、大沢タイプの土器作りをする集団とともに、大沢集落といいつつの集落を形成していくことになる。このことは、土器の胎土が単位集団の認定に有効であることを示すとともに、広場を持つ集落の意味、そして広場を持たない集落の意味など、櫛文集落の在り方を解明することができる重要な意味を持っていることになる。
- 3) 本文で述べたことは、状況的に想定されることの一つであり、他の想定も可能である。例えば、櫛文土器の特徴的な胎土を見ると、古昔を呈する雨池段階において、雨池では雨池タイプを主体に大沢タイプが認められた。この点は、両者二つの集団がすでに交流していたことを示し、その場合雨池集団内に大沢集団の一部が取り込まれた可能性が高いことになる。そして、大沢段階へ移行したとき、雨池の集団はすでに雨池ではなく、他所へ移動したか、大沢の集団とともに大沢遺跡において、一つの集落を形成した場合の二者を想定することができる。大沢集落が雨池集落より時期的に新しく、かつ集落規模を大きくし、広場を持つ集落であったことからすれば、後の場合であつた可能性は小さくない。しかし、その場合、櫛文土器の胎土と櫛文原体の振りの方向は、雨池集団のそれになくなっていることから、雨池集団は、大沢集団に吸収されるような形で同化したと考えられることになる。ただし、両者にそれほどの時間差が看取れないにもかかわらず、雨池集団の特徴が急激に小さくなっていることは、雨池集団の他所への移動をあながち否定できない。今回の検討は、資料的に不充分であることから、上記の検討を一つの叩き台的な論議として指摘することとし、今後の研究の前段的な作業としておきたい。
- 4) 主柱五本形式の平地住居については、平地式であるが故の特別な柱穴配置と考えられやすい。しかし、後述するように、半地下式構造とする竪式柱と平地式の使い分けは、気候条件の差異によるものであり、それぞれの地域に適した住居様式が選ばれた結果に過ぎない。確かに、半地下式と平地式にはそれぞれの相違があるが、住居の建築方法や柱や屋根などの基本構造に差異はなかった可能性が高いのではないかだろうか。後述する出雲崎町タテ遺跡の住居は、単純に竪穴住居と半地下住居の柱穴配置は、基本構造が共通している可能性の高いことを示している。つまり、竪穴住居の柱穴配置を検討すれば、主柱五本形式より明確に抽出できるわけである。今回の検討に際しては、北陸や関東など他地域における主柱五本形式を、竪穴住居の事例から見極める予定であったが、紙数の制約などで果たせなかつた。機会を改めて検討してみたい。
- 5) ただし、調査結果からは、これら土坑が貯蔵穴であったことを確実に証明できる物証などは得られていないことから、状況的に判断したもののである。しかし、おおむね円形を指向する平面形は、隅丸長方形形状を呈する墓坑とは別個の形態として意識されており、明らかに区別される。また、平面規模に対し放して深度が浅く、不規則な分布などから柱穴の可能性も否定される。したがって、墓坑や柱穴でなく、しかも形状的に安定した土坑を消去法的に貯蔵穴とした。
- 6) 保温や防寒については、ある一定程度の積雪があり、これをを利用してカマクラ状に雪で屋根まで覆いつくすことができれば保溫効果は高まる。しかし、積雪が少ない初冬や早春などの時期は、北西の季節風に耐え得る密閉性が確保されていなければならぬ。多積雪対応型については、中期初頭から前葉期の積雪や降雪量の程度が明かでないため、具体的な検討を試みることはかなり難しい。ただ、柱穴の直径が20~40cmとすれば、柱材そのものは10~20cm程度と考えられ、直径20cmの柱とすれば現代の住居を考えると決して細すぎるわけではない。主柱五本構造により、どの程度の重量に耐え得る住居が想定可能なのかについて、ある程度の目安を立てておく必要を感じる。
- 7) 剣野B遺跡は、巻大沢田B期に環状集落として大きく発展する。土器の胎土や櫛文地文などの検討を行っていないが、大沢集落が環状集落を意図しつつも短命であることは、鶴川の流域変更といった自然環境の変化などを背景に、大沢遺跡から剣野B遺跡へ集落が移転し、展開した可能性などが想定できるかも知れない。
- 8) なお、本文などこれまで検討してきた平地式住居は、すべて主柱五本形式であったが、該期の櫛文集落に建てられた住居全てが、本形式であるとは言い切れず、主柱が4本あるいは6本の場合も考慮しておく必要がある。櫛文集落全体を理解する上で重要な問題ではあるが、現実的な問題として困難な部分が多いことから、今後の検討しなければならない課題のひとつとしておきたい。

2 庚申塚の経塚における経塚造営とその時期

1) はじめに－柏崎市域の礎石經出土遺跡－

第VI章で報告したように、庚申塚の経塚は「礎石經の経塚」（「一石經の経塚」）であることがわかった。経塚とは、一般に經典を模写して地下に埋納した遺跡をいう。庚申塚の経塚を礎石經の経塚と決定づけることができたのは、出土した大量の墨書碑が經典を模写した礎石經と判明したこと、さらに礎石經を副納品としてではなく主体的に埋納した状況が看取されたことによる。遺跡の性格を問わず、柏崎市内において礎石經が発見された遺跡は、本経塚以外に5例が知られているが（第24図）、はじめにこの5例を紹介したい。

小児石遺跡（1）は、小さな独立丘上の平坦地に営まれた中世墓地である。時期は13～16世紀で、ほぼ中世全般にわたって営まれていた墓地であったと考えられる。平成2年度の発掘調査では2点の墨書碑が出土している。うち1点には阿弥陀經の一節にみられ16文字が記載されており、多字一石經と考えられる〔柏崎市教委1991〕。

上脇井川の経塚には、マウンドを有した2基の経塚が確認されている。第2号経塚（2）は直径約5m、高さ約2.5mを計り、地元民によって20点以上の一宇一石經が発見されている。なお、約20mほど離れた第1号経塚からは「建久八年」銘を有する経筒などが同時に発見されており、紙本經が埋納されたと考えられている〔金子1985〕。

風牧山遺跡からは、珠洲焼片や五輪塔が出土しており〔山本1987・金子1987〕、同じ丘陵には紙本經が発見された三善寺経塚が位置する。この丘陵には、すでに消滅したが「車塚」（4）と呼ばれるマウンドがあったとされる。「車塚」からは人骨や渡来錢とともに「是」・「夫」・「水」などの一字一石經が発見されている〔田村1954〕。「車塚」を含め、風牧山一帯は小児石遺跡のような中世墓群、あるいは聖域的な観念で捉えられる遺跡と考えられる〔中野1988〕。

細越松尾神社経塚（5）は、神社境内から発見された。社の裏手にある斜面を削平し、数基の石造物を安置している。うち1基は宝鏡印塔であるが、その下から一字一石經が発見されたという。具体的な出土状況は不明であるが、石造物を伴う礎石經は近世に盛んになると考えられている〔松原1994〕。

東之輪出土の礎石經（6）は、多字と一字がともに確認されている。深度約1～2m付近では土層が締まっており、土層の断面には細い小礎の層がみられたという。小礎には、「南無妙法蓮華經」等の墨書がみられた。なお、発見地は「昔の道路の跡ではないか」とい合ったが其終点に当る位置とされている〔田村1987〕。

本節で考察の対象とするのは、礎石經を主体的に埋納した礎石經の経塚である。1～6のうち、1は中世墓に伴う礎石經で、4もその可能性があるので、これらは経塚とは考えられない。その他は経塚の可能性があるが、出土状況が不正確なため、即断は避けなければならない。ただし、石造物を伴って境内に位置するものや、旧道に関わるなど、礎石經が埋納された「場」は一樣ではないことが指摘できよう。

発掘調査された1以外は埋納の状況や時期を明確にできないが、庚申塚の経塚は今回の発掘調査によつて豊富な資料を得ることができたので、さまざまな検討をすることが可能になった。本節では、まず経塚造営の方法について、土層断面や遺物出土状況をもとに試案を述べ、次におもに遺物から造営された時期について考察していくこととしたい。



番号	名前(所在地)	立地	礫石径	文献・備考
1	小堀石塚跡 (西田尻)	独立丘 陵上	多字	柏崎市教委1991 中世墓 阿佐陀塚
2	上越井川の 経塚 第2号経塚 (上越井川用)	丘陵上	一字	金子1985 マウンドあり
3	庚申塚の経 塚 (横山)	尾根先 端部	多字 一字	錆付器・伏鉢・風鈴 瓦貨などが出土 マウンドあり 法 事延
4	「車塚」 (新道)	独立丘 陵上	一字	田村1954 瓦貨・人骨などが 出土 マウンドは消滅
5	細越松尾神 社経塚	丘陵頂 部	一字	神社境内のマウン ド上にある宝鏡印 塔の下から出土
6	(東之輪)	丘陵上	多字 一字	田村1987 「南無妙法蓮華經」

第24図 柏崎市内における礫石塚出土遺跡

2) 庚申塚の経塚造営(試案)

庚申塚の経塚は、外形をなす盛土がやや流出しているものの、内部の遺存状態は比較的良好であった。土層断面や遺物の出土状況を観察することによって、本経塚における造営の具体的な様相を推測することができると思われるので、造営の復元を試みたい(第25図)。

なお、本経塚からは大量の小礫や仏具が出土している。造営にあたっては、これらの道具がすべて揃っていることが前提となる。また、小礫の採集や墨書きといった作業には複数の人間が従事していたことは間違いないと思われる。こうした作業や人員に関わる準備も経塚造営の中に含まれよう。ただし、発掘調査で得ることができた地下の痕跡を材料とすれば、今回は造営の第1段階を経塚の選地として考えたい。

微地形と選地 本経塚は、北尾根(仮称、第12図参照)の先端部付近に位置している。正確には北東から南西方向に向かう尾根筋からはや北側にそれ、わずかに西側へ傾斜した位置にあたる。この北尾根の背は、やや小さいものの平坦な面が広がっているため、わざわざ尾根筋から離れた位置に選地した理由は明確ではない。ただし、選地した部分とその直下の斜面はおおむね真西方向に傾斜している。このことは本経塚の外部および内部の形態がほぼ正方位を指向する長方形を基調としていることと対応していることが指摘できよう。

また、当該地からは裾部に横山集落が展開する丘陵をみわたすことができ、眼下には集落の出入りに関わる道筋を追うことができる。前述した東之輪出土の礫石経のように、旧道との関わりが指摘できる事例があるが、本経塚の選地にあたっても道に対するなんらかの意識があった可能性もある。

基壇部と埋納部の造成 選地の後、具体的には樹木の伐採といった諸準備が済めば、第2段階として基壇部の造成が行われたと思われる。経塚の部分は、第II層とした当時の表土層以下が20~30cmほど掘削され、明褐色（第6層）および暗褐色（第7・8層）の粘質土層が埋められる。発掘調査では基壇部の平面形態を把握することができなかったが、現況の盛土範囲から想定されたように、やはり1辺6m前後で南北にやや長い長方形であったと思われる。そして、基壇部上面は周囲より10~20cmほど高い。基壇部を構成したと考えられる第6~8層は、比較的縮まりがあるので、簡単な地固めと平坦面の造成という意図がみられる。また、埋納部の底面を囲むように4隅に配された大きな礎は、基壇部造成中に置かれたことが、土層観察より明らかである。礎の配置はほぼ正方位を指向する長方形をなしている。これらのことから、基壇部造成の段階では、すでに経塚のプランが作り出されていたと推測される。ただし、この礎の用途は不明で、上面の平坦面がほぼ水平に置かれていることから、礎石としての利用が想定されるが、推測の域を出ない。しかし、次の埋納部に対する範囲設定などに関わる機能があったと考えられる。

埋納部は、基壇部を穿って造成されている。 土層断面から、底部の形態が平坦であることがわかる。平面形態は不明であるが、基壇部に基づいた長方形であったと思われる。

埋納の状況 大量の小礎は、土層断面で間層を挟む4枚の包含層が確認されたことから、埋納のために投入する段階では少なくとも4回に分けられていたと思われる。最下位の第4小礎包含層（第5層）は、最初の投入と思われるが、小礎は西辺を欠いた「コ」の字に埋納されている。2回目以降もこの配置が踏襲されたことは、グリッド別の出土量を表した第16図のグラフが「コ」の字の盛り上がりを示している通りである。長方形に設定された経塚の東側に対して礎石経が埋納されたことから、造営の主体者は東側を指向していたことがうかがえる。

第1回目の投入による第4小礎包含層（第5層）の上面において、第3小礎包含層（第2回目の投入）との間に間層を挟まず、仏具をはじめとする遺物が出土しているので、最低4回に及んだ小礎の投入が1回目と2回目以降とは状況を異にしていることがわかる。第5層上面から出土した遺物の状況によると、東側に埋納した礎石経を正面にした場合、左手に錫杖（手錫杖の可能性）・伏鉢を置いている。また、その近辺には錢貨も散見されている。手錫杖は梵唄、伏鉢は念佛・題目・御詠歌などにあわせて鳴らすものである。本經塚造営に及び、これらの仏具あるいは錢貨が用いられてなんらかの儀式が行われていたとすれば、その儀式は第1回目の投入後に催され、その後に第2回目以降の投入がなされたと考えられる。残念ながら、礎石経を細かい単位で取り上げ、可能なものは品まで明らかにしたが、品毎のまとまり等は認められなかった。さらに、南・北辺は側部となるが、その周辺から仏具と同一面において大量の釘が出土している。おそらく、儀式の際には木製の部材によって簡便な施設が建てられており、儀式が終了して第2回目の投入が行われる前に釘を抜いて撤収されたのではないだろうか。さらに、土層断面に着目すると、最後に投入された第1小礎包含層（第2b層）の上面からの柱穴（SKp-1・5）が確認される。小礎が埋納されている間に柱が建てられ、埋納後に抜かれたと思われる。位置関係から、この一対の柱もなんらかの機能が果たされたと考えられるが、柱そのものが抜かれたのは、釘とは異なる段階となる。推測を重ねたが、出土状況から考えられる可能性として指摘しておきたい。

埋納後の工程 小礎の埋納が終了し、柱も撤収されると、埋納部には第2a層によって覆われる。その後は、基壇部の設定にしたがって盛土が施される。使用された土砂は、基壇部と同様に第II・III層の混合土であるため、周辺が掘削されたと思われる。ただし、周溝などは伴わないので、土砂の採集地点などは不明とせざるを得ない。

①選地と準備



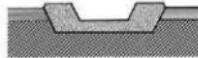
②基壇部掘削



③基壇部造成



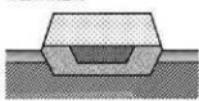
④埋納部造成



⑤埋 納



⑥盛土部造成



[■] 盛土部 [■] 埋納部 [■] 基壇部 [■] 旧表土層 [■] 地山土層

第25図 庚申塚の経塚造営工程模式図（推定）

3) 庚申塚の経塚造営の時期

経塚を造成した目的を示す願意とともに、紀年銘などが経碑や墨書蹟の一部などが遺存していれば、経塚の造営年代を検討することができる。しかし、庚申塚の経塚では紀年銘資料は出土していない。また、土器類が出土する一般的な遺跡とは異なり、半世紀あるいは四半世紀単位で時期を明確にできる資料に欠けている。しかし、近年は礫石経の経塚を対象とした研究が盛んになったほか、仏具や錢貨といった金属製品の研究が進んだことによって、おおよそではあるが年代観を検討できるにまで至っている¹¹⁾。これらの先行研究によりつつ、本経塚造営の時期を考察してみたい。

a 磕石経の経塚の形態と消長

全国の出土事例をみると、やぐらなどにおいて14世紀前半にはすでに磕石経が埋納されていた〔松原1994〕。越後においても、小千谷市竜ヶ池觀音堂塚群は14世紀～15世紀前半を主体とする墓地と考えられるが、第22号塚は他と異なって骨片等は発見されず、一字一石経が出土しているので、磕石経の経塚と考えられる〔小千谷市教委1983〕。柏崎市内に限っても、磕石経が埋納される場は一様ではないことはすでに触れたが、磕石経の埋納を主体とする経塚がどの段階で出現するのか、現段階では明らかにすることはできない。ここでは、本経塚と類似した築造方法を持つ経塚を示しておきたい。

第2項で述べたように、本経塚は盛土によって基壇部が造成されている。同じような例は、①福島県河沼都会津坂下町中目経塚〔中目経塚調査会1976〕、②同伊達郡霊山町行人田経塚〔霊山町教委1983〕、③千葉県香取郡大栄町かのへ塚〔香取郡市センター1991〕でみられる¹²⁾。①は、大半が一字一石経で占められるが、長径10cm以上の偏平な蹟が混在し、「天文十三（1544）年」の墨書が確認された。地元の地蔵信仰との関わりが指摘されている。②は、5万点以上の中経が出土したが、約4割に墨書が認められ、経典は法華經と推測されている。造営時期は近世とされる。③は、マウンド上に「明和二（1765）年」銘の経碑が立つ。多字一石経と一字一石経が出土しているが混在しておらず、多字一石経は最上位のみから出土し、筆跡も共通しているという。埋納方法や集落・寺院との関わりなど、注目に値する遺跡である。

年代の明らかな①・③により、16～18世紀に基壇部を有する磕石経の経塚を確認できたが、時期の特定には至っていない。次に、出土遺物から本経塚の造営時期を検討したい。

b 遺物の年代的位置づけ

ある程度の年代的位置づけを可能とする出土資料は、錫杖頭・伏鉢・銭貨である。錫杖頭・伏鉢については生産時期を求めるが、長期間伝世された場合も考えられるので、おおまかな年代としたい。

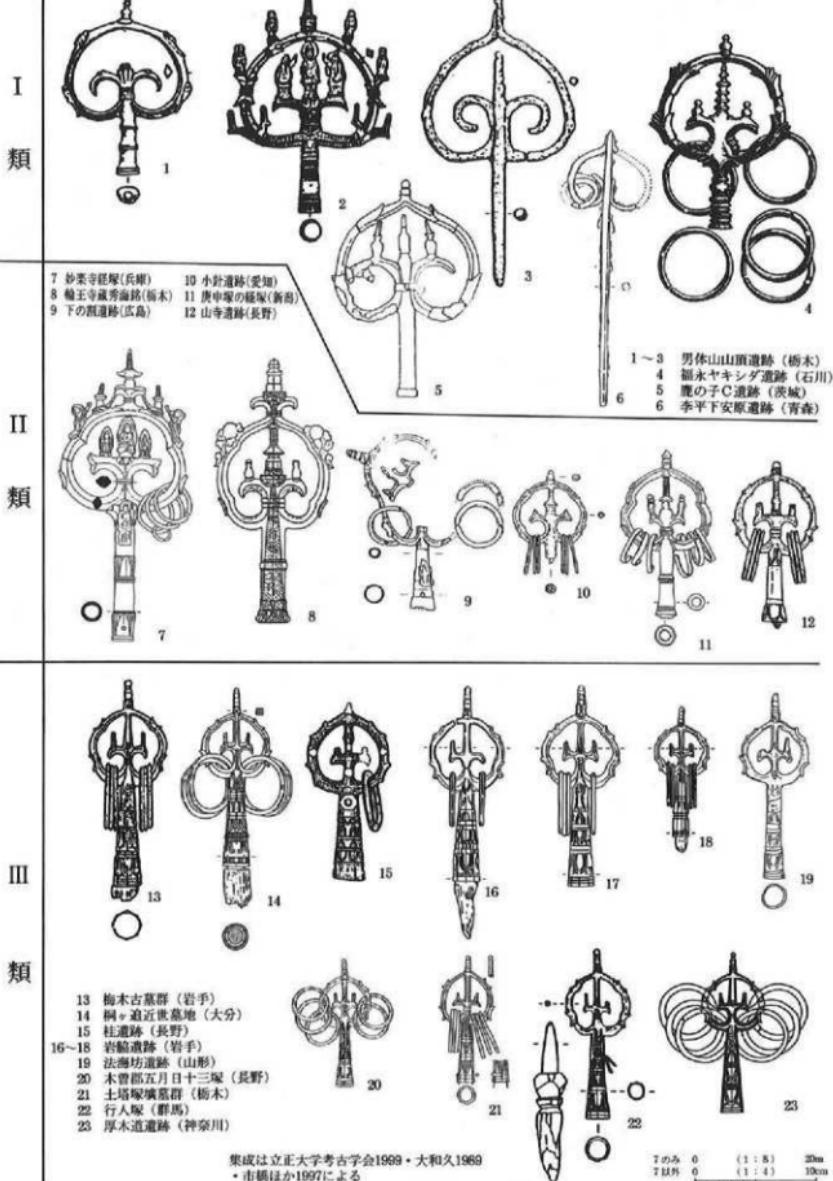
錫杖頭 錫杖頭については、古代を対象とした大和久震平氏、近世前期を対象とした市橋一郎氏・上野川勝氏の研究がある〔大和久1989・市橋ほか1997〕。各氏の集成資料に加え、立正大学考古学会の集成作業をもとに〔立正大学考古学会1999〕、全体の形態が把握できる主要なものを取り上げ、氏らの研究を参考として分類したのが第26図である。これららの研究をもとに検討を試みたい。

I類は、輪に括りがなく、円形もしくは尖円形をなすものである。栃木県日光市男体山山頂遺跡から出土した37点の錫杖頭はA類であり、大和久氏によって分類されている。II類は、輪に1～2対の括りを持ち、輪頂の五輪塔形や輪内の宝塔形などが明瞭に形作られるものである。輪の括りについては、12世紀以降にみられることがわかっている。本経塚出土の錫杖頭（1、第26図11）もII類に含まれるが、出土例が少ないこともあってII類を対象とした研究は少ない。III類は、柄に蓮弁などの装飾が施され、輪の括りが緩く、五輪塔形・宝塔形などが簡略化されているものである。市橋氏・上野川氏は、柄に刻まれた区画数によって分類し、4区画（A類、13～15）→3区画（B類、16～22）→2区画（C類、23）の変遷をみており、装飾の省略化も指摘している⁹。III類は、五輪塔形・宝塔形の簡略化などから、II類から変遷を追えると思われるが、これを示す資料として第26図12があげられる。第26図12は、輪頂・輪内にはII類の形態をとどめているが、柄下端部と輪との接合部付近に蓮弁状の装飾がみられるので、過渡的な様相を表していると思われる。また、共伴する金属製品などによって、A類が17世紀、C類が17世紀後半以降の年代が考えられる。即断は避けるべきであるが、ひとまずII類の下限は16世紀としておきたい。

それでは、本経塚出土資料について検討したい。II類の時期幅はおよそ12～16世紀と推測した。室町期に編まれた『修驗道修要秘訣』¹⁰には、錫杖の形態として4個の半月形金剛牙が付くことが記されている。おそらく、中世後半的一般的な錫杖頭を表したと考えられるが、第26図では9～12が該当するであろう。また、出土例ではないが、第26図8は大和久氏の紹介した14世紀初頭の製作と目される資料である。輪の上位に月日付された一对の雲形がある。これはII類でも古い段階にあった形態と思われる。12は9～11に後続する可能性があるが、8と9～11が併行することは否定できない。したがって、本経塚出土資料は、製作時期が中世後半の可能性が高いことを指摘するにとどめておきたい。ただし、17世紀はIII類が一般的であること、第26図12がII類からIII類への過渡的な段階として想定されることなどから考えれば、製作時期の下限については、おそらく17世紀までには至らないと推測される。

伏鉢 今回出土した伏鉢（3）は、すでに水澤幸一氏によって紹介されており、出土事例の集成と検討から製作年代についても見解を述べられている。氏は、伏鉢および鉢底の口唇部に着目し、形態分類を行っている。その結果、変遷は4期にわたり、3のように器厚が薄く、口唇部が斜行して先端のみが接地するものはIV期（16世紀）に該当する〔水澤1996〕。

銭貨 図化できた12点のはかに細片もある。細片は図化したものに接合することが考えられるので、本経塚に埋納された当時も12点であった可能性がある。その場合、6の倍数となることから、六道銭との関わりが想定される。銭種内容は渡来銭（模鋳銭を含む）で占められ、不明1点を除けば、16の洪武通寶以外はすべて北宋銭である。中～近世の六道銭の組合せから銭貨流通を分析した鈴木公雄氏は、寛永通寶鋳造後は、渡来銭と併用される例が極めて少ないという結果を出している〔鈴木1988〕。したがって、出土銭貨からみた本経塚の造営時期は、17世紀前葉となる。



c 経塚の造営時期

以上、遺構・遺物から庚申塚の経塚造営の時期について考察してきた。遺構については、基壇部を有するという点で共通した経塚を類例として触れたが、この形態は16～18世紀という長い時期幅においてみられるものであった。

遺物については、錫杖頭・伏鉢の製作時期および銭貨の埋納時期を推測してきた。その結果、錫杖頭は中世（おそらく後半）、伏鉢は16世紀、銭貨は17世紀前葉以前という時期が考えられた。前述のように、仏具に伝世期間等がなければ、造営時期をある程度反映していると思われる。それぞれの時期幅には矛盾がみられなかつたので、重複する時期を求めれば、16世紀頃となる。したがって、庚申塚の経塚は、おそらく16世紀に營まれた礎石経の経塚であると考えられる。

4) おわりに

本節では、庚申塚の経塚発掘調査における成果の一端についてまとめてきた。県内はもとより、全国的にみても本格的な発掘調査を実施し、遺存状態の良好な状況を把握できた例は少ない。特に、錫杖頭・伏鉢といった仏具を礎石経とともに検出し、出土状況を確認できたことは、今後の経塚研究において貴重な資料を呈示できるのではないかと思われる。

今回、検討できなかった問題としては次のようなことがあげられる。本経塚からは東側を指向する長方形を基調とした埋納の状況が看取された。しかし、東側に埋納することはどのような信仰に基づくものなのか。前述した、時期的あるいは形態的に類似する中目経塚では前述したように地蔵信仰に関わることが指摘されているが、庚申塚の経塚の場合、現段階では不明とせざるを得ない。また、礎石になりうる礎や柱穴の用途が不明のままであったが、埋納にあたってはどのような上屋構造があったのか。さらに、経塚造営にあたっては、約3万点、約190kgの小釋を運び、盛土作業をした当時の人々、それを先導した僧などはどのような関係にあったのか。土器に墨書した2003（写真5）の検討などをふくめ、経塚造営の具体像について考察していく必要が感じられる。そのためにも、今後の課題としては、得られた資料を宗教的な位置付けなどを再度観察する必要があるだろう。

遺構・遺物ともに類例が少ない中での検討をしてきたので、雑駁な推論を重ねた点が多くなった。今後の資料増加に期待し、傍証していくこととしたい。

註

1) 類例の検索にあたっては、『考古学論究』第3号・第5号〔立正大学考古学会1994・1999〕を参考とした。

2) 基壇部を持つ礎石経の経塚は、松原典明氏によってC類とされている〔松原1994〕。氏は、さらにC類を基壇部上に直接埋納する場合（C-①）と土坑を穿って埋納する場合（C-②）とに細分している。本経塚は基壇部を掘削して埋納部が設けられているので、C-②類に近いといえるが、C-②類の埋納部は土坑状である点で異なっている。本経塚の場合は、底部が平坦に作られ、そこではなんらかの儀式が行われたと推定される。平坦に作られた面上に埋納する点ではむしろC-①類に近いので、ここでは特に細分せず、基壇部を有するという共通点を重視したい。

3) 市橋・上野川両氏の研究では、13・21～23などの資料が用いられている。

4) 『日本大藏經』の「修驗道章疏」2に所収

《引用・参考文献》

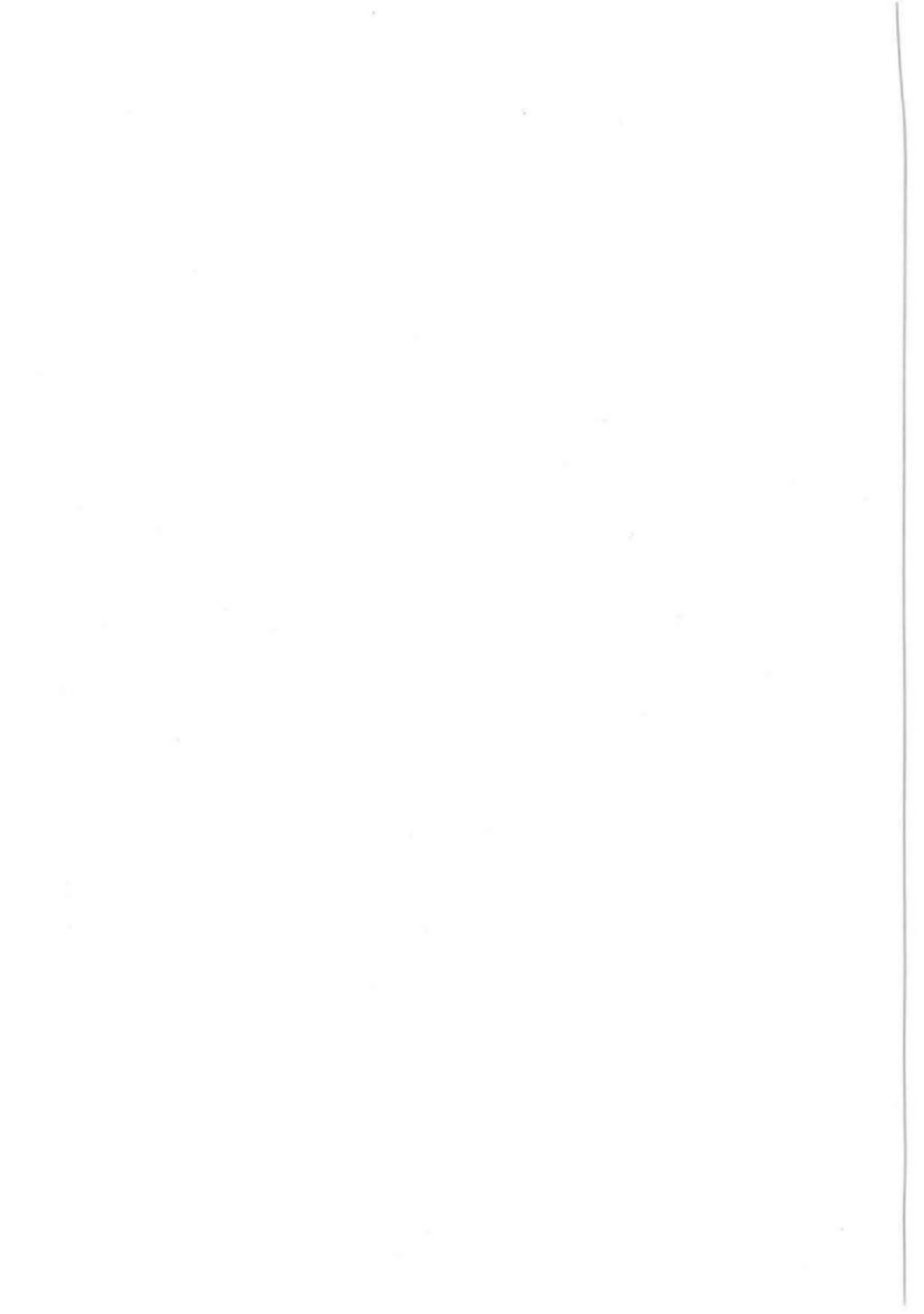
- 有賀要延編 1993『平成新編仏教法具図鑑』 国書刊行会
- 市橋一郎・上野川勝 1997「柳木祭下の近世塚状遺構について—近世修驗とのかかわりを含めて—」『唐澤考古』第16号 唐澤考古学会
- 宇佐美周美 1987「大原遺跡」『考古資料(図・拓本・説明)』(柏崎市資料集考古篇1) 柏崎市史編さん委員会編
- 宇佐美周美・高橋保 1987「辻の内遺跡」『考古資料(図・拓本・説明)』(柏崎市資料集考古篇1) 柏崎市史編さん委員会編
- 大和久義平 1989「古式の鋸杖」『山岳修驗』第5号 日本山岳修驗学会
- 岡崎譲治監修 1982『仏具大事典』 雄文新書
- 岡本郁栄 1987「剣野D遺跡」『考古資料(図・拓本・説明)』(柏崎市資料集考古篇1) 柏崎市史編さん委員会編
- 萩野正博 1983「越後国中世庄園の成立」『新潟史学』第16号 新潟史学会
- 小千谷市教育委員会 1983「電ヶ池觀音堂塚群 発掘調査報告書II」(小千谷市文化財報告第2集)
- 春日真実 1997「越後・佐渡における9世紀中葉の画期」『北陸古代土器研究』第6号 北陸古代土器研究会
- 田嶋明人 1988「古代土器編年輪の設定—加賀地域にみる7世紀から11世紀中にかけての土器群の推移—」『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題 報告編』 石川県考古学会・北陸古代土器研究会
- 柏崎市教育委員会 1988「剣野K遺跡」(柏崎市埋蔵文化財調査の概要第10)
- 柏崎市教育委員会 1989「吉井行塚古墳群」(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第10)
- 柏崎市教育委員会 1990「千古冢」(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第11)
- 柏崎市教育委員会 1990「剣野山岡遺跡群」(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第12)
- 柏崎市教育委員会 1990「吉井遺跡群II」(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第13)
- 柏崎市教育委員会 1991「十三本塚遺跡群」(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第14)
- 柏崎市教育委員会 1991「小児石」(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第15)
- 柏崎市教育委員会 1992a「行駒遺跡」(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第17)
- 柏崎市教育委員会 1992b「横山東麓丘陵」(柏崎市埋蔵文化財調査の概要)
- 柏崎市教育委員会 1993「箕輪遺跡」「雨池古窯跡」「柏崎市の遺跡II」(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第18集)
- 柏崎市教育委員会 1994「新潟県柏崎市 横山東遺跡群 現地説明会資料」
- 柏崎市教育委員会 1995「藤橋東遺跡群—写真でつづる発掘調査の記録—」(柏崎市埋蔵文化財調査図録第1集)
- 柏崎市教育委員会 1996「田塚山遺跡群」(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第21)
- 柏崎市教育委員会 1996「尻振坂」(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第23)
- 柏崎市教育委員会 1997「谷作」(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第25)
- 柏崎市教育委員会 1997「前歩り」(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第26)
- 柏崎市史編さん委員会編 1983「柏崎の地質」(柏崎市史資料集地質篇) 柏崎市
- 柏崎市史編さん委員会編 1987「考古資料(図・拓本・説明)」(柏崎市資料集考古篇1) 柏崎市
- 藤原三千雄 1995「北陸における中期前業の土器群について—新保・新崎式土器—」『中期初頭の諸様相』(第8回縄文セミナー) 講文セミナーの会
- 金子拓男 1985「新潟県柏崎市上絆井川の縄塚」「越佐研究」第22集 のち「絆井川縄塚遺跡・絆井川出土の一文字一石縄」として柏崎市史編さん委員会編1987「考古資料(図・拓本・説明)」(柏崎市史資料集考古篇1) に所収
- 金子拓男 1987「風呂山出土五輪塔」「考古資料(図・拓本・説明)」(柏崎市資料集考古篇1) 柏崎市史編さん委員会編
- 板井秀弥・岡本郁栄 1987「柏崎農業高等学校校庭遺跡」「考古資料(図・拓本・説明)」(柏崎市資料集考古篇1) 柏崎市史編さん委員会編
- 品田高志 1987a「十三仏塚遺跡」「考古資料(図・拓本・説明)」(柏崎市資料集考古篇1) 柏崎市史編さん委員会編
- 品田高志 1987b「剣野C遺跡」「考古資料(図・拓本・説明)」(柏崎市資料集考古篇1) 柏崎市史編さん委員会編
- 品田高志 1992「新潟県における塚(群)研究の歩み—考古学・民俗学から社会史的理解に向けて—」『新潟考古学談話会会報』第10号 新潟考古学談話会
- 品田高志 1993「柏崎平野の古代鉄生産遺跡・藤橋東遺跡群の発見とその意義—」『新潟考古学談話会会報』第12号 新潟考古学談話会
- 品田高志 1994a「越後における古代鉄生産の系譜と展開—木炭窯の形態からみた若干の検討—」『新潟考古学談話会会報』第13号 新潟考古学談話会
- 品田高志 1994b「柏崎市藤橋東遺跡群における古代鉄生産遺跡」「新潟県考古学会第4回大会研究発表会発表要旨」新潟県考古学会
- 品田高志 1996a「尻振坂遺跡の縄文集落とその性格」「尻振坂」(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第23集) 柏崎市教育委員会
- 品田高志 1996b「季節と縄文集落—柏崎平野における縄文遺跡群の検討から—」『新潟考古学談話会会報』第16号 新潟考古学談話会

- 品田高志・鈴木俊彦 1987「剣野A遺跡」『考古資料(図・拓本・説明)』(柏崎市資料集考古篇1) 柏崎市史編さん委員会編
清水 乞織 1978「仏具辞典」 東京堂出版
- 鈴木公雄 1988「出土六道鏡の組合せからみた江戸時代前期の銅鏡流通」『社会経済史学』53-6
高橋 保 1990「第V章遺物 1 土器 C 分析」『関越自動車道関係発掘調査報告書(清水上遺跡)』(新潟県埋蔵文化財調査報告書第55集) 新潟県教育委員会
- 田村愛之助 1954「鎌倉末期の年号ある納経銘」「高志路」第3期第7号(通巻151号) 新潟県民俗学会
- 田村愛之助 1987「東之輪出土の一文字石経」『考古資料(図・拓本・説明)』(柏崎市資料集考古篇1) 柏崎市史編さん委員会編
- 寺崎裕介 1996「第VII章まとめ 1 土器」『関越自動車道之内インターチェンジ関連発掘調査報告書(清水上遺跡)』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 中野 純 1995「飯波地区東部における縄文遺跡の立地」『柏崎市の遺跡N』(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第20集) 柏崎市教育委員会
- 中野豈任 1988「安楽寺跡出土「紙本妙法蓮華經」の奥義」『佐佐研究』第45巻 新潟県人文研究会
- 中目経塚調査会 1976「会津坂下町中目経塚」「福島考古」第17号 福島考古学会
- 新潟県教育委員会 1985「瓜ヶ沢遺跡」「関越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書」(新潟県埋蔵文化財調査報告書第31)
- 新潟県教育委員会 1985「国道116号線埋蔵文化財発掘調査報告書(タテ遺跡)」(新潟県埋蔵文化財調査報告書第39)
- 新潟県教育委員会 1988「北陸自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書(西田・鶴巻田遺跡群)」(新潟県埋蔵文化財調査報告書第27)
- 新潟県教育委員会 1990「関越自動車道関係発掘調査報告書(清水上遺跡)」(新潟県埋蔵文化財調査報告書第55集)
- 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 1986「関越自動車道之内インターチェンジ関係発掘調査報告書(清水上遺跡II)」(新潟県埋蔵文化財調査報告書第72集)
- 新潟県埋蔵文化財調査事業団 1996「冥輪遺跡現地説明会資料」
- 新潟県埋蔵文化財調査事業団 1997「冥輪遺跡現地説明会資料」
- 新津市教育委員会 1995「金津丘隕製鉄道跡群発掘調査報告書II(忍村遺跡E・A・C地点、大入遺跡A地点)」
- 平川 南 1994「平成4年度新潟県八幡林遺跡木簡」「八幡林遺跡」(和島村埋蔵文化財調査報告書第3集) 和島村教育委員会
- 巻町教育委員会 1990「大沢遺跡-圓文時代中期前葉を主とする集落跡の調査概要-」
- 松原典明 1994「礎石経研究序説」「考古学論究」第3号<特集・礎石経の世界> 立正大学考古学会
- 木澤幸一 1996「中世越後の延舷」「坂詰秀一先生還暦記念 考古学の諸相」坂詰秀一先生還暦記念会
- 宮本長二郎 1996「日本原始古代の住居建築」中央公論美術出版社(「関東地方の縄文時代竪穴住居の変遷」「文化財論叢」奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集1983)
- 八尾町教育委員会 1985「富山県八尾町長山遺跡発掘調査報告」
- 山口博之 1998「なぜ書くの? -高野坊遺跡出土の墨書き紀年銘史料によせて-」『郷土とんどう』第26号 天童郷土研究会
- 山本 雅 1987「風牧山遺跡」「考古資料(図・拓本・説明)」(柏崎市資料集考古篇1) 柏崎市史編さん委員会編
- 木沢 康 1980「大宝二年の越中国四郡分割をめぐって」「信濃」第32巻第6号 信濃史学会
- 雲山町教育委員会 1983「行人田遺跡」
- 立正大学考古学会 1994「考古学論究」第3号<特集・礎石経の世界>
- 立正大学考古学会 1999「考古学論究」第5号<特集・出土仏具の世界>
- 和島村教育委員会 1993「八幡林遺跡」(和島村埋蔵文化財調査報告書第2集)
- 和島村教育委員会 1994「八幡林遺跡」(和島村埋蔵文化財調査報告書第3集)

図 版

凡 例

1. ここには遺跡全体及び遺構に関する実測図と写真をおさめ、図面図版と写真図版に区分されるが、図版番号は通し番号となっている。
2. 図面図版には、方位と縮尺を付した。方位はすべて真北である。
3. 写真図版に記した方位は、対象物に向かった方向を大まかに示したものである。



横山東遺跡群1



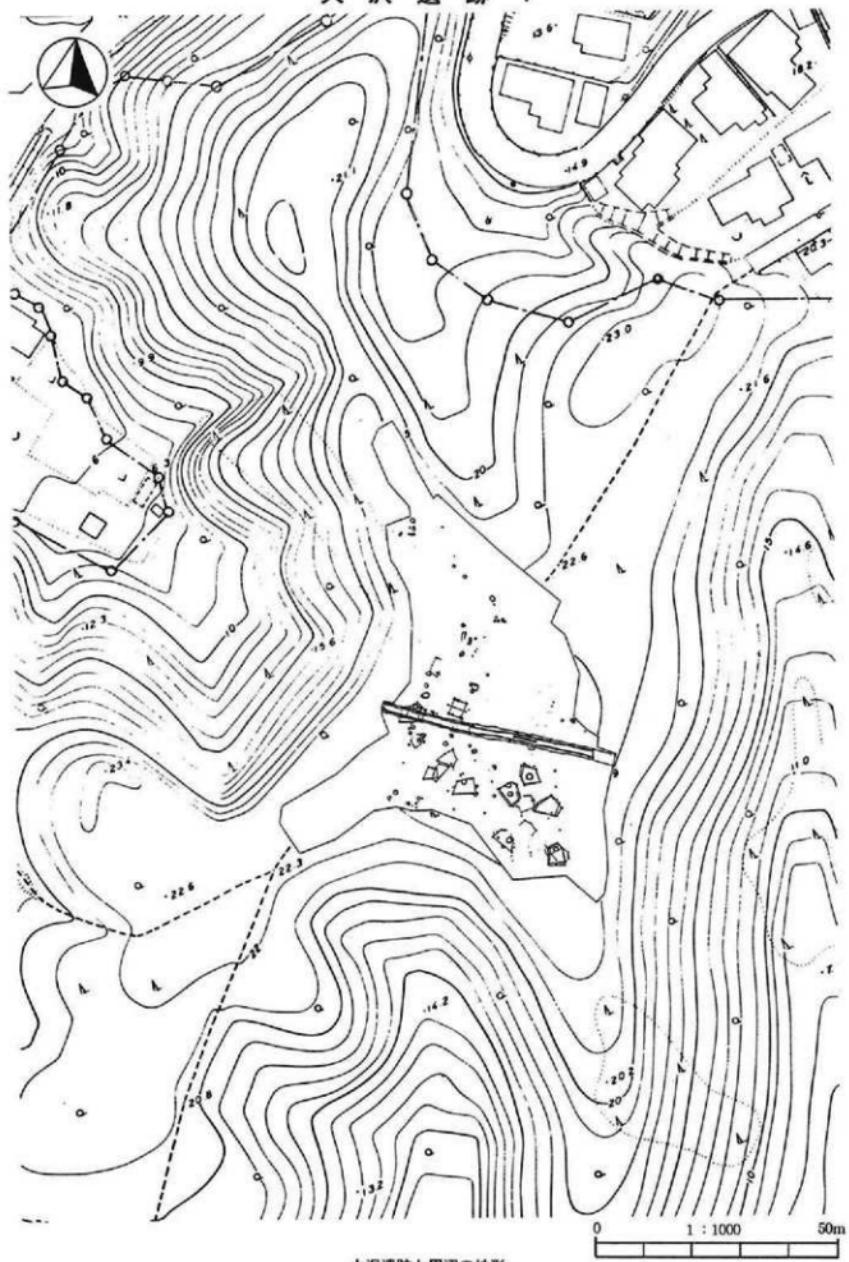
横山東遺跡群と主要な沢地形

図版2

横山東遺跡群グリッド図



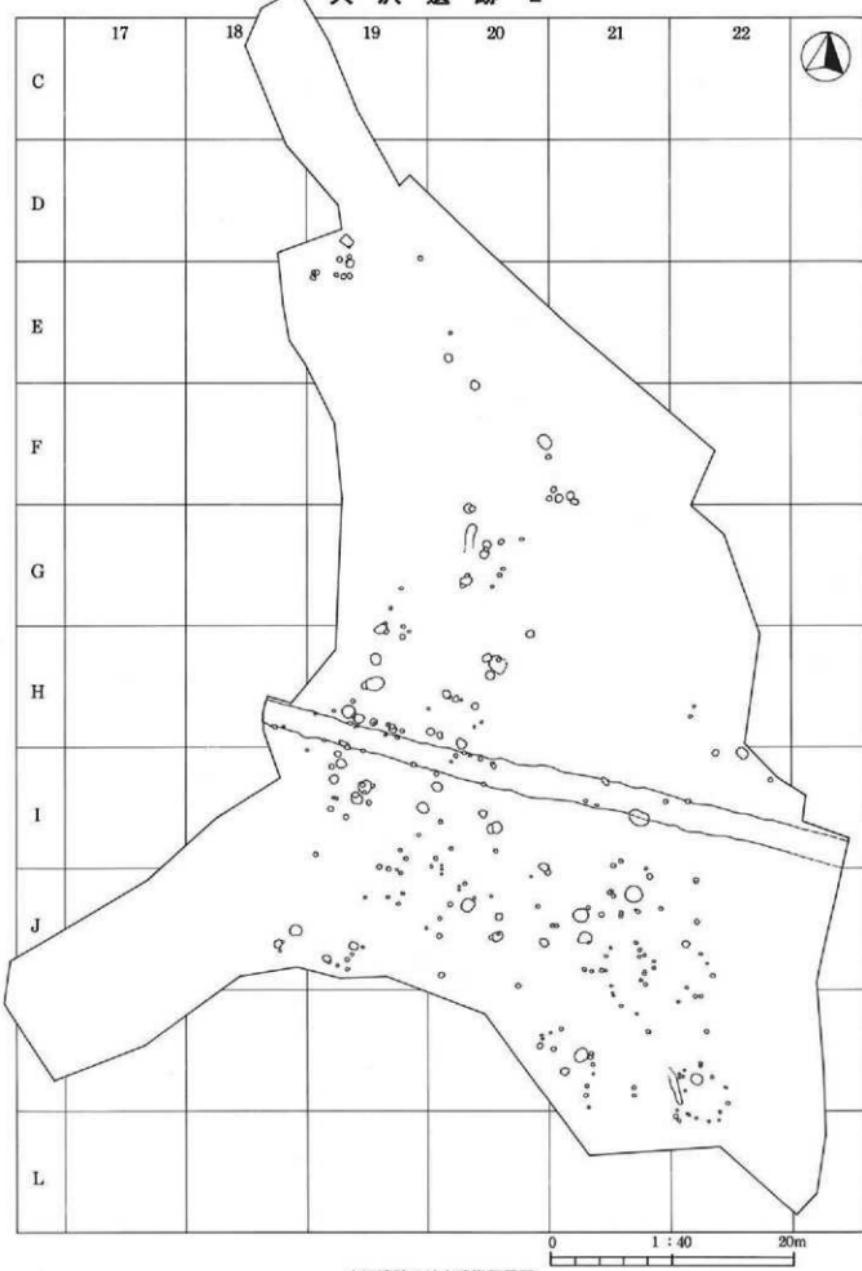
大沢遺跡 1



大沢遺跡と周辺の地形

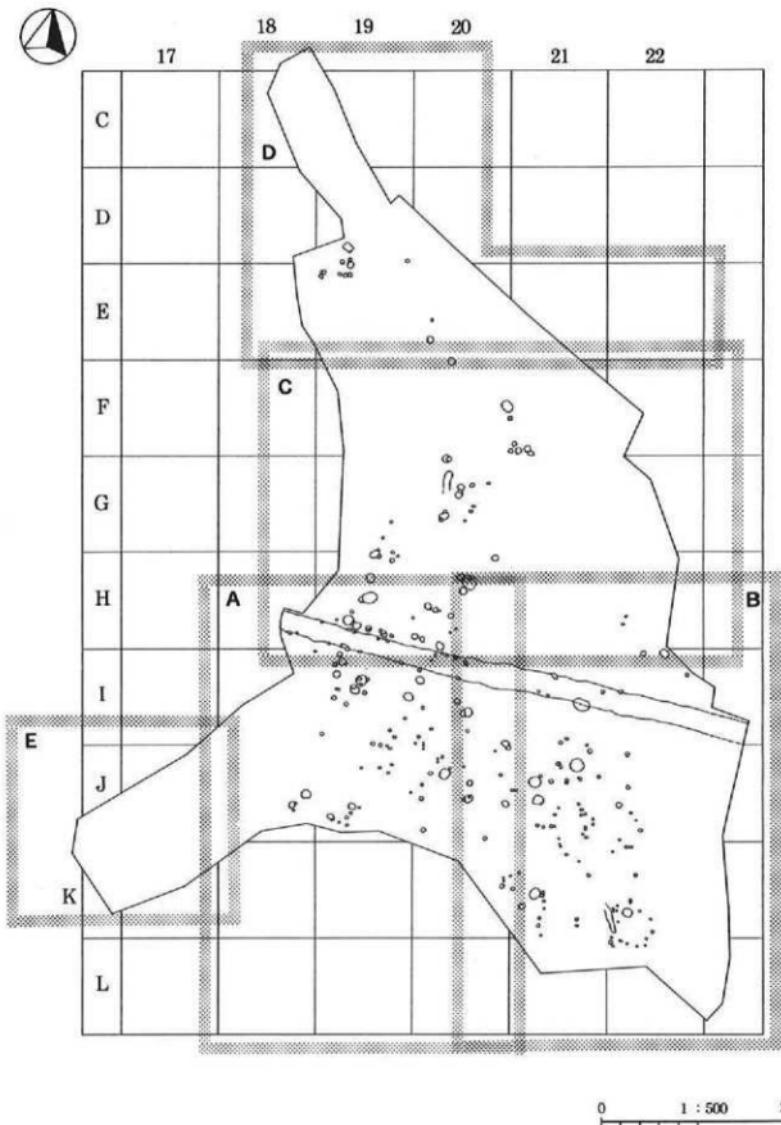
図版4

大沢遺跡2



大沢遺跡A地点遺構配置図

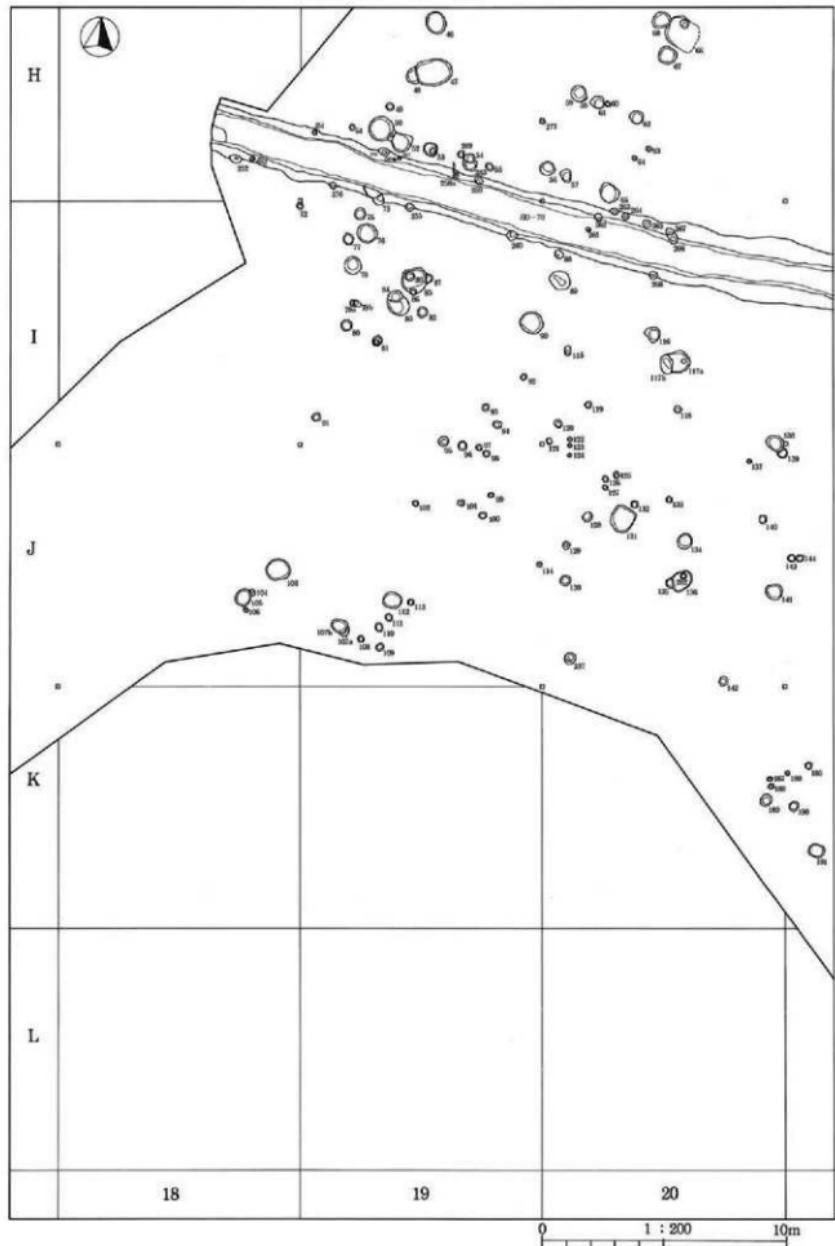
大沢遺跡3



大沢遺跡A地点遺構全体図割付図

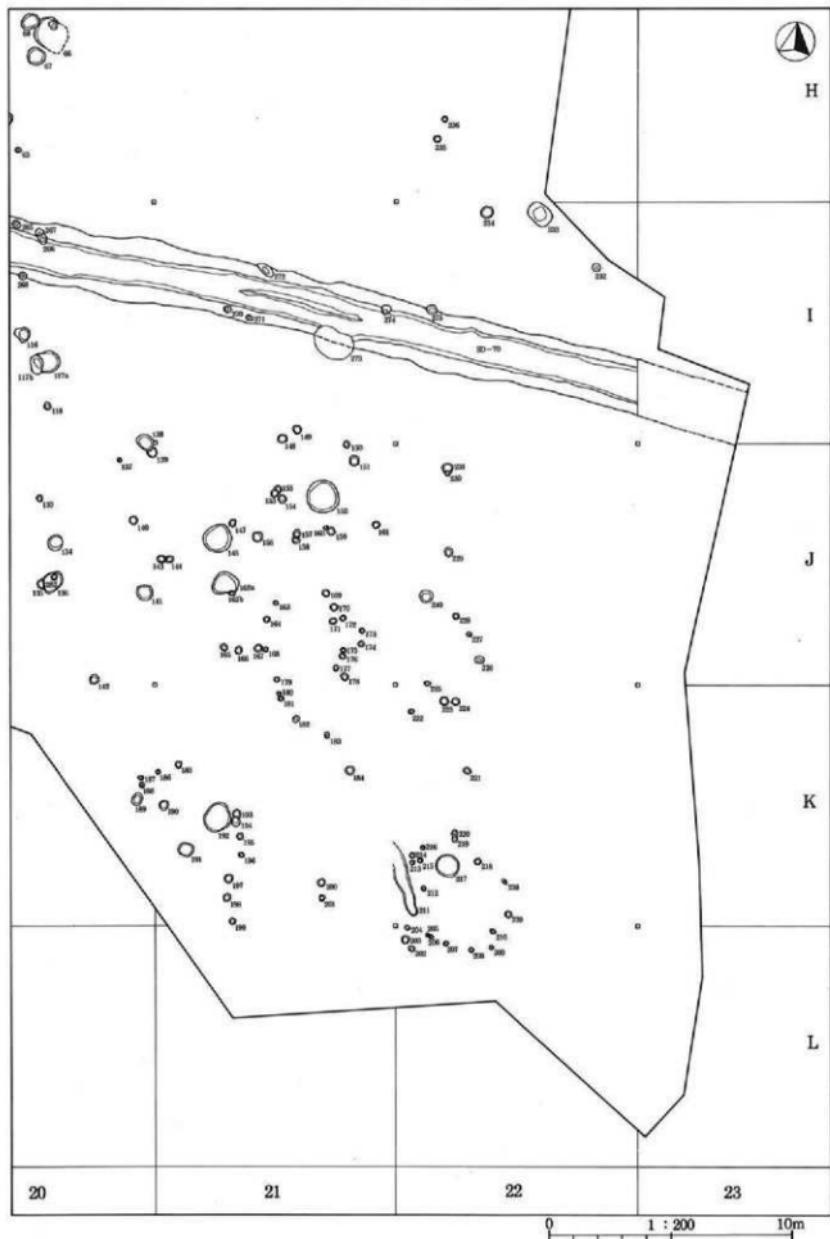
图版 6

大沢遺跡 4



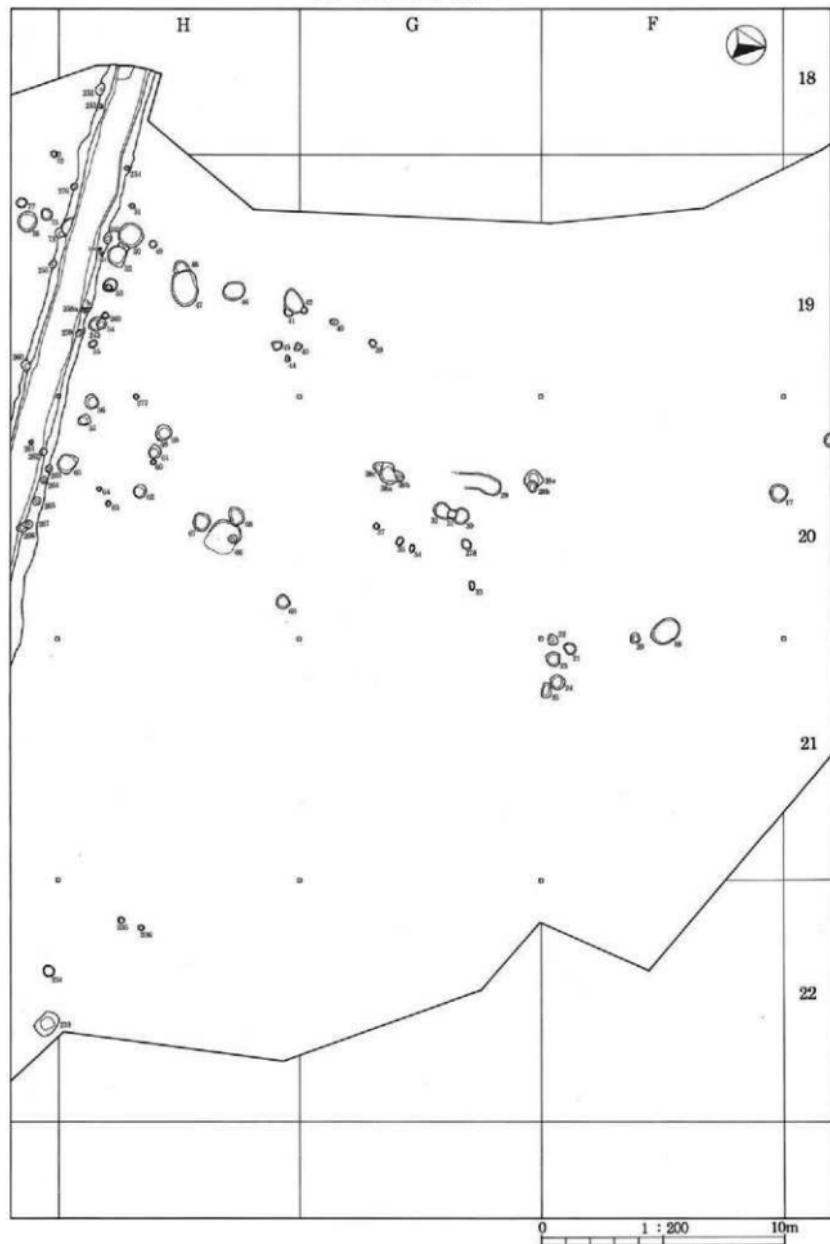
大沢遺跡 A 地点遺構全体図 A

大沢遺跡 5



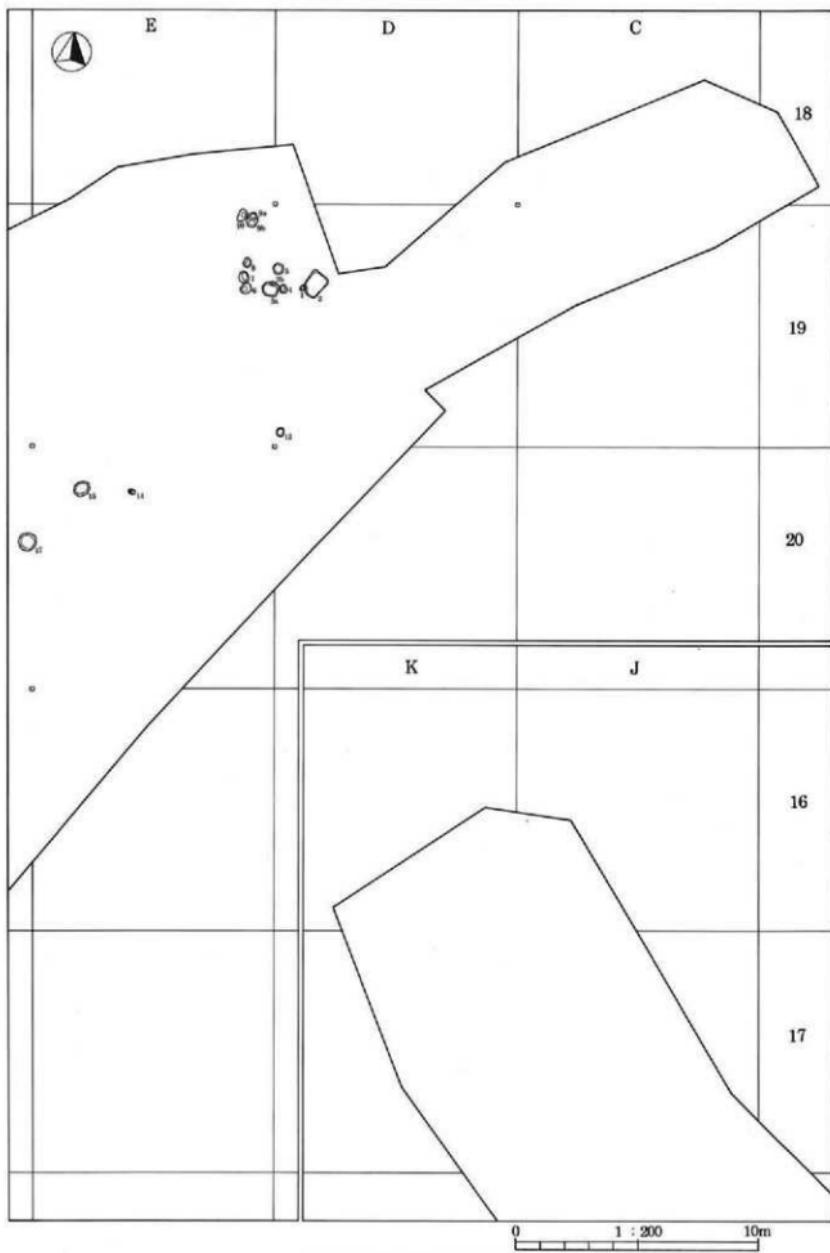
大沢遺跡 A 地点遺構全体図 B

大沢遺跡6



大沢遺跡A地点遺構全体図C

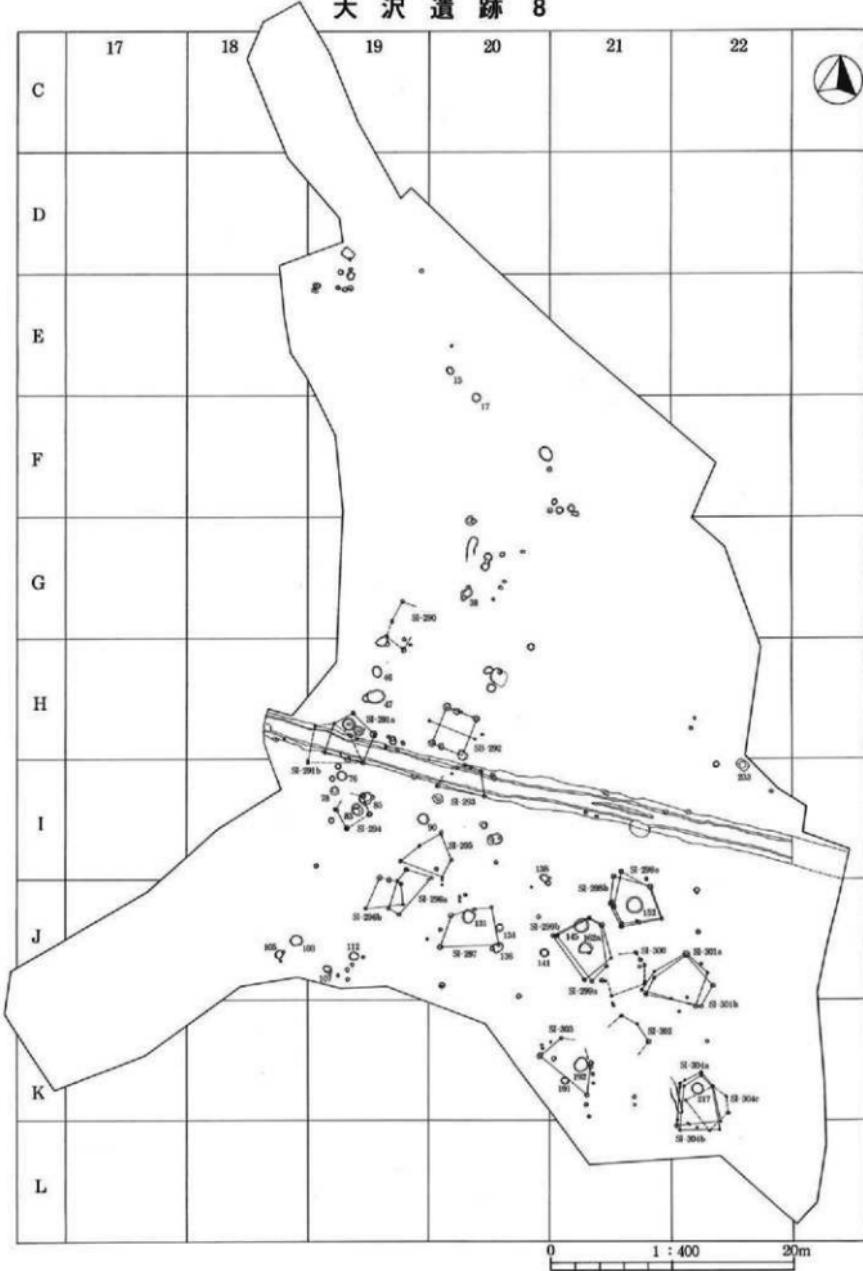
大沢遺跡 7



大沢遺跡 A 地点遺構全体図 D・E

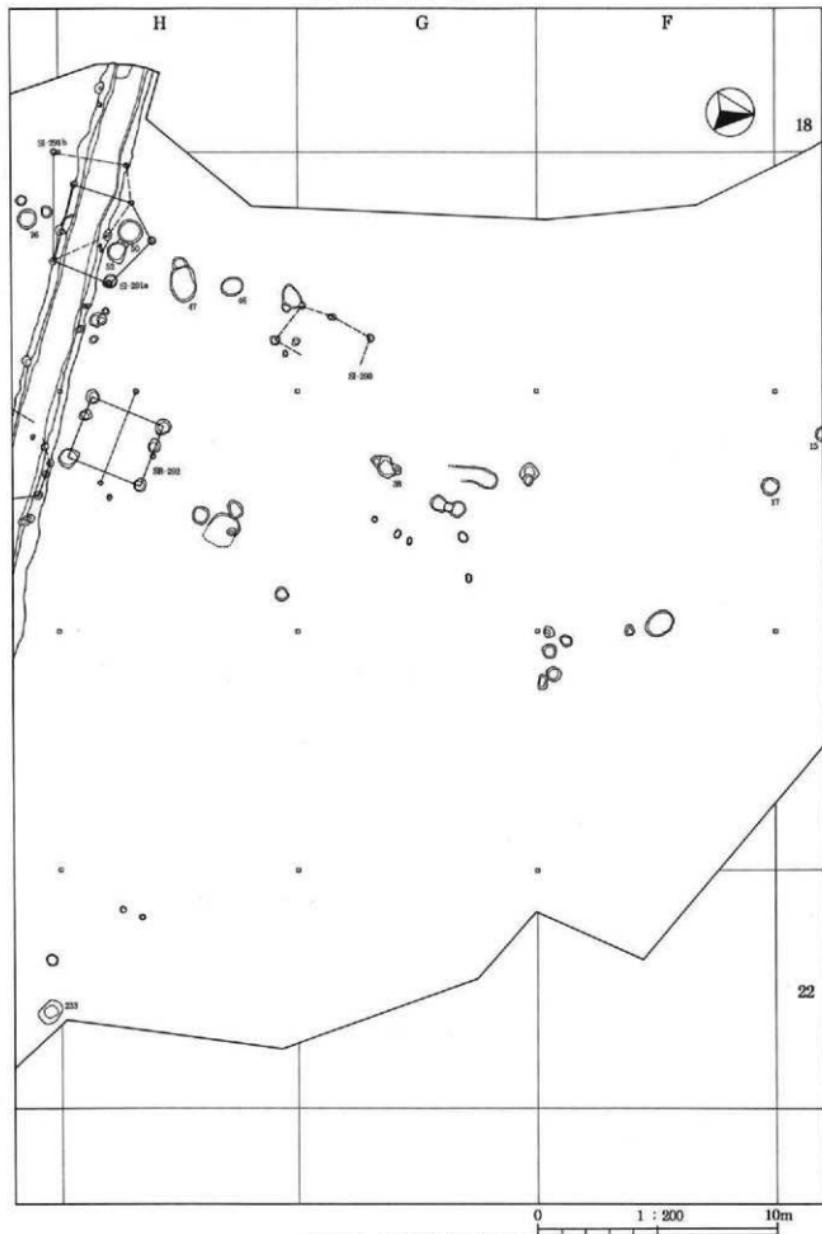
図版10

大沢遺跡 8

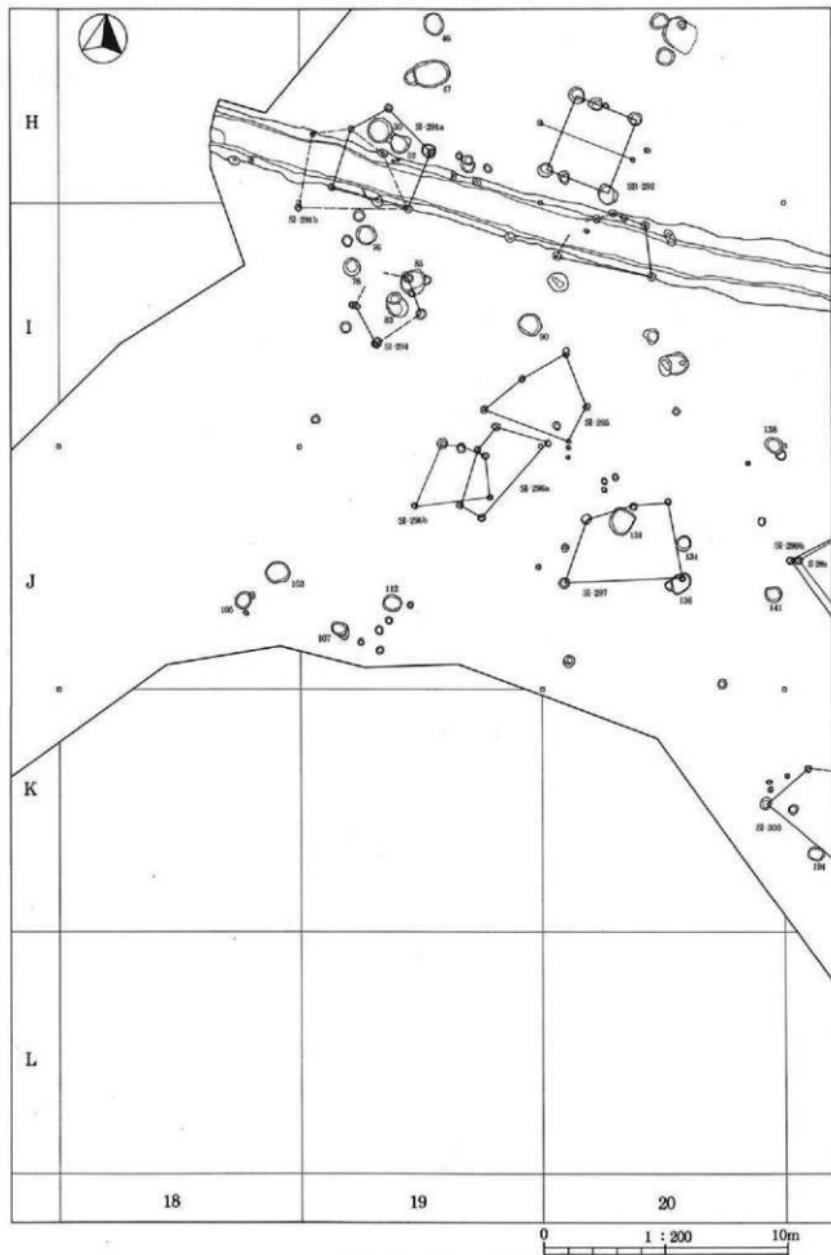


大沢遺跡 A 地点推定住居全体配置図

大沢遺跡 9

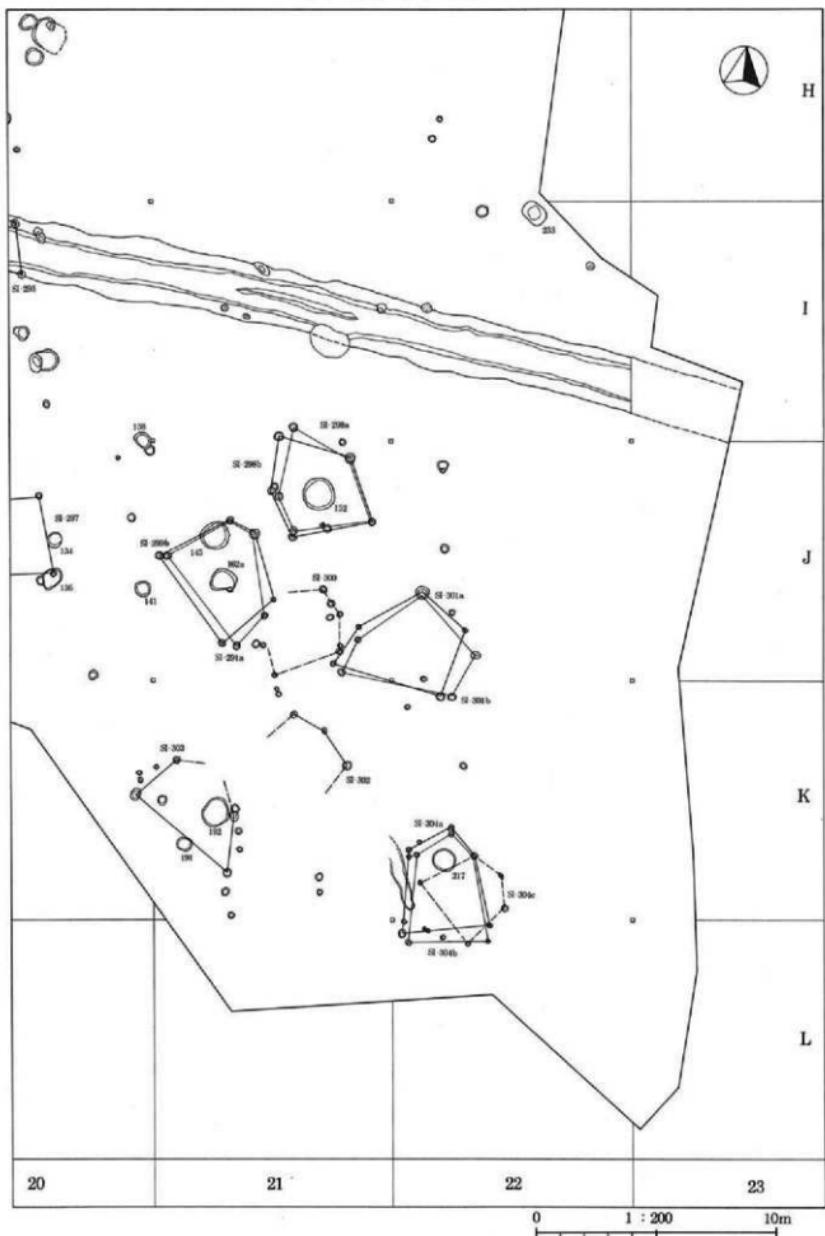


大沢遺跡 10



大沢遺跡 A 地点推定住居全体図 A

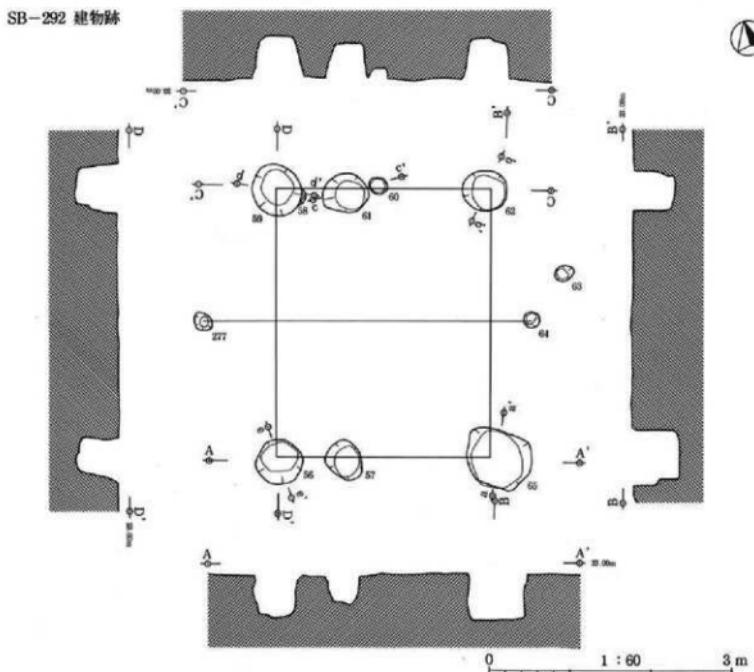
大沢遺跡 11



大沢遺跡 A 地点推定住居全体図 B

大沢遺跡 12

SB-292 雜物跡



pis-46 桑大

- 1 黒褐色土：粗面。ソフト。
- 2 黒褐色土：粗面。ソフト。
- 3 黒褐色土：ハーフ。
- 4 黒褐色土：苦手の地に土を混入。ハーフ。
- 5 線状黒褐色土：峰向土の地に混入。ハーフ。
- 6 線状黒褐色土：ハーフ。
- 7 線状黒褐色土：峰向土の地。

四一四四 楊光

9.1-36 地況

1. 地色土：地山土的侵入部分小，地盤

The diagram shows a cross-section of a three-layered structure. The top layer is labeled '1'. Below it is a layer labeled '2'. At the bottom is a layer labeled '3'. To the left of the structure, there is a small circle with a horizontal arrow pointing right, labeled 'b'. To the right of the structure, there is another small circle with a horizontal arrow pointing right, labeled 'b'', followed by the text '≈ 0.01'.

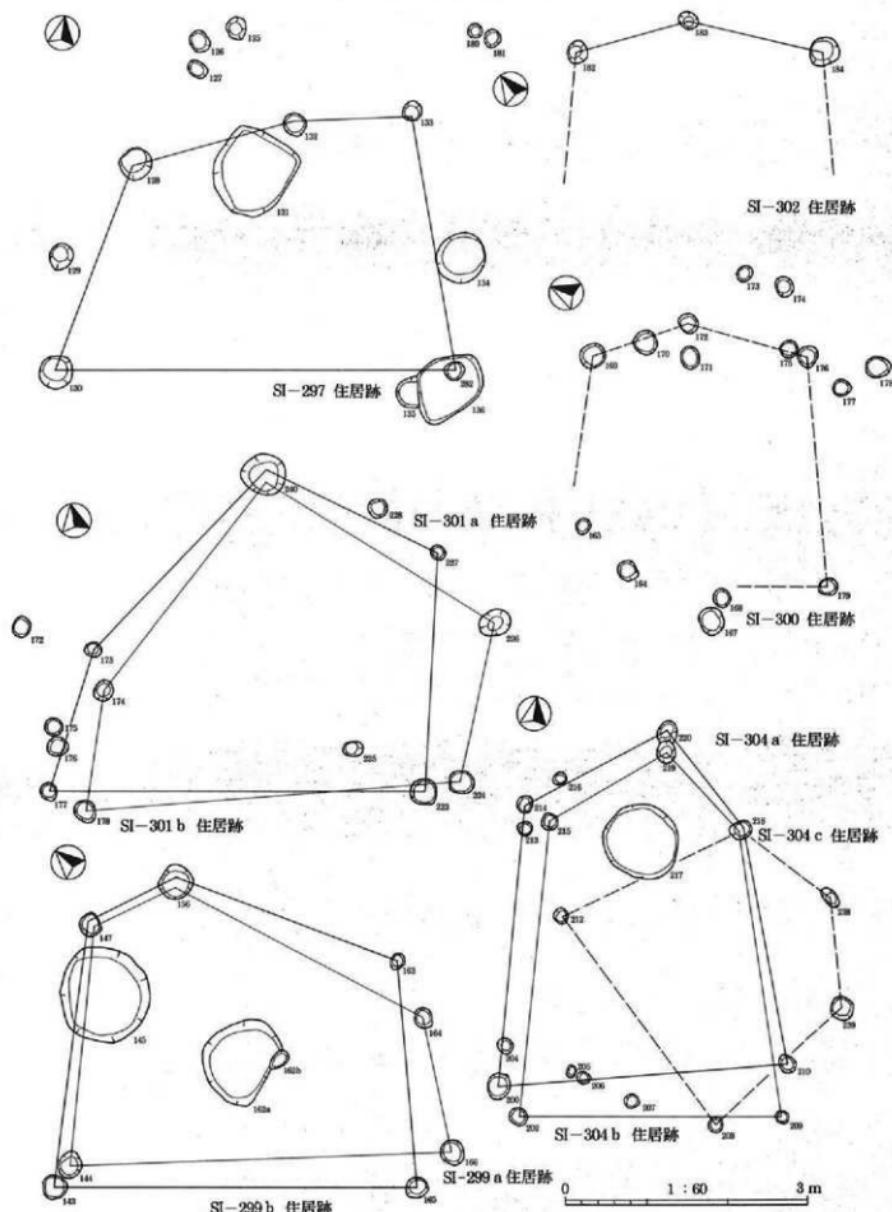
第二個題目：

—○— 3.0m

SI-303 住居跡

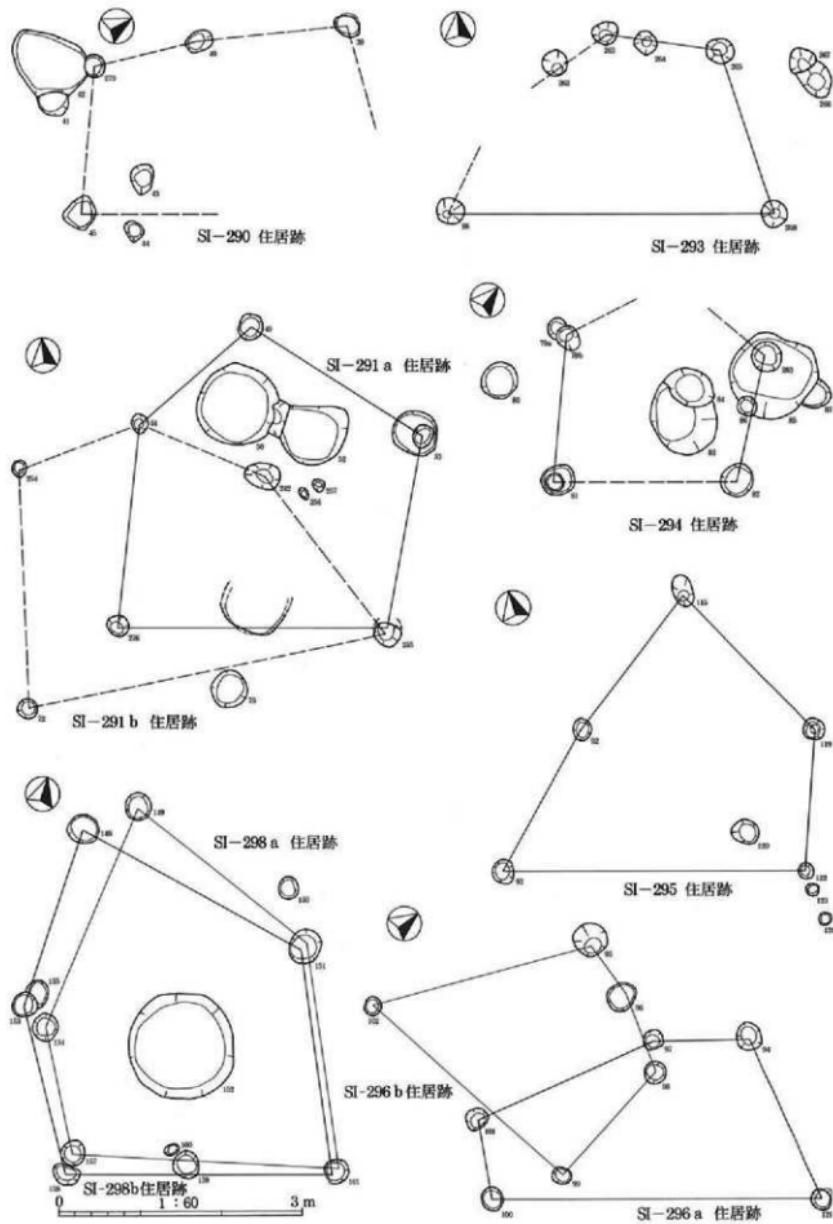
A scale bar representing a distance of 3 meters. The bar is divided into six equal segments. Above the bar, the text "1 : 60" indicates the scale ratio.

大沢遺跡 13



大沢遺跡A地点遺構個別図2（住居跡2）

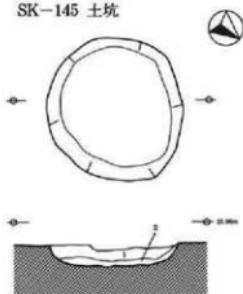
大沢遺跡 14



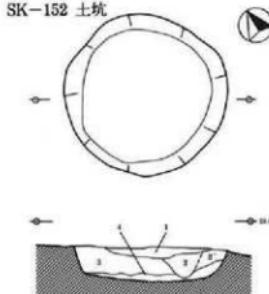
大沢遺跡 A 地点遺構個別図 3 (住居跡 3)

大沢遺跡 15

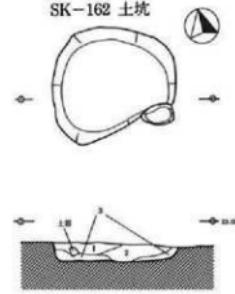
SK-145 土坑



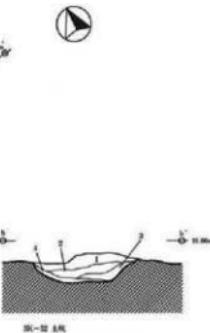
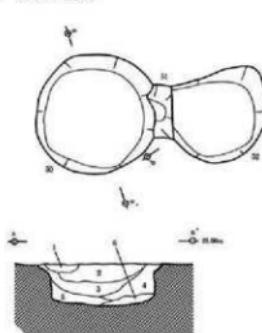
SK-152 土坑



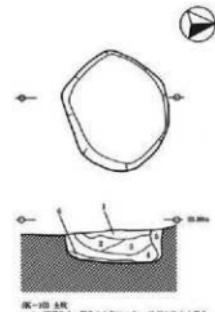
SK-162 土坑



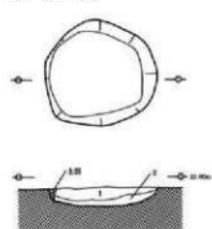
SK-50.52 土坑



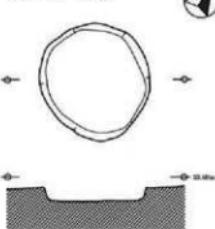
SK-103 土坑



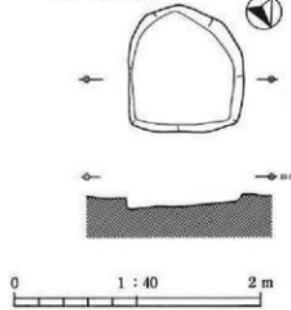
SK-90 土坑



SK-217 土坑



SK-131 土坑

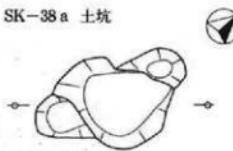


大沢遺跡 A 地点遺構個別図 4 (土坑 1)

図版18

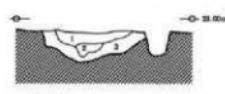
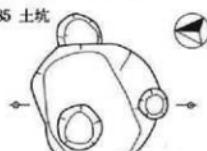
大沢遺跡 16

SK-38-a 土坑



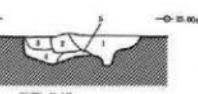
SK-38-a 上坑
1. 周縁土 (edge soil)。
2. 破壊土 (damaged soil)。
3. 破壊土 (damaged soil)。
4. 破壊土 (damaged soil)。
5. 破壊土 (damaged soil)。

SK-85 土坑



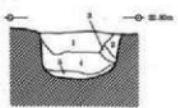
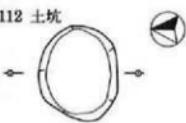
SK-85 上坑
1. 破壊土 (damaged soil), ブロック, ブロック。
2. 破壊土 (damaged soil), 1層入りやや壊れ, ブロック, ブロック。
3. 破壊土 (damaged soil)。

SK-83・84 土坑



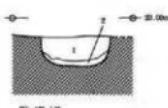
SK-83・84 上坑
1. 周縁土 (edge soil)。
2. 破壊土 (damaged soil)。
3. 破壊土 (damaged soil)。
4. 破壊土 (damaged soil)。
5. 破壊土 (damaged soil)。

SK-112 土坑



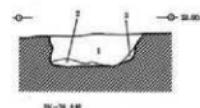
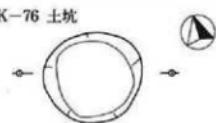
SK-112 上坑
1. 破壊土 (damaged soil), ブロック状 (blocky) (2.2~4 mm), がれ土。
2. 破壊土 (damaged soil), ブロック状 (blocky)。
3. 破壊土 (damaged soil), ブロック状 (blocky)。
4. 破壊土 (damaged soil), ブロック状 (blocky)。
5. 破壊土 (damaged soil), ブロック状 (blocky) (2.2~4 mm)。

SK-138 土坑



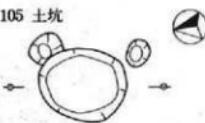
SK-138 上坑
1. 破壊土 (damaged soil)。
2. 破壊土 (damaged soil)。
土坑内に既存の石垣の塊状ブロックを含む。

SK-76 土坑

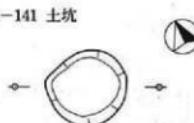


SK-76 上坑
1. 破壊土 (damaged soil), 本壁面 (inner wall face)。
2. 破壊土 (damaged soil)。
3. 破壊土 (damaged soil)。

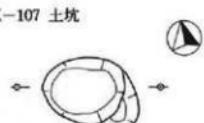
SK-105 土坑



SK-141 土坑

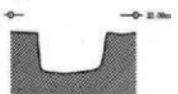
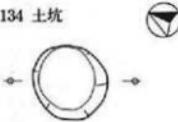


SK-107 土坑

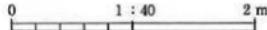
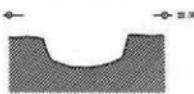
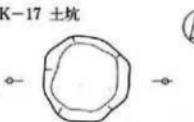


SK-107 上坑
1. 破壊土 (damaged soil), 破壊 (damaged) (2.2~4 mm) の土質の
土壁, 下壁面に2.2~4 mmの
土質, 下壁面に2.2~4 mmの
土質。

SK-134 土坑

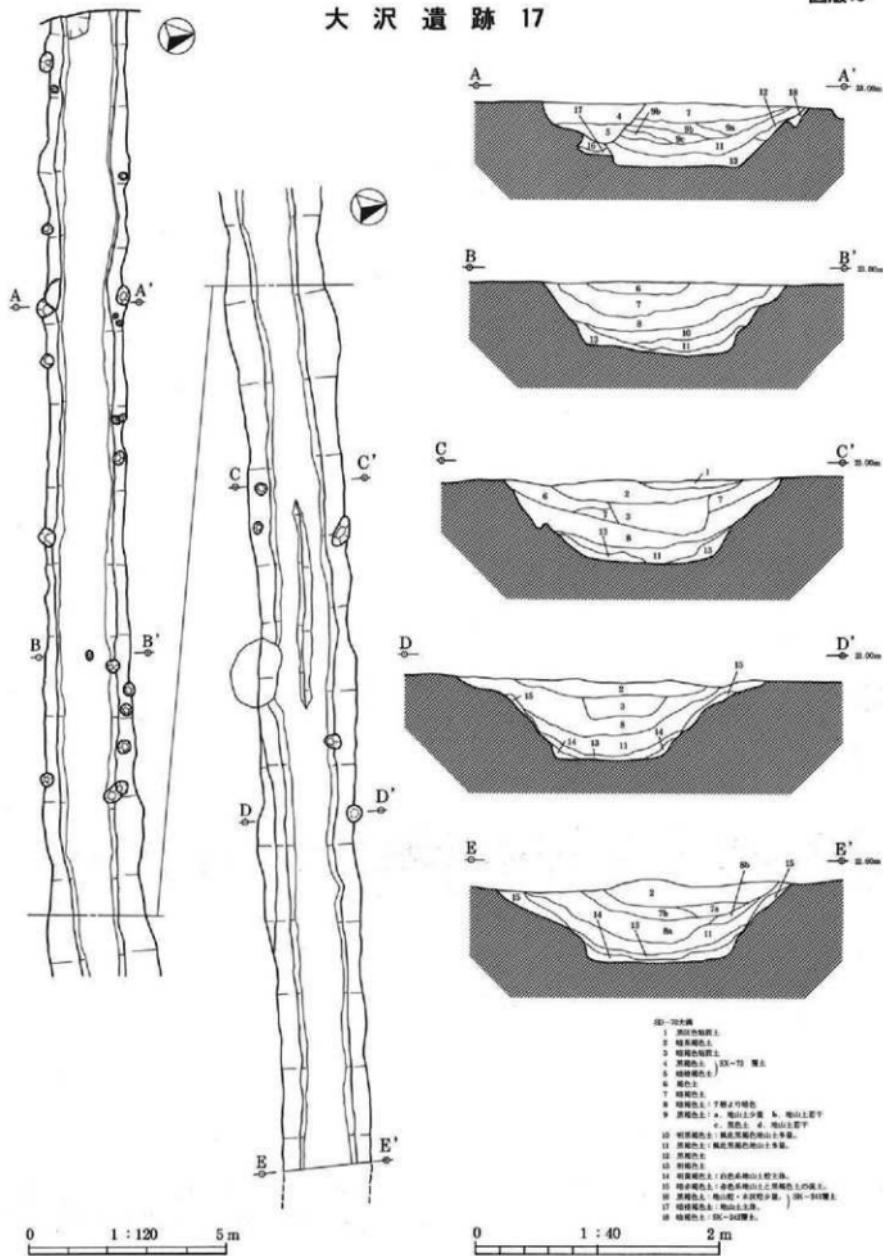


SK-17 土坑



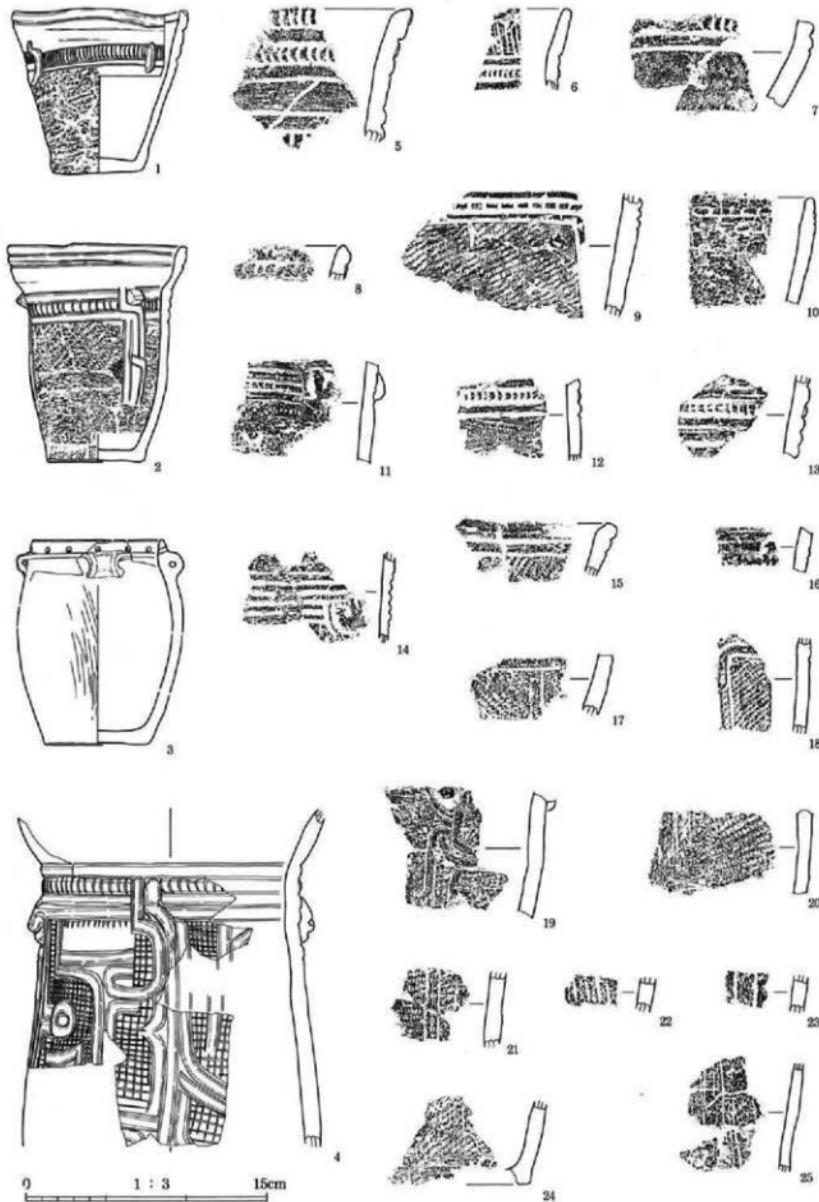
大沢遺跡 A 地点遺構個別図 5 (土坑 2)

大沢遺跡 17



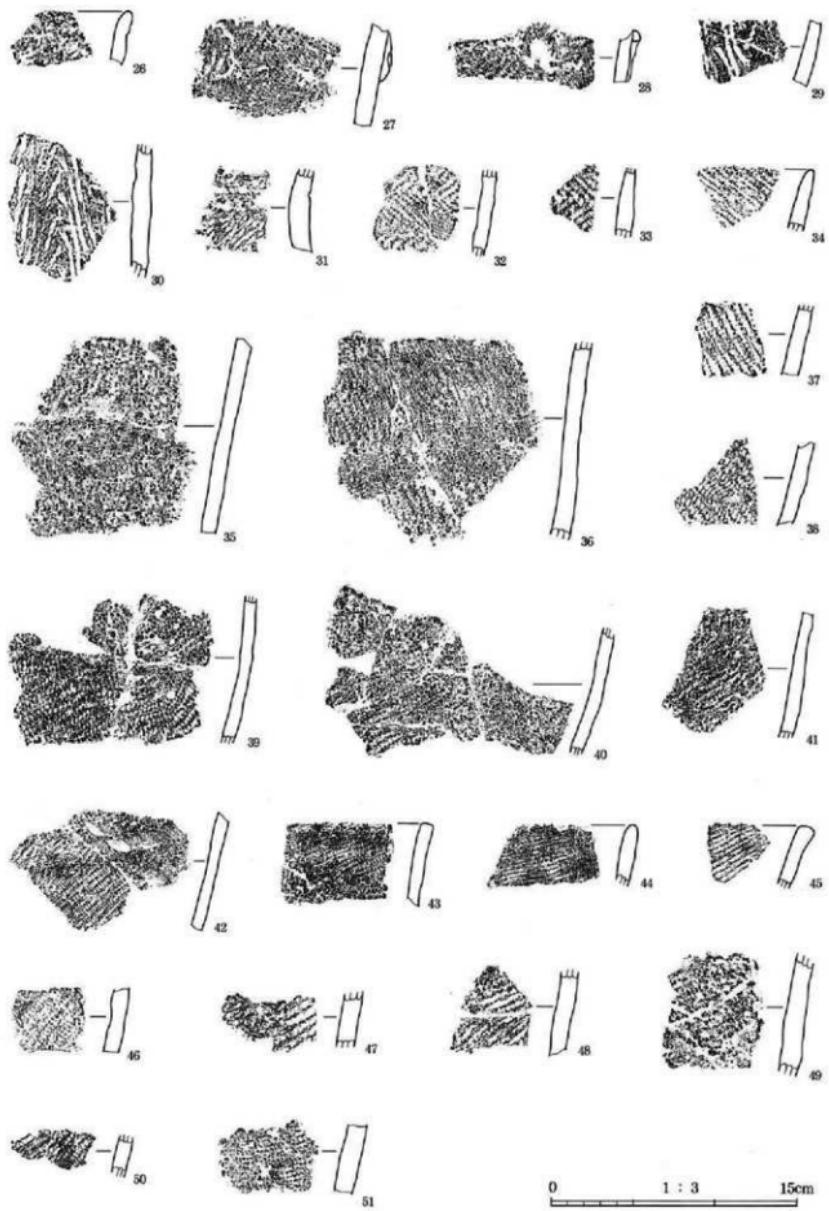
大沢遺跡 A 地点遺構個別図 6 (SD-70大溝)

大沢遺跡 18



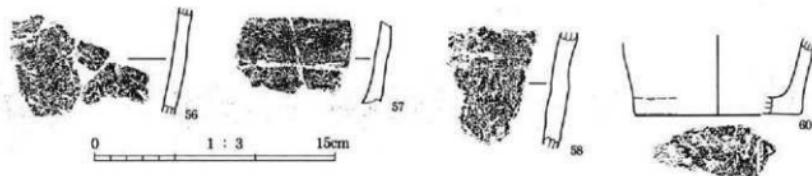
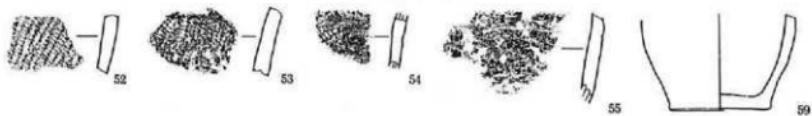
大沢遺跡 A 地点出土遺物 1

大沢遺跡 19

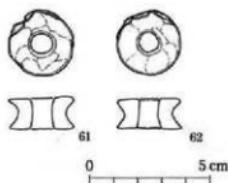


大沢遺跡 A 地点出土遺物 2

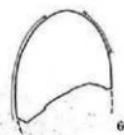
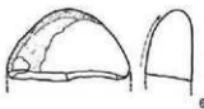
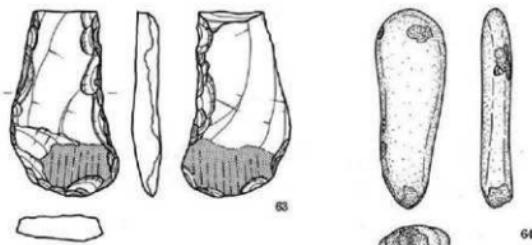
大沢遺跡 20



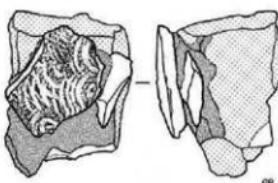
土 製 品



石 器 類

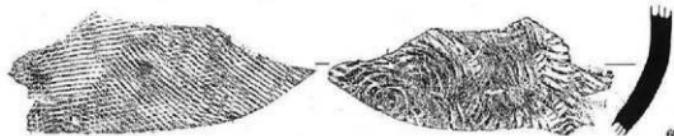


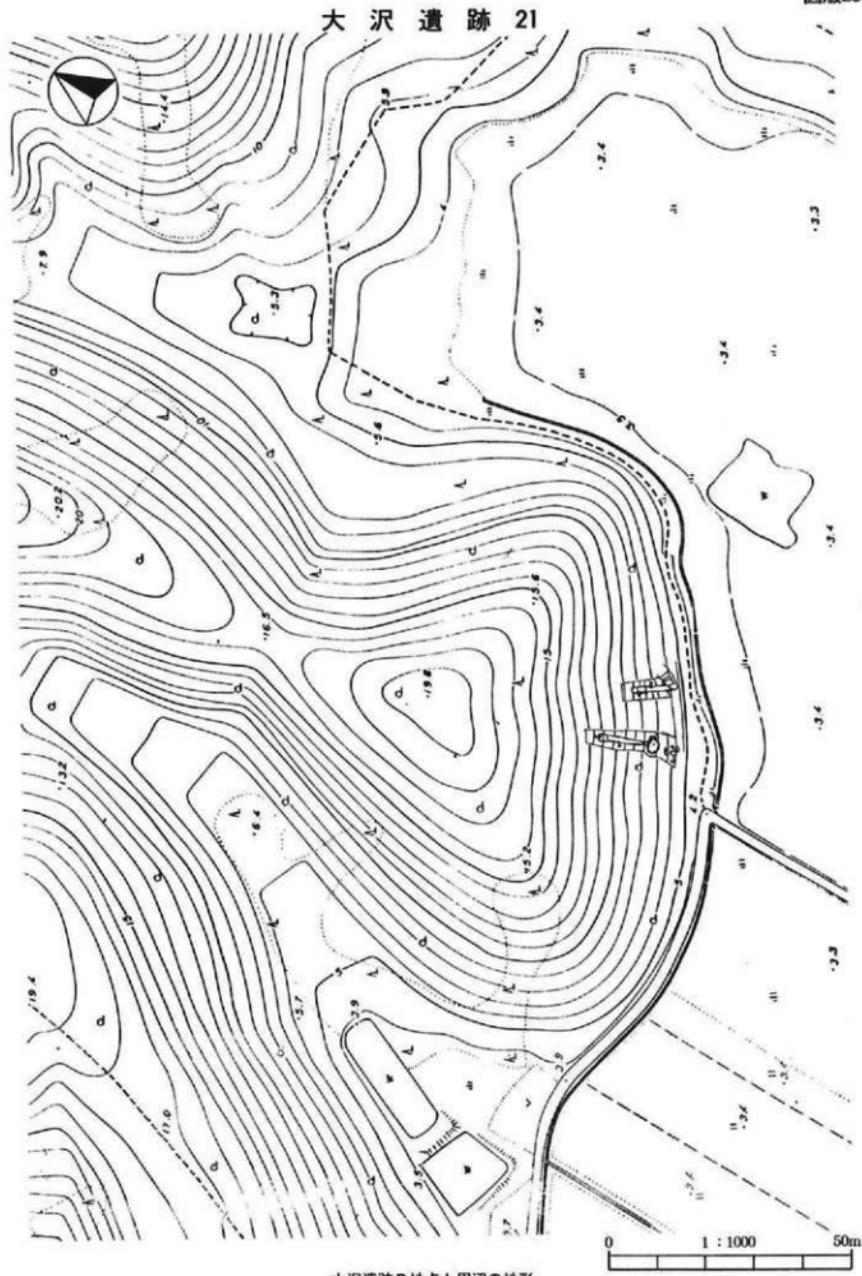
<古 代>



■ 黒色溶解部
■ ガラス質溶解部

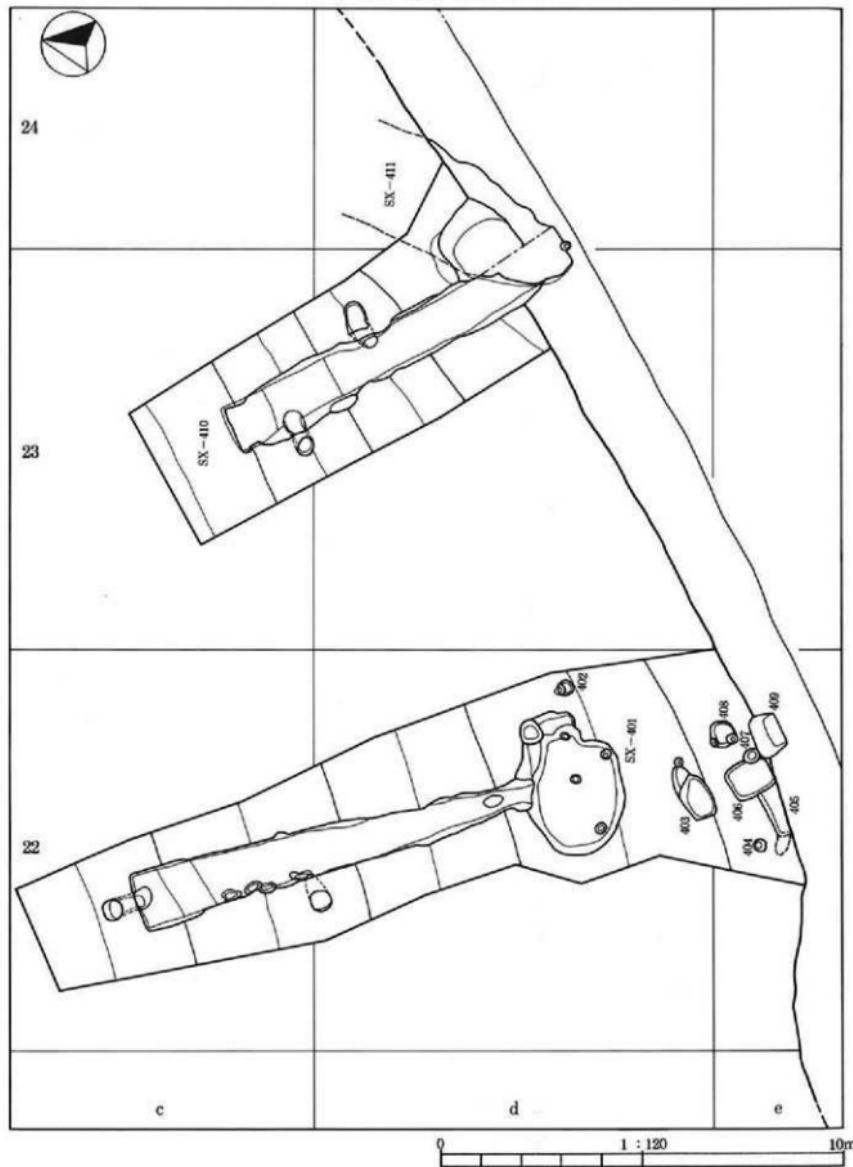
0 1 : 3 15cm





大沢遺跡B地点と周辺の地形

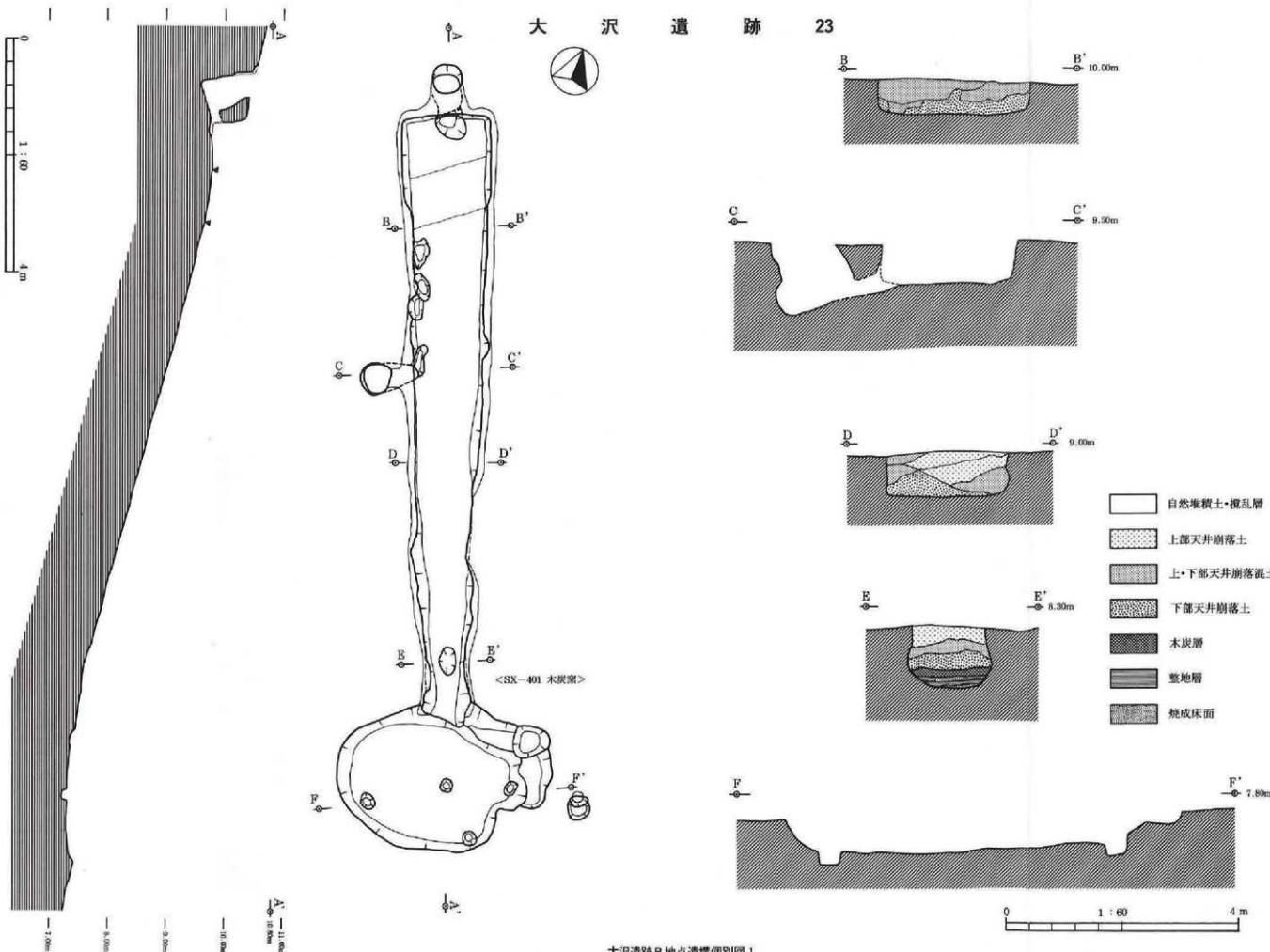
大沢遺跡 22



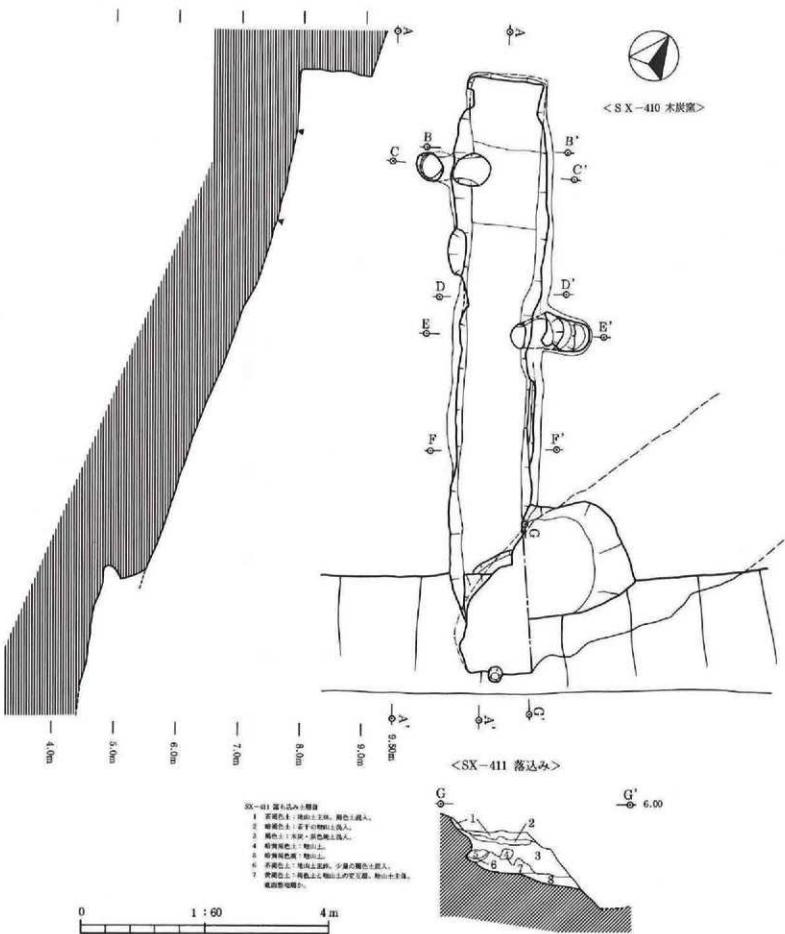
大沢遺跡B地点全体図

大沢遺跡

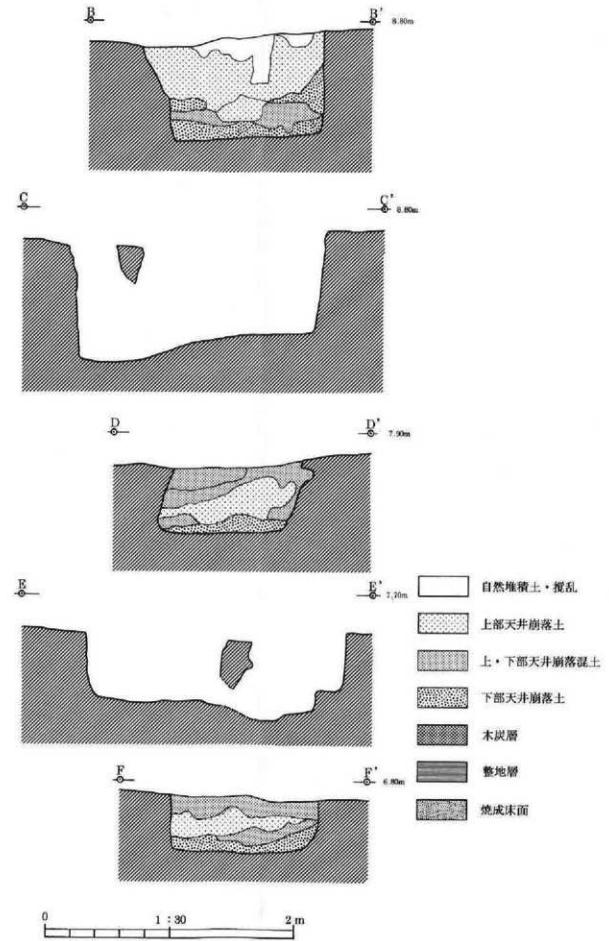
23



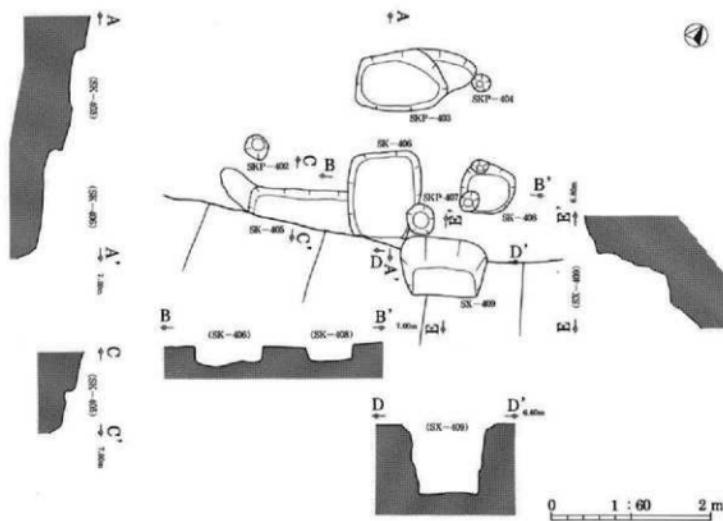
大沢遺跡 24



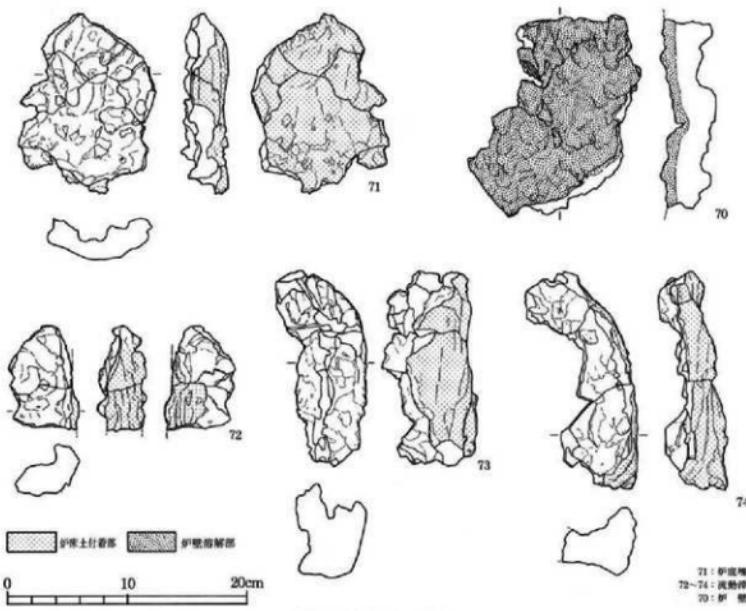
大沢遺跡 B 地点造構個別図 2



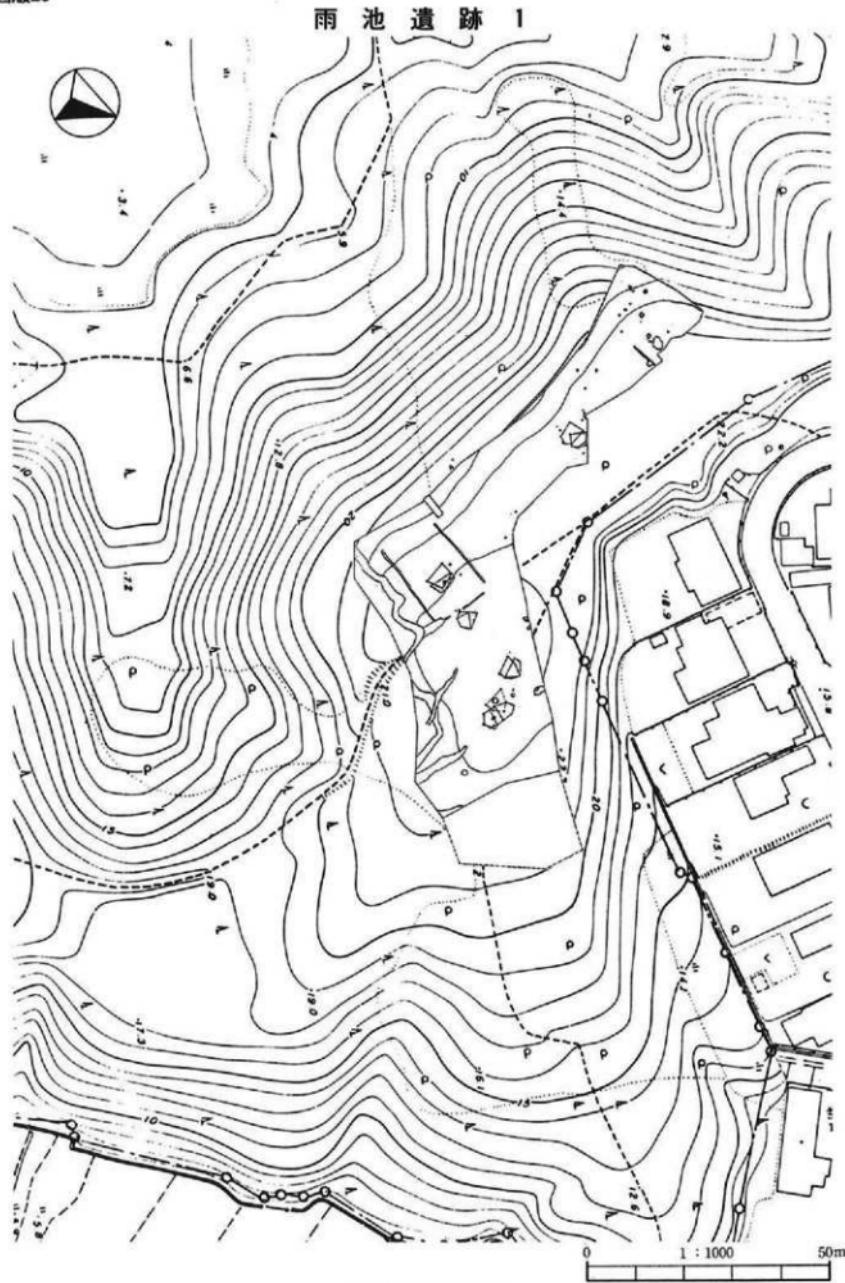
大沢遺跡 25



大沢遺跡B地点遺構個別図3（土坑・ピット）群

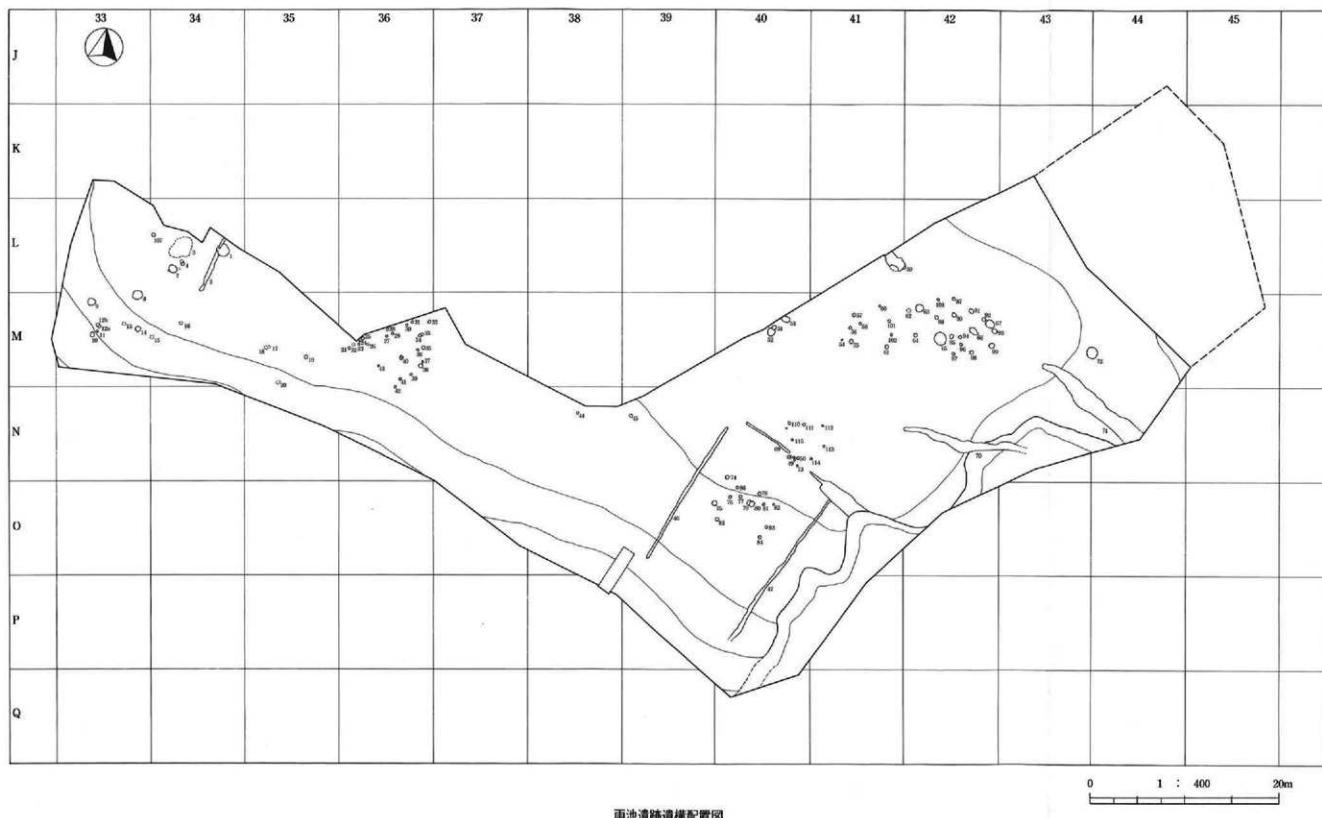


出土遺物（鉄滓・炉壁）



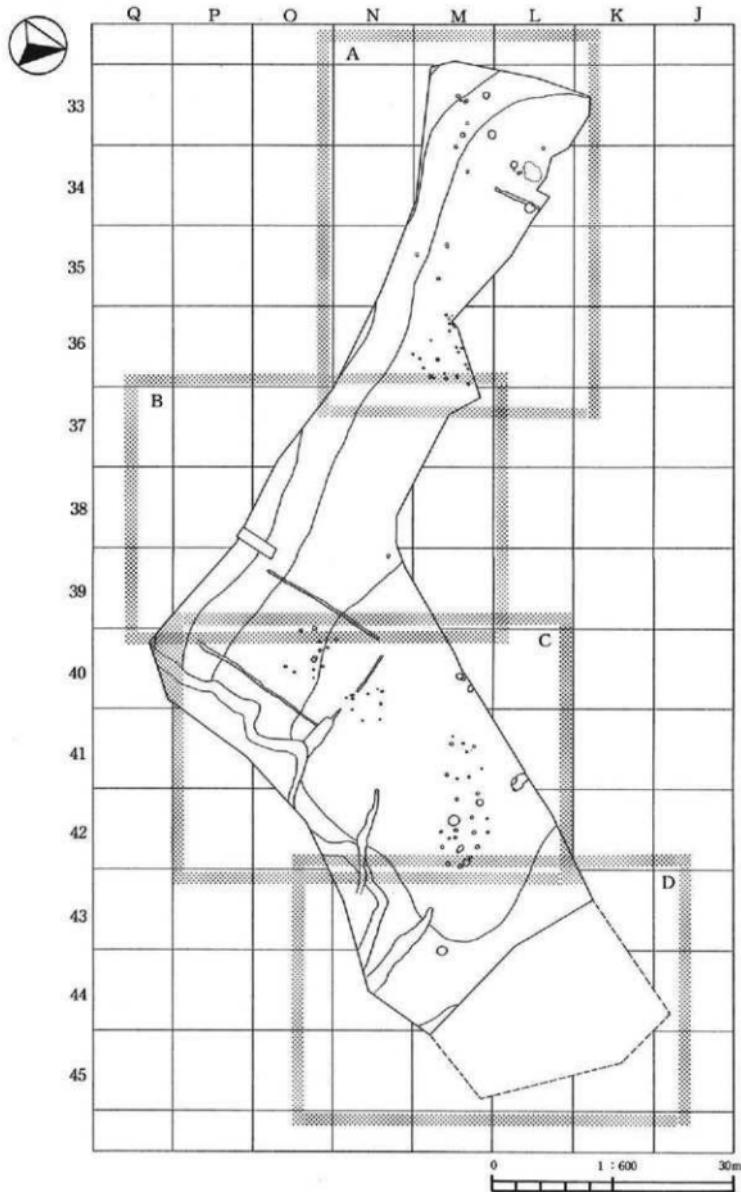
雨池遺跡と周辺の地形

雨 池 遺 跡 2



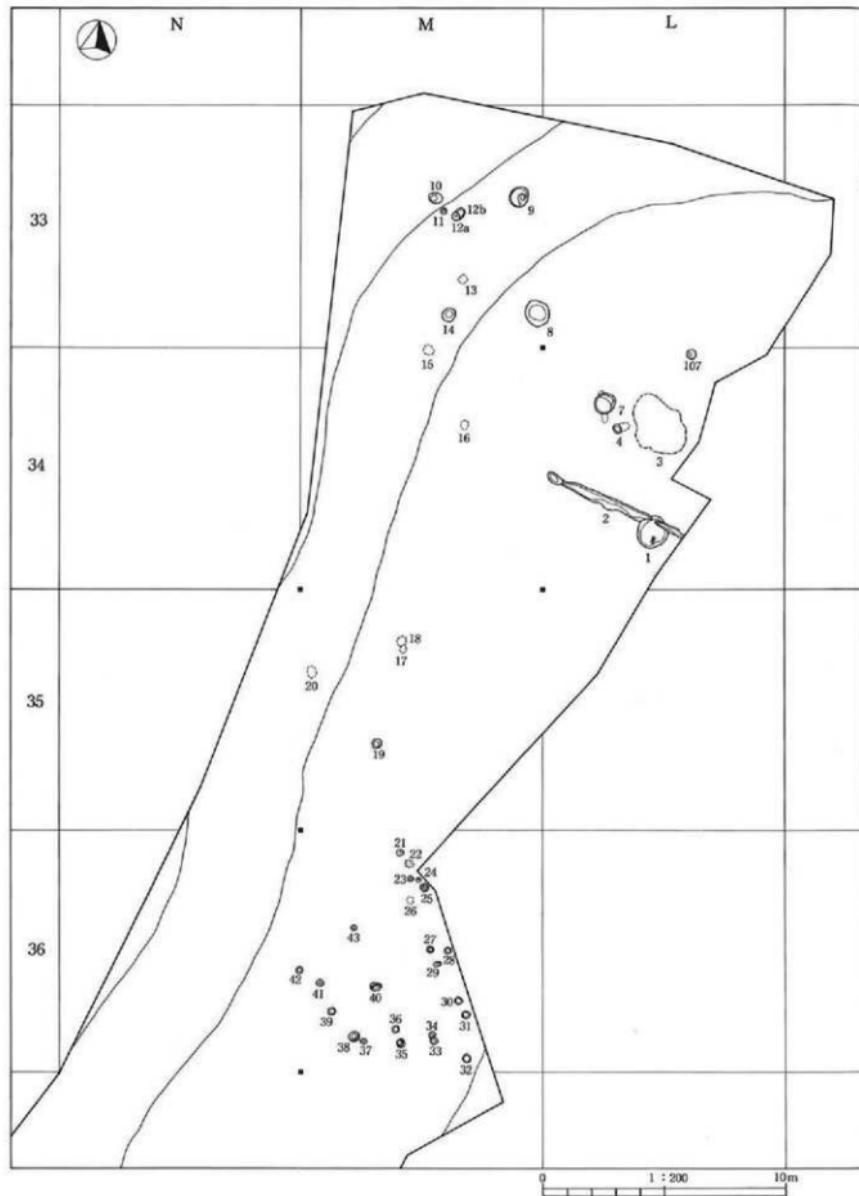
雨池遺跡遺構配置図

雨池遺跡3



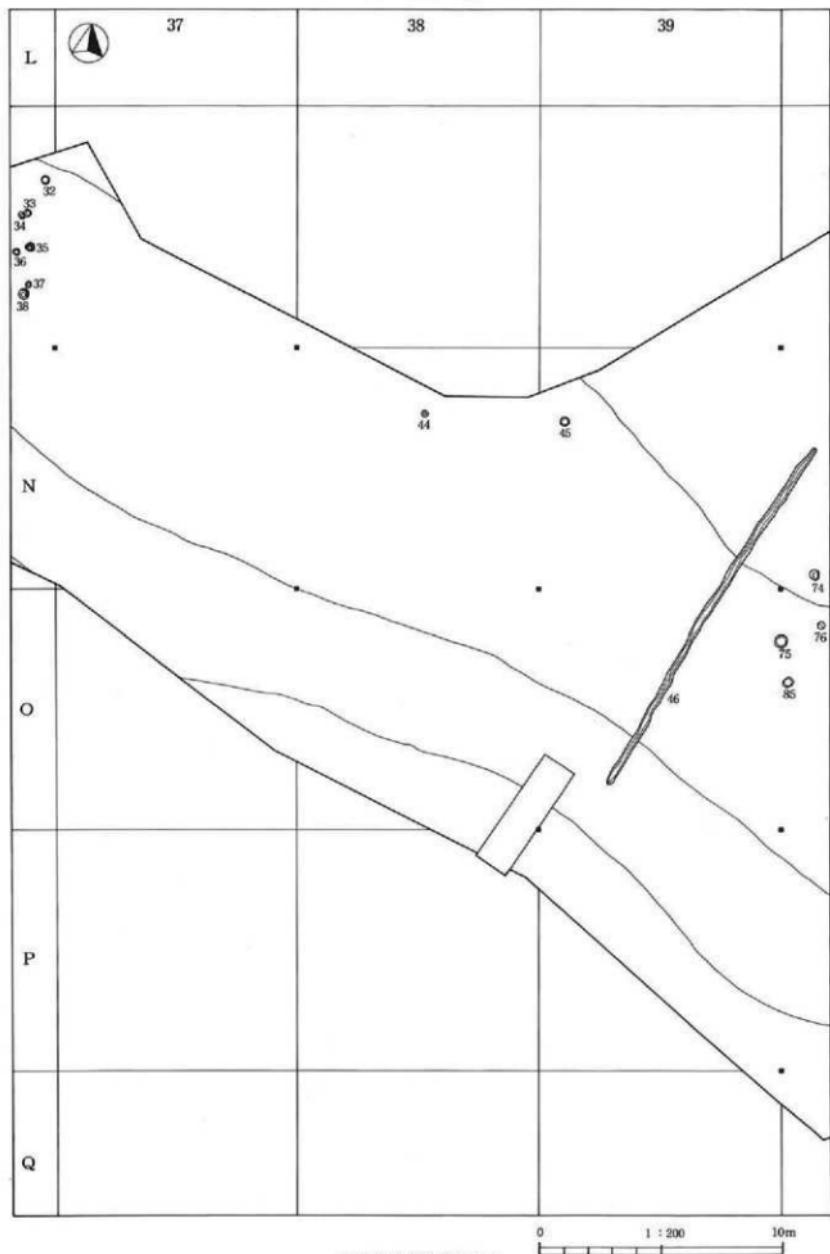
雨池遺跡遺構全体図割付図

雨池遺跡4



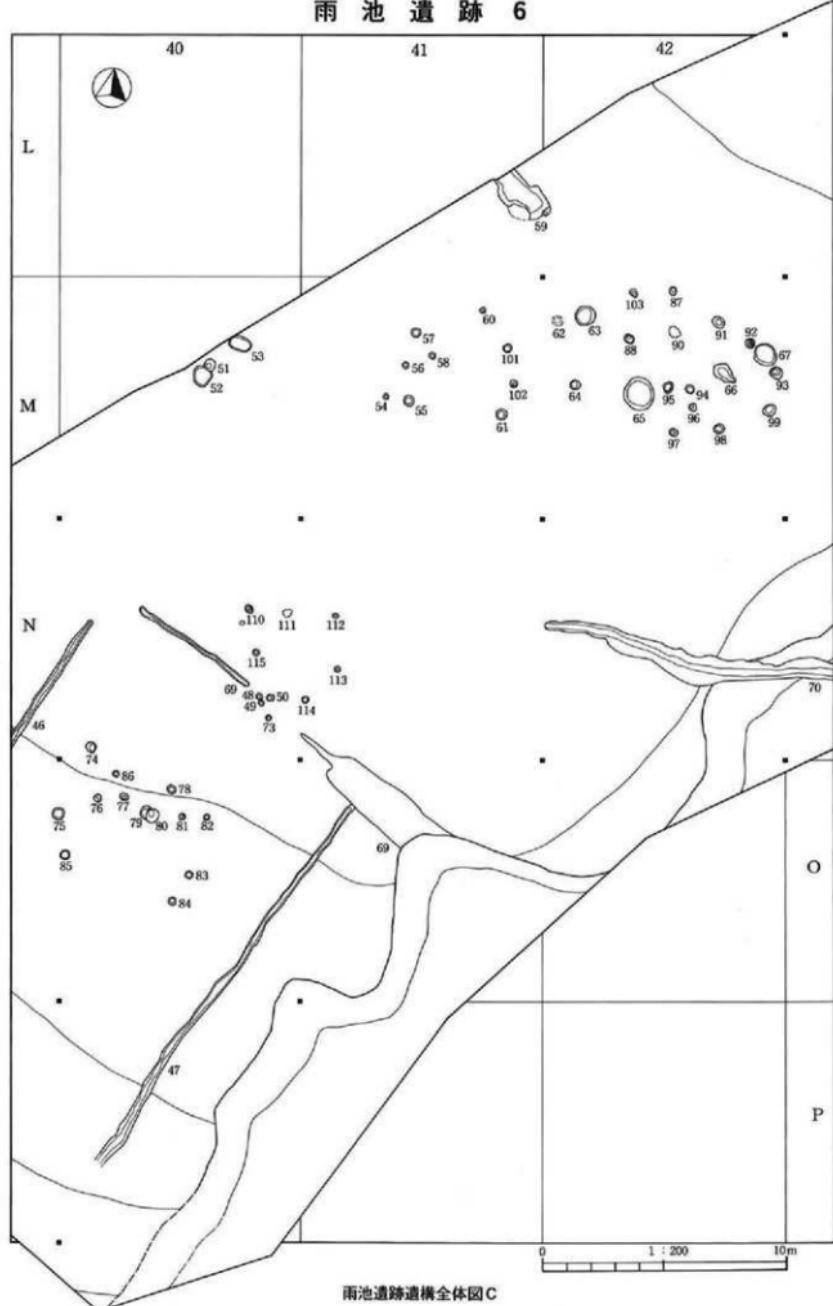
雨池遺跡遺構全体図A

雨池遺跡5



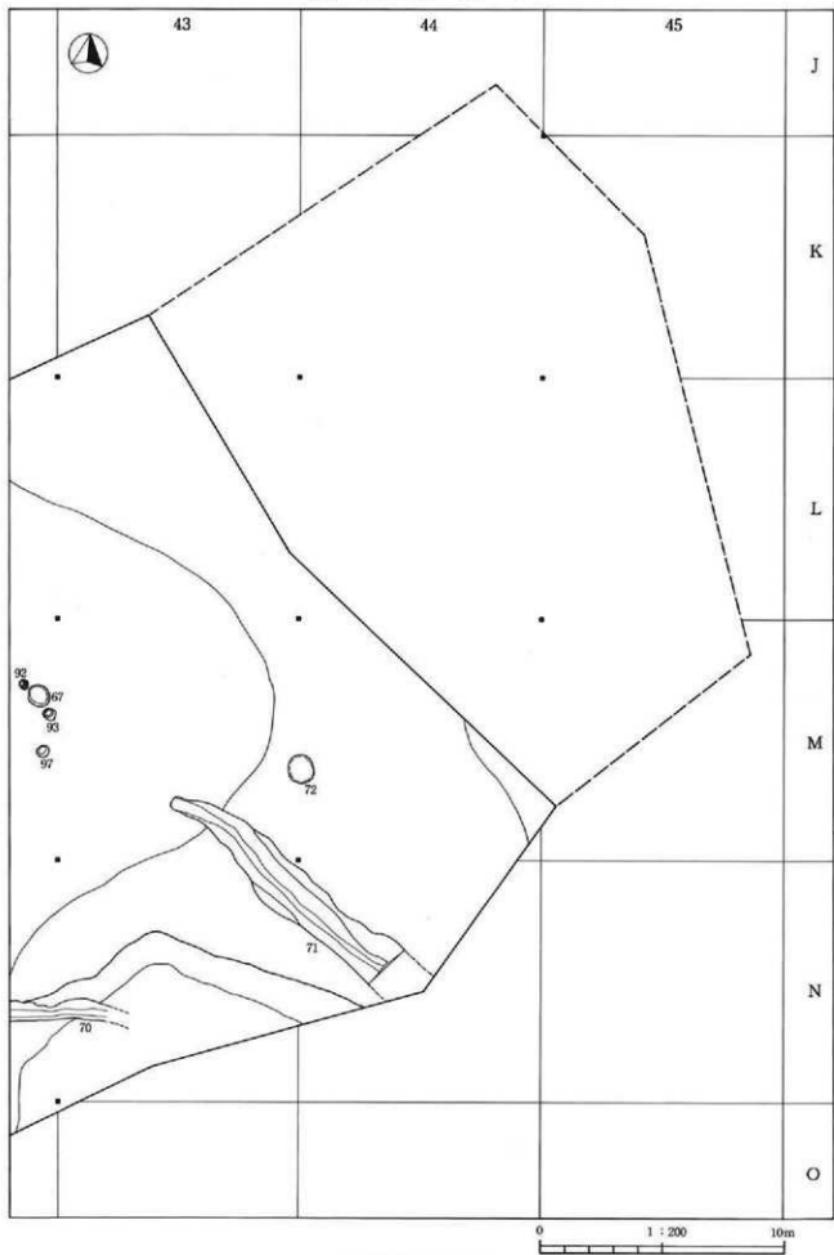
雨池遺跡遺構全体図 B

雨池遺跡 6



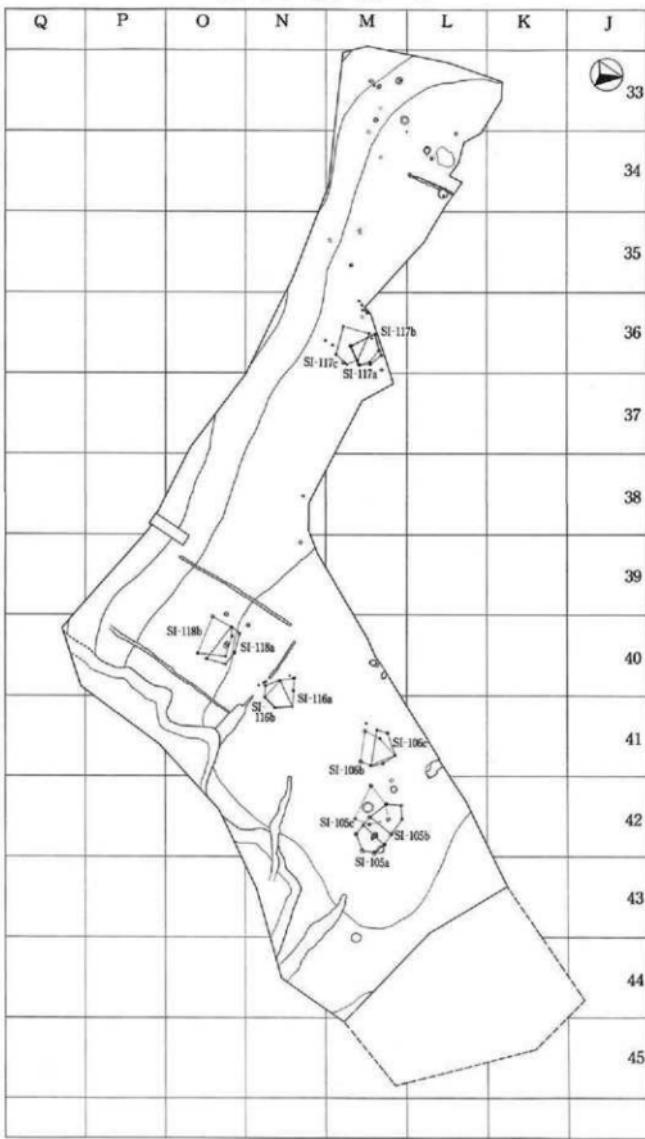
雨池遺跡遺構全体図 C

雨池遺跡7



雨池遺跡遺構全体図 D

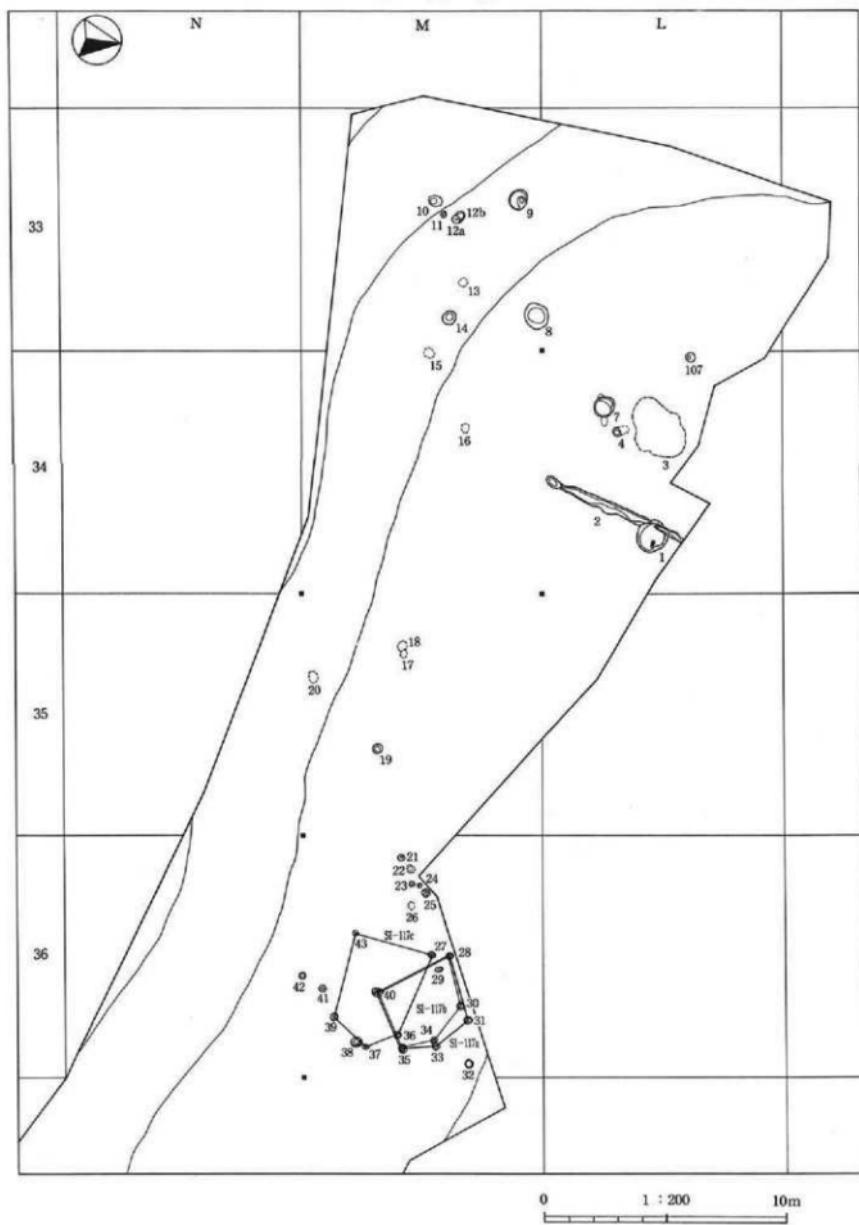
雨池遺跡 8



雨池遺跡推定住居配置全体図 A

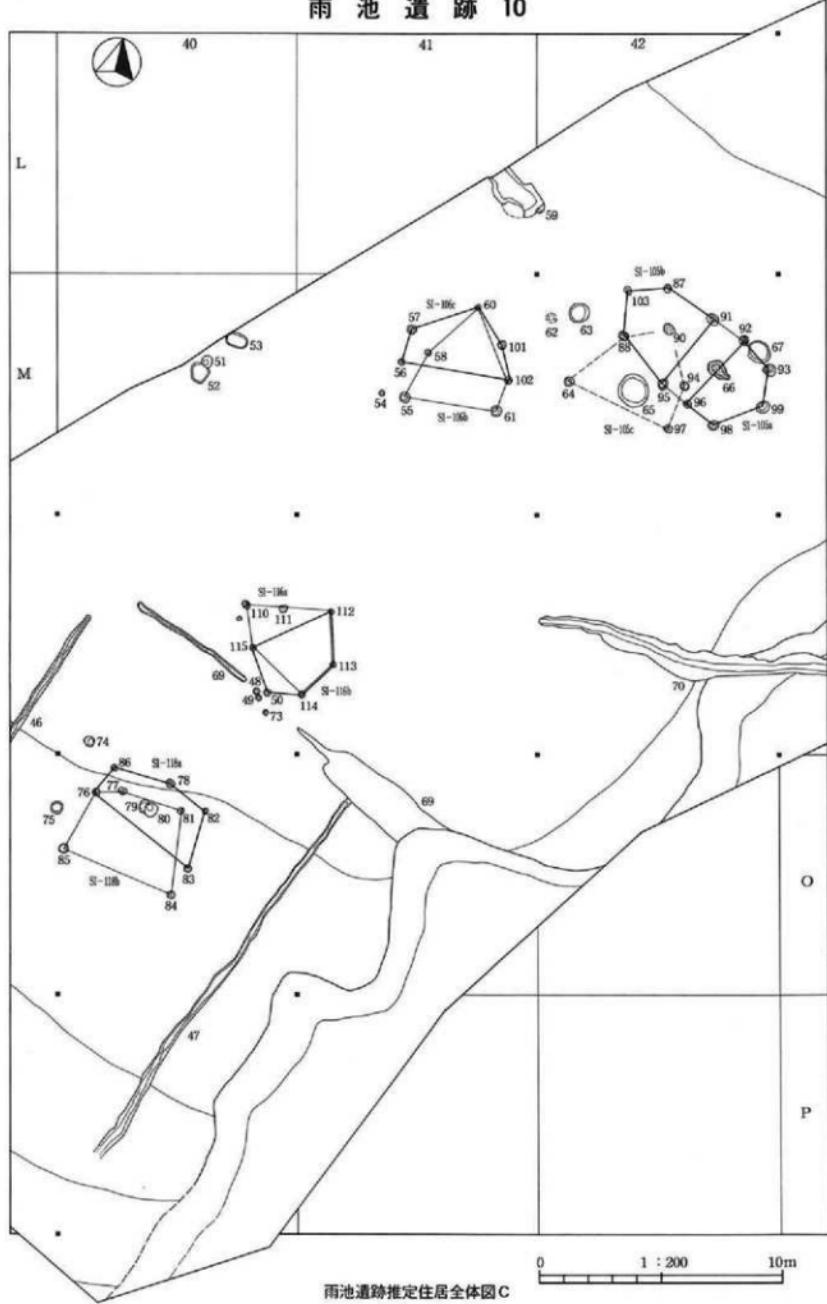
0 1 : 600 20m

雨池遺跡 9



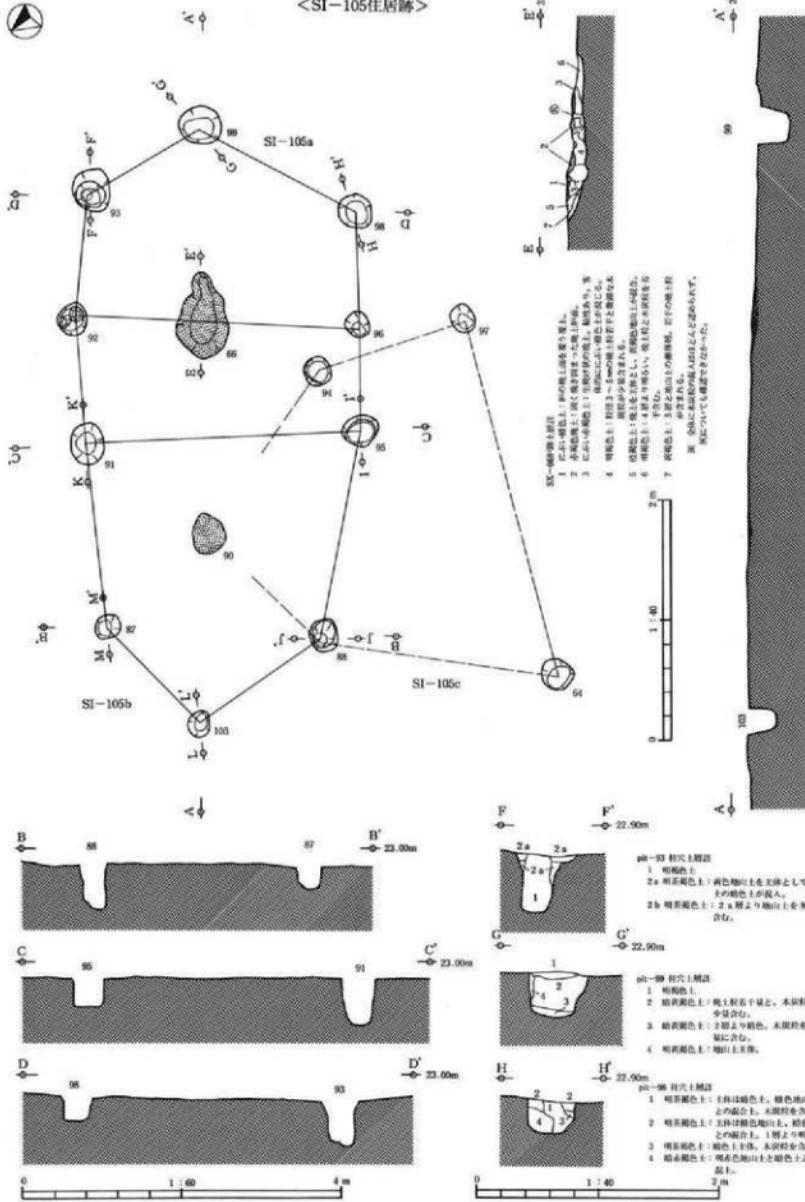
雨池遺跡推定住居全体図B

雨池遺跡 10



雨 池 遺 跡 11

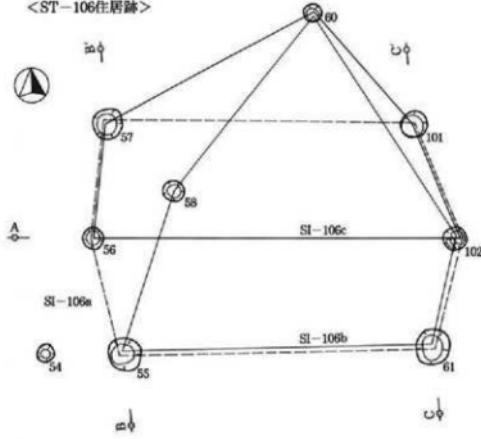
<SI=105佳丽贴>



雨池遺跡遺構個別図1（住居跡1）

雨 池 遺 跡 12

<ST-106住居跡>



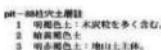
<ST-105住居跡柱穴断面図>



pit-95柱穴土層記

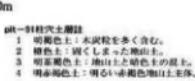
- 1 暗黃褐色土：主体は暗色土。地山土が
混合する。
- 2 暗黃褐色土：地山土を主体に、暗色土
が混入。：様より明色。
- 3 明褐色土
- 4 黄褐色土：地山土为主体。

$$J_{\text{obs}} = 2 - \frac{J'}{2} 22.90$$

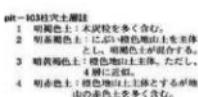


<SI-116佳麗謹>

K K'



— 1 —



M' 22.90m

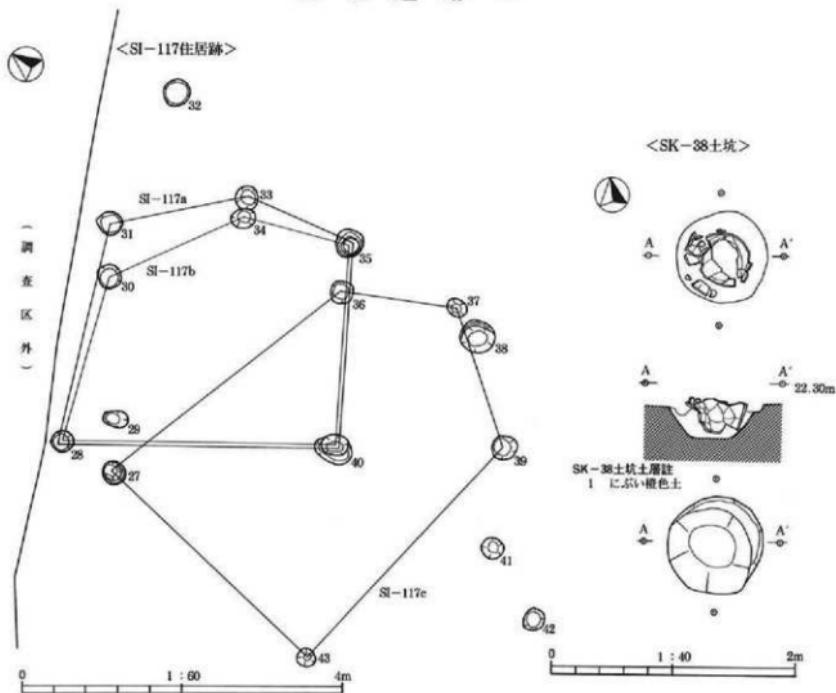


The diagram illustrates a portion of a crystal lattice. Atoms are represented by circles of varying sizes. The labels indicate specific lattice sites: 113 is at the bottom left, 114 is at the top center, 119 is at the bottom center, 111 is at the bottom right, 49 is at the top right, 50 is below 49, 51 is to the right of 50, and 52 is at the far right. A large circle labeled V is located at the top left.

SI-116a

雨池遺跡遺構個別図 2 (住居跡 2)

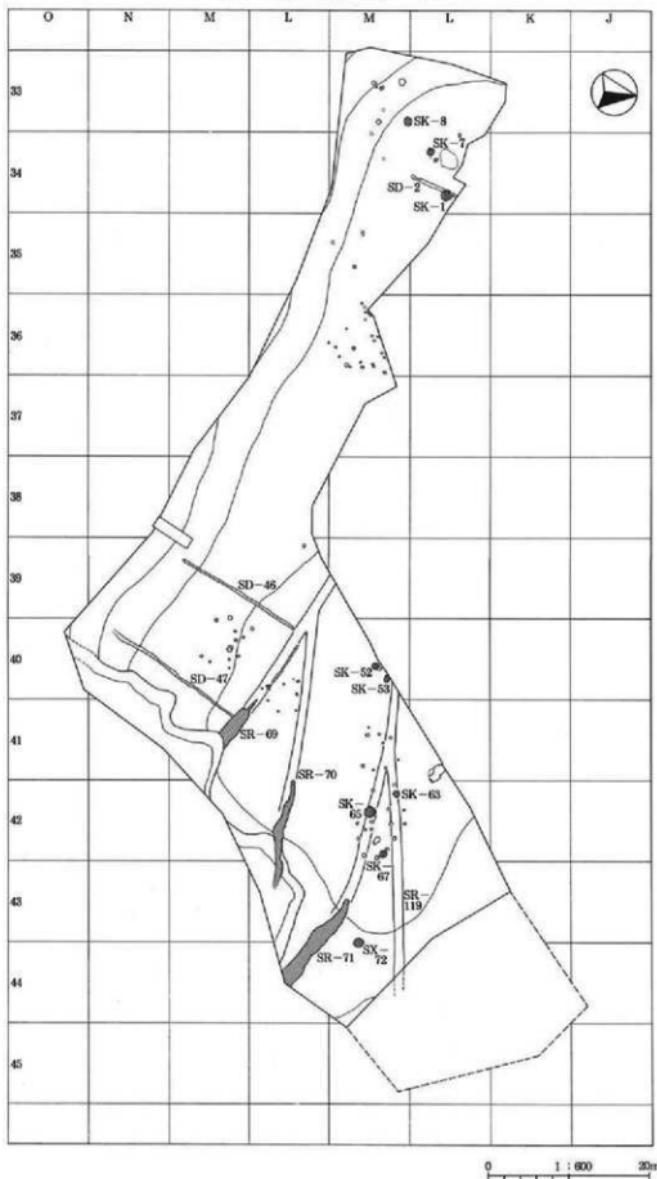
雨池遺跡 13



<SI-118住居跡>

雨池遺跡遺構個別図3（住居跡3）

雨池遺跡 14



焼土坑と旧道・区画溝配置図

雨池遺跡 15

<SK-1 焼土坑>



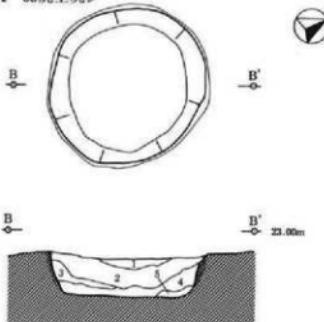
SD-1 烧土坑

- 黒褐色土：黒褐色土と褐色土の組合せ。
- 褐色土：褐色の木炭粉を含む。
- 褐色土：褐色の木炭粉を含む。
- 褐色土：4とSK-1-6層との接觸層。

SK-1 烧土坑上部

- 黒褐色土：土壌色土と褐色土で構成される。
- E-44 褐色土：褐色の木炭粉を含む。
- 褐色土：木炭灰・未燃灰が多量に含む。
- 暗黒褐色土：褐色および木炭粉を多く含む。
- 褐褐色土：褐色の木炭粉を含む。
- 褐色土：褐色の木炭粉を含む。
- 褐色土：褐色土の基底。
- 褐色土：地土壁の基底。

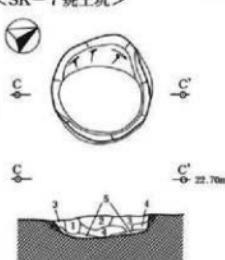
<SK-65 焼土坑>



SK-65 烧土坑上部

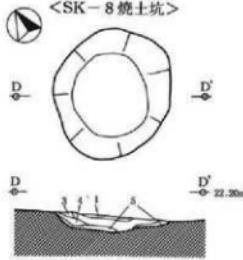
- 黒褐色土：土壌色土と褐色土で構成される。
- E-44 褐色土：褐色の木炭粉を含む。
- 褐色土：1層部分に木炭灰を多く含む。
- 褐褐色土：木炭灰を大量に含み、土壌色土が多く含まれる。
- 褐褐色土：4層より焼土坑の外縁および中央部。木炭灰が多く含まれる。

<SK-7 焼土坑>



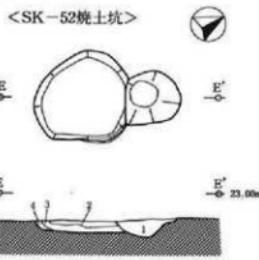
- SK-7 烧土坑上部
- 黒褐色土：土壌の基底。
 - 褐色土：少額の木炭粉を含む。
 - 褐色土：木炭灰の小量を含む。
 - 褐色土：木炭灰の多量を含む。
 - 褐色土：地山を覆う土層。

<SK-8 焼土坑>



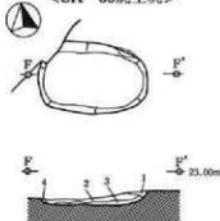
- SK-8 烧土坑上部
- 黒褐色土：木炭灰を多く含む。
 - 褐色土：木炭灰を含む。
 - 褐褐色土：木炭灰と、2層より若干少なくな。
 - 黒褐色土：木炭灰と、2層より若干少なくな。
 - 黒褐色土：木炭灰と、2層より若干少なくな。
 - 褐色土：1層部分を多く含む。

<SK-52 焼土坑>



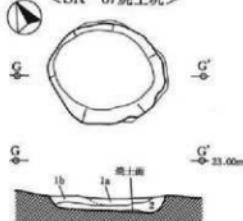
- SK-52 烧土坑上部・SK-2-1 烧土坑上部
- E-44 黑褐色土：褐色の木炭粉を含む (SK-2-1层)
 - 褐褐色土：土壌の基底。
 - 黑褐色土：木炭灰を含む。
 - 褐色土：木炭灰を含む。
 - 褐色土：地山を多く含む。

<SK-53 焼土坑>



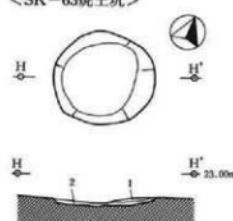
- SK-53 烧土坑上部
- 褐色土：土壌の基底。
 - 褐色土：土壌灰を含む。
 - 褐黑色土：褐色土を多く含む。
 - 褐色土：褐色土の木炭粉を含む。
 - 褐色土：褐色土の木炭粉を含む。

<SK-67 焼土坑>

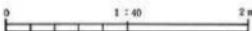


- SK-67 烧土坑上部
- 褐色土：土壌灰を多く含む。
 - 褐色土：褐色土を多く含む。
 - 褐色土：褐色土の木炭粉を含む。

<SK-63 烧土坑>



- SK-63 烧土坑上部
- E-44 黑褐色土：土壌の木炭粉の可能性がある。
 - 褐色土：褐色の木炭粉を含む。
 - 褐色土：褐色の木炭粉を含む。

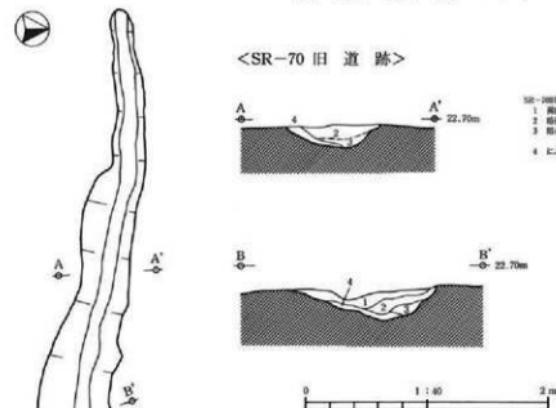


雨池遺跡遺構個別図4 (焼土坑)

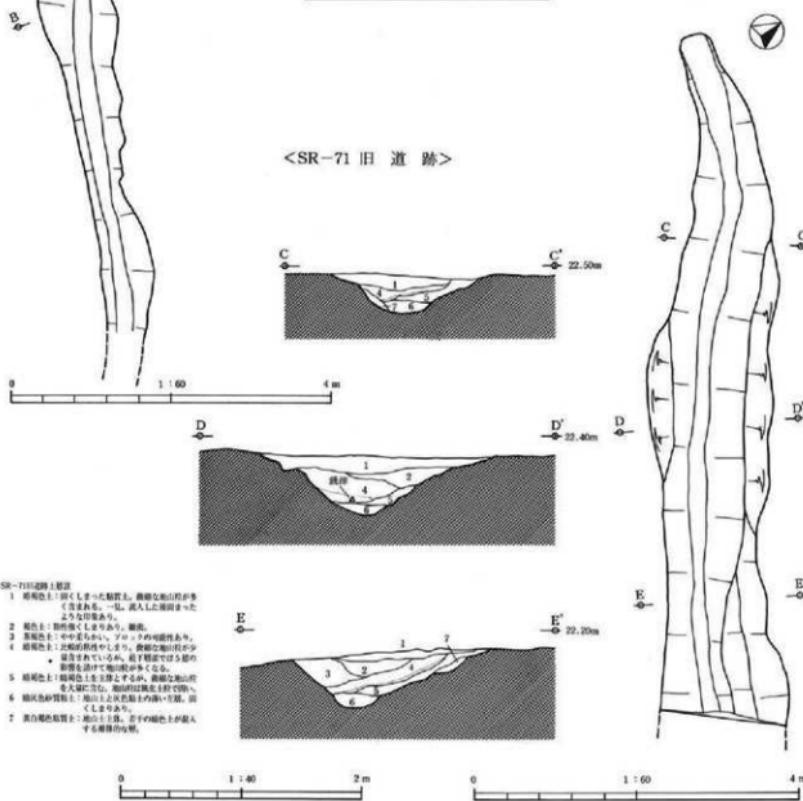
雨池遺跡 16



<SR-70 旧道跡>

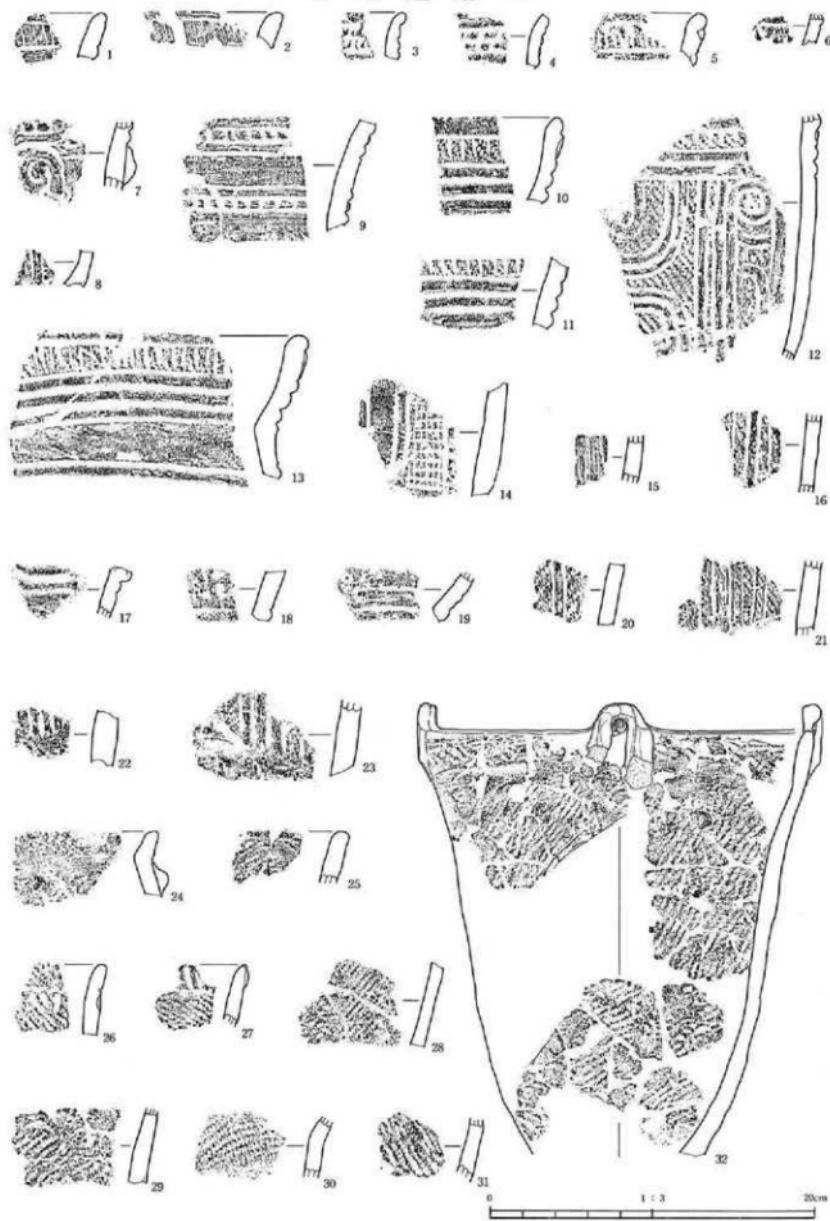


<SR-71 旧道跡>



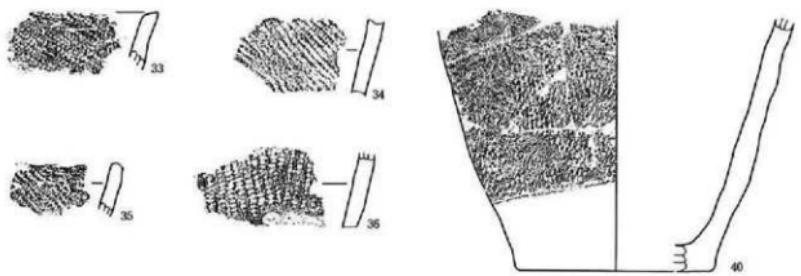
雨池遺跡遺構個別図 5 (旧道路)

雨池遺跡 17

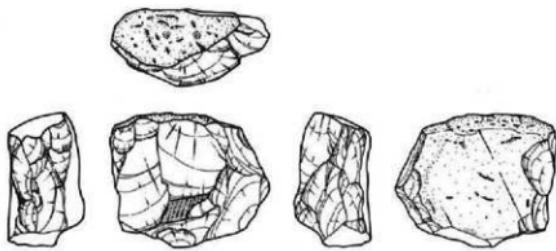


雨池遺跡出土遺物 1

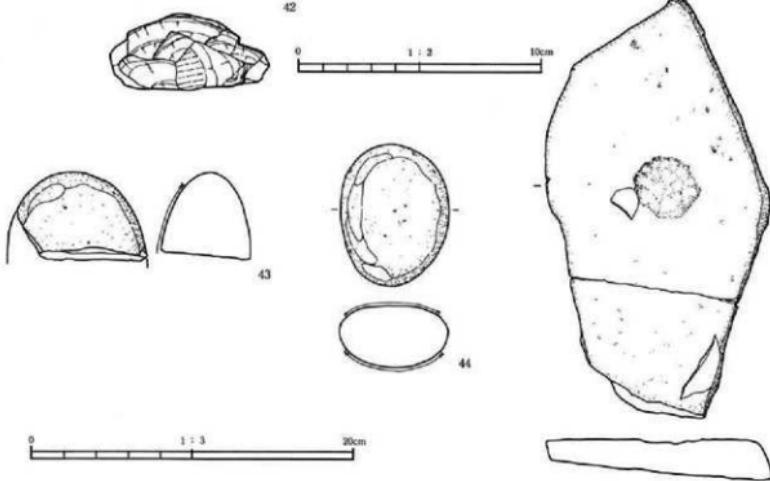
雨池遺跡 18



0 1 : 3 20cm

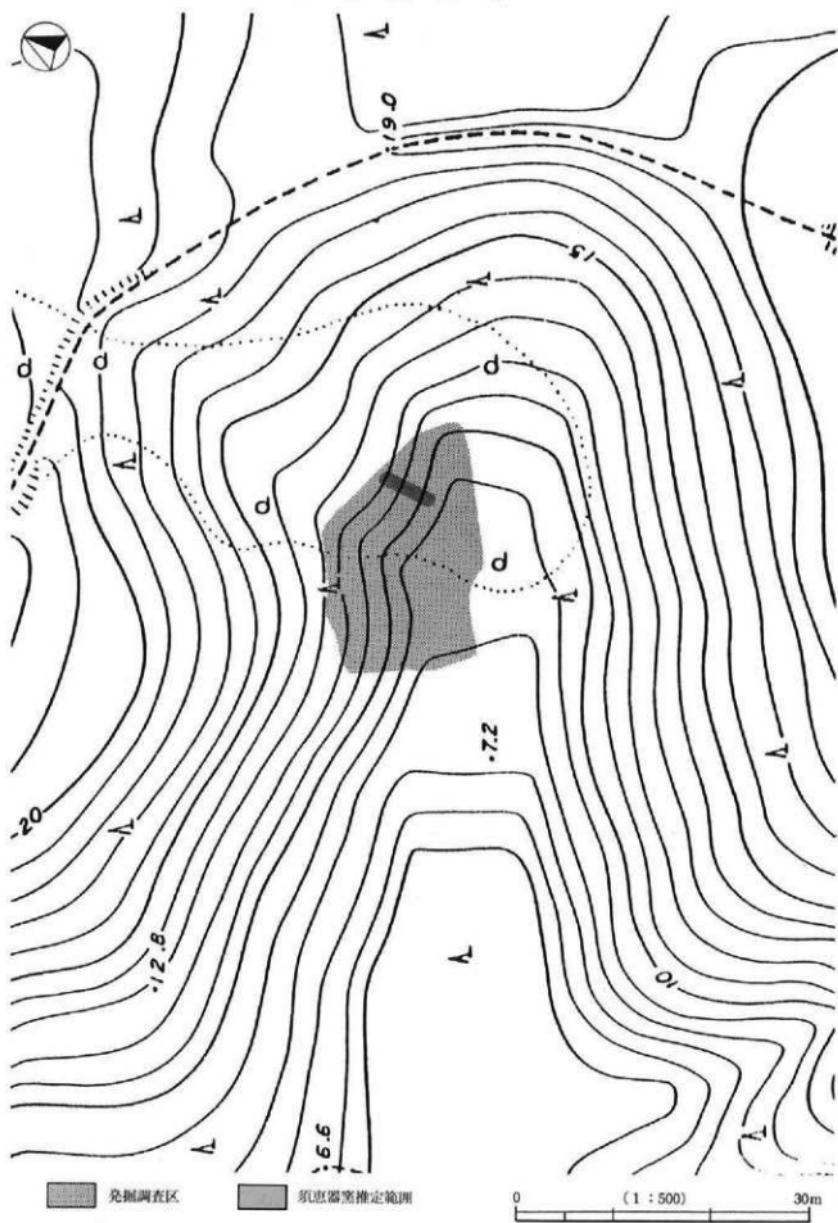


0 1 : 3 20cm



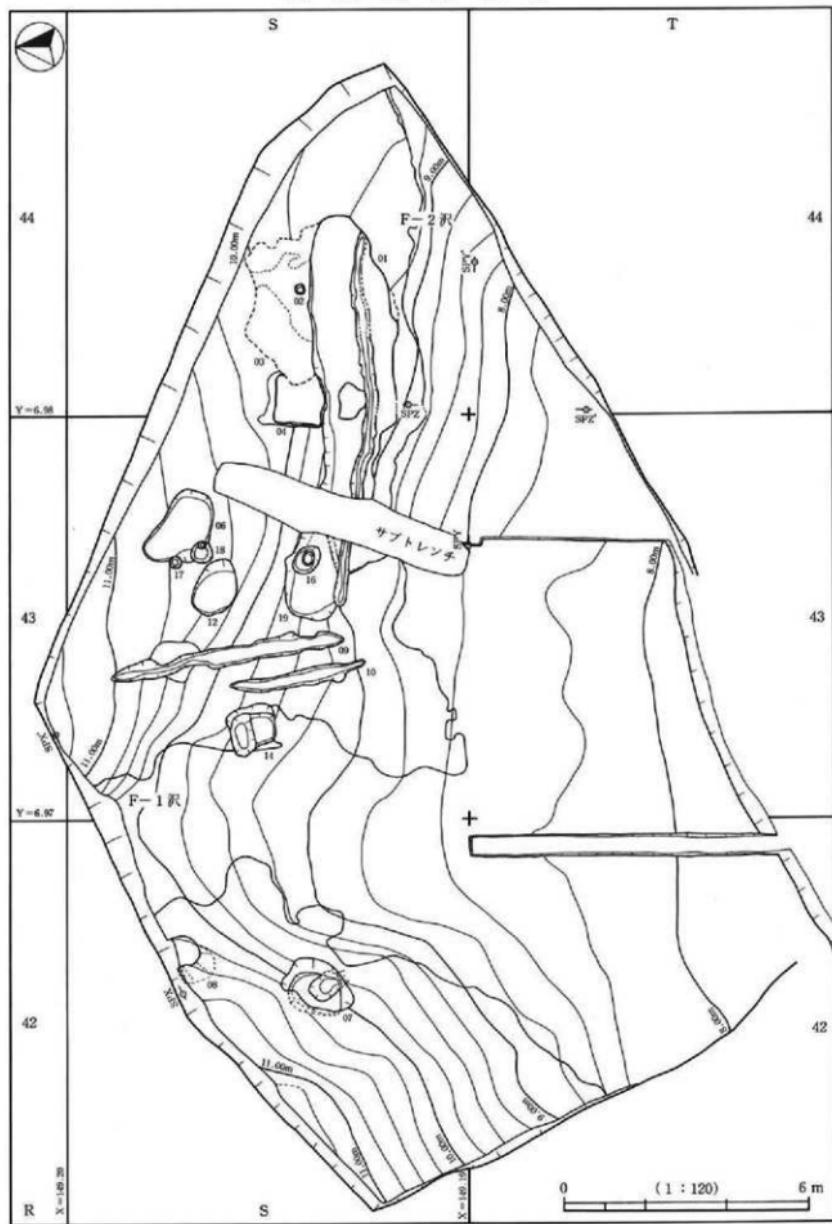
雨池遺跡出土遺物 2

雨池古窯跡 1



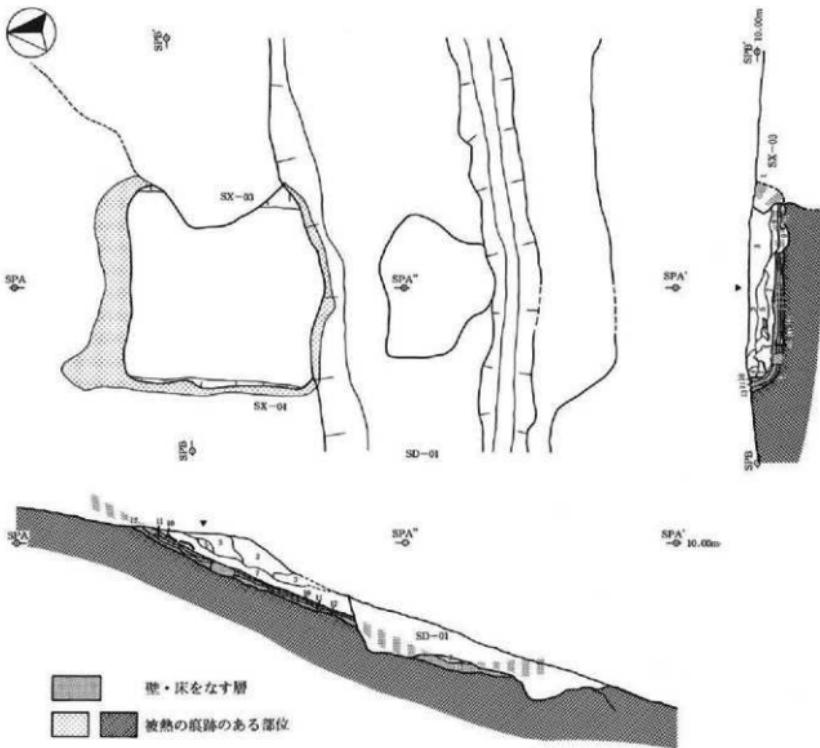
雨池古窯跡と周辺の地形

雨池古窯跡 2

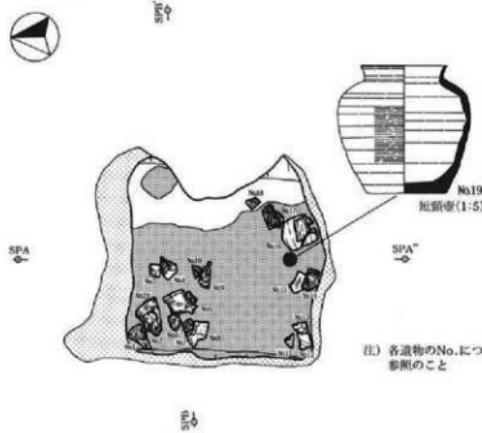


雨池古窯跡遺構全体図

雨池古窯跡3



<須恵器片出土状況>



<SX-03> 1. 黒褐色土：若干の洗土を含み、やや粘質を帯びる。

2. 黄色土：洗土・本洗土を多く含む。SD-01層土に限らずする。

3. 黑褐色土：洗土・木炭粒を多く含み、焼き土がある。土質を崩さない。

4. 黑褐色土：3層に階級するが、やや暗色を呈する。

5. 黑褐色土：地山土・地山土プロトクが並列的で、洗土粒を含む。

6. 黑褐色土：3層と7層の混合土で、SX-03の覆土を含む。

7. 黄褐色土：洗土・プロトクを含むとし、炭化された洗土粒を含む。同じ焼土を含まない。

8. 黑褐色土：ソフトで、洗土粒を多く含む。

9. 黄褐色土：SX-03に隣接する本洗土による3～5層の複数層。

10. 黑褐色炭化土塊：炭化部分で硬炭土をなす。上面は黒褐色層の土を其材料に構成する分かれ。

11. 黑褐色灰土：固く焼き締まる。

12. 黑褐色灰土：ソフトで洗土質を含む。

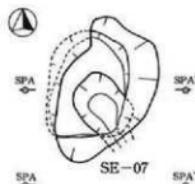
13. 黄褐色土：黑褐色洗土層（太土）を若干含む。

注) 各遺物のNo.については、図版51・52を参照のこと

0 (1 : 30) 1.5m

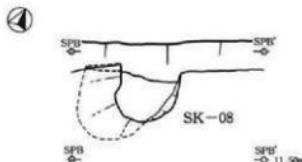
図版49

雨池古窯跡 4



<SK-07>

1. 黒褐色土：褐褐色土を主導するが、黄色地山土粒の含有が多く、またブロックで西端部に含まれるので、全体ではやや明色を呈する。
2. 褐褐色土：褐褐色土が主色。若干の黒褐色土が含まれる。
3. 褐褐色土：西側部では黒褐色土のブロックがやや多く含まれるが、全体的には褐褐色土のブロックが混入する。1~2層より明色を呈する。
4. 黑褐色土：西側地山土ブロック多く含む。
5. 黄褐色土：西側部で若干の黒褐色土のブロックが主体となるが、地山土ブロックの周囲は黒褐色土をわずかに含む。
- 6・7. 黑褐色色斑駆：類似のもの2つを主とし、白灰色土が本部で増殖するなど、本が盛った時に間に混入した本部色斑駆と考えられる。6~7層はこれらを含む。
8. 黑褐色土：地山土が主体で、粘粒・塊まりがある。
9. 黑褐色土：黄色地山土を多く含む。

SE-07
→ 10.50m

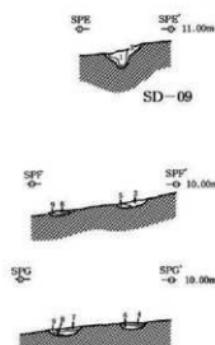
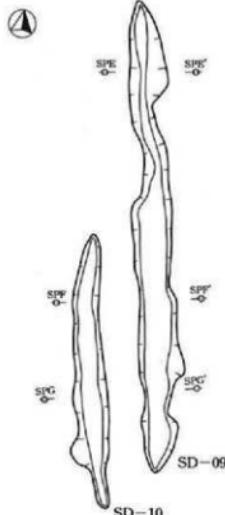
<SK-08>

1. 明色土：地山土を多く含む。
2. 黑褐色土：地山土粒・地山ブロックを含む。
3. 黑褐色土：西側部で地山ブロックを含む。
4. 黑褐色土：地山ブロックを含む。
5. 黄褐色土：西側地山土ブロック多く含み明色を呈する。
6. 黑褐色土：地山土を多く含む。
7. 黄褐色土：地山土粒・地山ブロックを含む。
8. 黑褐色土：地山土を多く含む。
9. 黄褐色土：地山ブロックを含む。
10. 黑褐色土：地山ブロックが主体で、黒褐色土が混じる。
- 11a. 黑褐色土：地山土を多く含む。
- 11b. 黑褐色土：地山土を多く含む。
12. 黄褐色土：地山土を多く含む。
13. 黑褐色色斑駆：上層部では地山土が主体となる。

SK-08
→ 11.50m

<SK-06>

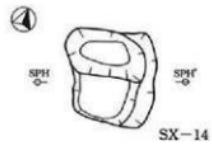
1. 黑褐色土：地山土粒が粒子状に多く混入する。
2. 黑褐色土：地山ブロック。
3. 黑褐色土：地山土が砂礫混入で黄褐色を呈する。
4. 黑褐色土：黒褐色土が主体で、地山土を多く含む。地山土中に多く混じる。
5. 黑褐色土：黒褐色土が主体で、多くの黒褐色土が混入し、若干の木炭を含む。
7. 黑褐色土：若干の黒褐色土が混じる。黒褐色土を主体とし、これに黒褐色土が多く混じる。

SK-06
→ 11.00m

1. 黑褐色土：黑色地山土粒が少額混じる。
2. 黑褐色土：本層が最も厚い地山土層が山脚部のため、全体的に砂質で、褐褐色土と同色の混合土。
3. 褐褐色土：地山土粒上に薄く黒褐色土の地山土。
4. 黑褐色土：地山土粒上に薄く黒褐色土の地山土。
5. 黑褐色土：黑色地山土が主体で、若干の黒褐色土が混じる。
6. 黑褐色土：ブロック状の地山土が主体で、若干の黒褐色土が混じる。

<SD-09>

1. 黑褐色土：黑色地山土粒が少額混じる。
2. 黑褐色土：本層が最も厚い地山土層が山脚部のため、全体的に砂質で、褐褐色土と同色の混合土。
3. 褐褐色土：地山土粒上に薄く黒褐色土の地山土。
4. 黑褐色土：地山土粒上に薄く黒褐色土の地山土。
5. 黑褐色土：黑色地山土が主体で、若干の黒褐色土が混じる。
6. 黑褐色土：ブロック状の地山土が主体で、若干の黒褐色土が混じる。



1. 黑褐色土：若干の地山土層を多く含む（特に下層に多い）。
2. 黑褐色土：地山土ブロック。
3. 黑褐色土：少額の黑色地山土粒を含む。
4. 黑褐色土：黑色地山土が主体で、黒褐色土を若干含む。
- 4b. 黑褐色土：褐褐色土が主体で、黑色地山土を多く含む。
5. 黑褐色土：地山土粒を軽く含む。
6. 黑褐色土：褐褐色土が主体で、黑色地山土粒を輕して多く含み、明色土を含む。

<SX-14>

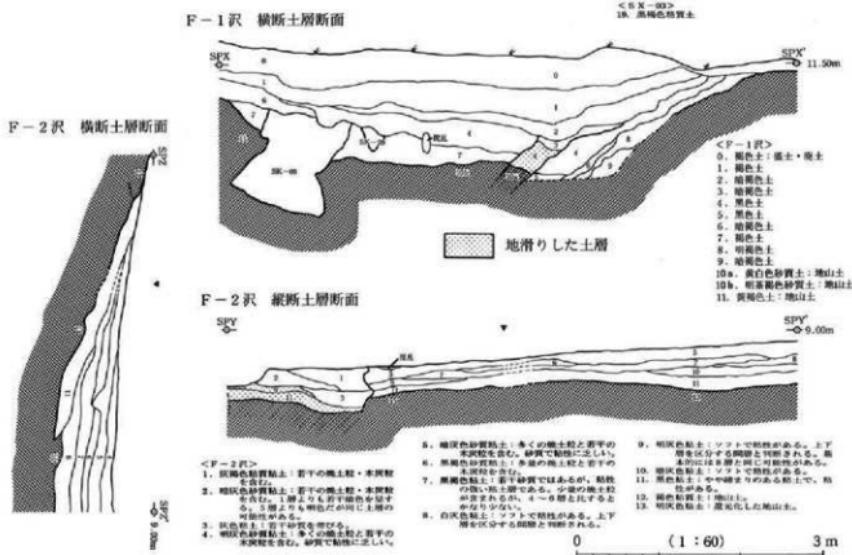
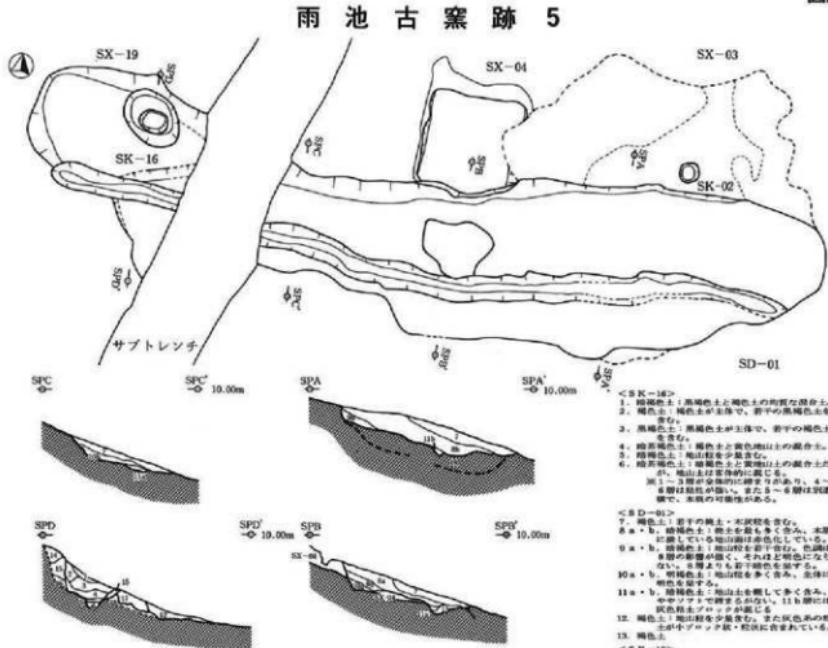
1. 黑褐色土：黑色地山土粒が少額混じる。
2. 黑褐色土：本層が最も厚い地山土層が山脚部のため、全体的に砂質で、褐褐色土と同色の混合土。
3. 褐褐色土：地山土粒上に薄く黒褐色土の地山土。
4. 黑褐色土：地山土粒上に薄く黒褐色土の地山土。
5. 黑褐色土：黑色地山土が主体で、若干の黒褐色土が混じる。
6. 黑褐色土：褐褐色土が主体で、黑色地山土粒を輕して多く含み、明色土を含む。

<SX-14>

1. 黑褐色土：黑色地山土粒が少額混じる。
2. 黑褐色土：本層が最も厚い地山土層が山脚部のため、全体的に砂質で、褐褐色土と同色の混合土。
3. 褐褐色土：地山土粒上に薄く黒褐色土の地山土。
4. 黑褐色土：地山土粒上に薄く黒褐色土の地山土。
5. 黑褐色土：黑色地山土が主体で、若干の黒褐色土が混じる。
6. 黑褐色土：褐褐色土が主体で、黑色地山土粒を輕して多く含み、明色土を含む。

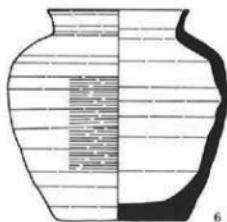
0 (1 : 60) 3 m

雨池古窯跡遺構個別図2

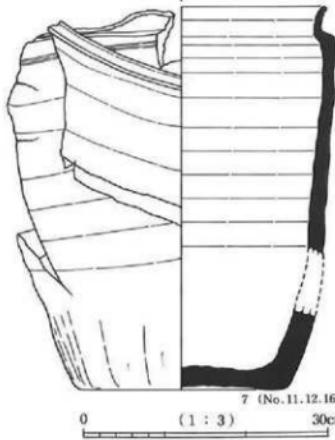
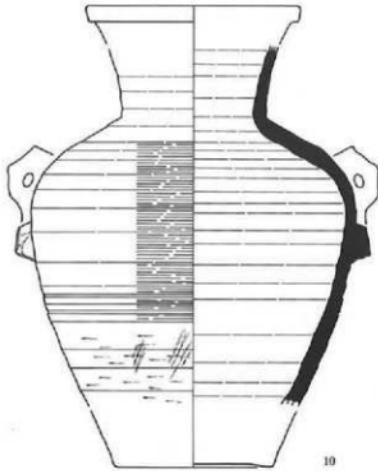
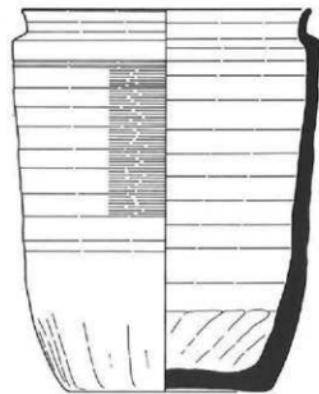
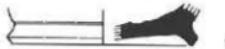
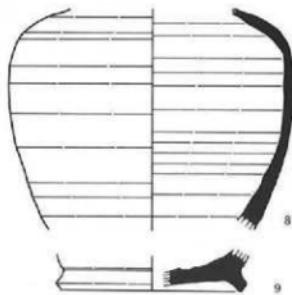


雨池古窯跡遺構個別図3・沢堆積土層断面図

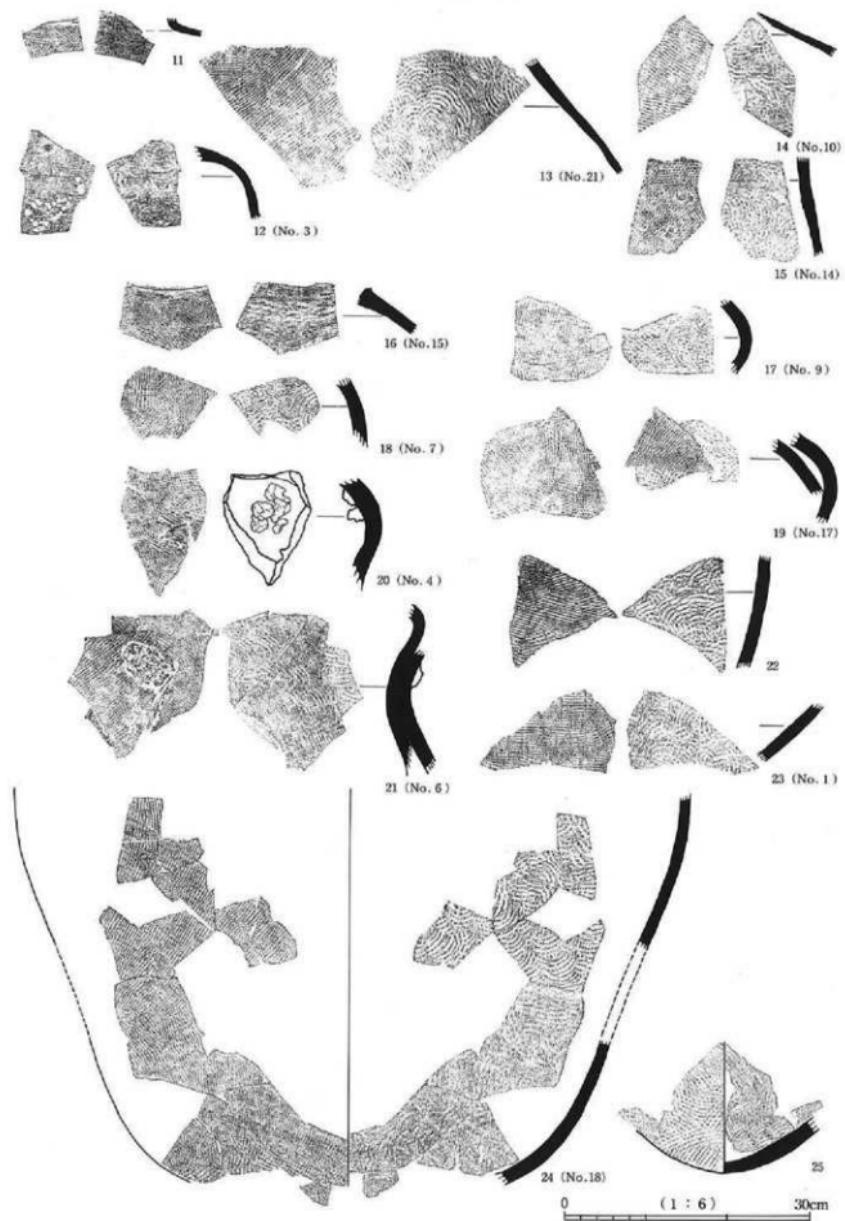
雨池古窯跡 6



5～7 : SX 04出土
8～10 : F. 2件出土
その他のについては表面採集による
注) (No.)については、図版48参照のこと



雨池古窯跡 7



雨池古窯跡出土遺物 2 (SX-04その1)

雨池古窯跡 8



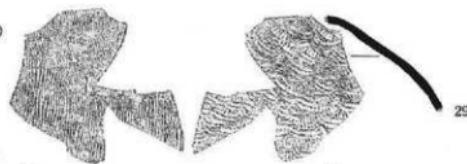
26 (No. 2)



27



28 (No. 5)



29



30

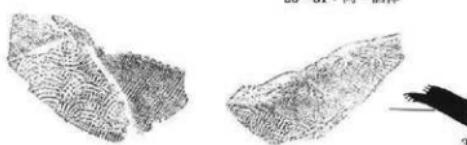


31

26~31：同一個体



32



33



34



35

26~35 : SX-04 出土

36~44 : F-2 沢 上層



36



37



38



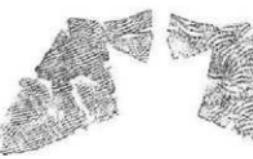
39



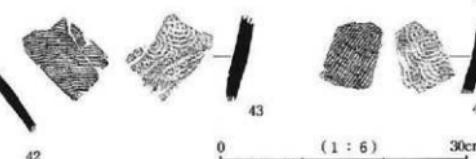
40



41



42



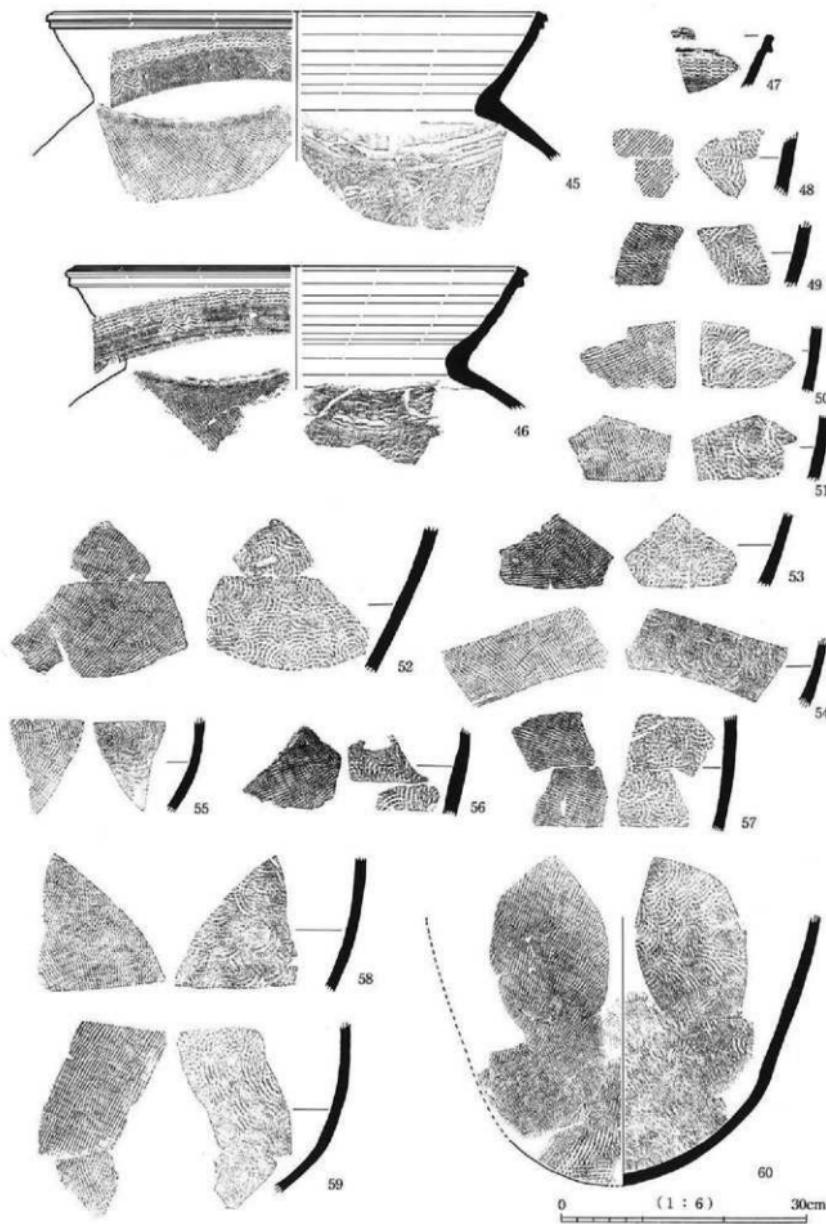
43



44

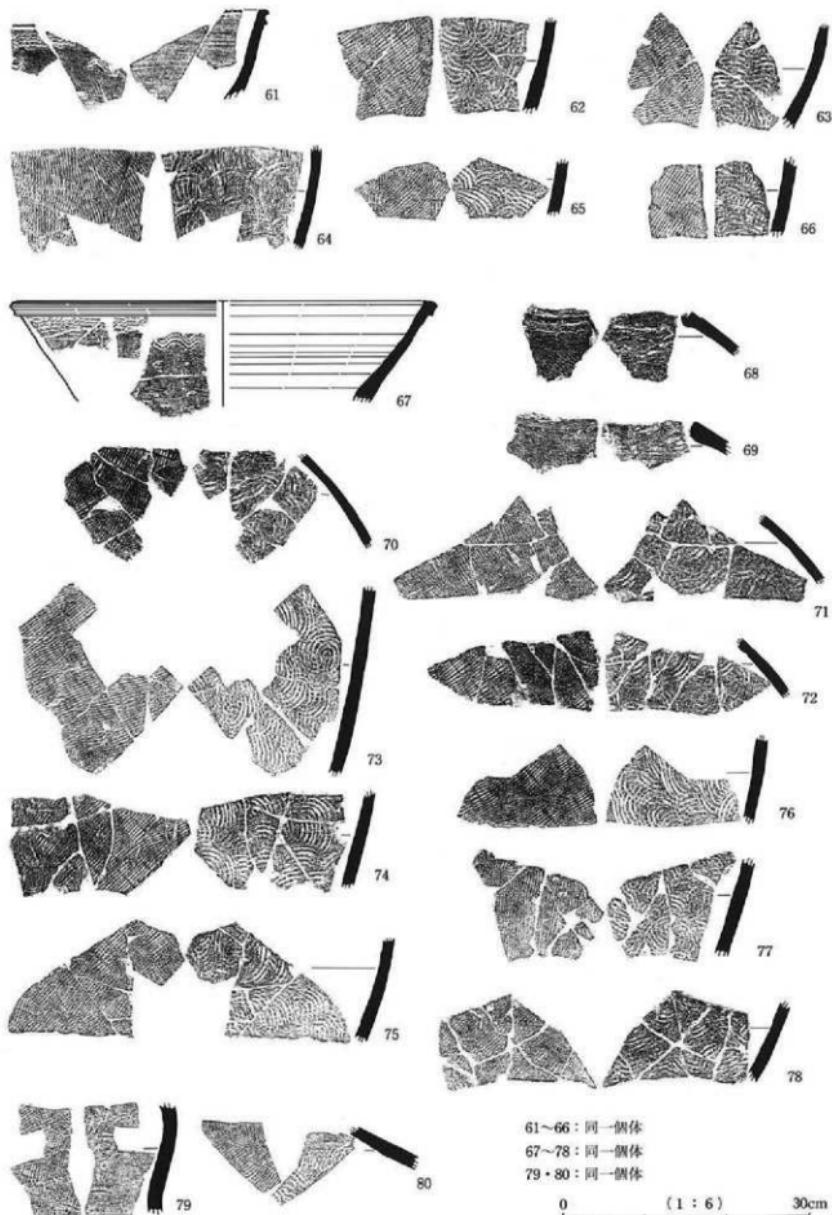
0 (1 : 6) 30cm

雨池古窯跡 9



雨池古窯跡出土遺物 4 (F-2 沢下層)

雨池古窯跡 10



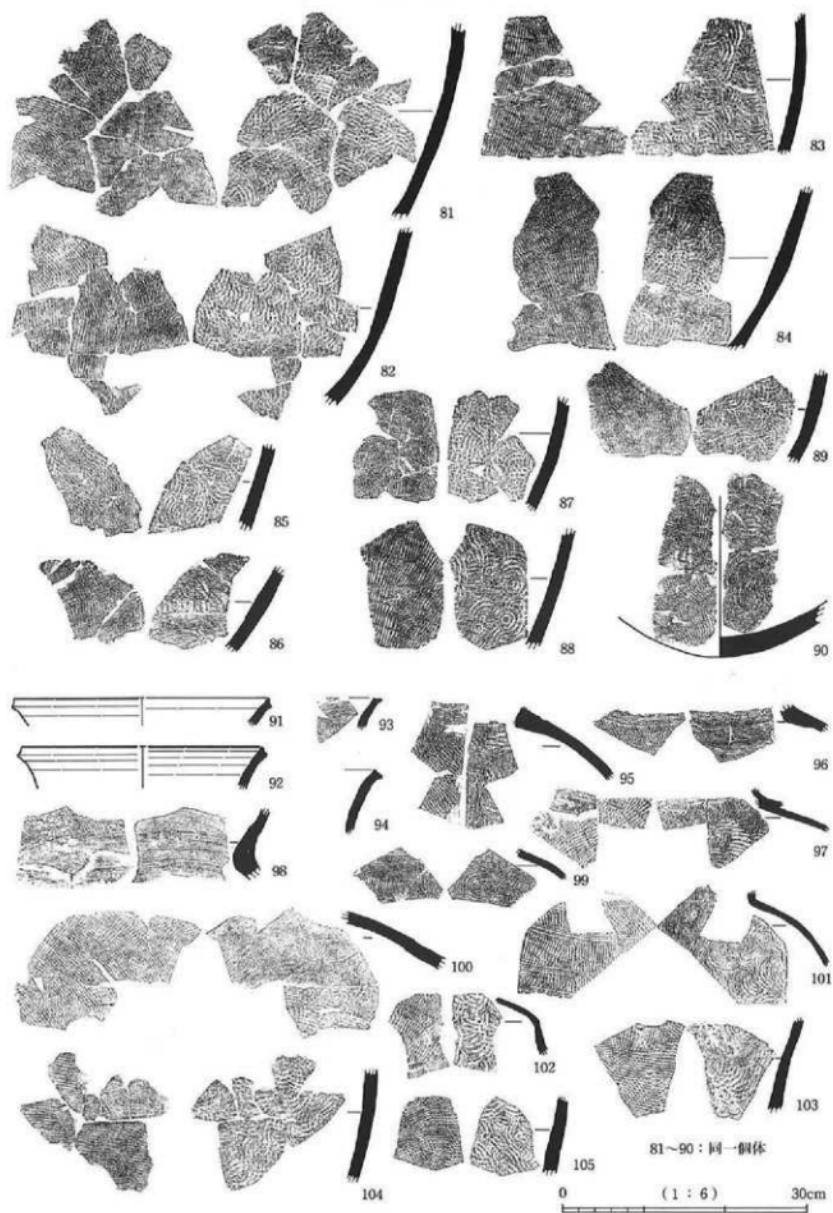
61~66：同一個體

67~78：同一個體

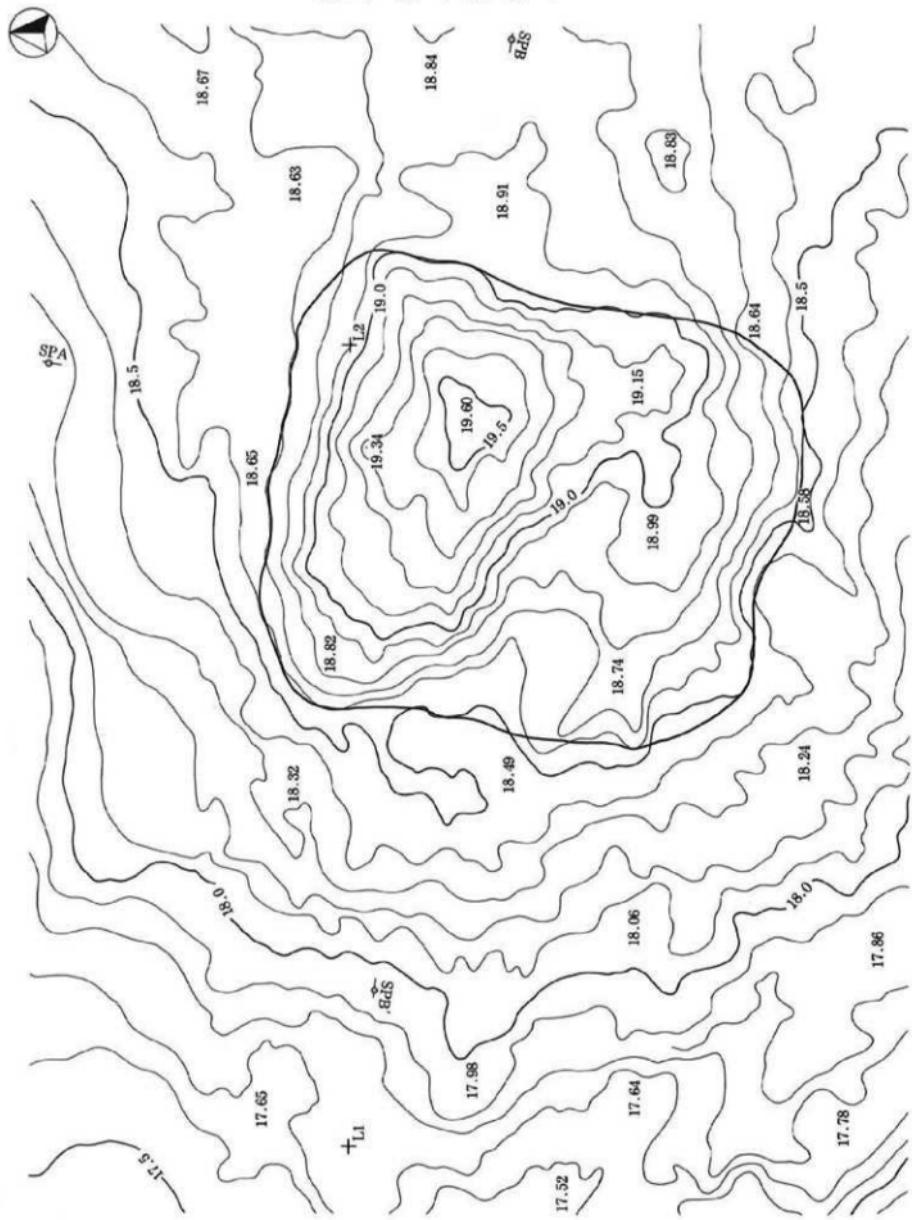
79~80：同一個體

0 (1 : 6) 30cm

雨池古窯跡 11

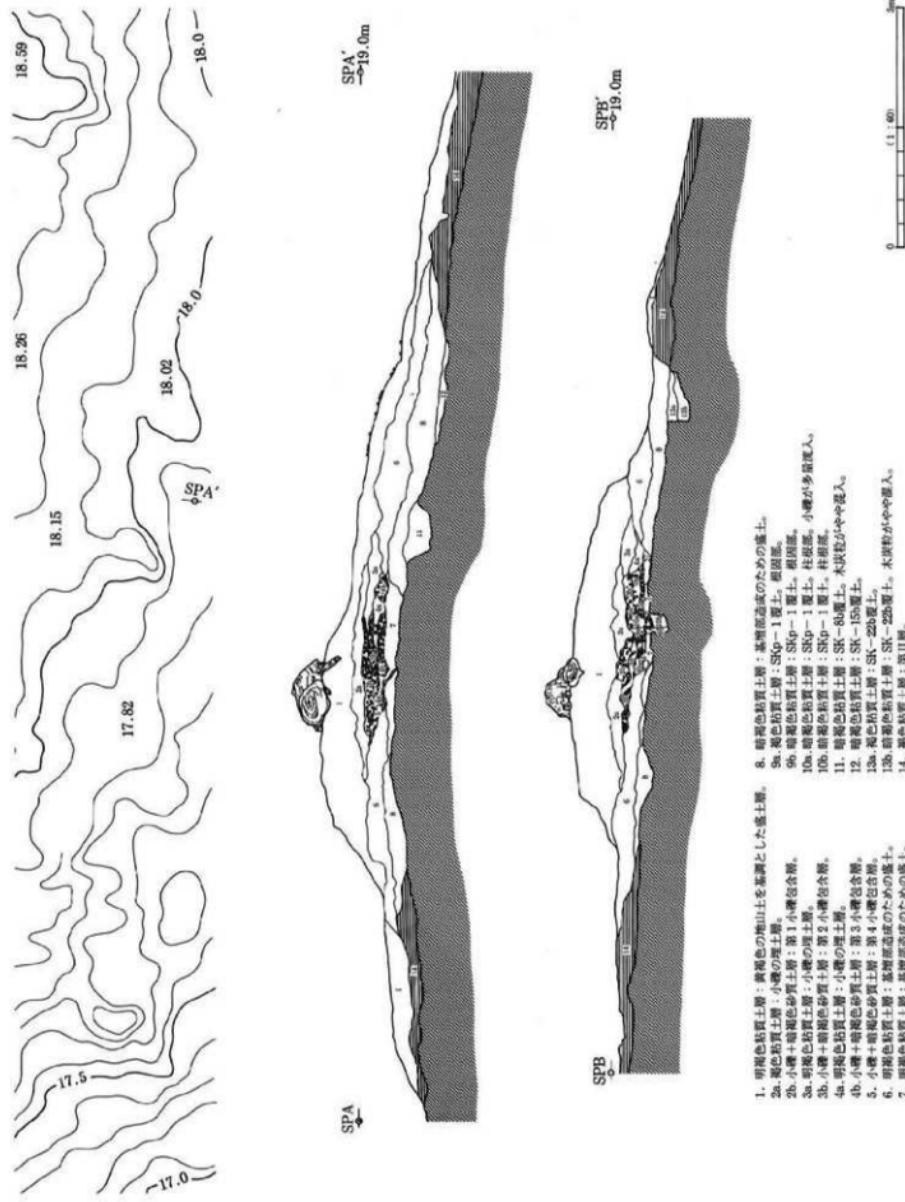


庚申塚の経塚 1



庚申塚の経塚全圖

庚申塚の経塚 2



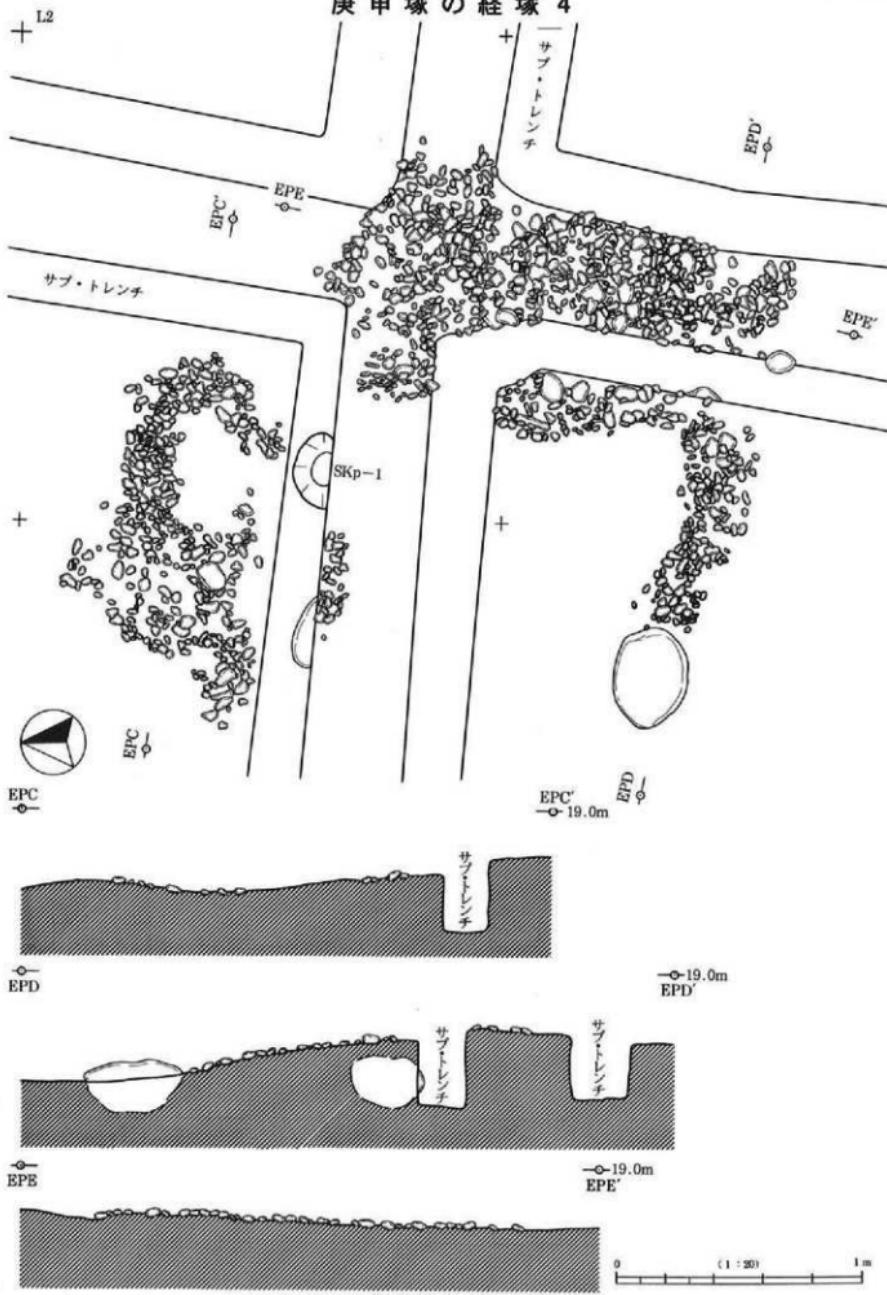
庚申塚の経塚土層断面図

庚申塚の経塚3

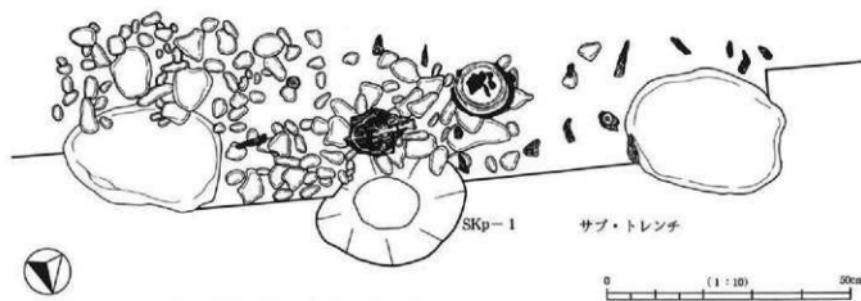
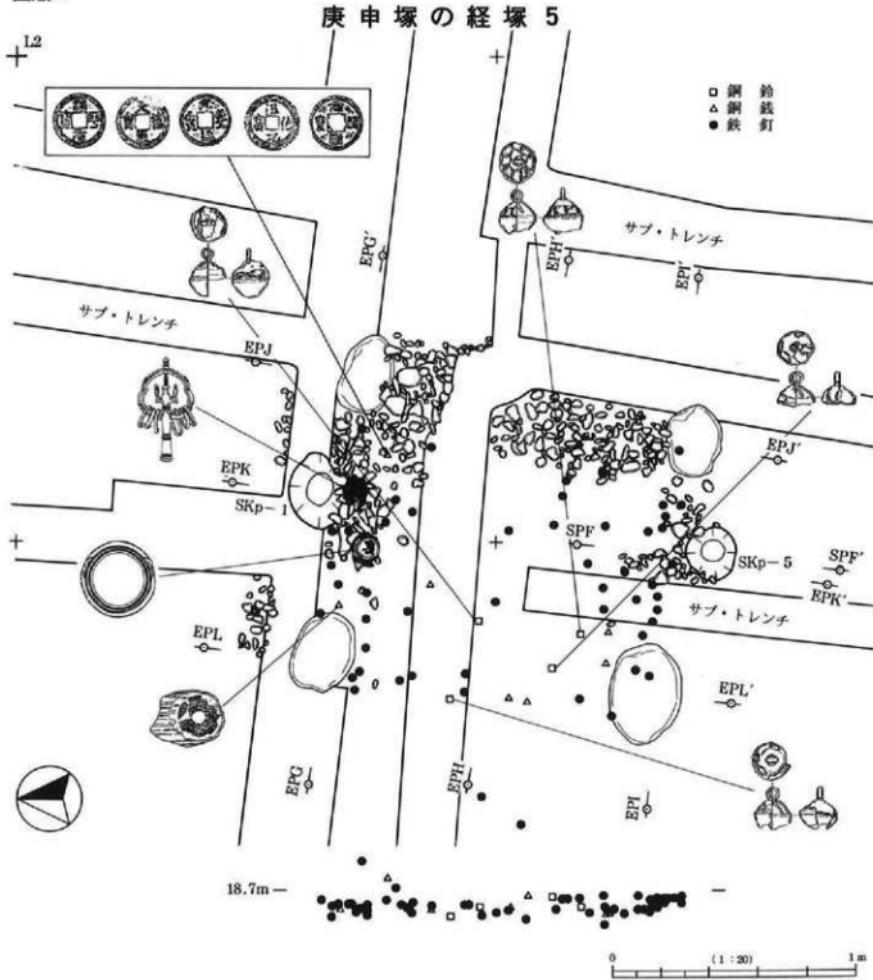


庚申塚の経塚遺物出土状況1（第2b層上面）

庚申塚の経塚4

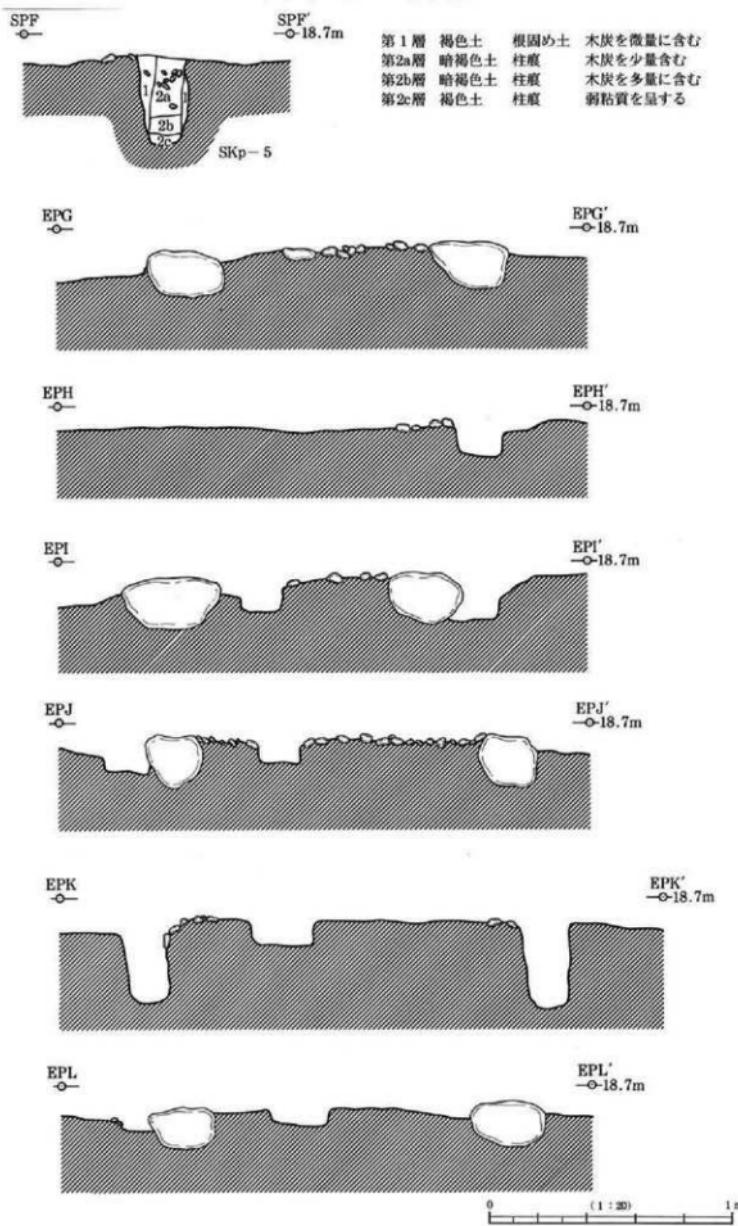


図版61



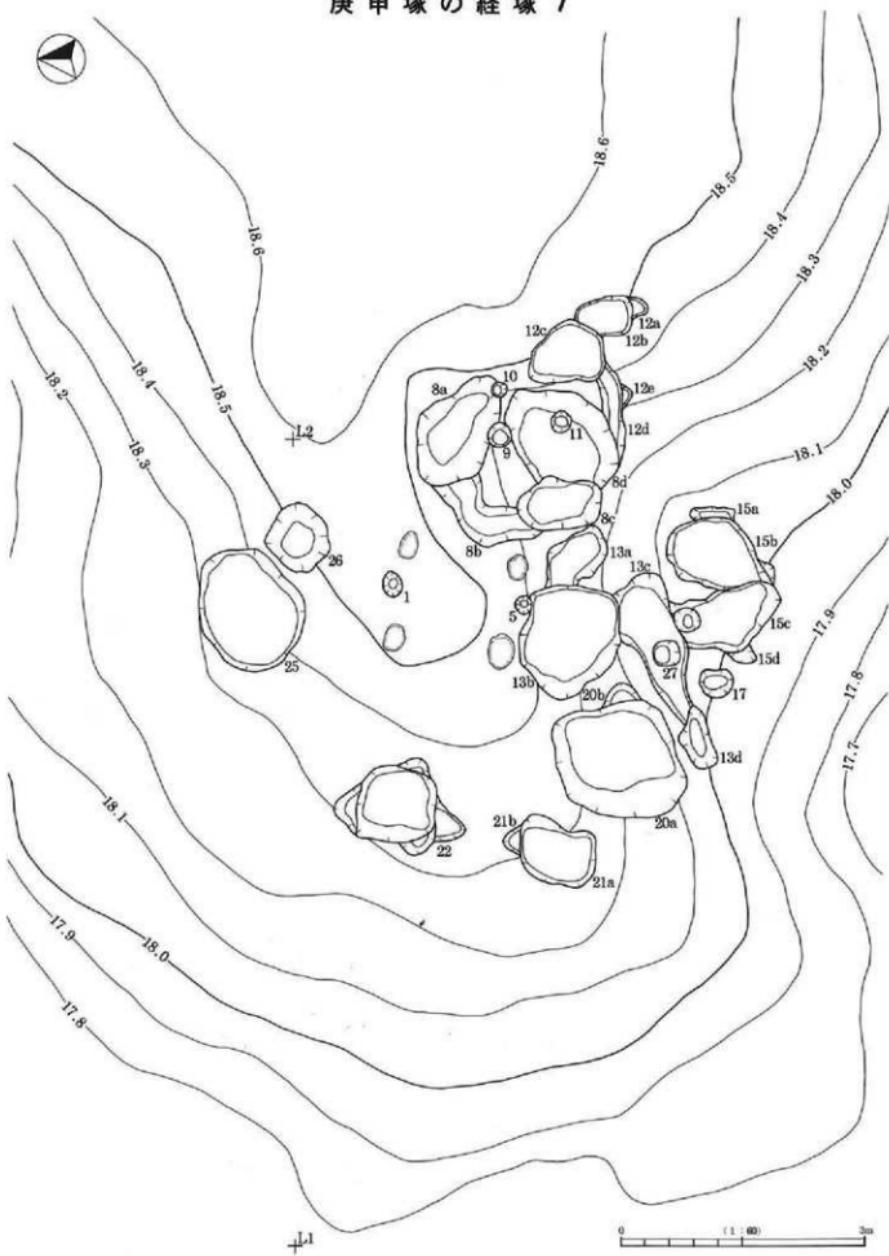
庚申塚の経塚遺物出土状況3（第5層上面）

庚申塚の経塚6



庚申塚の経塚柱穴土層断面と埋納部底面

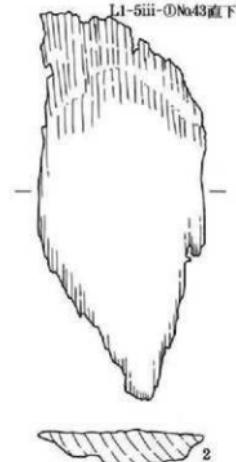
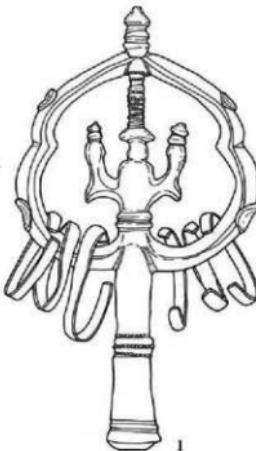
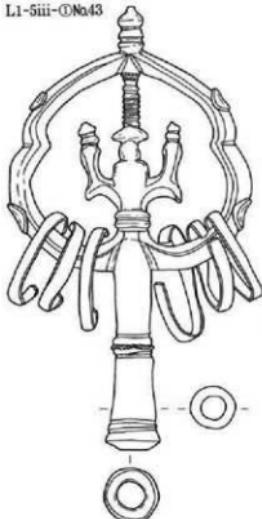
庚申塚の経塚 7



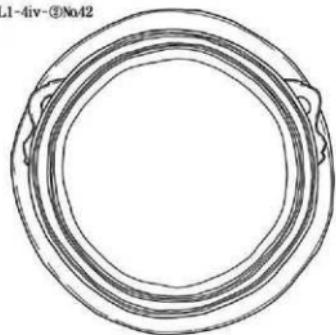
庚申塚の経塚第III層上面検出造構

庚申塚の経塚8

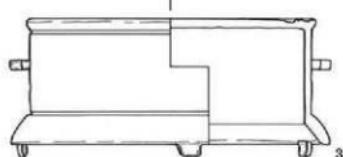
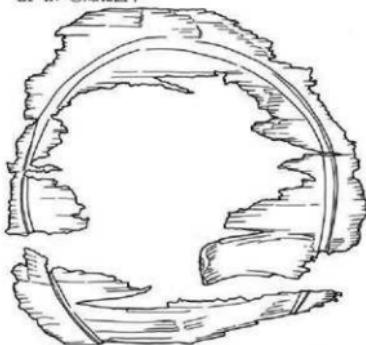
L1-5iii-②No43



L1-4iv-②No42



L1-4iv-②No42直下



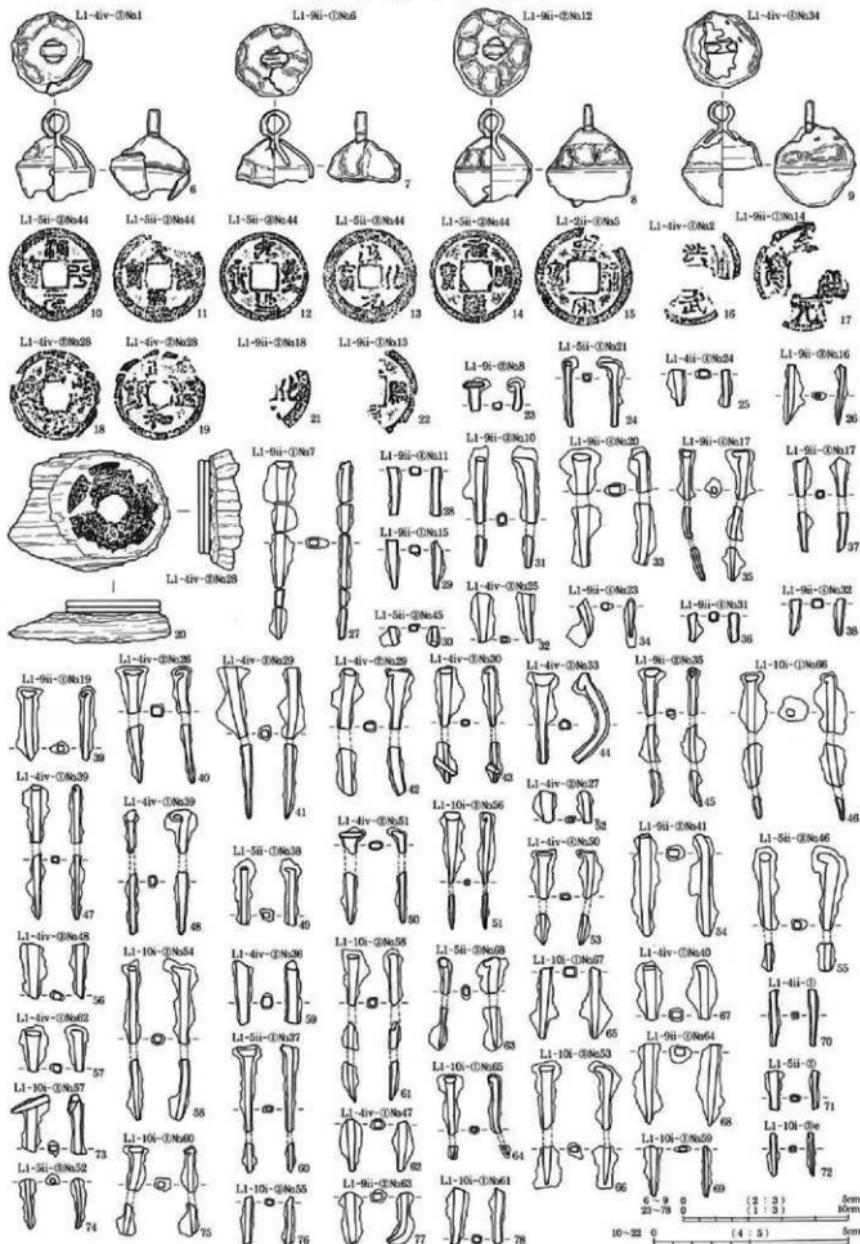
L1-4iv-②No42直上



1~4 0 (2 : 3) 5 cm
5 0 (1 : 1) 5 cm

庚申塚の経塚出土遺物1（金属製品と関連遺物1）

庚申塚の経塚9



庚申塚の経塚出土遺物2 (金属製品と関連遺物2)

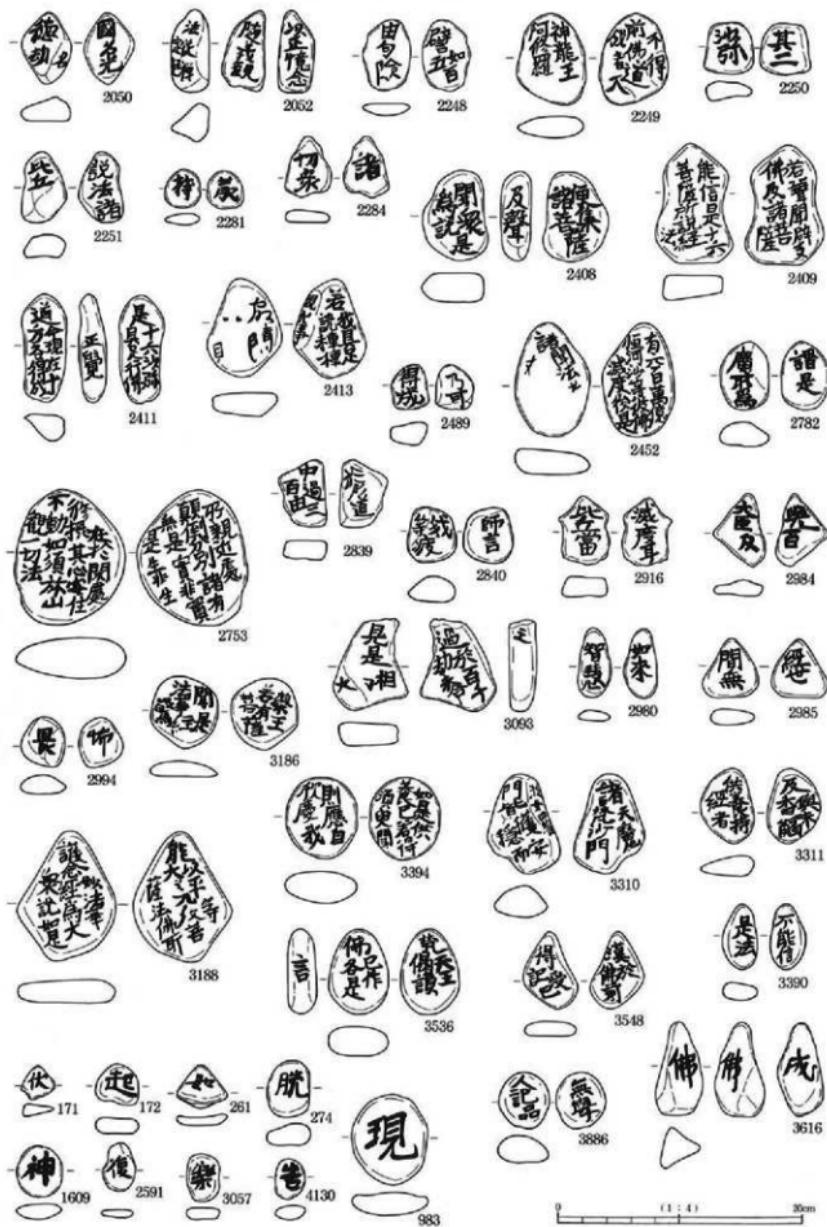
10-22 0 (2-3)
23-78 0 (4-5)
5cm
10cm
5cm

庚申塚の経塚10



庚申塚の経塚出土遺物3(石經1)

庚申塚の経塚 11



横山東遺跡群



遺跡群とその周辺の地形

1964.10撮影

大沢遺跡 1



大沢遺跡 A 地点空中写真

約 1 : 450

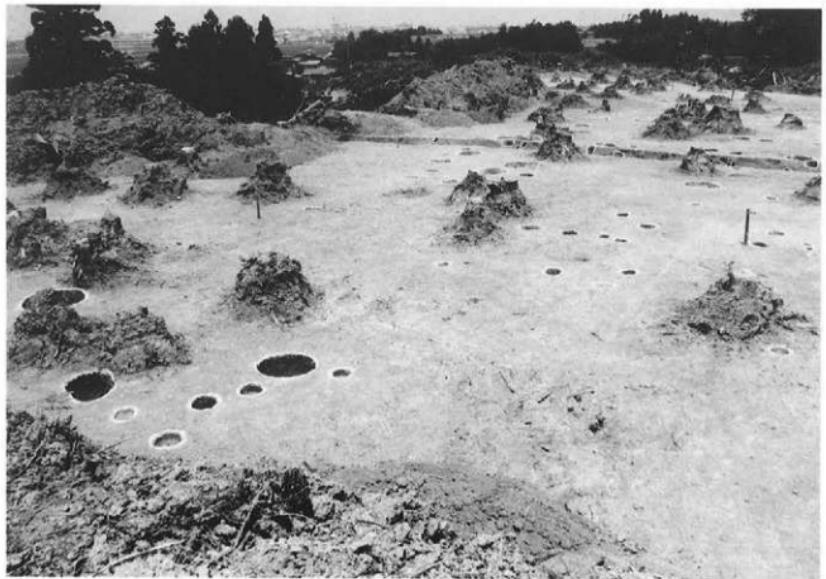
大沢遺跡 2

図版70



a 繩文集落西部遺構群

(南から)



b 繩文集落南西部遺構群

(南から)

大沢遺跡3



a 繩文集落南部遺構群

(南から)



b 繩文集落中央西部遺構群

(南から)

大沢遺跡 4



a 調査集落南西部遺構群

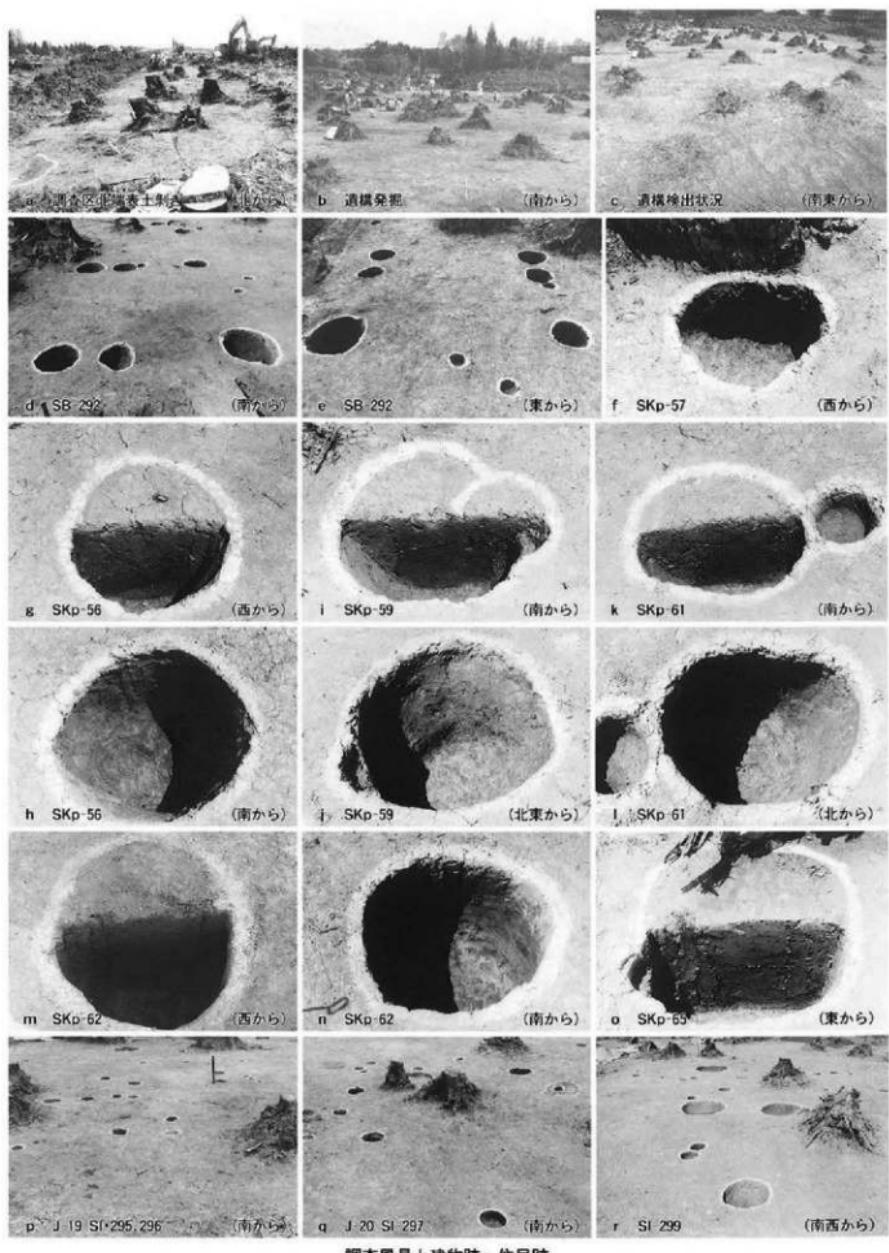
(南から)



b SD-70 大溝全景

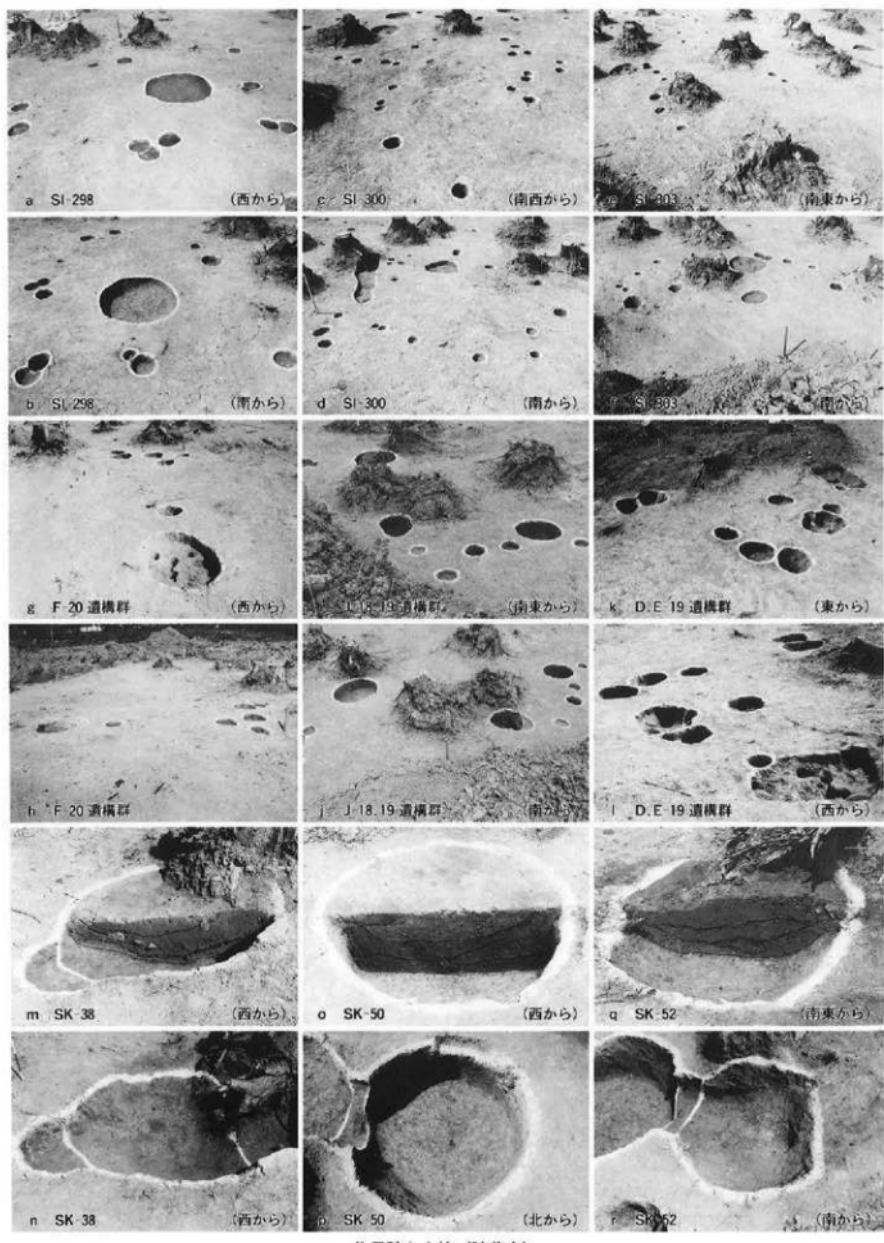
(西から)

大沢遺跡5



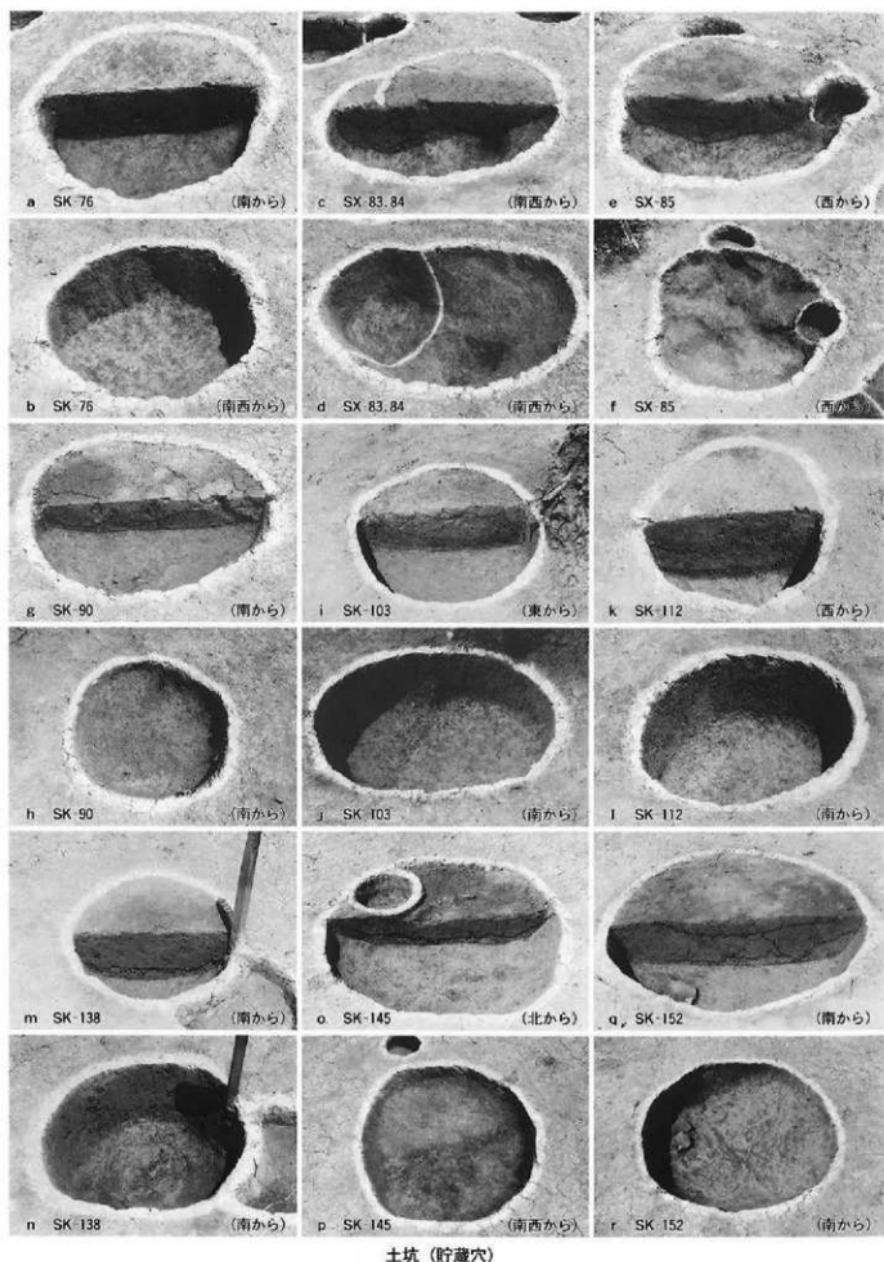
調査風景と建物跡・住居跡

大沢遺跡 6



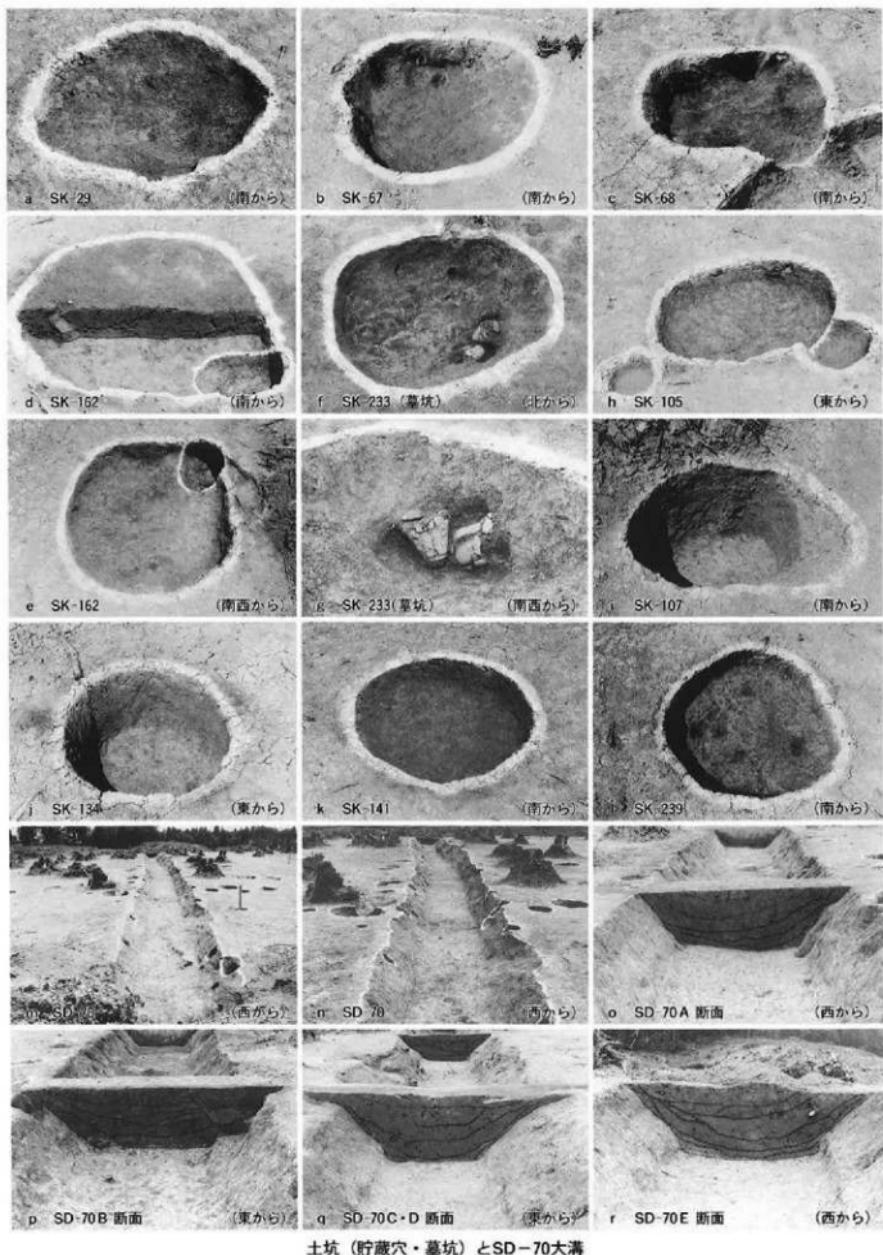
住居跡と土坑（貯蔵穴）

大沢遺跡7

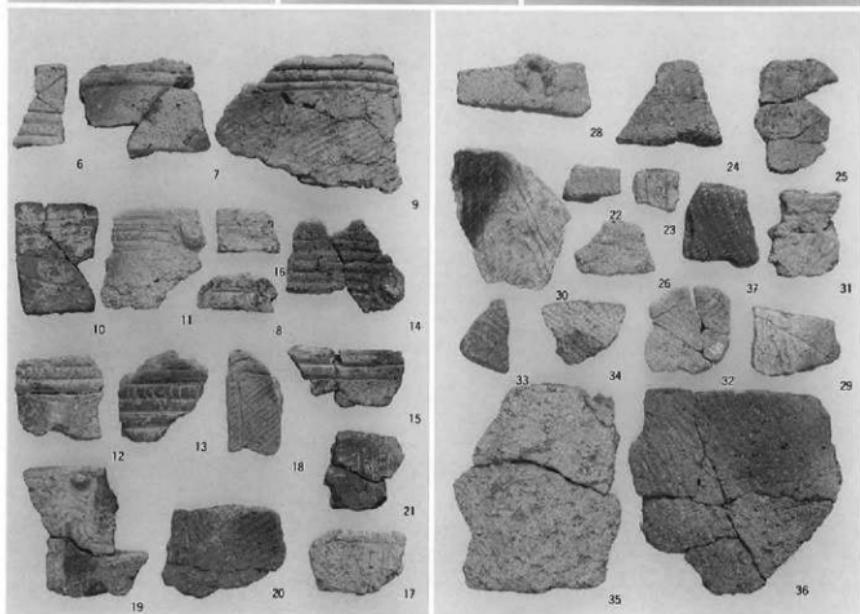
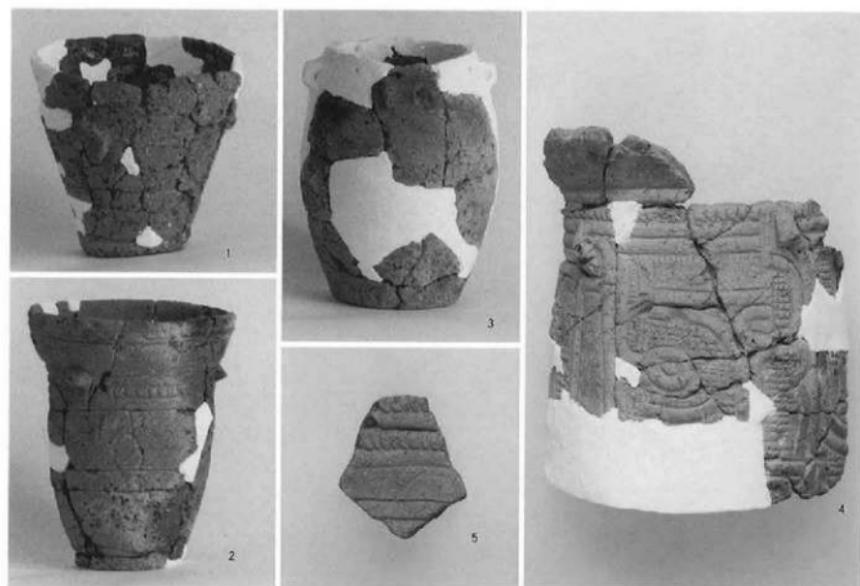


土坑(貯藏穴)

大沢遺跡8



大沢遺跡 9

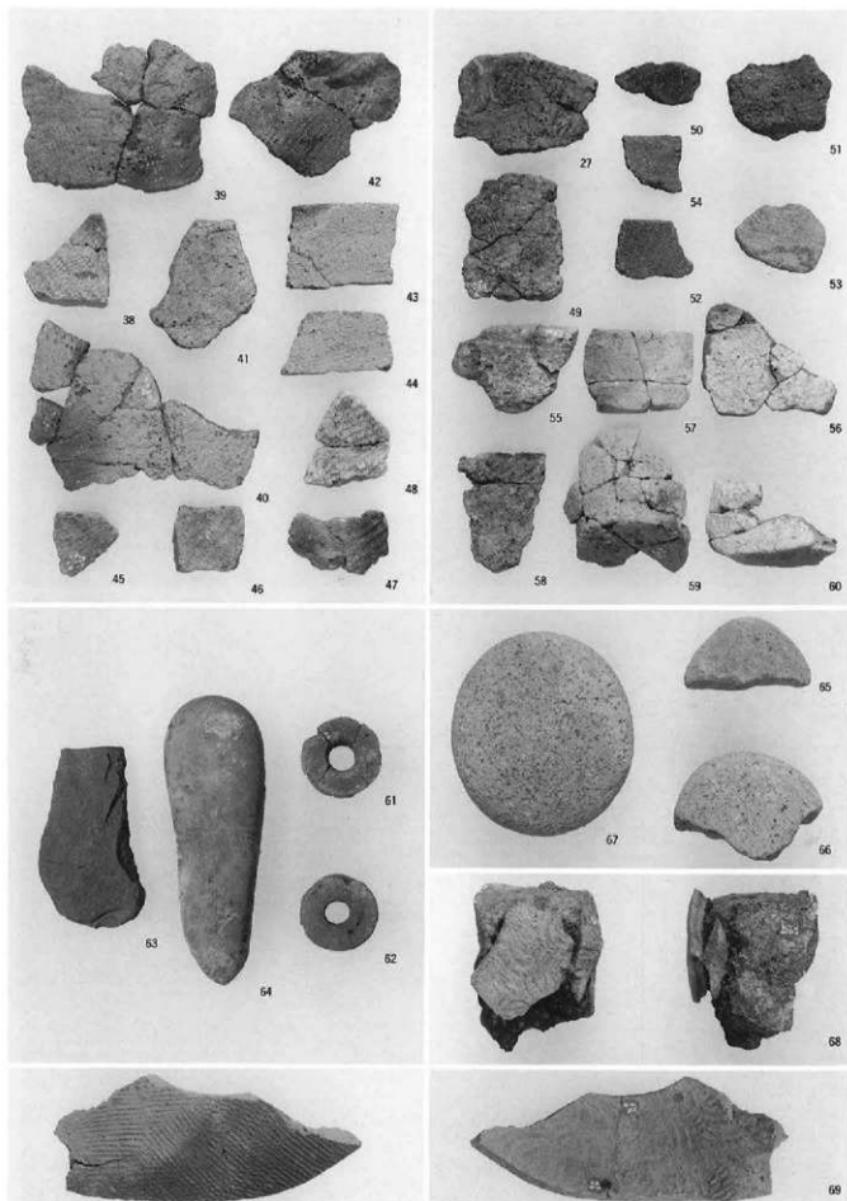


A地点出土遺物 1

(約1:3)

大沢遺跡 10

図版78



A地点出土遺物 2

(約1:3)

大沢遺跡 11



a B地点遠景1

(南南東から)



b B地点遠景2

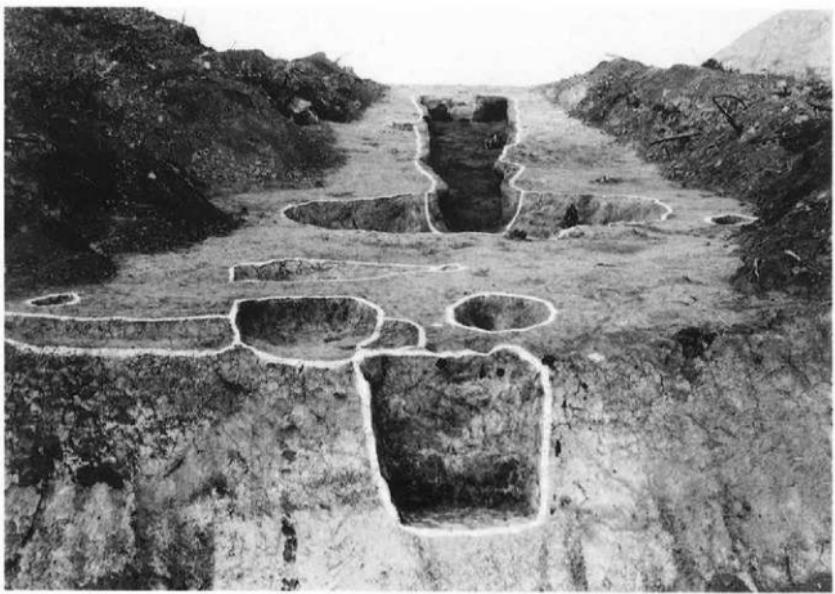
(南から)

大沢遺跡 12



a B地点全景

(南から)



b SX-401 木炭窯と製鉄炉

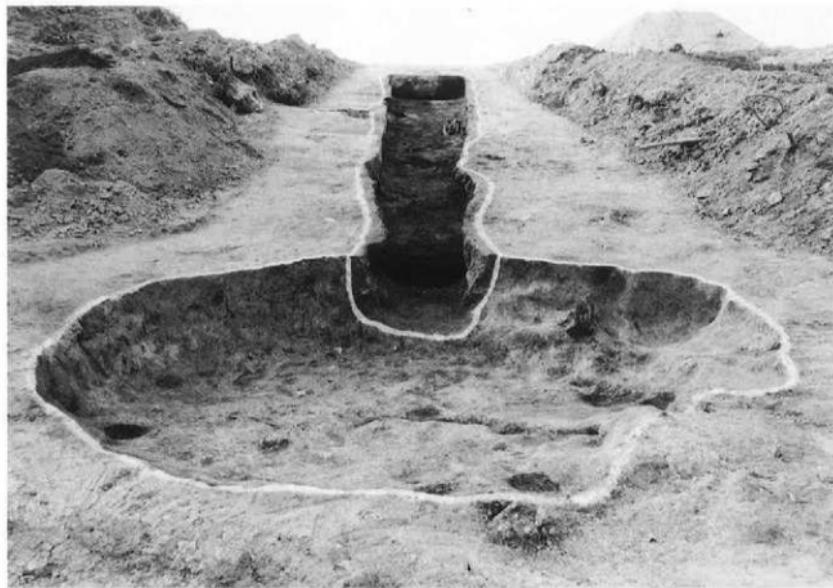
(南東から)

大沢遺跡 13



a SX-401 木炭窯 1

(南西から)

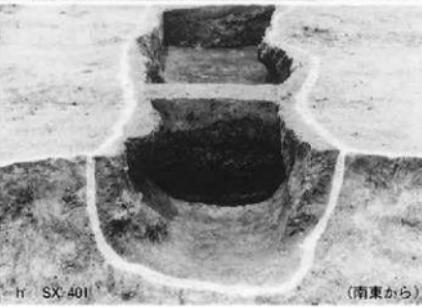
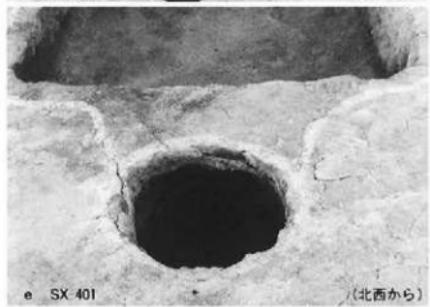


b SX-401 木炭窯 2

(南から)

大沢遺跡 14

図版82



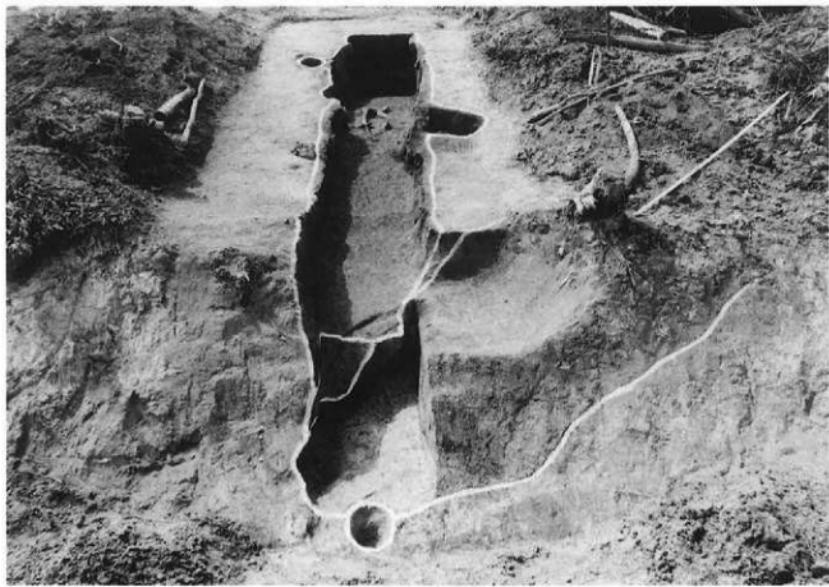
SX-401 木炭窯 3

大沢遺跡 15



a SX-410 木炭窯と SX-411 1

(南西から)



b SX-410 木炭窯 SX-411 2

(南東から)

大沢遺跡 16



a SX-410

(北西から)



b SX-410

(南東から)



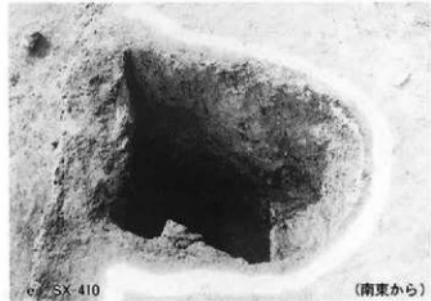
c SX-410

(北東から)



d SX-410

(南東から)



e SX-410

(南東から)



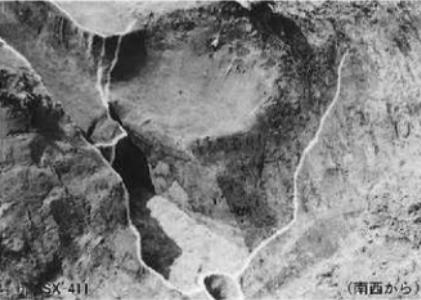
f SX-410

(南東から)



g SX-410

(北東から)



h SX-411

(南西から)

大沢遺跡 17



a 製鉄炉周辺遺構群

(北東から)



b 製鉄炉周辺遺構群

(南西から)



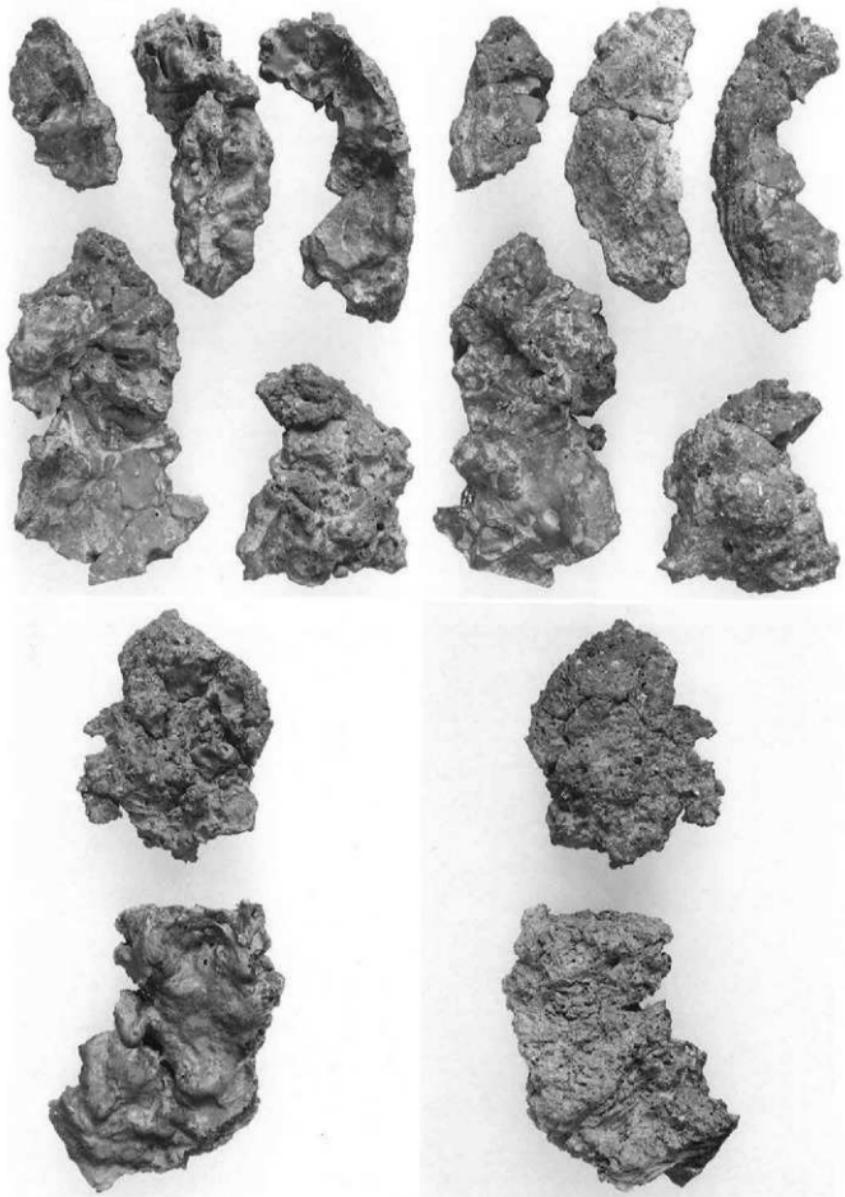
c SX-409 製鉄炉

(南東から)

製鉄炉と周辺の遺構群

大沢遺跡 18

図版86



B地点出土遺物

(約1:3)

雨池遺跡 1



a 調査区東部 (M～N-40～42周辺)

(西から)



b 調査区東部 (M-41～42周辺)

(西から)

雨池遺跡 2



a 調査区東部 (N ~ O-39~40周辺)

(北から)



b 調査区西部 (L ~ M-33~34周辺)

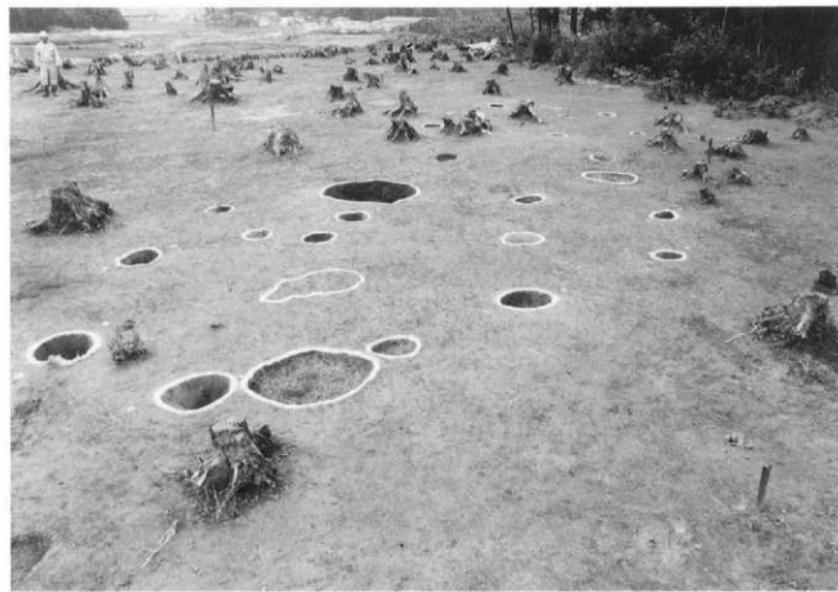
(東から)

雨池遺跡 3



a SI-105 住居跡群

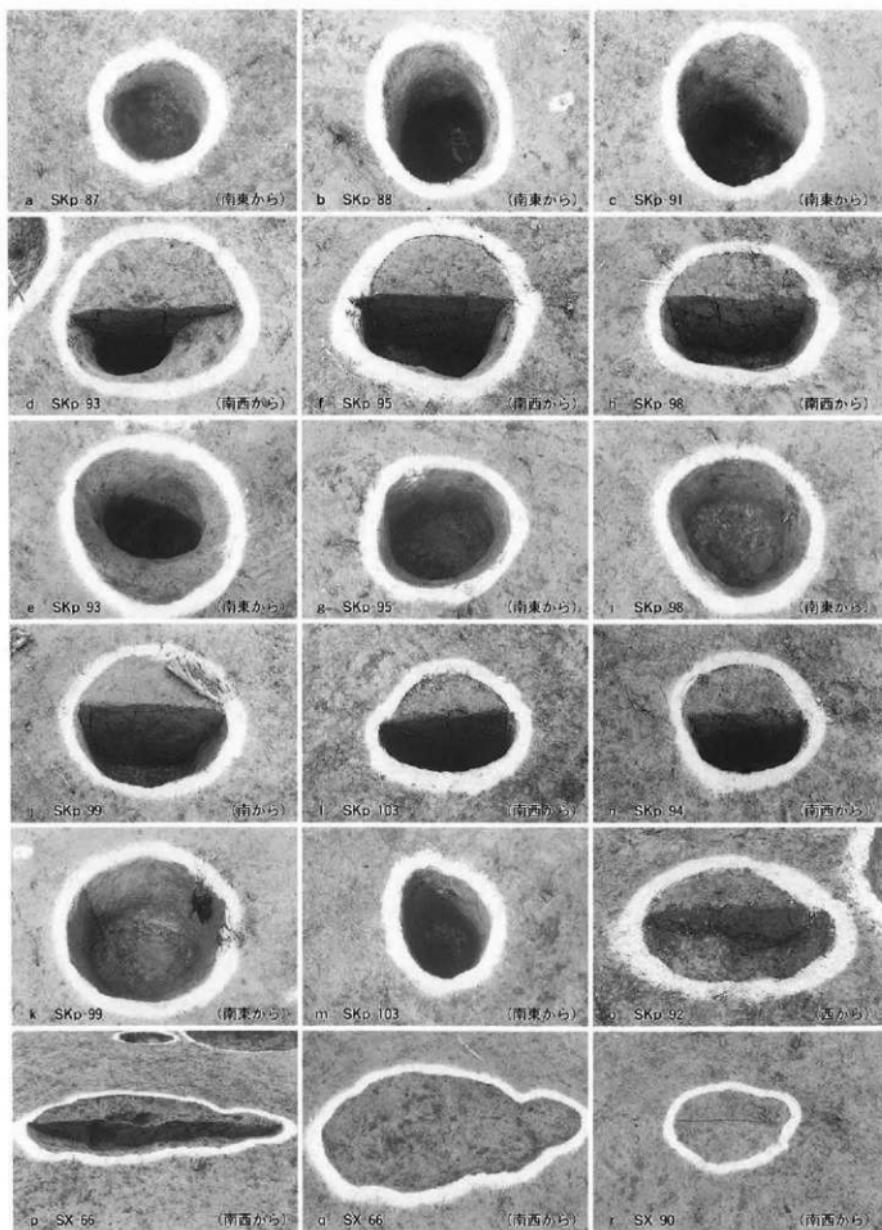
(南東から)



b SI-105 住居跡群

(東から)

雨池遺跡4



SI-105住居跡群の柱穴・炉跡

雨池遺跡 5



a SI-106 住居跡群

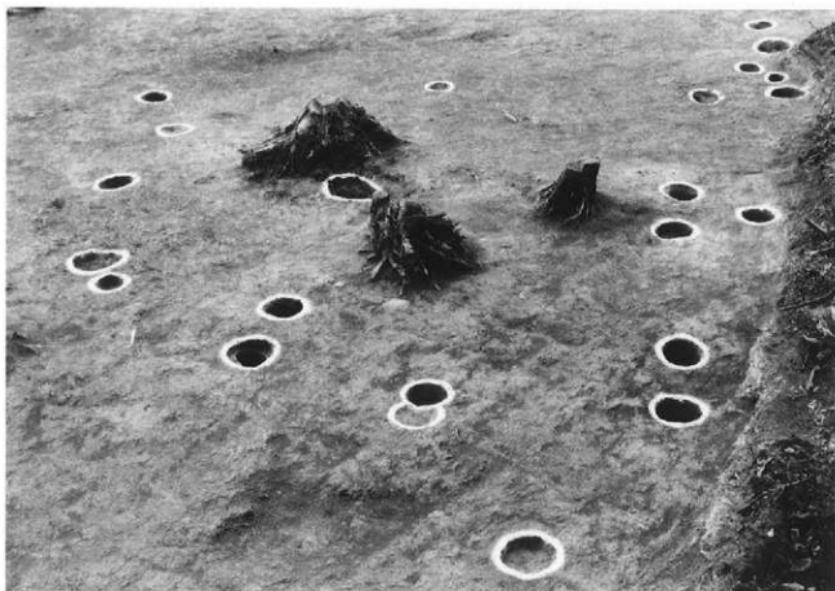
(東から)



b SI-116 住居跡群

(東から)

雨池遺跡 6



a SI-117 住居跡群

(北東から)



b SI-118 住居跡群

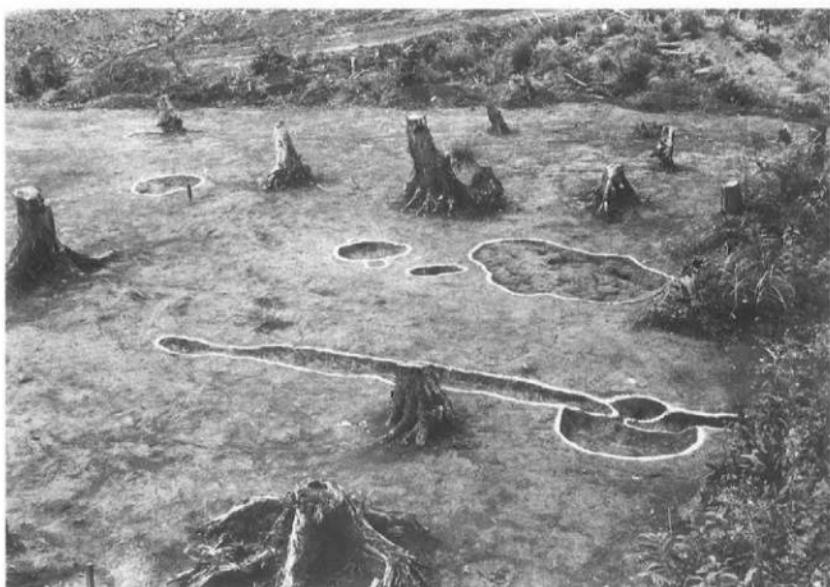
(東から)

雨池遺跡 7



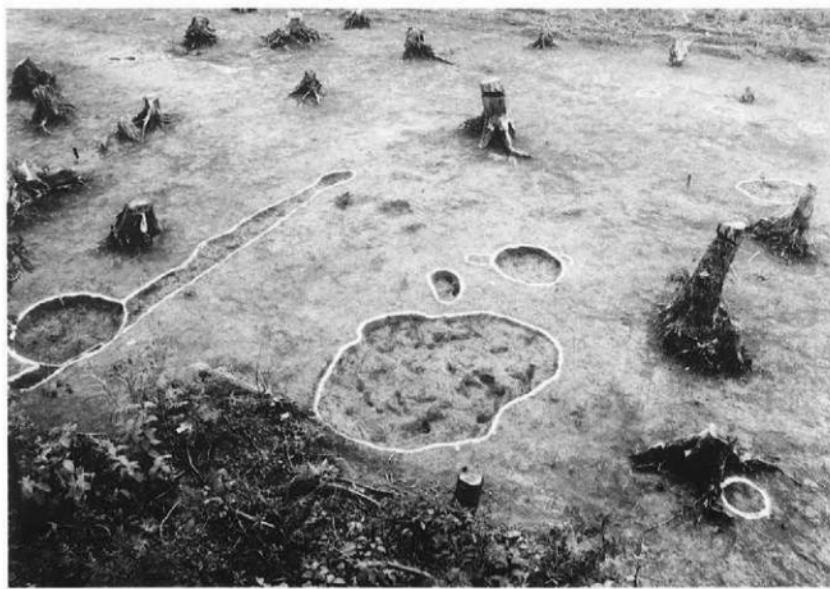
縄文土器出土状況と調査風景

雨池遺跡 8



a L～M-33～34 遺構群

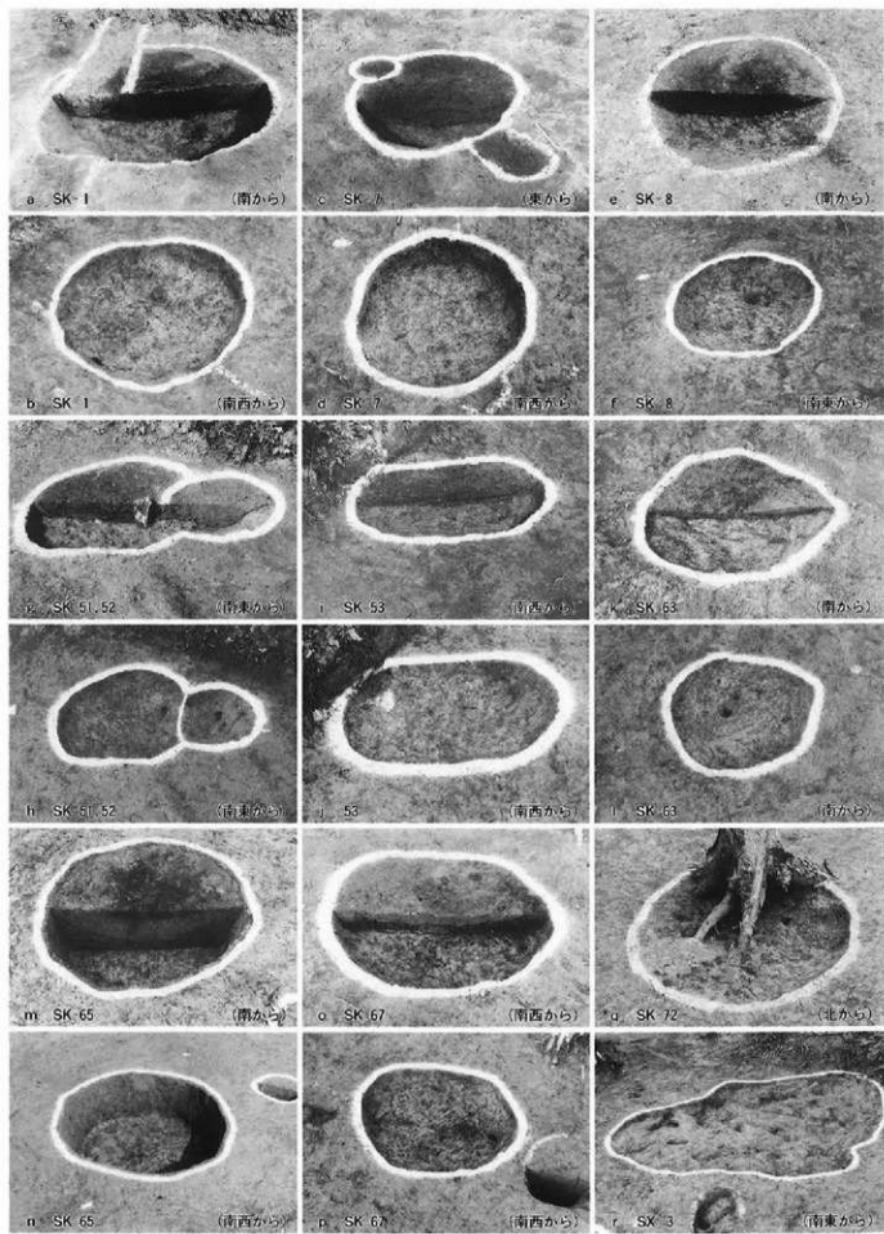
(東から)



b L～M-33～34 遺構群

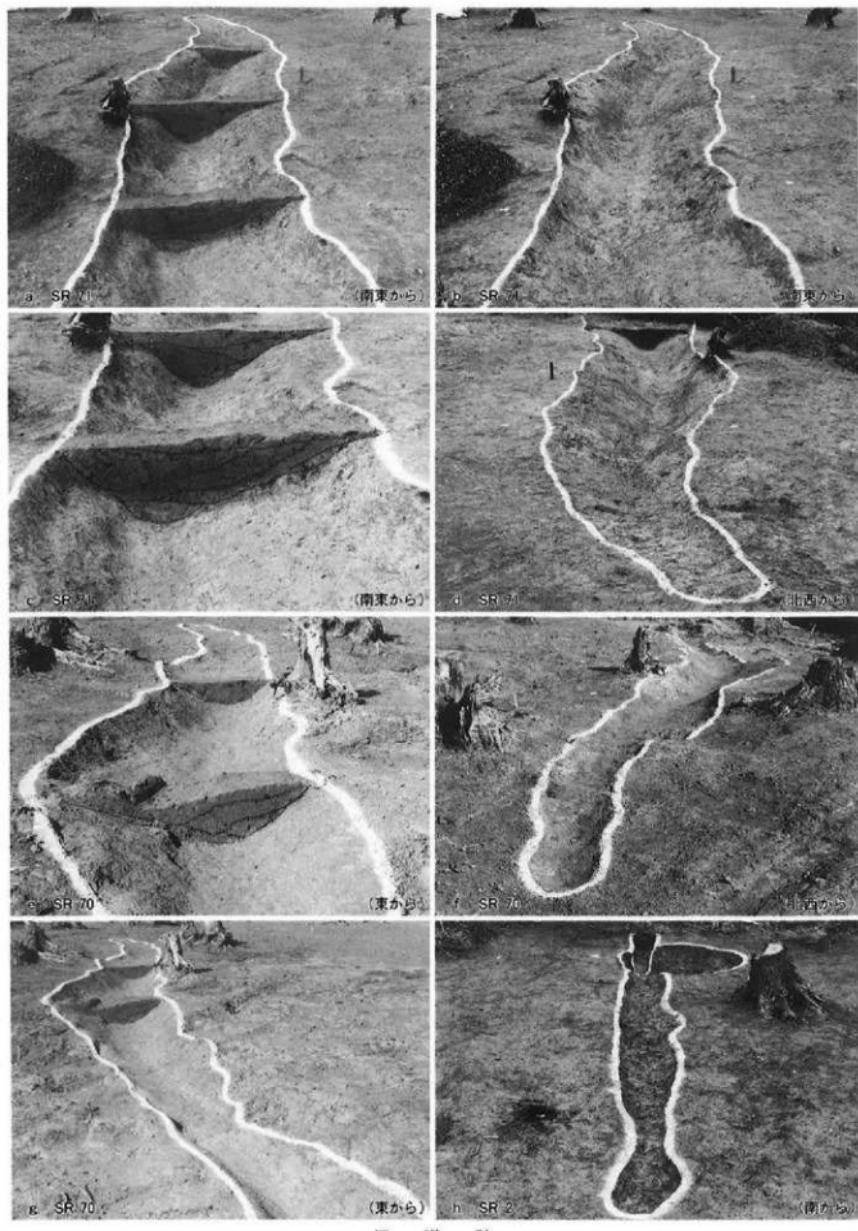
(北から)

雨池遺跡 9



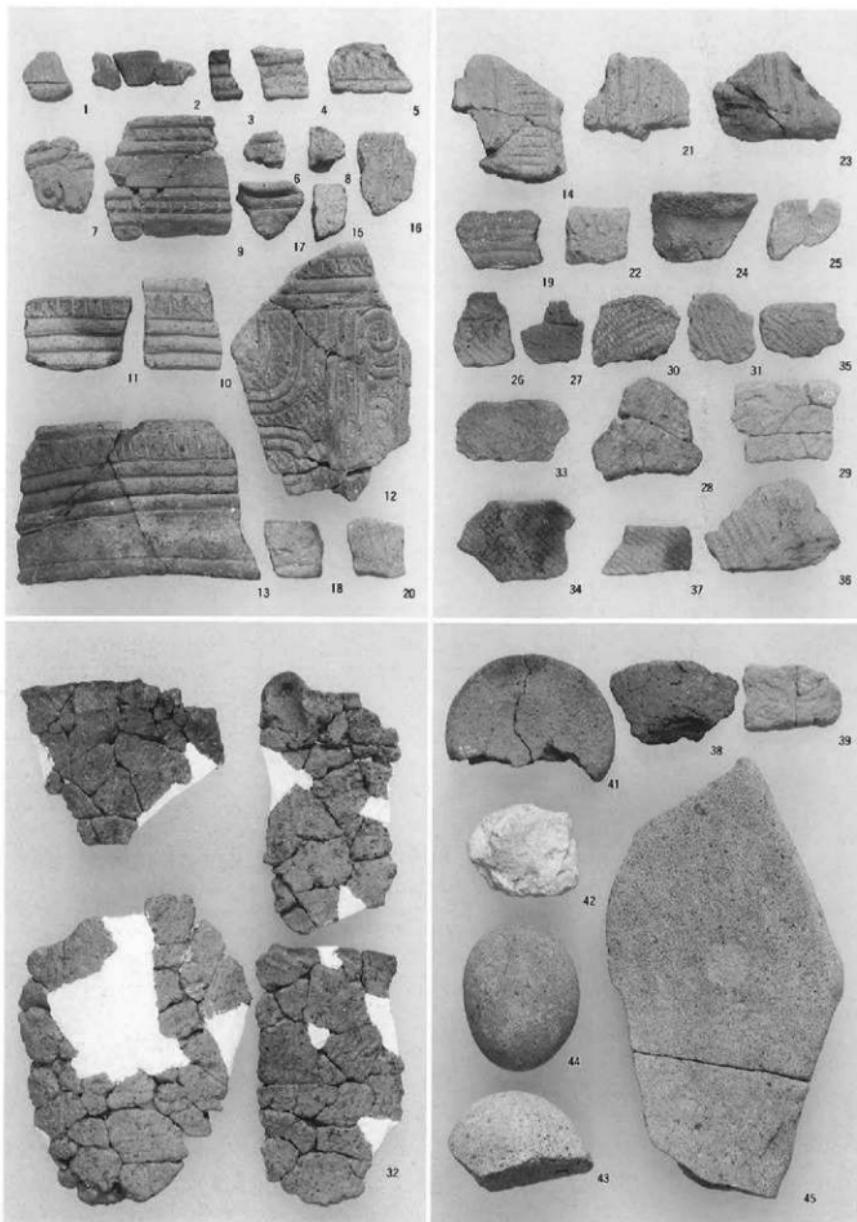
焼土坑・土坑

雨池遺跡 10



旧道跡

雨池遺跡 11



出土遺物

(約1:3)

雨池古窯跡 1



a 遺跡遠景

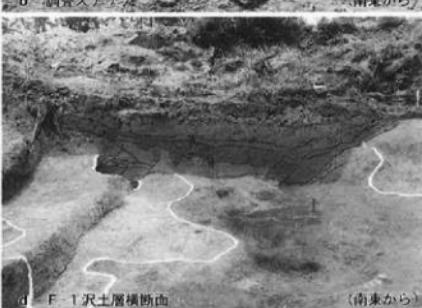
(南から)



b 調査区全景

(南東から)

雨池古窯跡 2



調査・層序・遺構

雨池古窯跡 3



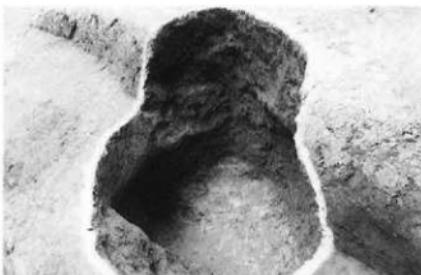
須恵器窯 (SX-04)

雨池古窯跡 4



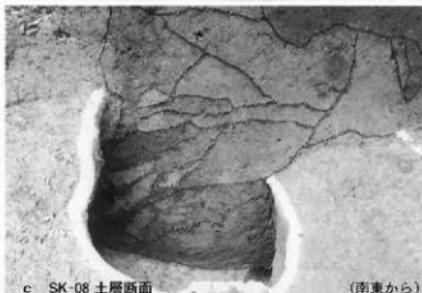
a SK-07 土層断面

(南から)



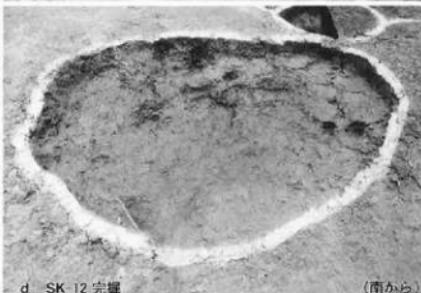
b' SK-07 完整

(北東から)



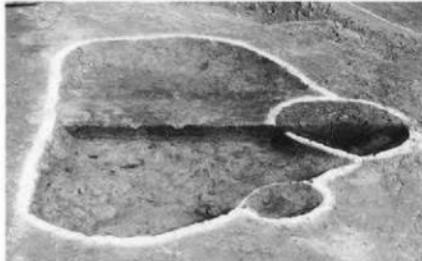
c SK-08 土層断面

(南東から)



d SK-12 完整

(南から)



e SK-06, 18 土層断面

(北西から)



f SK-06, 17, 18 完整

(西から)



g SD-09, 10 土層断面

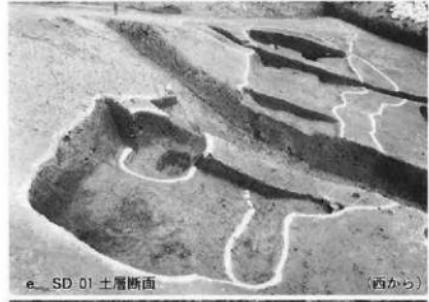
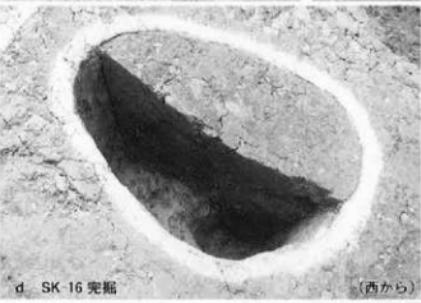
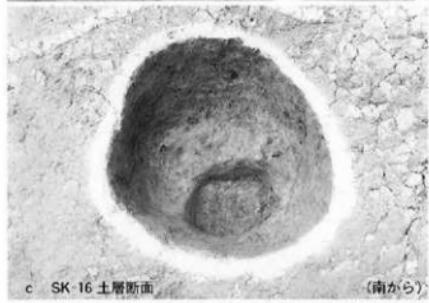
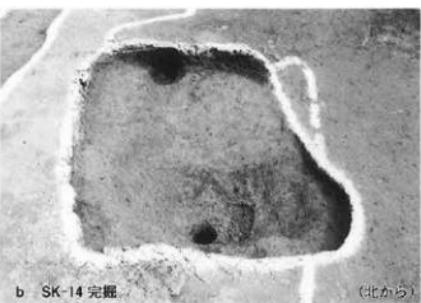
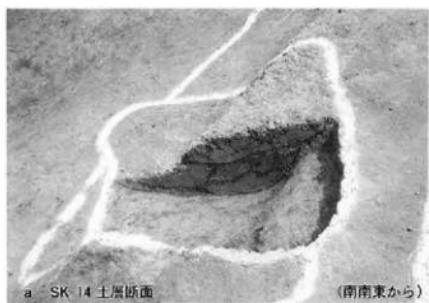
(南から)



(南西から)

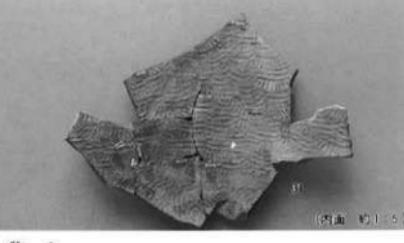
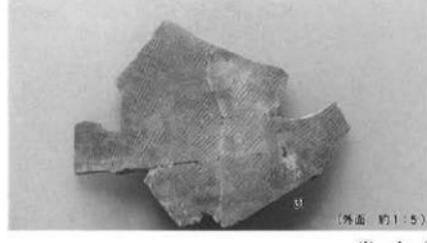
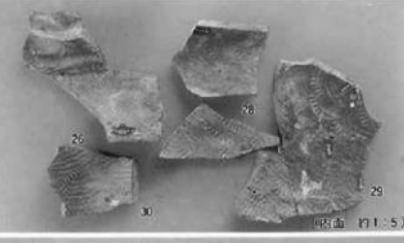
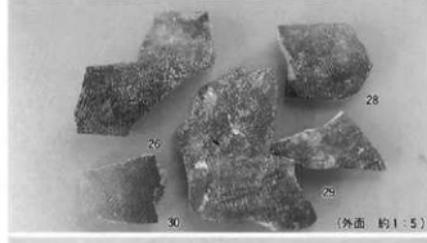
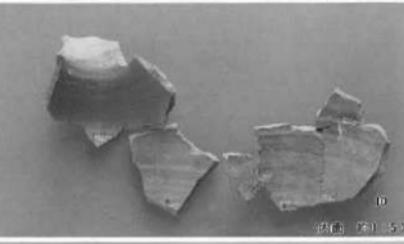
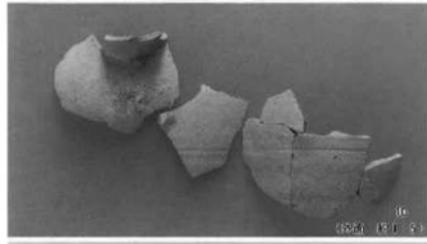
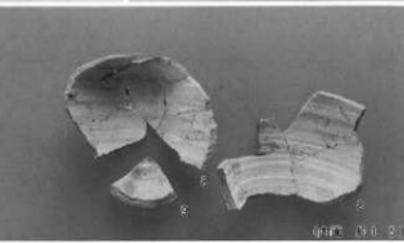
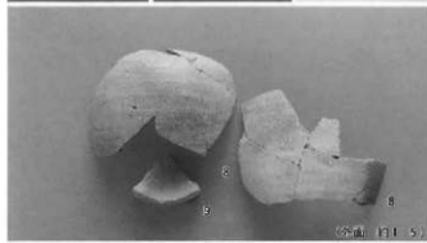
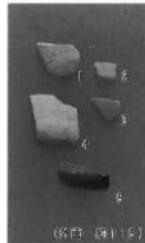
その他の遺構 1

雨池古窯跡 5



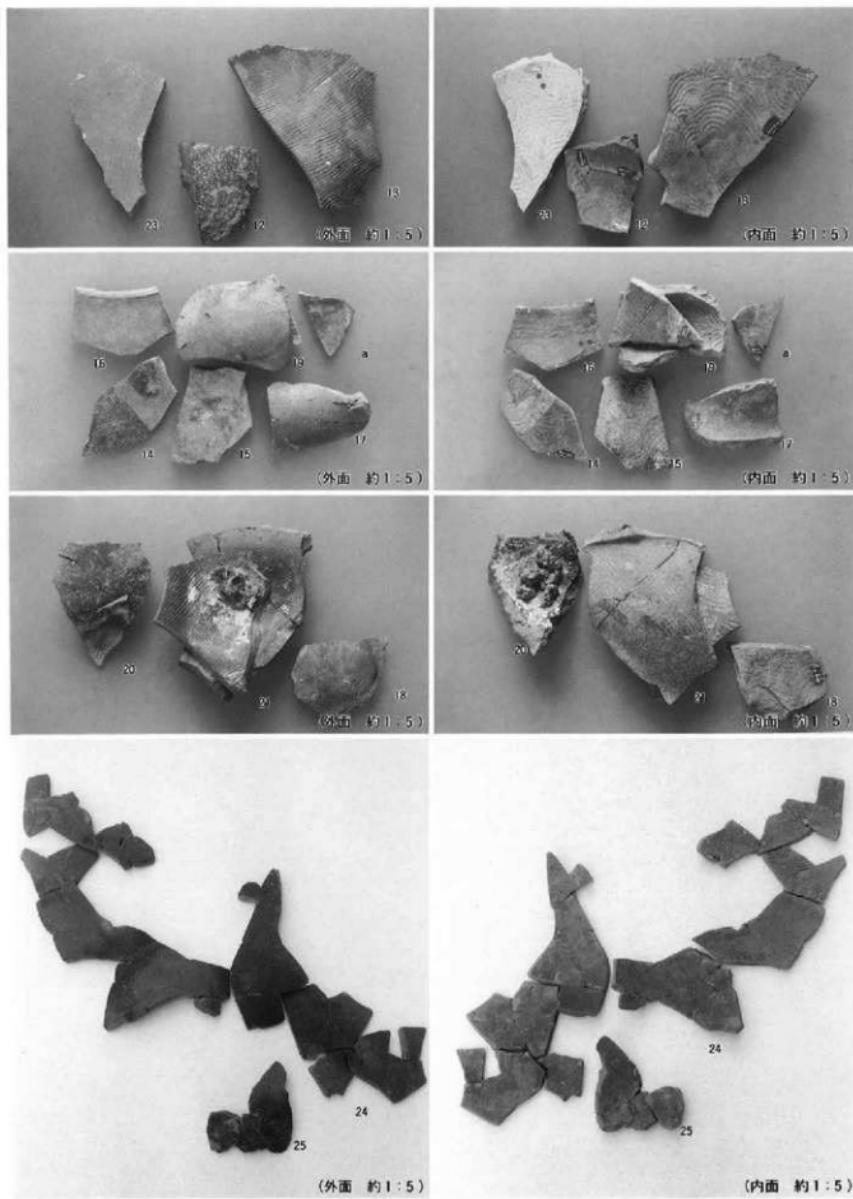
その他の遺構 2

雨池古窯跡 6



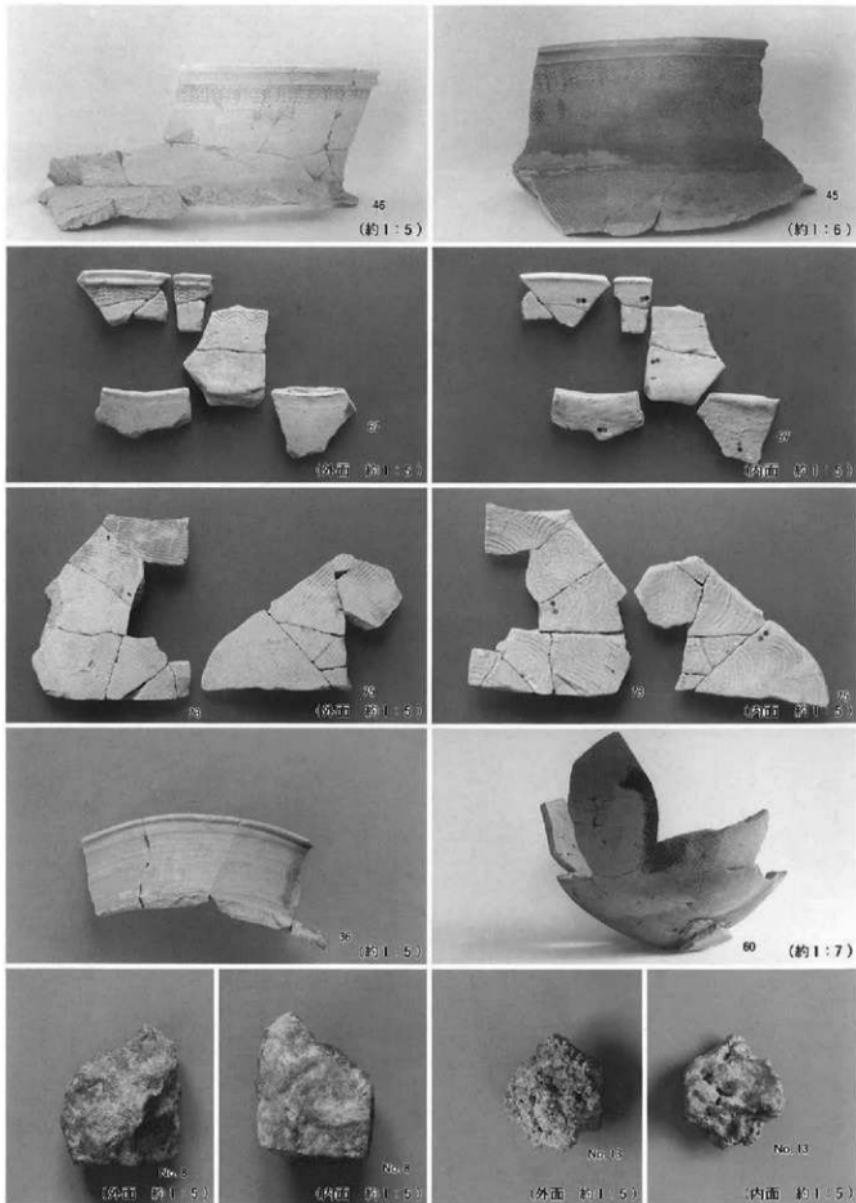
出土遺物 1

雨池古窯跡 7



出土遺物 2

雨池古窯跡 8



庚申塚の経塚 1



a 遺跡近景

(東から)



b 墓石碑（第5層）出土状況

(北から)

庚申塚の経塚 2



a 北東部土層断面

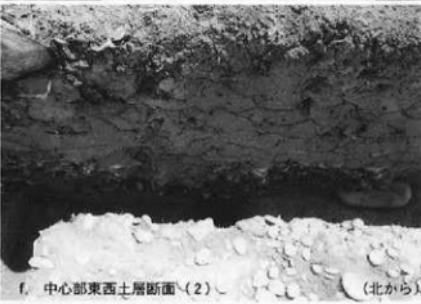
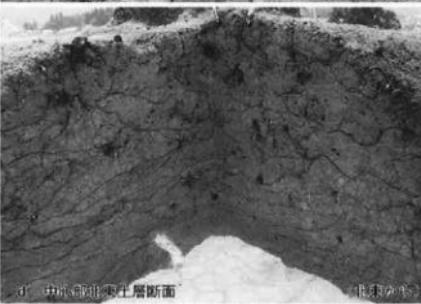
(北東から)



b 南東部土層断面

(南東から)

庚申塚の経塚3



経塚土層断面

庚申塚の経塚4



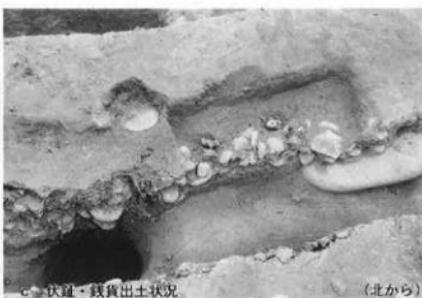
a 遺物出土状況

(西から)



b 銅鏡・灰陶出土状況

(北から)



c 伏鏡・銭貨出土状況

(北から)



d 青銅鏡出土状況

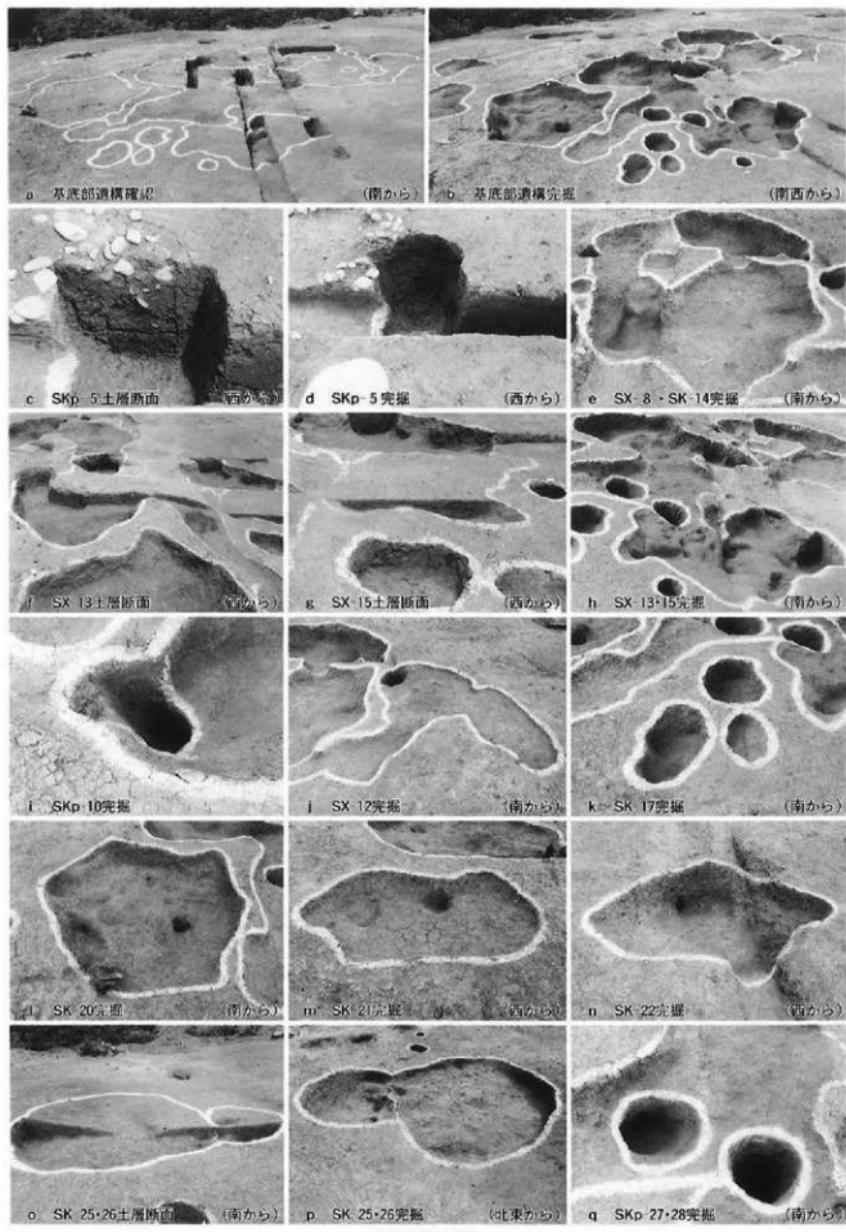
(東から)



e 青銅鏡出土状況

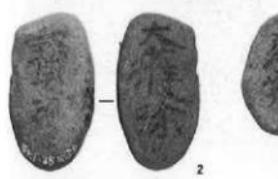
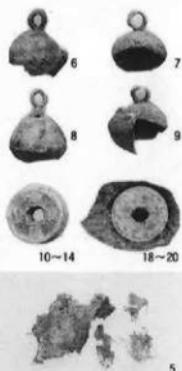
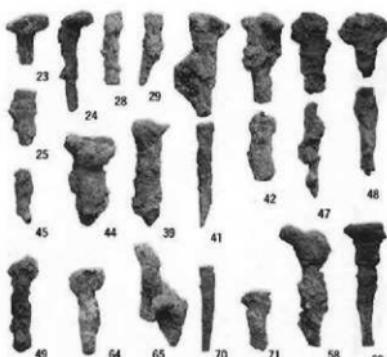
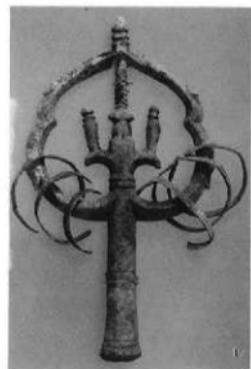
(南から)

庚申塚の経塚5



その他の遺構

庚申塚の経塚 6



171



172



261

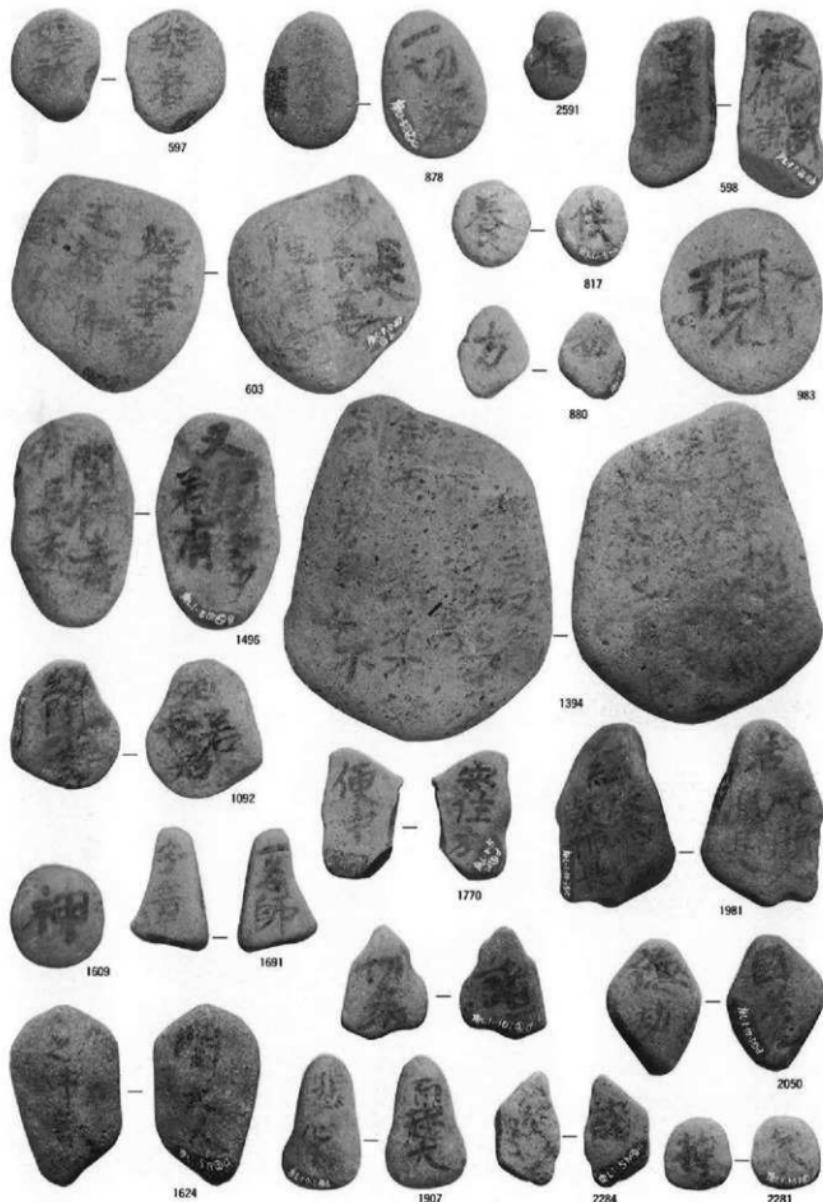


274

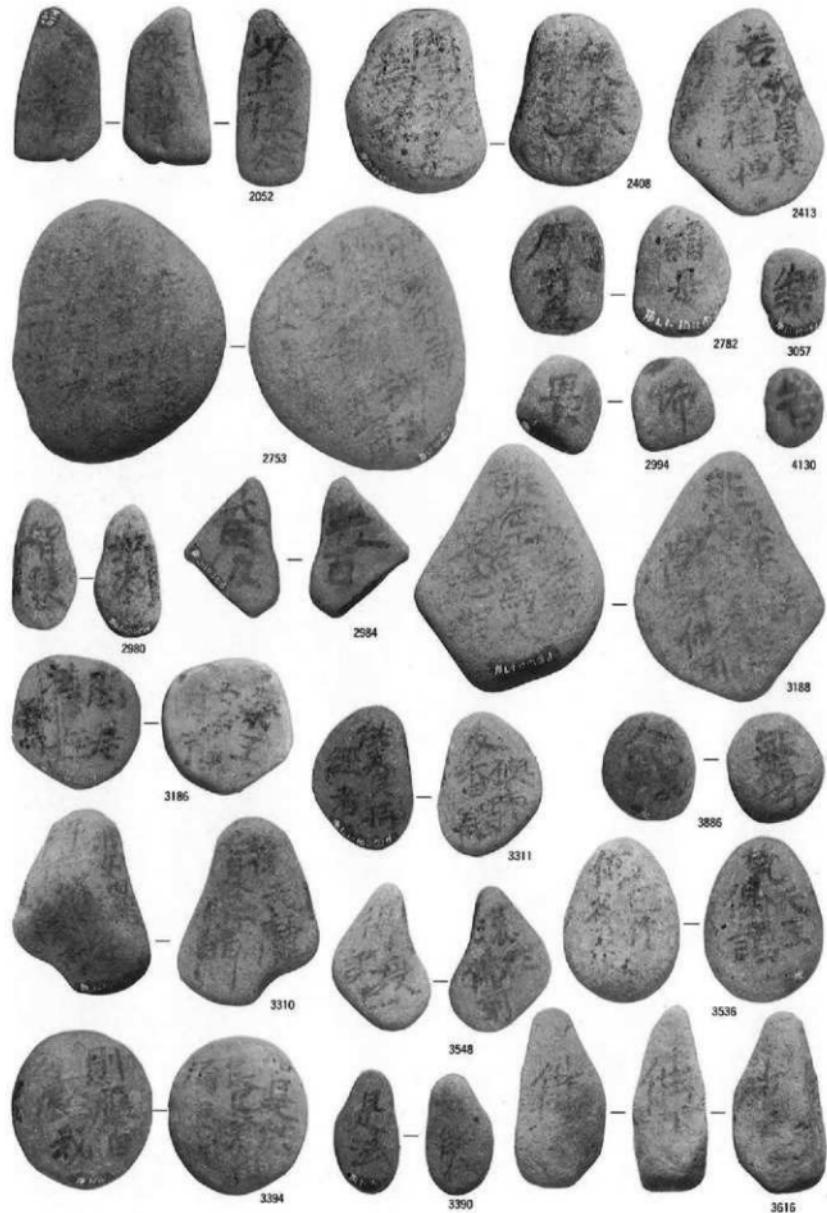


324

庚申塚の経塚7



庚申塚の経塚 8



報告書抄録

ふりがな	よこやまひがしいせきぐん I						
書名	横山東遺跡群 I						
開書名	新潟県柏崎市・横山東遺跡群発掘調査報告書 I						
巻次	I						
シリーズ名	柏崎市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第34集						
編著者名	品田高志・伊藤啓雄・中野 純						
編集機関	柏崎市教育委員会 文化振興課 遺跡調査室						
発行者	柏崎市教育委員会						
所在地	945-8511 新潟県柏崎市中央町5-50 TEL. 0257-23-5111 内線365						
発行年月日	西暦 2000年7月31日						

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ...	東経 ...	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
大沢遺跡	新潟県柏崎市 大字横山	15205	649	37度 20分 45秒	138度 34分 32秒	19920427 ~19920615	3,000	宅地造成に伴う 発掘調査
雨池遺跡	新潟県柏崎市 大字横山	15205	650	37度 20分 47秒	138度 34分 38秒	19920930 ~19921104	3,100	
雨池古窯跡	新潟県柏崎市 大字横山	15205	653	37度 20分 45秒	138度 34分 40秒	19940620 ~19940725	300	
庚申塚の経塚	新潟県柏崎市 大字横山	15205	647	37度 20分 42秒	138度 34分 25秒	19940516 ~16640709	300	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
大沢遺跡	集落跡	縄文中期 古代	平地式住居・貯蔵穴 鉄生産関連	縄文土器 鉄滓				
雨池遺跡	集落跡	縄文中期	平地式住居	縄文土器・石器 翡翠原石				
雨池古窯跡	窯跡	古代	須恵器窯跡	須恵器(短頸壺・長頸瓶 ・双耳瓶・大甕)				
庚申塚の経塚	経塚	中世	経塚	碌石経・錫杖頭・伏鉢 風鈴・銭貨				

柏崎市埋蔵文化財調査報告書第34集

横山東遺跡群 I

—新潟県柏崎市・横山東遺跡群発掘調査報告書—

平成12年7月28日 印刷

平成12年7月31日 発行

発行 柏崎市教育委員会

〒945-8511 新潟県柏崎市中央町5-50

印刷 株式会社 柏崎インサツ